佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ

県営公害防除特別土地改良事業
に係る埋蔵文化財調査報告書

1988

石川県立埋蔵文化財センター

佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ

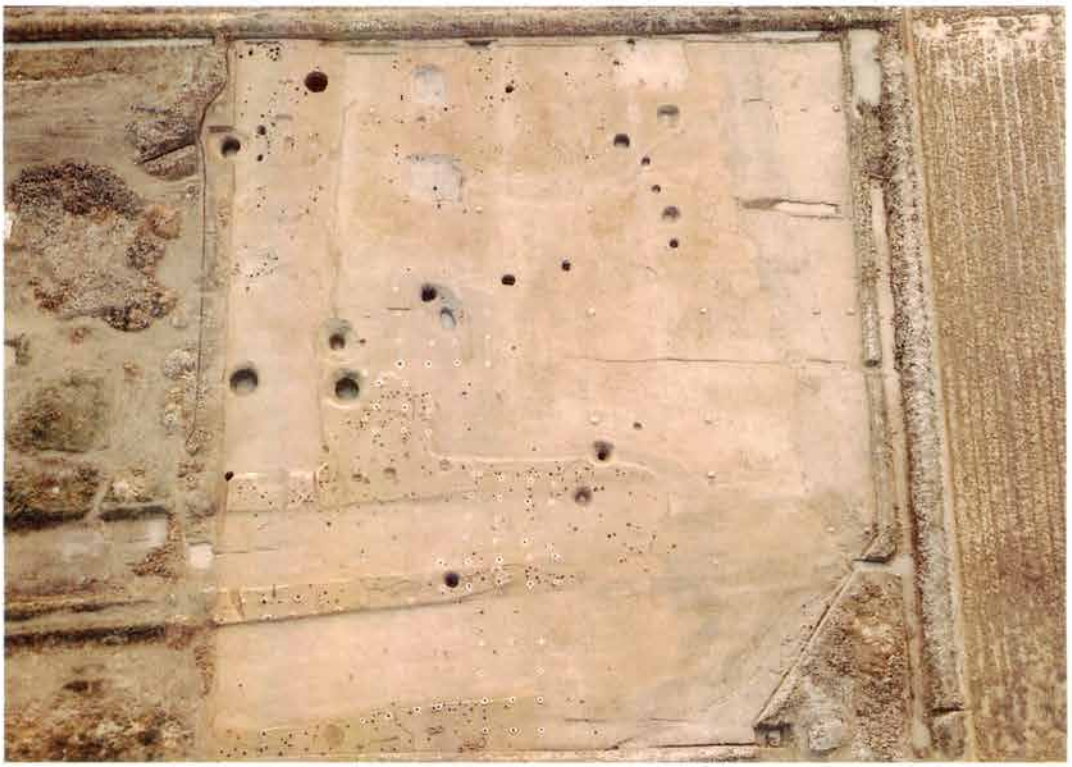
県営公害防除特別土地改良事業
に係る埋蔵文化財調査報告書

1988

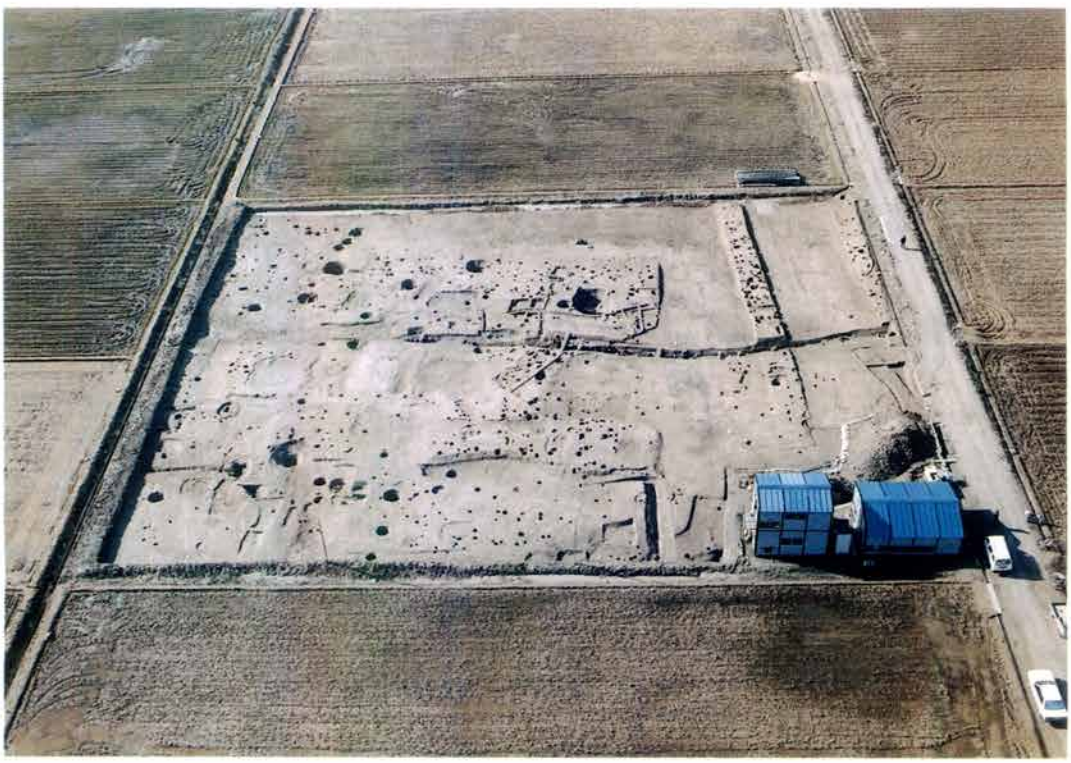
石川県立埋蔵文化財センター

梯川中流の空中写真（西から）

梯川中流の空中写真（東から）



第１次調査区の俯瞰（北から）



第２次調査区の俯瞰（東から）

例　言

1　本書は、石川県小松市佐々木町所在の佐々木アサバタケ遺跡の発掘調査報告書Ⅰである。そのⅡ（植物遺体編）は次年度（昭和63年度）に刊行予定である。

2　発掘調査は、県営公害防除特別土地改良事業に係るもので、石川県農林水産部耕地整備課の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが、昭和59年度（第1次調査）、昭和60年度（第2次調査）、昭和61年度（第3次調査）に実施した。調査および報告書刊行に係る費用は、すべて県耕地整備課が負担した。

3　各調査の調査期間および調査担当者は下記のとおりである。

第1次調査　期　間　昭和59年8月21日～12月1日
担当者　米沢義光（埋蔵文化財センター主事、現県立松任農業高等学校教諭）
第2次調査　期　間　昭和60年8月6日～昭和61年3月29日
担当者　垣内光次郎（埋蔵文化財センター主事）
第3次調査　期　間　昭和61年9月29日
担当者　湯尻修平（埋蔵文化財センター主査、現同専門員）
久田正弘（埋蔵文化財センター主事）

調査にあたっては、下記の埋蔵文化財センター調査員の協力を得た。
栃木英道（現センター主事）、本田秀生（現センター嘱託）、
石田和彦（小松市教育委員会調査員）、新城えり子、本由美子。

4　遺物整理は、社団法人 石川県埋蔵文化財整理協会に委託した。

5　本書の執筆分担は次のとおりである。
米沢義光……第1章・第2章第2節・第3章・第5章第1節
湯尻修平……第2章第1節
垣内光次郎…第2章第1節・第4章・第5章第2節
栃木英道……第3章

6　本書の編集は垣内がおこなった。

7　本書における挿図等の扱いは下記のとおりである。
(1)　挿図中の方位は原則として真北である。方位を付していないものは、天地の軸を南北（上が北）にとっている。
(2)　挿図中の水平基準の数値は標高（単位 m）である。
(3)　挿図中の縮尺については、原則としてスケールを付し、表題末にも明示した。

8　本調査の遺構・遺物の実測図、写真、出土遺物等の資料は、石川県立埋蔵文化財センターが一括して保管している。

目　次

例　言
目　次

頁

第１章　位置と環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　調査の経緯と概要
第１節　調査に至る経緯 …… 6
第２節　第１次調査の概要 …… 8
第３節　第２次調査の概要 …… 8

第３章　第１次調査の遺構と遺物
第１節　概　要 …… 10
第２節　掘立柱建物 …… 11
第３節　井　戸 …… 18
第４節　竪穴状遺構 …… 60
第５節　土　坑 …… 72
第６節　溝 …… 78
第７節　その他の遺構（ＳＸ、ピット） …… 87
第８節　Ａ－６・７区調査区外出土遺物 …… 91
第９節　包含層出土遺物 …… 94

第４章　第２次調査の遺構と遺物
第１節　概要と土層 …… 113
第２節　遺　構 …… 114
第３節　出土遺物 …… 150

第５章　ま　と　め
第１節　第１次調査のまとめ …… 197
第２節　第２次調査のまとめ …… 199

第1章　位　置　と　環　境

第1節　地理的環境

小松市は県西南部に位置する石川県第2の都市で、人口10万人余を数える。南及び南西は江沼郡山中町と福井県に、西は加賀市と接し、西北は日本海に臨む。市の南東部は白山山系に連なる丘陵・山岳地帯で、同山系の大日山連峰に源を発する梯川が流出している。梯川は山間部の上流域では、支流の西俣川・大杉谷川・郷谷川・滓上川などと合流して北流する。中流域では沖積平野を形成し、大きく西に進路を変え、北東から流れてくる鍋谷川・八丁川などの支流と合流し、蛇行しながら小松市街北部をかすめて日本海に注いでいる。流程は約42km、流域面積は約270km²で、県下では手取川に次いで河川規模が大きい。平野部では流れが遅緩なため、古くから水運に適していたが、反面洪水や氾濫による被害も大きかった。本遺跡は梯川が平野部へ出て、西へ進路を変えてから北側へ大きく蛇行する中流左岸、標高約4～5mの自然堤防上（通称アサバタケ）に立地している。遺跡の西側は近代まで入り江があったと伝えられるように、氾濫原が迫っている。南側は後背湿地となり、現佐々木地区の集落が存在する。この背後には小松東部丘陵が控える。小松東部丘陵は小松市の東南部に広がる丘陵で、能美江沼丘陵の一角を占め、能美丘陵の前縁から南に連なり、標高100m以下の加賀江沼丘陵に続いている。本遺跡の対岸北東から東方向約500mの地点には、律令期の加賀国府所在推定地とされる標高約10mほどの洪積台地、通称古府台地が広がっている。梯川中流左岸と小松東部丘陵の間には、東西に細長い沖積平野が形成されている。対して右岸側は、手取川扇状地の南部と接し、梯川支流の鍋谷川による沖積作用も加わって広い平野を形成している。佐々木アサバタケ遺跡は、梯川左岸際の沖積平野内の自然堤防の微高地上に立地する。弥生時代後期末から中世に至る長期の複合遺跡である。

第2節　歴史的環境

梯川流域を中心とした小松市の東部域は、県内でも遺跡の密集度が極めて高い地域の一つである。近年の開発事業に伴う埋蔵文化財の緊急調査も多く実施されており、特に古墳時代から中世に至る良好な考古資料が蓄積されている。

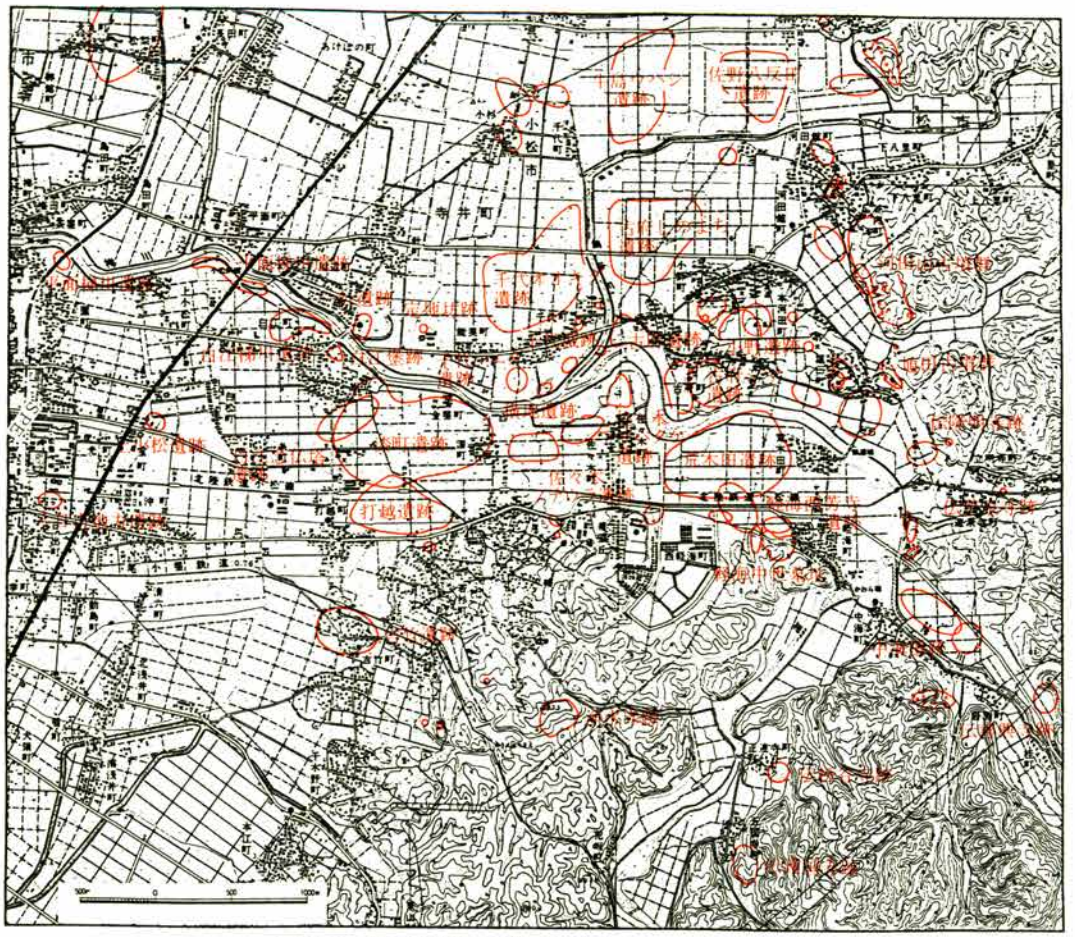
縄文時代の遺跡の調査例はまだ少ないが、本遺跡の南東約2.8km離れた梯川支流の滓上川右岸の河岸段丘上の中海遺跡は、縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。県立埋蔵文化財センターが昭和56年に実施した発掘調査では、同期の炉跡、土壙、溝、ピット等の遺構と遺物が出土している。中でも注目される遺構としては、調査区中央から検出された幅約11m、深さ約1mの大型溝で、居住区区画のための溝と考えられている。また、本遺跡の南東約1.5km離れた軽海西芳寺遺跡も縄文時代中期中葉から後葉にかけての集落遺跡である。県立埋蔵文化財センターが昭和59年度に実施した発掘調査では、丘陵裾部から縄文時代中期後葉の石組炉を持つ竪穴式住居1棟と多数の土壙群と遺物が発掘されている。他に縄文時代の遺物で出土している遺跡

に、本遺跡の南西部に隣接する佐々木ノテウラ遺跡から、縄文時代晩期後葉の浮線文系の浅鉢が出土している。

弥生時代に入ると、梯川左岸の沖積平野に遺跡が分布し始める。下流側の中期の遺跡には、八日市地方遺跡、梯川鉄橋遺跡が存在する。特に八日市地方遺跡から検出された土器は「小松式土器」と名付けられ、北陸の弥生時代中期中頃の標式となっている。中流域では後期後半になると遺跡が増加しだしてくる。その遺跡には漆町遺跡、白江梯川遺跡、白江念仏塔遺跡、吉竹遺跡、本遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などが存在している。また支流の鍋谷川右岸には千代デジロA・B遺跡なども形成されてくる。この何れの遺跡も両河川の自然堤防上に立地しており、この流域が農耕生活に適していたことが窺われる。梯川中流域において遺跡が爆発的に増えるのは、古墳時代前期以降のことであって、漆町遺跡、白江梯川遺跡などでは畿内・東海・山陰系土器群の流入とともに、前時代とは比較にならないほど多くの遺構と遺物が検出されている。このことから前時代よりさらに一段階進んだ当時の「ムラ」の構造や生活形態を知る上で、貴重な手がかりを与えている。一方、古墳時代の象徴ともいうべき古墳群の存在も多い。中でも東部丘陵に所在する河田山古墳群と埴田古墳群は、重要である。河田山古墳群は、小松市東部産業振興団地造成事業に伴い市教育委員会が発掘調査を行ったが、前方後円墳2基、前方後方墳2基を含む総数62基で構成される前期から後期の一大古墳群である。その中には古墳時代後期（7世紀中頃）で、天井部横断面をU字形としたいわゆるアーチ形切石積み横穴式石室を持つ古墳（方墳）が1基含まれ、全国的にも例のない特殊な石室形態として注目されている。埴田古墳群も数基の円墳からなる古墳群であるが、後明神山古墳からは短甲、冑、直刀、環鈴などが出土し、無常堂古墳からは四獣鏡、短甲、眉庇付冑、短剣、刀子、鉄鏃、勾玉、櫛が出土している。これらは古墳時代中期を中心とした古墳群とみられる。また、八幡町地内に現存する八幡大塚は、古式の前方後方墳とみることも可能であり、注目しておきたい。古墳時代前期～後期前半（4世紀～6世紀）には隆盛を誇った梯川中流域の遺跡も、古墳時代後期後半（6世紀後半）以降になると遺跡数及び規模は減少し、漆町遺跡の金屋サンバンワリ地区、佐々木ノテウラ遺跡、中海遺跡、古府遺跡で断片的に確認されるにすぎない。

律令国家体制の完成下で、奈良時代（8世紀）の中頃には加賀地方でも初期荘園が少数ながら成立したようであるが、その数は大変少なく、当時の開発状況を知る資料は少ない。その中で本遺跡周辺に残存する条里制遺構は、当時の状況を解明する貴重な資料である。条里の施行は、梯川流域に高度な灌漑技術を導入し、安定した耕地と一定の生産量を確保する先進的な開発をもたらした。また、それに伴い在地有力者の台頭する要因となったことが推定されている。

平安時代前期の弘仁14年（823）には、越前国より分離して加賀国が立国する。加賀国府の所在地については諸説あるが、本遺跡対岸の古府台地周辺説が現在のところ有力である。古府台地は加賀国のほぼ中央に位置し、能美平野を一望できる立地環境を持つ。古府台地北西約1㎞地点に所在する古府しのまち遺跡付近は「能美千軒、国府千軒」と口承され、台地上に所在する十九堂山遺跡からは布目瓦片が出土し、国分寺としての可能性が推察され、梯川に臨む古府遺跡、フドンド遺跡でも平安時代中期（10世紀前半）の軒平瓦が出土していることなどによる。これと対



第1図　周辺地域の遺跡分布図（S＝1／50,000）

応するかのように、平安時代中期（10世紀前半～中葉）以降の梯川中流域の各遺跡は飛躍的な発展を示し、掘立柱建物を始め遺構や遺物が急増してくる。古府しのまち遺跡、古府遺跡、漆町遺跡、佐々木ノテウラ遺跡や本遺跡などの発掘調査結果からの結論であるが、この段階では国府所在地としての相応の遺跡動態を物語るようである。また、昭和59年に県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した八幡町の浄水寺跡の調査は、平安時代中期から後期（10世紀中葉から11世紀末頃）の地方寺院のあり方を示す重要な成果をもたらした。大規模な造成地に建物群を計画的に配し、大量の墨書土器、木造僧形像、仏具、輸入陶磁器類など多彩な出土遺物が発掘されている。この寺院は平安時代中期から室町時代後期にいたる約500年間営まれ続けた寺院で、そういう寺院が文献にも登場せず、地元に残された伝承をもとに発見されたことで、当時各方面に大きな衝撃を与えた。平安時代中期から後期にかけては、寛弘９年（1012）、加賀守源政職の悪政を加賀の百姓等が朝廷に訴えた事件（寛弘事件）から、律令国家の秩序の乱れが地方でも相当進んでいたことを示すと同時に、漆町遺跡や浄水寺跡の発掘調査成果から、この地域における在地有力者の台頭を明示している。この平安時代後期以降、梯川中流域と滓上川などの支流による河谷部を含めた範囲は、承平５年（935）源順によって著された「和名類聚抄」にみえる能美郡の「加流美」郷に比定される。下って長寛元年（1163）に原型が成立したとする「白山之記」に

「乃美郡軽海郷」の地名がみえる。白山之記によると軽海郷には白山の加賀馬場に設けられた中宮三社（中宮・佐羅・別宮）内の中宮の支配下で、中宮の末寺であるいわゆる「中宮八院」が存在している。「中宮八院ハ、護国寺、昌隆寺、松谷寺、蓮花寺、善興寺、長寛寺、涌泉寺、隆明寺、隆明寺外七院ハ軽海郷内也」とあって、軽海郷内に八院中七院が存在していたことが記されている。この中宮八院の勢力伸張は国司との対立を深め、安元事件へと発展している。それは安元2年（1176）加賀国司近藤師高の目代として赴任した弟の近藤師経が、白山宮の圧力を排除するために、中宮八院の一つ鵜川涌泉寺へ強制的に立ち入り、これを焼き討ちにした事件である。目代近藤師経と白山宮との抗争は延暦寺をも巻き込み、白山宮と延暦寺の強訴により近藤師高・師経兄弟の解任、配流という結果となっている。このことは加賀における古代秩序の決定的崩壊となった。中宮八院の所在地については考古学的な調査例もなく、伝承の域を出ないが、地名によっていくつかはおおよその位置が推定できる。昭和58年に県立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した中海遺跡の第2次調査第3地点で得た12世紀中頃の遺跡は、地名がチョウカンジあるいはチョガンジと呼称されていることから、中宮八院の一つで所在地不明の長寛寺に比定される可能性もある。いずれにしろ、平安中期以降において、軽海郷とその中に設けられた寺院群は、軽海郷の東境の大日山系を超える三坂峠（中海－鳥越村別宮）、三谷越（沢－鳥越村別宮）、五十谷越（観音下－鳥越村別宮）などの山道によって、白山宮加賀馬場の領域である手取谷とのつながりが深かったことは、地理的条件からみても十分納得できる。

中世でも鎌倉時代になると、梯川流域には、加賀斎藤氏の林系の庶流に属する板津氏・白江氏（『尊卑分脈』）などの在地武士が開発領主としてようやく台頭し始める。永仁5年（1297）の「菊大路文書」に、鎌倉幕府が橘成政に佐々木窪田乱橋などの領地を安堵した記事がみえ、当時本遺跡周辺は、橘（八幡）氏の勢力下であったことが窺われる。その後、軽海郷は武蔵国金沢称名寺領となる。称名寺は現在の横浜市金沢区にあり、文永6年（1269）、北条実時によって建立されている。境内には金沢文庫があり、軽海郷に関しての文献も数多く残っている。軽海郷が称名寺領であったのは、嘉暦4年（1329）から康暦2年（1380）までの約50年間である。その間も領地境の問題などで中宮八院（白山宮）との対立抗争が続いている。元徳2年（1330）に記され、称名寺の金沢文庫に所蔵されている「白山八院衆徒等申状案」(1)に、護国寺、昌隆寺、松谷寺、長寛寺、蓮華寺、涌泉寺と末寺岩蔵寺の敷地堺が11世紀中葉から12世紀中葉頃に定められたとの記事がみえる。それは白山宮内の武士団勢力の動きを反映しているものといえる。その後、軽海郷は称名寺の手を離れ、康暦2年（1380）問注所刑部少輔長康領となり、正親町三条家領を経て、大永3年（1523）に朝廷の禁裏御料所となっている。本遺跡南東約1.5㎞離れた軽海遺跡、軽海西芳寺遺跡周辺には、その名残りと思われる字名が残っている。平安時代以降の梯川中流域に存在する本遺跡や隣接する佐々木ノテウラ遺跡、漆町遺跡、白江梯川遺跡などは、以後近世に至るまでの生活の跡を連綿と刻み込んでいる。それらの各遺跡からは、継続的に掘られていた多数の井戸跡が検出されている。その中からは当時使用された土器、木製品等の多数の遺物が出土している。まさにこれらの遺物は当時の生活を探る上での良好な資料となっている。本遺跡は以上のような歴史的環境の中で形成されたものである。

註

(1) 浅香年木　1981年　『治承・寿永の内乱論序説』　法政大学出版局Ｐ130～143及び加能史料編纂室の伊林永幸氏からの教示による。

参考・引用文献

陽尻修平・山本直人・米沢義光　1987年　『小松市中海遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

米沢義光　1987年　『小松市古府遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

北野博司　1986年　『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

藤田邦雄・戸澗幹夫・横山貴弘　1986年　『軽海遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

橋本澄夫　1968年　「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」　『石川考古学研究会々誌第11号』石川考古学研究会

田嶋明人他　1986年　『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

栃木英道他　1987年　『吉竹遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター

湯尻修平他　1985年　『昭和59年度県営ほ場整備事業・県営公害防除特別土地改良事業関係埋蔵文化財調査概要』　石川県立理蔵文化財センター

小村　茂・室山　孝　1973年　『軽海中世墓址群　発掘調査概報』　小松市教育委員会

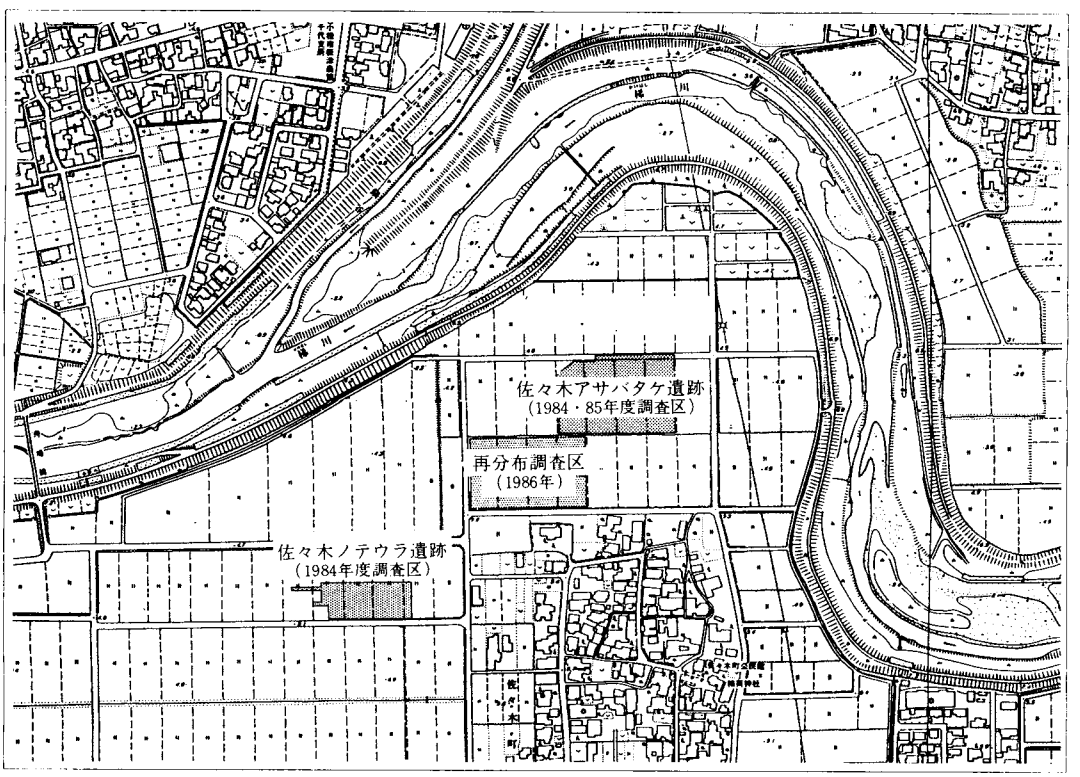
小村　茂・橋本澄夫　1974年　『古府しのまち遺跡』　石川県教育委員会

吉岡康暢　1976年　「平安前期の地方政治と国分寺（上）」　『金沢大学日本海域研究所報告第８号』金沢大学日本海域研究所

宮下幸夫・望月精司他　1987年　『北陸の古代寺院』　桂書房

国府村史編纂委員会　1956年　『国府村史』　国府村役場

浅香年木・田川捷一他　1981年　『角川日本地名大辞典17　石川県』　角川書店



第２図　調査区位置図（Ｓ＝1／7,500）

第2章　調査の経緯と概要

第1節　調査に至る経緯

県営公害防除特別土地改良事業の客土工事が佐々木地内46.6haを対象に計画されたのは、昭和57年10月のことであった。事業地内に佐々木遺跡が周知されていたため、耕地整備課から分布調査の依頼が提出された。しかし、まだこの段階では佐々木町の地権者等の同意が得られず分布調査を実施できない状態であった。翌、昭和58年9月1日付で県小松土地改良事務所から改めて分布調査の依頼書が提出された。難行していた同事業への地元の同意が得られたからである。依頼を受けた埋蔵文化財センターでは、9月30日～10月1日に調査を実施した。調査は客土工事により著しく現状を変更する地域（耕土下20㎝以上削平する区域）を対象に実施したが2箇所で遺跡の存在を確認した。1箇所は佐々木町の北側一帯であり、もう1箇所は西側一帯であった。この分布調査時点ですでに周辺の工事は進行しており、一部の工事と並行して調査をせざるを得ない状況にあった。センターでは10月4日付の文書で調査の回答を出したが、この間、現地では10月1日の時点で小松土地改良事務所と遺跡が存在することを確認し合い、その区域内における工事の一時中断と対策について協議を重ねた。

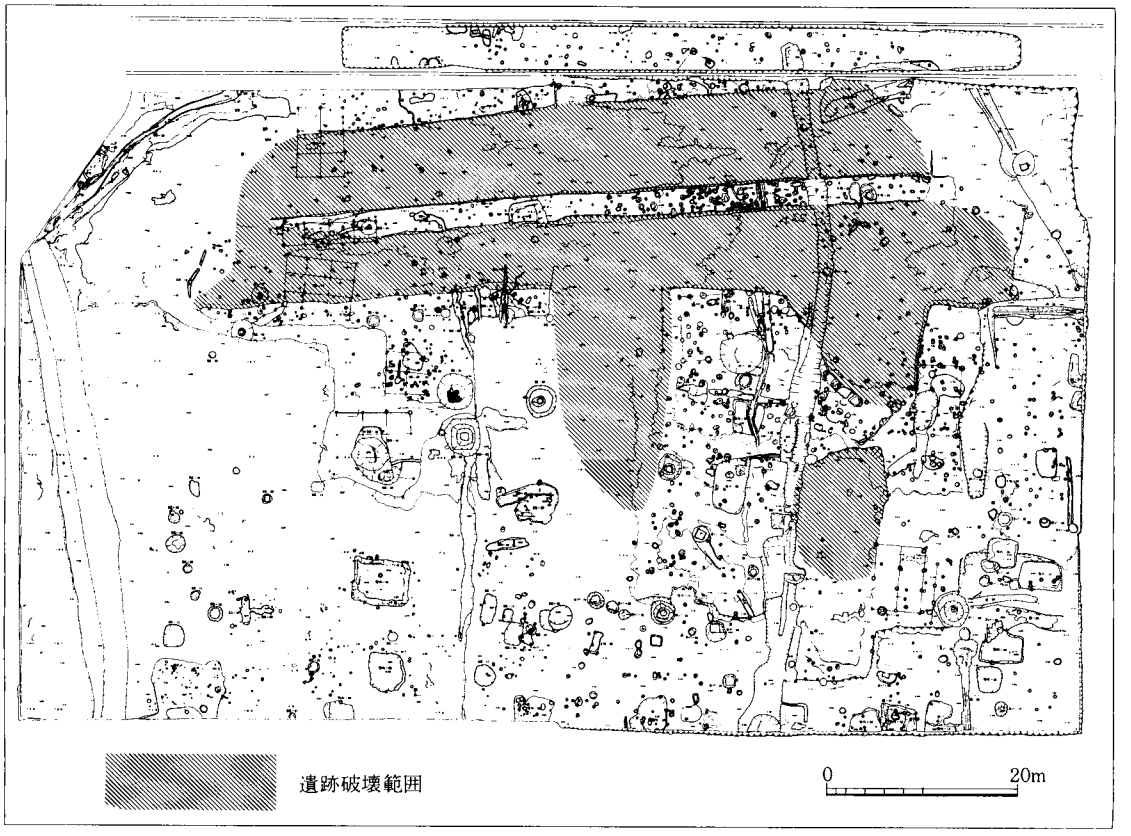
10月3日午前、センター調査担当者が現地を確認したところ、遺跡の存在が判明した区域での工事は中断する気配もなく、続行されていて遺跡が大きく削平される事態となっていた。事の重大性にかんがみ、小松土地改良事務所に事態の報告の後、工事の一時中断の措置をとるよう指導した。同日午後には土地改良事務所の担当課長らがセンターに集まり経緯の説明と対策を協議することになった。土地改良事務所の説明では、分布調査結果の概要を聞いたのが10月1日の昼近くで、工事の現場監督に連絡を取れなかったことと、地元の工事に対する意見の統一がはかれず、合意された段階ではすぐに着工しなければ工期内に完工できない恐れがあった。また、今回問題となった箇所は周知の遺跡が存在していなかったので、事務所としては比較的簡単な調査で対応できるものと思っていた。との釈明がなされた。センターとしては土地改良事務所の埋蔵文化財保護に対する認識の甘さに対し反省を求めるとともに、遺跡の損壊状態を確認する再分布調査を実施することになった。

10月12日～14日に再分布調査を実施したが、その結果と削平基盤高を照合したところ第2図の2地区が工事によって影響を受けることが明らかとなった。梯川寄りの約8,600㎡と佐々木町側の約8,400㎡である。小松土地改良事務所ではこの2地区を取り敢えず盛土工法漸定工事として田面を整地し、発掘調査は、翌59年度に実施することになった。2地区は工事施工前の旧地形をみても高台にあたっており、梯川に接した低地とは70～90㎝も高まっていたのである。

昭和59年度もセンターの調査計画は過剰な状態であった。加えて佐々木町の西側で1回目の分布調査の結果から遺跡が存在すると回答した部分での調査を実施させざるを得ない新たな事態の発生もあり、小松土地改良事務所と協議の結果、①佐々木町西側の遺跡は佐々木B遺跡（通称ノテウラ）として、約3,100㎡の発掘調査を実施する。②佐々木町北側の梯川寄りの遺跡は佐々木A

遺跡（通称アサバタケ）とし、59年度は西側の約4,200㎡の発掘調査を実施する。（第１次調査）③佐々木Ａ遺跡の東側の約4,400㎡は、昭和60年度に発掘調査を計画する。（第２次調査）④佐々木町側の8,400㎡については、再度トレンチによる分布調査を実施した後、工事との調整をあらためて行うことで合意した。以上のように今回報告する佐々木アサバタケ遺跡の調査に至る経緯には、相互間の連絡の不徹底と工事施行者の遺跡への理解が十分でなかったことから生じた転末がある。

佐々木アサバタケ遺跡は、昭和59・60年度と２次の発掘調査を実施し、次章以降に記す経過を辿ることになったが、調査の結果では第３図に示すように約8,600㎡の調査面積のうち、約2,000㎡が工事によって破壊されていることが明らかにされている。佐々木町北側の遺跡約8,400㎡については、昭和61年10月17日に実施した再分布調査によって、耕土が薄いところで15cmしかなく計画通りに進めると約1,100㎡の発掘調査必要箇所が確認された。何とか遺跡を現状で保存し、なおかつ工事を進めたいという方向でセンターと土地改良事務所間で協議は継続され、最終的には田面除去高のカサ上げによって工事を実施することになった。工事は現地表下７cm以内の耕土をすき取りとし、その上に20cmの盛土を実施するものであった。10月24・25日にセンター、小松土地改良事務所の各職員立ち合いのもと、平板バックホーを用いて耕土のすき取りと、盛土作業が実施された。分布調査の結果から遺構面は佐々木町方向に高く、ほぼ中央から北側で遺物包含層が次第に厚くなって下がることが判明していた。工事に際しては佐々木町側での遺構面の完全保存がポイントであった。慎重に進められた排土作業によって遺跡は現状で保存できたことを確認している。



第３図　工事による遺跡破壊範囲図（Ｓ＝1／800）

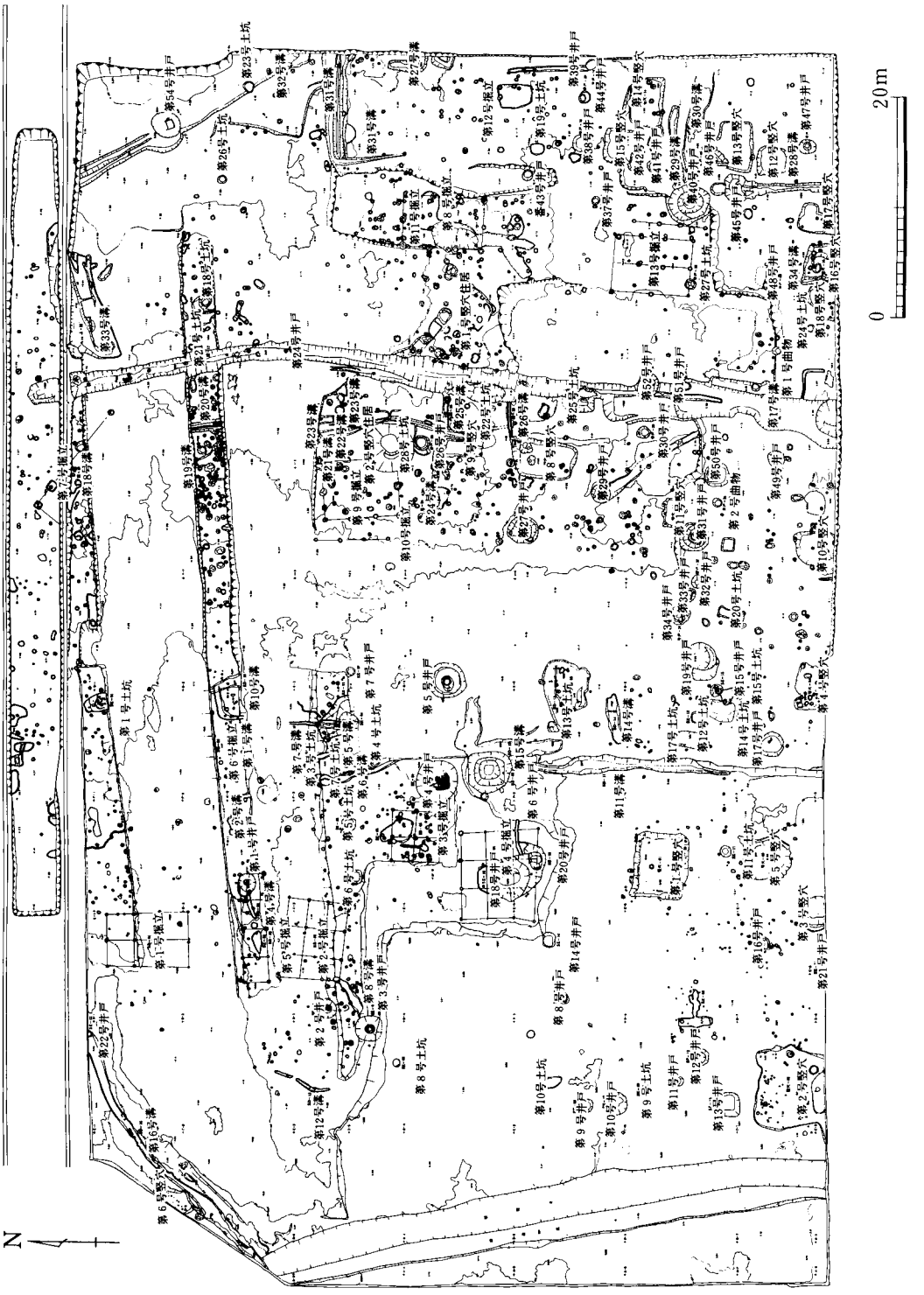
第2節　第1次調査の概要

佐々木アサバタケ遺跡の第1次調査は、昭和59年8月21日から開始した。調査箇所は水田4枚分の工事区域の内、西側2枚分（約4,000㎡）の約3,000㎡についてである。調査箇所は一部工事が実施され、調査区北側の微高地部分が施工業者のミスで削平されていた。最初に重機（ユンボ・ブルトーザー）で、耕土・床土を除去する作業から始まり、同年8月27日から作業員も入れ、調査区北側から遺構検出も始めた。調査区内のグリッドは、水田の西側から2枚目と3枚目間の畦畔北端にある工事用杭を基点とし、水田北側を東西に走る農道に平行して10mグリッドを設定した。調査区北側の微高地部分は、重機で地下まで削平されているため、杭打ちに手間取った。以後同年9月17日まで遺構検出を行い、並行して遺構概略図の作成を行った。同年9月18日から遺構の掘り下げを始めた。調査区北側の微高地上からは、土坑・溝・掘立柱建物が主に検出され、南側の低地部分からは、井戸跡、竪穴状遺構が検出された。遺構の掘り下げが早いため、土層図や平面図の実測及び個別遺構の写真撮影に手間取った。以後、11月まで調査区北側から南側の順に調査を実施して行った。遺構の中では井戸跡を掘り下げると、覆土中から土師質土器・青磁の椀類の他に刀が一振出土し、井戸枠掘り方内より木爪文を有する漆器椀や柿の実なども検出された。また、1号溝より土師質土器が数百点出土している。11月になると調査も大詰となり、1日にはセンター運営委員一行が現場視察のため来跡する。5日には文化庁記念物課黒崎調査官が来跡する。11月20日ヘリコプターによる航測予定であったが、天候不良のため中止となり、同22日に実施する。以後、残りの遺構調査と、調査終了した深い遺構を埋め戻す。同30日発掘機材・出土遺物をセンターへ運ぶ。12月1日図面等の点検後センターへ撤収する。

第3節　第2次調査の概要

本遺跡の第2次調査は、第1次調査の翌年に実施した。調査範囲は、第1次調査東側の水田部分の約4,000㎡と遺跡北側を通過する農道部分の約200㎡で、合計の調査面積は4,200㎡を測る。その現地調査は、昭和60年8月6日に開始して、昭和61年3月29日に終了した。これは昭和60年12月上旬からの降雪が多く、12月中旬から翌年2月下旬までの期間、発掘作業が困難となり、現地調査を中断したことによる。

第2次調査の作業は、調査区内に置かれた第1次調査の排土と耕作土を、重機類とダンプカーを導入して除去すると共に、遠方の埋立地への搬出作業から開始した。その後、地元民を主体とした作業員を順次入れて、調査区内の包含層の掘削と遺構検出を進めた。調査が進展した11月上旬頃には、竪穴住居2基、掘立柱建物6棟、井戸約30基、土坑5基、竪穴状遺構約10基などから構成される遺構群を検出し、弥生時代末頃から近世初頭までの集落跡であることが確認された。なお調査区内の区割は、第1次調査の区割を延長するかたちで10mのグリッドを設定し、遺構番号も第1次調査の番号末尾に続けるかたちで調査の統一を図った。さらにこの調査では、井戸や土坑の内部から、植物の種実分析を目的とした土壌サンプルを計画的に進めた。その分析成果に関しては、別途報告の予定である。



第4図　全体図（1／600）

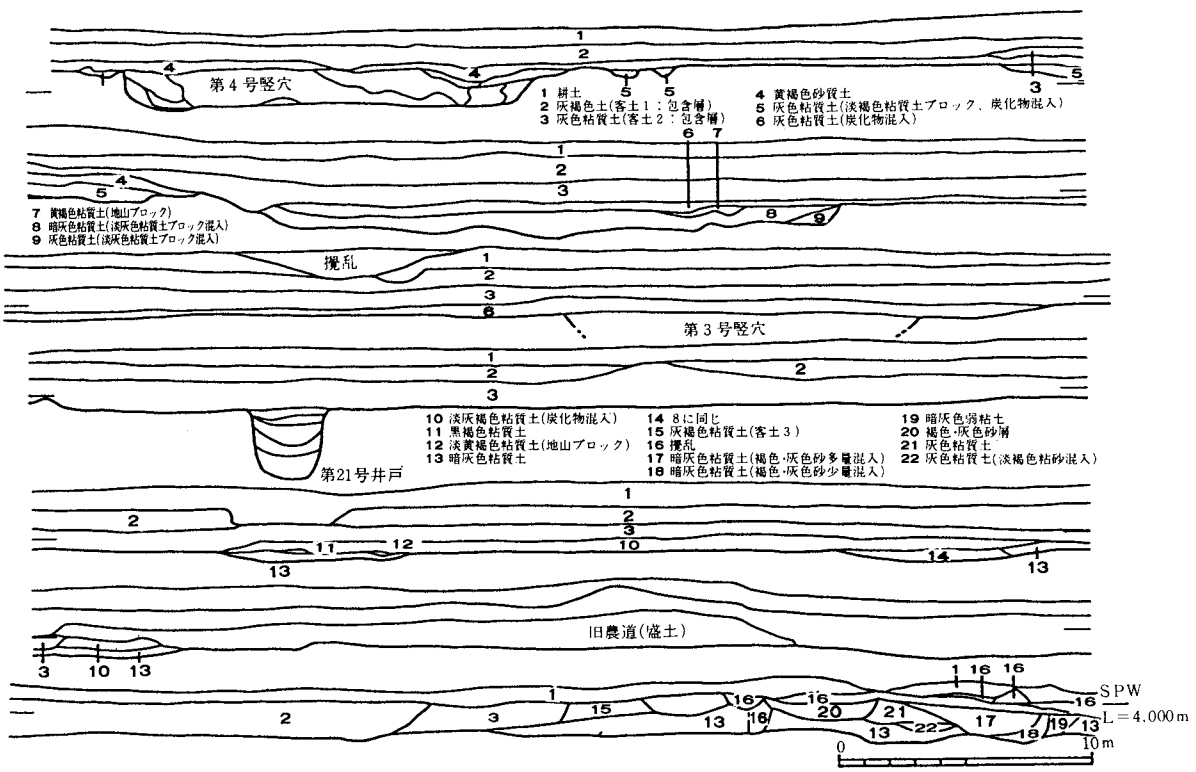
第３章　第１次調査の遺構と遺物

第１節　概　　要

第１次調査で検出された遺構は、掘立柱建物６棟、井戸22基、竪穴６基、土坑16基、溝16条、その他の遺構７（ＳＸ１・３～８）、ピット多数などである。遺物は、弥生土器（後期）を最古とし、近世の陶磁器にいたる土器・陶磁器・土製品、石器・石製品、木器・木製品、金属器・金属製品、古銭などが出土している。量的には、遺構・遺物ともに中世に属するものが多い。

掘立柱建物は、調査区の北（東）側に集中する傾向がみられるが、工事による削平のため、規模のはっきりしないものが少なくない。井戸は調査区南側を中心に列状に分布し、量の多少はあるが多様な遺物が出土した。竪穴は調査区南側に集中しており、遺存状態が良好でしかも全掘された第１号竪穴が貴重な資料を提供した。土坑は総じて遺物の出土は少ないが、そのなかにあっては第１号土坑（奈良時代前半）と第５号土坑（青白磁合子と鉄製品出土）が注目される。溝は工事による削平のため寸断されているが、第１・第７号溝（同一溝）から土師質皿がまとまって出土した。そのほか、包含層から「能」を墨書した須恵器などが出土している。

以下、遺構ごとに報告する。



第５図　第１次調査南壁土層断面図（Ｓ＝1／60）

第2節　掘立柱建物

概　要

第1次調査で検出された掘立柱建物は6棟であるが、工事による削平のため、全体形のわかるものは5棟（第1号～5号）である。中世に属するものが多いと思われるが、柱穴からの出土遺物のほとんどは細片であるため、個々の建物の時期比定は困難である。

第1号掘立柱建物（第6図）

位置　D・E－1・2区に位置する。西側地山面は第16号溝に向かって傾斜する。南側は工事により削平されている。

形状と法量　2間（4.6～4.9m）×3間（7.3～7.4m）の総柱建物であるが、もうひとまわり大きくなる可能性もある。主軸方位はN－2°－Wを測る。柱筋は、P3がやや外（東）側にでるほかは比較的通っている。柱間寸法は、桁行2.4～2.5m、梁間2.3～2.5mを測る。

柱穴は平面略円形、直径約30cmを測る。深さは、削平を受けた箇所があるため正確さを欠くが、現状で最も深いもの（P1、9）は約50cmである。P8、9で直径14～15cmを測る柱痕跡が確認された。P1、6、8から須恵器・土師器細片が出土しているが、建物そのものの時期は不明である。

第2号掘立柱建物（第7図）

位置　D・E－2・3区に位置する。北側は工事により削平されている。P14と第8号溝との切り合い関係は不明である。

形状と法量　3間（5.3～5.5m）×3間（6.9～7.0m）の総柱建物であるが、さらに南側に広がる可能性もある。主軸方位はE－6°－Sを測る。柱筋は西側柱列（P12～14）を除き比較的通っている。柱間寸法は、桁行2.4～2.6m（P9～12、P10～13、P11～14間はそれぞれ2.2、2.0、1.9m）、梁間1.7～1.9m（P13～14間は1.6m）を測る。

柱穴は平面略円形、直径20～30cmを測る。深さは削平を受けた箇所があるため正確さを欠くが、概ね25～40cmを測る。P2、3、8、11で直径16～18cmを測る柱痕跡が確認された。P3、5、9～11から須恵器・土師器細片が出土しているが、建物そのものの時期は不明である。

第3号掘立柱建物（第8図）

位置　E－3・4区に位置し、P4はSX－5を切っている。西側と南側の地山面は、柱列の外側で一段（約20cm）低くなり、客土層が堆積していた。

形状と法量　2間（4.3m）×2間（4.6m）の総柱建物であるが、さらに西側と南側（特に南側）に広がる可能性がある。主軸方位はE－1°－Sを測る。柱筋は、P8がやや北へよっているが、他は比較的通っている。柱間寸法は、桁行2.1～2.5m、梁間1.9～2.2mを測る。P1～P4とP2～P5間はともに2.5m、P4～P7とP5～P8間はともに2.1m、P1～P2とP4～P5間はともに2.1m、P2～P3とP5～P6間はともに2.2mを測る。

柱穴は平面略円形、直径30～40cm、深さは20cm前後を測る。P4は深さ14cmと浅い。P1、4、5で直径14～16cmを測る柱痕跡が確認された。P2、5で土器細片が出土したが、建物その

ものの時期は不明である。

第4号掘立柱建物（第9図）

位置　D・E－4・5区に位置し、東西・南側の地山面は、柱列の外側で一段（約20cm）低くなり、客土層が堆積していた。第18・20号井戸との切り合い関係は不明である。

形状と法量　3間（6.7～7.0m）×3間（7.8～7.9m、ただし、南側柱列は8.4m）の総柱建物であるが、さらに西側と南側に広がる可能性もある。主軸方位はE－1°－Nを測る。柱筋は、東側、北側柱列と、西側柱列の一部（P4、8、10）は比較的通っているが、P6、7、12にかかるもののぶれが著しい。柱間寸法は、桁行2.5～2.7m、梁間2.3～2.4mを測る。ただし、P6～7間は2m、P5～6とP7～8間はともに2m、P10～12間は1.9mを測る。

柱穴は平面略円形、直径20～25cm、深さは20cm前後を測る。北側柱列の柱穴（P1～4）は比較的大きく（26～42cm）、深いもの（P2、35cm）がある。逆にP8は小さく（14cm）、P11は浅い（9cm）。P2から土師器細片が出土したが、建物そのものの時期は不明である。

第5号掘立柱建物（第10図、1）

位置　D・E－2区に位置する。西側地山面は第16号溝に向かって傾斜する。北側と南側は工事によって削平されている。

形状と法量等　1間（2.1～2.3m）×4間（9.6～9.7m）であるが、東側を除きさらに広がる可能性もある。主軸方位はE－4°－Nを測る。柱筋は比較的通っている。柱間寸法は、桁行2.2～2.6m、梁間2.1～2.3mを測る。P2～3とP7～8間はともに2.6m、P4～5間は2.2mを測る。

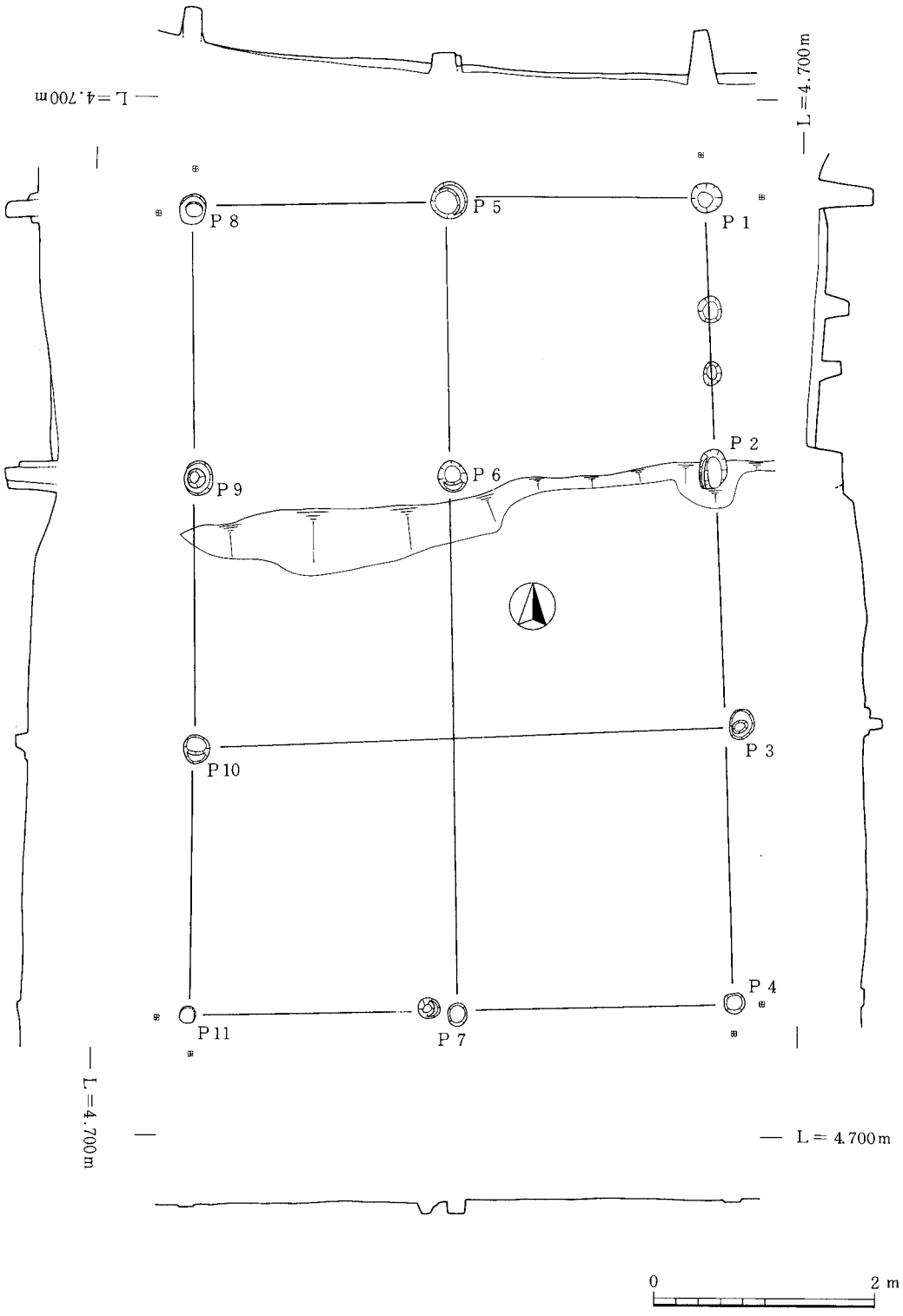
柱穴は平面略円形、直径30cm前後、深さは20cm前後を測る。P6～8はやや大きく（40cm前後）、P1は浅い（8cm）。P2、3、5～7、10から須恵器・土師器細片が出土した。そのうち、1はP3から出土した須恵器有台椀（10世紀代）で、外底面に糸切り痕が認められる。小片であるため、建物そのものの時期を示すものかどうかは不明である。

第6号掘立柱建物（第8図）

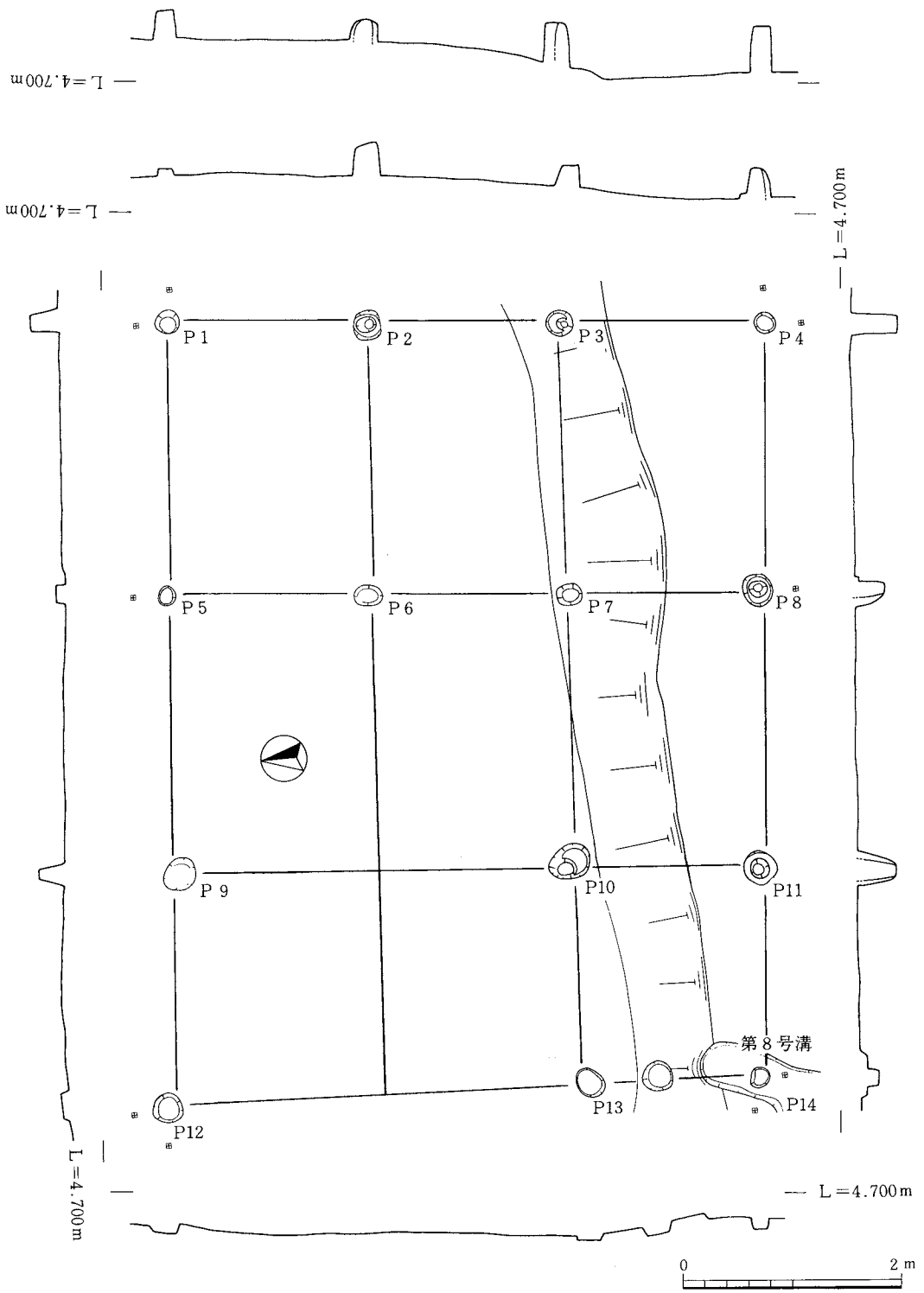
F－2区に位置し、北側が工事により削平されているため、3間分（5.8m）の柱列の南半分を検出したのにとどまる。東西・北側に広がるものと思われる。柱列方位はE－6°－Nを測り、柱筋は比較的通っている。柱間寸法は1.9～2.0mを測る。柱穴は平面略円形、直径30～40cm、深さは12～14cmを測る。ただし、P2は小さく（20cm）、P4は深い（36cm）。遺物の出土はなく、建物の時期は不明である。

小　結

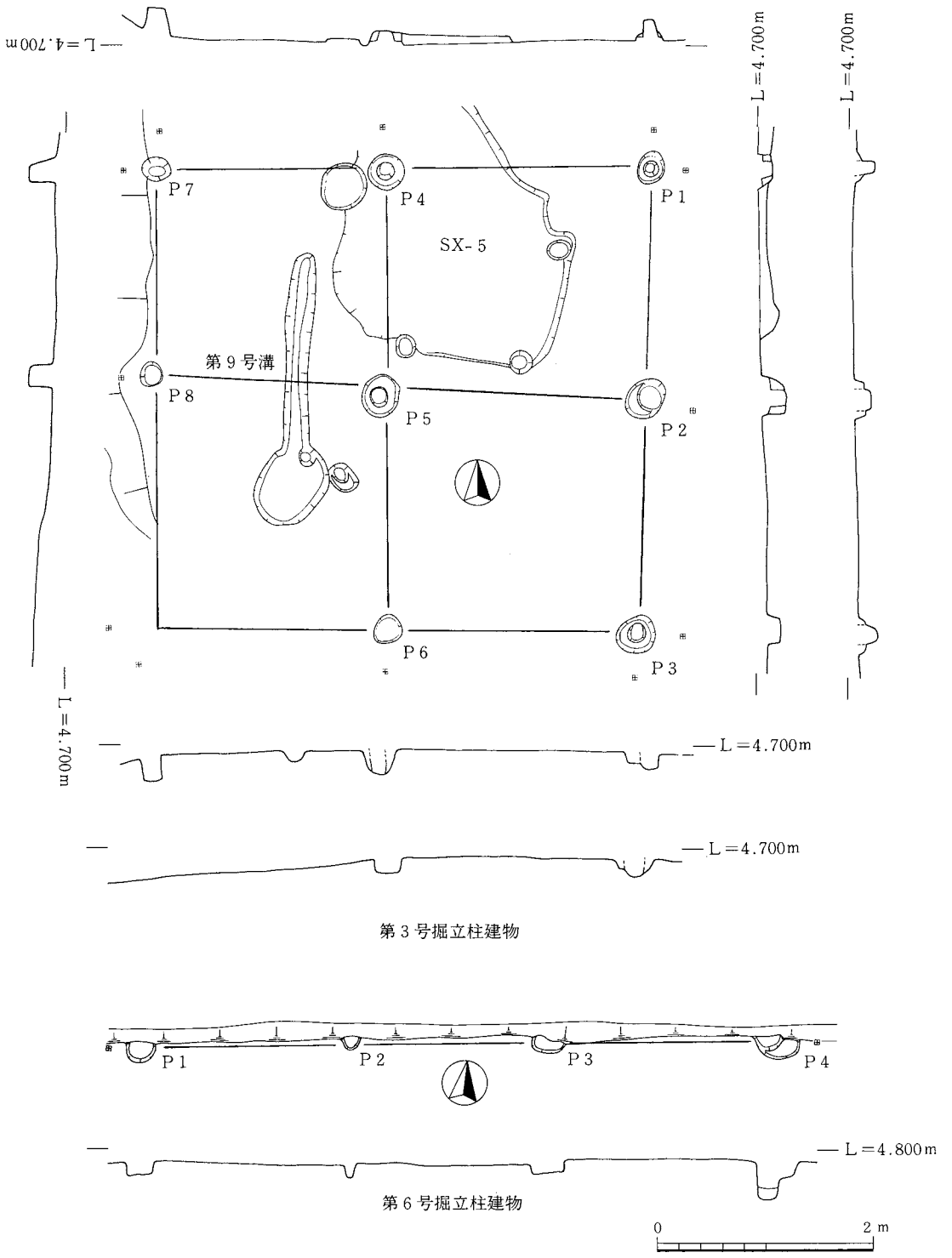
検出された6棟の建物は、第6号掘立建物を別とすれば、D～Fラインと1～6ラインの間に分布する。



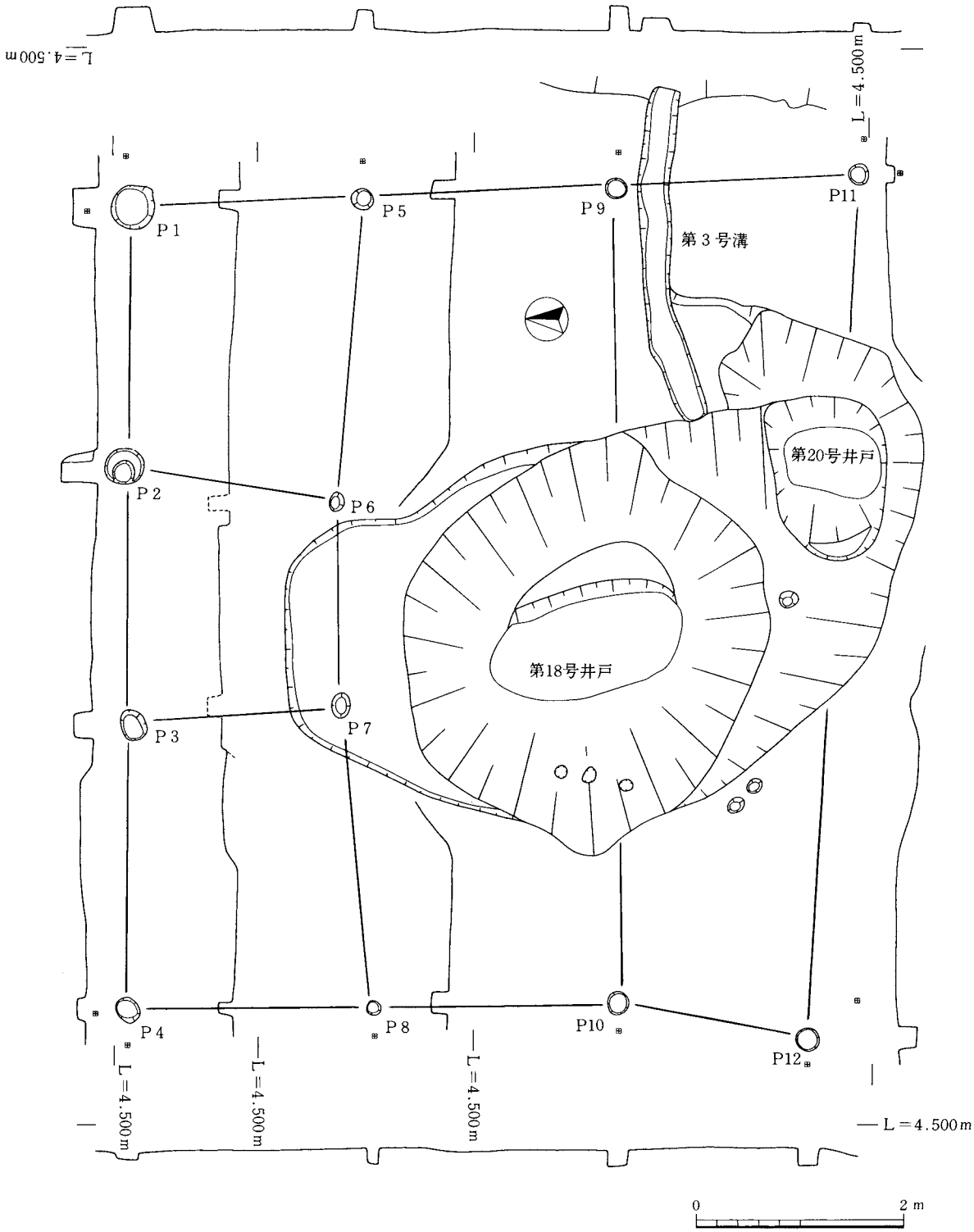
第6図　第1号掘立柱建物実測図（S＝1／60）



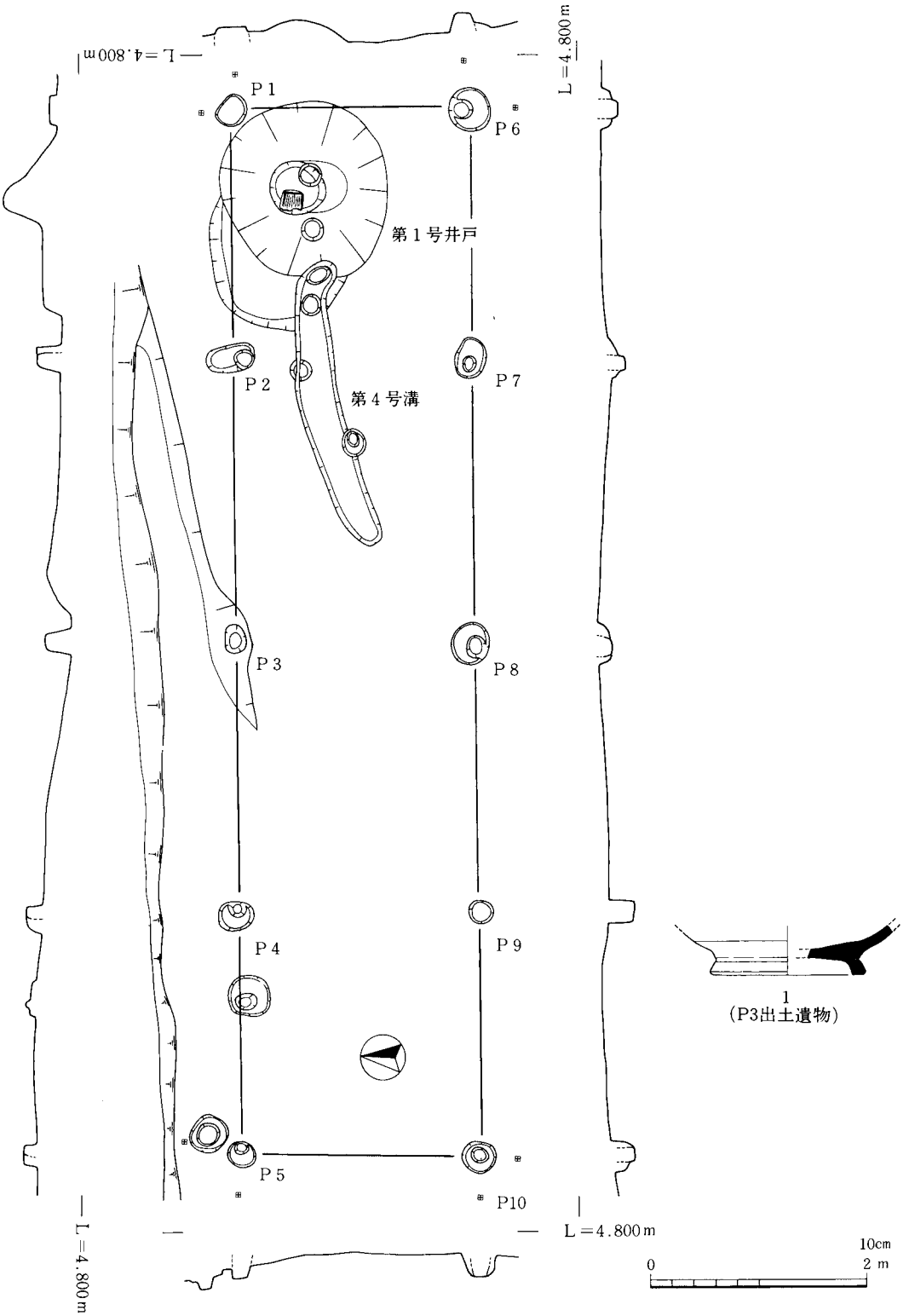
第7図　第2号掘立柱建物実測図（S＝1／60）



第8図　第3・6号掘立柱建物実測図（S＝1／60）



第9図　第4号掘立柱建物実測図（S＝1／60）



第10図　第5号掘立柱建物実測図（S＝1／60）・出土遺物（1、S＝1／3）

第3節　井　　戸

概　要

第1次調査で検出された井戸跡は23基（第1～22・竪穴3）である。平安時代から中世に属するものが多い。以下、第1号井戸から順に報告する。

第1号井戸（第11図、第18図1～5）

位置と切り合い　E－2区の微高地上に位置し、第4号溝に切られている。

形状と法量　上面の平面は楕円形（164㎝×154㎝）、内部の作りは二段で、深さ217㎝（標高2.48m）を測り、底部は褐色粘土層上面まで達している。井側材は存在していない。

覆土と遺物　覆土は下部の14層灰色強粘質土は自然堆積であるが、それ以外は人為的に埋めた土と推定される。遺物は第18図1～5がある。有台椀（1）、有台杯（2）、瓶底部（3）、（4）はしの瓦で両面に布目痕がある。これらは1～12層中より出土している。曲物底部（5）は13・14層中にかけて出土し、取り上げ時に壊れ、底部だけが残った。径15.5㎝で側面に木釘痕が残る。管状土錘（6）は長さ7.42㎝、幅2.27㎝、内径0.54m、重量46.9ｇを測る。表面に指ナデ痕が残る。

第2号井戸（第11図、第18図1～4）

位置と切り合い　D－3区の微高地上に位置するが、上面は重機で削平されている。

形状と法量　上面の平面は楕円形（183×177㎝）、断面は逆台形で、深さ112.5㎝（標高3.15m）を測り、底部は青灰色粘土層中まで掘り込まれている。井側材は存在していない。

覆土と遺物　覆土は1層が埋戻し土で、3・6・13層は井側材内部に堆積していた土の可能性が高く、その他は井側材の裏込め土であろう。遺物は13層から出土し、底部に糸切り痕を持つ土師器の椀（1・2）、珠洲焼甕底部片（3）、木製漆器椀（4）が出土している。土師器椀の色調は淡橙色である。

第3号井戸（第11図、第19図1～14、第20図15・16）

位置と切り合い　C・D－3区の微高地南縁部分にまたがって存在する。

形状と法量　上面南側は削平され、下部は細長く掘り下げられている。深さは317㎝（標高1.37m）を測り、底部は青灰色砂層上面に達している。17層と18層の中間と、18層中から板材が検出されている。これらは井側材の一部である可能性もあるが詳細は不明。

覆土と遺物　覆土の10層は自然堆積層の可能性が高く、その上部は埋め戻した土と推定される。遺物は1層から17層にかけて出土している。土師器では、底部に糸切り痕を持つ小皿（1）、有台小皿（2）、有台椀（3）、色調、（1）は灰色系、（2）は明褐色系、（3）は灰白色系を呈する。また、（1）の内底面にはススが付着している。白磁Ⅳ類の玉縁碗（4）の胎土は白色で釉はオリーブ味を帯びた白色で、貫入は無く、また均一に施釉されてもいない。瀬戸灰釉皿（5）は、胎土が灰白色で色調は、オリーブ灰色を呈している。須恵器底部（6）、加賀焼の壺（7）、珠洲焼甕底部（8）と、同じく珠洲焼胴部片（12～14）があり、体部片のタタキ痕は3㎝幅に10～12条認められる。他に須恵器系陶器（9～11）がある。外面は不鮮明ながら格子状のタタキ痕に特徴がある。内面は（9）では丸い押圧が認められ（10・11）ではそれを板状具で

ナデつけて消している。また器面に裂目などが残り、調整は総じて荒い。内部は淡褐色を呈している。

第4号井戸（第12図、第20図1～9、第21図10～18、第22図19～22）

位置と切り合い　E・F－4区の微高地東縁部分に存在し、上面の南西から南東側は一部削平されている。

形状と法量　上面の平面は楕円形で（404cm×399cm）、深さは328cmを測る（標高1.32m）。底部は暗灰色粘土層中まで達している。井側材は方形縦板組隅柱横桟どめで、横桟は4段存在した。底部から延びる縦板の上部外側には、現存値で幅約20cm、長さ約40cmの別の短い縦板を当てている。井戸は廃棄時に井側材の北東辺を南西側へ倒して埋めている。縦板は幅約10～20cm、厚さ約2～3cmの薄板で長さ約290cmを測る。隅柱は一辺約10cmの角材で、隅柱の底部側から約20cm、95cm、184cm、278cmの所に枘穴を切って横桟をはめ込んでいる。

覆土と遺物　1層～21層まで確認した。1層～12層は井戸の埋め戻し土で、15層～18層が井戸枠内の自然堆積土である。19層～21層は井側材上部の裏ごめ土に当たり、図示した遺物は13層以下から底部にかけて出土している。（1）の越前焼大甕は肩部に細いヘラ描きの文様がある。（2）は青磁碗で、胎土は灰白色で気泡を僅かに含む。色調は明緑灰色で釉は薄く施釉されているが、二次的加熱により白濁化している。外面には櫛描文がある。土師質土器の（3）は小皿で橙色系の色調。内面と外面の一部にタール状付着物が残る。木製品では曲物の底板（16）、箸4点、板材（9）、下駄の歯（10）、木錘（15）などが出土している。

第5号井戸（第13図、第23図～第26図）

位置と切り合い　F・G－4区にまたがる位置にある。深さ237cm（標高1.80m）を測る。底部は青灰色粘土層に達している。井側材は第25図、第26図の曲物による曲物有段形の構造で、下部のもの二段が残っていた。少なくともこの上部には、二段程度の井戸枠が存在していたものと推定される。井戸枠の外側4ヶ所には、井戸枠の横ズレを防ぐため縦板材を断ち割った一辺約5cm、長さ約170cm前後の角材を立ててあった。また、井戸枠の下段と上段間には、幅約6cm、長さ約20～60cm、厚さ約1cm前後の板材を置き、井戸枠を重ねてあった。また、下段の井戸枠底部内に約20cmの厚さで砂利層を入れてあった。（スクリーントーン貼付部分）井戸枠は厚さ0.5mm～1cmの薄板材に筋目をつけて曲げ、桜の樹皮で止めているものであるが、破損していたのは下段の僅か一部のみで極めて良好な遺存状態であった。

覆土と遺物　覆土は1層～井戸掘り方の裏込め土の23層まで確認した。8～22層は井戸廃棄時以後の自然堆積土層である。1～7層は自然堆積で凹地状を呈した部分への埋め戻し土層である。出土遺物は第23図～第26図、井戸掘り方内出土は、第23図（1～4）、第24図（27）で、他は覆土中である。（1）は加賀焼甕で口径49cmを測る。口縁部の内面端部をヨコナデ調整で凹ませて肥厚し、外面は面取りし下端に稜線を持つ。頸部内外面はヨコナデ調整を施している。（2）は土師質小皿で、口縁部が少し立ち上がる程度である。推定口径7cm、高さ0.8cm、色調は橙色系を呈する。（3）は土師質の皿で、推定口径12.2cmを測る。内外面ヨコナデ調整で、口唇部をヨコナデ調整で面取りしている。（4）は青磁碗で口径16cmを測る。外面に鎬蓮弁を持

つ。色調はオリーブ黄色を呈し、胎土は灰白色で気泡は少ない。釉は比較的厚く均一に施釉され、内外面とも貫入は細かく密である。(27) は漆器椀で、口径13cm、器高5.1cm、底径17cmを測る。外底部を除いた器面の黒漆上に、朱漆による木爪文（スタンプ）を施している。この掘り方内からは、他に自然遺物として柿の実（径約5cm）が1個出土している。

覆土中の遺物は主に自然堆積していた土層からのものである。土師質皿は小皿（5～9）と大皿（10～12）がある。小皿の作りは口縁部をヨコナデ調整し、つまみ上げる（5）、外反させる（6）、ヨコナデ調整で内湾ぎみに立ち上がる（7～9）に区分される。（5）は口径7.6cm、器高1.5cmで色調は白色系。（6）は口径8cm、器高1.6cmで色調は灰色系。（7～9）の色調はいずれも橙色系である。（7）は口径8.6cm、器高1.5cm、（8）は推定口径10cm、器高1.5cm。（9）は推定口径9.2cm、器高1.1cm。皿は、内外面に指頭圧痕を持ち、口縁部をナデ調整するもので、端部を直線的に延ばす（10）とやや内側に曲げる（11、12）に分けられる。(10) の色調は灰色系で、(11、12) は橙色系である。(10) は口径11.3cm、器高3cm。(11) は口径11.3cm、器高2.8cm。(12) は口径11.7cm、器高2.8cm。(10、11) は自然堆積層からの出土で、(12) は井戸枠上面から出土している。青磁碗には（13～16）があり、外面に鎬蓮弁を持つ。(13) は口径15.6cmを測り、色調はオリーブ黄色を呈する。胎土は灰白色で、釉は薄く、内外面ともに細かい貫入がみられる。(14) は口径16.8cmを測る。色調はオリーブ灰色を呈する。胎土は灰白色で気泡は少ない。釉には貫入は認められない。(15) は底部で底径5.1cmを測る。色調は明緑灰色、胎土は灰白色を呈し、釉には貫入は認められない。外面には鎬蓮弁の基部が、内底には印花文が施されているが、不明瞭で、底部は釉を掻き取っている。(16) も底部片、底径5.3cmを測る。色調はオリーブ灰色で胎土は灰白色を呈する。釉は厚く、貫入は認められない。底部は釉を掻き取っている。(17) は、染付の皿で口径13.6cmを測る。色調は青色味を帯びた白色で、胎土は白色を呈する。発色はあまりよくない。(18) は唐津焼の碗底部で底径4.3cmを測る。色調はオリーブ灰色で胎土と同様な色調を呈している。内部には目痕が残り、外底に墨痕がある。(19～22) は加賀焼である。(19) は推定口径26cmの擂鉢で胎土は灰色、色調は外面が褐色、内面はオリーブ褐色を呈する。口縁外面端には指頭圧痕あり。(20) は擂鉢で口径37cm、底径12.6cm、器高17.9cmを測る。外面はヘラケズリし、内面に12条1単位のおろし目がある。色調は褐色で全体に錆が付着している。(21) は甕口縁部片。(22) は甕の肩部片で外面に菊花文と格子文の刻印を持っている。(23) は常滑焼の甕肩部片である。外には釉が流れている。(24) は刀子で長さ31.6cm、刃渡り22.2cm、重量145.5gを測る。

木製品では、(25) が曲物の蓋か底部で径9.6cmを測る。(26) は漆器椀、全面に黒漆をかけている。口径14.4cm、底径7.8cm、器高4.8cmを測る。全体に薄手の作りである。(28) は口径14.4cm、底径8.6cm、器高5.4cmを測る。前者と比べると厚手の作りで、漆をかけてはおらず外面に成形時のノミ痕を残している。(29～32) は箸である。いずれも完存品で、両端を細く尖らしている。太さも約5～8mmで断面形が変則的な五～八角形をなす。長さは (29) 13.2cm、(30) 19.7cm、(31) 19.9cm、(32) 20.1cmを測る。(34) が上段井戸枠で径61cm、高さ55cm、厚さ1.5cmを測る。外側の上下端には幅約4.5cmの薄板材を補強のタガとして巻きつけている。板の内面に約1

～２㎝前後の間隔で筋目をつけて曲げ、桜の樹皮で止めてある。下段の曲物は径65㎝、高さ58.3㎝、厚さ2.4㎝で同様な造作となっている。この井戸枠は下段に置かれた曲物の（外面）下端の一部が僅かに破損している以外は極めて良好な遺存状況である。

第６号井戸（第14図、第27図・第29図17・18）

位置と切り合い　Ｆ－４区南西側で第４号井戸の南側に位置する。

形状と法量　上面の平面形は隅丸方形に近い（425㎝×400㎝）。断面台形状を呈し、深さ242㎝（標高1.98m）で底部は灰色粘土層中に達している。井側材は無く、構造は不明である。

覆土と遺物　覆土は井戸中央部で半截して掘り下げたが壁面が崩壊したため、西側へ位置をずらして実測した関係から１～24層までしか確認できなかったが、下部には青灰色系の粘質土が堆積していた。１～８層が埋め戻し土、９～24層が自然堆積土である。11層以下は腐植物を多量に含んだ土層が１～２㎝の幅で交互に薄く堆積していた。井戸の西側から中央部にかけての上面覆土中には、握拳大から人頭大の礫が多量に含まれていた。

出土遺物は第27図・第29図（17～19）のものがある。（１、７～10）は加賀焼の甕である。（１）は口径43㎝を測る。口縁部外端面はヨコナデ調整により凹み、縁帯下端が三角形をなして垂れ下がる。頸部内外面もヨコナデ調整を施している。色調は褐色から褐灰色を呈する。（７）も同種の口縁部を持つ。口縁部幅は狭くなり、内面端をナデ調整で凹ませ、上端を内側へ押さえている。色調は外面が明灰褐色、内面が褐色を呈す。（８）も同種の口縁部を持つが、（４）よりも口縁幅は狭い。色調は外面が灰褐色、内面はオリーブ灰色を呈する。（９）は外面に菊花文の刻印を持つ。色調は外面が明灰褐色、内面は灰色を呈する。(10）は外面に格子目文の刻印を持つ。内面は灰色を呈する。（２、３）は土師質皿で（２）は口径6.2㎝、器高1.6㎝。色調は灰色系。（３）は口径7.9㎝、器高２㎝。内面に布目痕があり、赤彩されている。（４～６）は瀬戸焼である。（４）は灰釉の盤で、胎土は灰白色、色調はオリーブ黄色を呈している。二次的加熱を受けているため釉が溶けている。（５）は灰釉碗で底径5.6㎝を測る。淡黄色の胎土に淡緑色の釉をかけている。一部釉が溶けている。（６）も灰釉碗で、灰白色の胎土に釉をかけている。釉はオリーブ灰色であるが外面のものは、白濁化している。胴下部の内外面に目痕あり。(11）は須恵器坏蓋で、口径11.6㎝を測る。(13）は灰釉瓶の胴部片である。色調は灰白色を呈する。(12・14）は珠洲焼の擂鉢である。(12）は底径10.9㎝で、内面のおろし目は14条１単位となっている。(14）は口唇部に波状文を持っている。(15）は越前焼の擂鉢である。底径17.8㎝で色調は橙色を呈する。(16）は刀子柄で、内部に刀子が残っている。長さ9.4㎝、幅1.5㎝、厚さ0.5㎝、重量27ｇを測る。表面には約４～５㎜間隔で縦の筋目を持っている。(18）は石製品蓋の部分で、表面にノミ痕が残っている。(17）は石製の鉢で、器肉は厚く約2.5㎝を測る。内面にすり跡が残っている。これは包含層の遺物で井戸には伴なわない。

第７号井戸（第15図）

位置と切り合い　Ｇ－３区西側に位置する。

形状と法量　上面の平面形は楕円形（72㎝×62㎝）で、円筒状を呈する。深さ120㎝（標高2.98m）で、底部は灰色硬粘土層上面まで達している。井側材は無く、構造は不明。

覆土と遺物　覆土は１～５層に区分される。それは、１～４層の埋戻し土と井戸内に自然堆積した５層である。出土遺物で実測に耐えるものはなく、時期は不明である。

第８号井戸（第15図、第28図１～６）

位置と切り合い　Ｄ－５区に位置する。

形状と法量　掘り方上面の形態は楕円形（108㎝×100㎝）を呈し、深さ78㎝（標高3.05ｍ）で、底部は青灰色シルト層上面に達している。井戸側は方形縦板組横桟どめ、規模は（108㎝×100㎝）、横桟は、一段存在した。

覆土と遺物　覆土は１～20層に区分した。１層が埋め戻し土で、２層以下は自然堆積土である。遺物は（１～６）のものが出土している。（１）は口径17.6㎝を測る土師器の中型甕である。口縁端部を外反させ外面はナデ調整している。（２）も同じ小型甕の底部で、底径6.3㎝を測る。底部には糸切り痕が残る。（３）は須恵器椀で口径13.7㎝、底径6.1㎝、器高3.7㎝を測る。灰白色を呈する。底部に糸切痕を持ち、内外面をナデ調整している。（４）は広口瓶で、表面に自然の降灰釉が付着している。（５）は柄杓でやや歪んでいる。径13.3～12.5㎝、高さ9.2㎝を測る。厚さ２～３㎜の薄板内側に約５㎜間隔で筋目をつけて曲げ、桜の樹皮で止めてある。側面に柄の刺し込み穴がある。底板は側板下端から木釘で止めてある。

第９号井戸（第15図）

位置と切り合い　Ｃ－５区西側に位置する。

形状と法量　上面の形態は楕円形を基本とする。北側部分に平坦部があり、ここが突出して西洋梨形（152㎝×120㎝）となっている。深さは78㎝（標高3.04ｍ）で、底部は青灰色粘土層中に達している。内部に井側材が存在したかどうかは不明であり、素掘りの可能性もある。

覆土と遺物　覆土は１～14層まで確認した。１層は埋め戻し土で、２～９層もその可能性がある。10層以下は自然堆積と推定される。覆土中から図示に堪える遺物の出土がなく、時期は不明である。

第10号井戸（第15図、第29図１～６）

位置と切り合い　Ｃ－５・６区にまたがって存在し、９号井戸の南側に位置する。

形状と法量　上面の形態は楕円形（203㎝×184㎝）、深さ86㎝（標高2.96ｍ）を測る。底部は青灰色粘土層中に達している。井側材はなく構造は不明である。

覆土と遺物　覆土は１～20層まで確認した。観察所見より１～５・７層が、６・８層以下の土層を掘り下げて生じた凹地に堆積している。出土遺物は（１～６）。（１）は加賀焼甕の胴部片である。色調は褐色や淡褐色を呈する。（２）は土師質の小皿。ナデ調整をしている。口径7.1㎝、底部2.6㎝、器高1.7㎝を測る。色調は橙色系を呈している。（３）は下駄の歯で、半分に割れている。（４～６）は、箸の完存品である。両端を削り尖らしている。長さは（４）が24㎝、（５）が20.65㎝、（６）は21.9㎝を測る。太さは約４～６㎜、断面形は変則的で四～五角形をなす。（７）は砥石である。

第11号井戸（第15図、第30図１、２）

位置と切り合い　Ｃ－６区中央部に位置する。

形状と法量　上面の形態は不整楕円形（124～91cm）で、深さ58cm（標高3.25m）を測る。底部は青灰色粘砂層中に達している。井側材はなく構造は不明である。

覆土と遺物　覆土は1～17層まで確認した。自然堆積した土層と推定される。出土遺物には（1・2）がある。（1）は口径42.5cmを測る。加賀焼の甕で、口縁部はN字状で、口縁上端は内傾し、下端は三角形をなし垂れ下がる。色調は茶褐色で胎土には黒い粒子を含む。（2）は口径27cmで、（1）より口径の小さいタイプである。口径上端は（1）よりも小さく内傾し、自然釉が付着しているが、色調は暗灰色、内面はオリーブ褐色を呈する。内外面と断面に黒色の炭化物が付着。両者の頸部内面はヨコナデ調整を施している。

第12号井戸（第15図、第30図1、2）

位置と切り合い　C－6区中央南側に位置する。

形状と法量　上面は楕円形（162cm×154cm）、深さ122cm（標高2.62m）を測る。底部は灰色粘土層中に達している。井側材はなく構造は不明である。南壁面は崩壊しているが、当初は急角度で底部に至っていたものと推定される。

覆土と遺物　この井戸は廃棄後に壁面が崩壊し、その崩壊土の6層が底部に滞った後、4・5層が自然堆積し、1・2・3層で埋め戻したものと推定される。出土遺物は（1・2）がある。（1）は珠洲焼片口鉢で、口径22.4cmを測る。色調は灰色を呈し、内外面はヨコナデ調整をしている。（2）は珠洲焼甕で、外面のタタキは12条1単位。色調は灰色を呈する。

第13号井戸（第16図、第30図1～4）

位置と切り合い　C－6区南西側からC－7区に位置する。

形状と法量　上面は隅丸長方形（123cm×218cm）、深さ77cm（標高3.05m）を測る。底部は青灰色砂層中に達している。井側材はなく構造等は不明である。全体の形状は、竪穴状の形態を呈している。

覆土と遺物　覆土は13層あり、1～5層は埋め戻し土で6層以下が自然堆積土と推定される。出土遺物（1～3）。（1）は土師質の小皿で、口径7.5cm、器高21cm、色調は白色系を呈する。内面に布目痕あり。（2）は瀬戸焼の灰釉碗、色調はオリーブ黄色で、二次的加熱により釉が剥離しやすくなっている。貫入と内面に目痕あり。（3）は磨石、表面に焼けた痕がありススが付着している。（4）は石製硯で縁と硯頭部の一部および硯尻部を欠落させているが、長方形をしていたものと推定される。海の部分は僅かで、陸の部分が広い。陸部は使用頻度が多かったために凹み、滑らかな状態を呈している。表面には墨が付着している。

第14号井戸（第16図、第30図1）

位置と切り合い　D－5区北東側に位置する。

形状と法量　上面の形態は隅丸方形に近い楕円形（134cm×105cm）、深さ150cm（標高2.49m）を測る。底部は青灰色粘土層中に達している。井側材はなく構造も不明である。

覆土と遺物　覆土は13層あり、1～10層は基本的に埋め戻し土、11層以下が自然堆積といえる。調査時当初は10層までで止めていたが、13層まで掘り下げることができた。出土遺物は、（1）の箸が1本のみ、長さは20.1cmを測る。

第15号井戸（第16図、第31図１～６）

位置と切り合い　地形が一段高いＦ～Ｇ－６区にまたがって存在し、第15号土壙をきっている。

形状と法量　上面の形態は楕円形（124㎝×105㎝）、深さ68㎝（標高3.46ｍ）を測る。底部は淡青灰色粘土層中に達している。井側材は曲物有段型の構造で、下段の曲物は地山へくいこませてあった。径60㎝ほどの曲物が二段重ねられていたが、遺存状況が悪く、取り上げることはできなかった。覆土の様子より、曲物がもう一段重ねられていた可能性がある。

覆土と遺物　覆土は１～14層確認した。３～５層は井戸枠内の自然堆積土、６～14層は裏ごめ土、１・２層が埋め戻し土になる。覆土中には１辺約10㎝ほどの柱材や板材等が入っていた。出土遺物は（１～６）である。（１～４）は土師質皿で、（１～３）が小皿、（４）が中皿である。いずれも粘土盤の周辺を内側へ折り曲げて作るもので、指ナデにより器面の凹凸が激しく明瞭な底部をもたない。（１）は口径6.8㎝、器高1.5㎝、色調は橙色系。（２）は7.8㎝、1.6㎝、白色系。（３）は7.7㎝、1.5㎝、白色系。（４）は11.8㎝、2.2㎝、灰色系を呈している。（５）は加賀焼甕底部で底径16.6㎝を測る。色調は褐色を呈している。（６）は長さ25.9㎝、幅6.1㎝、厚さ３～４㎜の短冊型の板。本来はもう少し幅が広かったと推定される。板の表面に細かい切り傷が多く見られ、まな板の断片である可能性もある。

第16号井戸（第16図）

位置と切り合い　Ｄ－７区中央東側に位置する。

形状と法量　上面の平面形は楕円形（116㎝×118㎝）、深さ171㎝（標高2.14ｍ）を測る。上面南側から北側に平坦面を持っている。底部は青灰色粘土層中に達している。井側材はなく、構造は不明であるが、素掘りの可能性もある。

覆土と遺物　覆土は１～８層まで確認した。１～３層が埋め戻し土、４層以下が自然堆積土と推定される。出土遺物はなく、時期は明らかではない。

第17号井戸（第16図、第31図１～７、第32～34図）

位置と切り合い　地形が一段高いＦ－７区中央に位置する。

形状と法量　上面の平面形は三角形に近い楕円形（227㎝×227㎝）を呈する。深さは破損した曲物の所までで213㎝（標高2.11ｍ）を測るが、さらに掘り下る可能性もある。

覆土と遺物　覆土は、半截して掘り下げていた途中に、壁面が崩壊してしまったため不明である。調査時の記憶より、覆土の中位から下位にかけて大量の腐植物を含んだ層が厚く堆積し、その中には、木材の加工片や木の枝の破片なども含まれていた。出土と遺物は多い。（１・２）は土師質皿である。（１）は口縁部が歪み、口径7.8～8.1㎝、器高1.8㎝を測る。色調は白色系。（２）は外反する口縁端部を肥厚させている。口径13.2㎝、器高は推定で2.6㎝を測る。（３）は瀬戸焼二彩の丸碗で、底径4.9㎝を測る。胎土は淡黄色を呈する。外面上部には緑釉、胴下部には黄彩がかけられている。畳付部は釉を掻き取っている。高台内面には砂が付着している。（４）は青磁碗の底部による円盤状陶製品である。色調は淡緑色を呈する。（５～10）は加賀焼である。（５）は甕で口径43㎝を測る。口縁部はＮ字状で、口縁上端は内傾し、下端は三角形をなし垂れ下がる。頸部外面は縦位のナデ調整後、ヨコナデ調整し、内面はヨコナデ調整してい

る。色調は褐色へ橙褐色を呈する。（９）も甕胴部片である。（６・７・10）は擂鉢。（６）は片口のもので、口径29.5㎝を測る。内面のおろし目は７条１単位で、色調は褐色を呈する。（７）は、口径33㎝を測る。おろし目は12条１単位であるが、不定形な方向に引かれている。（10）は11条１単位のおろし目がある。色調は灰色を呈する。なお、図中の拓影は天地逆になっている。（８）は壺で、底径11.6㎝を測る。外面に２条の沈線があり、内面に指頭痕が残る。色調は外面が褐色、内面はオリーブ灰褐色を呈する。（11～13）は越前焼の甕である。（11・12）は甕で外面に格子文の刻印があり、色調はいずれも褐色を呈する。（13）は鉢で、高台径14.4㎝を測る。色調は外面が赤褐色を呈し、一部に漆状の付着物あり。（14）は曲物で口径22.4㎝、高さ17.4㎝を測る。厚さ３㎜の薄板の内側に約５～８㎜間隔で筋目をつけて曲げ、桜の樹皮で留めてある。上下端には幅約3.8㎝の薄板を当ててタガとしている。底板は厚さ約９㎜を測るが、どのように留めてあるかは不明である。（15）は曲物底部で厚さ約1.5㎝を測る。側面に目釘痕が残る。（16～20）は箸である。形態は他のものと同様である。長さは（16）25.8㎝、（17）22.4㎝、（18）21.5㎝、（19）17.0ｍ、（20）現存値で15㎝。（21）は凝灰岩の加工石で表面にノミ痕を残している。上下端共に折れているが、上部の幅が狭くなっている。（22）も同種の加工石、四角柱形をなしている。長さ43㎝、幅14.8㎝を測る。表面にはススが付着し、一部破損している。

第18号井戸（第17図、第35図１～５）

位置と切り合い　Ｅ－４区南側からＥ－５区北側に位置する。

形状と法量　上面の平面形は菱形に近い楕円形（401㎝×357㎝）で深さ155㎝（標高2.74ｍ）を測る。井側材が無いため構造は不明であるが、中央東側壁面際に先端を削り、尖らした加工材（長さ80㎝、径10㎝ほどで枘穴がある）が一本打ち込まれてあった。掘り方の北・東側には平坦面があり、南東側には第20号井戸がある。この井戸の上端南側から18号井戸に向って地山が傾斜している。

覆土と遺物　覆土は１～17層まで確認した。１～11層は埋め戻し土で、12層以下が井戸内への自然堆積土と推定される。遺物についてだが、この南東側の20号井戸の存在が判明するまでは、両井戸の遺物を混ぜて取り上げている。（１・２）は土師質の皿である。（１）は口径12.8㎝を測る。口縁端部はナデ調整による面を持っている。色調は白色系を呈する。（２）は口径12.2㎝を測る。口縁端部はナデ調整で丸く仕上げ、色調は白色系を呈する。（３）は白磁の皿で底径3.4㎝を測る。胎土は白色で気泡が少ない。釉は二次的加熱により浅黄色で不透明になり、内面の釉が剥離している。また、内面には目痕も残る。（４）は加賀焼擂鉢で推定口径26.6㎝を測る。色調は外面が褐色、内面はオリーブ淡褐色を呈する。（５）は越前焼甕底部で底径14.5㎝を測る。

第18号井戸と第20号井戸上層を区分せず取り上げた遺物は第35図（６～17・20）である。土師質皿では（11～13・20）がある。（11）は口径10.9㎝を測る。色調は白色系。（12）は口径7.7㎝、器高1.4㎝を測る。口縁部をナデ調整し、外面底部には指頭痕が践り、底部は丸みを持っている。（13）は口径8.1㎝、器高２㎝を測る。外面はナデ調整している。色調は白色系。（20）は口径10.8㎝、器高2.7㎝を測る。外面に残る指頭圧痕の上をさらにナデ調整している。内面は刷毛調整後にナデ調整を加えている。これも明瞭な底部を持っていない。色調は白色系。（14）は白磁碗の胴部片である。胎土は灰白色を呈し、色調は青味を帯びた白色となっている。（８）は

珠洲焼の甕か壺の胴部片で、外面のタタキは平行に近く、８条１単位。色調は灰色。（９）も同じく胴部片、タタキは９条１単位。色調は灰色。（10・15～17）は加賀焼である。（15）は甕底部片で、底径12.6㎝を測る。内面の一部に黒褐色で漆状の付着物がある。色調は褐色を呈する。（16）は甕口縁部片。口縁上端をつまみ上げている。（17）は甕で、口径46㎝を測る。口縁外面はナデ調整で凹み、縁帯下端が三角形をなして垂れ下がる。頸部内外面は強いナデ調整を施される。色調はオリーブ灰色を呈する。

第20号井戸（第17図、第36図18・19・21～28）

位置と切り合い　先述の第18号井戸の南東側に位置する。

形状と法量　上面の形態は長楕円形（158㎝×108㎝）で、深さ162㎝（標高2.30ｍ）を測る。上面の西側には平坦面を持っている。底部は灰色粘土層中に達している。井側材が存在しないため構造は不明である。この井戸に伴うものか明らかではないが、覆土中から長さ80㎝ほどの横桟が１本出土している。

覆土と遺物　覆土は１～６層まで確認した。１層は埋め戻し土であろう。２～５層もその可能性が高い。６層は自然堆積土である。土師質の皿は（18・19・21・22）。いずれも指頭による押圧後ヨコナデ調整をしている。（18）は口径7.6㎝、器高1.4㎝を測る。外面にはススが付着し、色調は灰色系を呈する。（19）は口径7.8㎝、器高1.3㎝を測る。底部中央が内側へ入る。色調は橙色系を呈する。（21）は口径12.5㎝を測る。口縁下部はヨコナデ調整でやや凹んでから外反する。内面端にタール状付着物あり。色調は橙色を呈する。（22）は口径11.8㎝を測る。形態は（21）と類似するが、口縁端部が内側へ入り込む。色調は灰色系を呈する。（23）は瀬戸焼灰釉の皿で、口径11.8㎝を測る。胎土は灰白色で、色調はオリーブ灰色を呈する。釉は透明感があり、内外面とも貫入がある。（24～27）は箸で、作りは他のものと同様である。（24・25）は片方が折れている。（26・27）は完存品。長さはそれぞれ（24）19.5㎝、（25）19㎝、（26）20.4㎝、（27）20.6㎝を測る。（28）は曲物の底板で、側面に目釘穴跡が２箇所ある。表面には径２～３㎜の小孔が６箇所に存在している。

第19号井戸（第17図、第36図１～16）

位置と切り合い　Ｇ－６区南西側に位置する。第１次調査区と第２次調査区にまたがって存在した。第１次調査区を東側へ拡張して掘り下げた。

形状と法量　上面の形態は楕円形で（276㎝×244㎝）、深さ156㎝（標高2.57ｍ）を測る。底部は灰色粘土層中に達している。井戸の南側に平坦面を持ち、さらに西側には浅い土坑状の落ち込みが伴っている。ここに井戸が作られる以前に別個の遺溝が存在していた可能性がある。井戸内部南側の壁面中央部は内側へ入り込んでいた。また、北側壁面の破線は調査中に壁面崩壊のため推定したものである。井側材が存在しないため、構造は不明である。

覆土と遺物　履土は１～14層まで確認した。１・２層が埋め戻し土で、３層以下が自然堆積土と推定される。10層には、腐植物を多量に含んでいた。出土遺物には（１～16）のものがある。土師質皿は（１～４）。（１）は底部から直線的に口縁部が伸びている。色調は白色系（表面は橙色系）を呈する。（２）は口径8.1㎝、器高1.6㎝を測る。外面に黒色付着物が残る。色調は白色系。（３）は口径8.5㎝、器高１㎝を測る。器高が他のものより一段と低い。色調は白色系。

（４）は口径9.6cm、器高1.9cmを測る。色調は白色系を呈する。（５）は底径8.7cm、瀬戸焼灰釉の筒型容器の底部と推測される。胎土は灰白色を呈し、色調はオリーブ灰色で透明感がある。（６）は加賀焼甕。（７）は越前焼甕。（８）は珠洲焼擂鉢の破片である。（９）は唐津焼の碗で高台径4.3cmを測る。胎土は灰白色で、釉はオリーブ灰色の色調を呈する。釉には細かい貫入が入るが、二次的加熱で白濁化し、高台付近の胎土は赤褐色化している。（10）は管状土錘、外径3.0～3.5cm、内径1.6～1.9cmを測る。重量は遺存値で29.8ｇ。（11）は鳥形状木製品である。長さ23.7cm、最大幅2.7cm、厚さ0.1～0.45cmを測る。薄板の端部に削りと切れ込みを入れ、口嘴から頭部までを表現し、下端側に小さな刻目を四つ連続させている。頭部近くに径約0.5cmの孔を持つ。尾部近くの下端側を削りで凹ませている。（12～16）は箸で、造作は他のものと同様でいずれも完存品。長さは（12）が20.4cm、（13）が19.8cm、（14）が18.1cm、（15）が21.3cmを測る。図版26の別図が編物片である。縁の部分が存在しているので、カゴであると考えられる。編み方は基本的に網代編みで、縦は12状、横は10条確認できた。縦材４は同５の下に隠れており、縦材３は欠損している。この縦・横材の原体幅は５～７㎜で、厚さは0.6～１㎜である。横材１は口縁の芯材であり、縁を補強するために他とは異なる材質が使用されている。そのため断面形は、隅丸長方形をなし、幅4.2㎜、厚さ2.6㎜となっている。編み方は縦材１が横材１・２を挟み込み、２枚が重なりあって横材３～５を超え、横材６～10を潜っている。縦材２～12も同様な編み方をしており、縦材は１本ズレである。縦材が横材を挟む「挟み」部分では２・３・４本毎の挟みが繰り返されており、規則性が認められる。第１巡目の「超え」では、縦材３本分毎に交互に現われている。「挟み＋超え」の合計分が、表面上は超えているように見える。第２巡目の「超え」あたりから編み方が不明瞭になってきているが、縦材４～９の６本が１単位となり、それが何度も繰り返されていると推測される。縁巻きは縦材が二つ折りに折り返されて横材を挟み込んで作成されている。横条で２枚重ねになっているのが確認できるものは、横材３～８・10である。

第21号井戸（第17図、第36図１・２）

位置と切り合い　調査区南壁際のＤ－７区に位置する。

形状と法量　上面の形態は楕円形（71cm×54cm）を呈していると推定される。深さは54cm（標高3.34m）を測る。底部は灰色粘土層中に達している。井側材は存在しないため構造は不明であるが、素掘りの可能性もある。

覆土と遺物　覆土は５層確認しているが、１・２層が埋め戻し土で３層以下が自然堆積層と推定される。４層以下には土層中に礫が多量に混入していた。出土遺物には土器はない。箸があったが、その多くは破損品で、完存品は（１・２）のみである。造作は他と同様、長さは（１）が16.4cm、（２）は21.7cmを測る。

第22号井戸（第17図）

位置と切り合い　調査区北壁のＣ－１区に位置する。上部を第16号溝に切られている。

形状と法量　上面の形態は、北側調査区外へ伸びているが、隅丸方形から長方形（47cm×40cm）を呈すると推定される。深さは27cm（標高3.48m）を測り、底部は灰色粘土層に達してい

る。壁面に曲物の一部が残ることから、構造は曲物有段形と推定される。

覆土と出土遺物　覆土は2層確認したのみで、井戸枠内に自然堆積した土層といえる。遺物は出土しなかった。

第23号井戸（第41図1）

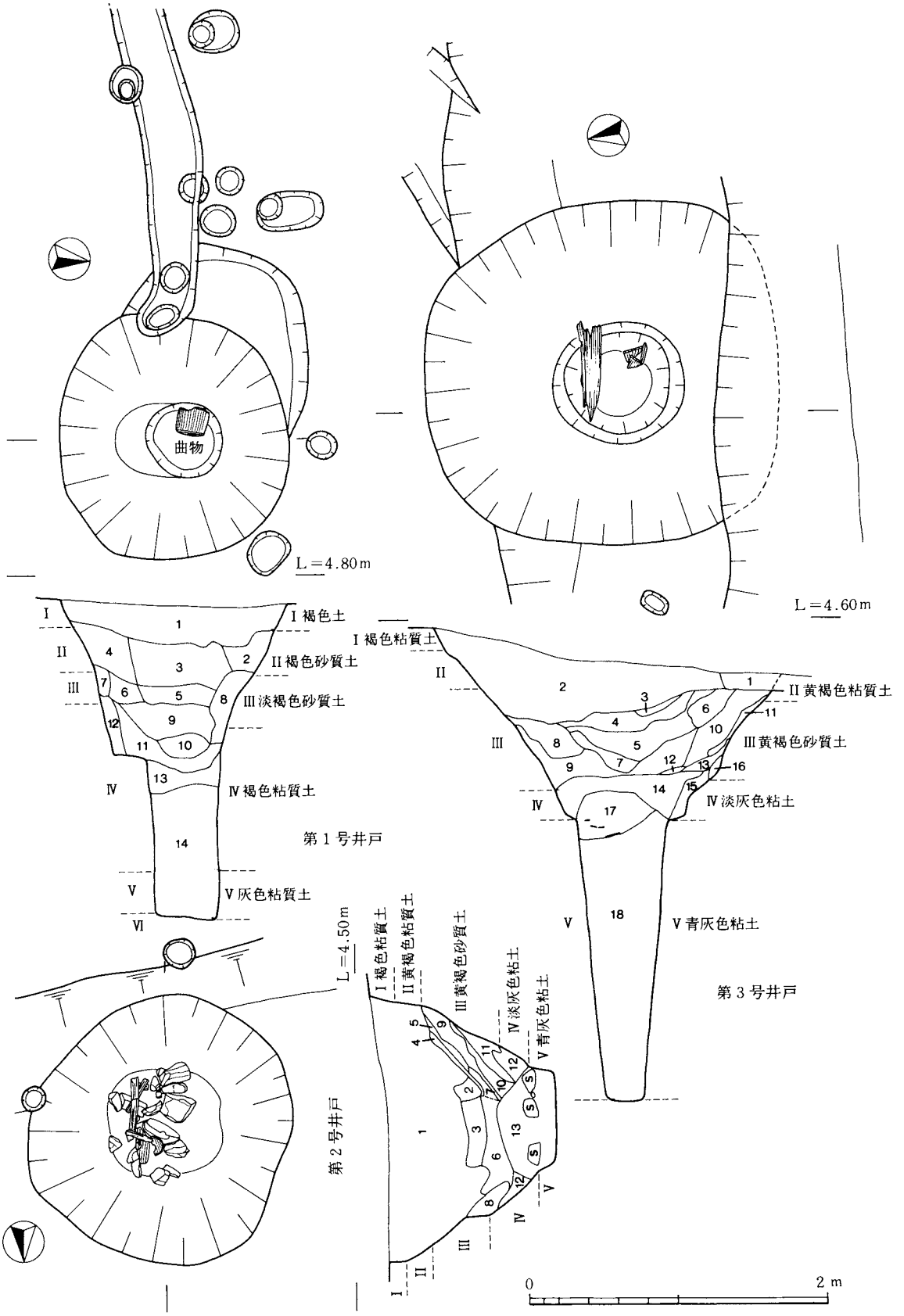
位置と切り合い　調査区南壁際でE・D－7にまたがって位置する。同じ壁際の21号井戸の東側にあたる。西側は別個の溝状遺構を切り、北側は1個のピットに切られている。

形状と法量　この井戸は調査時に竪穴3としていたもので、調査最終段階に底部がさらに掘り下がることが判明した。しかし、作業時間の都合で掘り下げることができなかったため、内部構造は不明である。上面の平面形は調査区外へ伸びているが、隅丸方形（276cm×196cm）と推定される。深さは55cmまで確認している。

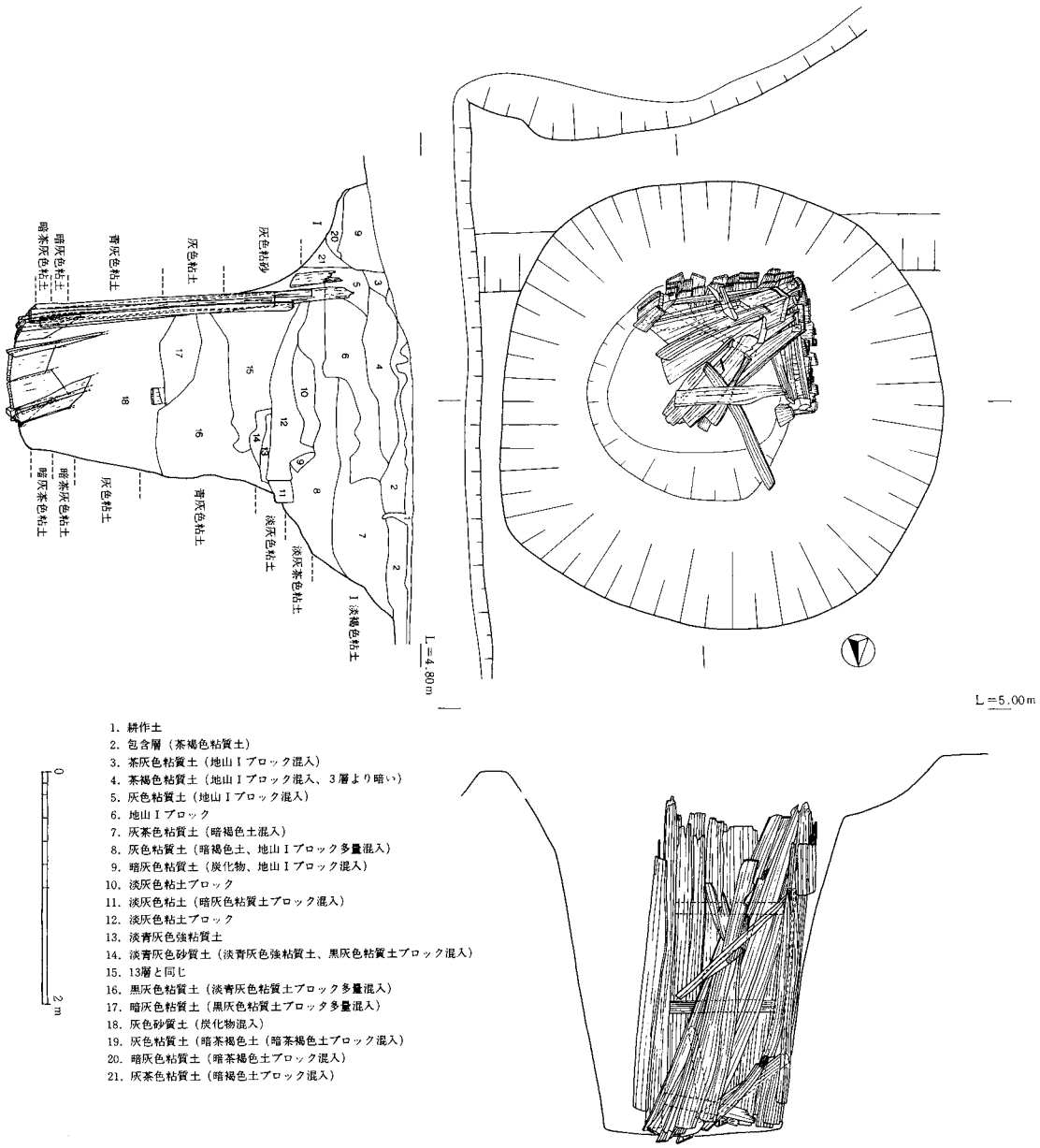
覆土と出土遺物　覆土は2～15層まで確認したが、下部の土層が不明なため埋め戻し土と自然堆積土の区分は不明である。出土遺物には（1）の白磁玉縁碗が存在する。口径15.6cmを測る。胎土は白色。色調はオリーブ色がかった白色で、釉は透明感があり、貫入はない。

第1表　第1次調査区井戸一覧表

井戸番号	掘方規模（cm）			内部構造	出土遺物	備考
	上面	下面	深さ（標高m）			
1号井戸	154×164	40× 40	217・(2.48)	不明	須恵器、土錘、瓦、曲物底板	
2号井戸	177×183	72× 75	126・(3.15)	不明	土師器、珠洲焼、漆椀	
3号井戸	232×240	44× 47	317・(1.37)	不明	土師器、須恵器、加賀焼、珠洲焼、瀬戸焼、須恵器系陶器、白磁碗	
4号井戸	399×404	115×127	328・(1.32)	方形縦板組隅柱横桟どめ	土師質土器、加賀焼、青磁椀、曲物底板、箸、板材、下駄、木錘	加賀焼の甕にヘラ描文様あり
5号井戸	322×352	66×108	237・(1.80)	曲物有段形	土師質土器、加賀焼、青磁椀、漆付皿、常滑焼、刀子、木椀、漆椀、箸、砥石	井戸掘り方内より柿の実1点出土
6号井戸	400×425	88× 88	242・(1.98)	不明	土師質土器、珠洲焼、加賀焼、瀬戸焼、越前焼、刀子柄、石製鉢、石製品	
7号井戸	62× 72	46× 56	120・(2.98)	不明		
8号井戸	100×108	58× 65	78・(3.05)	方形縦板組桟どめ	土師器、須恵器、平瓦、柄杓	
9号井戸	120×152	60× 65	78・(3.04)	不明		
10号井戸	184×203	70× 93	86・(2.96)	不明	土師質土器、加賀焼、下駄、箸、砥石	
11号井戸	91×124	65× 82	58・(3.25)	不明	加賀焼	
12号井戸	154×162	51× 52	122・(2.62)	不明	珠洲焼	
13号井戸	218×237	128×147	77・(3.05)	不明	土師質土器、瀬戸焼、硯、砥石	
14号井戸	105×124	74× 85	68・(3.46)	曲物有段形	土師質土器、加賀焼	
15号井戸	105×124	74× 85	68・(3.46)	曲物有段形	土師質土器、加賀焼	
16号井戸	116×118	48× 62	171・(2.14)	不明		
17号井戸	227×227	150×188	213・(2.11)	不明	土師質土器、加賀焼、瀬戸焼、越前焼、曲物、箸、加工石、円盤状陶製品	下面・深さ・標高の数値は推定
18号井戸	357×411	92×194	155・(2.74)	不明	土師質土器、加賀焼	18号井戸上層と20号井戸のものには白磁碗がある
19号井戸	244×276	104×127	156・(2.57)	不明	土師質土器、加賀焼、越前焼、珠洲焼、唐津焼、土錘、鳥形	
20号井戸	107×158	61× 91	162・(2.30)	不明	土師質土器、瀬戸焼、箸、曲物底板	
21号井戸	(54)× 71	(38)× 47	54・(3.34)	不明	箸	
22号井戸	(40)× 47	30×(32)	28・(3.49)	曲物有段形		
23号井戸	(196)×276			不明	白磁碗	下部未掘

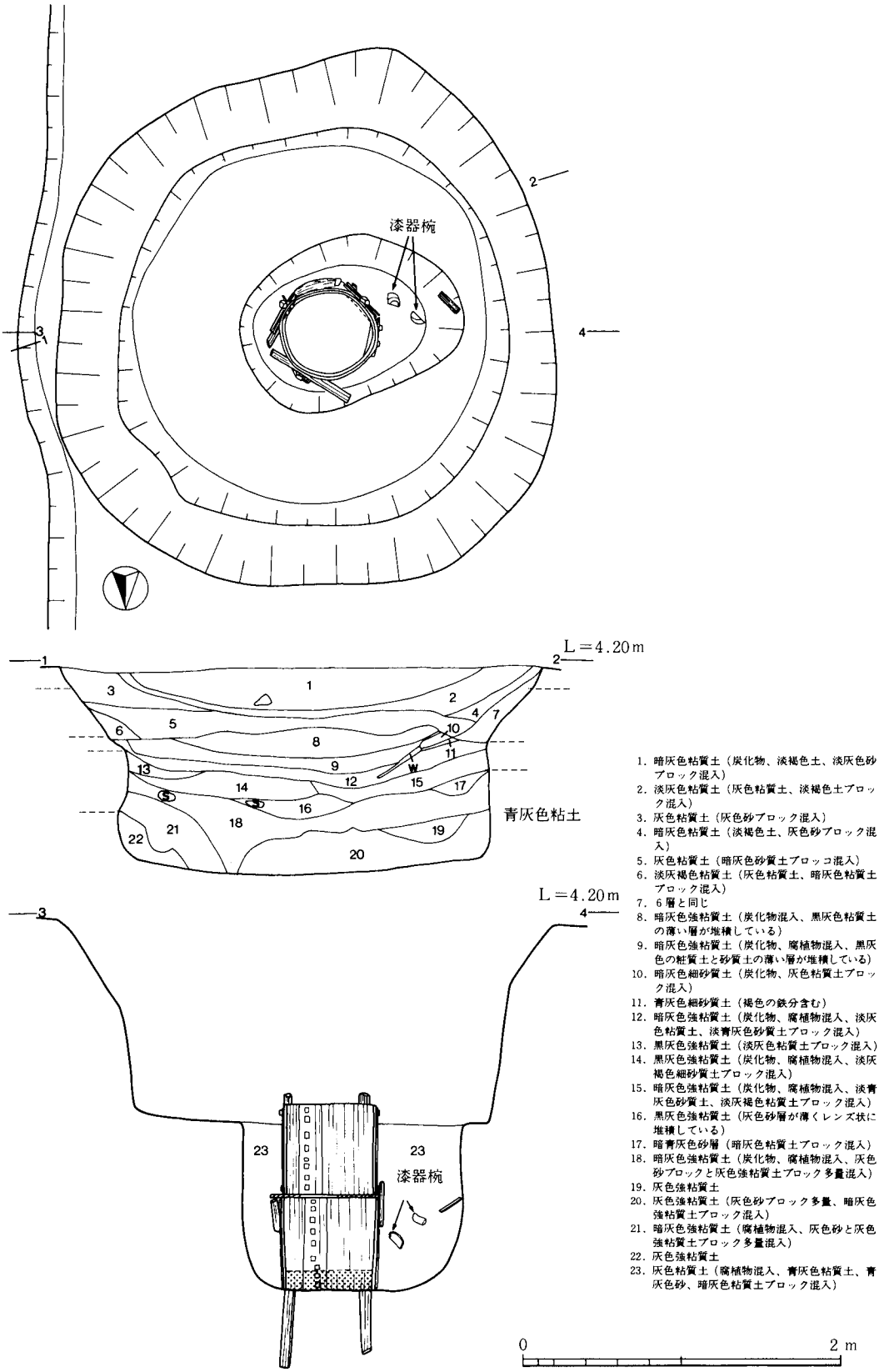


第11図　第１～３号井戸実測図（S＝1／40）



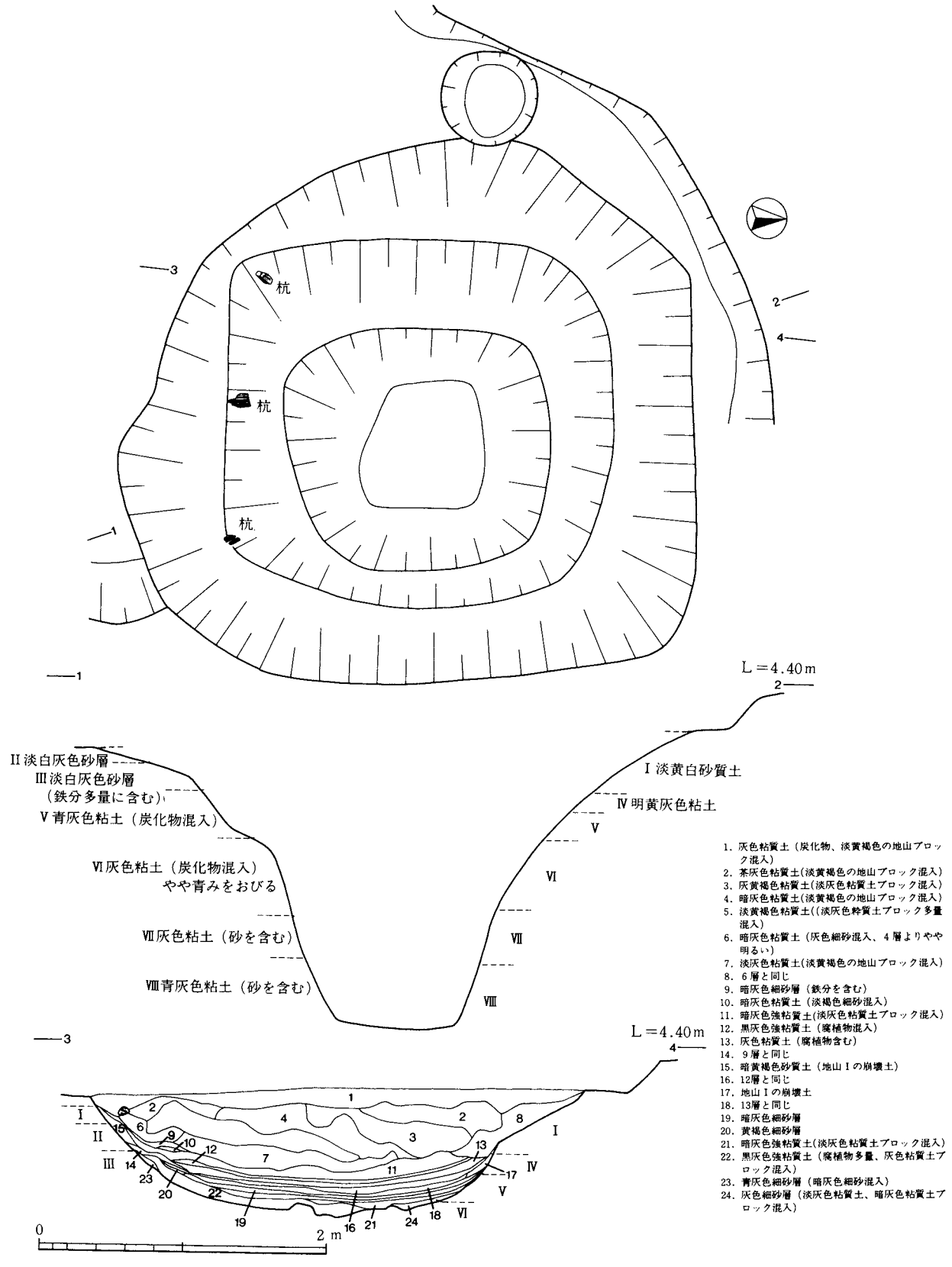
1. 耕作土
2. 包含層（茶褐色粘質土）
3. 茶灰色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
4. 茶褐色粘質土（地山Ⅰブロック混入、3層より暗い）
5. 灰色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
6. 地山Ⅰブロック
7. 灰茶色粘質土（暗褐色土混入）
8. 灰色粘質土（暗褐色土、地山Ⅰブロック多量混入）
9. 暗灰色粘質土（炭化物、地山Ⅰブロック混入）
10. 淡灰色粘土ブロック
11. 淡灰色粘土（暗灰色粘質土ブロック混入）
12. 淡灰色粘土ブロック
13. 淡青灰色強粘質土
14. 淡青灰色砂質土（淡青灰色強粘質土、黒灰色粘質土ブロック混入）
15. 13層と同じ
16. 黒灰色粘質土（淡青灰色粘質土ブロック多量混入）
17. 暗灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック多量混入）
18. 灰色砂質土（炭化物混入）
19. 灰色粘質土（暗茶褐色土（暗茶褐色土ブロック混入）
20. 暗灰色粘質土（暗茶褐色土ブロック混入）
21. 灰茶色粘質土（暗褐色土ブロック混入）

第12図　第4号井戸実測図（S＝1／60）

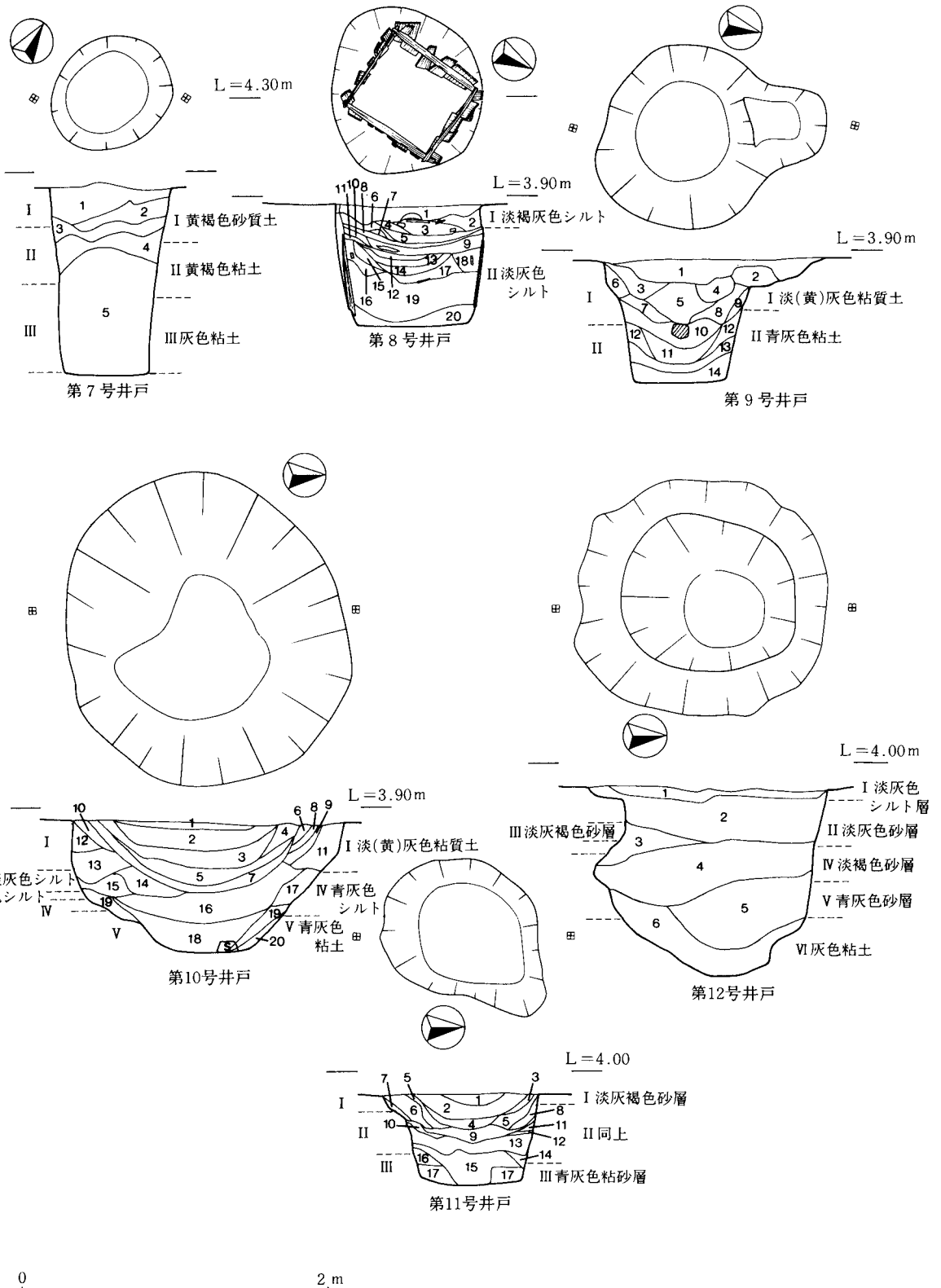


1. 暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色土、淡灰色砂ブロック混入）
2. 淡灰色粘質土（灰色粘質土、淡褐色土ブロック混入）
3. 灰色粘質土（灰色砂ブロック混入）
4. 暗灰色粘質土（淡褐色土、灰色砂ブロック混入）
5. 灰色粘質土（暗灰色砂質土ブロッコ混入）
6. 淡灰褐色粘質土（灰色粘質土、暗灰色粘質土ブロック混入）
7. 6層と同じ
8. 暗灰色強粘質土（炭化物混入、黒灰色粘質土の薄い層が堆積している）
9. 暗灰色強粘質土（炭化物、腐植物混入、黒灰色の粘質土と砂質土の薄い層が堆積している）
10. 暗灰色細砂質土（炭化物、灰色粘質土ブロック混入）
11. 青灰色細砂質土（褐色の鉄分含む）
12. 暗灰色強粘質土（炭化物、腐植物混入、淡灰色粘質土、淡青灰色砂質土ブロック混入）
13. 黒灰色強粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
14. 黒灰色強粘質土（炭化物、腐植物混入、淡灰褐色細砂質土ブロック混入）
15. 暗灰色強粘質土（炭化物、腐植物混入、淡青灰色砂質土、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
16. 黒灰色強粘質土（灰色砂層が薄くレンズ状に堆積している）
17. 暗青灰色砂層（暗灰色粘質土ブロック混入）
18. 暗灰色強粘質土（炭化物、腐植物混入、灰色砂ブロックと灰色強粘質土ブロック多量混入）
19. 灰色強粘質土
20. 灰色強粘質土（灰色砂ブロック多量、暗灰色強粘質土ブロック混入）
21. 暗灰色強粘質土（腐植物混入、灰色砂と灰色強粘質土ブロック多量混入）
22. 灰色強粘質土
23. 灰色粘質土（腐植物混入、青灰色粘質土、青灰色砂、暗灰色粘質土ブロック混入）

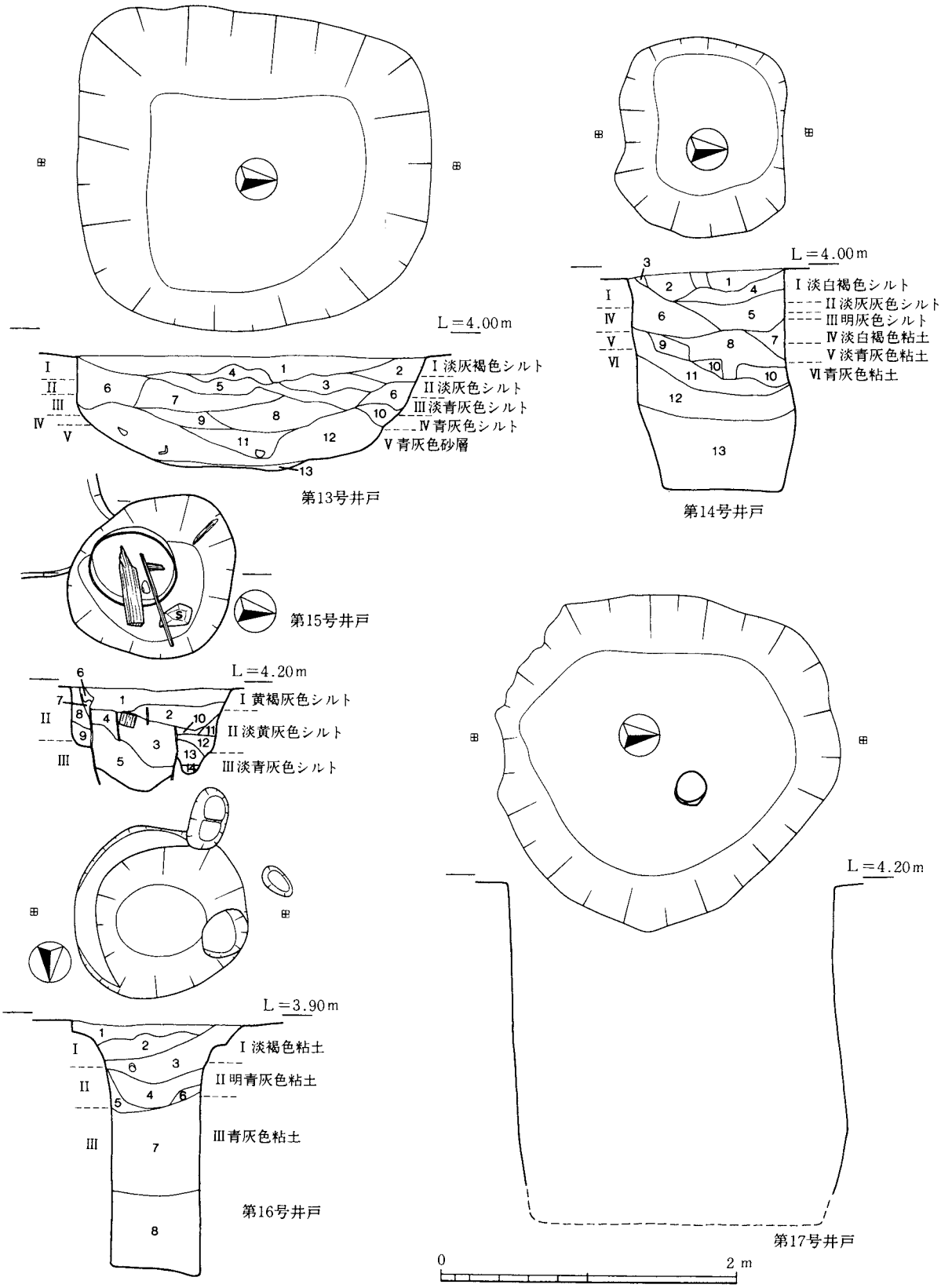
第13図　第５号井戸実測図（Ｓ＝1／40）



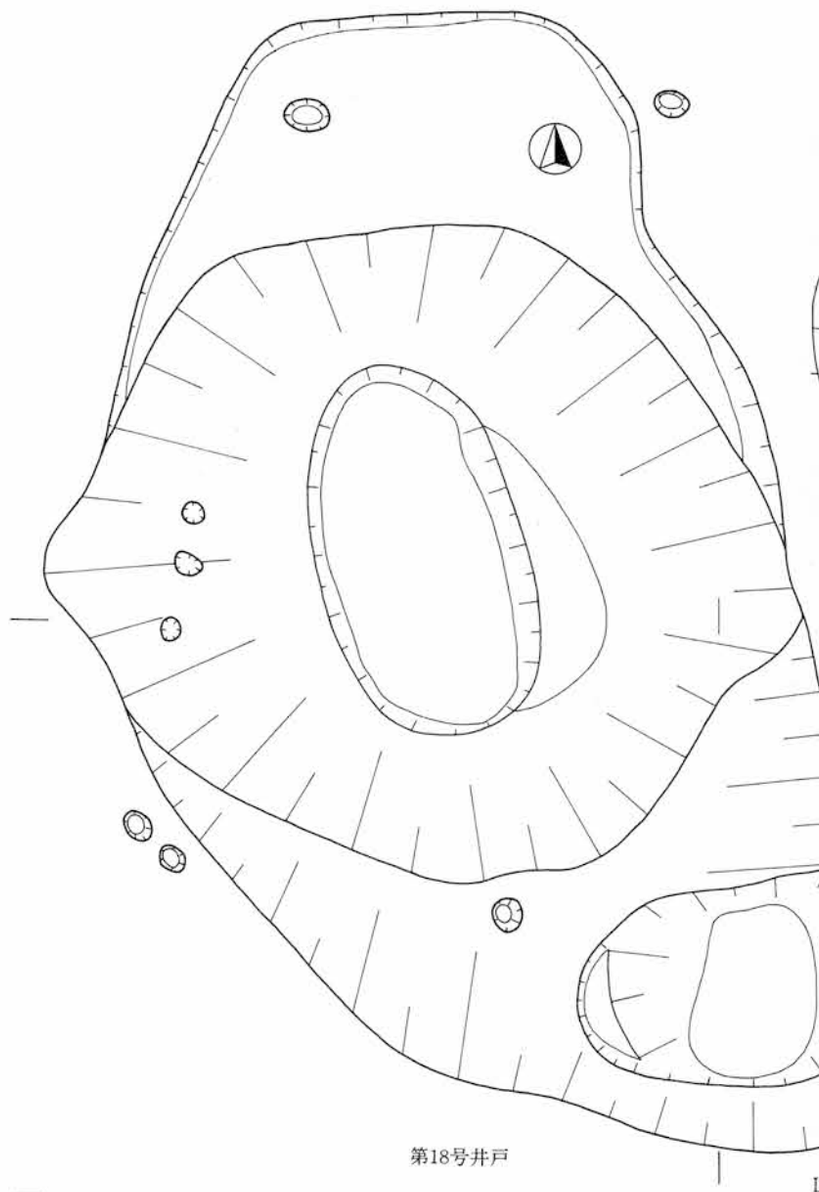
第14図　第6号井戸実測図（S＝1／40）

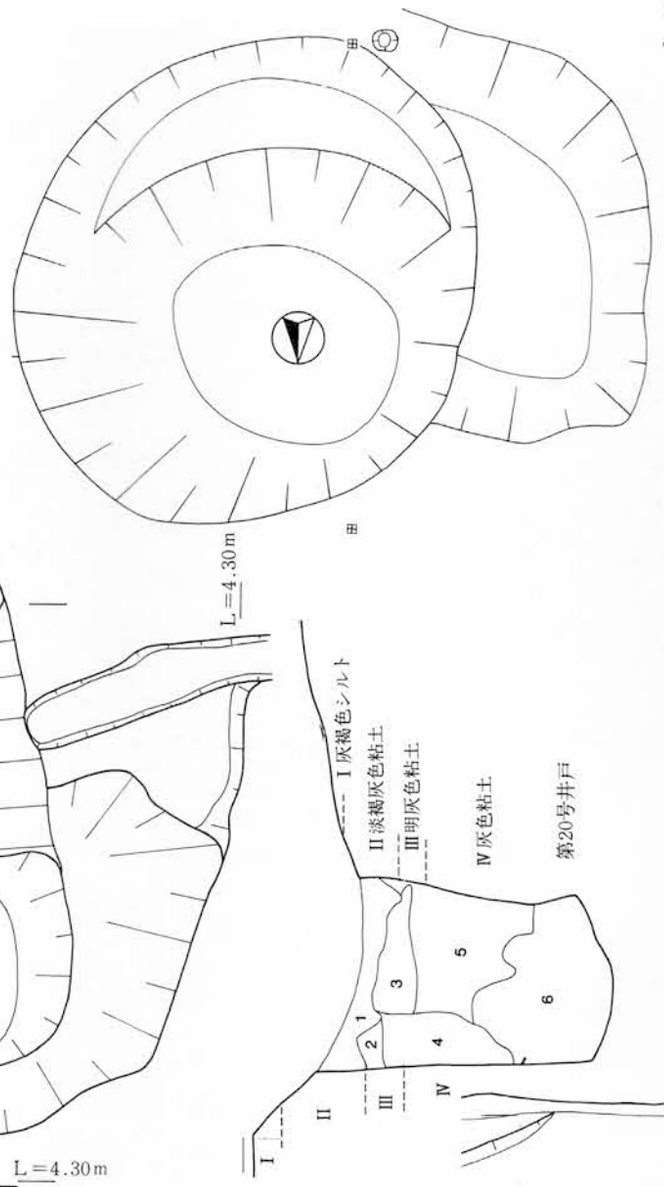


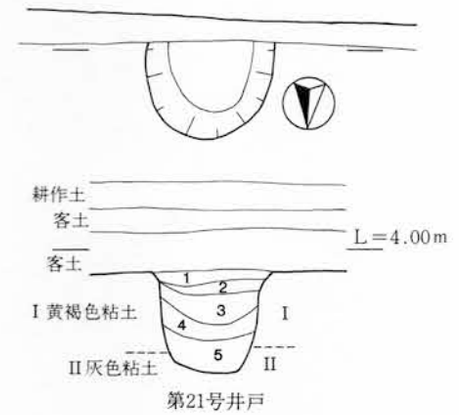
第15図　第７～12号井戸実測図（S＝1／40）

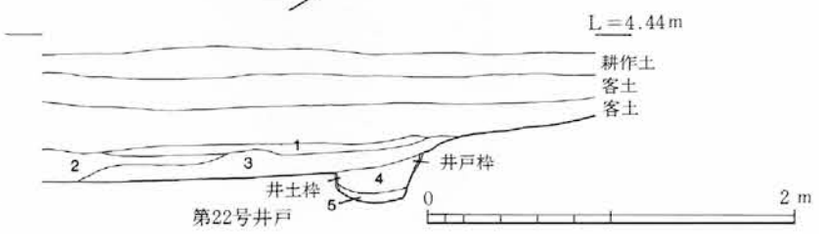


第16図　第13～17号井戸実測図（S＝1／40）









第17図　第18～22号井戸実測図（S＝1／40）

第１号井戸土層（第11図）

1．茶灰色粘質土（炭化物、淡灰色土ブロック混入）
2．明茶褐色粘質土（炭灰色土、淡褐色土ブロック混入）
3．茶灰色粘質土（炭化物、淡灰褐色土ブロック混入）
4．茶灰色粘質土（淡褐色土、淡灰色土ブロック混入）
5．茶灰色粘質土（淡灰色ブロック混入）
6．明茶灰色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
7．淡褐色砂質土（淡灰色土ブロック混入）
8．茶灰色粘質土（淡灰色土ブロック混入）
9．茶灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック多量混入）
10．茶灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック極めて多量混入）
11．灰色強粘質土
12．灰色粘質土（黄褐色粘質土、灰色土ブロック混入）
13．淡褐色強粘質土（淡灰褐色強粘質土ブロック混入）
14．灰色強粘質土

第２号井戸土層（第11図）

1．茶灰色粘質土（炭化物混入）
2．灰茶色粘質土
3．暗灰色粘質土
4．黄褐色地山ブロック
5．茶灰色粘質土（１層より明るく、２層より暗い）
6．暗灰色粘質土（炭化物混入・３層より明るい）
7．暗灰色粘質土（地山Ⅱブロック少量混入）
8．暗灰色粘質土（黄褐色地山ブロック多量混入）
9．黄褐色粘質土（炭化物少量、茶灰色粘質土ブロック多量混入）
10．暗灰色粘質土（茶灰色粘質土ブロック少量混入）
11．暗灰茶色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
12．暗灰色粘質土（地山Ⅱブロック混入、３層より暗い）
13．暗灰色粘質土（炭化物混入、12層より暗い）

第３号井戸土層（第11図）

1．暗灰色粘質土（中世包含層）
2．明灰色粘質土（炭化物、地山Ⅱブロック混入）
3．２層と同じ、２層よりやや明るい
4．灰色粘質土（炭化物、地山Ⅱ、暗茶褐色土ブロック混入）
5．灰色粘質土（炭化物、地山Ⅱブロック混入）
6．灰色粘質土（炭化物少量、地山Ⅱブロック少量混入、鉄分多量に含む）
7．暗灰色粘質土（炭化物多量、地山Ⅱブロック混入）
8．灰色粘質土（炭化物少量、地山Ⅱブロック混入）
9．灰色粘質土（炭化物、淡褐色土ブロック混入、鉄分多量に含む）
10．灰色粘質土（炭化物混入、鉄分含む）
11．淡灰色粘質土（鉄分含む）
12．暗灰色粘質土（炭化物混入）
13．暗灰色粘質土（炭化物混入、鉄分含む、12層より明るい）
14．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色土ブロック混入、鉄分含む）
15．灰色粘質土（鉄分含む）
16．11層と同じ
17．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色土ブロック少量混入、14層より暗い）
18．灰色粘質土（炭化物混入、15層より暗い）

第７号井戸土層（第15図）

1．灰色粘質土（地山Ⅰ・Ⅱのブロック混入、やや茶色味強い）
2．灰色粘質土（地山Ⅰ・Ⅱのブロック多量混入、１層より灰色味強い）
3．灰色粘質土（暗褐色粘質土ブロック混入、２層より明るい）
4．灰色粘質土（地山Ⅰ・Ⅱのブロック混入、３層より少し暗い）
5．暗灰色強粘質土

第８号井戸土層（第15図）

1．灰褐色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混入）
2．暗灰色粘砂層（炭化物、黒灰色粘質土ブロック混入）
3．暗灰色粘質土
4．２層と同じ
5．黒灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘土ブロック混入）
6．暗灰色粘砂層（黒灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入）
7．黒灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入）
8．６層と同じ（粘性強し）
9．５層と同じ（灰褐色細砂ブロック混入）
10．黒灰色粘砂層（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入）
11．暗灰茶粘砂層（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入）
12．暗灰色粘質土（炭化物混入）
13．黒灰色粘質土（炭化物混入、９層よりやや明るい）

14. 黒灰色粘質土（炭化物混入、13層より暗く、9層よりやや明るい）
15. 暗灰色粘質土（炭化物混入、黒灰色粘質土ブロック混入）
16. 暗灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック混入）
17. 黒灰色粘質土（灰色細砂ブロック混入、14層よりやや明るい）
18. 黒灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）
19. 黒灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘質土ブロック混入、腐植物多量混入）
20. 淡灰色粘質土

第9号井戸土層（第15図）

1．暗灰褐色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入）
2．灰色粘質土（地山Ⅰブロック混入）
3．暗灰褐色粘質土（地山Ⅰブロック少量混入）
4．暗灰褐色粘質土（地山Ⅰブロック少量混入、鉄分多量含む）
5．暗灰褐色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入、鉄分少量含む、3層より明るい）
6．灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入、2層より暗い）
7．灰色粘質土（地山Ⅰブロック少量混入、2層より暗い）
8．淡灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入）
9．淡灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入、8層より暗い）
10. 灰色粘質土（暗灰色粘質土、地山Ⅱブロック混入、2・6・7層より青色味をおびる）
11. 暗青灰色弱粘質土
12. 暗青灰色弱粘質土（11層より青色味が強い）
13. 暗青灰色弱粘質土（12層より暗い）
14. 暗灰色弱粘質土（やや青色味をおびる）

第10号井戸土層（第15図）

1．灰色粘質土（炭化物、褐色土・淡褐色土ブロック混入）
2．灰色粘質土（淡褐色土、灰褐色土、暗灰色粘質土ブロック少量混入）
3．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色土、灰褐色粘質土、黒灰色粘質土ブロック混入）
4．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色土、淡褐灰粘質土ブロック混入、3層よりやや明るい）
5．黒灰色粘質土（腐植物多量混入）
6．灰色粘質土
7．黒灰色粘質土（腐植物多量混入、5層よりやや明るい）
8．灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
9．灰色粘質土（暗灰色粘質土、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
10. 灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘質土ブロック混入）
11. 灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入）
12. 灰色粘質土（淡灰色粘質土、明灰色粘質土ブロック多量混入）
13. 暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック多量混入）
14. 暗灰色粘質土（炭化物、明灰色粘質土ブロック少量混入）
15. 暗灰色粘質土（灰色粘質土ブロック多量混入）
16. 暗灰色粘質土（腐植物混入、黒色味をし、土は軟かい）
17. 暗青灰色粘質土（炭化物、暗灰粘ブロック混入）
18. 暗灰色粘質土（腐植物混入、16層より明るい）
19. 暗灰色粘質土（灰色粘質土ブロック混入）
20. 暗灰色粘質土（やや青色味をおびる）

第11号井戸土層（第15図）

1．灰色粘質土（炭化物混入、やや茶色味をおびている）
2．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色シルト、淡褐色粘質土ブロック混入）
3．暗灰色粘質土（炭化物混入、淡褐色粘質土ブロック多量混入）
4．灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）
5．暗灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入、やや青色味がかっている）
6．暗灰色粘質土（暗褐色粘質土、暗褐色砂質土ブロック多量混入）
7．淡灰色砂質土（暗灰色粘質土ブロック混入）
8．6層と同じ
9．黒灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入）
10. 地山Ⅰブロック
11. 暗灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入）
12. 暗灰色粘質土
13. 暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土、淡灰色粘質土、地山Ⅰブロック多量混入）
14. 地山Ⅰブロック
15. 黒灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘砂ブロック混入）
16. 地山Ⅰブロック

17. 暗青灰色粘質土（地山Ⅲブロック混入）

第12号井戸土層（第15図）

1．灰色粘質土（炭化物混入）
2．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、やや茶色味がかっている）
3．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
4．暗灰色粘質土（炭化物、淡灰褐色粘質土ブロック混入、腐植物多量混入）
5．黒灰色粘質土（炭化物、腐植物多量混入）
6．暗灰色粘砂層（地山ｖブロック混入）

第13号井戸土層（第16図）

1．灰色粘質土（炭化物混入）
2．灰茶褐色粘質土（炭褐色粘砂混入）
3．淡灰色粘質土（淡褐色粘砂、暗灰色粘質土ブロック混入）
4．淡灰色粘質土（灰色粘質土、灰色砂、褐色砂ブロック混入）
5．暗青灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘砂、淡褐色粘砂ブロック混入）
6．灰色粘質土（淡褐色粘質土、灰色粘砂ブロック混入）
7．暗灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入）
8．暗灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘砂、黒灰色粘砂、ブロック混入）
9．暗灰色粘質土（炭化物、腐植物混入）
10. 暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、9層よりやや砂質である）
11. 黒灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入、腐植物多量混入）
12. 黒灰色粘質土（炭化物、淡灰色砂ブロック混入、腐植物多量混入）
13. 暗灰色粘砂（やや青灰色味をおびている）

第14号井戸土層（第16図）

1．暗茶灰色粘質土（地山Ⅰ・Ⅳブロック混入）
2．茶灰色粘質土（炭化物、暗灰色粘質土、茶褐色粘質土ブロック混入）
3．1層と同じ
4．暗灰茶色粘質土（炭化物、地山Ⅰ・Ⅳブロック混入）
5．暗灰色粘質土（炭化物、地山Ⅰ・Ⅳブロック混入）
6．暗灰色粘質土（灰色粘質土、地山Ⅰ・Ⅳブロック混入、5層よりやや明るい）
7．暗灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘ブロック混入、5層より暗い）
8．黒灰色粘質土（炭化物、地山Ⅰ・Ⅳブロック混入）
9．黒灰色粘質土（地山ｖブロック混入）
10. 黒灰色粘質土（淡灰褐色粘質土ブロック混入）
11. 灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック混入）
12. 暗灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）
13. 淡灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混入）

第15号井戸土層（第16図）

1．暗炭色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、茶色味がかっている）
2．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、やや黄色味がかっている）
3．暗灰色粘質土（炭化物、暗褐色粘質土ブロック少量混入、2層より暗い）
4．暗灰色粘質土（暗褐色粘質土ブロック混入、3・5層より明るい）
5．暗灰色粘質土（炭化物、暗褐色粘質土ブロック混入、3層より暗く黒灰色に近い）
6．灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）
7．暗灰色粘質土（やや青色味がかっている）
8．反灰色シルト（炭化物、暗灰色粘質土、淡褐色シルトブロック混入）
9．暗灰色粘質土（淡灰色シルト、淡褐色粘質土ブロック混入）
10. 灰色粘質土
11. 灰色シルト（褐灰色シルトブロック混入）
12. 灰色粘質土（淡灰色シルトブロック混入）
13. 灰色粘質土（暗灰色粘質土、淡灰色シルトブロック混入）
14. 灰色粘質土（淡青灰色粘質土ブロック混入）

第16号井戸土層（第16図）

1．灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、やや明るい）
2．灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入、やや青灰色味をおびる）
3．暗灰色粘質土（炭化物、灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入、やや青灰色味をおびる）
4．黒灰色粘質土（炭化物、淡灰色粘質土ブロック、腐植物混入）
5．淡灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混入、やや白

色味をおびる）
6．淡灰色粘質土
7．暗灰色粘質土（腐植物多量混入）
8．灰色粘質土（やや青色味をおびている）

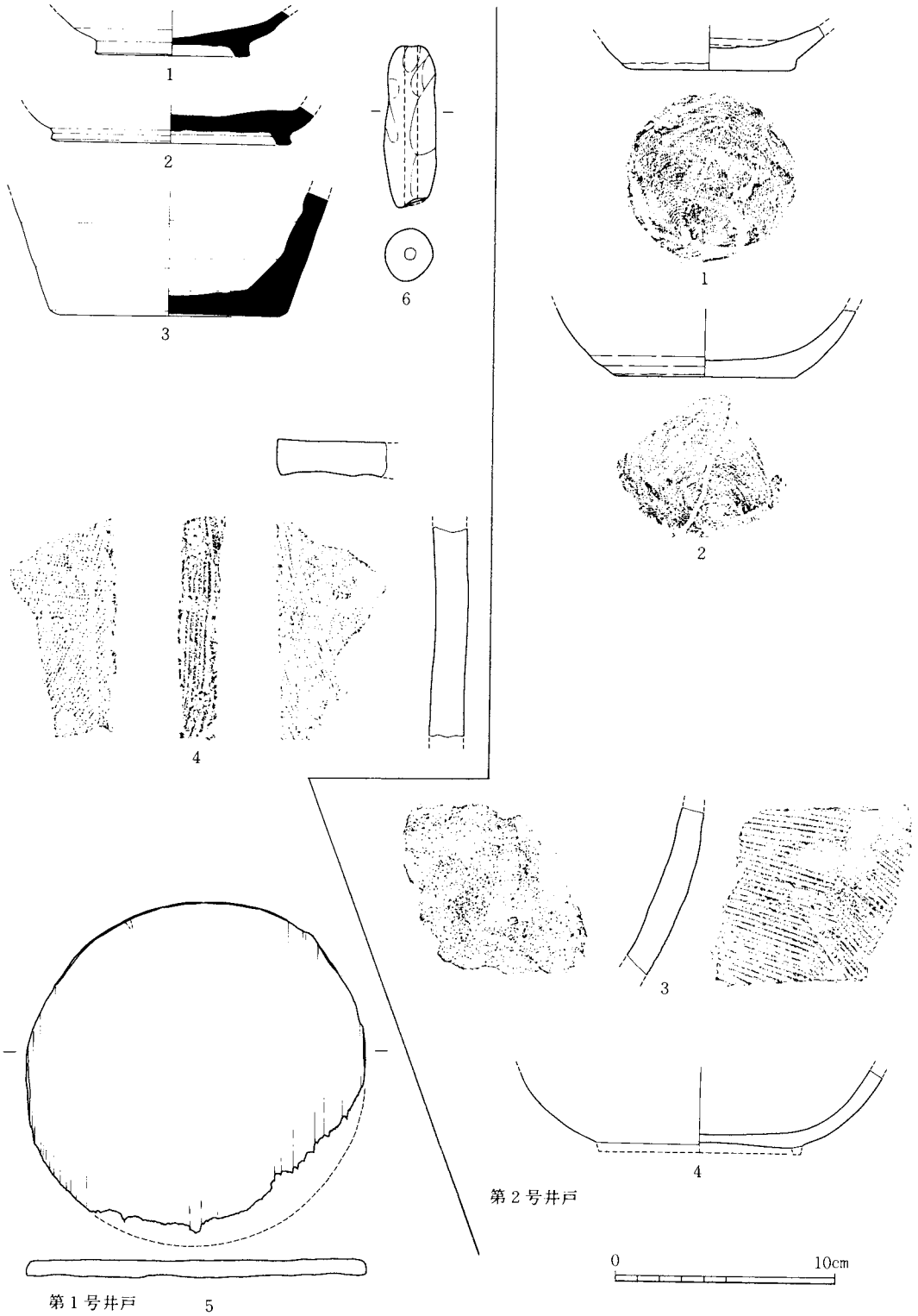
第18号井戸（第17図）
1．灰色土（黄灰色土、褐色土ブロック混入、鉄分含む）
2．灰色土（黄灰色土、褐色土ブロック混入、鉄分含む、1層よりやや暗い）
3．灰色土（炭化物、黄灰色土ブロック多量、暗灰色土、褐色土ブロック混入、鉄分含む、土層は非常に黄色い）
4．灰色土（同上）
5．灰色土（炭化物、黄灰色土ブロック少量、褐色土ブロック混入、鉄分少量含む、土層はかなり黄色い）
6．灰色粘質土（炭化物、黄灰色粘土ブロック少量、褐色土ブロック混入、鉄分少量含む、土層はかなり黄色い）
7．灰色粘質土（炭化物、黄灰色粘質土ブロック多量、暗灰色粘質土にブロック混入、鉄分少量含む、土層はかなり黄色い）
8．灰色粘質土（淡黄灰色粘土ブロック混入、鉄分含む、土層はやや黄色い）
9．灰色粘質土（淡黄灰色粘土ブロック少量混入、鉄分含む、土層はやや黄色い）
10．黄灰色砂質土
11．淡黄灰色粘土
12．暗灰色粘土（淡青灰色粘土ブロック少量混入）
13．暗灰色粘土（淡青灰色粘土ブロック混入）
14．暗灰色粘質土（淡青灰色粘土ブロックごく少量混入、12・13層より暗い）
15．暗灰色粘質土（青灰色粘土ブロック混入）
16．暗灰色粘質土（青灰色粘土ブロック多量混入）
17．青灰色シルト

第19号井戸（第17図）
1．淡褐色粘質土（炭化物、灰褐色粘質土ブロック混入）
2．灰色粘質土（炭化物、黒灰色粘質土、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
3．暗灰色粘質土（炭化物、黒灰色粘質土、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
4．灰色粘質土（炭化物混入、淡褐色粘質土ブロック少量混入）
5．淡褐色粘質土（炭化物混入、黒灰色粘質土ブロック多量、灰色粘質土ブロック多量混入）
6．淡褐色粘質土（炭化物混入、灰色粘質土多量混入）
7．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘土ブロック少量混入）
8．淡灰色粘質土（炭化物、淡灰褐色粘質土ブロック混入）
9．灰色砂層
10．黒褐色粘質土（淡灰色粘質土、黒灰色粘質土ブロック混入、腐植物多量混入）
11．暗灰色粘質土（炭化物、灰色粘質土ブロック混入）
12．暗灰色粘質土（炭色粘質土ブロック多量混入）
13．黒灰色粘質土（灰色粘質土ブロック混入、暗い）
14．暗灰色粘質土（灰色砂ブロック多量混入）

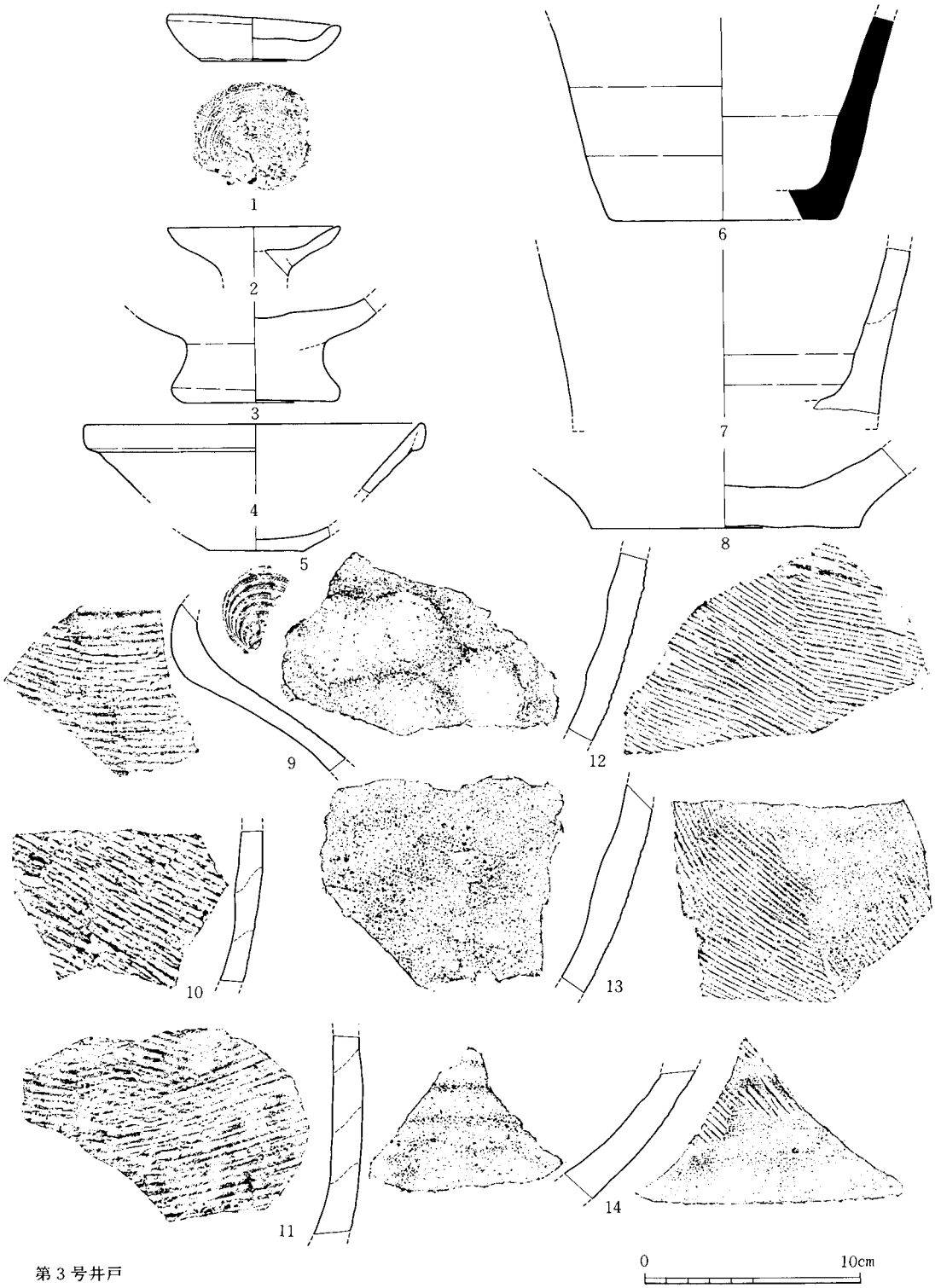
第20号井戸（第17図）
1．地山Ⅰ・Ⅱの混合土（暗灰色粘質土ブロック混入）
2．黒反色粘質土（炭化物、地山Ⅳブロック混入、4層より暗い）
3．灰色粘質土（黄灰色粘質土、灰色砂ブロック混入）
4．黒灰色粘質土（炭化物、灰色シルト、地山Ⅲ・Ⅳブロック混入）
5．暗灰色粘質土（炭化物多量、地山Ⅳブロック多量混入）
6．黒褐色粘質土（炭化物多量、腐植物多量混入）

第21号井戸（第17図）
1．地山Ⅰブロック
2．灰色粘質土（炭化物混入、地山Ⅰブロック多量混入）
3．灰色粘質土（地山Ⅰブロック多量混入）
4．暗灰色粘質土（炭化物、淡灰色シルト、地山Ⅰブロック混入、礫混入、青灰色味をおびている）
5．暗青灰色粘質土（炭化物、地山Ⅰブロック混入、礫混入）

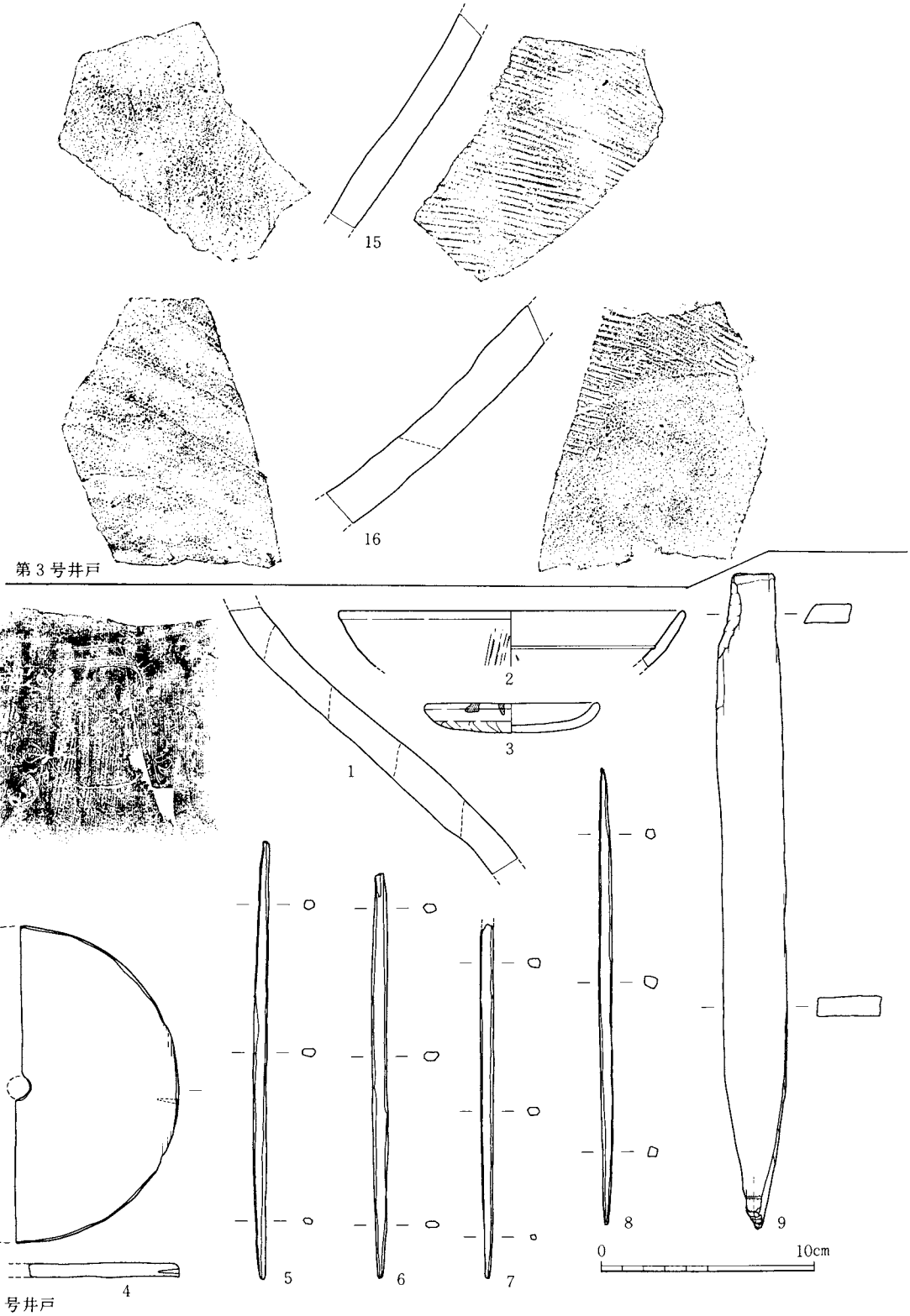
第22号井戸（第17図）
1．客土、灰褐色砂質土
2．客土、灰褐色砂質土
3．灰色粘質土（淡灰色粘土ブロック少量混入、5層より青色味をおびる）
以上は第16号溝の覆土
4．灰色粘質土（3層よりやや暗い）
5．暗灰色粘質土



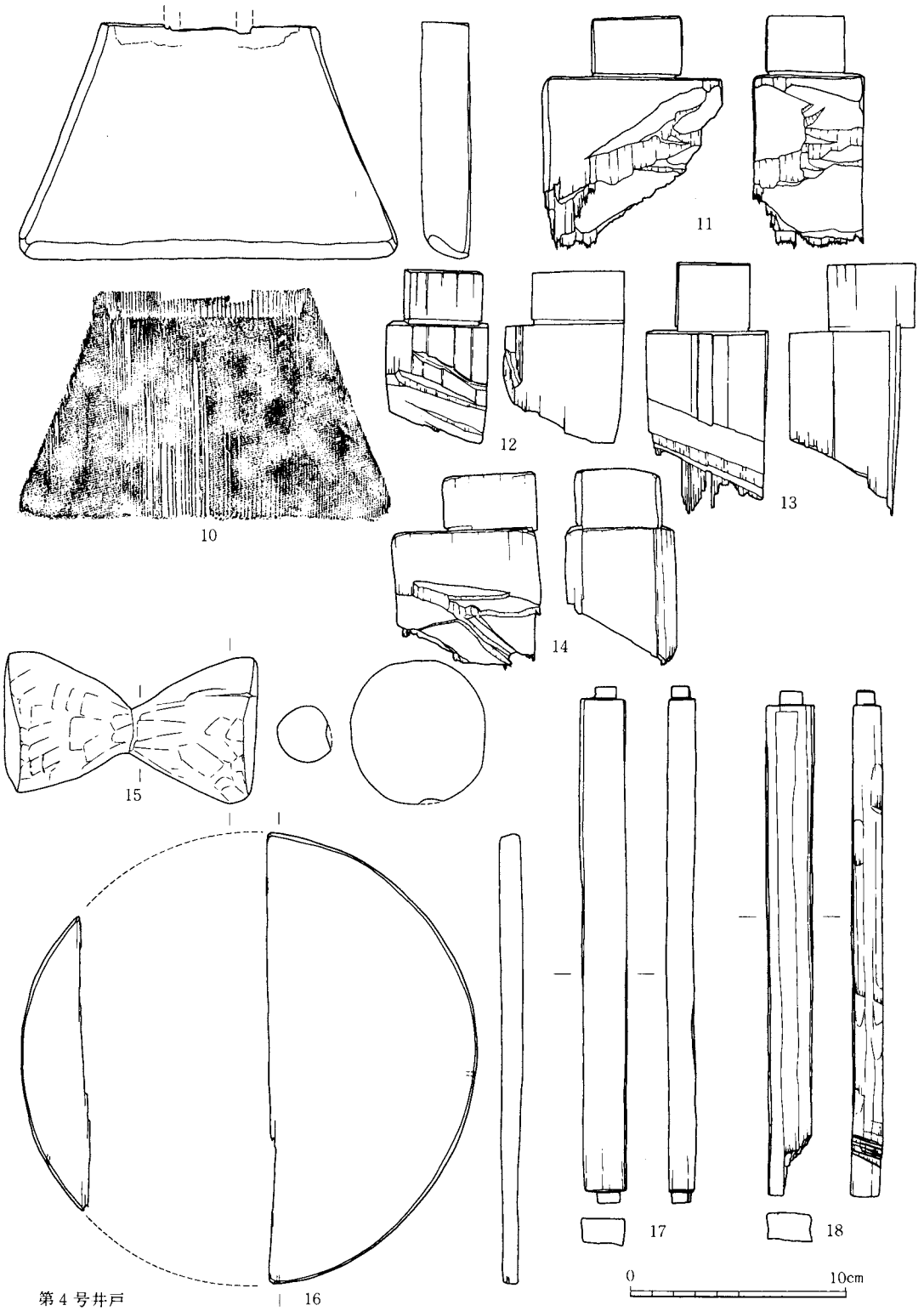
第18図　井戸出土遺物１（第１・２号井戸、S＝1／3）



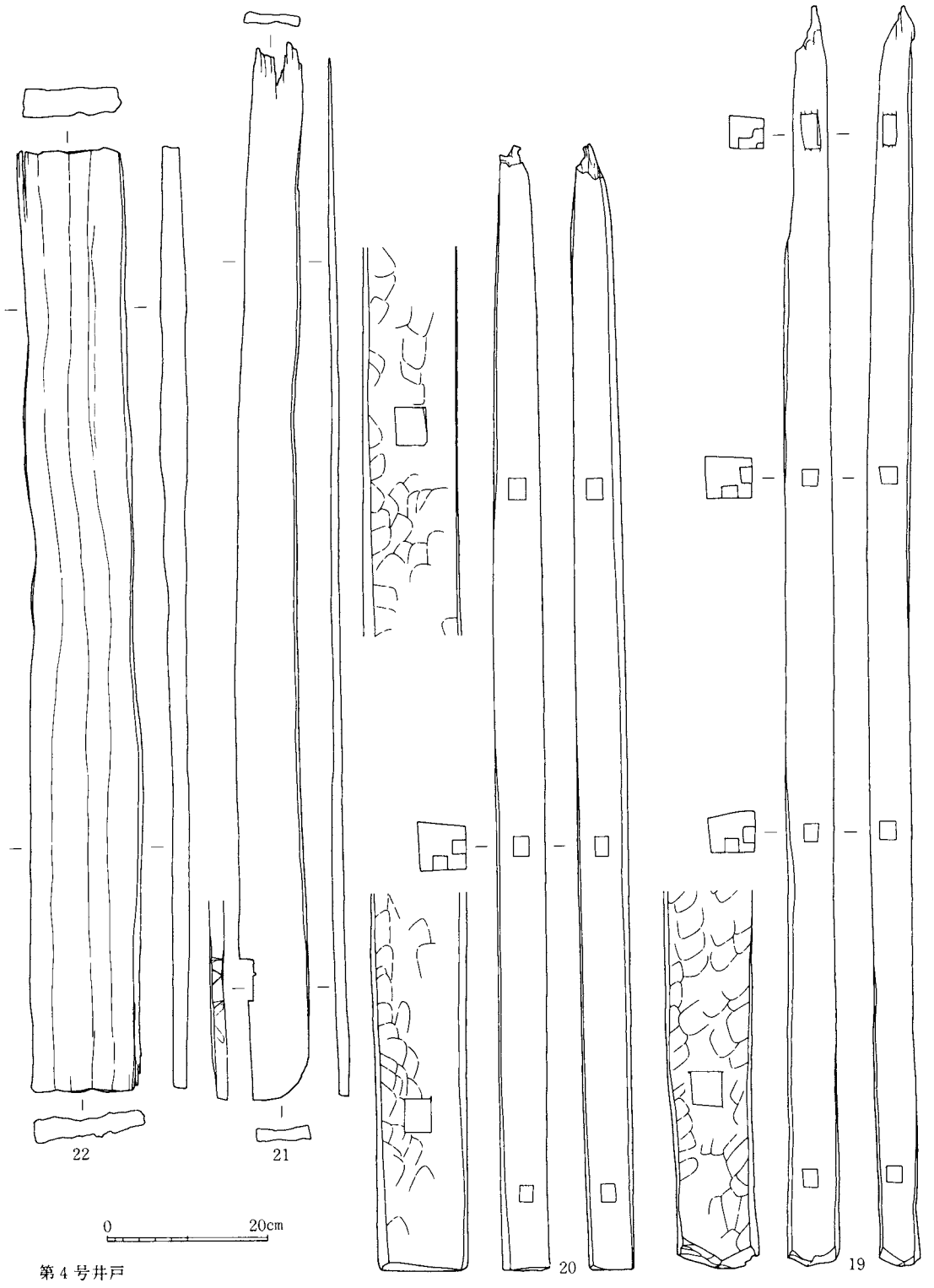
第19図　井戸出土遺物２（第３号井戸、Ｓ＝1／3）



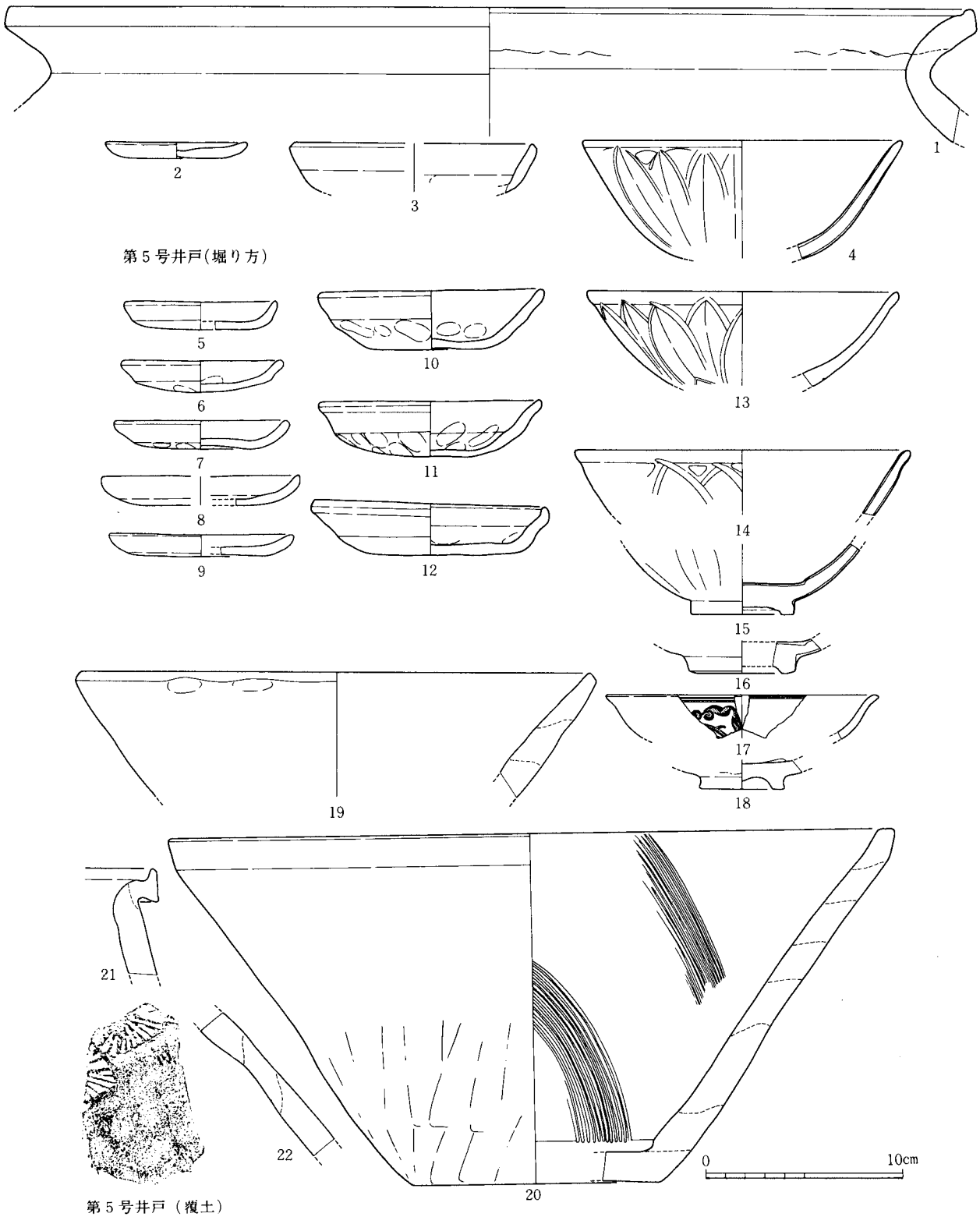
第20図　井戸出土遺物3（第3・4号井戸、S＝1／3）



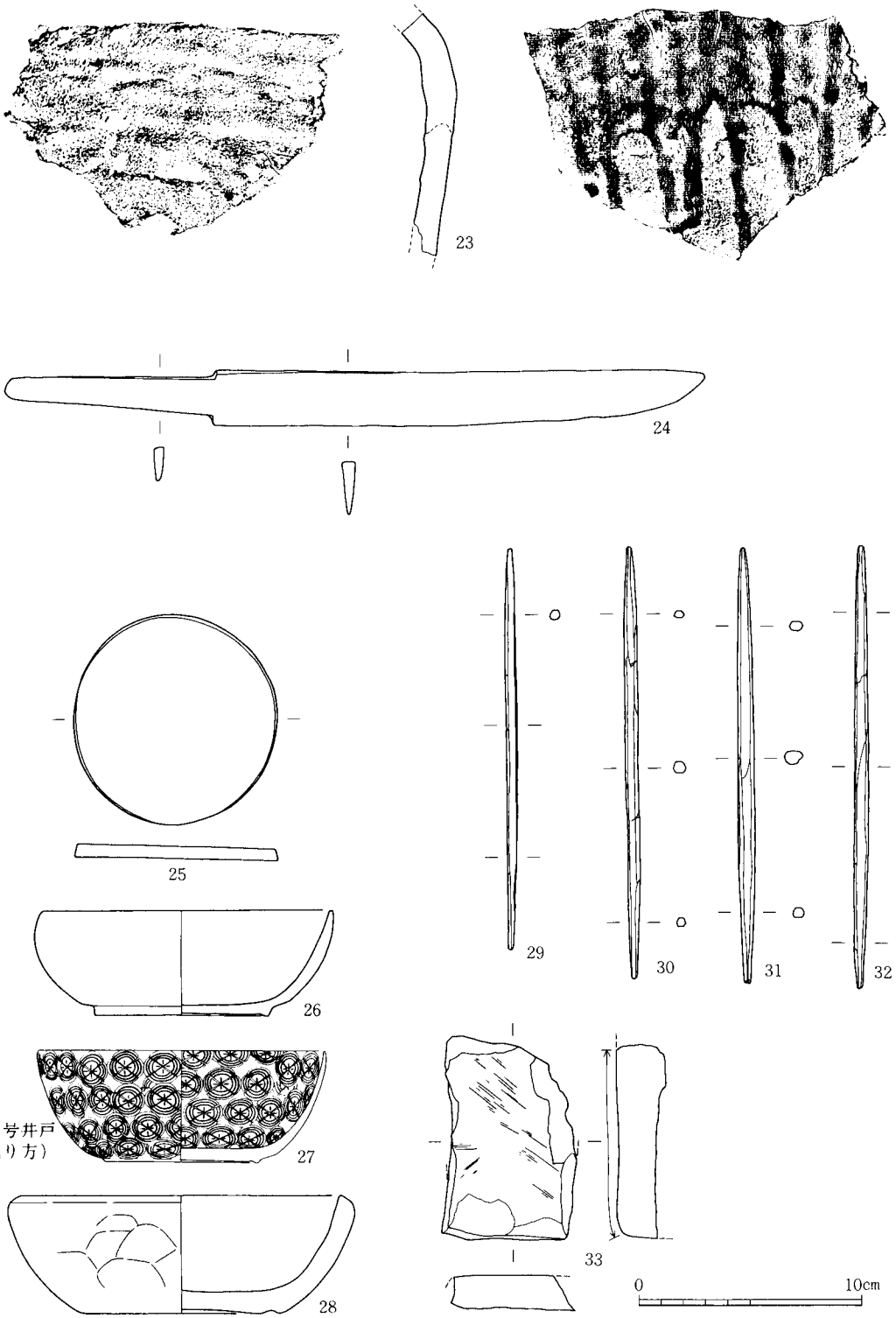
第21図　井戸出土遺物4（第4号井戸、S＝1／3・1／2）



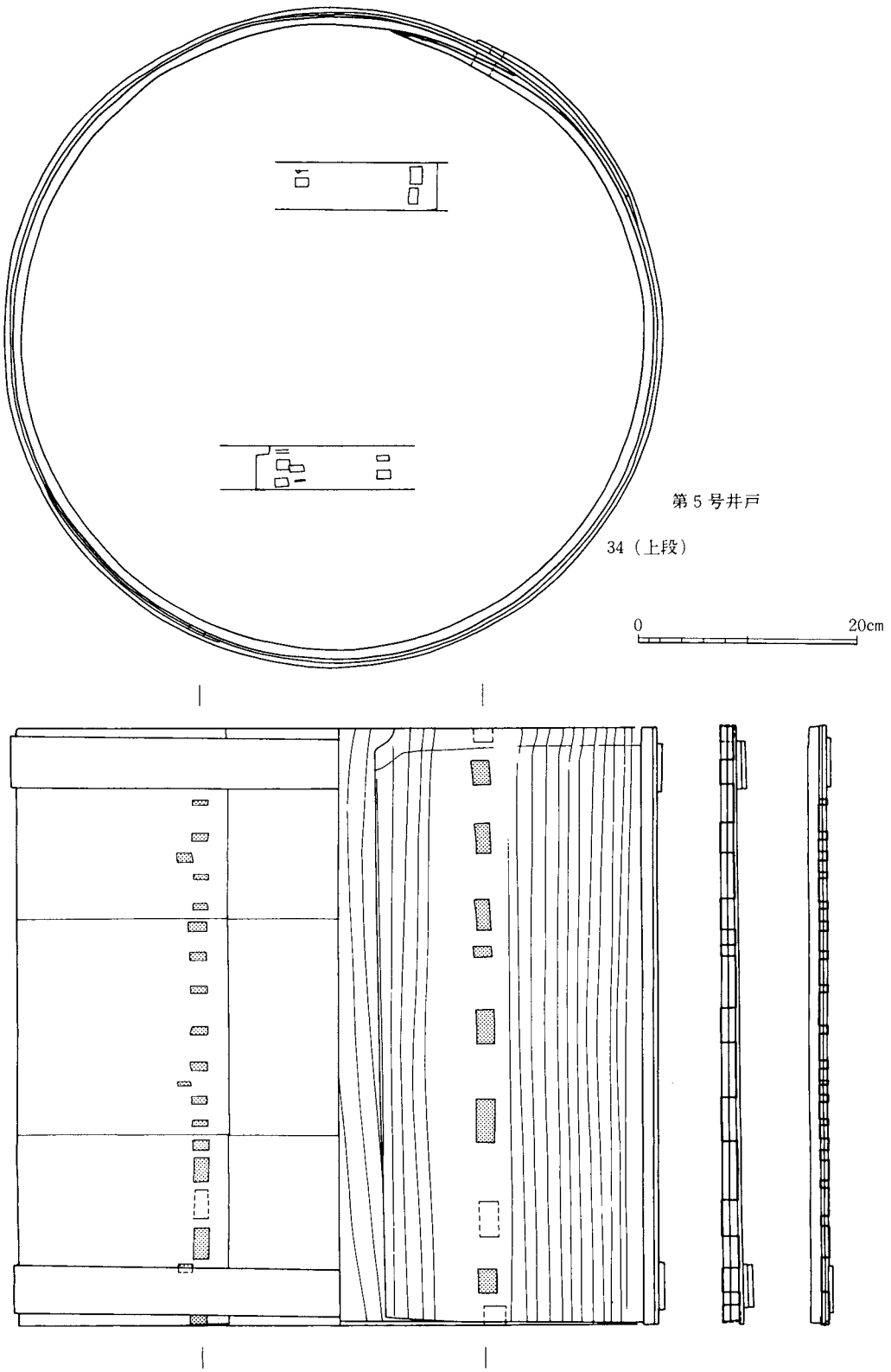
第22図　井戸出土遺物5（第4号井戸、S＝1／8・1／16）



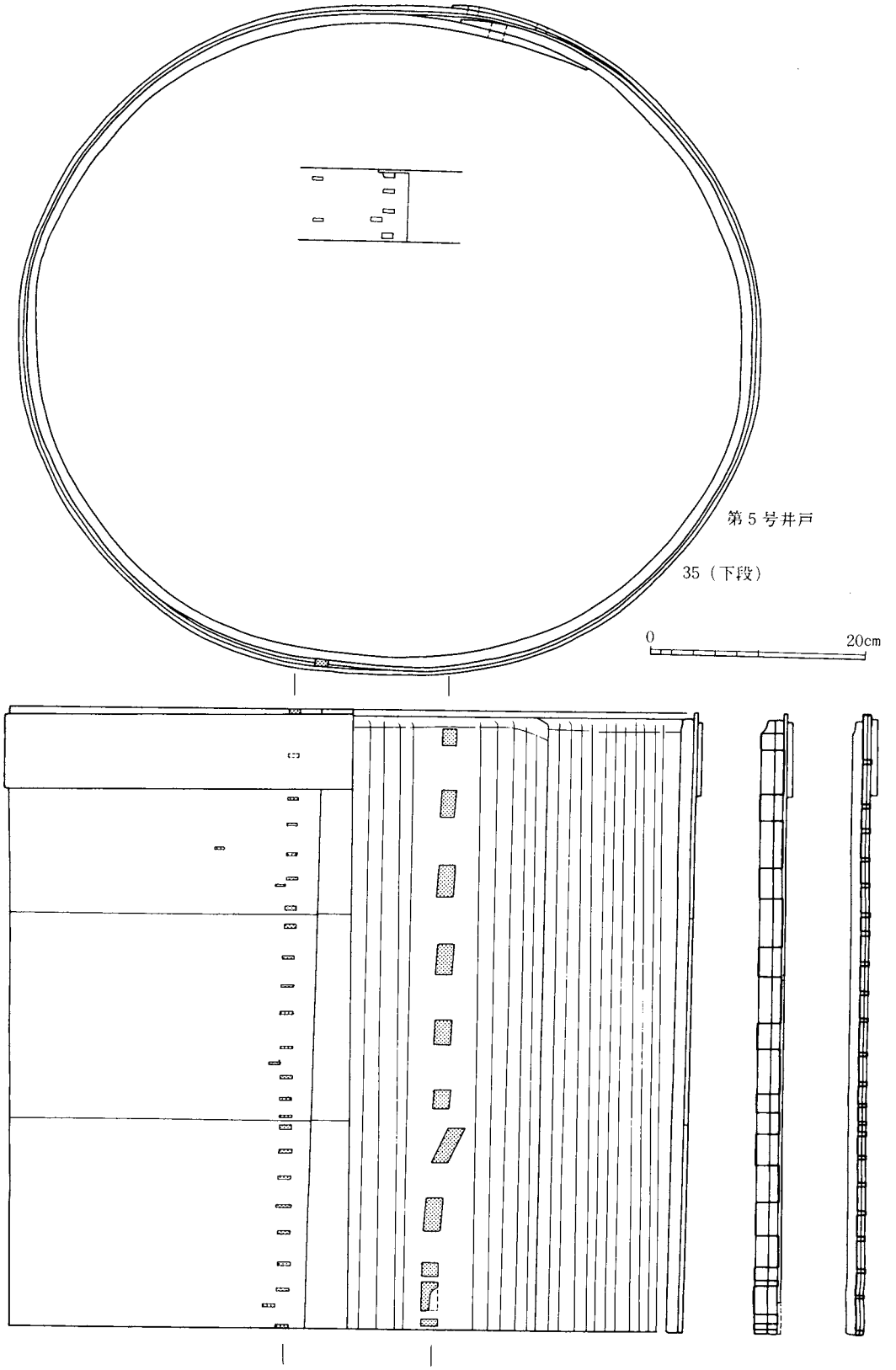
第23図　井戸出土遺物６（第５号井戸、S＝1／3）



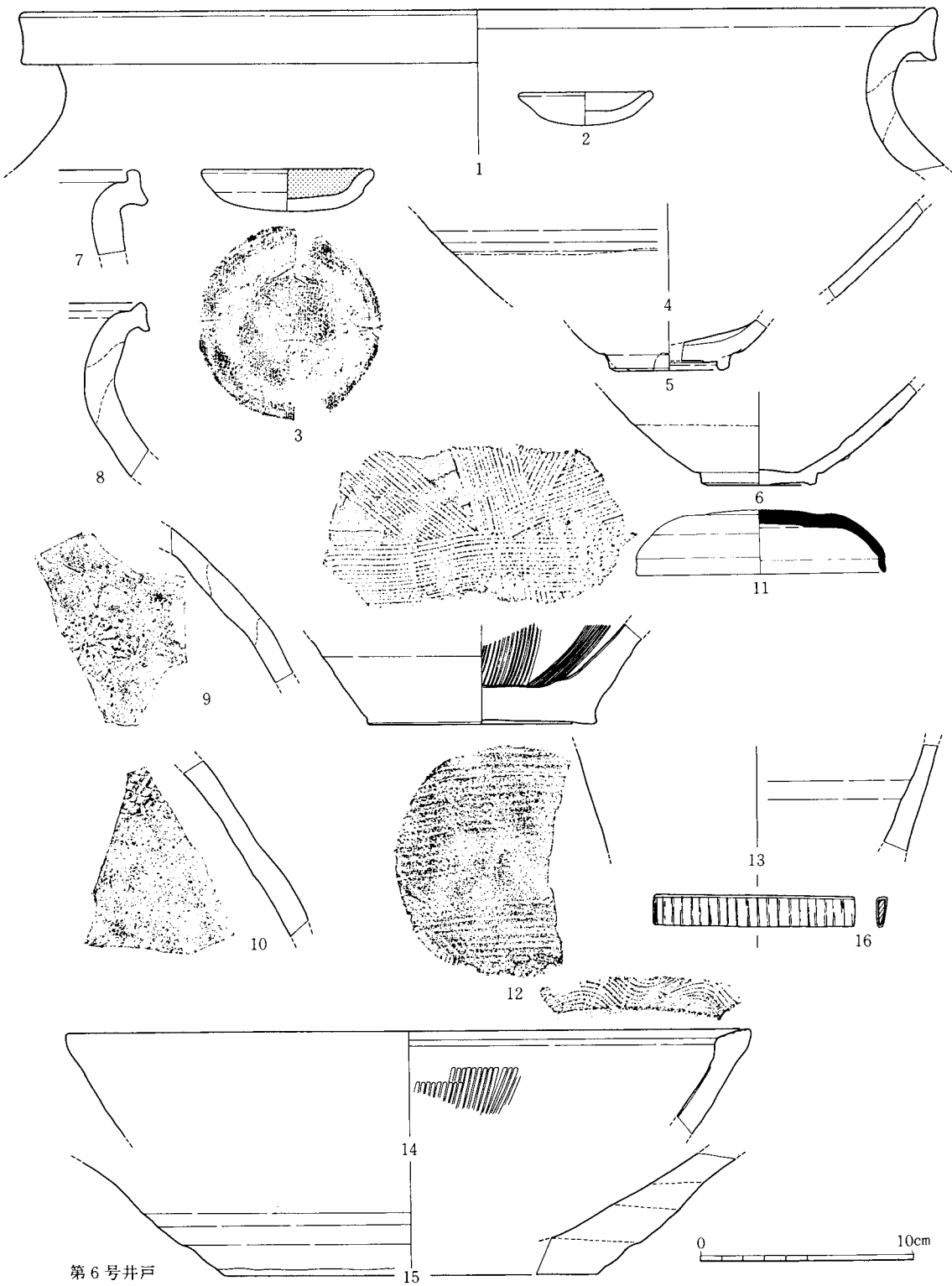
第24図　井戸出土遺物７（第５号井戸、S＝1／3）



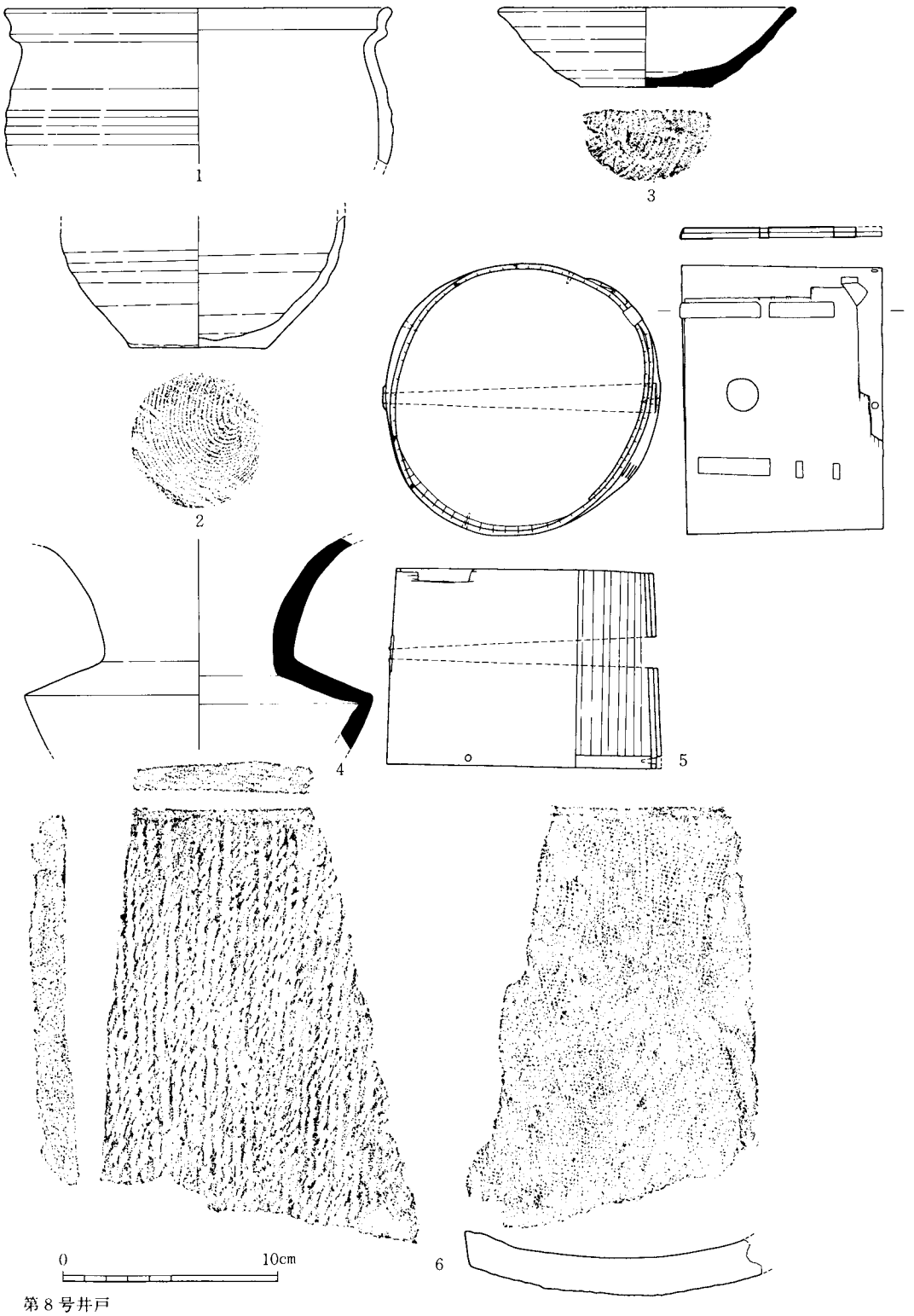
第25図　井戸出土遺物８（第５号井戸、S＝1／4）



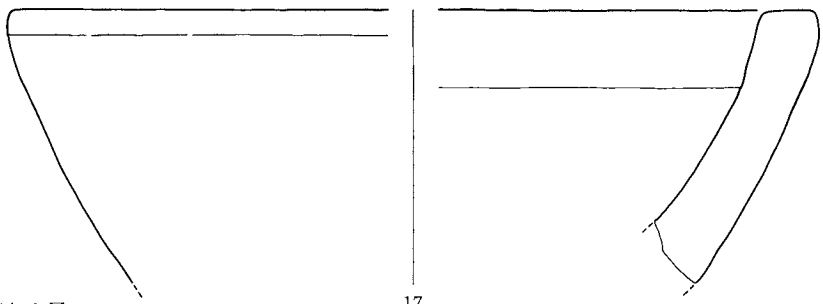
第26図　井戸出土遺物９（第５号井戸、Ｓ＝1／6）



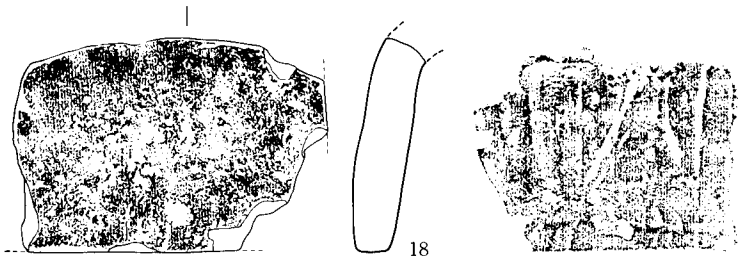
第27図　井戸出土遺物10（第６号井戸、Ｓ＝1／3）



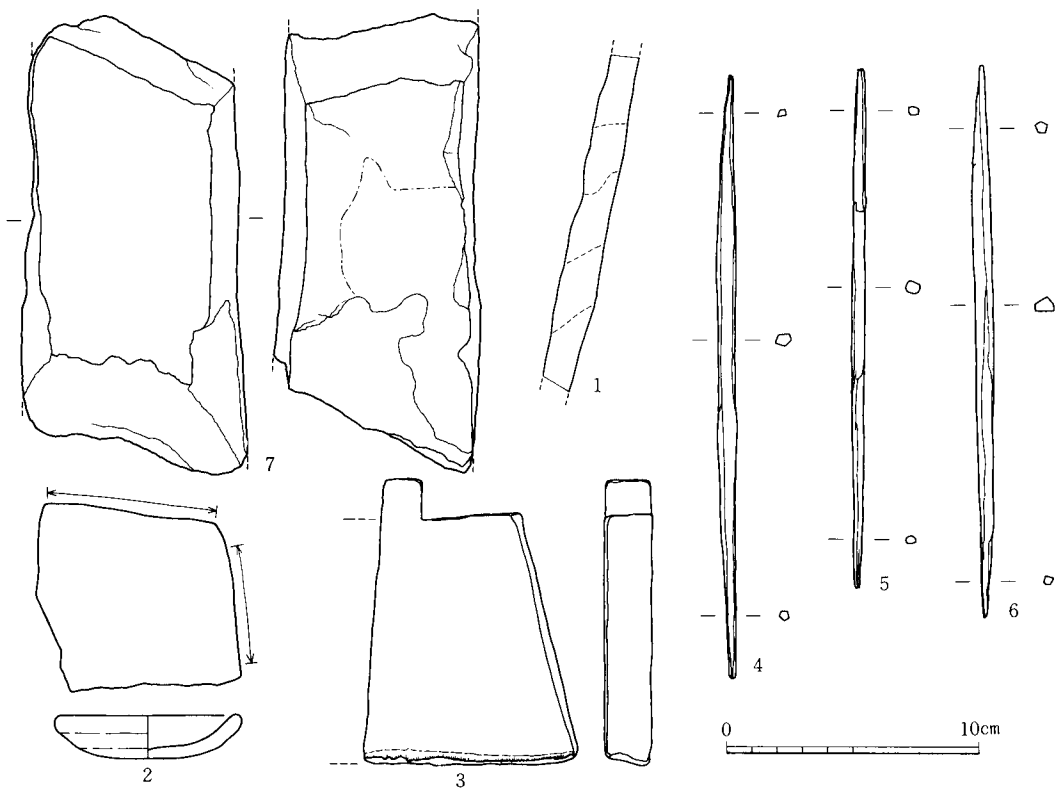
第28図　井戸出土遺物11（第８号井戸、Ｓ＝1／3）



調査区包含層

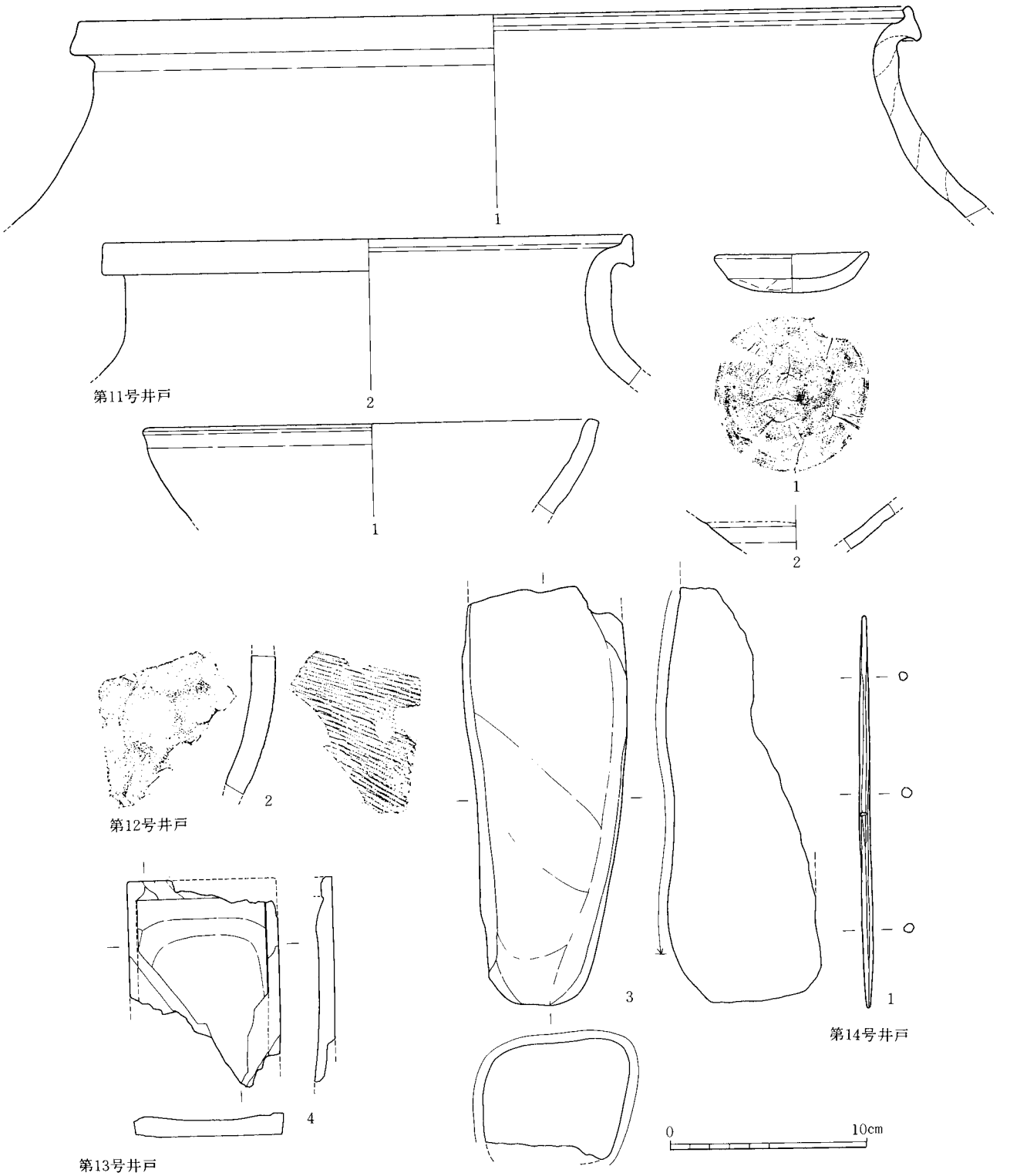


第6号井戸

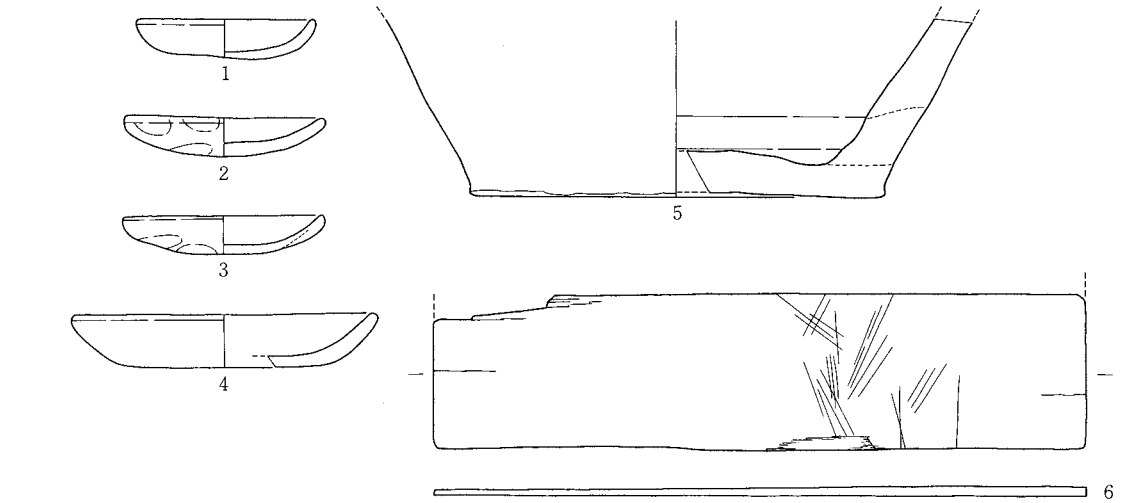


第10号井戸

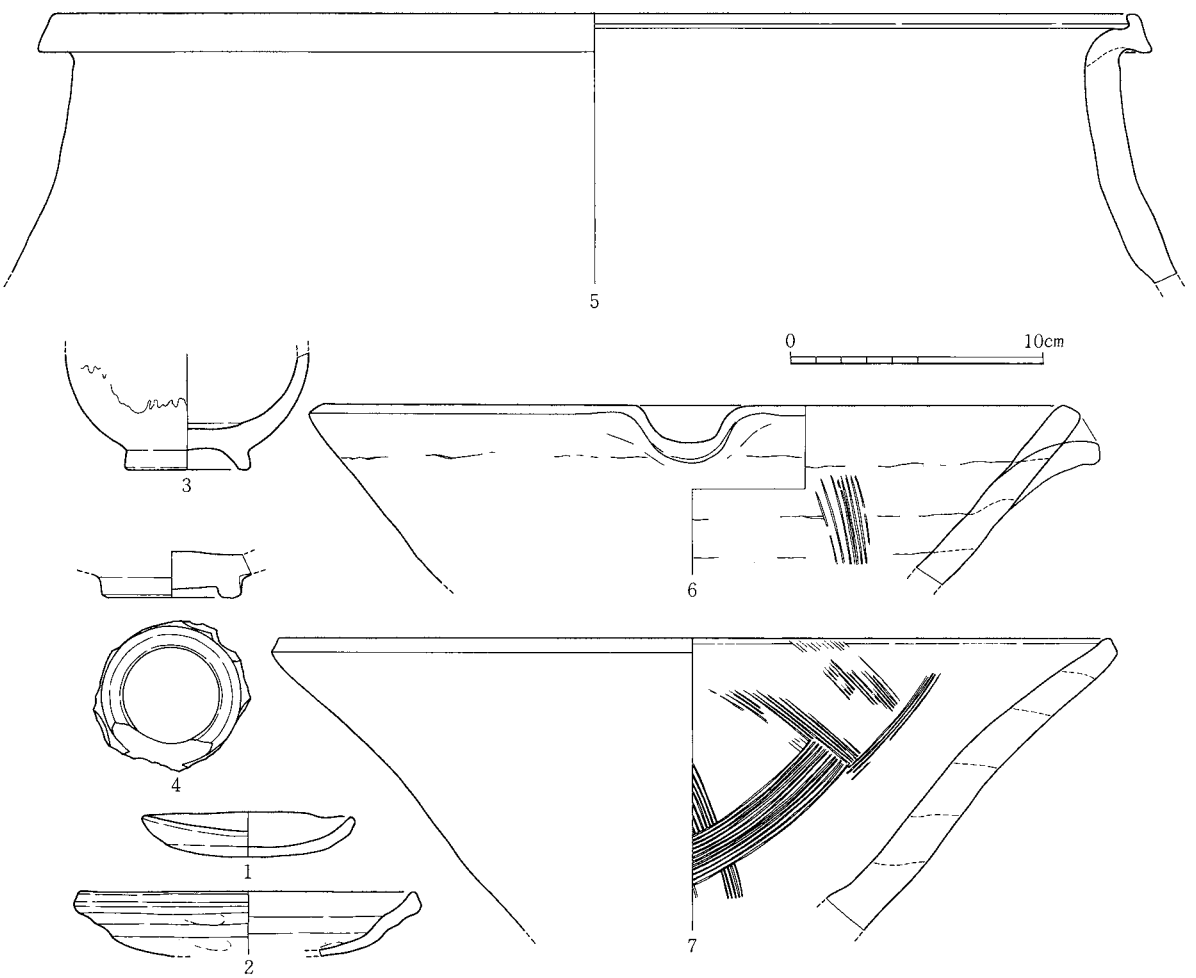
第29図　井戸出土遺物12（第6・10号井戸、包含層、S＝1／3）



第30図　井戸出土遺物13（第11～14号井戸、S＝1／3）

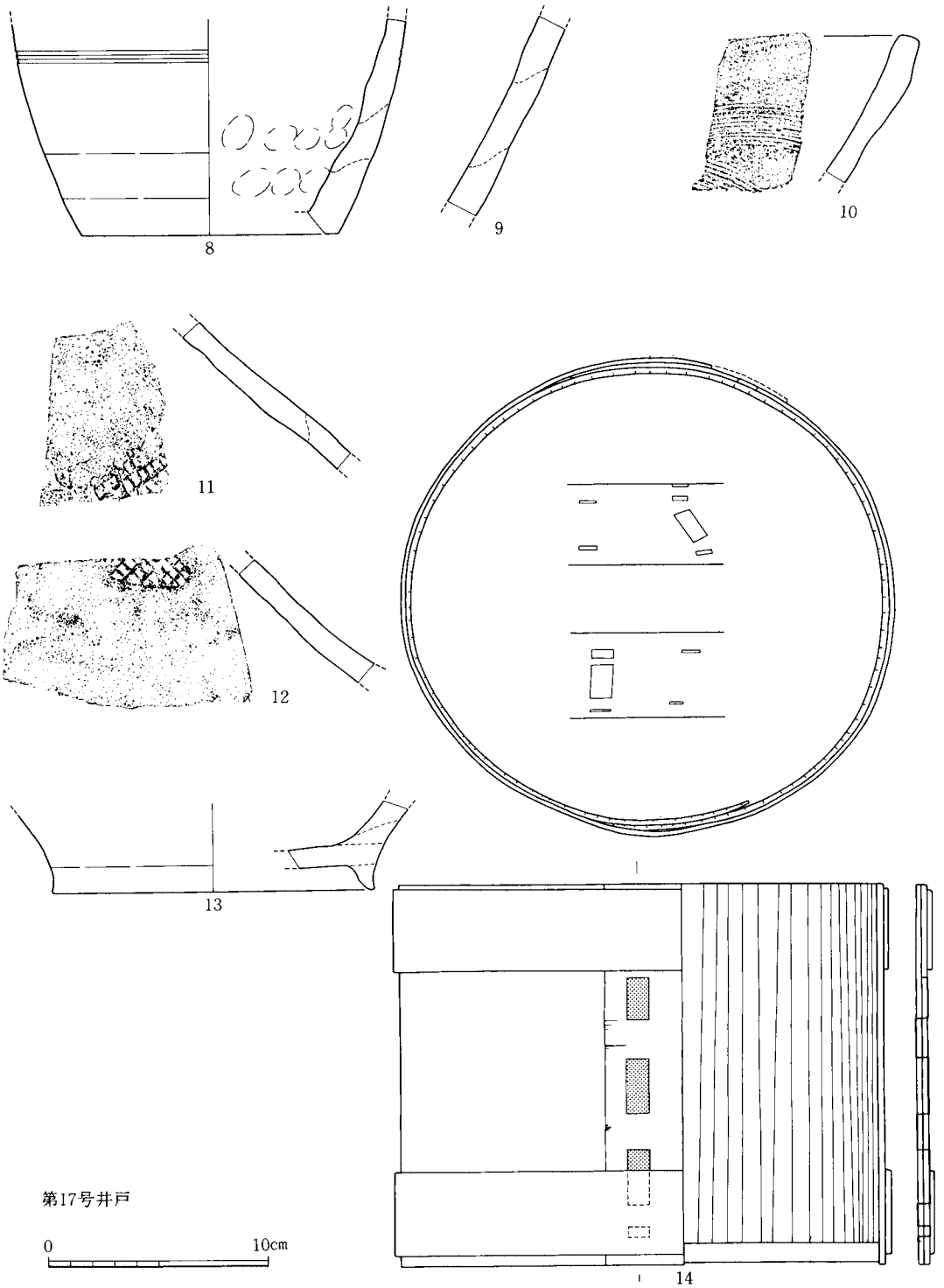


第15号井戸

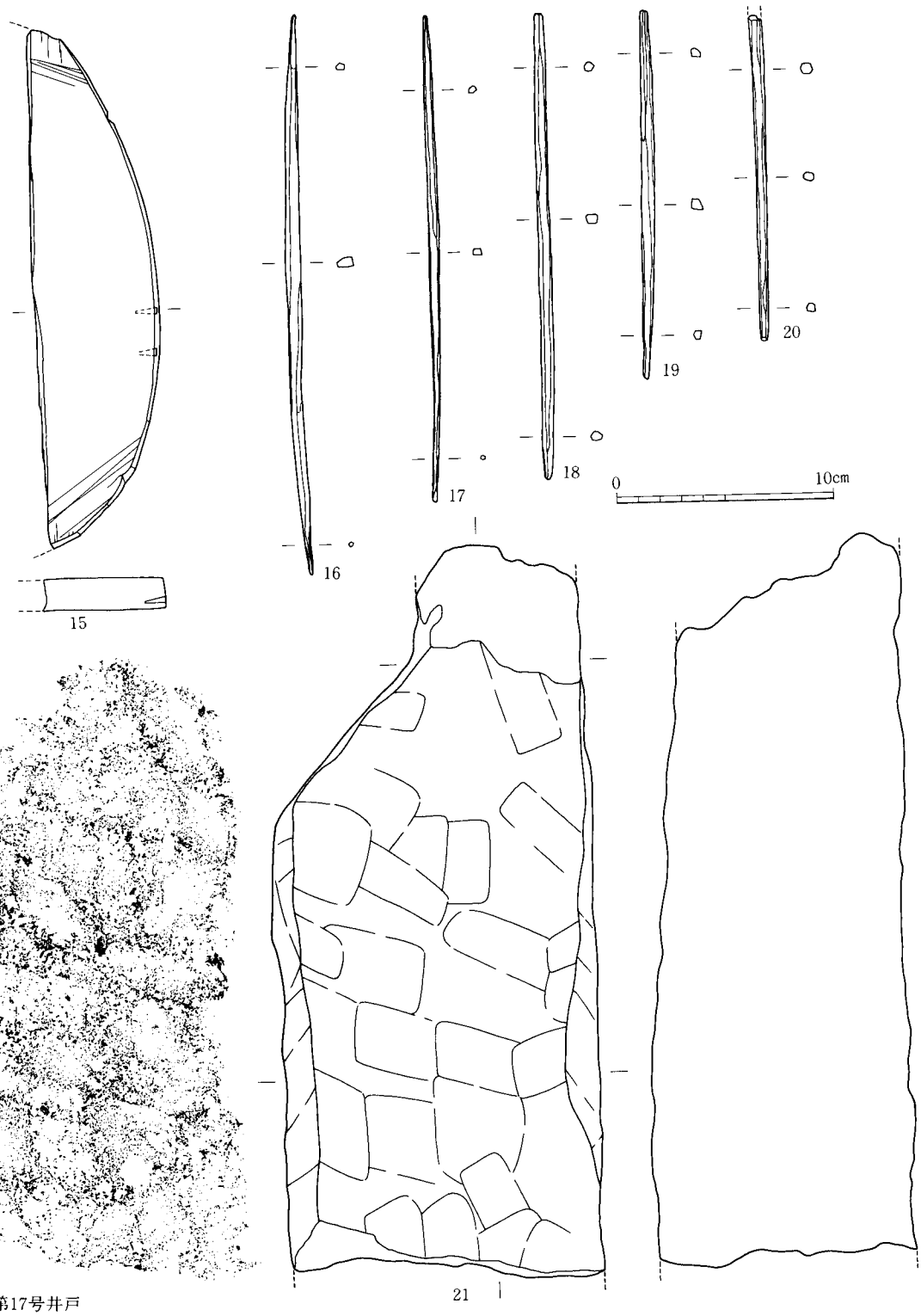


第17号井戸

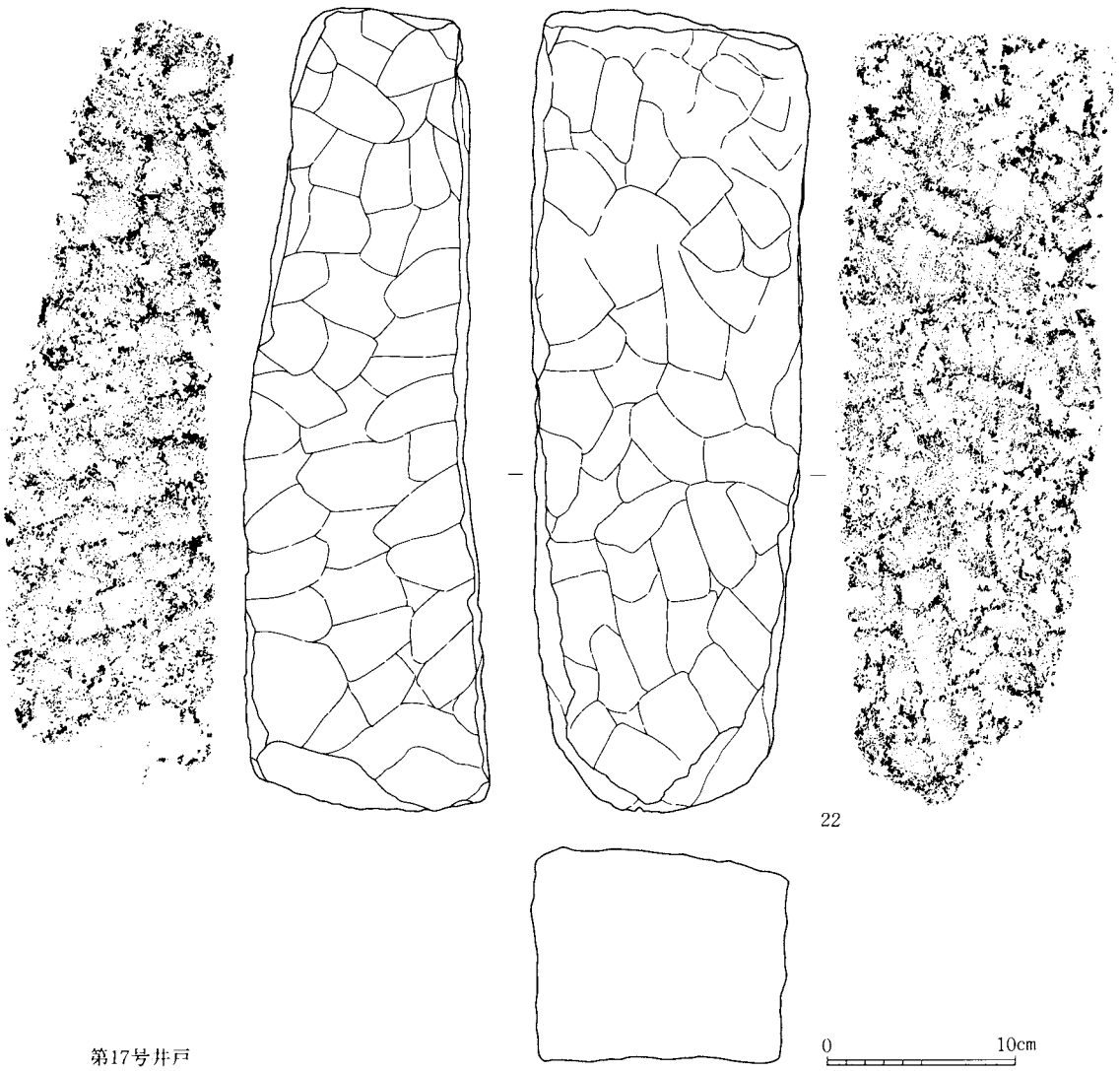
第31図　井戸出土遺物14（第15・17号井戸、S＝1／3）



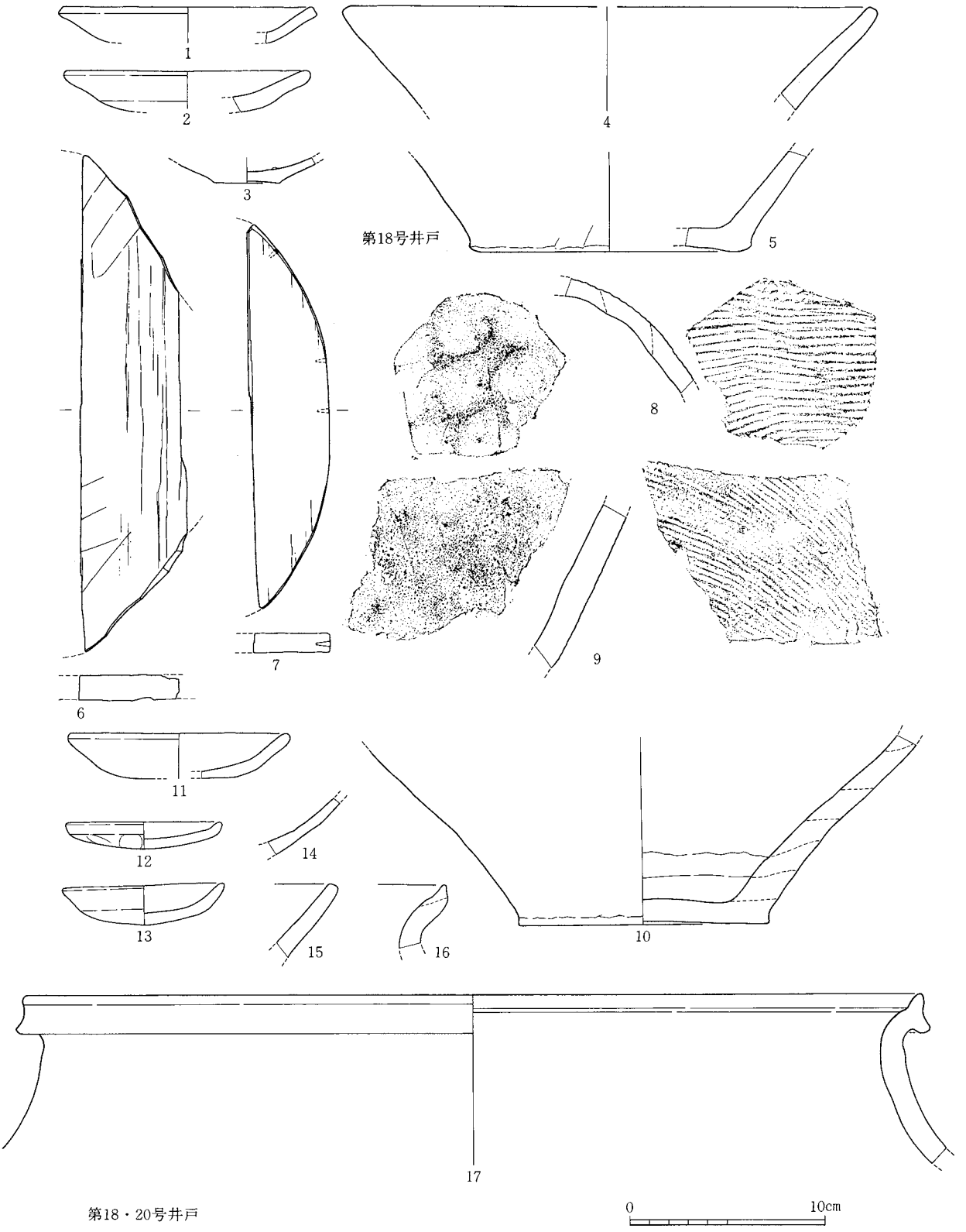
第32図　井戸出土遺物15（第17号井戸、S＝1／3）



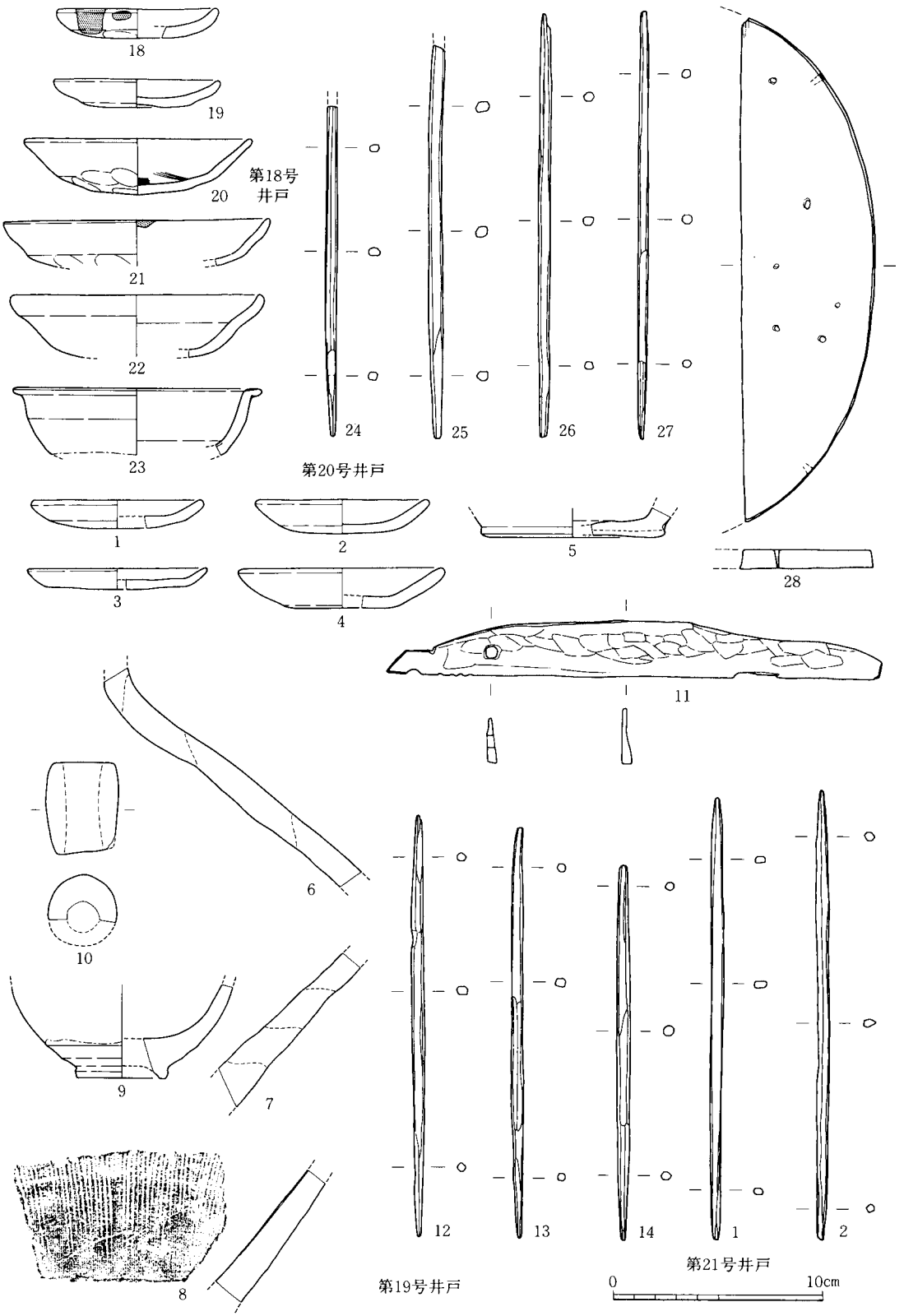
第33図　井戸出土遺物16（第17号井戸、S＝1／3）



第34図　井戸出土遺物17（第17号井戸、S＝1／4）



第35図　井戸出土遺物18（第18・20号井戸、S＝1／3）



第36図　井戸出土遺物19（第18～21号井戸、S＝1／3）

第4節　竪穴状遺構

概　要

第1次調査で検出された竪穴状遺構は6基であったが、竪穴3が井戸跡である可能性が高いため、その数は5基となる。そのため竪穴3の遺構番号は欠番となる。記述するにあたり、名称が長いので竪穴として行きたい。以下第1号竪穴から順に報告する。

第1号竪穴（第37図、第40図・第41図16～21）

位置と切り合い　E－6区北西側に位置する。

形状と法量　上面の平面形は隅丸長方形（604cm×480cm）で、深さ約45cmを測る。底部は淡灰色粘土層に達している。南壁と北壁の西側約2.2m部分の壁面は北西側へ平行して曲っている。壁面には小ピットが存在する。これで板材を固定し、壁面の土留めをしていたものと推定される。この土留め用の板材は、北壁と南壁に部分的にしか残っていなかった。床面はほぼ平坦で、淡灰色粘土層上に均等ではないが、褐色砂礫層（豆砂利層）が敷かれていた（一点破線内）。床面中央北側に径39cm、深さ31cmの柱穴があり、底部には偏平な礫が一つ入れてあった。これは主柱の沈下を防ぐためのものと推定される。

覆土と出土遺物　土層堆積図は南北方向のものを示した。これを見ると18～20層が壁面の裏込め土にあたる。床面の褐色砂礫層（豆砂利層）上には、約1～5cmの厚さの粘質土やシルト層が水平堆積していた。この堆積状況からして、使用を止めた段階以降内部に水が堪水し、その際に自然堆積した土層と推定される。その後1～3層の土で埋め戻していることが分る。土師質土器には（1～8）のものがある。口縁部がくびれて立ち上る（1～5）。内湾ぎみに立ち上る（6・7）、底部に糸切り痕を持つ（8）に分けられる。いずれも口縁部はヨコナデ調整している。内外面にススまたは墨の付着しているものも認められる。これなどは灯明皿として使用されたのであろうか。（1）は口径12.7cm、器高2.7cm。（2）は口径12.2cm。（3）は11.6cmと2.2cm。（4）は10.9cmと2.4cm。（5）は9.8cmと2.1cm。（6）は8.2cmと1.5cm。（7）は6.8cmと1.9cm。（8）は口径10.4cm、底径4cm、器高2.2cm。色調は白色系が（1・2・7）、灰色系が（3～6）、（8）は橙色系である。（9）は瀬戸焼灰釉の鉢で、口径26.2cmを測る。胎土は淡黄色で、色調は明緑灰色を呈する。釉は二次的加熱で剥離している。（10）の甕と（12）の擂鉢は珠洲焼で、外面のタタキは8条1単位となる。色調は灰色を呈する。（11）は中世陶の口縁部で、内外面をヨコナデ調整している。色調は灰色を呈する。（13）は越前焼底部である。底径16.2cmを測る。底部に砂目が残る。色調は赤褐色。（15）は砥石で南西側の床面上に置かれていた。両面と側面に磨面が残る。長さ25.9cm、幅11.7cm、重量2,740gを測る。目の細かい硬質の石材を使用している。（14）も砥石である。（16）は加賀焼甕の肩部である。格子文と斜格子文の刻印が残る。色調は灰色。（17）は漆器皿で、器肉は約2～3mmと薄い。底部には高台が存在していたものと推定される。全面に黒漆をかけ、内外面に朱漆で筆書きによる亀甲文が描かれている。（18）も漆器皿である。口径9.9cm、器高1.7cm、底径7cmを測る。これもやはり薄手の作りで、全面に黒漆をかけ、見込み部分に朱漆で草花の文様を描く。（19）は木錘である。断面三角形を呈

し、長さは13.5cmを測る。上部に一辺1.7cmの通し穴を持つ。これも南東側床面にあった。箸には（20・21）がある。造作は他のものと類似するが、（20）の片方は先を細く尖らず、全体にやや曲っている。長さは（20）が20cm、（21）が18.9cmを測る。

第2号竪穴（第38図、第41図1～10）

位置と切り合い　C－7区の調査区南西側から南壁にかけて存在する。

形状と法量　東西の横幅は最大で約780cm、深さ約30cmを測り、長方形の形態を基本としている。調査区南壁側へ行くにしたがって二手に分れて張り出す形で伸びている。内部にはピットや石組も存在するが性格は不明である。東側の径65cm×70cmのピット底部に青磁碗と焼けて黒変した楕円形の礫が入れてあった。

覆土と出土遺物　覆土は1～19層まで確認している。自然堆積した土層と言えるが、1層は上面から掘り込まれたピット覆土と推定される。出土遺物は（1～10）で、（1）は青磁碗である。口径13.3cm、高台径5.6cm、器高6.95cmを測る。色調は淡緑色を呈す。釉は均一に施されず、釉だまりが多くて細かい貫入が入る。内圏内に印花が施文されているが、釉の掻き取りにより不明瞭となっている。（2）は青白磁の梅瓶底部である。底径10cmを測り、外面にはヘラ状具と櫛状具で施文されている。胎土は白色で、釉は青色味を帯びた白色で、気泡を少し含むが透明感はある。貫入は認められない。内面総釉で底部に目痕あり。（3）は珠洲焼擂鉢で口径33.2cmを測る。口縁端部に波状文があり、おろし目は10条1単位。色調は灰色。（4）は越前焼擂鉢。（5）は土師質皿で口径12.5cmを測る。強いヨコナデ調整でくびれてから外反する。色調は橙色系。（6）は緑釉皿で色調は淡緑色を呈する。高台径6cmを測る。内面はヘラミガキし、高台部外面はヘラ削り、部分的に釉が残る。中国製青磁碗を模倣したものかと推測される。（7～9）は加賀焼擂鉢と甕。（10）は砥石片。目の細かい硬質の石材が使用されている。

第4号竪穴（第39図、第42図1～8）

位置と切り合い　調査区南壁際のF・G－7区にまたがって存在している。

形状と法量　東西幅で426cm、南北幅で262cm、深さ約20cmを測る。北壁側は内側へ大きく入り込み、床面にはピットが13個ある。そのうち床西東側長方形のものは、この遺構埋没後に上から掘り込まれたもので伴なわない.

覆土と出土遺物　覆土は1・2層以外であり、自然堆積したものと推測される。東側床面に12層の褐色砂層が見られるが、この砂層は遺構東側の地山面上から遺溝内にかけて広がっている。洪水等の出水により堆積したものと指定される。8層はピットを埋め戻すためにかぶせた土層であろう。出土遺物には（1～8）がある。土師質皿の（1・2）は口縁部をヨコナデ調整している。（1）は口径10.4cmを測る。色調は灰色系。（2）は口径11.8cm、器高2.7cmを測る。色調は白色系を呈する。（3・6）が加賀焼の甕である。（3）は口縁部がN字状を呈している。色調は（3）がオリーブ褐色、（6）が褐色を呈する。（4・5）が越前焼の甕底部。（7）は瀬戸焼灰釉の瓶子で、肩部に数条の沈線を施している。内面は指頭圧痕を持っている。釉は全体にかからずムラがあり、二次的加熱で吹いている。色調はオリーブ灰色を呈す。（8）は白磁碗で口径14.2cmを測る。胎土は灰白色を呈し、釉は均一に施されて貫入は無い。色調はオリーブ灰色を呈

する。

第5号竪穴（第39図、第42図1～8）

位置と切り合い　E－7区中央部に位置する。

形状と法量　上面の形態は隅丸長方形。長辺が407cm、短辺377cm、深さ55cmを測る。壁面の東側から南東側に平坦面を持っている。

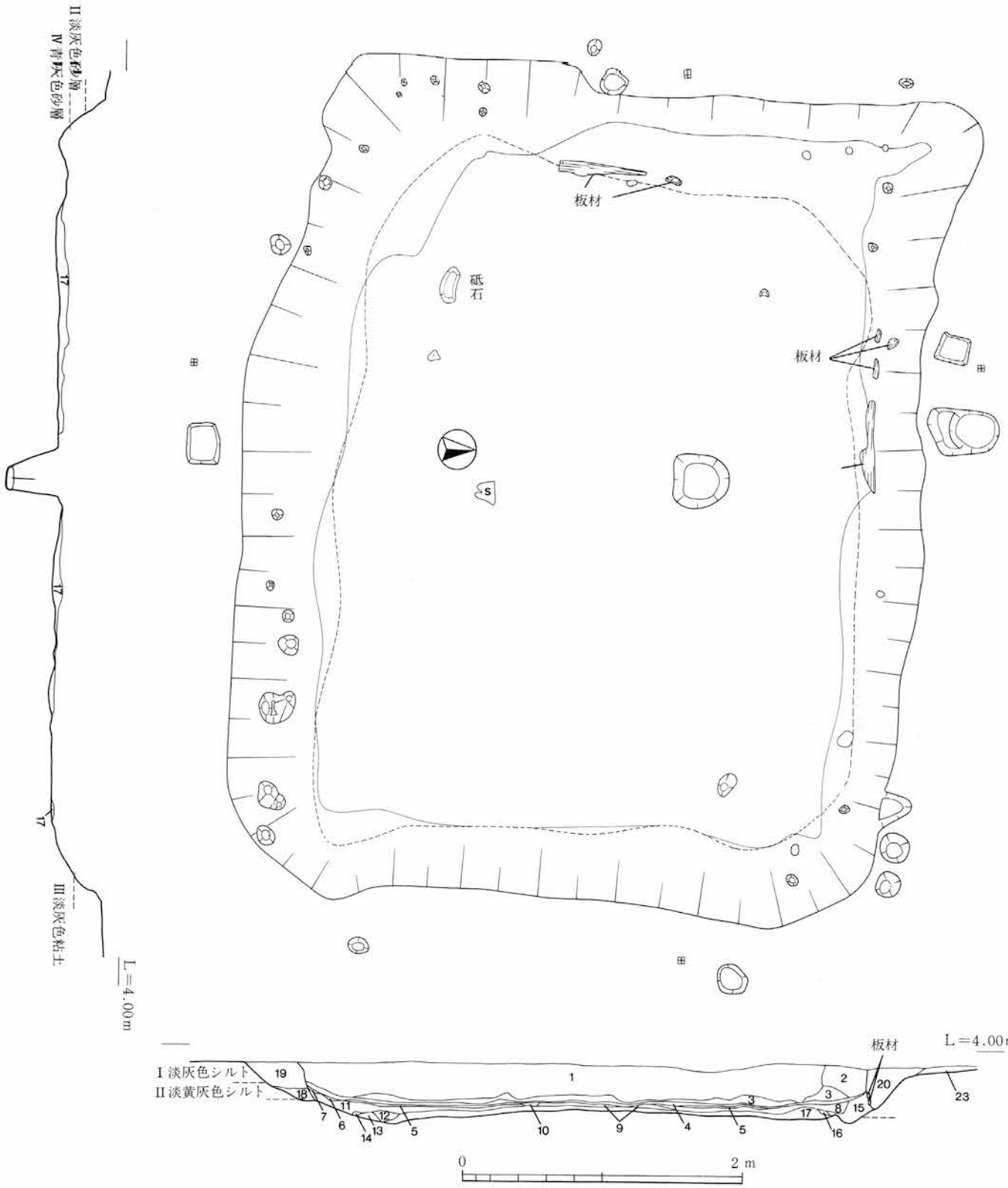
覆土と出土遺物　覆土は1～15層確認し、8層以下が自然堆積したものと推定される。出土遺物には（1～11）がある。（1）は越前焼片口鉢で口径27.6cmを測る。胴中位以下はヘラ削りしている。色調は褐色を呈する。（2）は珠洲焼擂鉢。（3）は加賀焼甕底部。（4～7）は底部に糸切り痕を持つロクロ土師器。（4）は底径7.5cmで、色調は灰色系。（5）は底径9cm、色調は白色系。（6）は口径9.2cm、器高2.1cm、底径4.8cmを測る。色調は灰色系。（7）は大きく歪んでいるが、口径7.2cm、器高2.6cm、底径4.4cmを測る。内面にタール状付着物が残る。色調は白色系。（8）は土師質皿で、口径9.2cm、器高2.4cmを測る。色調は白色系。（9）は自然礫を使用した磨石で、一点破線で囲った部分を使用している。（10）は管状土錘。長さ5.8cm、幅3.6cm、内径0.95cm、重量6.3g。（11）は行火の破片で表面にノミ痕があり、ススも付着している。

第6号竪穴（第39図、第41図1）

位置と切り合い　B－1・2区にまたがって位置し、第16号溝に切られている。

形状と法量　調査区北西側の斜面下の低地部分に存在し、調査区外へ伸びるが、扇状の形態を呈すると推測される。遺構南側に溝状遺構が存在するが、これは別個の遺構と推測される。長さは確認長で361cm、幅も223cm、深さ35cmを測る。内部には径4～10cmの木杭が8本存在していた。

覆土と出土遺物　覆土は4層で自然堆積した土層といえる。出土遺物には（1）の須恵器甕胴部片がある。



第37図　第1号竪穴実測図（S＝1／40）

1．暗灰色粘質土

2．暗茶灰色粘質土（炭化物混入、淡黄褐色シルトブロック多量混入、鉄分多量に含む）

3．暗灰色粘質土（黒灰色粘質土ブロック混入、やや暗い）

4．灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入、やや暗い）

5．灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入、やや明るい）

6．暗灰色粘質土（炭化物、黒灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入）

7．暗灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）

8．黒灰色粘質土（灰色粘質土ブロック混入）

9．灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混入、やや明るい）

10．明灰色粘質土（炭化物、暗灰色粘質土ブロック少量混入）

11．淡灰色粘質土（炭化物、暗灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入）

12．灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック多量混入）

13．灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）

14．明灰色粘質土（灰色粘質土ブロック混入）

15．暗灰色粘質土（淡灰色粘質土ブロック混入）

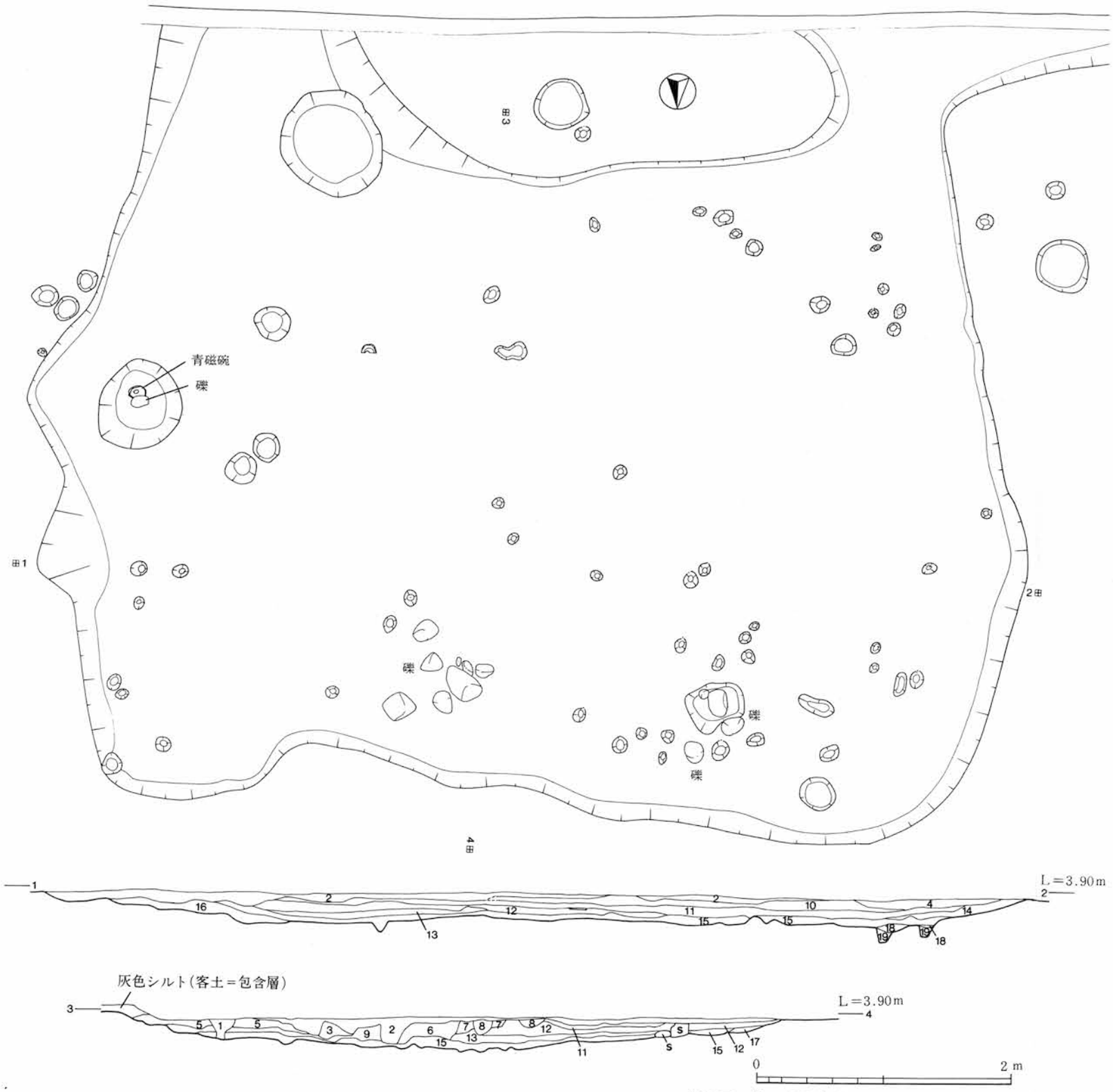
16．灰色粘砂層（淡黄褐色シルトブロック混入）

17．灰色粘質土（淡灰色シルトブロック混入）

18．灰色粘質土（淡灰色シルトブロック混入、やや青灰色をおびる）

19．暗灰色粘質土

地山は、淡灰色シルト

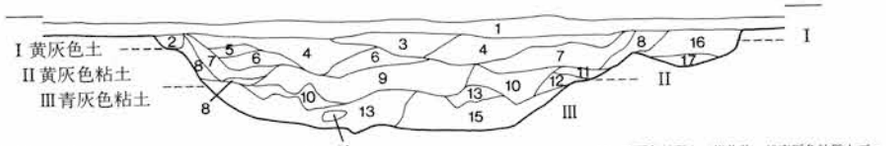


1．暗灰色粘質土（炭化物、灰色粘質土、褐色粘質土、淡褐色砂ブロック混入）
2．灰色粘質土（炭化物、暗灰色粘質土ブロック、褐色砂礫混入）
3．灰色粘質土（暗灰色粘質土ブロック混入、やや青色味がかっている）
4．暗灰色粘質土（黒色味が強い）
5．3層と同じ
6．淡灰色粘質土
7．淡灰色シルト
8．灰色粘質土（部分的に黒色味をおびている）
9．暗灰色粘質土（腐植物少量混入、4層より明るい）
10．淡灰色粘質土
11．9層と同じ
12．淡灰色粘質土
13．暗灰色粘質土（黒色土ブロック、砂礫混入）
14．12層と同じ
15．暗灰色粘質土（淡灰色粘質土、淡灰色砂ブロック混入）
16．青灰色砂
17．褐色砂礫層
18．暗灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）
19．淡黄灰色粘質土（炭化物、暗灰色粘質土ブロック混入）
20．黒灰色粘質土（淡黄灰色シルトブロック混入）
23．淡灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）

一点破線内は砂利敷き範囲

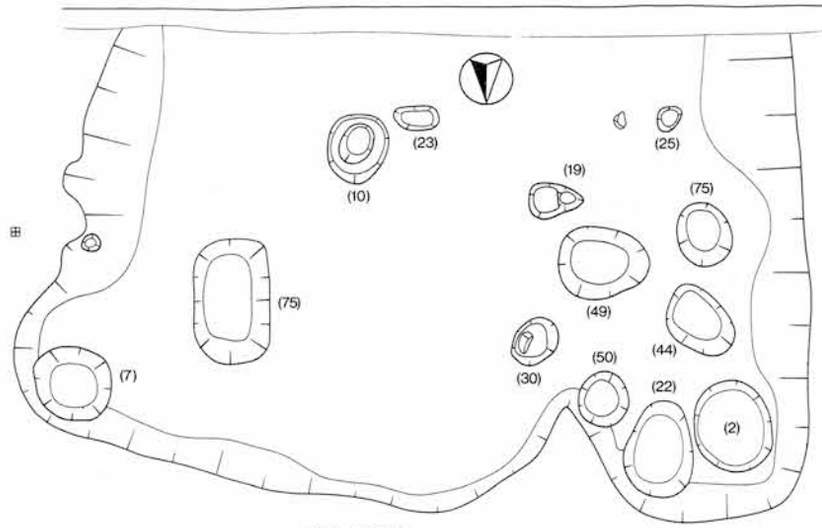
第38図　第2号竪穴実測図（S＝1／40）

第３号竪穴

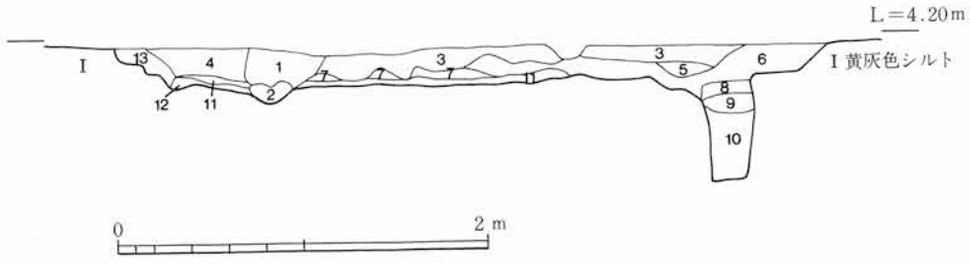


1．淡灰色弱粘質土（客土）
2．灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック混入）
3．灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック多量混入）
4．灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック混入）
5．黄灰色弱粘質土（炭化物少量混入）
6．灰色粘質土（炭化物、黄灰色粘質土、暗灰色粘質土ブロック混入）
7．灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック少量混入」
8．灰色粘質土（黄灰色粘質土ブロック多量混入）
9．淡灰色粘質土（炭化物、淡黄灰色粘質土、暗灰色粘質土ブロック混入）
10．灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック少量混入）
11．淡青灰色シルト
12．灰色粘質土（淡青灰色シルトブロック混入）
13．暗灰色粘質土（炭化物、淡青灰色粘質土ブロック混入）
14．淡青灰色粘土ブロック
15．青灰色粘土（炭化物、灰色粘質土ブロック混入）
16．青灰色粘土
17．灰色粘質土（炭化物、青灰色粘土ブロック）

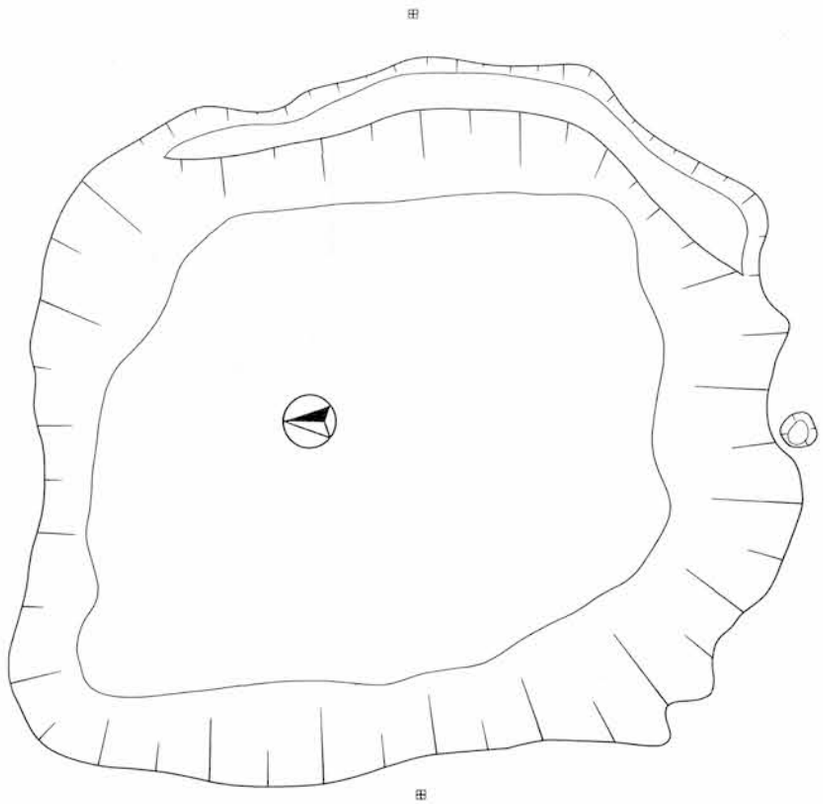
第４号竪穴



1．暗灰色粘質土（炭化物、淡黄灰色粘質土、淡褐色粘質土ブロック混入、土はやや砂っぽい）
2．暗灰色粘質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック少量混入）
3．暗灰色砂質土（炭化物、淡褐色粘質土ブロック混入）
4．暗灰色粘質土（暗灰色砂質土ブロック混入、淡褐色粘質土ブロック少量混入）
5．灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック混入）
6．暗灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック少量混入、やや砂っぽく、青灰色味をおびている）
7．暗灰色粘質土（淡褐色粘質土ブロック少量混入）
8．地山Ⅰに暗灰色粘質土ブロック少量混入
9．青灰色粘質土（地山Ⅰブロック少量混入）
10．青灰色粘質土（土は軟かく砂っぽい）
11．明灰色粘質土
12．褐色砂層
13．暗灰色砂質土（淡褐色粘質土ブロック少量混入）

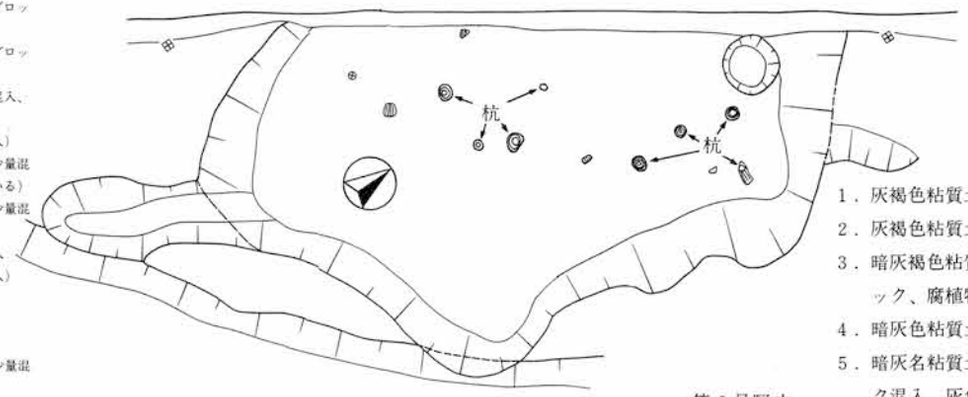


第５号竪穴

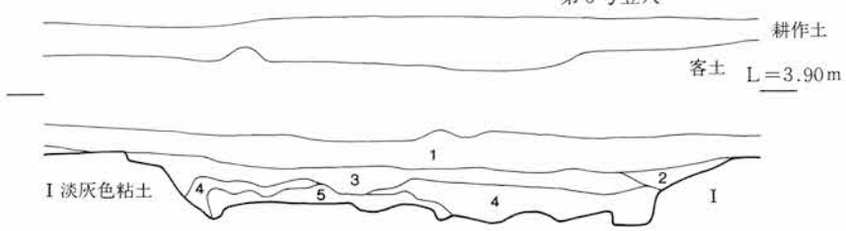


1．淡灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック混入、鉄分やや含む）
2．淡灰色粘質土（炭化物やや混入、黄灰色土ブロック混入、鉄分多く含む）
3．淡灰色粘質土（炭化物、鉄分をやや混入、黄灰色土ブロック混入）
4．灰褐色粘質土
5．灰色粘質土（炭化物、鉄分をやや混入、黄灰色土ブロックをやや混入）
6．灰色粘質土（炭化物、鉄分をやや混入、黄灰色土ブロックを多く混入）
7．灰色粘質土（炭化物、鉄分をやや混入、黄灰色土ブロックを多量混入）
8．暗灰色粘質土（炭化物、黄灰色土ブロック少量混入、やや褐色味をおびる）
9．暗灰色粘質土（炭化物、鉄分若干混入）
10．暗灰色粘質土（炭化物、鉄分少量混入）
11．暗灰色粘質土（黄灰色粘土ブロック多量混入）
12．暗灰色粘質土（炭化物若干混入）
13．暗灰色粘質土（青灰色粘土、黒灰色粘土ブロック混入）
14．暗灰色粘質土（青灰色粘土ブロック混入、部分的に褐色砂がブロック状に混入）
15．褐色砂層

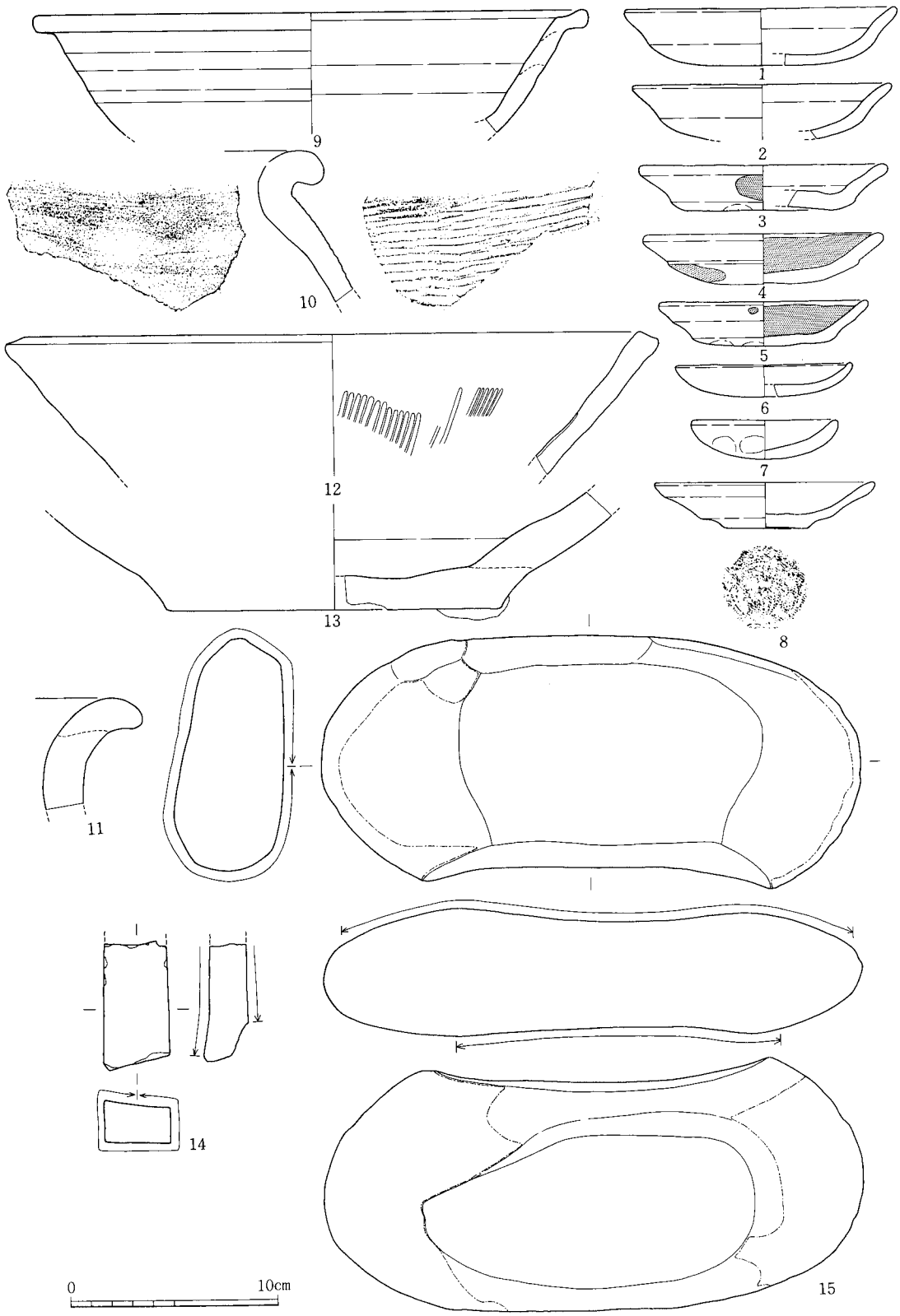
第６号竪穴



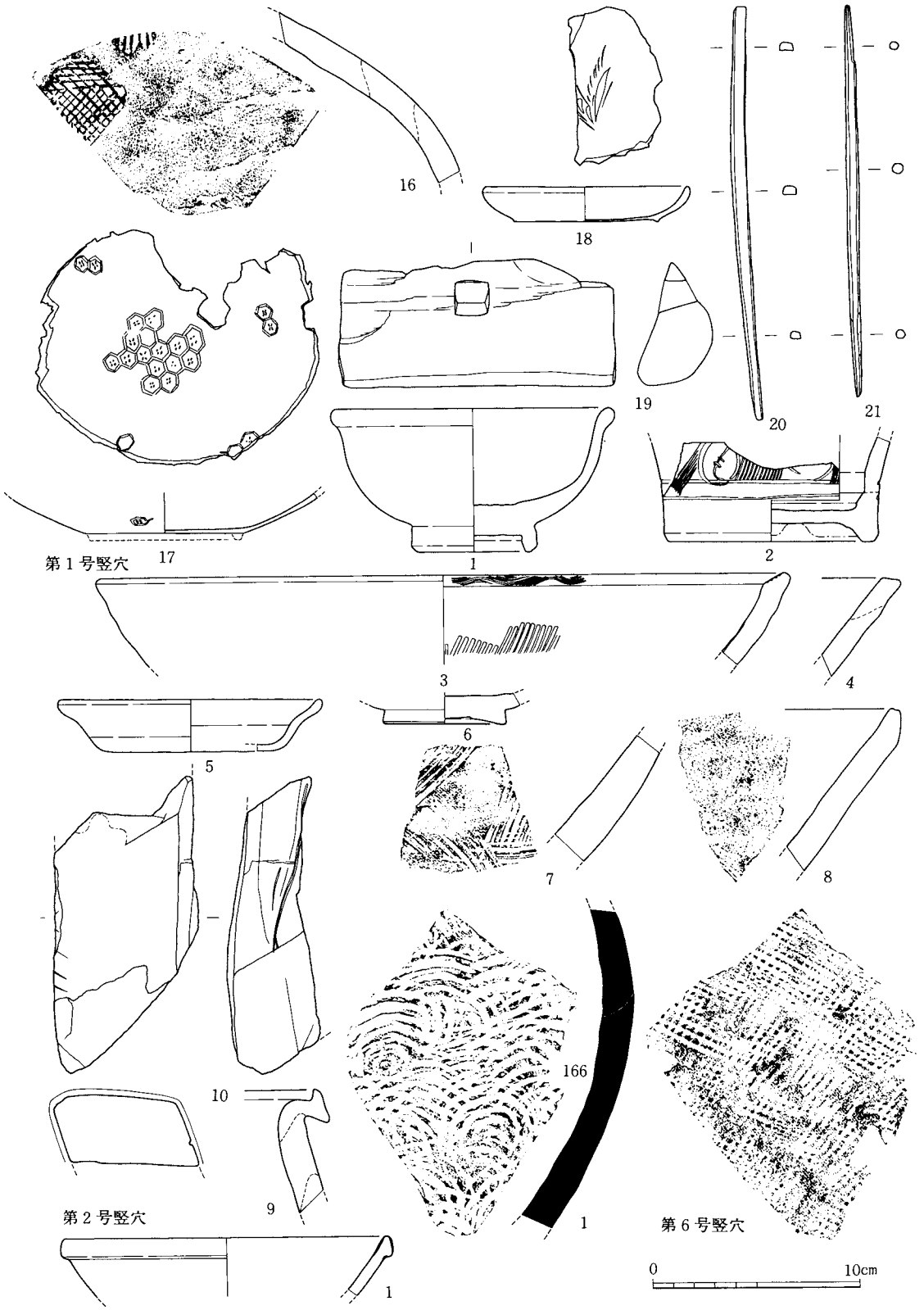
1．灰褐色粘質土（腐植物混入）
2．灰褐色粘質土（やや青色味をおびている）
3．暗灰褐色粘質土（炭化物、淡灰色粘質土ブロック、腐植物混入）
4．暗灰色粘質土（炭化物、灰色砂、腐植物混入）
5．暗灰名粘質土（炭化物、淡灰色粘質土ブロック混入、灰色砂少量混入、腐植物多量混入）



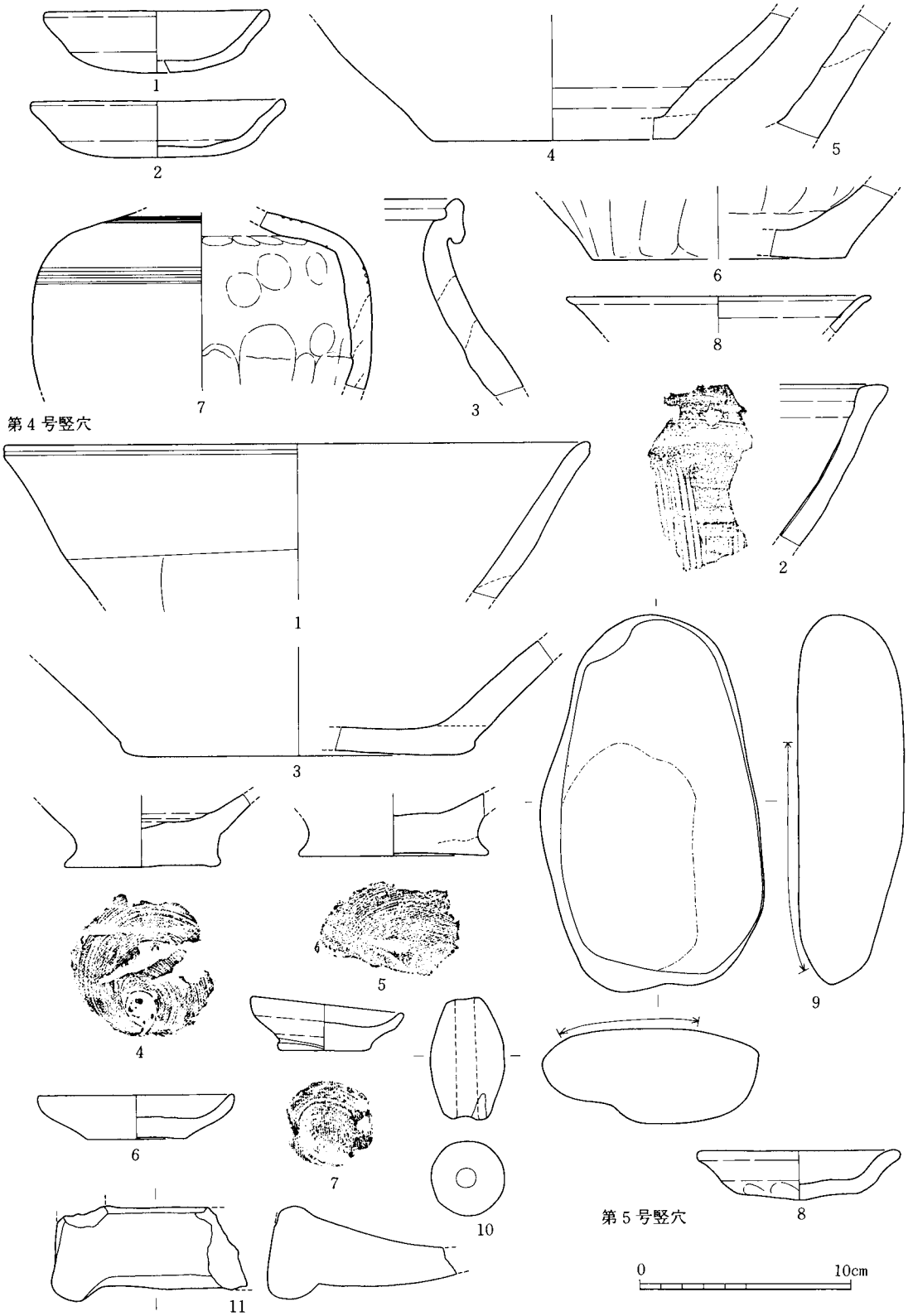
第39図　第３～６号竪穴実測図（Ｓ＝1／40）



第40図　竪穴出土遺物１（第１号竪穴、Ｓ＝1／3）



第41図　竪穴出土遺物2（第1・2・6号竪穴、他、S＝1／3）



第42図　竪穴出土遺物3（第4・5号竪穴、S＝1／3）

第5節　土　　坑

概　要

第1次調査で検出された土坑は16基（第1～15・17号土坑、16は欠番）である。中世に属するものが多い。以下、第1号土坑から順に報告する。

第1号土坑（第43図、第45図1～8）

位置と切り合い　F－1区に位置し、第2号土坑に切られ、南側は工事によって失われている。

形状と法量　正確には把握できないが、平面隅丸方形（東西165cm、南北160cm以上）、断面逆台形（深さ約30cm）を呈するものと思われる。坑底面はやや不整形である。

覆土と出土遺物・時期　茶褐色土系の覆土、遺物はほとんど第4層より出土した。須恵器では、無台杯3点（1・2他）、有台杯2点（3・4）、大振りの杯1点（6）、盤1点（5）、蓋小片1点、壺1点（7）、甕・壺の胴部片5個体以上。土師器では、甕7個体以上（8他、うち小型甕2個体以上）、他に底部片2点、把手2点（うち小型品1点）が出土している。時期は奈良時代前半と考えられる。

第2号土坑（第43図）

F－1区に位置し、第1号土坑北側を切っている。平面は長方形（長軸110cm、短軸55cm、やや不整形）、断面は箱形（深さ約30cm）を呈する。茶褐色、茶灰色、灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第3号土坑（第43図、第45図9）

位置と切り合い　F－3区に位置し、第5号溝を切り、北側は工事によって削平されている。

形状と法量　平面円形（直径約125cm）、断面逆台形（深さ約30cm）を呈する。坑底面はやや不整形である。

覆土と出土遺物・時期　明灰色粘質土の単一土層。瓦質土器羽釜片（9）と窯道具ハマ（直径約2.5cm、厚さ0.2cm）が出土した。中世に属するものである。

第4号土坑（第43図）

位置と切り合い　F－3区に位置し、西側を第7号溝に切られ、さらに全面をSX－1が覆う。

形状と法量・覆土と時期　平面は隅丸長方形（長軸165cm、短軸120cm、ともに推定）、断面逆台形（深さ50cm以上）と考えられる。坑底面はやや不整形である。茶灰色、灰茶色、灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第5号土坑（第43図、第45図10）

位置と切り合い　E－3区に位置し、切り合い関係はない。

形状と法量　平面方形（長軸125cm、短軸115cm、西側は角が丸みをもつ）、断面逆台形（深さ約35cm）を呈する。

覆土と出土遺物　茶灰色土系の覆土で、青白磁合子（10）、加賀焼片口鉢のほか、側面に木質部が付着した鉄釘（11本以上、長さ4～6cm）と鉄塊（直径2cm弱）が出土している。

時期　合子と片口鉢には、12世紀後半～13世紀前半と13世紀代の年代観が与えられている。

第6号土坑（第43図）

位置と切り合い　E－3区に位置し、南側と西側でピットを切っている。

形状と法量　平面方形（長軸120cm、短軸110cm）、断面逆台形（深さ約30cm）を呈する。坑底面北側には平面楕円形（38×29cm、坑底からの深さ約8cm）のピットがある。

覆土と出土遺物・時期　褐色、茶褐色、茶灰色、灰色土系の覆土で、白磁片と鉄釘（1本、長さ4cm以上）が出土している。時期は、形状と法量が類似し、ともに鉄釘が出土していることから、本土坑の東約5mで検出された第5号土坑に並行する可能性がある。

第7号土坑（第43図）

F－3区に位置し、切り合い関係はない。平面は円形（直径約95cm、東側がやや角ばる）、断面は椀形（深さ約30cm）を呈する。茶灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第8号土坑（第43図）

位置と切り合い　C－3区に位置し、切り合い関係はない。

形状と法量　平面円形（直径約70cm）、断面箱形（深さ約40cm）を呈する。坑底面南西側は二段堀りとなっている。

覆土と出土遺物・時期　灰色、青灰白土系の覆土で、白磁椀小片、土師器椀・皿の底部片（糸切り痕をもつ）、樹皮（桜か）が出土している。白磁椀には11世紀末葉～12世紀初頭頃の年代観が与えられている。

第9号土坑（第44図）

位置と切り合い　C－6区に位置し、切り合い関係はない。

形状と法量　平面円形（直径約95cm）、断面箱形（深さ約50cm）を呈する。

覆土と時期　覆土は灰色、灰褐色、褐色、青灰色土系で、計25もの土層を判別し得た。本土坑のように、比較的薄い各土層がレンズ状に多重堆積する遺構は、本調査では井戸としたもの（その性格については別に検討の必要があるが）に多い。本土坑も、弧状に分布する井戸群のなかにあり、第10号井戸と第11号井戸の間で、一定の間隔をもって検出されていることから、同様の性格が与えられるかもしれない。図化し得るような遺物の出土はないが、時期は、前述の井戸群との関連性から推定し得る可能性はある。

第10号土坑（第44図）

位置と切り合い　C－5区に位置し、切り合い関係はない。

形状と法量　平面長方形（長軸155cm、短軸100cm、西側は不整形）、断面箱形（深さ約10cm、浅く坑底面は不整形）を呈する。

覆土と出土遺物・時期　暗灰色粘質土の単一土層で、11世紀中頃～12世紀中頃の所産と考えられる土師器椀・皿の底部片（2点）が出土している。

第11号土坑（第44図）

E－6区に位置、切り合い関係はない。平面は円形（直径約100cm）、断面は椀形（深さ約40cm）を呈する。灰色、灰褐色、青灰色土系の覆土。少量の土器片が出土したのみで、時期は不

明。

第12号土坑（第44図）

Ｆ－６区に位置、切り合い関係はない。平面は長方形（長軸145cm、短軸105cm）、断面は皿形（深さ約20cm）を呈する。坑底西側には平面楕円形（26×20cm、坑底からの深さ13cm）のピットがある。茶灰色、灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明。

第13号土坑（第44図）

Ｆ－５区に位置し、西側は第13号溝に切られている。平面は方形（径約95cm、東側は丸みをもつ）、断面は皿形（深さ約20cm）を呈する。坑底西側は一段高い（その差７cm）。灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第14号土坑（第44図、第45図11）

位置と切り合い　Ｆ－６区に位置し、東側は第15号土坑に切られている。

形状と法量　平面長方形（長軸240cm、短軸190cm）、断面皿形（深さ約40cm）を呈する。断面南側のたちあがりは直線的で、逆台形に近い。北東隅にピット（径９cm）がある。

覆土と出土遺物・時期　灰色土系の覆土で、瀬戸鉄釉茶入（11）、同花瓶片、鉄片（径約４cm、厚さ0.8cm）が出土している。茶入・花瓶は15世紀代の所産と考えられる。

第15号土坑（第44図）

位置と切り合い　Ｆ・Ｇ－６区に位置し、第14号土坑を切り、第15号井戸に切られている。

形状と法量　平面は隅の丸い二等辺三角形（底面170cm、他の二辺は140cm）、断面皿形（深さ約10cm）を呈する。坑底面にはピットが３つ（径32～40、26～30、11～13cm）ある。

覆土と出土遺物・時期　灰色土系の覆土で、瀬戸天目茶碗、土師質皿、砥石（長さ5.5cm、幅5.5cm、厚さ1.6cm）が出土している。切り合い関係から、15世紀代に位置づけておきたい。

第17号土坑（第44図、第45図12～14）

位置と切り合い　Ｆ－６区に位置し、切り合い関係はない。

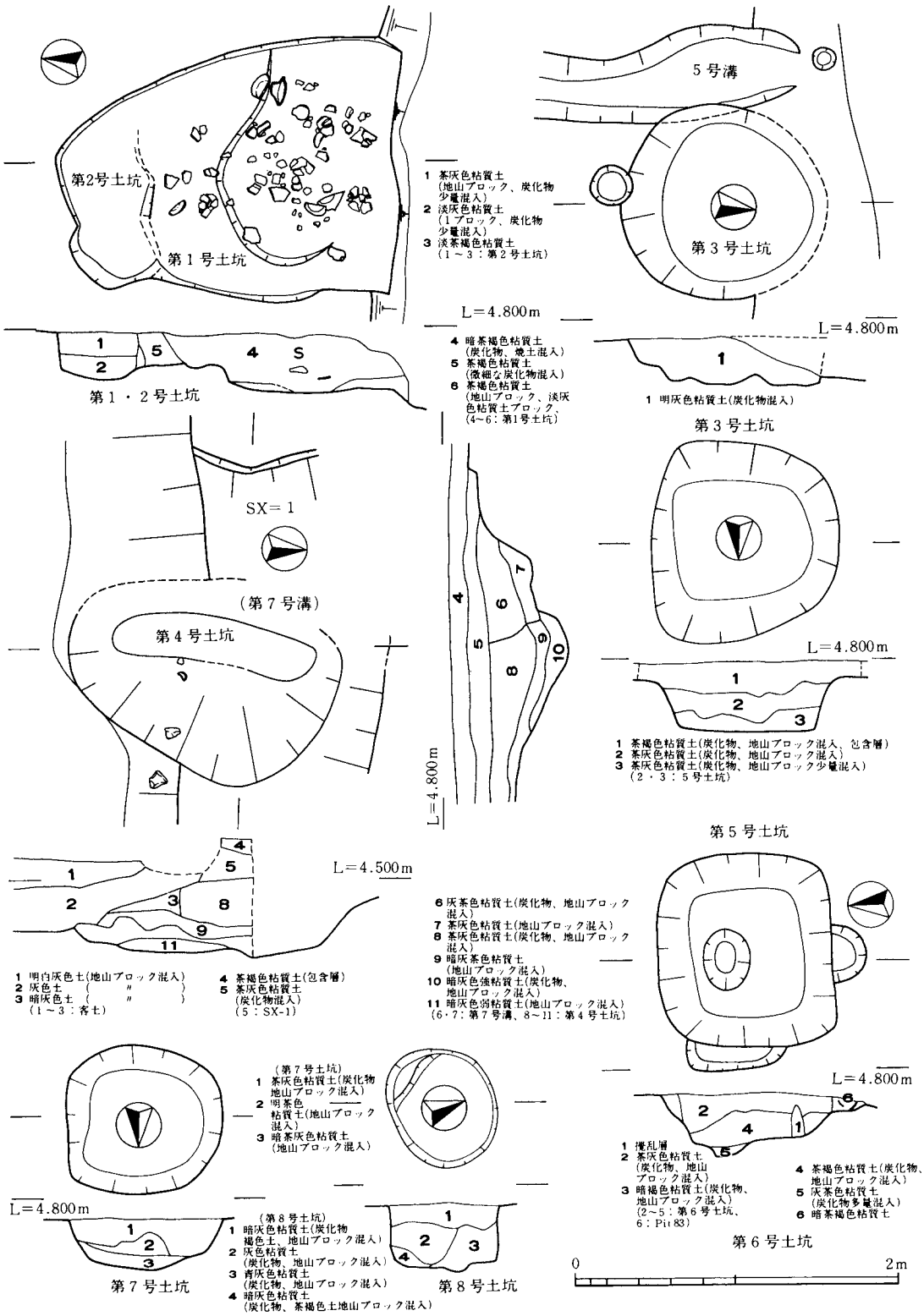
形状と法量　平面長方形（長軸320cm、短軸145cm、南側は丸みをもつ）、断面皿形（深さ約30cm）を呈する。断面北側のたちあがりは直線的で、逆台形に近い。西側にピット（径12～14cm）がある。

覆土と出土遺物　灰褐色、灰色土系の覆土で、瀬戸灰釉盤（12）、同天目茶碗（13）、中国製天目茶碗（14）のほか、土師器椀３個体が出土している。14の外面底部付近には墨痕が認められ、底面にはそのうえに朱漆で文字あるいは記号を記している。

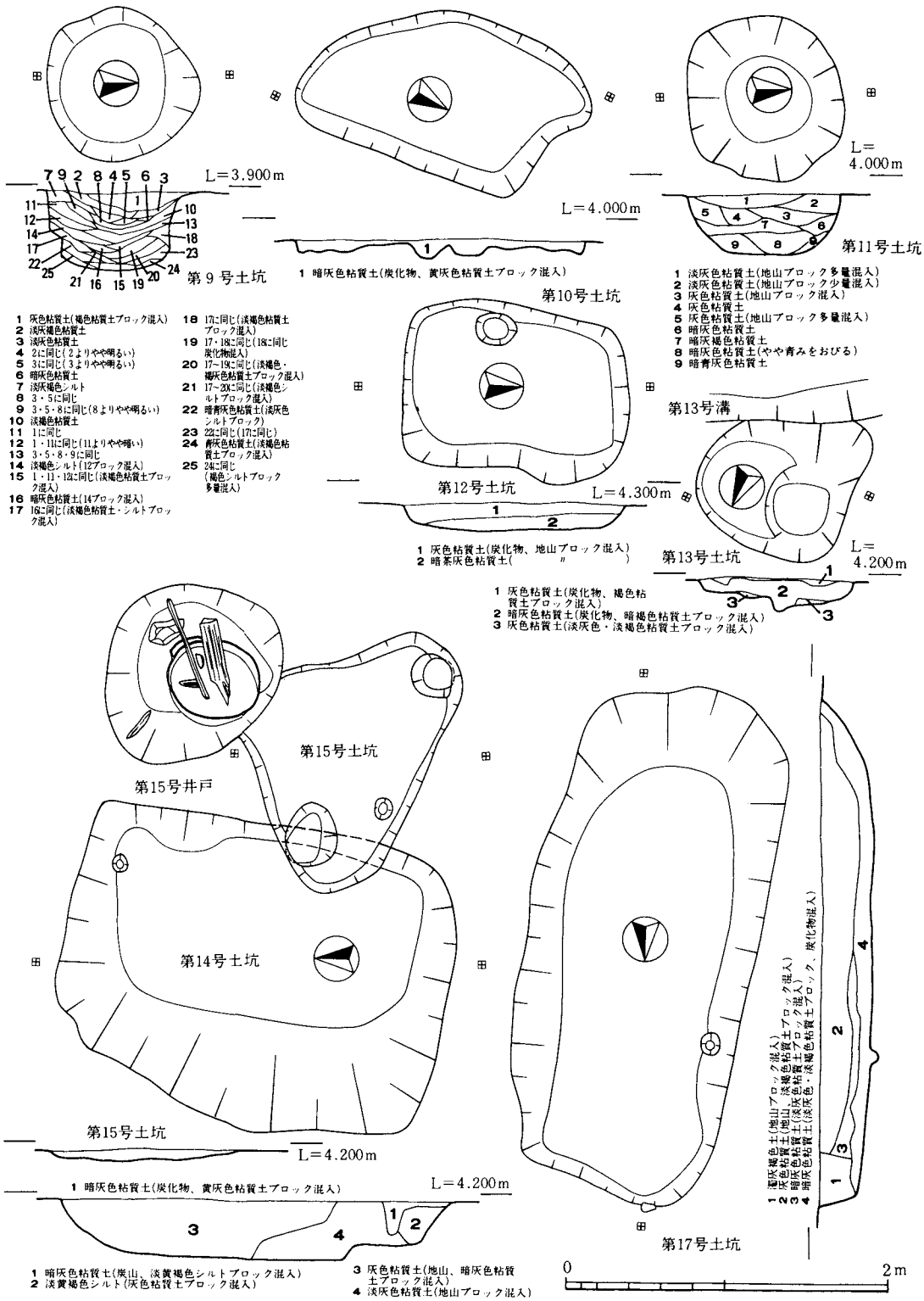
時期　12～14の遺物は概ね15世紀代の所産と考えられる。

小　結

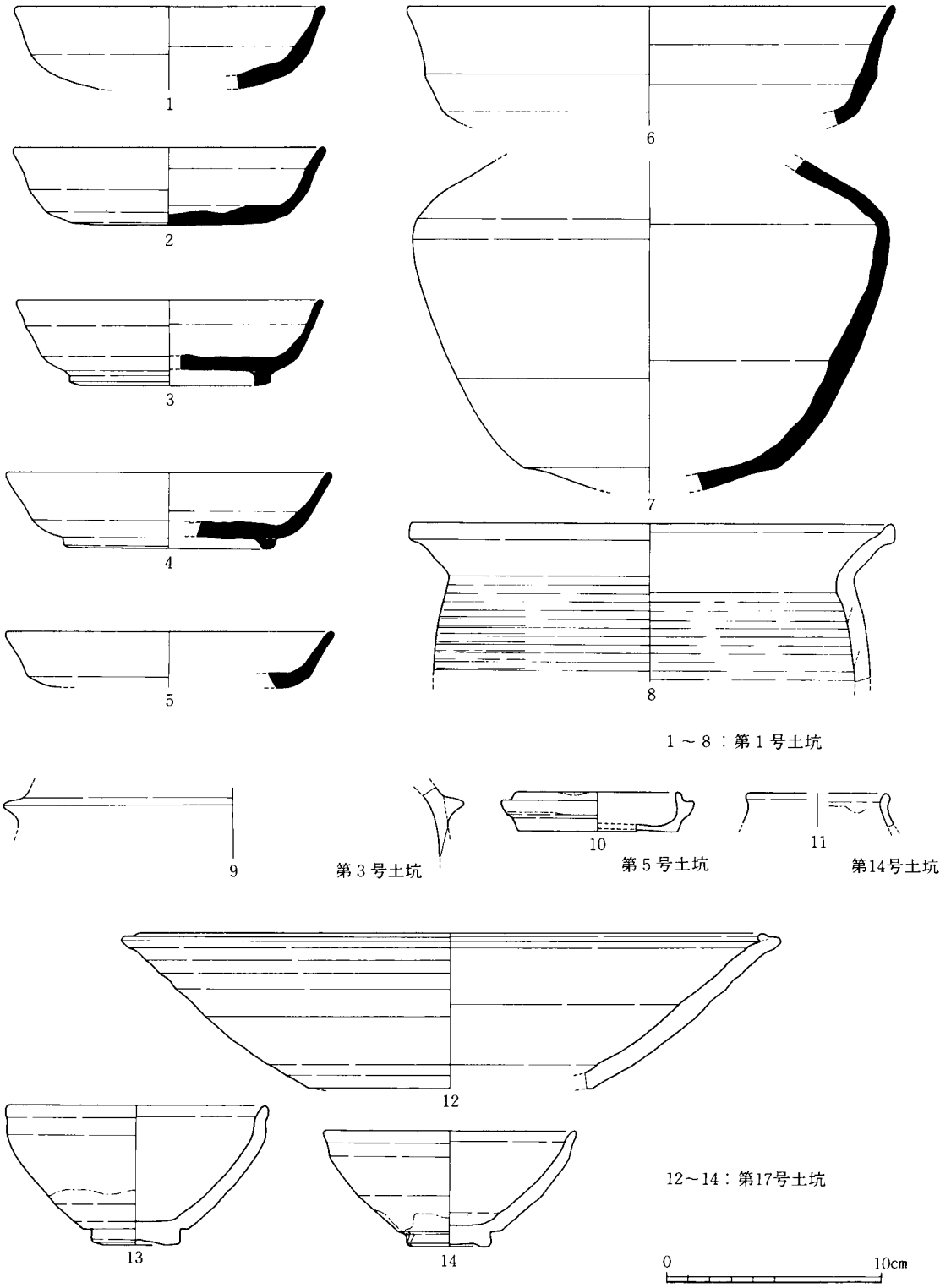
検出された16基の土坑はＥ・Ｆ－３区付近とＦ－６区付近に集中する傾向がみられる。



第43図　土坑実測図（第1～8号土坑、S＝1／40）



第44図　土坑実測図（第９～15・17号土坑、S＝1／40）



第45図　土坑出土遺物（第1・3・5・14・17号土坑、S＝1／3）

第6節　溝

概　要

第1次調査で検出された溝は16条（第1～16号溝）である。工事によって削平され、部分的な検出にとどまったものが少なくない。以下、第1号溝から順に報告する。

第1号溝（第46図、第48図1～47）

位置と切り合い　F・G－2区に位置し、第10号溝を切る。南側は工事によって削平され消失している。F－2・3区に位置する第7号溝と同一溝と考えられる。

形状と法量　平面L字形（東から西にのびのち南へ屈曲する）を呈し、幅0.3～0.8m、長さ4.5m以上、深さ約20cmを測る。断面は逆台形を呈する。

覆土と出土遺物　茶灰色、暗褐色土系の覆土。土師質皿を主体に多量の遺物が出土した。土師質皿（1～44）は、口径では6～7cm前後の小皿（21～44）、10～12cm前後の中皿（6～20）、13～14cm前後の大皿（1～5）に分けることができる。ただし、大皿と中皿は明瞭には分離できない。色調では白色系皿（1～8、17～20、21～40）、灰色系皿（11～16）、橙色系皿（9・10、41～44）がある。ただし、白色系皿と灰色系皿は明瞭には分離できない。橙色系中皿には口径に比較して浅いもの（9）、口縁部が強く反射するもの（10）がある。橙色系小皿には全体的に肉厚のもの（42）、口径に比較して浅いもの（43・44、口径7.0～7.4cm、器高1.0～1.2cm）などがある。橙色系皿の胎土には、赤色酸化粒がやや多く含まれるようである。このほか、瀬戸天目茶碗（45・46）、瀬戸灰釉瓶（47）が出土している。

時期　45の天目茶碗と灰釉瓶には15世紀前半の、46の天目茶碗には16世紀前半代の年代観が与えられている。

第2号溝（第46図）

E・F2区に位置し、南側は工事によって削平され消失している。平面L字形（西から東へのびのち南へ屈曲する）を呈し、幅0.4～0.8m、長さ4m以上、深さ約5cmを測る。図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第3号溝（第46図）

E－5区に位置し、西側は第20（・28）号井戸に切られ、東側は客土層との識別ができなかった。東西方向にのび、幅約0.3m、長さ3.2m以上、深さ約15cmを測る。断面は椀形を呈する。灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第4号溝（第46図）

D・E2区に位置し、第1号井戸を切っている。東西方向にのび、幅0.3～0.4m、長さ2.8m、深さ約5cmを測る。図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第5号溝（第46図）

F－3区に位置し、第3号溝に切られ、北側は工事によって削平され消失、南側は客土層に切られている。南北方向にのび、幅0.4～0.6m、長さ3.4m以上、深さ約30cmを測る。断面は箱形を呈する。茶灰色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第６号溝（第46図、第49図15）

Ｆ－３区に位置し、南側は客土層に切られている。南北方向にのび、幅0.4～1.0m、長さ７m以上、深さ約10cmを測る。断面は逆台形に近い皿形を呈する。茶灰色土系の覆土で、越前焼高台付鉢（15）が出土している。鉢には13世紀後半代の年代観が与えられている。

第７号溝（第46図、第49図１～14）

位置と切り合い　Ｆ－２・３区に位置し、第４号土坑を切り、ＳＸ－１に切られている。北側は工事によって削平され消失しており、南側は客土層に切られている。南北方向にのび、Ｆ・Ｇ－２区に位置する第１号溝と同一溝と考えられる。

形状と法量　幅0.4～0.8m、長さ6.2m以上、深さ約40cmを測る。断面は逆台形を呈する。

覆土と出土遺物　灰茶色、灰色土系の覆土。土師質皿、中世陶器、須恵器、土師器が混在して出土した。土師質皿（１～９）は、小皿（１～６、口径６～７cm）と大皿（７・８、口径13～15cm）がある。７は中皿とすべきかもしれない。色調では、白色系皿（１・２・４・５・７）、灰色系皿（３・８）、橙色系皿（６）がある。ただし、白色系皿と灰色系皿は明瞭には分離できない。他に加賀焼では甕（９）、擂鉢（10）、須恵器では蓋（11）、有台盤（12・13）、瓶（14）、鉄滓（重さ256ｇ）と鉄製品（5.0×5.5cm、厚さ６mm・17mm、断面はＴ字形）が出土している。

時期　第１号溝と同一時期と考えられる。１～８の土師質皿がその主体である。

第８号溝（第48図、第49図16・17）

Ｄ－３区に位置し、南西側は客土層に切られている。北東～南西方向にのび、幅0.4～0.8m、長さ3.8m以上、深さ約10cmを測る。断面は逆台形に近い皿形を呈する。茶灰色土系の覆土で、珠洲焼甕体部片（16）、土師器脚部片（17）のほか、管状土錘が出土している。

第９号溝（第48図）

Ｅ－３・４区に位置し、南北方向にのびる。幅0.2～0.3m、長さ1.8m、深さ約５cmを測る。図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第10号溝（第46図）

Ｆ・Ｇ－２区に位置し、第１号溝に切られ、北側と南側は工事によって削平され消失している。南北方向にのび、幅0.6～1.2m、長さ３m以上、深さ約40cmを測る。断面は逆台形を呈する。茶褐色土系の覆土で、図化し得るような遺物の出土はなく、時期は不明である。

第11号溝（第47図、第50図１～11）

位置と切り合い　Ｆ－４～６区に位置し、第15号溝を切り、第６号井戸に切られている。

形状と法量　南北方向にのび、幅0.4～1.7m、長さ19.5m以上、深さ約40cmを測る。断面は逆台形を呈する。

覆土と出土遺物　灰褐色、灰色、青灰色土系の覆土で、中世陶磁器・土師質器を主体に若干の遺物が出土した。土師質皿（２～７）は口径7.3～8.6cmの小皿（２・３）、同9.9～10.4cmの中皿（４～６）、同12.2cmの大皿（７）がある。３は中皿とすべきかもしれない。白色系（３・６・７）、灰色系（２・５）、橙色系（４）皿がある。２は口縁部内外面に黒色タール状のものが付着し、また５は内面屈曲部に布の圧痕（約1.3mm間隔）が残存する。他に越前焼甕（１）、加賀焼甕

（8）、青磁鉢（9）、須恵器蓋鈕（10）、台石（11）、青磁片、白磁片、不定形な砥石、行火、鉄滓（重さ66ｇ）などが出土している。

時期　加賀焼甕は14世紀代、越前焼甕・青磁鉢は15世紀前半頃に位置づけられている。

第12号溝（第47図）

Ｃ－２・３区に位置し、やや屈曲しながら南北方向にのびるが、途中で一度とぎれる。幅0.2～0.4m、長さは北側1.7m、南側3.4m、深さ約10㎝を測る。図化し得るような遺物の出土はない。

第13号溝（第47図）

Ｆ・Ｇ－５区に位置し、第13号土坑とＳＸ－８を切る。東西方向にのび、幅1.0～1.3m、長さ6.3m以上、深さ約10㎝を測る。断面は皿形を呈する。淡灰色土系の覆土で、鉄滓（重さ10ｇ）のほかには図化し得るような遺物の出土はない。

第14号溝（第47図、第49図18）

Ｆ－５区に位置し、東西方向にのびる。幅0.6～1.2m、長さ4.6m、深さ約30㎝を測る。断面は椀形を呈する。灰色土系の覆土で、瀬戸灰釉締腰型瓶子（18、15世紀前半）が出土している。

第15号溝（第47図、第49図19～21）

Ｆ－４・５区に位置し、第11号溝と第６号井戸に切られている。平面Ｌ字形（東から西にのびのち南へ屈曲する）を呈し、幅1.0～2.0m、長さ13m以上、深さ約10㎝を測る。断面は皿形、灰色土系の覆土で、珠洲焼甕（19）、灰釉椀（20）、土師器底部片（21）が出土した。

第16号溝（第47図、第50図12～24、第51図25～40）

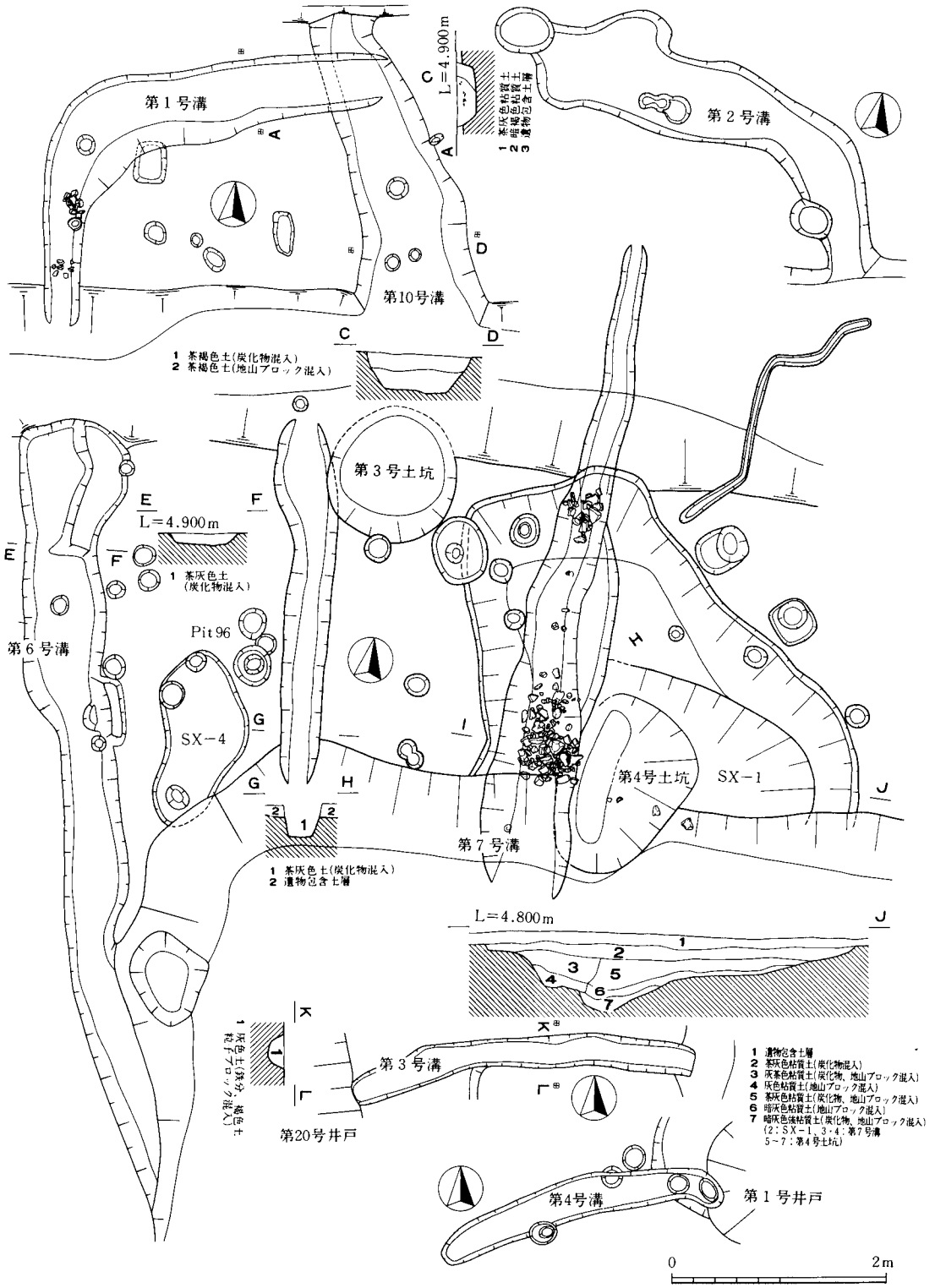
位置と切り合い　Ｂ－１・２、Ｃ－１区に位置し、第６号竪穴を切っている。

形状と法量　ゆるく弧を描きながら北東～南西方向にのびる。幅0.5～1.5m、長さ26m以上、深さ約30㎝を測る。断面は逆台形を呈する。ただし、南西部は二段掘りされている。同部を含めた幅は1.6～2.5m、同部の長さは15m以上を測る。

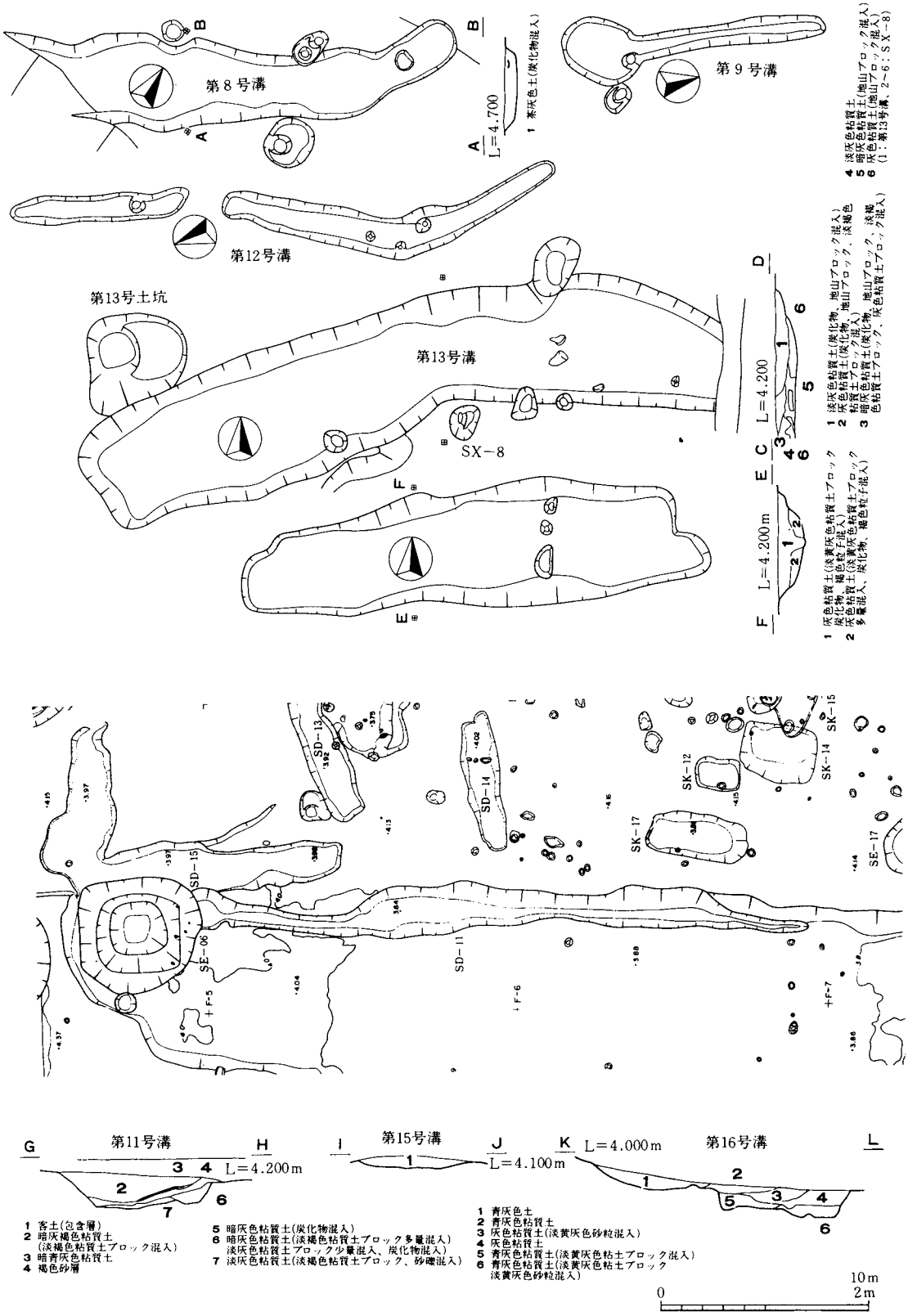
覆土と出土遺物　灰色、青灰色土系の覆土で、多様な遺物が出土した。12～19は土師器椀・皿（18は土師質皿か）で、12・17・19の底部外面には糸切り痕が確認できる。白色系（13・19）、灰色系（12・17・18）、橙色系（14～16）のものがある。18は口縁部内外面に黒色タール状のものが付着している。20は灰釉短頸壺（12世紀初め頃）、21は越前焼高台付鉢、22は珠洲焼片口鉢、23は珠洲焼甕（21～23は13世紀代の所産）、24は同安窯青磁椀（12世紀後半～13世紀前半）である。25～32は須恵器甕・壺類で、26は須恵系陶器の可能性がある。28は内外面に漆状のものがほぼ全面に付着する。29は平面略円形の加工が施される。33は土師器把手、34～40は須恵器蓋・杯類で、40は底部周辺に５ヶ所打ち欠き痕が認められる。

小　結

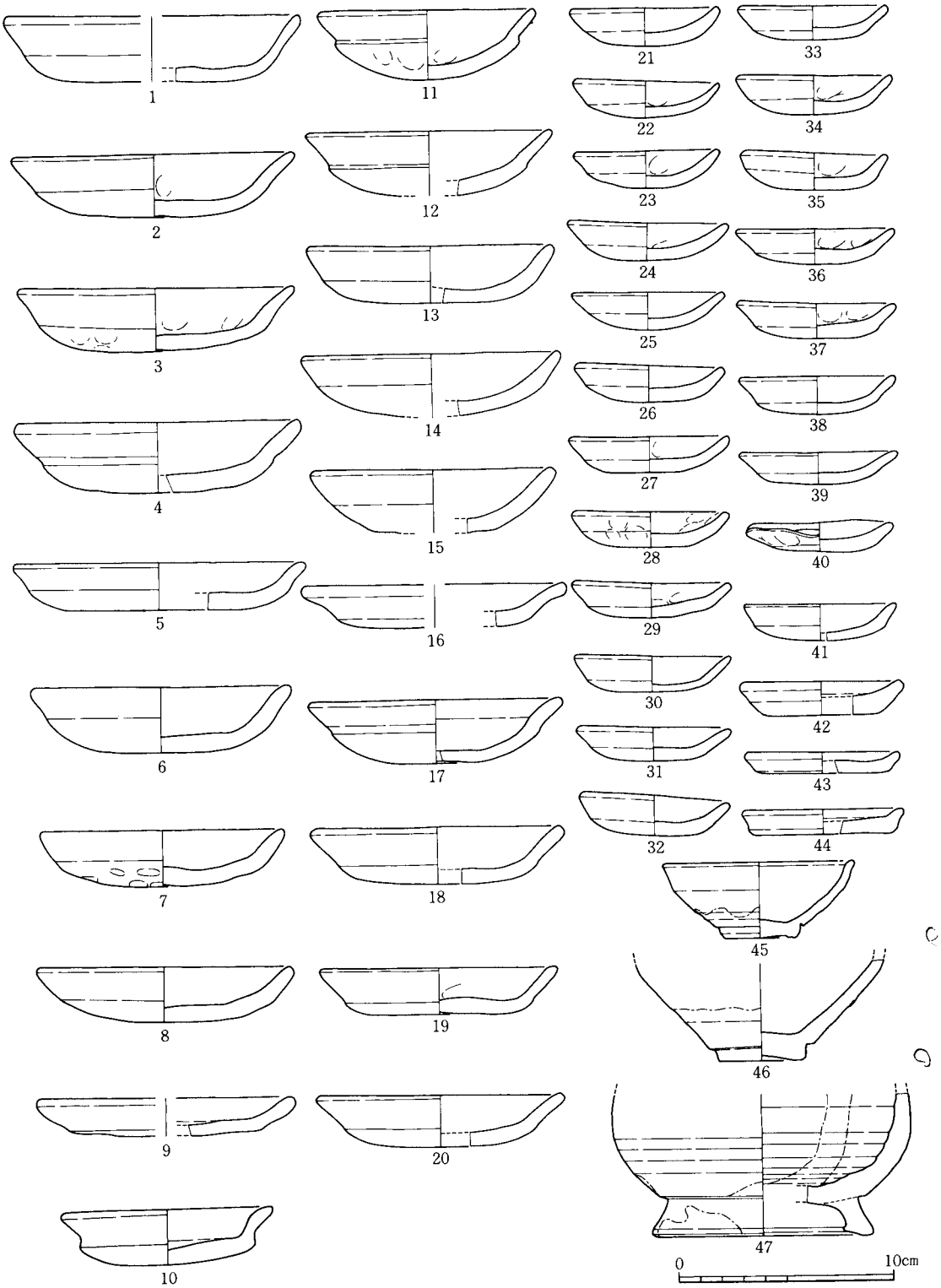
検出された16条の溝は、ほとんどが中世に属するものであるが、特に第１・７号溝出土の土師質皿は、伴出した中世陶器との共伴関係は別としても、良好な資料といえよう。



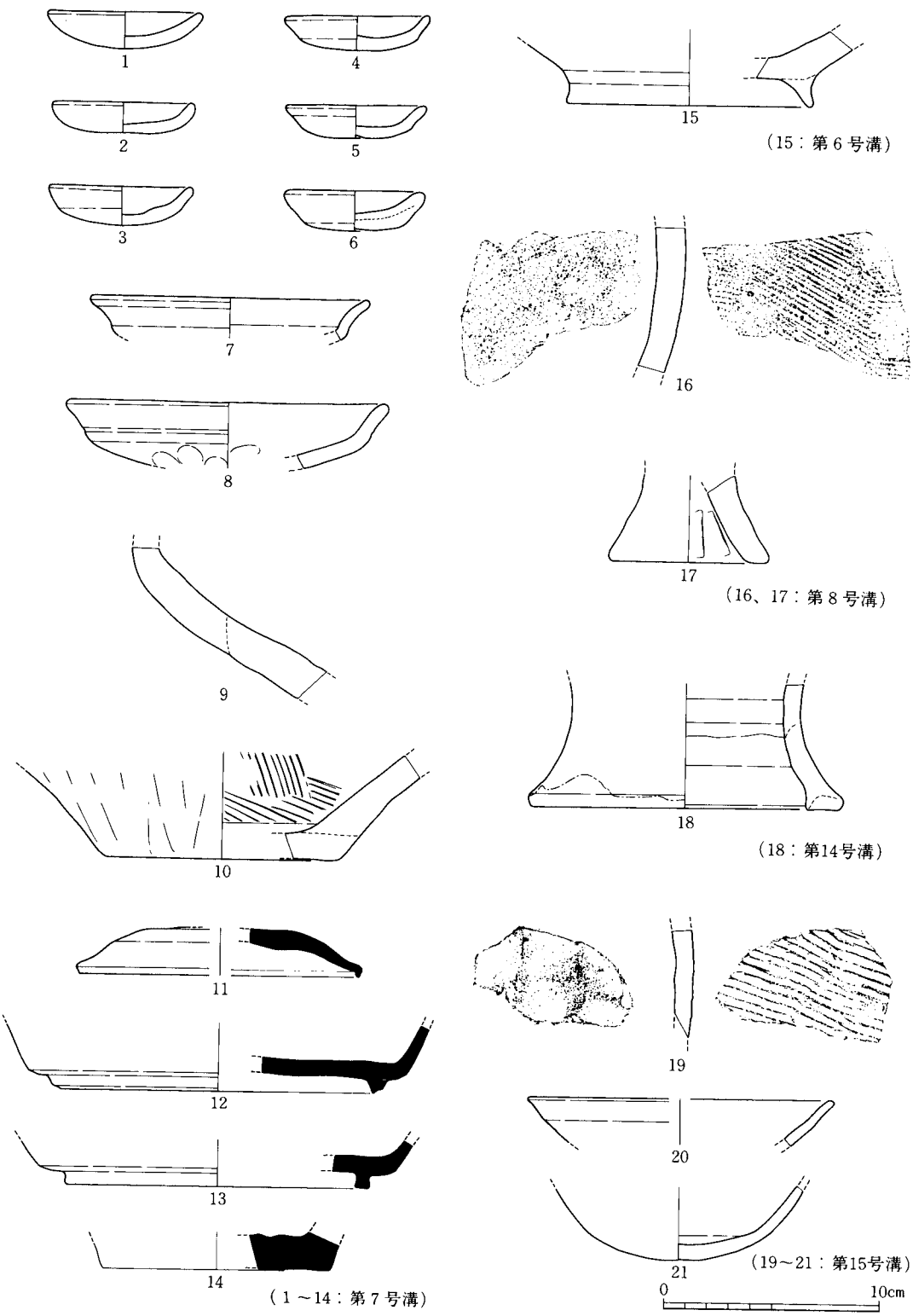
第46図　溝実測図（第1～7・10号溝、S＝1／60）



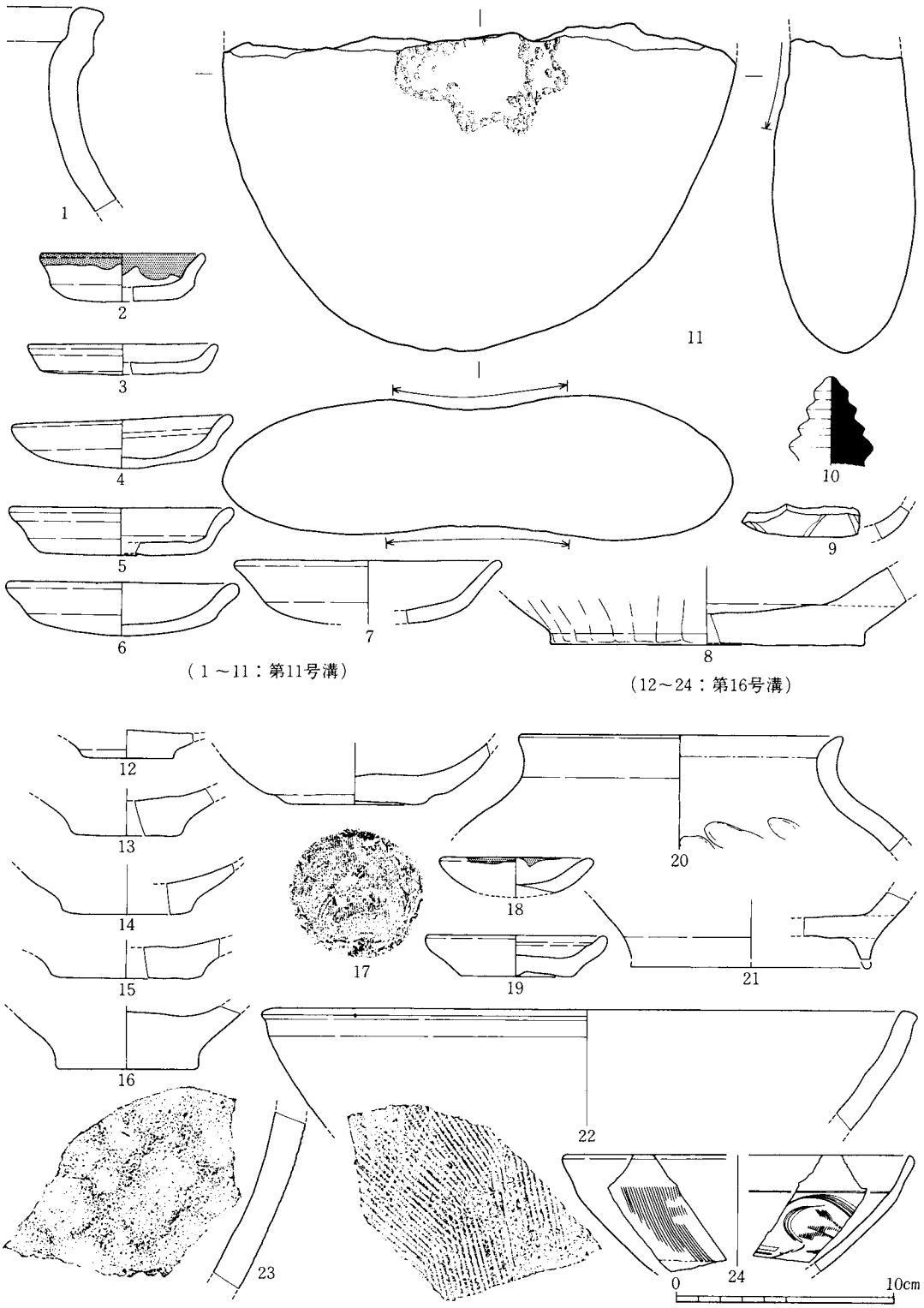
第47図　溝実測図（第８・９・11〜16号溝、S＝1／60、S＝1／200）



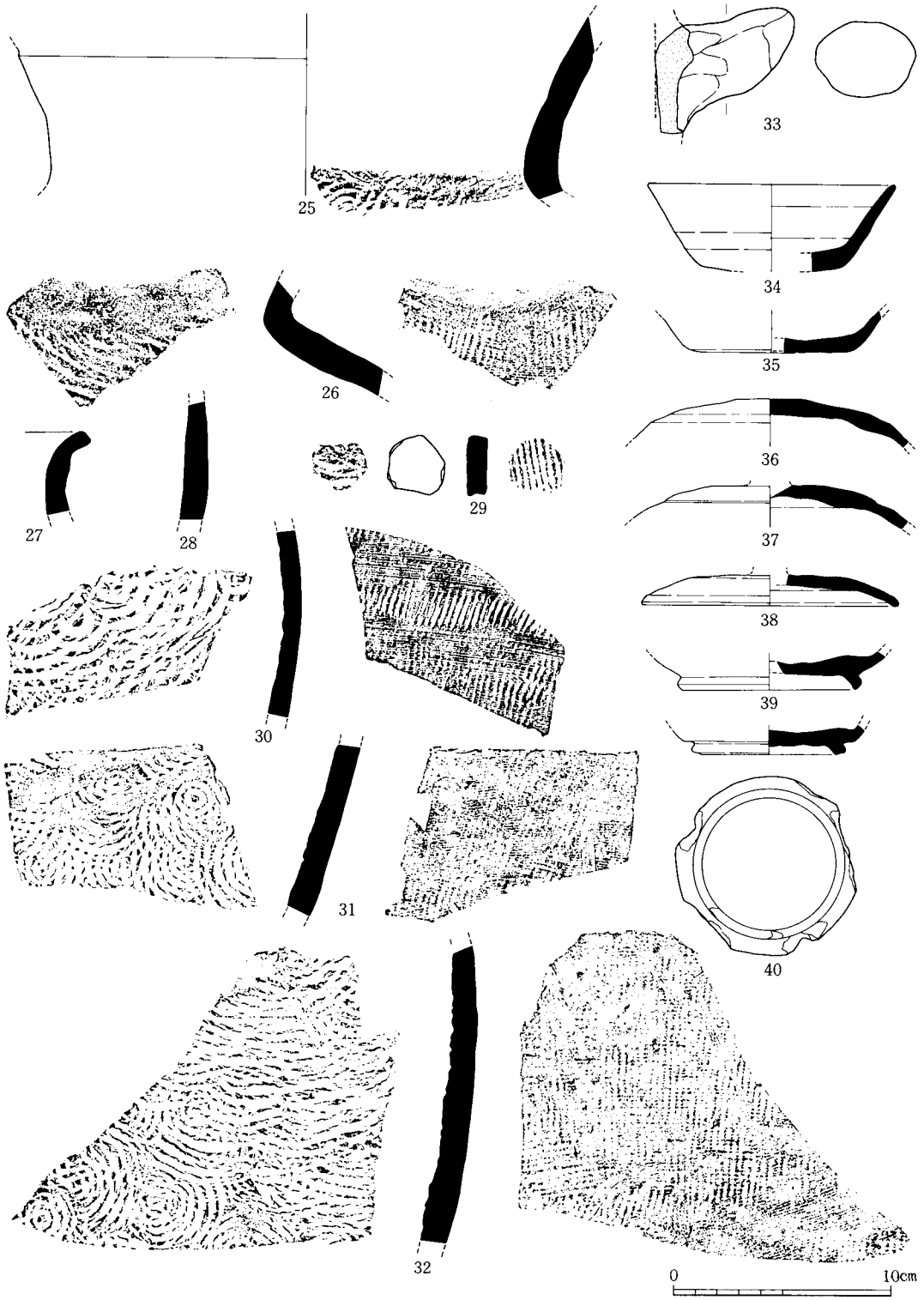
第48図　第１号溝出土遺物（Ｓ＝1／3）



第49図　溝出土遺物（第6～8・14・15号溝、S＝1／3）



第50図　第11・16号溝出土遺物（S＝1／3）



第51図　第16号溝出土遺物（S＝1／3）

第７節　その他の遺構（ＳＸ、ピット）

１　ＳＸ

概　　要

第１次調査では、不整形な浅い落ち込みをＳＸ（１・３～８、２は欠番）とした。そのうち、図化し得る遺物が出土したのはＳＸ－７と８である。以下、この二つについて説明する。その他については全体図等を参照されたい。

ＳＸ－７（第52図１、第53図）

Ｃ・Ｄ－６区に位置し、主軸を南北方向にとる。長軸３ｍ、短軸１ｍ、深さ約10㎝を測る。断面は逆台形に近い皿形を呈する。同様な遺構ＳＸ－６が、ＳＸ－７中ほどで東側に直交して近接する。台石（１）が出土している。

ＳＸ－８（第52図２・３、第53図）

Ｆ・Ｇ－５区に位置し、第13号溝に切られている。南北３ｍ以上、東西4.2ｍ以上、深さ約20㎝を測る。断面は皿形を呈する。加賀焼擂鉢（２、13世代）、瀬戸灰釉皿（３、14世代）が出土している。

小　　結

不整形な浅い落ち込みの性格については不明な点が多いが、ＳＸ－８の規模・形状・覆土などは、第１次調査で竪穴としたものに類似している。

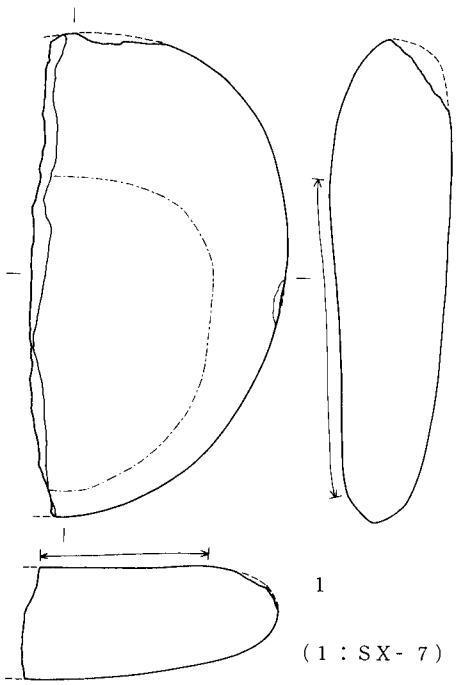
２　ピット

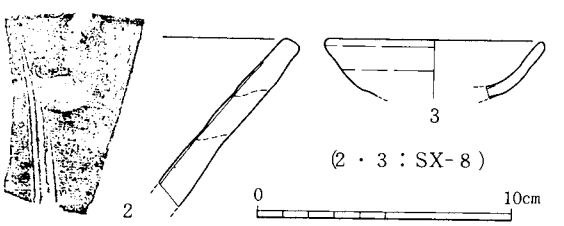
概　　要

第１次調査で検出された掘立柱建物跡は６棟であるが、それ以外にも多くのピットが検出された。ここでは図化し得る遺物が出土したものについて説明する。各ピットの位置関係等は全体図等を参照されたい。

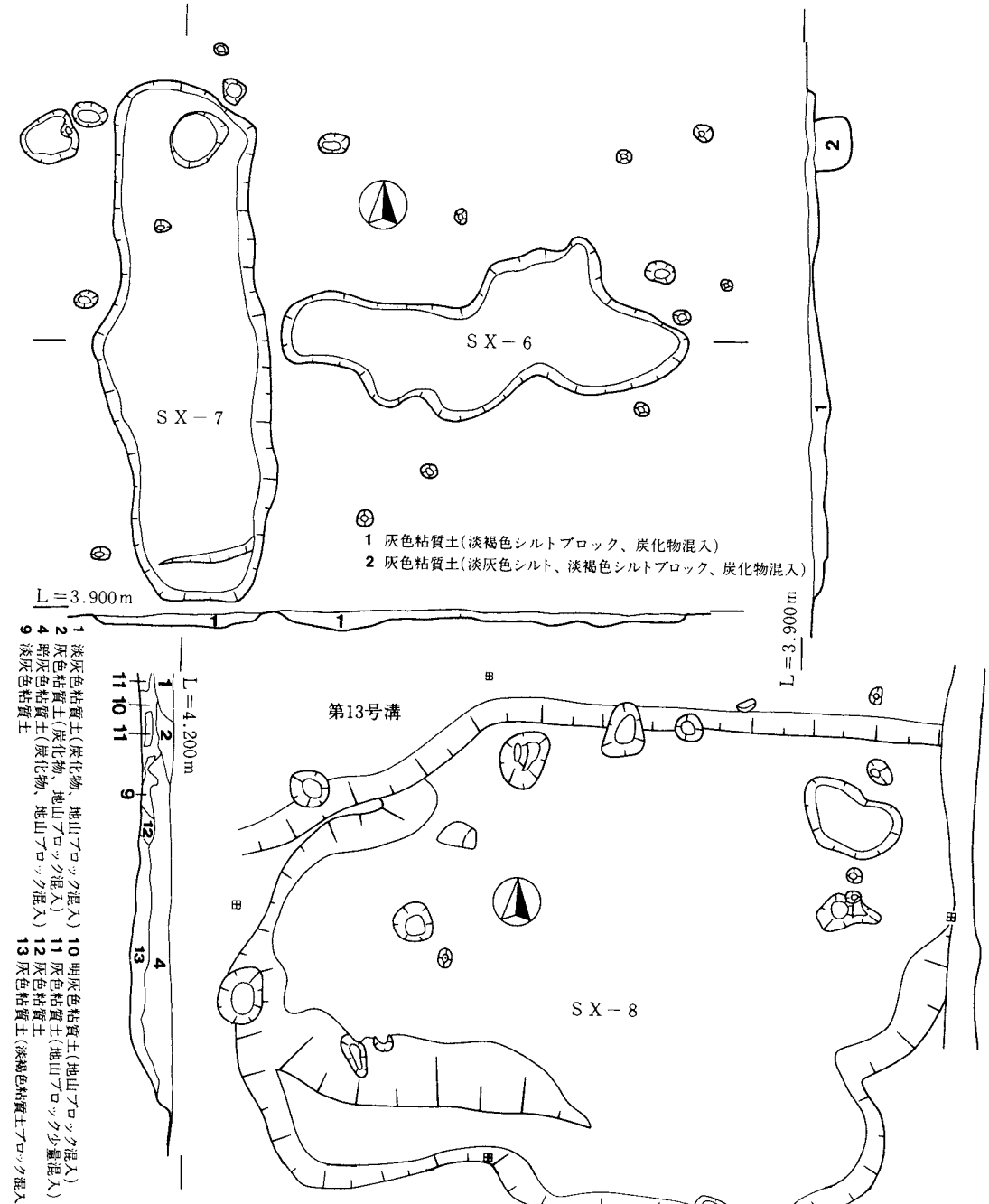
ピット出土遺物（第54図１～７）

１は有段口縁脚台付壺で、２の鉢とともにＥ－３区Pit83から出土した。全体的に摩耗しているが、口縁部外面には擬凹線文を施し、頸部には二孔一対の孔（直径６㎜）を穿つ。胴部外面には突帯状の面をもつ





第52図　ＳＸ－７・ＳＸ－８出土遺物（Ｓ＝1／3）



第53図　ＳＸ６・７、ＳＸ－８実測図（Ｓ＝1／40）

ほか、外面肩部以下を各種文様で装飾する。文様は上位から、陰刻渦文、擬凹線文（２条、ただし１本ずつ施文していると思われる。以下同様）、斜向刻目（途中で傾きが変わる）、擬凹線文（２）、Ｂ類スタンプ文（連続渦文）、擬凹線文（３）、陰刻渦文、擬凹線文（１）、突帯上に擬凹線文（１）、陰刻渦文、胴部下位に擬凹線文（１）、陰刻渦文で、それより下位にも擬凹線文と陰刻渦文が施されている可能性が高いが、摩耗のため確認できない。調整は内外面ともナデと思われるが、同様に摩耗のため確証を欠く。色調は淡黄褐色、胎土には石英粒、風化した黒雲母粒、赤色酸化粒のほか、黒色鉱物粒などが含まれる。口径11.4cm、胴部最大径17.7cmを測る。２の鉢は、１とともにPit83から折り重なるようにして出土した。色調は淡黄灰色、胎土には２㎜前後の砂粒を多く含む。口径12.6cm、器高5.7cmを測る。１（・２）は、弥生時代後期後半「法仏式」土器である。

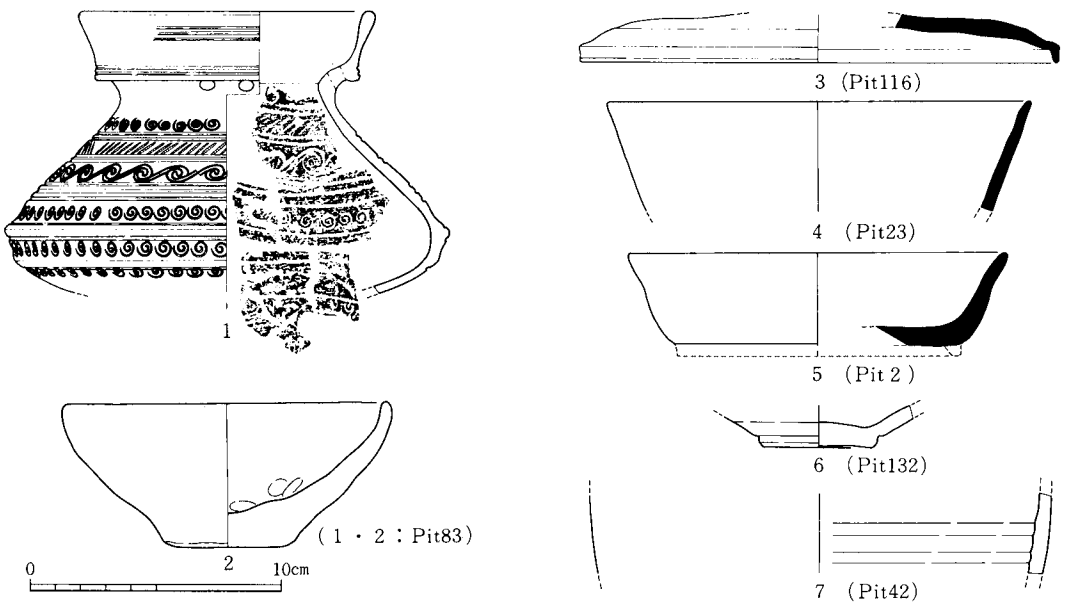
３は須恵器蓋で、Ｅ－４区Pit116から出土した。口径18.8cmを測る。４は須恵器有台杯で、Ｆ－２区Pit23から出土した。口径16.6cmを測る。５も須恵器有台杯で、Ｆ－１区Pit２から出土した。口径14.8cm、底径10.6cm、高台部を欠くが、器高は４cm程度と考えられる。

５は瀬戸灰釉椀で、Ｆ・Ｇ－６区Pit132から出土した。６は越州窯青磁瓶で、Ｄ－２区Pit42から出土した。５には15世紀中頃の、６には９世紀後半の年代観が与えられている。

このほか、Ｆ－３区Pit96から鉄釘（長さ５cm）と鉄滓（重さ65ｇ）が出土している。

小　結

第１次調査で出土した弥生時代の遺物は非常に少なく、器形のわかるものはPit83出土の２点（１・２）のみである。しかしながら、１の壺は該期の他地域との影響関係や並行関係を考えるうえで貴重な資料である。以前、「吉竹遺跡」報告書のなかで、この壺を紹介したことがあるが、その際、陰刻渦文とともに同心円文が施文されているとしたが、それらはすべて陰刻渦文で



第54図　第１次調査ピット出土遺物（Ｓ＝1／3）

あり、訂正しておきたい。同種の壺は、県内では野々市町押野タチナカ遺跡、加賀市敷地町後方遺跡、金沢市押野西遺跡で、他に北陸では福井市林遺跡、富山市ちょうちょう塚などで出土が知られている。B類スタンプ文の類例は、前述の敷地町後方遺跡、ちょうちょう塚のほか、加賀市永町ガマノマガリ遺跡、松任市法遺跡、富山県滑川市魚躬遺跡出土品などがあげられる。北陸では現在、手取川扇状地以西（伏見川以西）の加賀・越前と越中に類例が分布する。同種の壺・文様は、岡山県久米町法事坊遺跡出土品にみられるように、西日本地域に分布することから、北陸の諸例もそうした地域の影響を受けたものと考えられる。

註

(1) 栃木英道　「考察」『吉竹遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987年　金沢。

(2) 註(1)文献第6表（75頁）E類№5を削除、77頁上から2行目「E類（3・4）、B類（4）」を「E類（3）」へ訂正する。なお、第44図（81頁）凡例記号ⅠとⅡの三角印が逆になっており、あわせて訂正しておきたい。

(3) 野々市町教育委員会調査、整理中。吉田　淳氏の御教示による。

(4) 『敷地町後方遺跡発掘調査報告』　加賀市教育委員会　1982年　加賀。

(5) 『金沢市押野西遺跡』　金沢市教育委員会　1987年　金沢。

(6) 『福井県における弥生式土器集成』　福井考古学研究会　1970年　福井。

(7) 藤田富士夫・駒見和夫　「ちょうちょう塚の概要と若干の考察」『大境』　第7号　富山考古学会　1981年　富山。

(8) 註(4)文献。

(9) 註(7)文献。

(10) 『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター　1987年　金沢。

(11) 石川県教育委員会調査、整理中。谷内尾晋司氏の御教示による。

(12) 『富山県滑川市　魚躬遺跡発掘調査報告書』　滑川市教育委員会　1973年　滑川。

(13) 『世界陶磁全集』1　日本原始　小学館　1970年　東京。

参考文献

名越　勉・甲斐忠彦　「スタンプ施文土器の新例」『考古学雑誌』　第57巻第4号　1972年。

第８節　Ａ－６・７区調査区外出土遺物

概　　要

ここからの出土遺物は、Ａ－７～４－２調査区の西側に調査区内に貯った水を排水するための溝を掘った際に出土したものである。出土状況は、耕土と耕土下の地山（青灰色粘質土）上に挟まれた薄い砂混りの腐植土層中から流れ込みの状態で出土した。出土遺物には多量の土師器及び白磁の皿と碗の破片等が多く存在していた。その出土レベルはＡ－７区調査区内の地山面よりも約20～30㎝高い地点であった。調査最終段階に再度まわりを精査した折り、新たに遺物箱に２箱分の土器が出土した。また、北側のＡ－６区調査区外から、新しい時期の遺物が出土しているが、数量ははるかに少なかった。なかでも多く存在したのは底部片であり図示したものはその一部である。最初にＡ－７区、次いでＡ－６区からの出土遺物について説明したい。

Ａ－７区出土遺物（第55図１～26、第56図27～36）

土師器では小皿・皿・椀、白磁碗・皿等が出土している。土師器はいずれも底部に糸切り痕を持つものである。

小皿で底部の薄いもの　口縁部はヨコナデ調整のあり方から違いは認められるが（１～５・17)、これをまとめた。（１）は口径8.5㎝、器高2.2㎝、底径5.2㎝、色調灰褐色。（２）は8.9㎝、1.9㎝、5.8㎝、褐色系。（３）は9.3㎝、２㎝、５㎝、白色系。（４）は9.1㎝、2.1㎝、4.5㎝、白色系。（５）は8.2㎝、1.9㎝、4.5㎝、橙色系。(17）は底径５㎝、淡黄色。

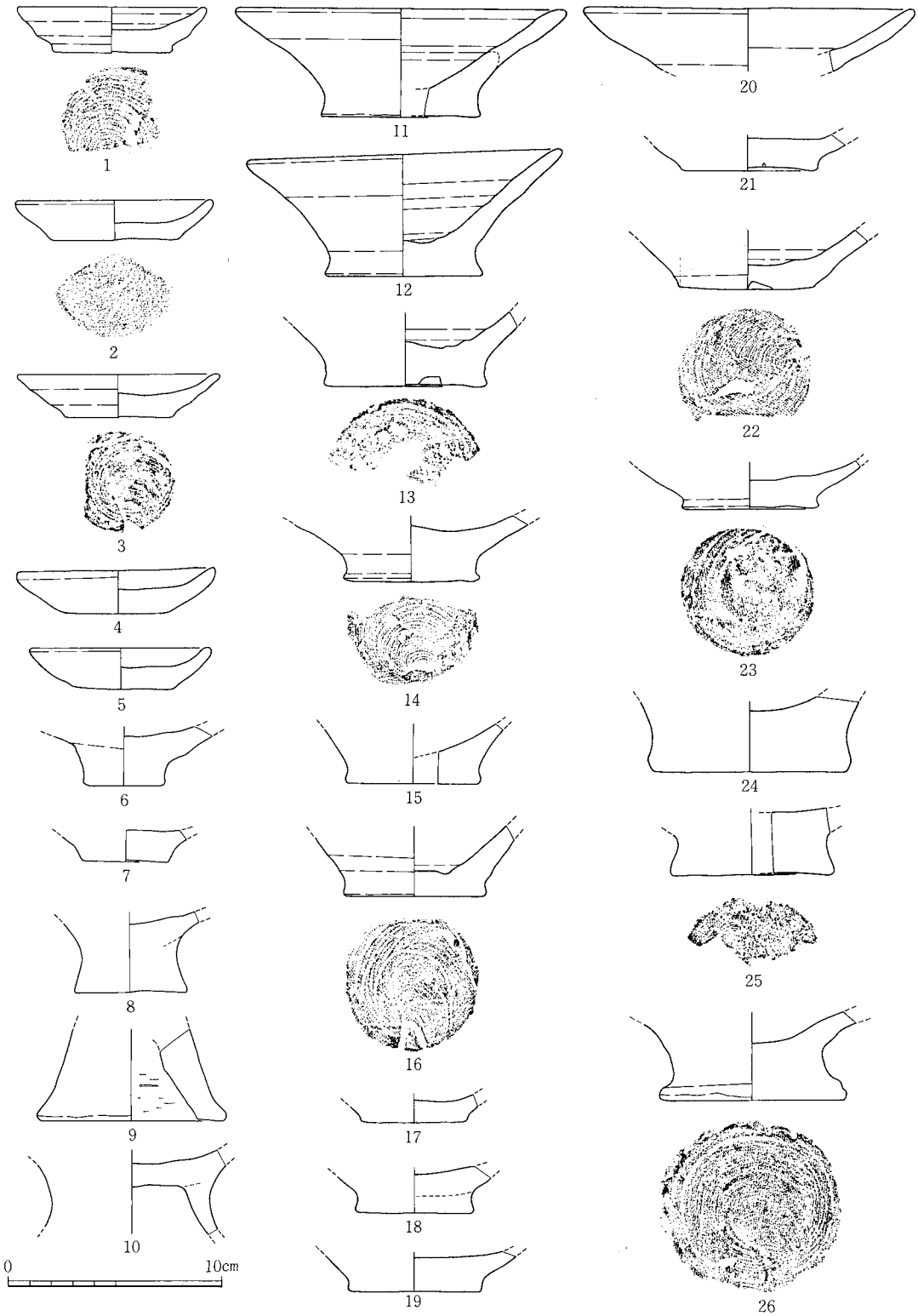
小皿で底部が平高台状のもの　高いものと低いもの（６～８）がある。（６）は底径3.8㎝、高台高2.3㎝、色調白色系。（７）は４㎝、1.4㎝、淡橙色。（８）は5.1㎝、3.2㎝白色系。(39）は出土地点不明だがここで説明しておく。口径7.4㎝、器高1.5㎝、底径8.5㎝、色調は白色系。

皿と椀については底部のみでは区別がつかないが、皿には（11～16）あたりのものが含まれよう。(11）は口径15㎝、器高5.1㎝、底径7.4㎝、色調橙色系。(12）は14.4㎝、６㎝、7.4㎝、橙色系。(13）は底径7.7㎝、白色系。底面に凹穴あり。(14）は6.2㎝、灰白系。(15）は6.2㎝、淡黄色。(16）は6.7㎝、灰色系。

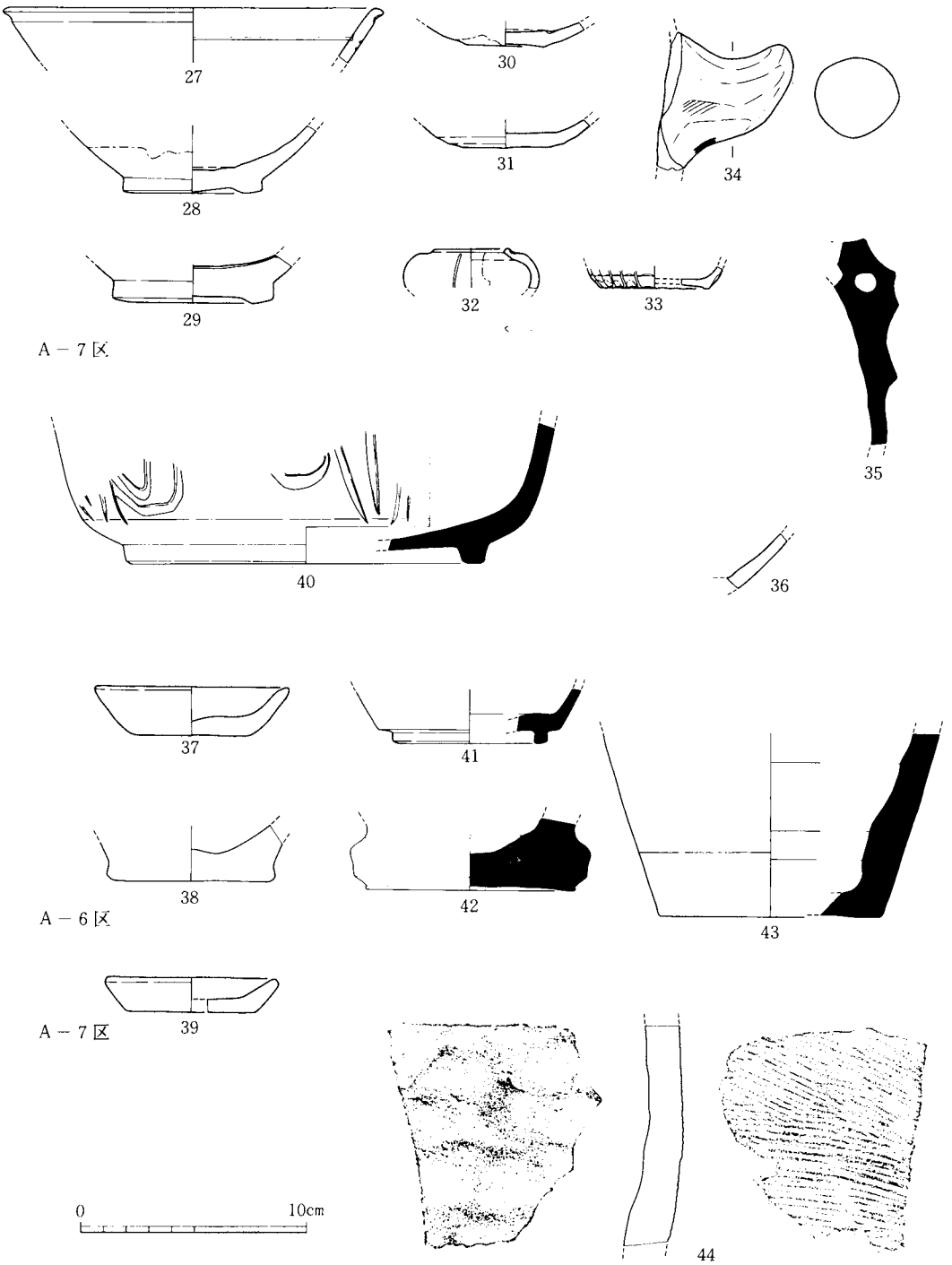
椀　器形の判明する完存品はないが（18～26）を含める。平高台の厚いものも認められる。(18）は底径5.6㎝、色調淡黄色。(19）は6.2㎝、淡黄色。(20）は口径15.1㎝、灰色系。(21）は底径6.3㎝、灰色系。(22）は6.2㎝、橙色系、底面に凹穴あり。(23）は6.3㎝、白色系。(24）は8.9㎝、淡黄色。(25）は7.4㎝、白色系。(25）は7.4㎝、白色系。(26）は8.6㎝、橙色系である。

台付土器　（９・10）がある。（９）は脚径8.4㎝を測る。内面はヘラ削りしている。色調は灰色系を呈する。(10）は（９）よりも脚部の器肉が薄く作られている。色調は淡黄色。

白磁　(27）が碗。口径16㎝、胎土は白色、色調は明オリーブ灰色を呈し、貫入は無い。(28）は底径6.1㎝、胎土は灰白色で、色調が明オリーブ灰色。貫入は無い。



第55図　A－7区調査区外出土遺物（S＝1／3）



第56図　A－7区調査区外出土遺物（S＝1／3）

第９節　包含層出土遺物

概　　要

第１次調査で包含層から出土した遺物は、土師器、土師質土器、須恵器、緑釉、灰釉、青磁、白磁、加賀、越前、珠洲、瀬戸、唐津、伊万里、染付、窯道具、瓦、石製品、鉄製品、古銭などである。昭和58年分布調査時出土遺物を含め、以下順に説明を加える。

土師器・土師質土製品（第57図１～17）

６は蓋で外面赤彩品。８は甕底部、外面に煤が付着し、底面に糸切り痕が認められる。14～17は土錘、重さはそれぞれ27.5、32.7、98.5、164.8ｇを測る。

土師器・土師質土器・瓦質土器（第58図18～55）

18～40は椀・皿・燈明台等、18、24、27、28、31～34の底面には糸切り痕がある。41～54は土師質皿、50の内面屈曲部には布の圧痕（約２㎜間隔）が残る。55は瓦質土器、花瓶脚部片。

須恵器・須恵質土製品（第59～62図56～128）

56～66は（杯）蓋、67は高杯、68～71、74～83、85～90は杯（身）・椀、72・73・84は盤、91は硯、93は鉢、92、94～114は壺・瓶、115～126は甕、127、128は土錘である。61の内面と77の外底面には「○」・「能」が墨書され、62と107の内面には墨痕がある。72は外底面に「－」のヘラ記号をもつ。73の外底面には漆状のものが付着し、77、86、90の同面には糸切り痕がある。99と100は同一個体の可能性がある。127、128の重さはそれぞれ12.1、25.7ｇを測る。

緑釉陶器・灰釉陶器（第62図129～131、132～135）

129～131は緑釉椀・皿。色調は灰白色（129、130）、暗灰色（131）、釉は緑色（129）、淡緑色（130）・オリーブ灰色（131）である。132～135は灰釉椀、色調は灰白色、釉はオリーブ灰色である。

青　　磁（第63図136～155）

136～148は椀、149～154は皿、155は香炉である。142、150は内面に印花を施文するが明瞭ではない。147は二次加熱を受け釉が白濁化している。151の外底面、155の内外底面には墨痕が認められる。

白　　磁（第64図156～188）

156～170は椀（156～163は玉縁椀、169、170は口禿椀）、171～183は皿（171～173は高台付皿、178～180は口禿皿、182は菊皿、183は紅皿（？））、184～187は杯（184、185は八角杯）、188は四耳壺である。163～165の内面、177の内底面と182の内外面には、それぞれ櫛状具、ヘラ状具による文様があり、180の内面にも施文（内底面にもあるが不明瞭）がある。164は円盤状製品の可能性もある。173、183は高台に四箇所抉り込みがあり、外底面に「－」・「昌」をそれぞれ黒漆・朱漆（？）で記している。

加 賀 焼（第65・66図189～216）

189～205は甕、206～208は壺、209～216は鉢（209、210、213～216は擂鉢、211は片口鉢）である。189は肩部外面に漆状のものが付着し、196～200は同面に押印（菊花文、格子文他）をもつ。201～203は内面ナデ、204は外面ナデ調整。190は常滑焼の、201～204は須恵器系陶器の可能

性があり、215、216は製品同定に保留部分を残している。

なお、第66図217、218の擂鉢と蓋は、加賀焼ではなく、時期的にも近世に属するものであろう。

越 前 焼（第67図219～235）

219～224は甕、225～235は鉢（225～227、231～234は擂鉢、229は片口鉢）である。221は外面に櫛状具痕、222、223は押印を有する。229は口縁部外面に炭化物が、235は内面に漆状のものが付着する。

珠 洲 焼（第68・69図236～260）

236～239は甕、240～247は壺、248～259は擂鉢、260は片口鉢である。239の内面には赤色顔料様のものが、253には煤状のものが付着する。239、241、242の外底面には静止糸切り痕が認められる。

瀬戸系陶器（第70・71図261～294）

261～286は灰釉、287～294は鉄釉である。261～263は盤、264～269、291～294は皿（269はあるいは盤か）、270～273はおろし皿、274～281、287～290は椀、282は小壺、283、284は瓶、285は花瓶、286は香炉である。269、273、288の破断面には補修痕がある。269の内底面には円形沈線（５重）がある。282は肩部外面に粘土を貼付けたのち菊花・格子状の押印を施す。288は外面下位に鉄化粧が施される。

その他の陶磁器（第71図295～303）**・窯 道 具**（第71図304、305）

295～301は唐津（系、296は保留部分を残す）、302は伊万里（系）、303は染付である。295、296は鉢、297、317は椀、298～301は皿、303は盤か。299の外底面には煤状のものが付着する。302は外面に鉄釉、内面に鉄釉、黄色釉、呉須による上絵、高台外面と内面屈曲部に緑色の釉が施される。304、305はハマである。それぞれ淡黄色、暗赤褐色を呈し、重さは12.3、83.2ｇを測る。

瓦（第72図306～308）

306～308は丸瓦、306は外面圧褐色、内面黄橙色、307、308は灰色を呈する。

石 製 品（第72・73図309～316）

309～313、316は砥石、314は不明石製品、315は行火である。

古　　銭（第73図317～323）**・鉄製品**

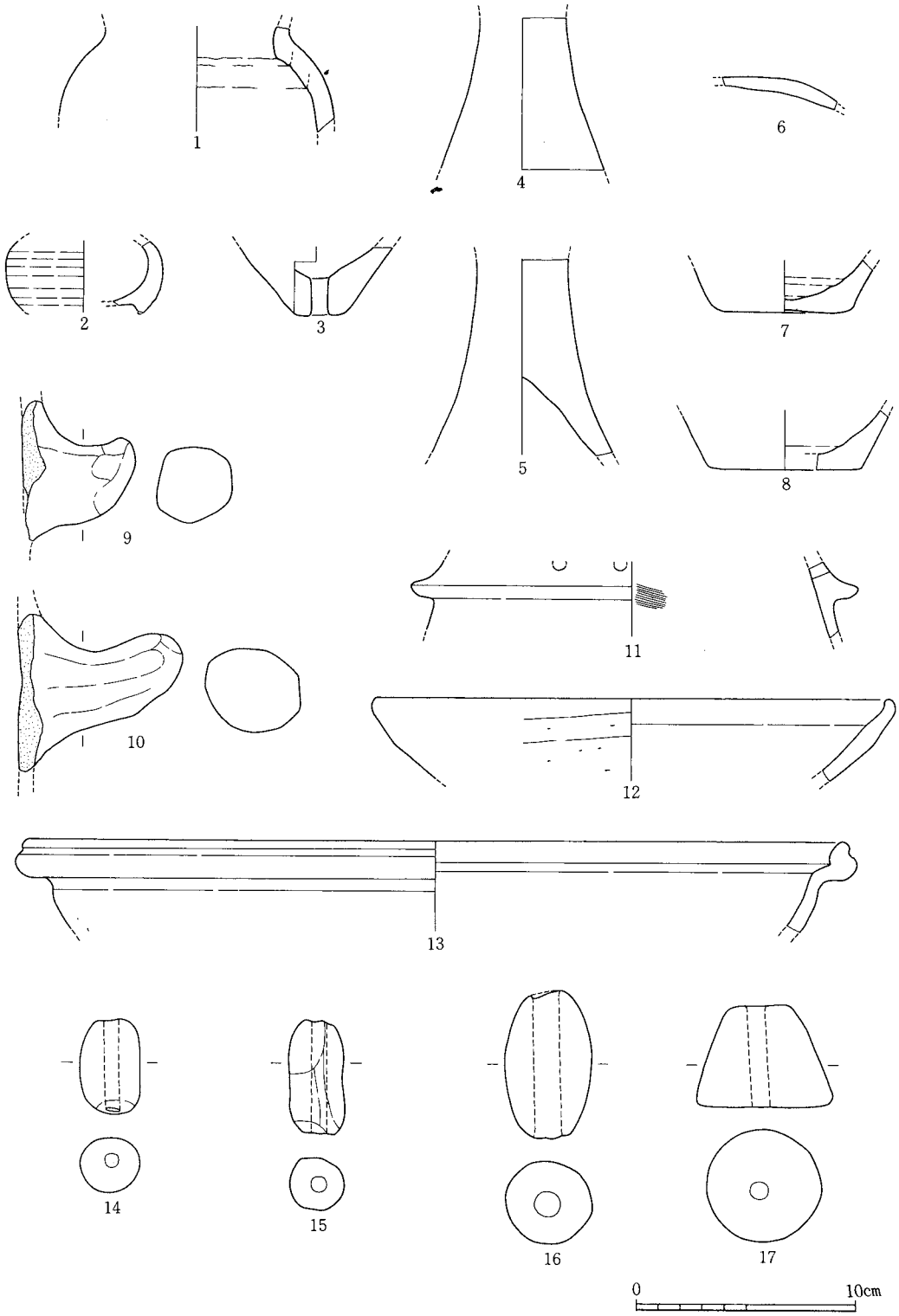
317から順に開通元宝、天聖元宝、皇宋通宝、嘉祐通宝、熙寧元宝、元符通宝、寛永通宝である。開通元宝と寛永通宝を別とすれば、他の古銭の初鋳年は11世紀代である。ほかに釘を主体とした鉄製品（図版37参照）と、鉄滓（総重量1,698ｇ）が出土している。

分布調査時出土遺物（第73図324～335）

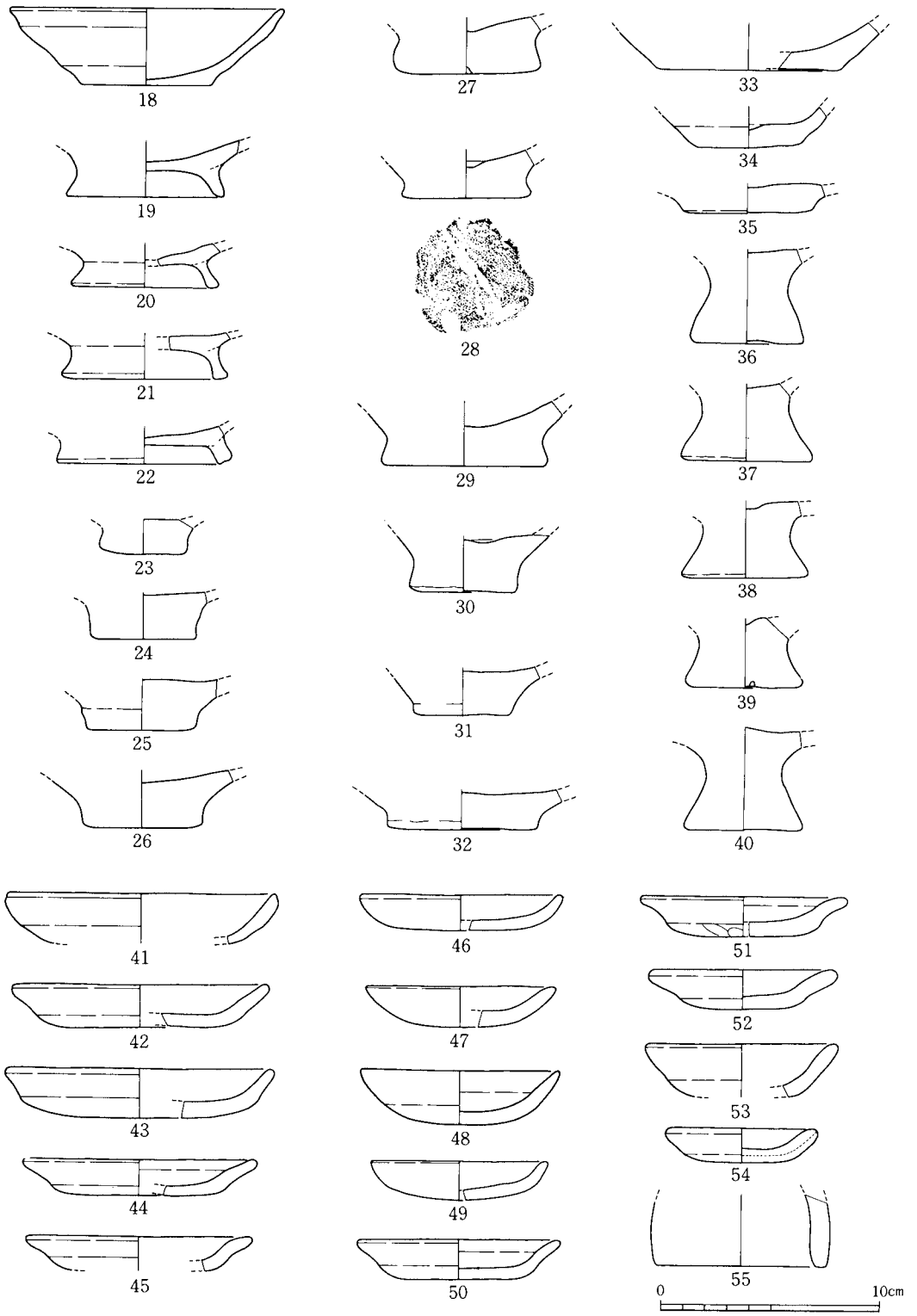
324は土師器壺、325は土師質土錘（重さ14.7ｇ）、326、327は土師器椀・皿類、328、329は須恵器高杯、瓶、330は灰釉瓶、331は唐津皿、332は青磁椀（内底面に印花を施文する）、333は白磁椀、334は灯器（内面に鉄釉、外面には煤付着）、325は蓋である。

小　　結

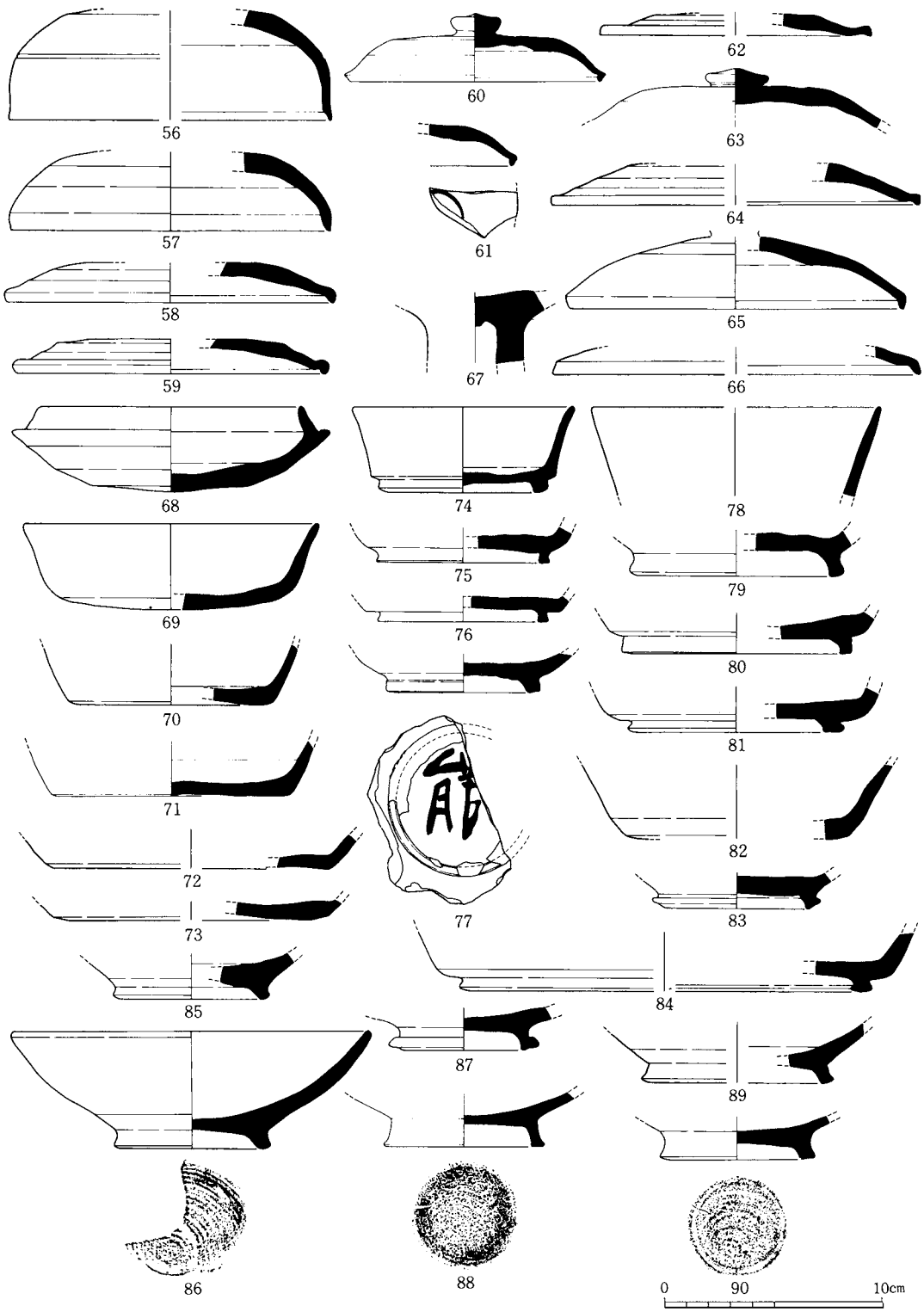
包含層出土遺物は、概ね本遺跡（調査区）で検出された遺構の時期幅に対応するものと思われるが、その量的比率については、個体数の把握方法の問題もあり、ここでは明らかにし得ない。



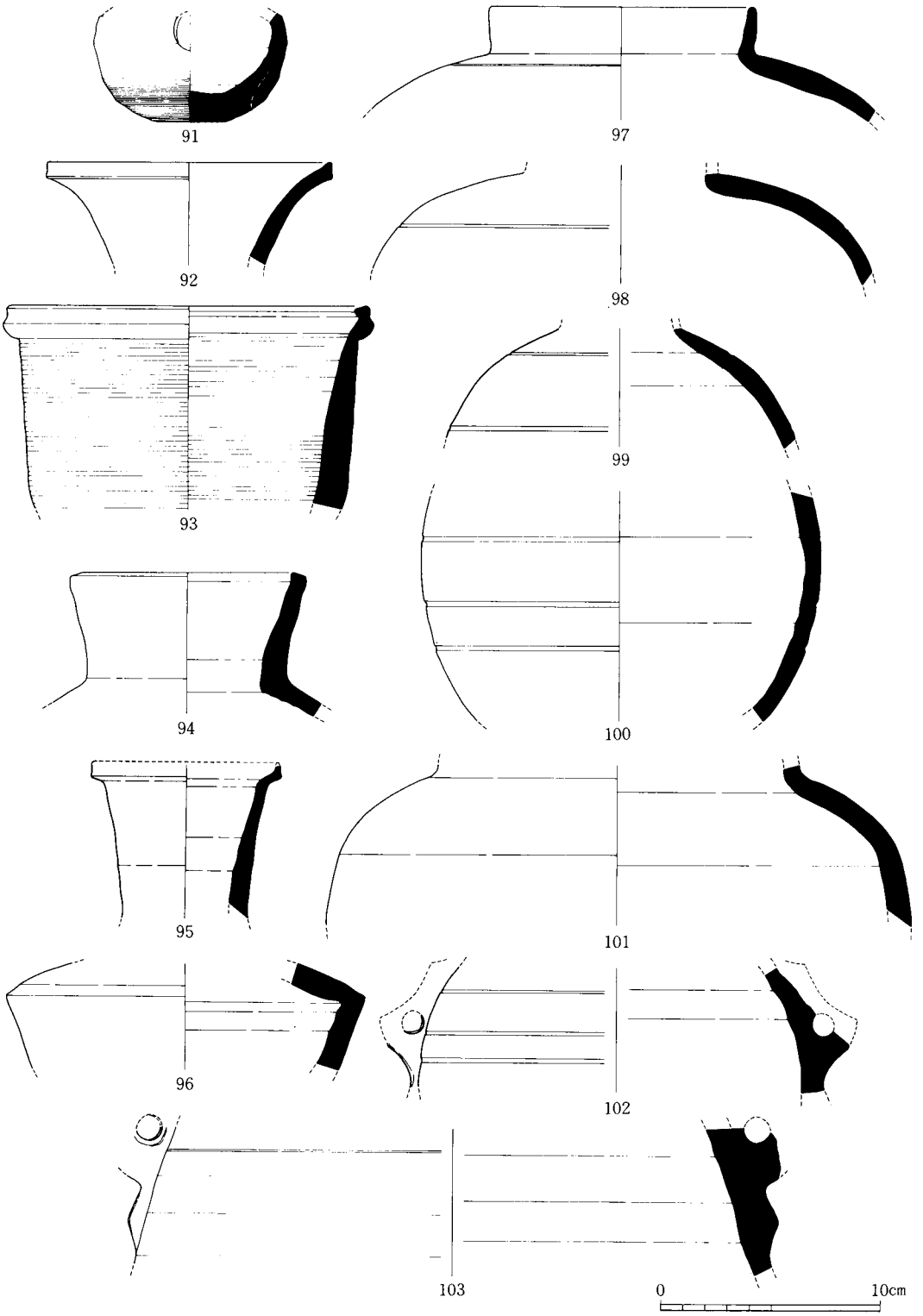
第57図　第１次調査包含層出土遺物（土師器他、S＝1／3）



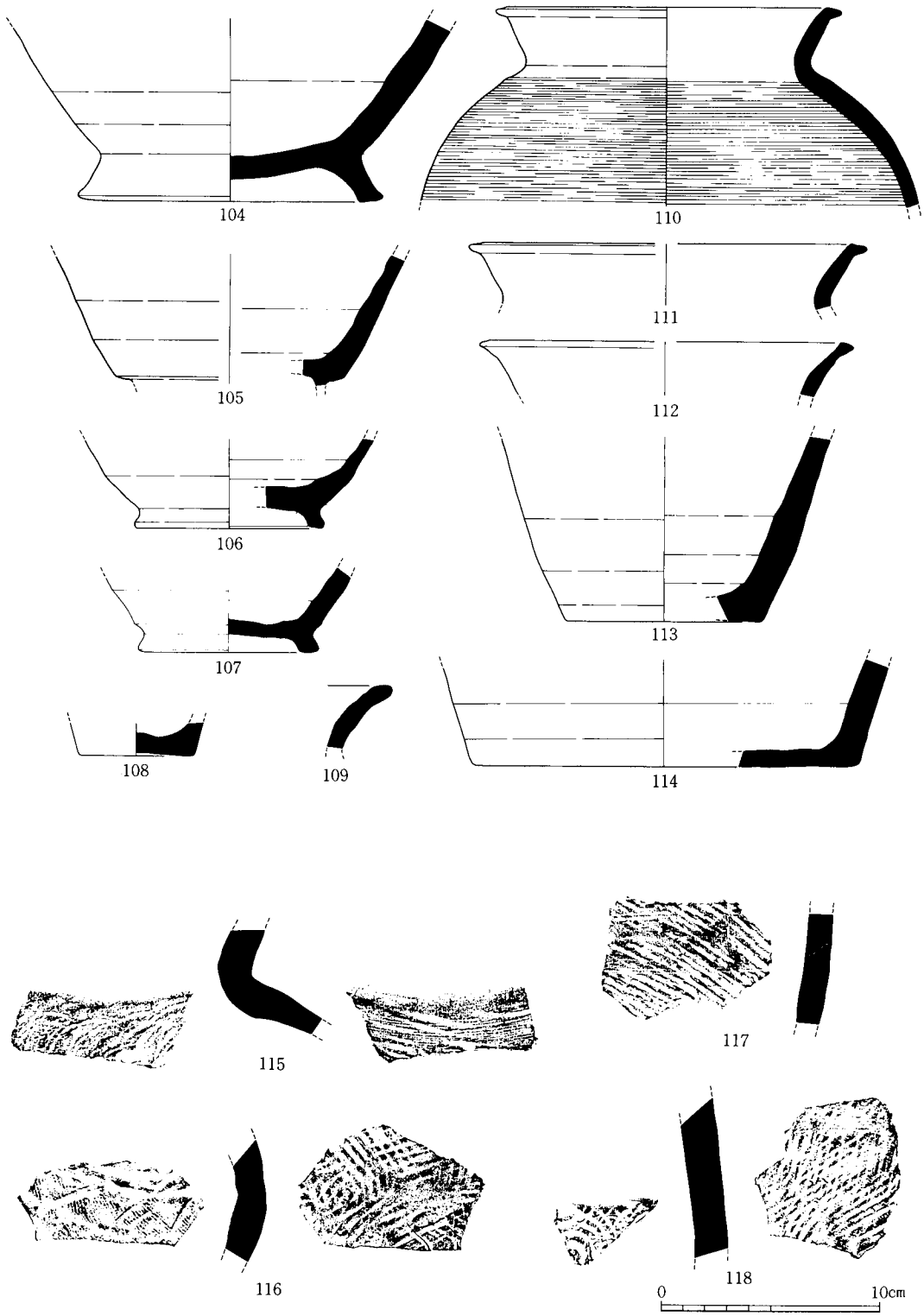
第58図　第１次調査包含層出土遺物（土師質土器他、S＝1／3）



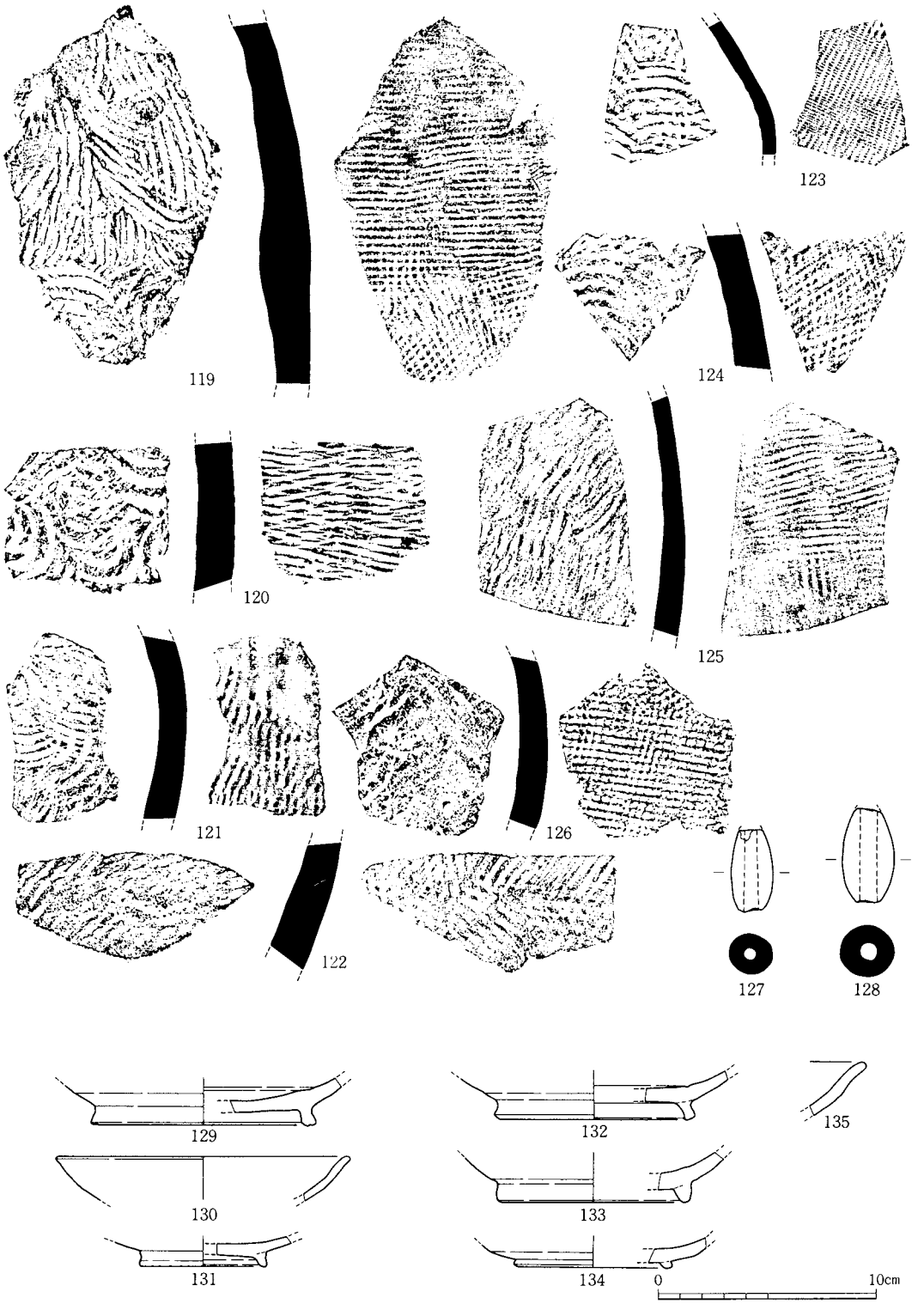
第59図　第１次調査包含層出土遺物（須恵器杯・椀他、Ｓ＝1／3）



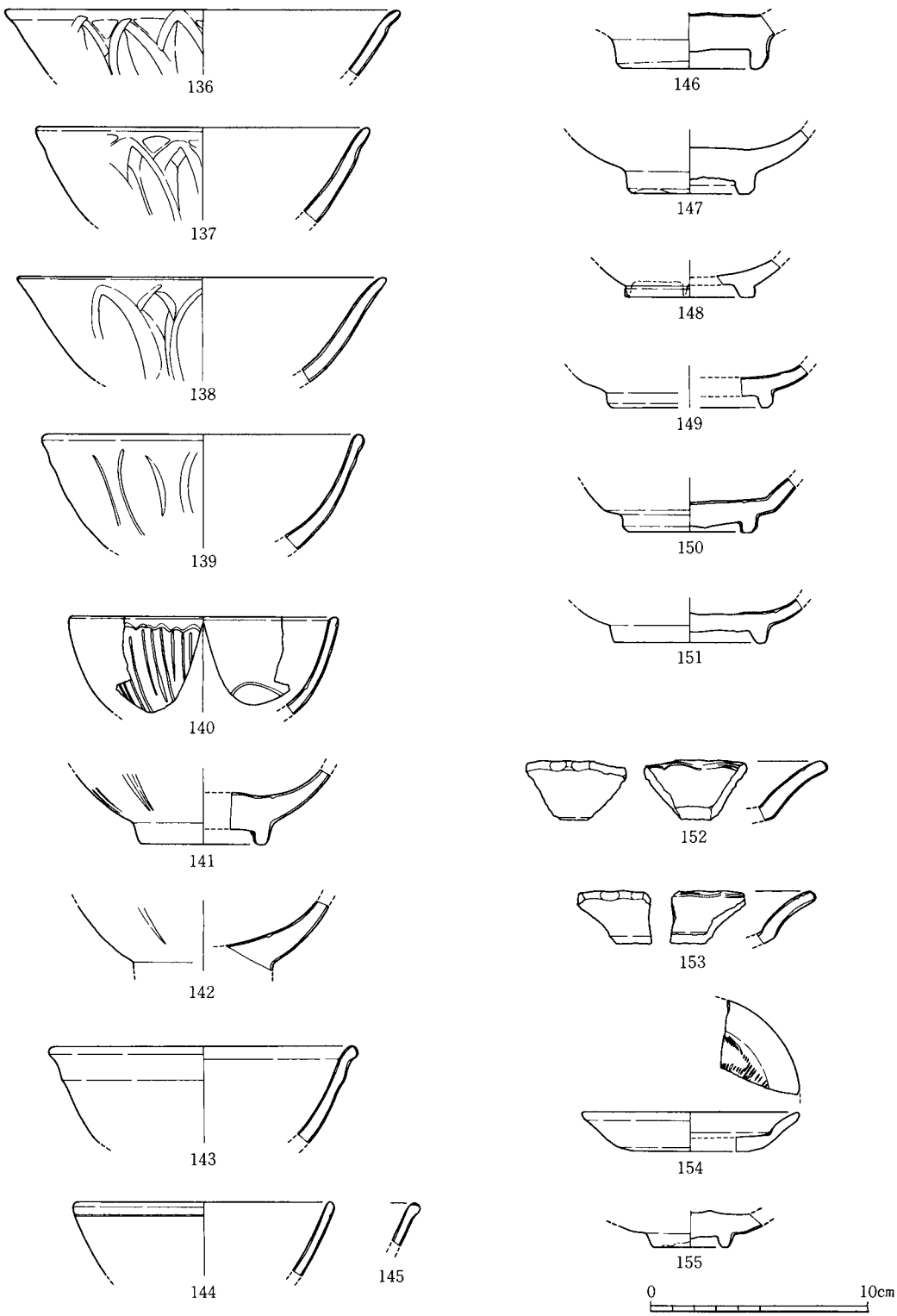
第60図　第１次調査包含層出土遺物（須恵器壺・瓶他、S＝1／3）



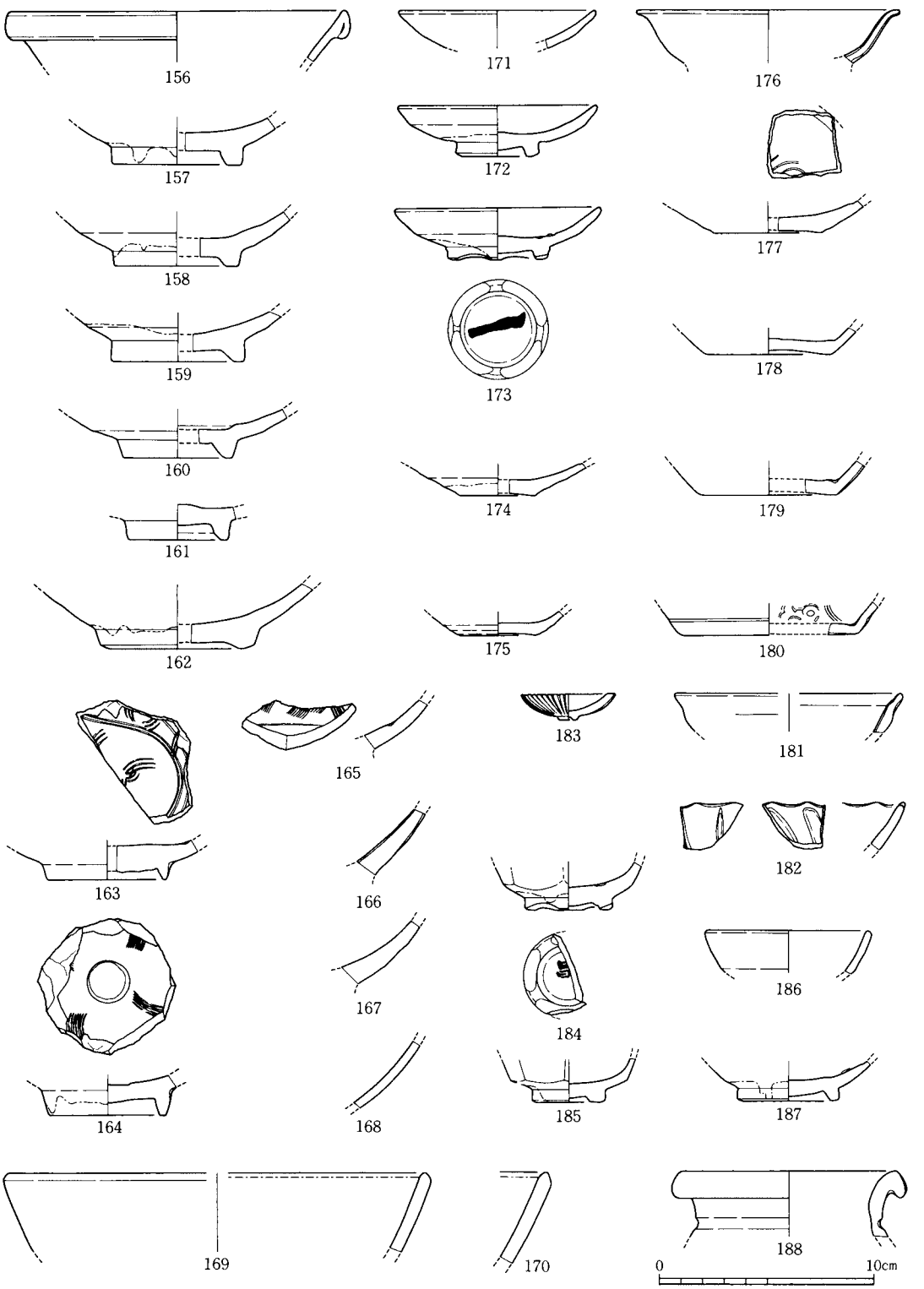
第61図　第１次調査包含層出土遺物（須恵器・壺・甕他、Ｓ＝1／3）



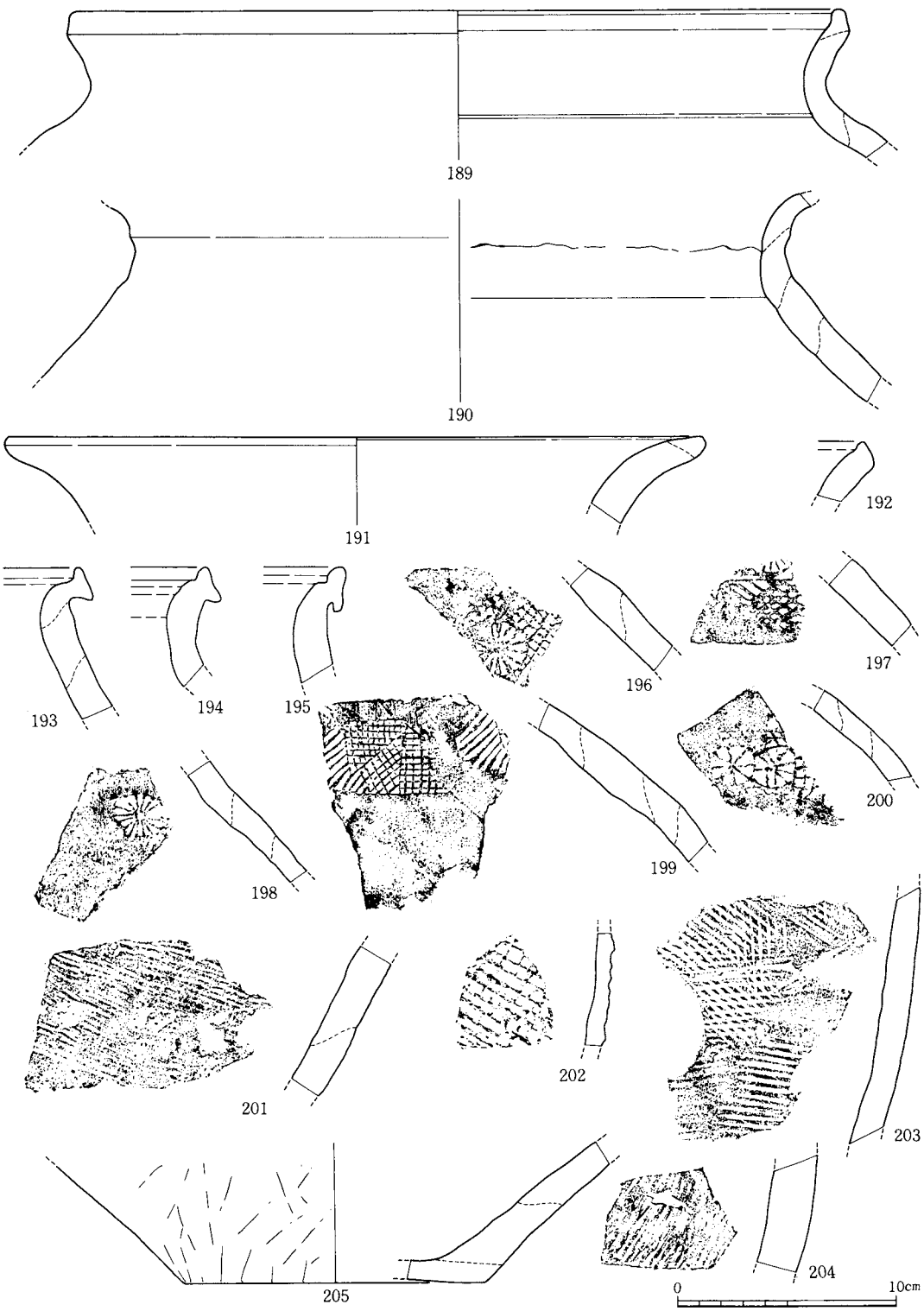
第62図　第１次調査包含層出土遺物（須恵器甕、緑釉・灰釉陶器他、S＝1／3）



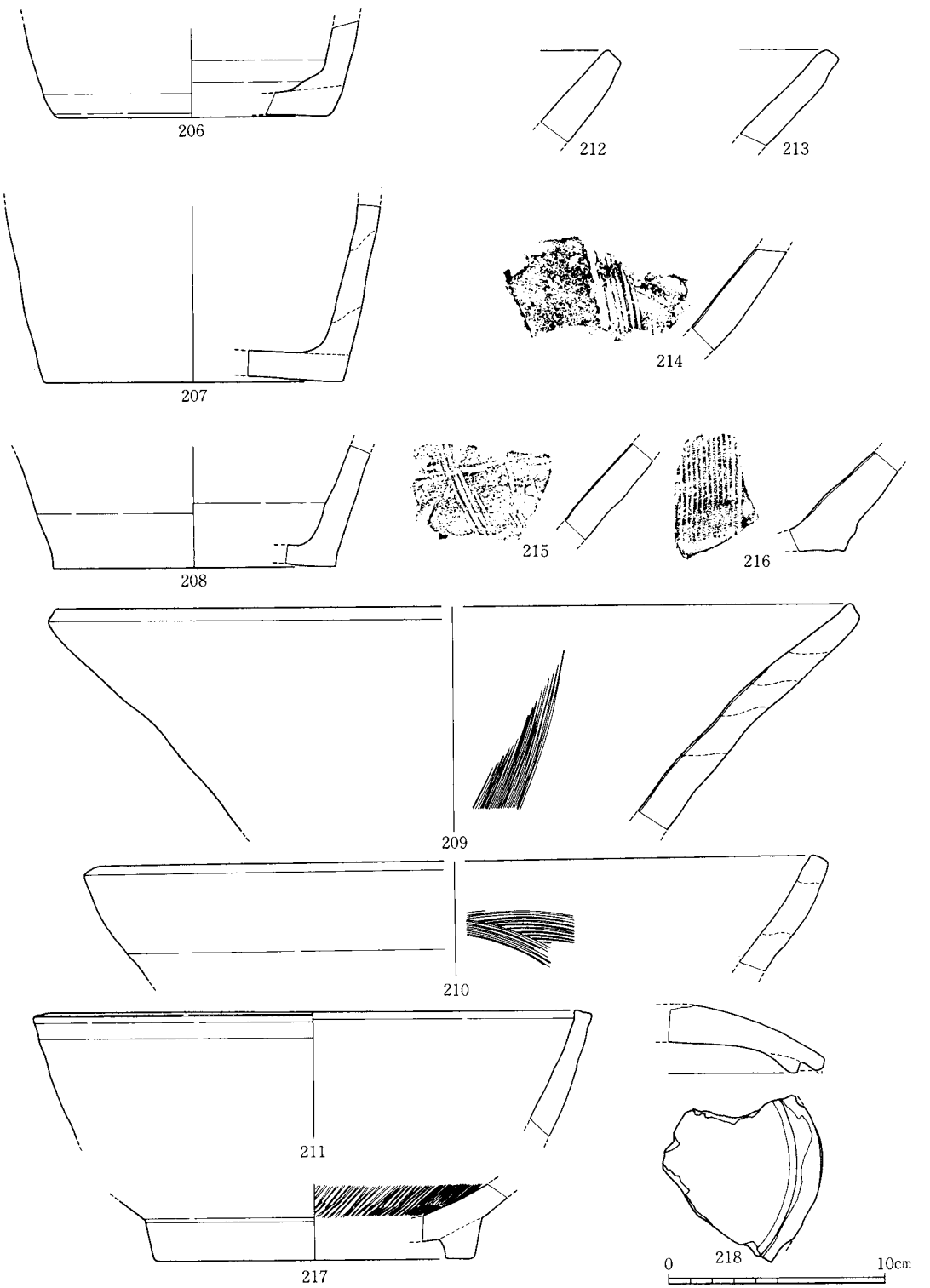
第63図　第１次調査包含層出土遺物（青磁、S＝1／3）



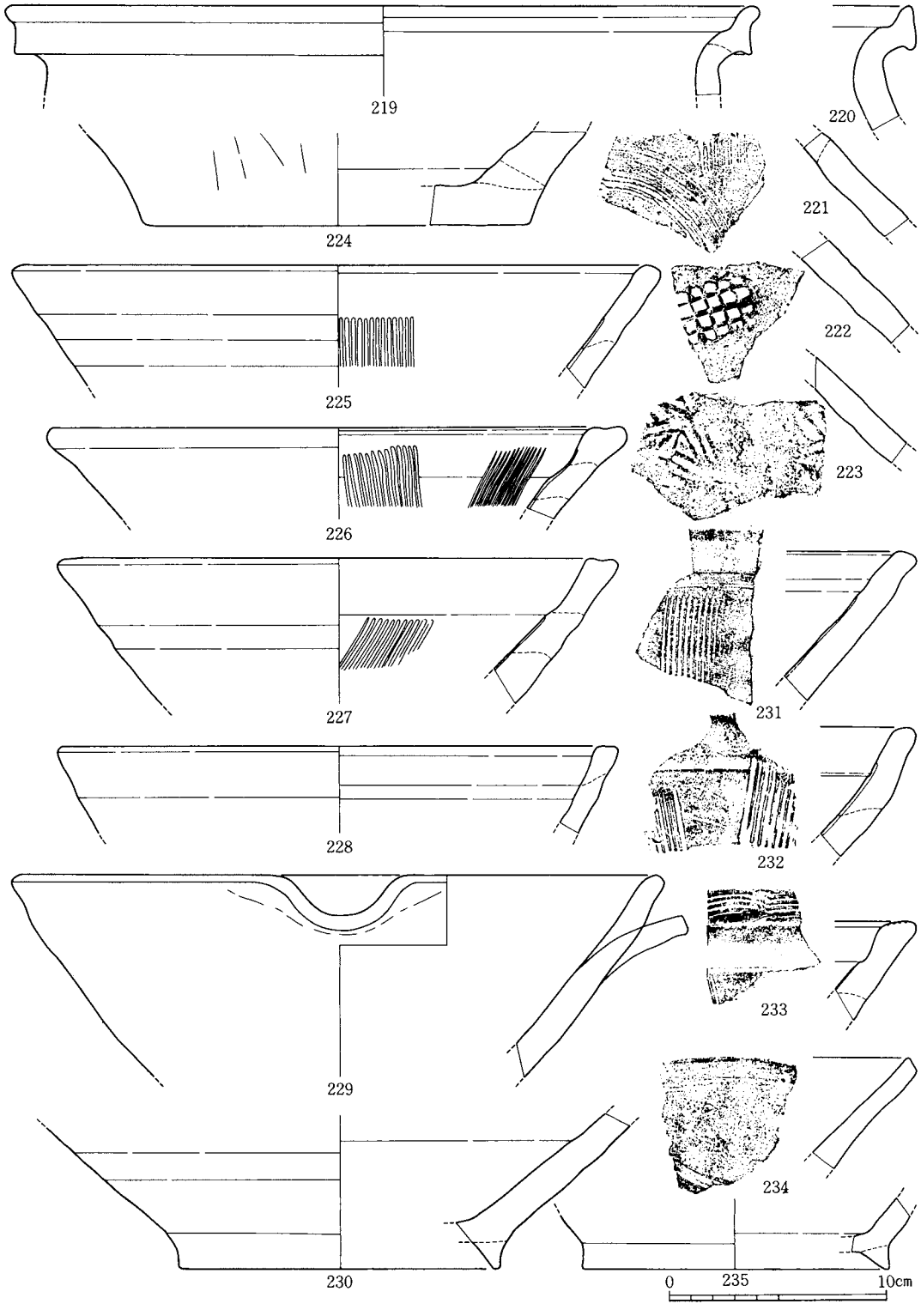
第64図　第１次調査包含層出土遺物（白磁、S＝1／3）



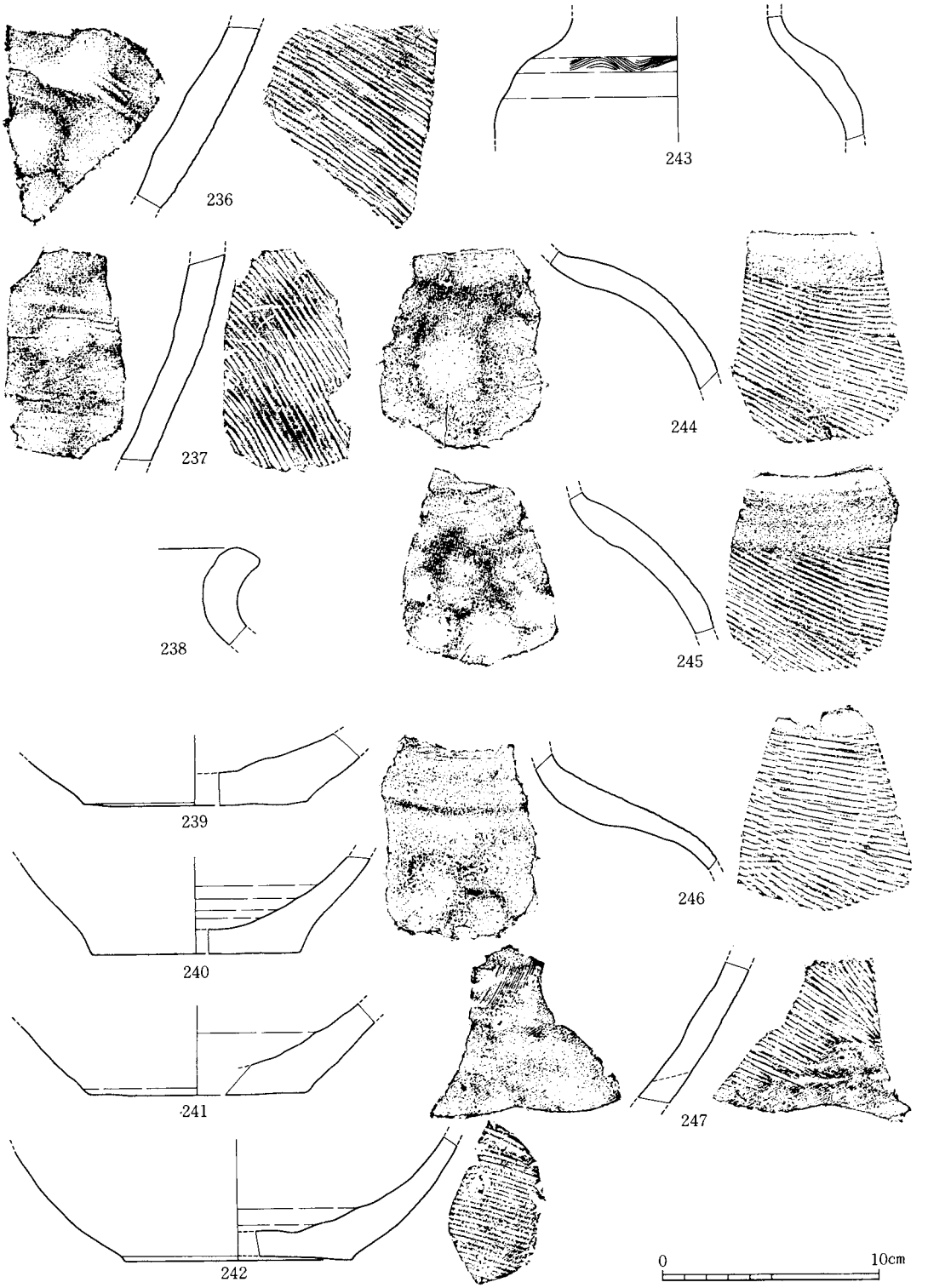
第65図　第１次調査包含層出土遺物（加賀焼甕、Ｓ＝1／3）



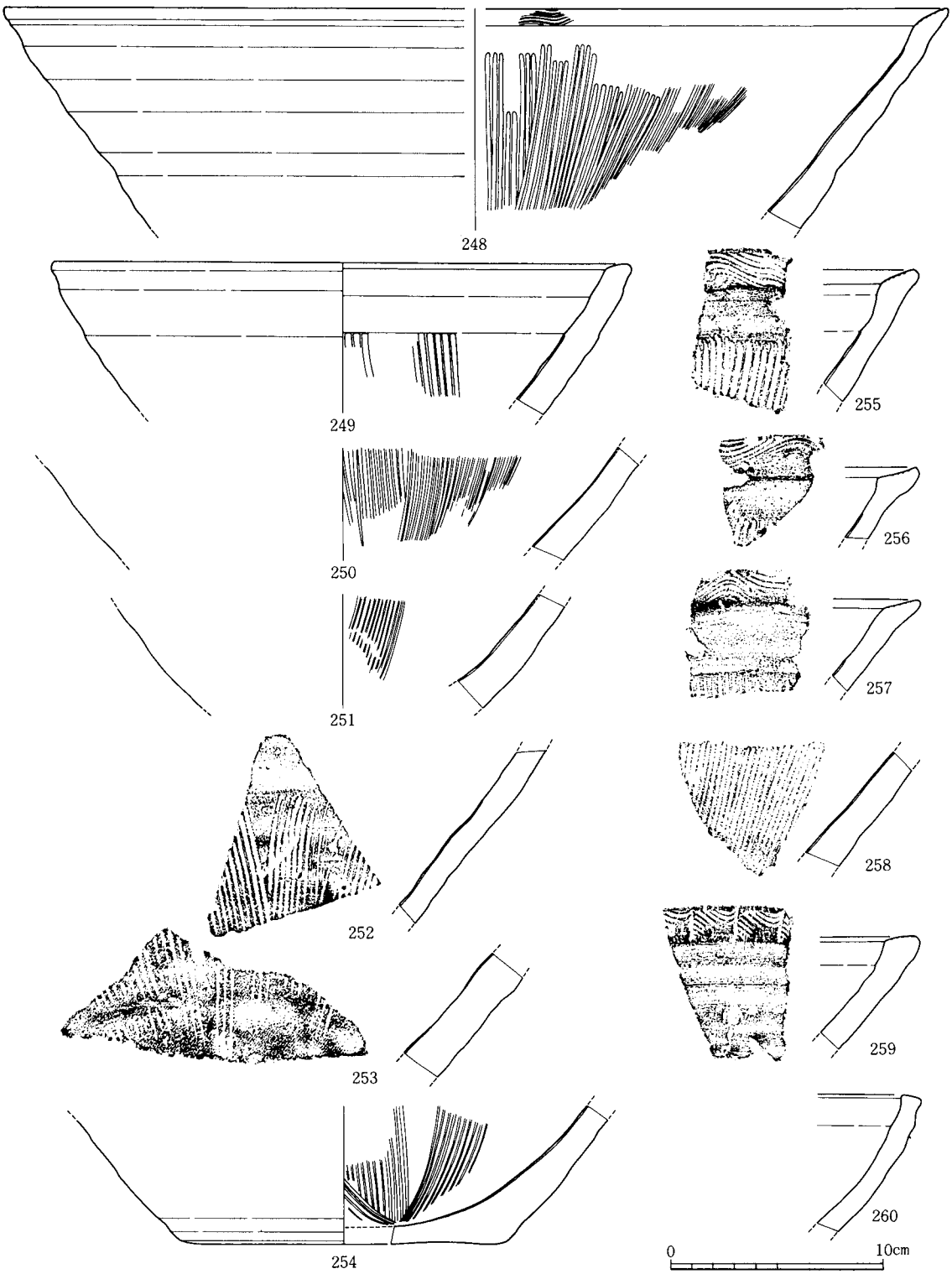
第66図　第１次調査包含層出土遺物（加賀焼壺・鉢他、Ｓ＝1／3）



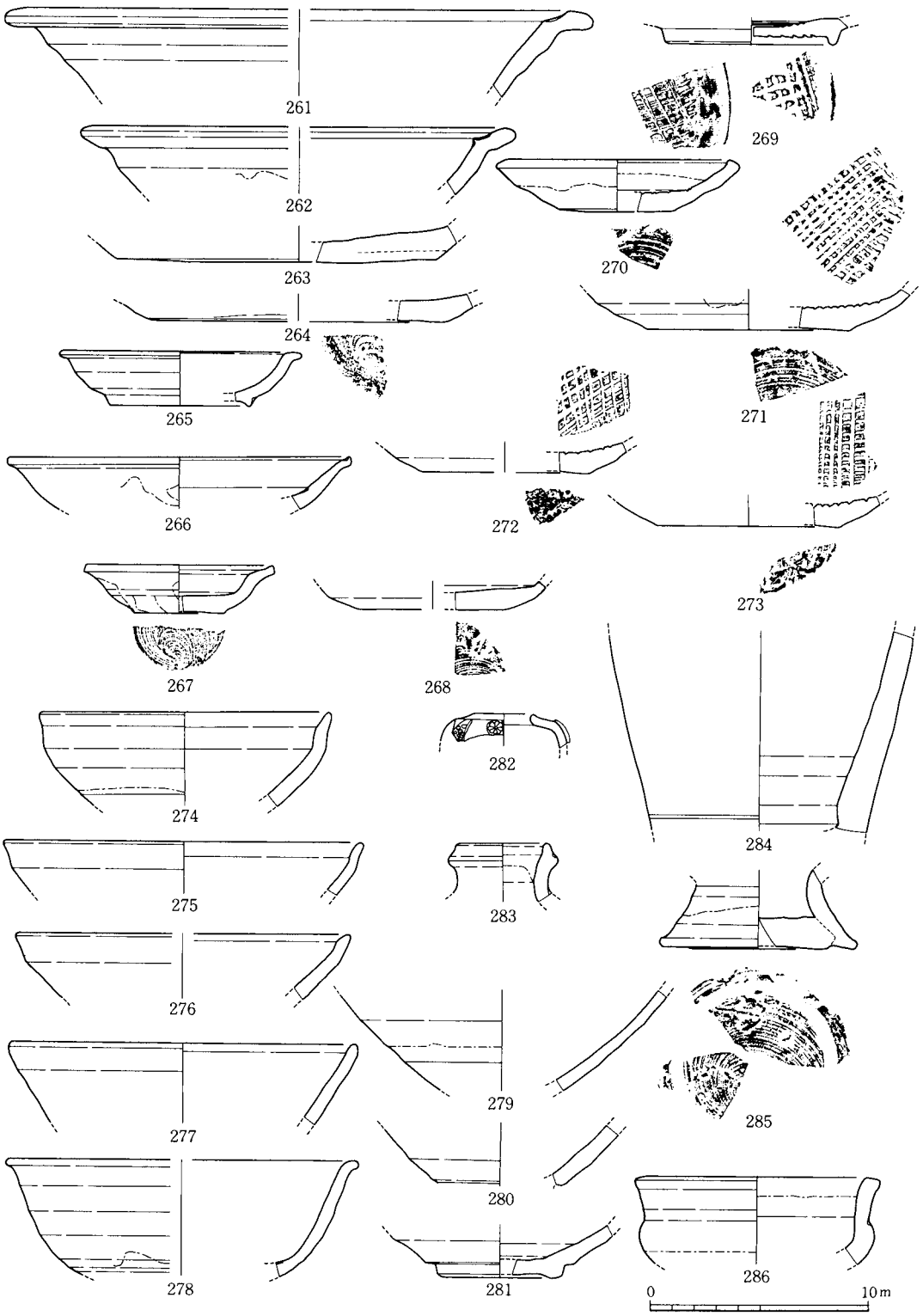
第67図　第１次調査包含層出土遺物（越前焼、Ｓ＝1／3）



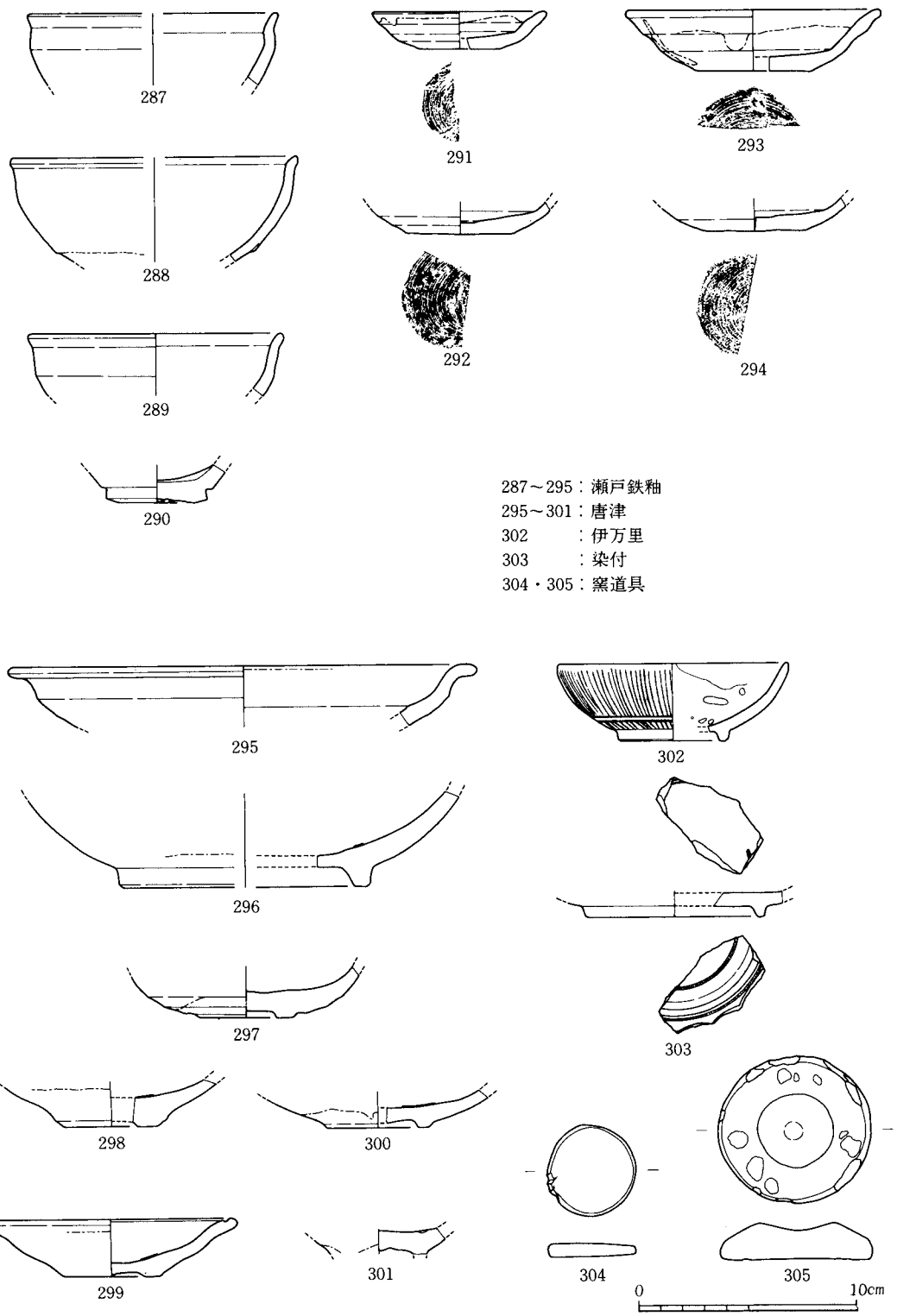
第68図　第１次調査包含層出土遺物（珠洲焼甕・壺、S＝1／3）



第69図　第１次調査包含層出土遺物（珠洲焼鉢、Ｓ＝1／3）

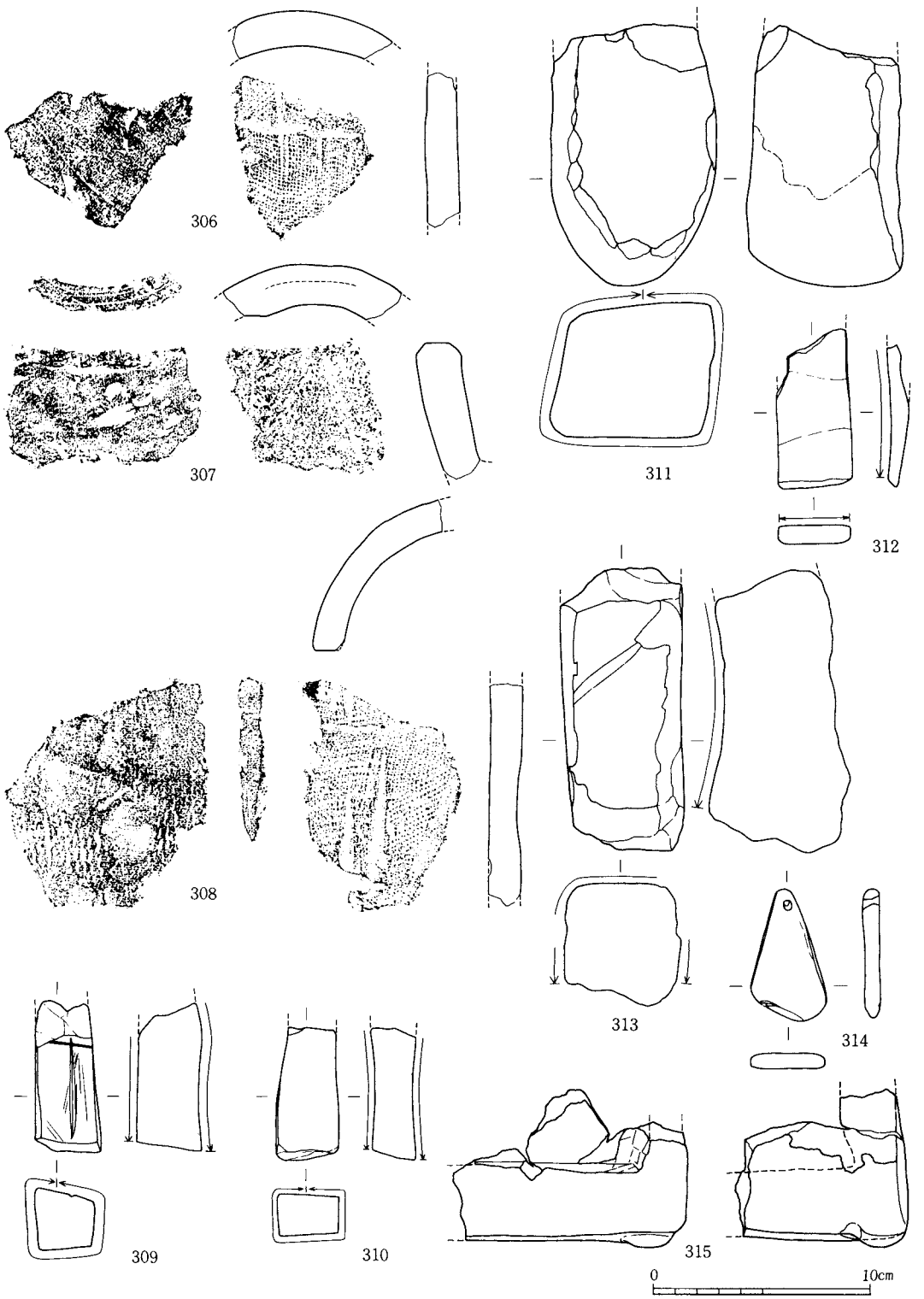


第70図　第１次調査包含層出土遺物（瀬戸灰釉、Ｓ＝1／3）

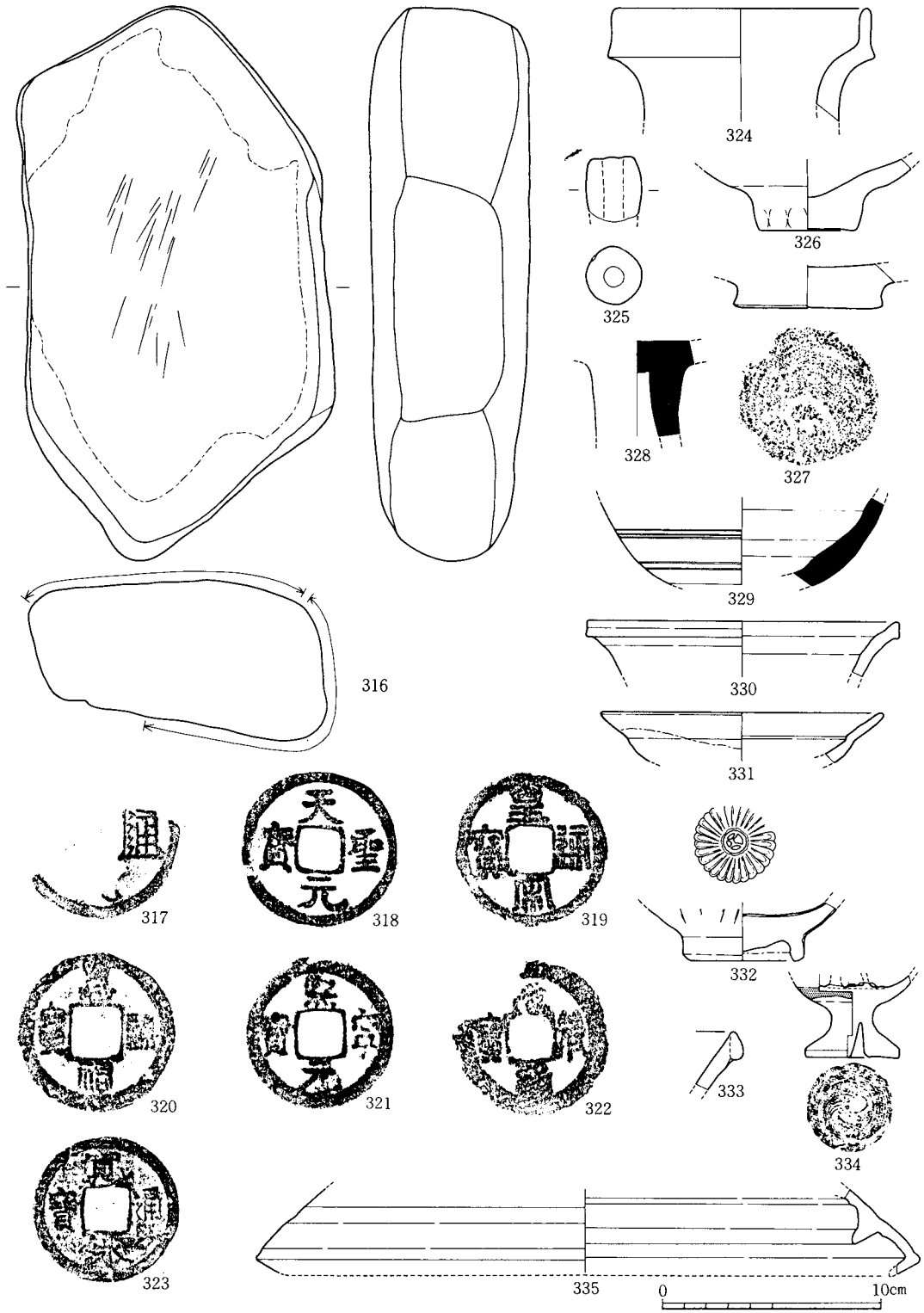


287～295：瀬戸鉄釉
295～301：唐津
302　　：伊万里
303　　：染付
304・305：窯道具

第71図　第１次調査包含層出土遺物（瀬戸鉄釉、唐津、窯道具他、S＝1／3）



第72図　第１次調査包含層出土遺物（瓦、石製品、S＝1／3）



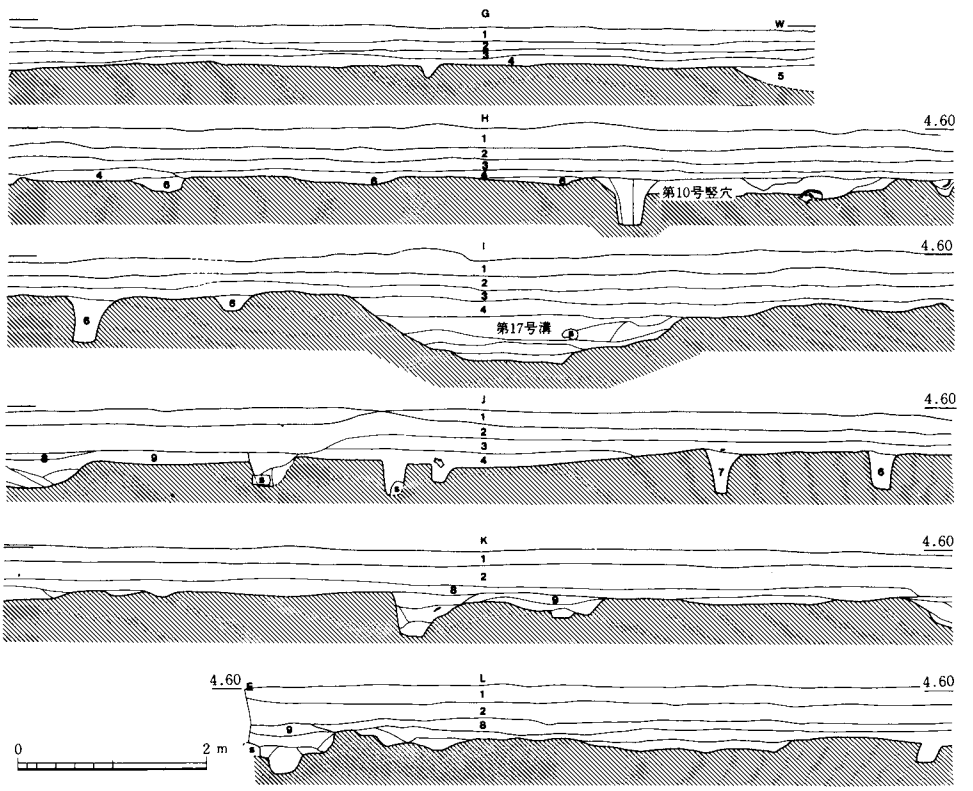
第73図　第１次調査包含層出土遺物（石製品、古銭）、分布調査時出土遺物（Ｓ＝1／3、317～323はＳ＝1／1）

第４章　第２次調査の遺構と遺物

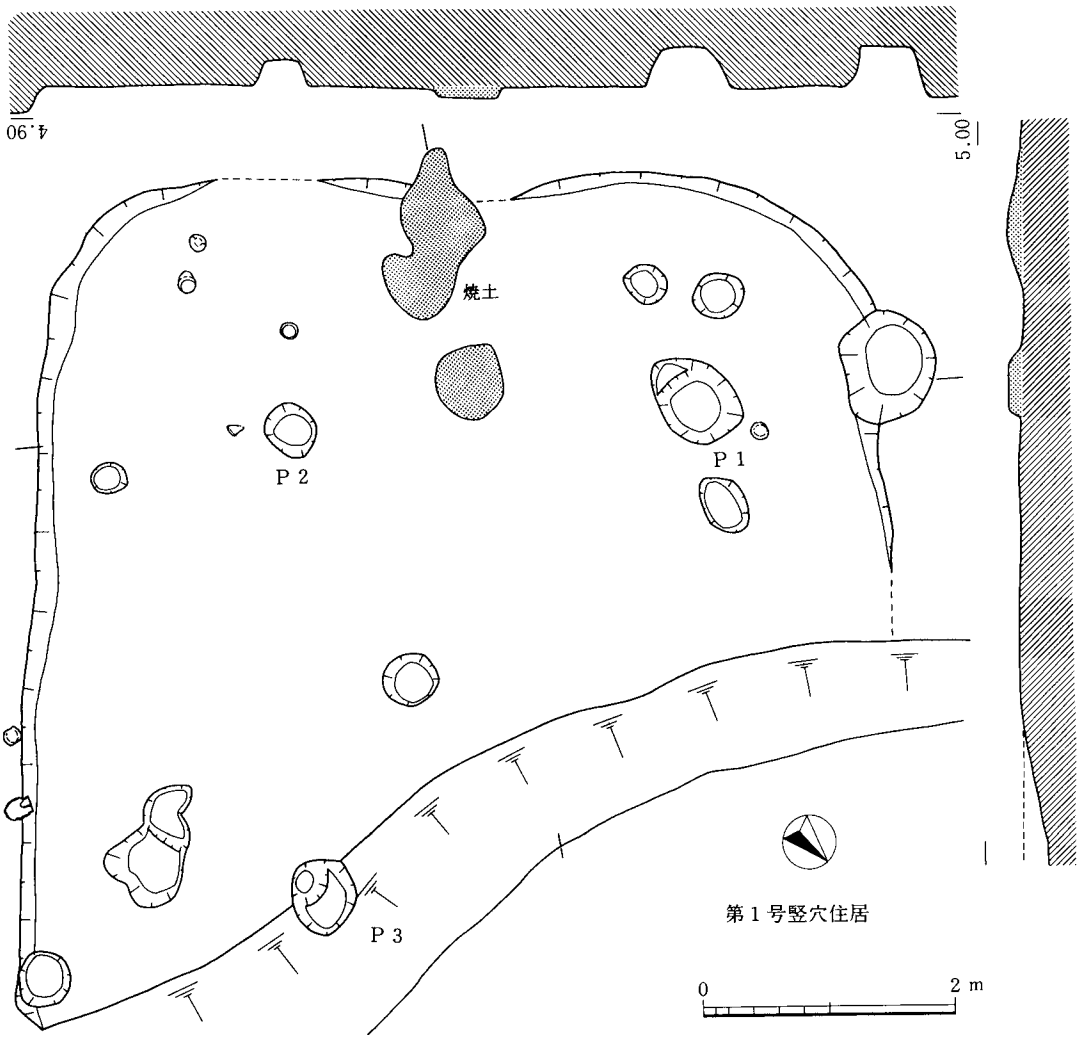
第１節　概要と土層

第２次調査区で検出した遺構の種別と数は、竪穴住居２基、掘立柱建物７棟、井戸27基、竪穴状遺構８基、土坑15基、曲物埋設遺構２基、溝26条である。これに不整形な溝状遺構や土坑状の窪地と多数のピットが加えられる。時代的には、弥生時代後期から江戸時代初頭に及ぶが、平安時代後期から室町時代の遺構が多く、生活に使用された土器や陶磁器が多数出土している。

調査区の中でも北側の部分は、以前は畑地であった場所が、土地改良事業に係る工事で、遺跡の一部が大きく破壊された結果（第３図参照）、不自然な遺構分布となっている。それは農道部分を主体とする第１残丘、幅約３ｍの帯状の第２残丘、調査区中央から南の第３残丘に大きく区分される。なかでも第１残丘から第３残丘の部分は、標高4.8ｍ前後と高く、弥生から平安時代の遺構群が集中する。これに対して、調査区南側から東側にかけては、標高が４ｍ程と低く、鎌倉から室町時代の遺構が濃くみられる。調査区南壁の土層を観察した結果、１の耕作土下に広がる２・３層は、灰褐色の粘土層を主体とする遺物包含層であると確認されたが、その性格は自然堆積の土層ではなく、過去の水田整備の過程で、客土された土層と推定された。



第74図　調査区南壁土層図



第75図　第２次調査竪穴住居実測図(1)（Ｓ＝1／60）

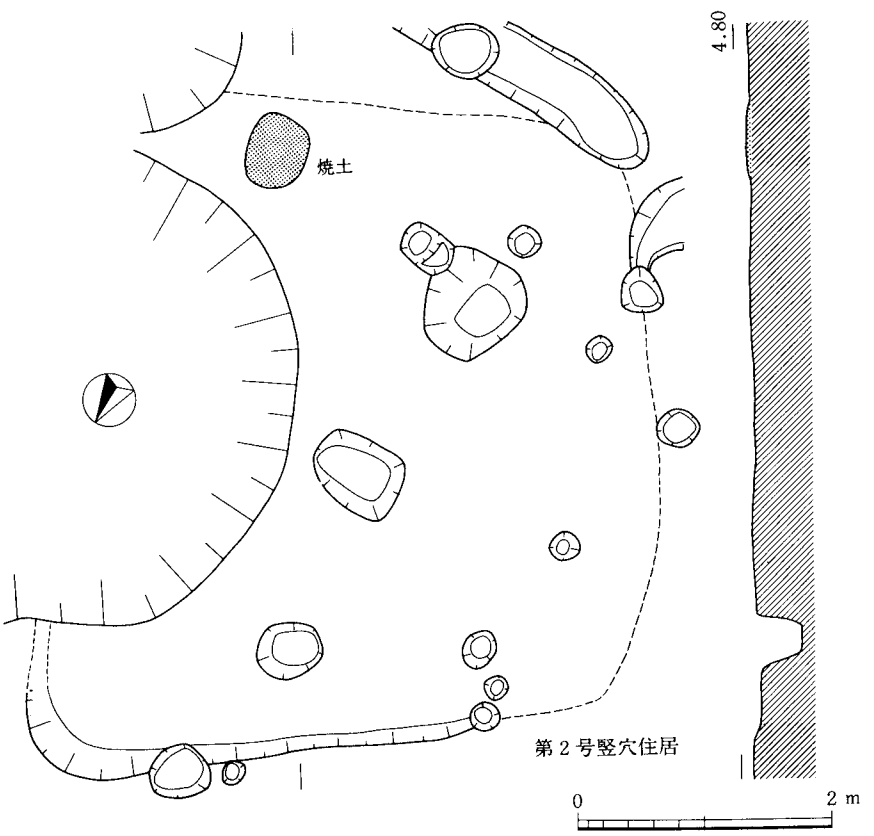
第２節　遺　　構

1　竪穴住居

竪穴住居は第２次調査区のほぼ中央部で２棟確認された。２棟の竪穴住居は、共に本遺跡中の最標高地点（約4.8m）の残丘上に位置する。住居跡の形状は、後世の遺構の複合や工事による破壊を受けて、大きく失われていた。本遺跡の調査で確認された竪穴住居は、この２棟だけであった。以下、順に説明を加えたい。

第１号竪穴住居（第75図　図版－39）

調査区中央部の残丘上のＪ－５区に位置する。北側約１／３と南側壁面が工事と第１次調査の排土搬出作業等で破壊されていた。規模は665×660（推定）cmを測り、深さは18cm、床面積約43.56㎡、主軸はＮ－48°－Ｅであった。床面の標高は4.65mを測り平坦であった。平面形は隅円方形を呈し、Ｐ１～Ｐ３の支柱穴が確認された。各支柱穴の深さは、35cm（Ｐ１）、25cm（Ｐ



第76図　第２次調査竪穴住居実測図(2)（Ｓ＝1／60）

２)、23cm（Ｐ３）と比較的浅く、支柱穴間距離は280cm（Ｐ１－Ｐ２)、360cm（Ｐ２－Ｐ３）をそれぞれ測る。住居跡南側の床面と壁面近くの２箇所に炉跡と推定される焼土塊が検出された。周溝等の内部施設は認められなかった。出土遺物は土師器、内面黒色土器、須恵器の３種類の土器が検出された。各製品とも住居跡東半部の床面と東側壁面周辺からの出土で、６世紀初め頃の製品と考えられ、本住居跡も同時期のものと推定される。

第２号竪穴住居（第76図　図版－39）

第１号竪穴住居の北西方向に位置して、第９号掘立柱建物や第28号土坑と複合し、上半を大きく失っていた。規模は520×520cmを測り、深さ３cm、床面積約27.04㎡（推定）であった。床面の標高は4.69mを測り平坦であった。平面形は方形と推定されたが、支柱穴は不明である。住居跡南側の床面に炉跡と推定される焼土塊が検出された。周溝等の内部施設は認められなかった。出土遺物は少ないが、複合している遺構からの出土土器からして、第１号住居と同時期の遺構と推定された。

第２次調査区の北半部に細長い帯状で遺存していた第２残丘上からも、焼土塊や竪穴住居の一部と推定される遺構や第１号竪穴住居出土土器と同種の土器が検出されている。これらのことからして、第２次調査区の第２残丘から南側の部分には、多くの竪穴住居が存在していたと考えられるが、その大部分が工事により破壊され確認することができなかった。

2　掘立柱建物

第２次調査区で確認された掘立柱建物は７棟であった。その分布は、調査区のほぼ全域に広がる。調査区を南北に縦走し調査区を東西に二分する第17号溝の西方に３棟、東方で４棟の掘立柱建物が確認された。これら以外に掘立柱建物跡と推定される柱列は、西方に４箇所、東方で４箇所、合計８箇所となり本調査区内で構築された掘立柱建物の総数は、約20棟程であったと推定され第１次調査区の建物総数を上回わる。

掘立柱建物の遺構番号は、第１次調査の番号に引き続き、調査区北側の建物跡から順に番号を付した。以下、順に説明を加える。

第７号掘立柱建物（第77図　図版－44）

調査区北端から農道部分のＨ－１区で確認された５間（10.6m）×２間（4.8m）の大型な掘立柱建物である。床面積は55.88㎡、主軸方位はＮ－52°－Ｗを測る。建物の南半部は、工事による破壊で失われ不明である。桁行の柱間寸法は、180cmとほぼ一定である。梁行の柱間寸法は、210cmを測り桁行よりも少し広い。掘方の平面形態は、一辺が60～90cmの方形を呈する。深さは20～30cmと浅い。出土遺物は数点の土師器で、周辺の状況から10世紀前半代の掘立柱建物と推定される。

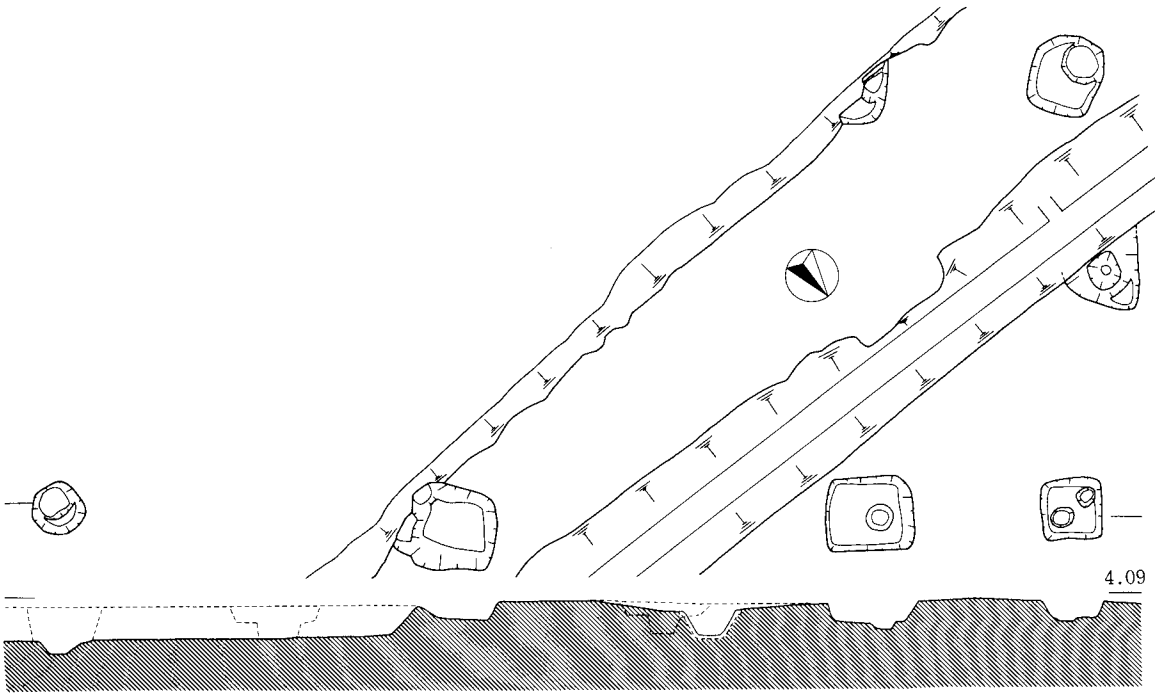
第８号掘立柱建物（第77図　図版－42）

調査区中央の第３残丘東側のＫ－４区で確認された。３間（710cm）×２間（470cm）の規模の掘立柱建物で、梁行南側に１間（165cm）×２間（420cm）の庇が付設する。床面積は33.37㎡（39.47㎡）で、主柱方位はＮ－４°－Ｅを測る。柱間寸法は、桁行東側で210cm、梁行北側で210cmを測り均一である。柱穴掘方は径35～60cmと不揃いで、円形を呈するものが多い。深さは40～60cmと深い。梁行南側の庇の柱間寸法は、桁行方向165cm、梁行方向190cmを測る。各柱穴の掘方より土師器と緑釉陶器が出土している。時期は11世紀中頃と推定される。

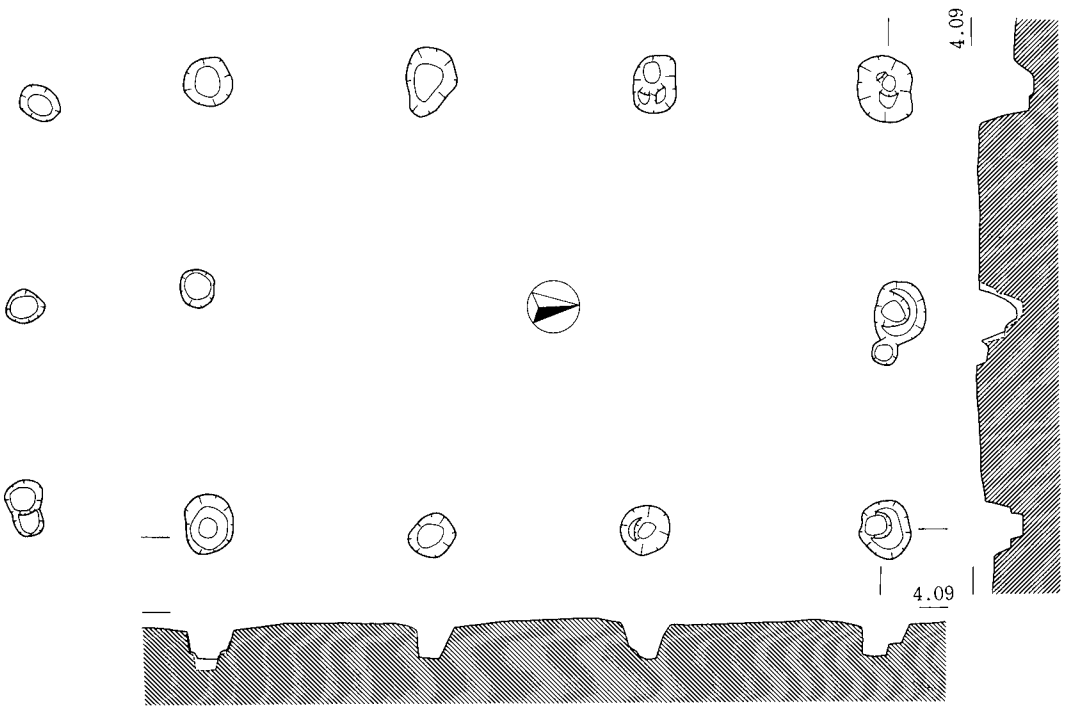
また、重複している第11号掘立柱建物との関係は、柱穴出土土器からして第11号掘立柱建物が、先行するものと推測された。

第２表　第２次調査掘立柱建物一覧表

建物番号	規　模（m） 桁　行×梁　行	方　位	掘方の形態	面積（㎡）	備　考
7	5(10.6)×2(4.8)	N－52°－W	方　形	50.88	
8	3(7.1)×2(4.7)	N－4°－E	円　形	33.37	
	庇1(1.9)×2(4.2)			(39.47)	
9	3(6.9)×2(5.3)	N－5°－W	略円形	36.57	
10	3(6.6)×	N－4°－W	略円形		
11	2(5.6)×2(4.9)	N－0°	楕円形	27.44	
12	3(6.6)×2(5.4)	N－3°－W	略円形	35.64	
13	3(6.9)×2(5.1)	N－4°－E	円　形	35.19	

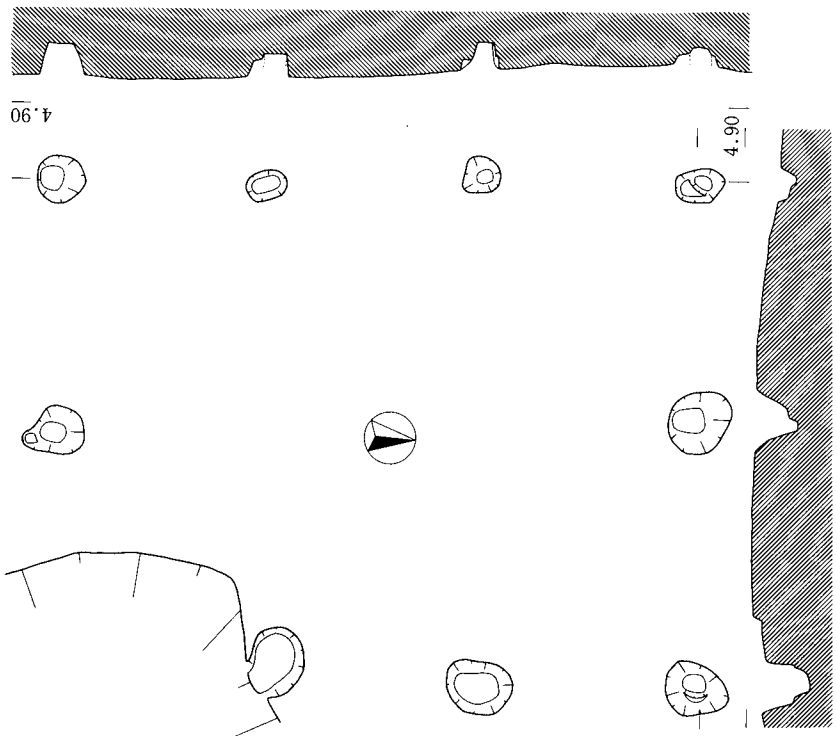


第７号掘立柱建物

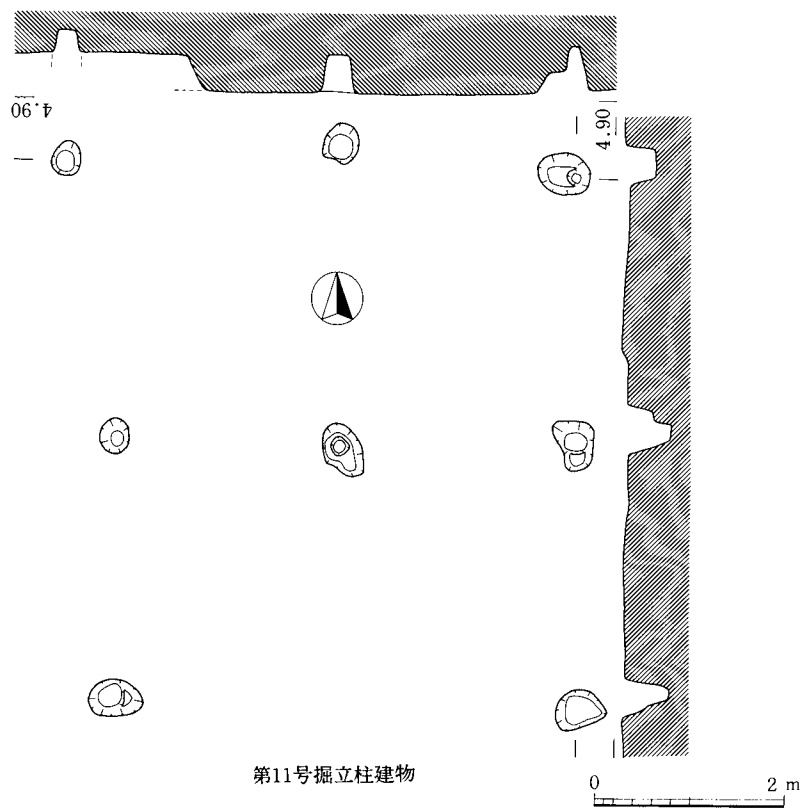


第８号掘立柱建物

第77図　第２次調査掘立柱建物実測図(1)（Ｓ＝1／80）



第９号掘立柱建物



第11号掘立柱建物

第78図　第２次調査掘立柱建物実測図(2)（Ｓ＝1／80）

第9号掘立柱建物（第78図　図版－39）

第3残丘西側のH－3区に位置する。3間（690cm）×2間（530cm）、床面積36.57㎡の掘立柱建物で、桁行西側柱列の上面を工事による破壊で失っている。主軸方位はN－5°－Wを測る。柱間寸法は桁行で210cmと均等であるが、梁行北側では東より240cm、230cmと揃わない。柱穴掘方は径25～45cmで略円形を呈し、深さは最深で50cmを測る。各柱穴で20cm前後の柱根を確認できた。桁行東側の柱穴を中心に須恵器や土師器が出土している。時期は出土土器から10世紀後半頃と推定される。

第11号掘立柱建物（第78図　図版－40）

第8号掘立柱建物と重複する2間×2間の掘立柱建物で、K－4区に位置する。北側柱列525cm、東側柱列540cm、南側柱列480cm、西側柱列545cmの規模を測る。床面積27.44㎡、東側柱列の方位はN－0°である。各柱例筋は揃い柱間は各柱列ともほぼ等間である。柱穴掘方は径40～65cm、深さは35～50cmを測り、やや不揃いである。形態から有床の倉庫と考えられ、北側に庇の可能性が高い柱穴がならぶ。時期は不明であるが、重複する第8号掘立柱建物より先行することは知られる。第1次調査でもほぼ同一規摸・形態の掘立柱建物（第3号掘立柱建物）が1棟検出されている。

第12号掘立柱建物（第79図　図版－42）

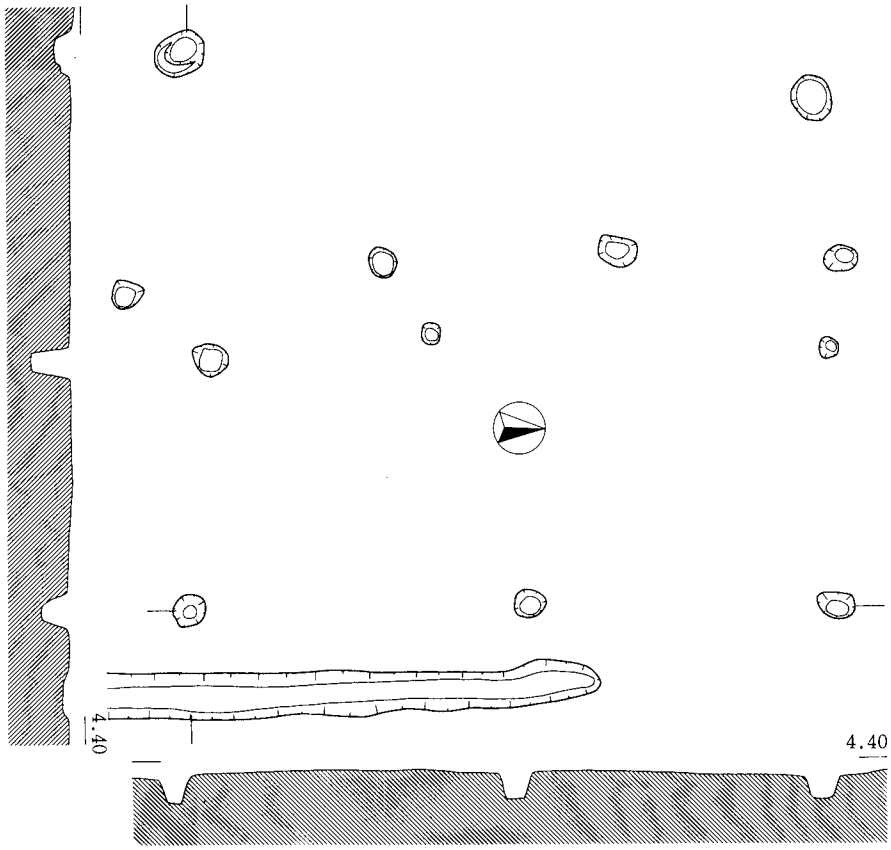
L－4・5区に位置する2間×2間の掘立柱建物である。東側柱列が桁行と推定され660cm、南側柱列が梁行と推定され540cmを測る。規模と形態からして、第13号掘立柱建物と同一形態の掘立柱建物と推定される。南北の梁行が2間、東側の桁行が2間であるのに対し西側の桁行が3間になる掘立柱建物である。主軸方位はN－3°－Wを測る。柱穴掘方は径30～55cmで略円形を呈し、深さは15～45cmを測る。時期は不明である。掘立柱建物の東側には、雨落ち溝と考えられる溝が南方へ走る。幅40～50cm、深さ5～10cmを測る。溝底の標高から掘立柱建物に沿って南へ流下していたと推定される。

第13号掘立柱建物（第79図　図版－42）

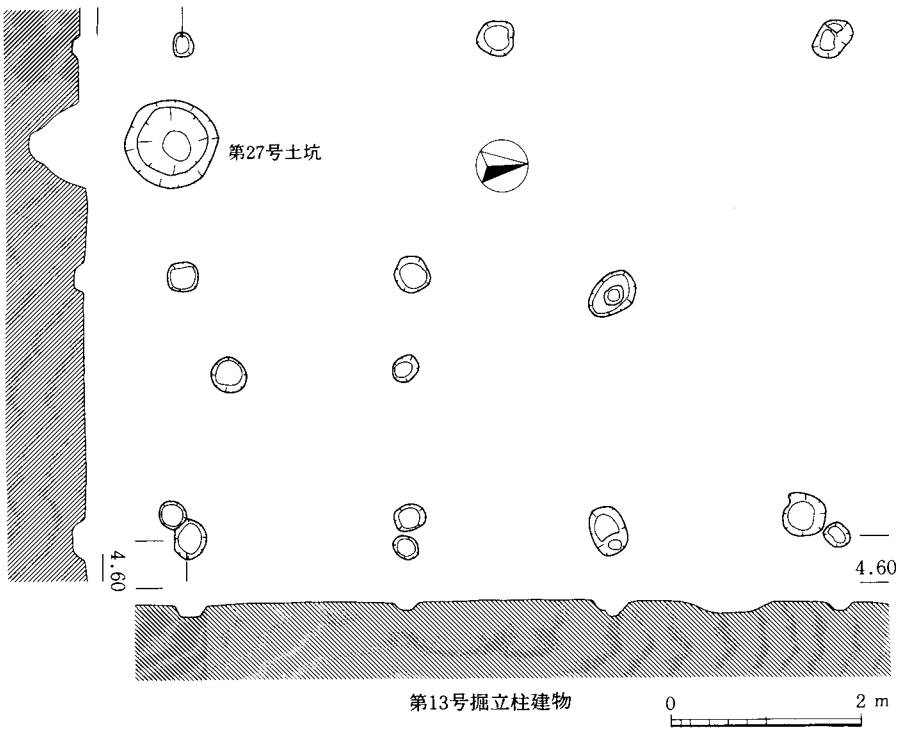
J・K－6区に位置する掘立柱建物で、第27号土坑と複合する。3間（690cm）×2間（530cm）、床面積35.19㎡の規模で、主軸方位はN－4°－Eを測る。桁行東側列は3間で230cmを測るが、桁行西側柱列は2間で320cmを測る。柱穴掘方は径20～45cmの略円形を呈し、深さは5～15cmを測る。時期は不明である。桁行東側柱列には立替えを推定させる柱列が複合する。建物との関係は全く不明であるが、建物内の小穴（図版－56）より風字硯が1点出土している。

また、建物の東側には3間（620cm）の柱列、西側には4間（920cm）×3間（620cm）の掘立柱建物と推定される柱列も確認されている。

第2次調査区で検出された掘立柱建物の年代は、第8号掘立柱建物以外はその資料に欠け時期を特定することはできない。ただ、掘立柱建物の構造や周辺遺構や包含層からの出土遺物の様相を考え合わせると、第7～11号掘立柱建物は奈良～平安時代、第12・13号掘立柱建物は鎌倉・室町時代の所産であろう。特に第7号掘立柱建物はその規模から注目される遺構である。



第12号掘立柱建物



第13号掘立柱建物

第79図　第２次調査掘立柱建物実測図(3)（Ｓ＝1／80）

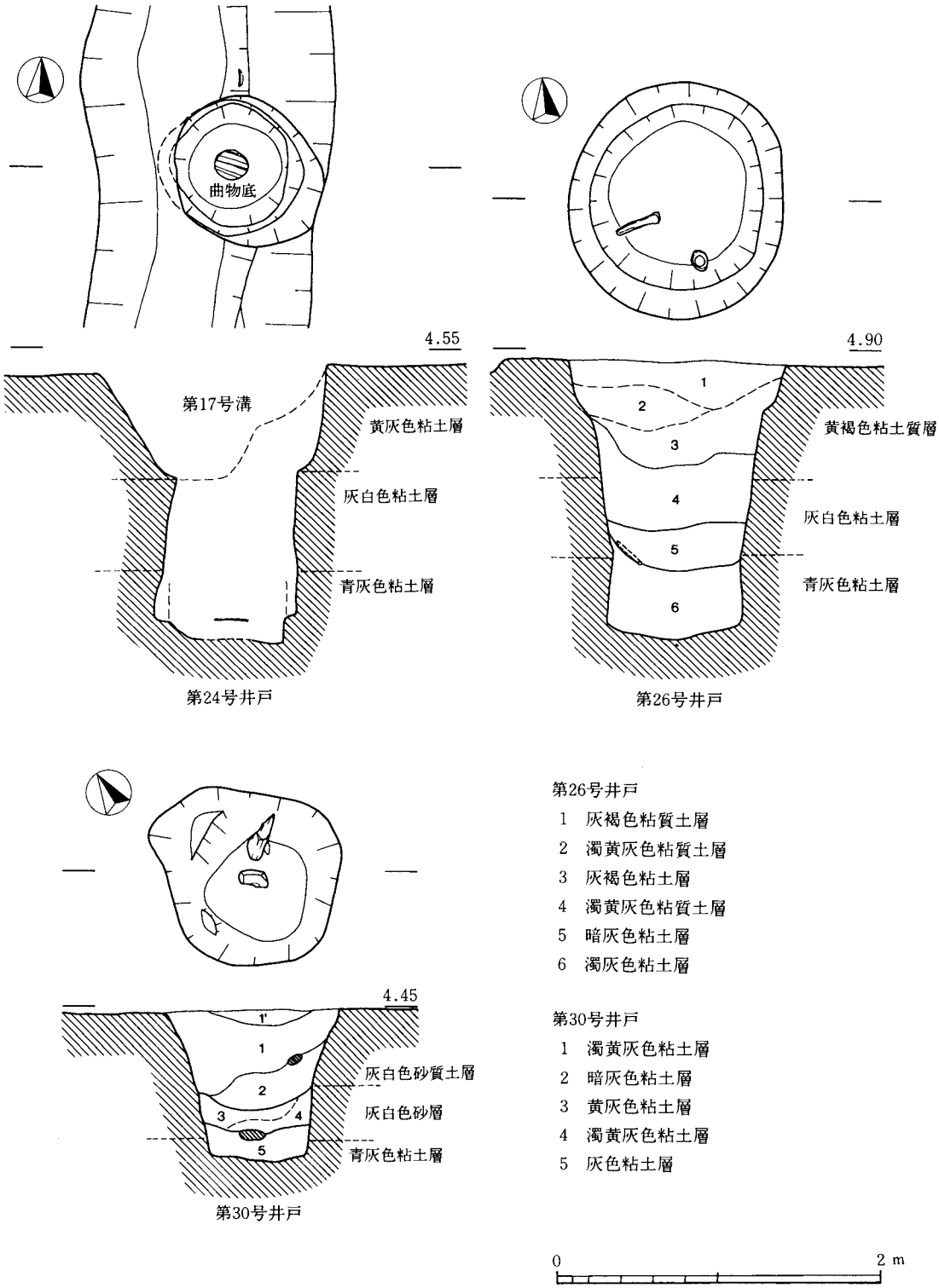
3 井 戸

第２次調査区で確認された井戸は27基に達する。27基の井戸で内部構造が判明もしくは推定されるものは、27基中11基と過半数にも達しない。大半の井戸が内部の井戸側が抜き取られた後に廃棄されたものであることが知られた。また、井戸内部に堆積していた覆土は、その土質や混入物の状況から上・中・下層の３層に大別して捉えた。上層は井戸を埋め込み廃棄した後に出来た窪地に投入された土層で、平安時代に形成された包含層が多く混入している。中層は井戸廃棄当初に投入された土層で、地山の黄色砂がブロック状に多く混入している。下層は井戸使用時の堆積土と井戸側の抜き取り時に崩落したと考えられる井戸側周辺（裏込め土など）の土層である。

出土遺物は別項で説明するが、遺物の多くは土器で、木製品の出土は少なかった。また、27基

第３表　第２次調査井戸一覧表

井戸番号	掘方規模（cm）			内部構造	出土遺物	備考
	上面	下面	深さ（標高m）			
24号井戸	90× 95	53× 58	173・(2.74)	不明	土師質土器、珠洲焼、曲物底板	内部構造は曲物積上げと推定される
26号井戸	133×147	84× 89	172・(3.10)	不明	土師質土器	内部構造は曲物積上げと推定される
27号井戸	238×279	54× 62	159・(2.89)	不明	土師器、須恵器、黒色土器、土師質土器、加賀焼、土錘、砥石	
29号井戸	172×182	93×107	104・(3.47)	方形縦板組隅柱横桟どめ	土師器、須恵器、黒色土器、土錘	井戸底に小砂利が敷かれている
30号井戸	108×109	63× 64	95・(3.48)	不明	土師器土器、珠洲焼、白磁	
31号井戸	256×265	61× 64	243・(1.82)	方形縦板組か（曲物のまなこ１段あり）	珠洲焼、加賀焼、越前焼、瓦質火鉢、瀬戸平碗、砥石、行火、五輪塔水輪部、宝塔	曲物のまなこ中より多量の植物遺体出土
32号井戸	123×124	36× 37	173・(2.35)	不明	須恵器、五輪塔水輪部、台石	
33号井戸	128×145	58× 62	68・(3.54)	不明	土師器、白磁、井戸側板	内部構造は方形横板井竜組と推定される
34号井戸	145×194	38× 37	62・(3.64)	不明		
37号井戸	70× 70	37× 51	116・(3.39)	不明		
38号井戸	155×150	95× 97	156・(2.84)	不明	土師質土器、珠洲焼、越前焼、砥石、石製片口鉢	下層上面より多量の礫が出土
39号井戸	110×114	53× 67	198・(2.33)	不明		
40号井戸	322×370	26× 30	130・(2.86)	不明	須恵器、珠洲焼、青磁碗、五輪塔火輪、水輪、木枠	中間層より多量の礫と石造物が出土
41号井戸	106×115	64× 84	107・(3.03)	不明	珠洲焼、青磁碗	内部構造は曲物積上げと推定される
42号井戸	166×199	54× 73	57・(3.29)	不明	土師質土器、珠洲焼、加賀焼	礫多数出土
43号井戸	94×104	60× 73	132・(3.21)	不明		
44号井戸	87× 93	74×107	98・(3.41)	不明		
45号井戸	173×203	112×116	86・(2.96)	方形縦板組か	土師器、須恵器、珠洲焼、青磁碗	井戸底に小砂利が敷かれていた
46号井戸(1)	184×194	91×106	107・(2.90)	不明	土師器、須恵器、土師質土器、越前焼	下層より竹筒片出土
46号井戸(2)	125×181	91×106	83・(3.14)	不明		
47号井戸	128×155	38× 38	134・(2.75)	不明	土師質土器、加賀焼、越前焼、白磁皿、下駄	内部構造は第48号井戸と同一であったと推定される
48号井戸	206×200	36× 41	185・(2.33)	方形縦板組隅柱横桟どめ（曲物のまなこ２段あり）	須恵器、瓦、土師質土器、加賀焼、越前焼、瀬戸灰釉皿、白磁皿	井戸底に礫が敷かれている
49号井戸	134×146	90× 96	108・(2.94)	不明	土師質土器、白磁皿、越州窯青磁	内部構造は方形縦板組と推定される
50号井戸	186×234	67× 68	141・(2.68)	方形縦板組隅柱横桟どめ	土師器、土師質土器、土鍋、加賀焼、珠洲焼、青磁碗	
51号井戸	70× 71	54× 56	115・(3.18)	不明	須恵器、土師質土器、加賀焼、珠洲焼	井戸底に小砂利が敷かれている
52号井戸	212×216	92×120	116・(3.02)	不明	土師質土器、加賀焼、珠洲焼、越前焼、瀬戸灰釉皿・盤、行火	
54号井戸	211×224	48× 62	155・(2.26)	方形縦板組隅柱横桟どめ	土師器、加賀焼、珠洲焼、土錘、行火	



第80図　第２次調査井戸実測図(1)（Ｓ＝1／40）

中17基の井戸と3基の土坑の下層堆積土を主に採集し、水洗・選別を実施したところ多くの植物遺体が検出された。植物遺体の同定と分析を笠原安夫・藤沢　浅・藤下典之の三氏に依頼し玉稿を得ている。結果は次年度刊行の『佐々木アサバタケ遺跡Ⅱ』で報告の予定である。今回はその概要を記すにとどめておきたい。以下、順に井戸の説明をしたい。なお、井戸番号中で第25・28・35・36・53号は、調査後に土坑や曲物埋設遺構として整理したので欠番である。

第24号井戸（第80図　図版－39）

Ｊ－３区に位置し上半部を複合する第17号溝で切られている。上面は径90㎝の円形、底も径58㎝の円形を呈する。検出面からの深さは113㎝で、底の標高は2.74ｍを測る。内部は径80㎝の円筒形を呈し、底に径75㎝の曲物状の井戸側板の痕跡が認められた。覆土は上半が暗黄灰色粘土で、下半が灰色粘土であった。底の地山土は青灰色粘土で、形態や規模とも第26号井戸と似ている。曲物底板、土師質土器（小皿）、珠洲焼の片口鉢が出土している。時期は出土土器から13世紀前半代と推定される。

第26号井戸（第80図　図版－39）

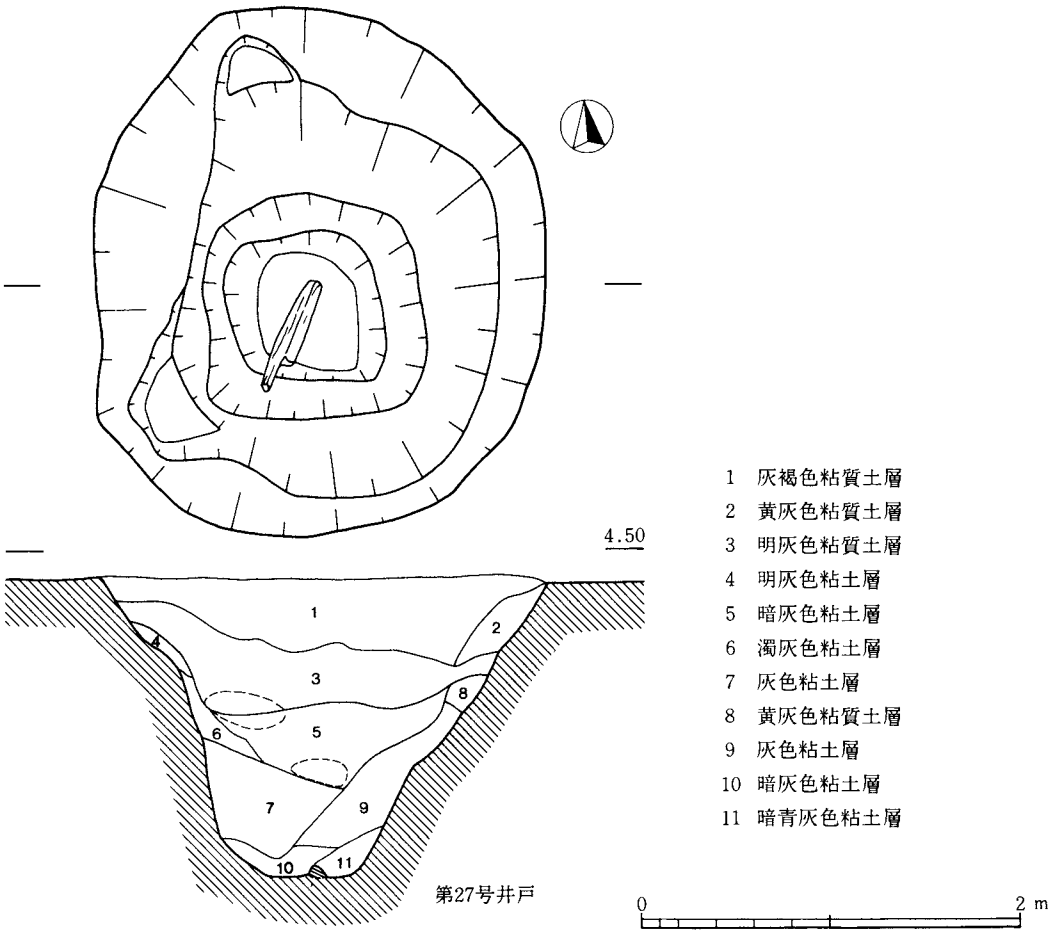
Ｊ－４区に位置し大型な第28号土坑に接している。上面は径147㎝の楕円形、底は84㎝の円形を呈する。検出面からの深さは172㎝で、底の標高は3.10ｍを測り、地山は青灰色粘土である。内部は円筒形を呈するが、井戸側の状況に関しては不明である。覆土は第１～４層までが上層で、灰褐色粘土と濁黄灰色粘質土の互層を呈する。第５層は中間層で暗灰色粘土層で、完形な土師質土器（中皿）と木片が出土した。下層は濁灰色粘土で、混入物は一切認められなかった。中間層出土の土師質土器から井戸の時期を14世紀の前半以前と推定される。

第27号井戸（第81図　図版－41）

Ｈ－５区に位置する。上面は径279㎝の楕円形、底は一辺62㎝の略方形を呈する。検出面からの深さは159㎝で、底の標高は2.89ｍを測る。断面形は逆台形を呈するが、井戸側の状況は不明である。覆土は第１～３層までが上層で、灰色粘土を主体とし平安時代の土器を多く含んでいる。第４～６層までが中間層で、明・暗灰色粘土と色調が大きく違う土層が重なり、ハシ状木製品の細片や多くの土師質土器（中・小皿）、加賀焼が出土した。第７～11層は下層で、上半は灰色粘土を主体とするが、下半は青灰色粘土を主体とした。土器などの遺物は検出されていない。下層の粘土層から検出された植物種実は、栽培植物のシソ、イネ、アサ、アブラナ類、畑地雑草のハコベ、シロザ、ヒユ属、木本（食利用）のノブドウなどを主体とする。時期は出土土器から13世紀中頃と推定される。

第29号井戸（第82図　図版－41）

Ｈ－５区に位置する。上面は径179㎝の円形を呈する。内部に方形縦板組隅柱横桟どめの井戸側が検出された。底は一辺93～107㎝の方形を呈し、検出面からの深さは104㎝を測り、底の標高は3.47ｍで、0.2～0.8㎝の小砂利が敷かれていた。井戸側は方形縦板組１段だけのもので、中程に平枘接（二方胴付枘接）穴を穿ち、下端を尖らせた丸杭を四角に立てて隅柱としている。東西の両柱は径５㎝、南北の両柱は径約８㎝を測る。隅柱に方形に組まれた横桟は、長さ89～92㎝、幅６㎝、厚さ2.5～５㎝の板で、一辺92×94㎝の枠組をつくる。それの外側に長さ72㎝、幅９～



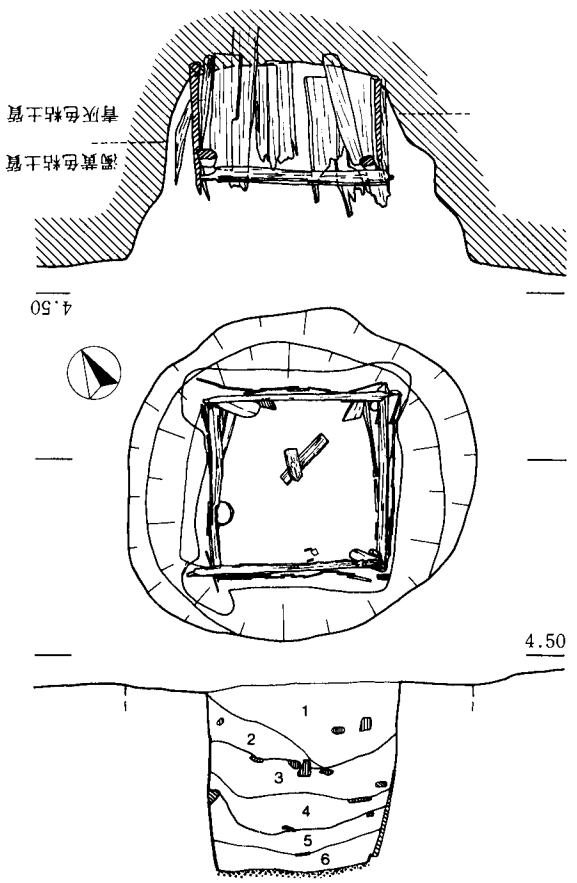
第81図　第２次調査井戸実測図(2)（Ｓ＝1／40）

16.5cm、厚さ１～３cmの割板を前後２列に、11～14枚あて側板としていた。後列の側板は前列に比べ粗く組まれていた。隅柱や側板の下端は、井戸内へ傾き背後に組まれた縦板とも離れるものが多い点と、井戸側と掘方形態の不整合の２点から、本井戸は使用期間が長く使用途中に井戸側の規模を縮小したと推定された。覆土は第１・２層が上層で、灰色粘土を主体とするが、第３・４層の中層と第５・６層の下層は、黒色粘土を主体とする。上・中層からは土師器、須恵器、珠洲焼が出土した。また、下層の粘土層から検出された植物種実は、第27号井戸下層とほぼ同一のものであったが、第27号井戸で検出された畑地雑草中のヒユ属が少なく、反面水旧雑草のサナエタデが多く検出された。時期は出土土器から13・14世紀頃と推定された。

なお、井戸の南東部から第17号溝へ走る幅55cm、深さ８cmの溝が検出されている。井戸の排水溝と考えられる。

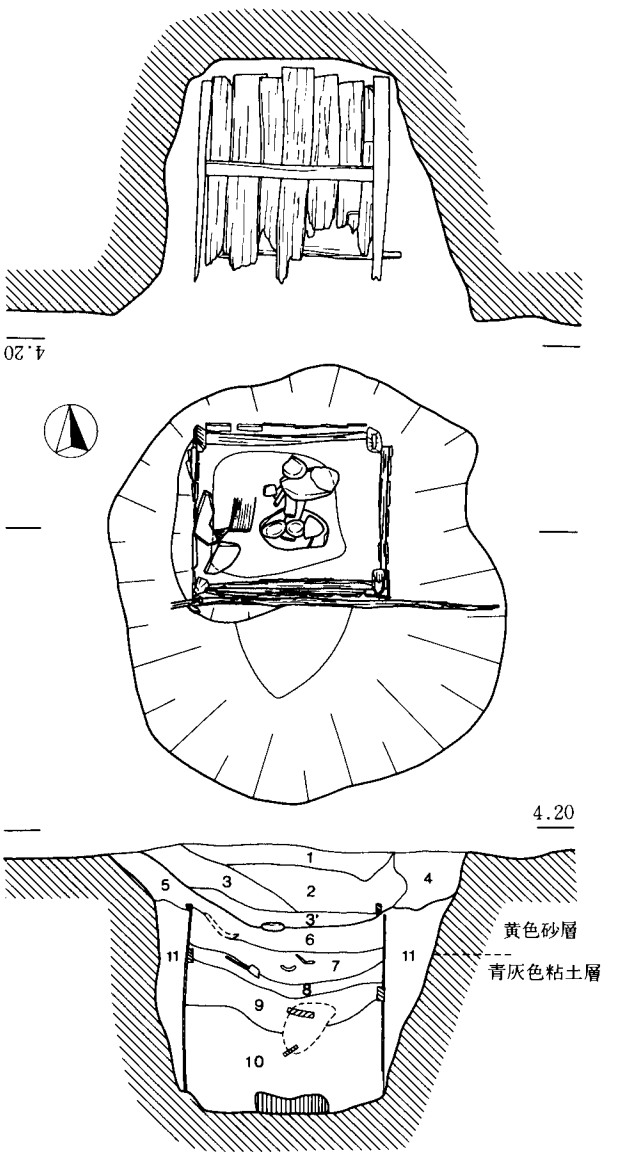
第30号井戸（第80図　図版－44）

Ⅰ－６区に位置する。上面は径109cmの略円形、底は64cmの略方形を呈する。検出面からの深さは95cmで、底の標高は3.48mを測る。断面形は逆台形を呈するが、井戸側は不明である。覆土は第１・２層が上層、第３・４層が中間層、第５層が下層と識別された。上・中層は地山土の互



第29号井戸

1　暗灰色粘土層
2　濁黄灰色粘土層
3　暗青灰色粘土層
4　暗灰色粘土層
5　黒色粘土層
6　暗灰色粘土層

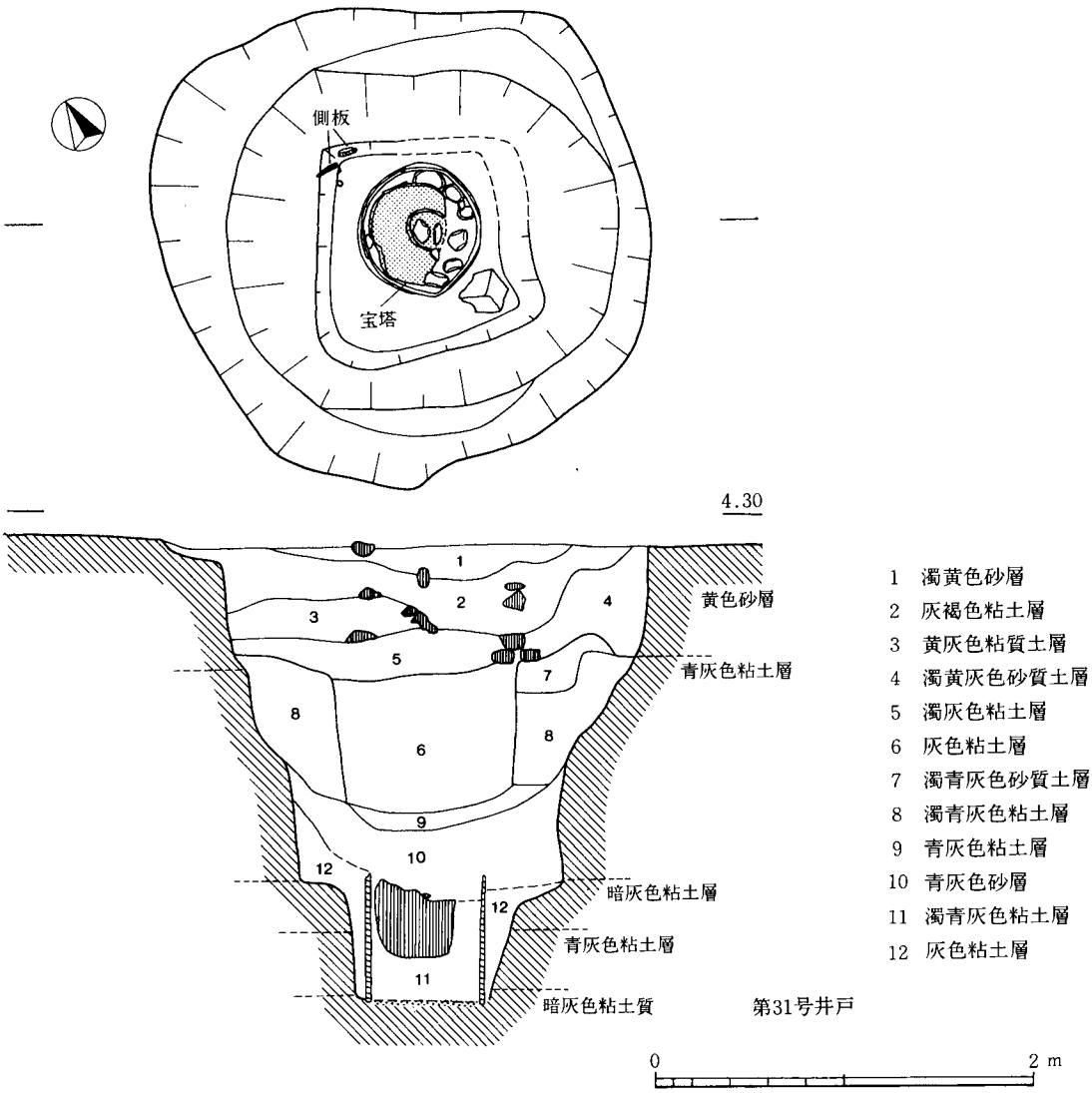


第50号井戸

1　明黄灰色砂質土層
2　灰色粘土層
3　濁黄灰色砂質土層
3′　黄灰色砂質土層
4　濁黄灰色粘質土層
5　濁灰色粘質土層
6　灰色粘土層
7　暗灰色粘土層
8　暗青灰色粘土層
9　灰色粘土層
10　暗青灰色粘土層
11　濁黄色粘土層

0　2 m

第82図　第２次調査井戸実測図(3)（S＝1／40）

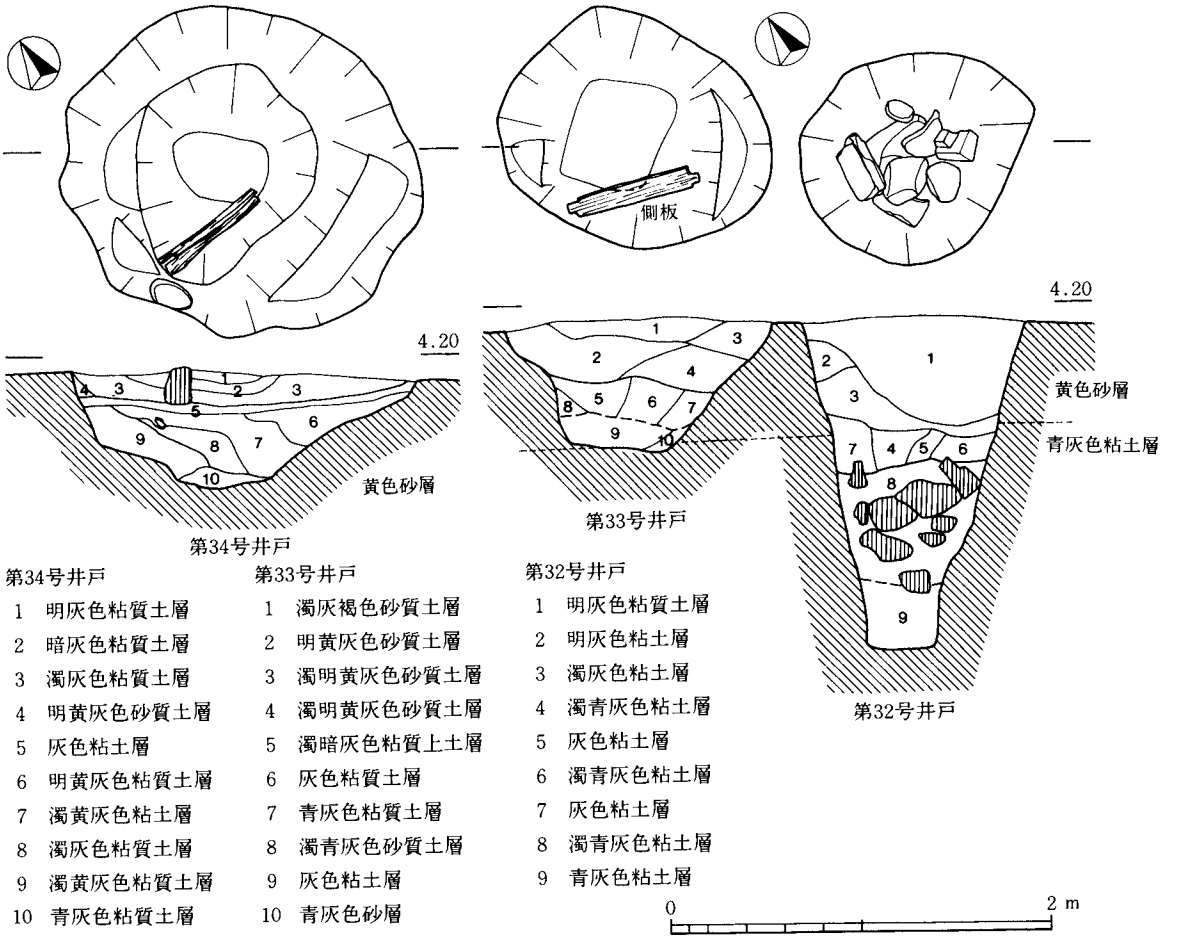


第83図　第２次調査井戸実測図(4)（Ｓ＝1／40）

層であるが、下層は灰色粘土の単一層であった。覆土の堆積状況は、第26号井戸に類似している。出土遺物は少なく第４層より土師質土器と角礫が各１点、底の壁際より隅柱状の木杭と白磁碗の出土があった。時期は出土土器から15世紀前半と推定される。形態・規模共に東方に位置する第41号井戸に類似している。

第31号井戸（第83図　図版－45）

Ｈ－６区に位置する大型の井戸である。上面は一辺265㎝の隅円方形を呈し、底に径70㎝、深さ66㎝の曲物のまなこが１段ある。検出面からの深さは243㎝で、底の標高は1.82ｍを測り２～５㎝の砂利が敷かれていた。第２次調査区中最深の井戸である。調査時の観察から本井戸の井戸側は、一辺が90㎝の方形縦板組であったことが知られた。覆土は第１～５層が上層で、遺構上面の地山土を主体とし５～30㎝の角礫などが多量（約100片）に混入していた。第６～10層は中間層で、青灰色粘土の地山土を主体とし混入物は少ないが、旧井戸側の裏込め土の第８層中から



第34号井戸

1	明灰色粘質土層
2	暗灰色粘質土層
3	濁灰色粘質土層
4	明黄灰色砂質土層
5	灰色粘土層
6	明黄灰色粘質土層
7	濁黄灰色粘土層
8	濁灰色粘質土層
9	濁黄灰色粘質土層
10	青灰色粘質土層

第33号井戸

1	濁灰褐色砂質土層
2	明黄灰色砂質土層
3	濁明黄灰色砂質土層
4	濁明黄灰色砂質土層
5	濁暗灰色粘質上土層
6	灰色粘質土層
7	青灰色粘質土層
8	濁青灰色砂質土層
9	灰色粘土層
10	青灰色砂層

第32号井戸

1	明灰色粘質土層
2	明灰色粘土層
3	濁灰色粘土層
4	濁青灰色粘土層
5	灰色粘土層
6	濁青灰色粘土層
7	灰色粘土層
8	濁青灰色粘土層
9	青灰色粘土層

第84図　第２次調査井戸実測図(5)（Ｓ＝1／40）

は、押印がある加賀焼大甕片などが出土している。第11・12層は下層で、曲物のまなこ内外の土層である。まなこ内には宝塔の塔身が投入され、周囲の第11層中には多量の植物遺体が混入していた。分析の結果同定された植物種実は62種で、栽培植物のカキ、シソ、エゴマ、イネ、アワ、栽培ヒエ、畑地雑草のカタバミ、エノキグサ、ハマベ、ヒナタイノコヅチ、オオバコ、メヒシバ等が主なものとして上げられる。昆虫遺体も約50点確認された。出土は上層の礫層を中心に珠洲焼、加賀焼、越前焼、瓦質土器、頼戸焼が検出された。その中で第８層出土の加賀焼と中間層出土の土器から本井戸の使用期間は14世紀中頃～15世紀後半までとかなり具体的に推定される。

第32号井戸（第84図　図版－41）

第31号井戸西側のＧ－６区に位置して、第32・33号井戸と直列する。上面は径124㎝の円形、下面も径37㎝の円形を呈する。検出面からの深さは173㎝で、底の標高は2.36ｍを測る。断面形は円錐形に近い逆台形を呈して、井戸側等は不明である。覆土は第１～７層が上層で、灰色粘土と青灰色粘土が混合している。第８層が中間層で、凝灰岩の切石片（台石か）や五輪塔の水輪部片と円礫19個が投入されている。下層の第９層部分は、掘り過ぎの可能性がある。第４・５・７層から畑地雑草を中心とした植物種実を検出している。井戸上面より白磁碗（Ⅳ類）が出土して

いるが、井戸内部より時期を比定する資料が無く不明である。

第33号井戸（第84図　図版－45）

Ｇ－６区に位置し第32・34号井戸に挟まれる。上面は径145㎝の楕円形、底は一辺62㎝の隅円方形を呈する。検出面からの深さは68㎝で、底の標高は3.54ｍを測る。断面形は逆台形を呈して、東西両壁面に小さな平坦面を設けている。井戸側は不明であるが、出土した側板から一辺60㎝の方形横板井籠組と推定される。覆土は第１～４層までが上層で、地山の黄色砂を主体とし白磁碗が出土している。第５～８層は中間層と考えられるが、隣接する第32号井戸の上層下部と土質・土色が似ている。方形横板井籠組に使用される側板が１枚出土している。第９・10層は下層で、青灰色粘土を主体とし第32号井戸と同様の植物種実が検出されたが、共に水田雑草の種実の検出は無かった。出土遺物から12世紀前半代と推定される。なお、梯川流域の集落遺跡からは数多くの井戸が検出されているが、方形横板井籠組の井戸側は他に例が無い。

第34号井戸（第84図　図版－46）

Ｇ－６区に位置し第19・33号井戸に挟まれる。上面は径194㎝の楕円形、底は38×51㎝の隅円方形を呈する。検出面からの深さは62㎝で、底の標高は3.64ｍを測る。断面形は逆台形に近く東西両壁面に小さな平坦面が設けられている。形態や規模そして覆土の点においても隣接する第33号井戸と類似点が多い。覆土は第１～４層が上層で第２層には灰層が混入する。第５～８層が中間層、第９・10層が下層と識別された。中間層より一括性の強い土師器と白磁碗、側板の一部であったと考えられる木板が出土した。時期は出土土器から12世紀前半と推定されたが、位置や堆積土層の状況から東側の第33号井戸より先行する遺構と判断される。

第37号井戸（第85図　図版－42）

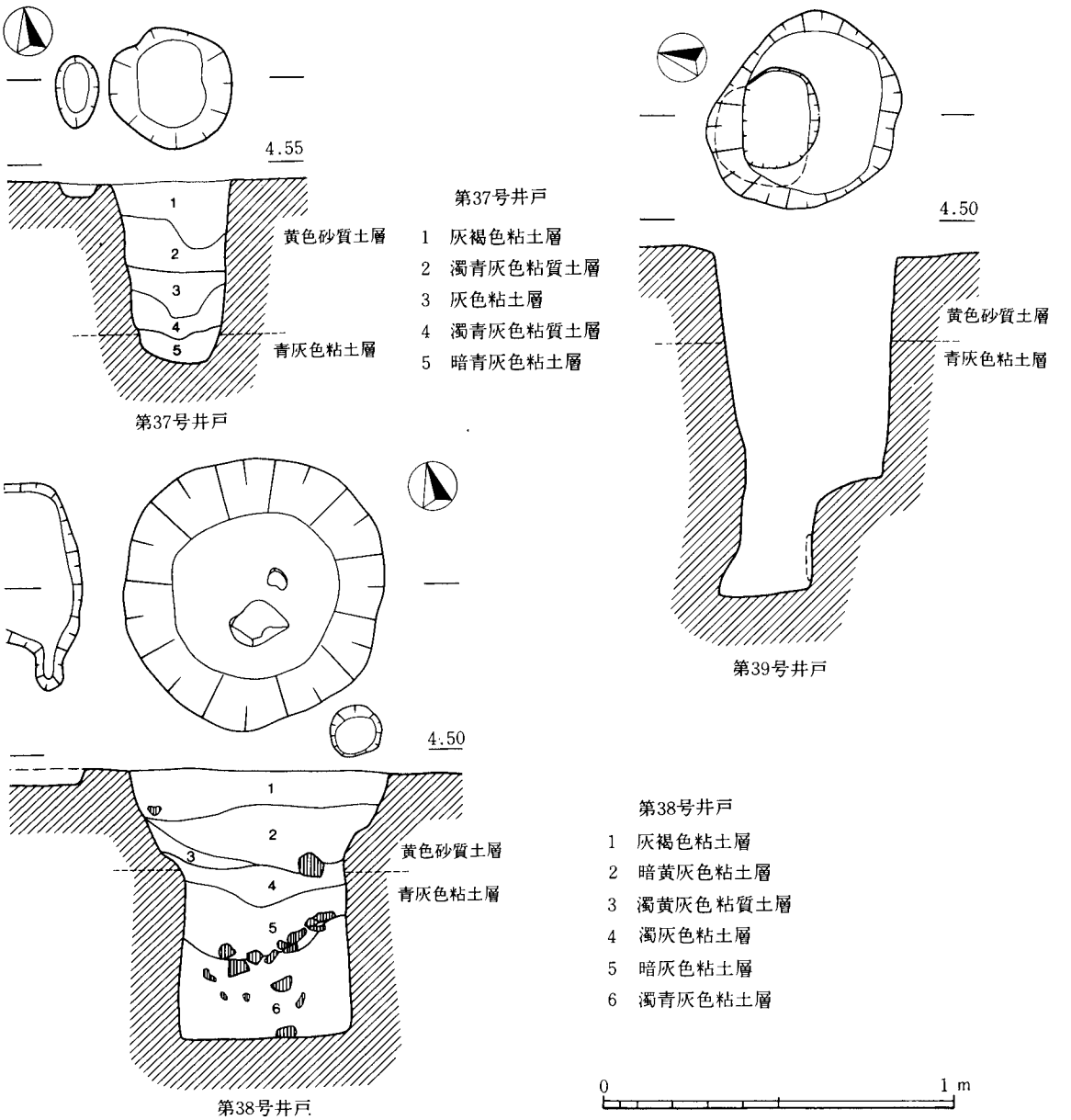
Ｋ－５区に位置する小型の井戸である。上面は径70㎝の円形、底は長径51㎝の楕円形を呈する。検出面からの深さは116㎝で、底の標高は3.39ｍを測る。内部はほぼ円筒形で壁は直立する。覆土は第１・２層が上層、第３・４層が中間層で、黄色砂質土の地山土と灰色粘土の互層が認められた。第５層は下層で、栽培植物のシソとエゴマ、畑地雑草のナス属とヒユ属などが多く検出された。出土土器は無く時期は不明である。

第38号井戸（第85図　図版－46）

Ｋ－５区に位置する。上面は径155㎝の円形で、底も径97㎝の円形を呈する。検出面からの深さは156㎝で、底の標高は2.84ｍを測る。内部は上半部の断面形が逆台形を呈するものの、全体としては円筒形を呈し壁は直立する。井戸側等の施設は認められなかったが、覆土は第１～３層が上層、第４・５層が中間層、第６層が下層と識別される。中間層下部から下層上部にかけては、径６～16㎝円礫や角礫約120個と珠洲焼や越前焼、砥石や石製片口鉢などが投入されていた。第５層から畑地雑草を主体とする植物種実が検出された。中間層を中心に須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、越前焼が検出されている。形態や規模ともに第26号井戸に似ている。時期は出土土器から15世紀中頃と推定される。

第39号井戸（第85図）

Ｌ－５区で第38号井戸と第44号井戸の中間に位置する。上面は長径114㎝、底は長径67㎝の楕

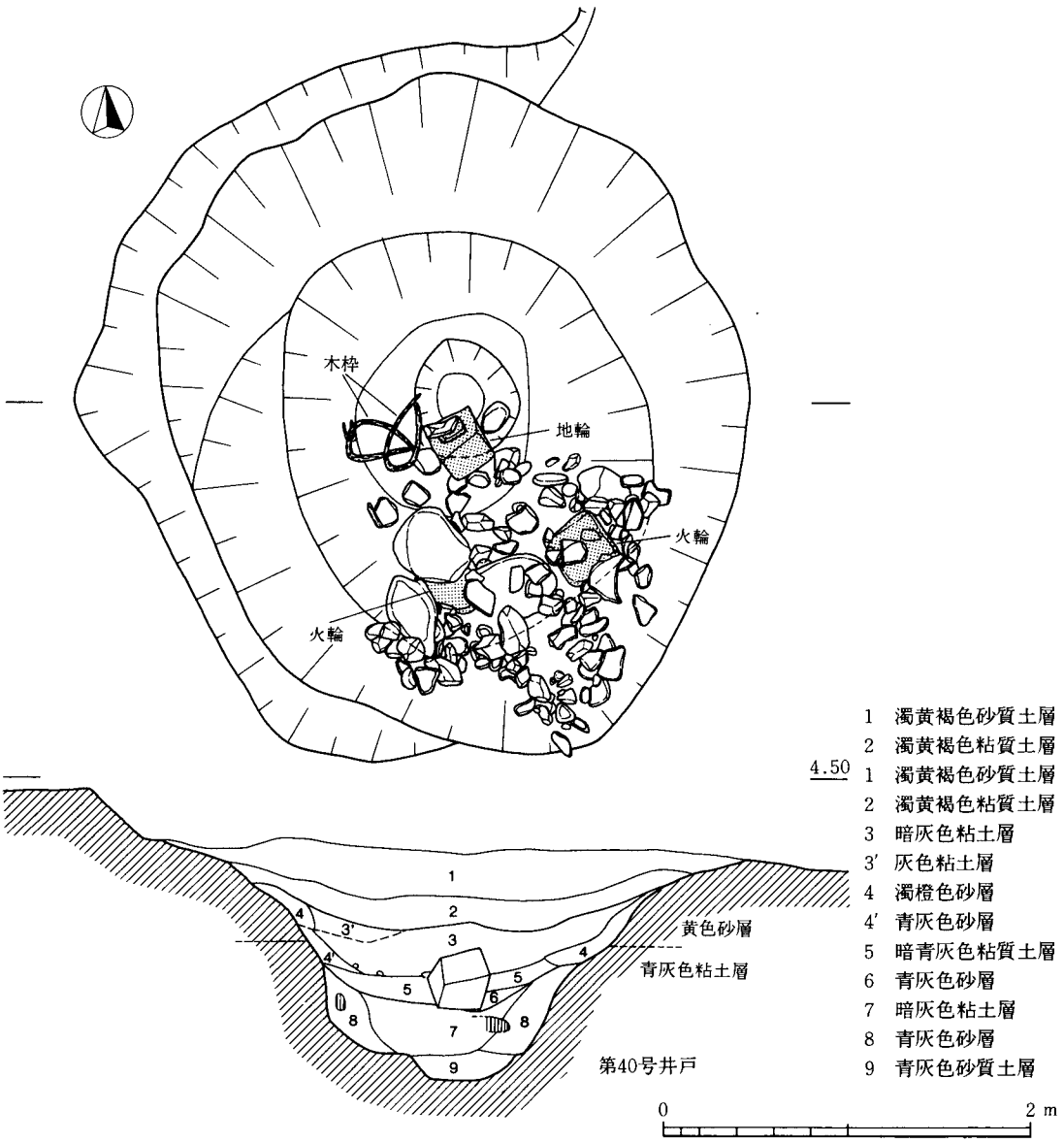


第85図　第２次調査井戸実測図(6)（Ｓ＝1／40）

円形を呈する。検出面からの深さは198㎝で、底の標高は2.33ｍを測る。内部は円筒形で、上面から130㎝の深さのところに平坦部をもち、その北側に二段掘の状態で、径60㎝の楕円形で54㎝下がる。壁はほぼ直立し下段目の壁からは、輪状の木質が検出されたが製品や性格は不明である。覆土は半栽後の降雨により崩壊し不明であるが、半栽時の所観からすると覆土は上から灰色系の粘土、暗灰色の粘土、青灰色の粘土を主体とする土層が堆積して、礫の混入は認められなかった。出土遺物は無く時期も不明である。

第40号井戸（第86図　図版－47）

Ｋ－６区に位置する大型の井戸である。上面は長径370㎝の楕円形、底は径112㎝の略円形を呈



第86図　第２次調査井戸実測図(7)（Ｓ＝1／40）

する。検出面からの深さは130㎝で、底の標高は2.33ｍを測る。断面形は逆台形に近い。底中央部に径66㎝、深さ14㎝の窪みがある。井戸側等の内部施設は不明である。覆土は第１・２層が上層、第３～６層が中間層、第７～９層が下層と識別される。上層は鉄分が多く沈着した砂の混入が多い。中間層は地山土の混入があり南半部に礫群と石造遺物が流入し、礫群は150×150㎝の範囲に広がる。径５～25㎝と40㎝前後の円礫約50個の中に五輪塔の火輪２点と地輪１点、木枠２点が混入していた。また、覆土の観察では下層の堆積土に暗灰色粘土と青灰色砂の薄い互層がみられ、本井戸が廃棄時点では、素掘り状態か水溜め状の遺構であったと推定された。出土遺物は前述のもの以外に須恵器、珠洲焼、青磁碗があった。下層の第７層からは栽培植物や畑地雑草、田畑共通雑草などの植物種実が検出され、内容的には近接する第41号井戸に似ている。時期は出土

土器から15世紀中頃と推定される。なお、本井戸南側に隣接する浅い土坑と第28号溝は、位置と検出状況から本井戸に関連の排水施設と考えられる。

第41号井戸（第87図　図版－42）

K－6区に位置し第42号井戸と並ぶ。上面は径115cmの円形、底は長径84cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは107cmで、底の標高は3.03mを測る。内部は円筒形を呈するが、井戸側等の内部施設は認められない。覆土は第1・2層が上層、第3層が中間層、第4・5層が下層と明瞭に識別された。下層中央部より凝灰岩の角礫が6点ほど出土したが、覆土の堆積状況からして、廃棄時に投入された可能性が高い。そして、井戸側には曲物組が使用されていたと推測される。出土土器には珠洲焼や青磁碗があり、時期を15世紀前半と推定される。青磁碗の破片は西方約25m離れた第31号井戸や第2号曲物埋設遺構まで飛び、これらの遺構がほぼ同時期であることを物語ってくれる。前述の第40号井戸に比べ畑地雑草を中心とする植物種実が量・種類とも多く検出されている。

第42号井戸（第87図　図版－47）

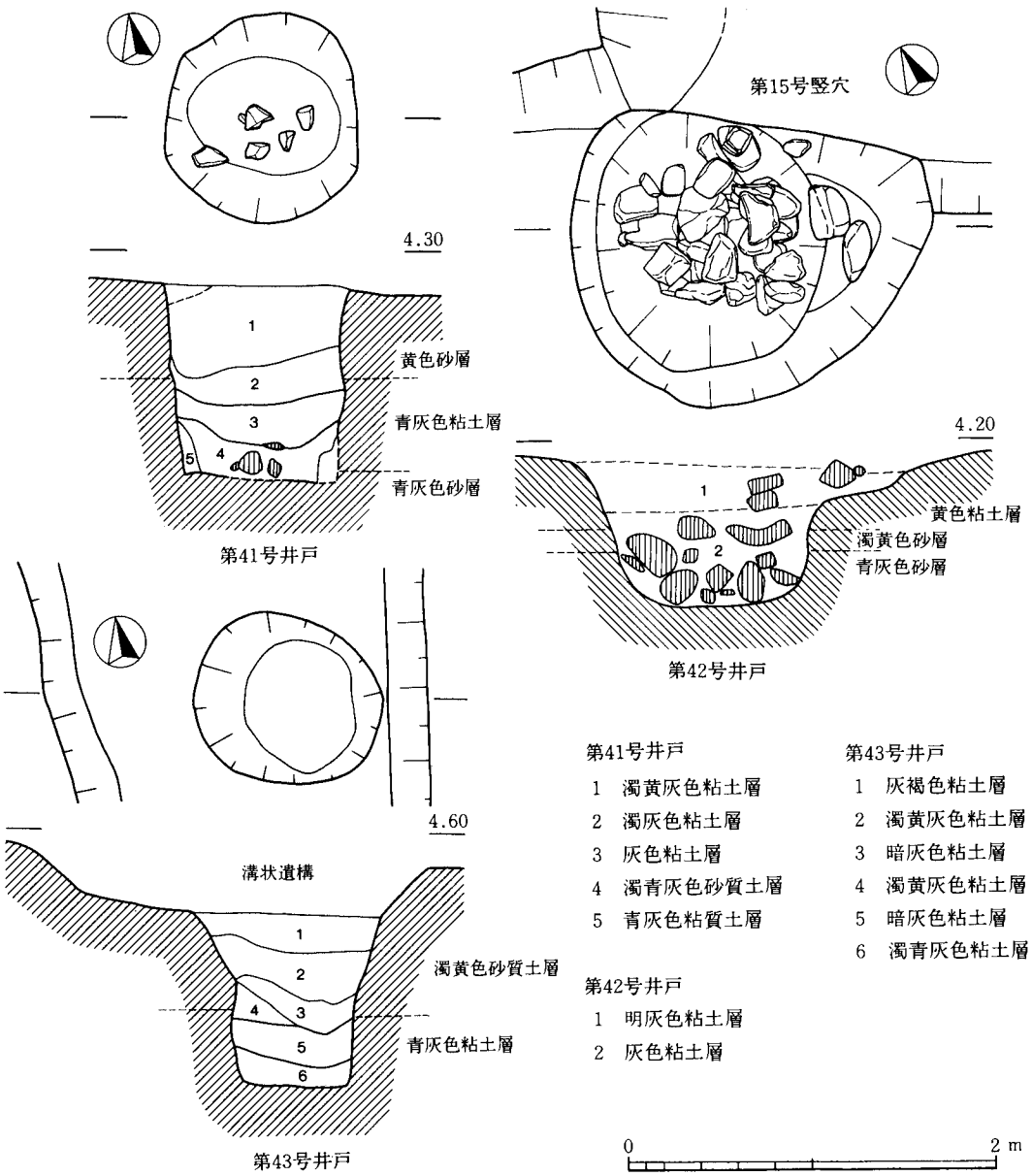
K－6区に位置し第41号井戸と並び第15号竪穴と切り合う。上面は径162cmの円形で、東側に浅く張り出す。底は77cmで略円形を呈し、検出面からの深さは83cmで、標高は3.29mを測る。断面形は逆台形に近く井戸側等の内部施設は検出されていない。形態的には他の井戸に比べ小型で底が浅い。覆土は東側から投入されたと推測される円礫のため上下2層しか識別することができなかった。円礫は総数72個に達したが、その大半は30×20cmの大粒の礫で、15×5cm程の小円礫は少量であった。出土土器は礫に混入した状況で、土師質土器、珠洲焼、加賀焼などがあった。検出された植物種実の量は、他の井戸に比べ極めて少ないものであった。時期は出土土器から14世紀後半と推定される。また、本井戸と切り合う第15号竪穴との新旧関係は、検出状況から本井戸の方が古い可能性が高い。

第43号井戸（第87図）

K－5区に位置し上部を溝状遺構で切られている。上面は長径104cmの楕円形で、底は径73cmの円形を呈する。検出面からの深さは95cmであるが、溝上面からは132cmで、底の標高は3.21mを測る。内部形は円筒形に近く壁はほぼ直立する。覆土は第1～4層が上層で、地山の灰色粘土と黄灰色粘土の互層がみられた。第5層は中間層、第6層が下層と識別された。特に中間層の第5層は下位に植物遺体の混入が多く認められたが、覆土全体としては汚れが少なく、廃棄時の埋め込みの丁寧さが知られた。井戸側等の内部施設や土器などは一切検出されていないので、時期は不明である。

第44号井戸（第88図　図版－42）

L－5区に位置し第38・39号井戸と直線的に並ぶ。上面は長径98cmの楕円形で、底も長径107cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは98cmで、底の標高は3.41mを測り平坦である。壁は直立し断面形は方形を内部は円筒形を呈する。上面の両端部を第12号掘立柱建物の東側を流下した小溝に切られている。覆土は第1～2'層が上層、第3層が中間層、第4層が下層と識別された。上層は地山の濁黄色砂質土を互層状態に投入したもので、覆土と壁面の識別は困難を要した。下

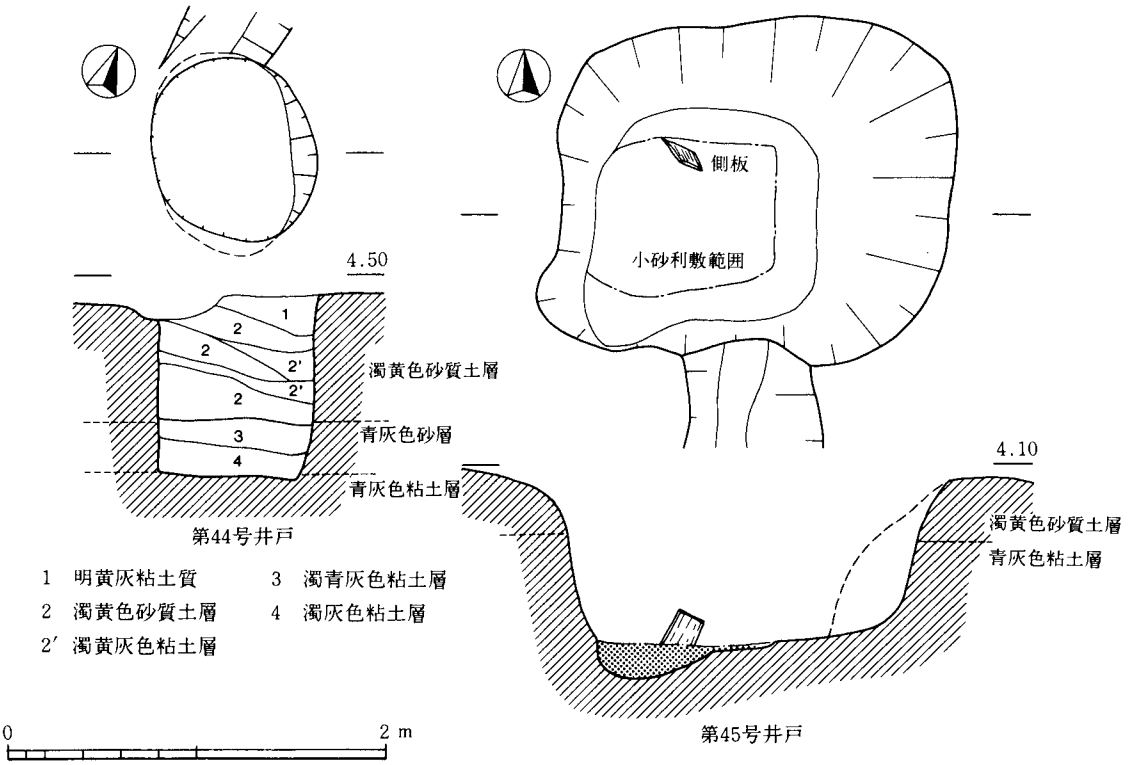


第87図　第２次調査井戸実測図(8)（Ｓ＝1／40）

層は他の井戸と同様に灰色粘土を主体とする。前述の第43号井戸と同様に出土遺物は無く時期も不明である。なお、上層で認められた丁寧な埋め込みや本遺構の形態等から本遺構が土坑として分類される可能性を残している。

第45号井戸（第88図　図版－42）

Ｋ－６・７区に位置し上面を第28号溝に切られている。上面は173×203㎝の隅円方形で、底の一辺116㎝の方形を呈する。検出面からの深さは86㎝と浅いが、底の標高は2.96ｍを測る。断面形は逆台形を呈して、底に敷かれた小砂利が、82×94㎝の範囲に広がり西側に偏在する。小砂利は0.5～５㎝のもので、西半部に厚く敷かれ18㎝を測るのに対して、東半部は５㎝前後と薄い。



第88図 第２次調査井戸実測図(9)（S＝1／40）

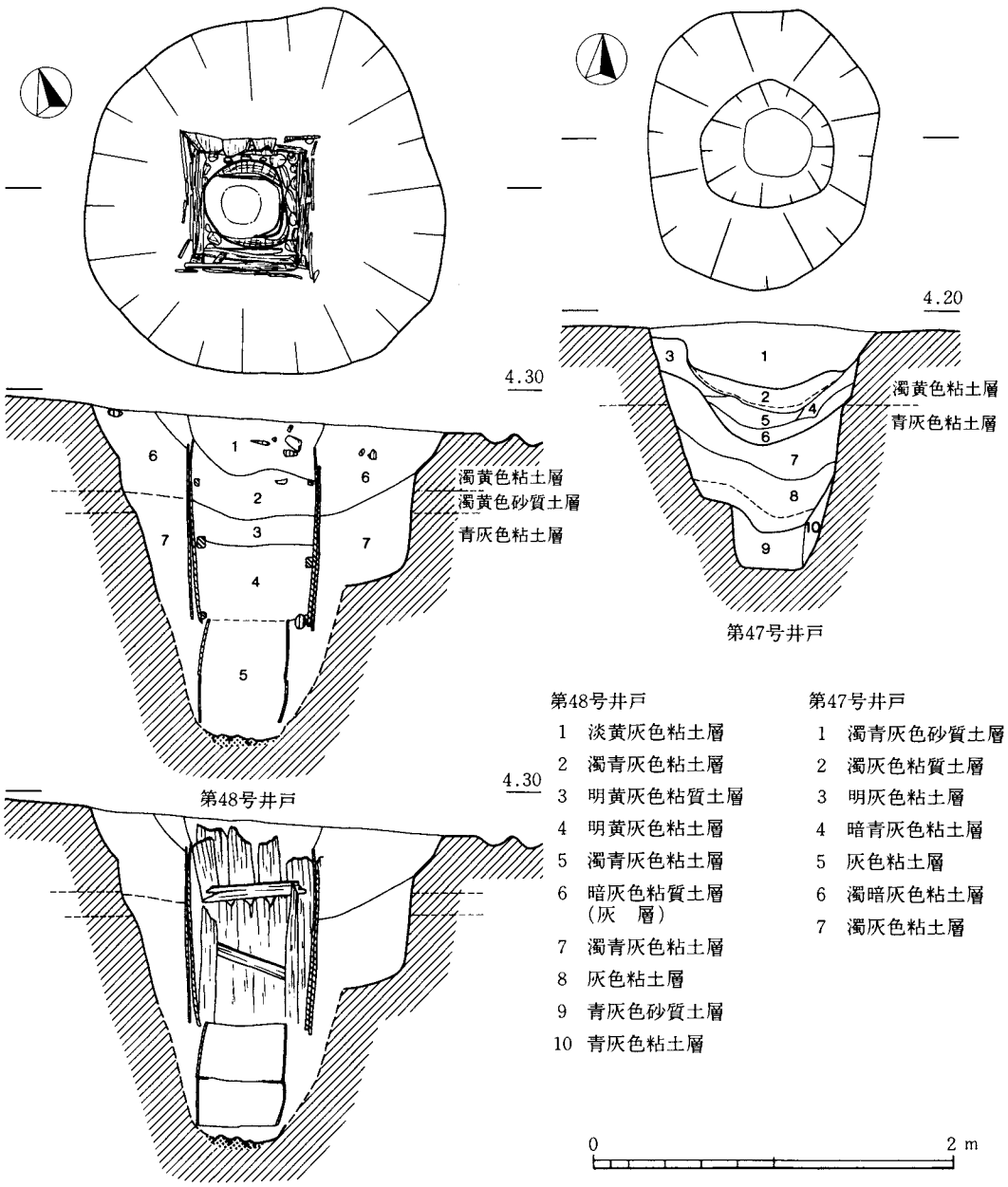
北側に井戸の側板と考えられる小板が直立状態で検出された。覆土は調査中に崩壊し不明である。出土土器は土師器、須恵器、珠洲焼、青磁碗で、時期は15世紀前半と推定される。また、底の小砂利敷は水の浄化施設と考えられるが、その範囲と側板の遺存から本井戸の内部には、約94×100cmの方形縦板組の井戸側が設置されていたと推定されると同時に、第28号溝との新旧関係から、本井戸の北側で検出された第40号井戸より先行することも知られる。

第46号井戸

K－６区に位置し上面を第30号溝や第13号竪穴が切り合う。遺構は２基の井戸が８字状に複合したものと見られたが、雪中の調査で断面が崩壊したので不明の点が多い。井戸跡と推定される東側の遺構に関して説明を加えたい。上面は径194cmの略円形を呈し、検出面からの深さは107cmで、底の標高は2.90mを測る。断面形は逆台形を呈して、内部施設などは不明である。覆土は灰色粘土を主体としレンズ状の堆積が認められた。出土土器には土師器、須恵器、土師質土器、越前焼があり、底近くからは小型の竹筒製品が検出されている。時期は出土土器から15世紀前半と推定される。第13号竪穴より新しい遺構と考えられる。

第47号井戸（第89図　図版－42）

K－７区に位置する。上面は長径155cmの楕円形、底は径38cmの円形を呈する。検出面からの深さは134cmで、底の標高は2.75mを測る。断面形は逆台形に近いが、検出面から92cmの深さに平坦面があり、二段掘りの形状を呈する。覆土は第１層が上層、第２～８層までが中間層、第９・10層が下層と識別された。上層は地山土で、中間層は青灰色粘土と明黄灰色粘土の互層であ



第89図　第２次調査井戸実測図(10)（Ｓ＝1／40）

る。特に第２層下面、第４層、第８層下面は灰層と推定される土層である。下層は青灰色粘土を主体とするが、第９層は曲物のまなこ痕、第10層はまなこの裏込めと推定される。出土遺物は須恵器、土師質土器、珠洲焼、加賀焼、白磁皿、下駄が検出され、時期は13世紀中頃と推定される。礫などの投入は認められず、第６・７層からは栽培植物のシソ・アワ、畑地雑草のカタバミ・エノキグサ・イヌタデ・シロザ、水田雑草のヘラオモダカなどの植物種実が少量検出された。なお、形態と堆積土層から本井戸内に築かれた井戸側の構造は、第48号井戸に似た方形縦板組か曲物積上げと推定される。

第48号井戸（第89図　図版－48）

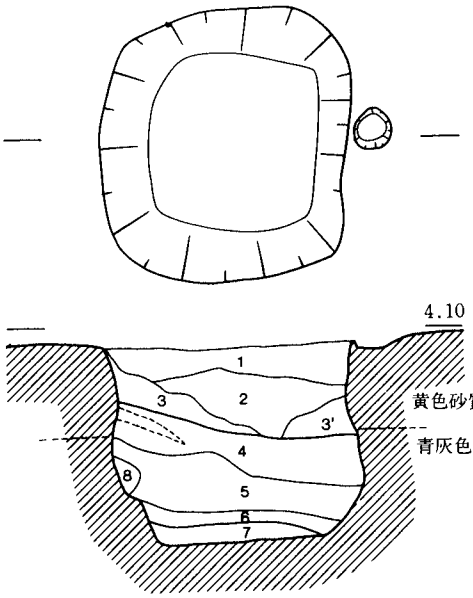
Ｊ－７区に位置する。上面は径216㎝の略円形を呈する。内部に方形縦板組隅柱横桟どめの井戸側と曲物２段積上のまなこが遺存する。検出面からの深さは185㎝、底の標高は2.75ｍを測り４～10㎝の円礫が中央に敷かれている。井戸側は63×64㎝の正方形で、110㎝の深さに組まれ、四隅に一辺10㎝前後の角柱を立てている。隅柱に組まれた横桟は、全て平枘接（二方胴付枘接）で、井戸側西・南両面では上・中・下段の３本の桟があてられたが、東・北両面では上・中段の２本の桟があてられるだけである。背後の縦板は各面とも前後２列（３列の箇所も一部ある）に組まれるが、各面とも幅50㎝前後の板を全面中央に配し、その左右と後列に幅14㎝程の板を置いている。曲物積上のまなこは上端長径46㎝、器厚１㎝、深さ54㎝（上段30㎝、下段24㎝）を測り全体が歪んでいる。井戸側板下端とまなこ上端の隙間は６～16㎝の円礫を敷き詰めて地山の露出を避けている。覆土は井戸内部に５層、井戸掘方に２層確認している。第１・２層は上層に比定される土層で、礫や地山土の混入が多く認められる。第３・４層は中間層に比定され炭化物や木片の混入がある。第５層は混入物が無い灰色粘土で下層に比定される。掘方の第６層は黄色粘土の地山土が混入するのに対して、第７層は青灰色粘土の地山土が多く混入する。出土土器は第１～３層に集中し須恵器、土師器、土師質土器、珠洲焼、加賀焼、越前焼、瀬戸焼、白磁碗、瓦などが検出された。また、第５層から検出された植物種実はほぼ第48号と同種類のものが多い。時期は出土土器から14世紀後半と推定される。

第49号井戸（第90図　図版－41）

Ｉ－７区に位置する。上面は長辺146㎝の隅円方形、底も長辺96㎝の方形を呈する。検出面からの深さは108㎝で、底の標高は2.94ｍを測る。断面形もほぼ方形を呈し壁も直立する。内部施設は一切認められないが、井戸底形態などから方形縦板組の井戸側が存在したと推定される。覆土は第１～3'層が上層で濁黄灰色砂質土の地山土をブロック状に多く含む。第４～６層は中間層で炭粒と青灰色粘土の地山土をブロック状に含む。第７層が下層で青灰色粘土の地山土を主体とする。出土遺物は上層から土師質土器や白磁皿が検出されている。時期は出土土器から14世紀前半と推定される。なお、出土土器の中には越州窯青磁碗の小片が１点確認されているが、他の遺構や包含層からも数点出土している。

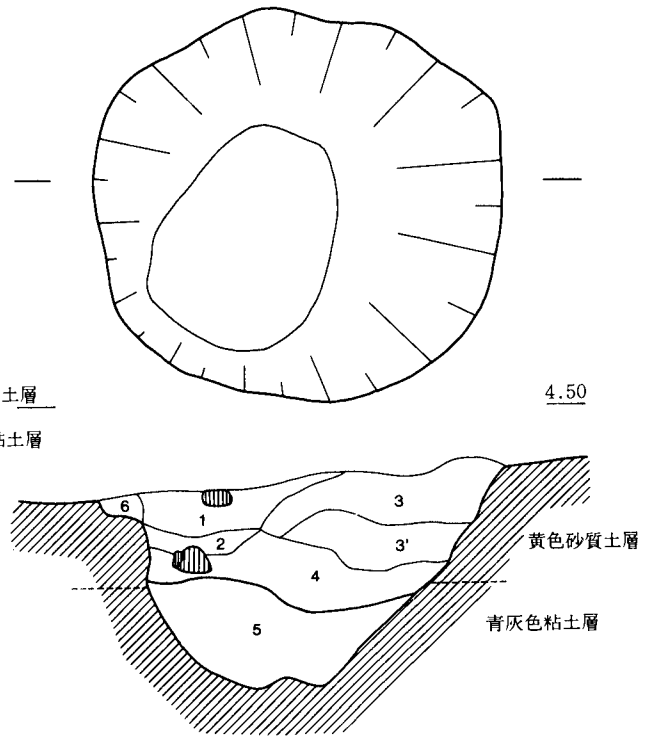
第50号井戸（第82図　図版－49）

Ｈ－６区に位置する。上面は長径234㎝の略円形を呈する。内部に方形縦板組隅柱横桟どめの井戸側が北側に遺存する。検出面からの深さは141㎝で、底の標高は2.68ｍを測り一辺68㎝の方形を呈する。井戸側は72×96㎝の正方形で、深さ115㎝の規模を測る。四隅の柱は４～６×10～13㎝のもので、下端を尖らせ地山に突きさしている。横桟は各面とも上・中の２段だけで下段は無い。南北両面中断の横桟は平枘接（二方胴付枘接）であるが、南面の上段は縦板の裏へ差し込んだだけである。一方、東西両面の横桟は隅柱と縦板の間に当て込んだもので、隅柱や横桟とも枘構造は認められない。縦板は北面を除く各面とも前後２列に幅10～17㎝、厚さ0.5～2.5㎝で、各面の前後列の枚数は南面が７－５、東面が６－６、北面が６－０である。各面の組み方から井戸側は、北面→西面→東面→南面の手順で行われたことが推定される。覆土は第１～４層が上



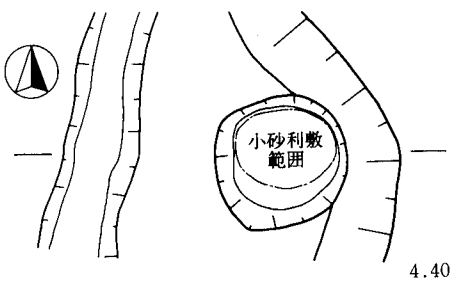
第49号井戸

1 濁黄灰色粘質土層
2 黄灰色粘土層
3 黄色砂層
3′ 青灰色砂質土層
4 濁灰色粘土層
5 青灰色粘土層
6 濁暗灰色粘土層
7 青灰色粘土層
8 明灰色粘土層

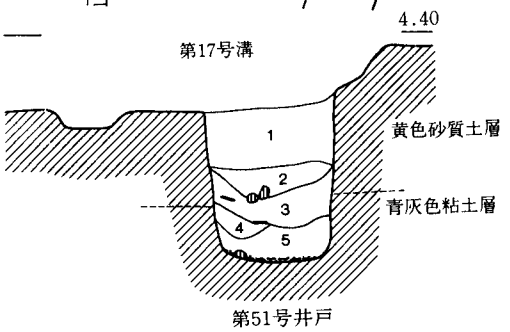


第52号井戸

1 灰褐色粘土層
2 明灰褐色砂質土層
3 濁黄色砂層
3′ 明灰褐色砂質土層
4 濁灰色粘土層
5 濁暗灰色粘土層
6 濁灰色砂質土層



第17号溝

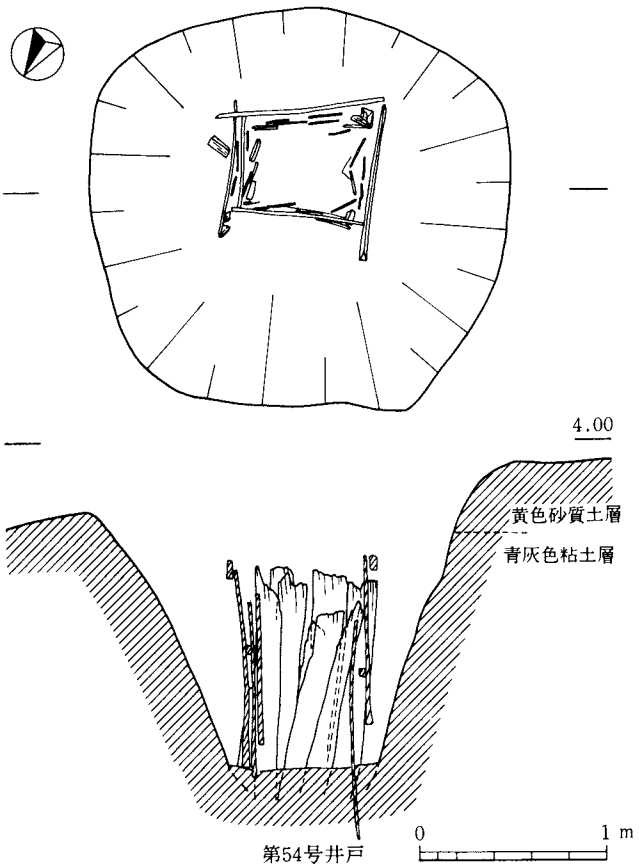


第51号井戸

第51号井戸
1 明黄灰色粘質土層
2 濁青灰色粘土層
3 暗青灰色粘土層
4 濁青灰色砂質土層
5 暗青灰色粘土層

0 2 m

第90図 第2次調査井戸実測図(1)（S＝1／40）



第91図　第２次調査井戸実測図(12)（Ｓ＝1／40）

層、第５～９層が中間層的で、第10層が下層的な堆積土と認められる。上層に限り地山の黄色砂層が混入する。出土遺物は中間層的な土層に集中し土師質土器、加賀焼、青磁碗が検出された。下層的な第10層は、第31号井戸の下層第11層と同様に植物遺体の混入が認められ、検出された植物種実も同種のものが多くある。時期は出土土器から13世紀前半と推定される。

第51号井戸（第90図　図版－41）

Ｉ－６区に位置して上面を第17号溝で切られる小型の井戸である。上面は径71cmの円形、底も径56cmの円形を呈する。検出面からの深さは91cm、底の標高は3.18mを測る。内部は円筒形を呈して井戸側は認められ底に１～３cmの小砂利が薄く敷かれている。上面が第17号溝で切られたとすると深さは115cmと推定される。覆土は第１・２層が上層、第３層が中間層、第４・５層が下層と識別される。上層は地山の黄色砂質土が混入、中間層からは須恵器、土師質土器、珠洲焼、加賀焼等が出土、下層の第５層は灰色粘土と青灰砂が薄く互層に堆積している。時期は出土土器から13世紀と推定される。

第52号井戸（第90図　図版－41）

Ｉ－６区に位置し西側上面を第17号溝で切られている。上面は径216cmの円形、底は長径120cmの楕円形を呈する。検出面からの深さは116cmで、底の標高は3.02mを測るが、断面や底とも歪む。井戸側等の内部施設は認められない。覆土は第１～４層が上層、第５層が下層的な土層と識別された。上層は地山の黄色砂質土や灰色粘土が多く混入する。特に第４層下面からは多量の礫と土器片が検出された。共に井戸の廃棄時に投入されたものと考えられる。第５層は灰色粘土を主体とする土層で、調査中には多くの植物遺体（茎幹）が認められたが、冠水により土層が崩壊し土壌のブロック・サンプリングができなかった。出土土器は第４層を中心に土師質土器、珠洲焼、越前焼、加賀焼、瀬戸焼などで、他に石製の行火も検出されている。時期は出土土器から15世紀前半と推定される。

本井戸跡は覆土や廃棄時期が第31号井戸に似ているが、内部構造の痕跡が認められず形態が不整形な点から、土坑として処理される遺構群に含まれる可能性が高い。

第54号井戸（第91図　図版－48）

調査区の北東Ｌ－１区に位置する。上面は径210㎝の略円形を呈する。内部に方形縦板組隅柱横桟どめの井戸側が遺存する。検出面からの深さは155㎝、底の標高は2.26ｍを測る。井戸側の平面形は62×72㎝の台形を呈して、106㎝の深さに組まれている。北面の東西両隅には一辺７～11㎝の角柱が遺存するが、南面の両隅には確認されていない。隅柱に組まれた上下２本の横桟は、平柄接であったが、検出時には横桟は隅柱から遊離していた。また、北面を除く三面の内側には、横桟の補強を目的とする幅16～25㎝の縦板が井戸底に差し込まれていた。覆土は上下２層に大別されたが、共に灰色粘土を主体とする土層であった。出土遺物としては井戸上面から土師器、珠洲焼、加賀焼、土錘、石製行火などが検出された。本井戸は調査区北東に単独で位置し、井戸側内部の補修を行なっている点と、周辺出土の遺物の年代からして、中世末から近世前半の年代と推定される。

4　竪穴状遺構

第２次調査区で確認された竪穴は８基であった。その分布は井戸と同様に調査区の南半部に広がり、調査区を東西に二分する第17号溝の東方に４基、西方に４基が検出された。東方の４基の竪穴（第12～16号竪穴）が群集するのに対して、西方の４基の竪穴（第８～11号竪穴）は、ほぼ第17号溝に沿って直線的に並んでいる。これら以外に４基の遺構（第16～19号竪穴）を調査時に竪穴としたが、その後の比較検討により不備な点が多く竪穴からは除外した。

第８号竪穴（第93図　図版－51）

調査区中央の残丘南側のＩ－５区に位置する。平面形は隅円長方形を呈するが、南側上面は後世の削平により一部失なわれている。規模は592×353㎝を測り、深さは50㎝、床面積は13.16㎡、床面の標高は3.98ｍである。床の北側中央と北東隅に径80㎝程のピットが検出された。周溝や側壁板等の内部施設も認められなかったが、北東隅の上面から第17号溝を結ぶ小溝が確認された。小溝の規模は幅26～30㎝、深さ12㎝を測る。覆土は竪穴と小溝とも黄灰色粘土を主体とするもので、遺物の出土は少ない。時期は出土土器から13世紀後半と推定される。

第９号竪穴（第92図　図版－50）

第８号竪穴北方のＩ－４区に位置する。平面形は方形を呈するが、やや歪んでいる。規模は352×302㎝、深さは26㎝を測る。床面積は8.64㎡、床面の標高は4.38ｍである。床の中央・北東隅・南西隅の三ヶ所に径28～72㎝のピット、床中央に大型の砥石が検出された。周溝などの内部施設は認められなかったが、床面の締まりは比較的に強く覆土との認別が容易であった。覆土は灰褐色粘土を主体とするもので、堆積状況から人為的な埋め込みが図られたと推定される。時期は出土土器から14世紀前半と推定される。

第10号竪穴（第92図　図版－50）

調査区南端のＨ－７区に位置する。平面形は隅円方形を呈するが、南側の一部が未調査である。南西側に小平坦面が付設している。規模は338×312㎝、深さは25㎝を測る。床面積は7.75㎡、床面の標高は3.87ｍである。壁面の周囲には径25～45㎝のピットが12ヶ程確認されている。

覆土は濁黄色粘質土と黒色粘土の上下二層に大別されたが、上層の濁黄色粘質土は地山土であり、本遺構の廃棄時に投入された土層である。上面にはその後に構築された柱穴等が検出された。また、壁際には側板の痕跡も認められた。時期は出土土器から15世紀前半と推定される。

第11号竪穴（第92図）

H－6区に位置し第31号井戸と切り合う。平面形は方形と推定されるが、両壁が検出されていない。規模は東西幅266cm、深さ25cmを測る。床面の標高は4.15mであった。北壁上には径50cm前後のピットが並び、覆土は共に灰色粘土の単一層であった。集落内の立地や形態、覆土や井戸との関係の点で第15号竪穴に類似している。時期は第31号井戸よりも新しく15世紀後半以降と推定される。

第12号竪穴（第93図）

K－7区に位置して第13号竪穴と隣接する。平面形は隅円方形を呈する。規模は280×230cm、深さは22cmを測る。床面積は6.4㎡、床面の標高は3.88mである。ピットや側板等の内部施設は認められず出土遺物も少量であった。覆土は明灰色粘土の単一層で、時期も不明である。

第13号竪穴（第93図　図版－42）

K－6区に位置して第46号井戸と切り合う。平面形は長方形を呈する。規模は442×364cm、深さは18cmを測る。床面積は15.8㎡、床面の標高は3.92mである。竪穴に付随するピットや側板等の内部施設は認められないが、床面中央から西側には径5～30cmの礫が多量に出土した。礫は中央と北壁際に群集するが、その他はバラツキがある。南側より砥石と茶臼（上臼）が出土している。覆土は灰色粘土を主体とする。時期は出土土器から15世紀頃と推定される。

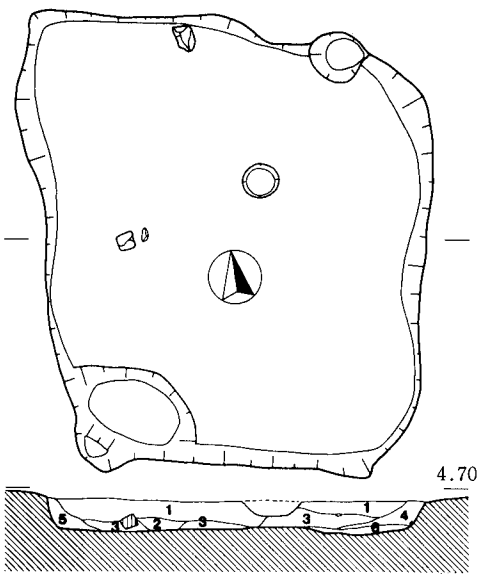
第14号竪穴（第93図）

L－6区に位置して第15号竪穴と隣接する。平面形は隅円長方形を呈する。規模は445×298cm、深さは12cmを測り竪穴の中では最も浅い。床面積は12.7㎡、床面の標高は4.04mである。竪穴に付随するピットや側板等の内部施設は確認されていない。床面南側で検出された6ヶ所のピットは、いずれも本遺構廃棄後のものと推測された。覆土は第12号竪穴と同色同質の明灰色粘土で、出土遺物も少量しか検出されていない。時期は出土土器から15世紀頃と推定される。

第15号竪穴（第92図）

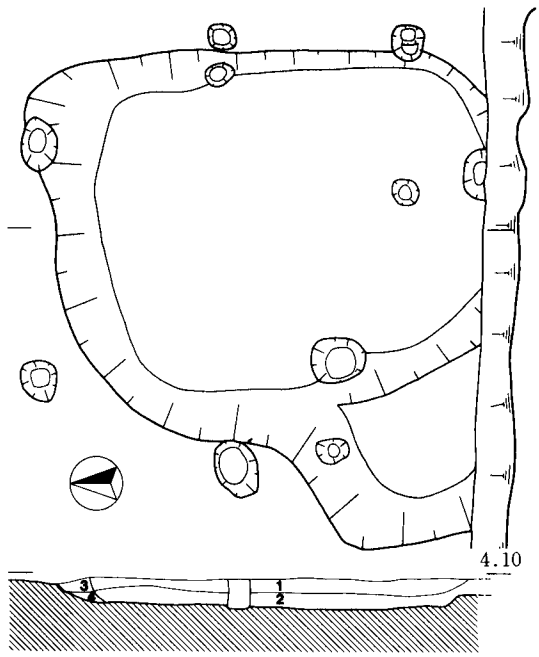
K－5区に位置して第42号井戸と切り合う。平面形は隅円方形を呈する。規模は316×310cm、深さは54cmを測る。床面積は約9.6㎡、床面の標高は3.94mである。第42号井戸との新旧関係は把握できず不明である。形態や立地、覆土や井戸との関係の点で、第11号竪穴に類似している。特に北側の壁を中心に認められた側板状の痕跡は、両遺構に共通するものである。覆土は灰色粘土の単一層で、時期は出土土器から15世紀前半と推定される。

以上が第2次調査区で確認された8基の竪穴の概要である。これら以外に竪穴状の遺構が4基（第16～19号竪穴）検出されたが、その不整形な形状からして竪穴とするには不備な点が多く認められたので本項から除外した。各遺構は観察の結果、方形の溝状遺構、溝状遺構と土坑の接合、窪地の三種に分けることができるもので、井戸や広場的な空閑地と共に作業場を構成したと考えられる竪穴とは認定できる遺構ではなかった。



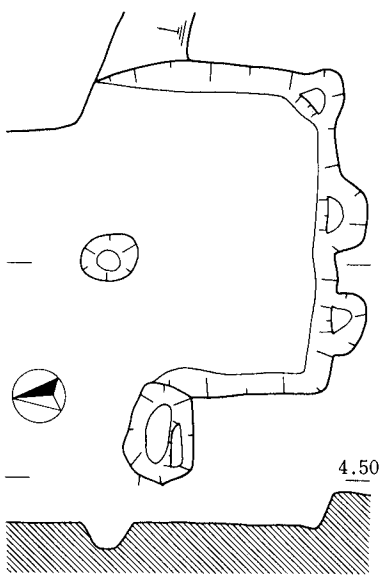
第9号竪穴

1　濁黄灰色粘土層　　4　明灰褐色粘質土層
2　暗黄灰色粘土層　　5　灰褐色粘質土層
3　灰色粘土層　　6　明灰色粘土層

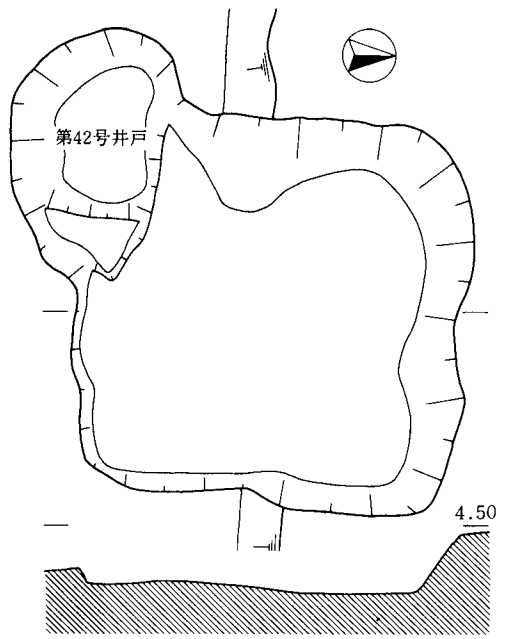


第10号竪穴

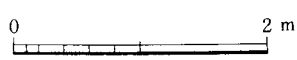
1　濁黄色粘質土層　　3　明灰褐色粘土層
2　黒色粘土層　　4　灰褐色粘土層



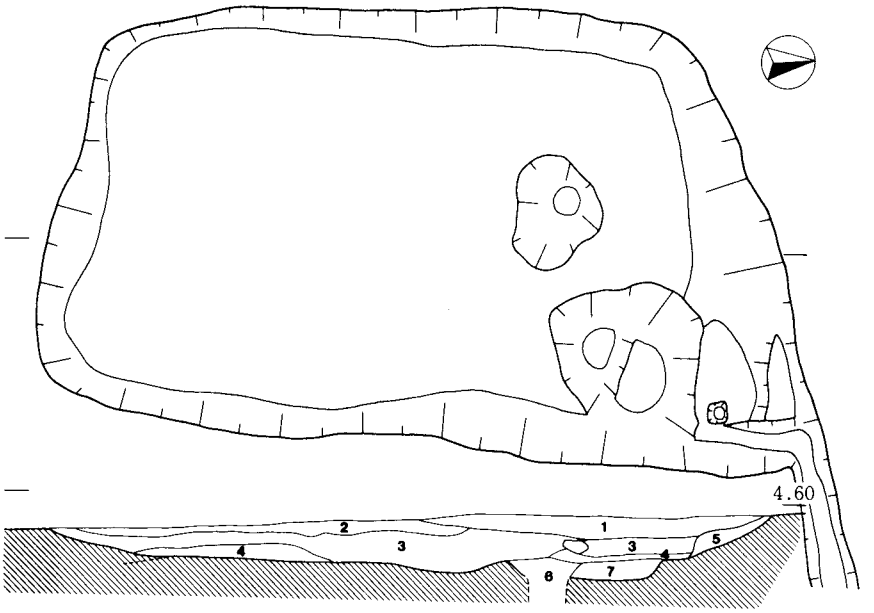
第11号竪穴



第15号竪穴

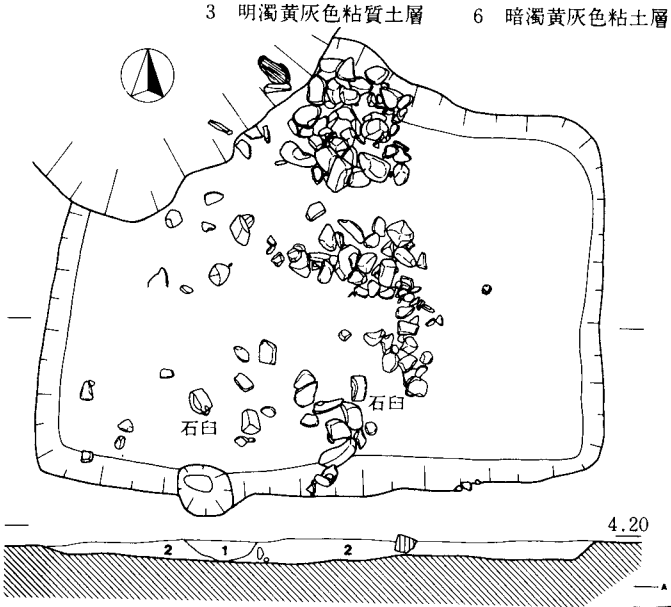


第92図　第２次調査竪穴実測図(1)（Ｓ＝1／60）

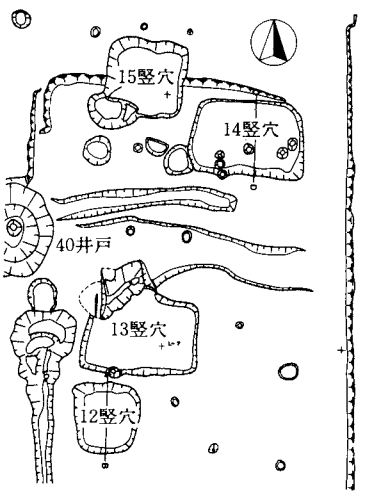


1　暗濁黄灰色粘質土層　　4　暗灰色粘土層　　7　濁黄灰色粘土層
2　灰褐色粘土層　　5　明灰褐色粘土層
3　明濁黄灰色粘質土層　　6　暗濁黄灰色粘土層

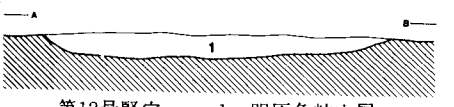
第８号竪穴



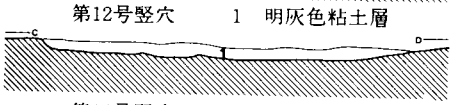
第13号竪穴
1　濁黄灰色粘土層　　2　灰色粘土層



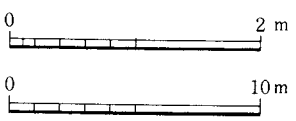
竪穴位置図



第12号竪穴　　1　明灰色粘土層



第14号竪穴　　1　明灰色粘土層



第93図　第２次調査竪穴実測図(2)（Ｓ＝1／60、1／300）

5　土　坑

第２次調査区で検出された土坑は15基である。その分布は調査区全域に広がり、井戸や竪穴で認められた群集や直列化の傾向は見られなかった。規模は小型のものが多く形態のバラツキも見られた。時期的には古代の土坑が調査区の北半部に多く認められるのに対して、中世の土坑は調査区南半部に広がる。なお、第24～28号土坑の５基の土坑は、調査時に井戸やピットとして整理したが、検討の結果土坑として報告する。

第18号土坑（第94図　図版－53）

第２残丘の東側Ｊ－２区に位置する。二段掘りの土坑で上面の平面形が楕円形、下面の平面形が円形を呈する土坑である。下面が主体と考えられ砥石、礫、土器片が検出されている。規模は長径124㎝、深さ56㎝を測る。覆土は黄褐色粘土を主体として、時期は出土土器から10世紀前半と推定される。土器片の中にはＪ－５区のピットより出土した長沙窯陶片（水注か）と同一個体と考えられ陶片が出土している。

第19号土坑（第94図）

Ｋ－５区に位置し平面形が略方形を呈する土坑である。規模は124×106㎝、深さ28㎝を測る。覆土は灰色粘土を主体とする。出土土器が無く時期は不明である。

第20号土坑（第94図）

Ｇ－６・７区に位置し平面形が略長方形を呈する土坑である。規模は228×88㎝、深さ26㎝を側る。覆土は濁灰褐色粘質土の単層で、混入物は認められなかった。出土土器が無く時期は不明であるが、周囲の遺構や本土坑の形態から中世前半期の土葬木棺墓と推定される。

第22号土坑（第94図）

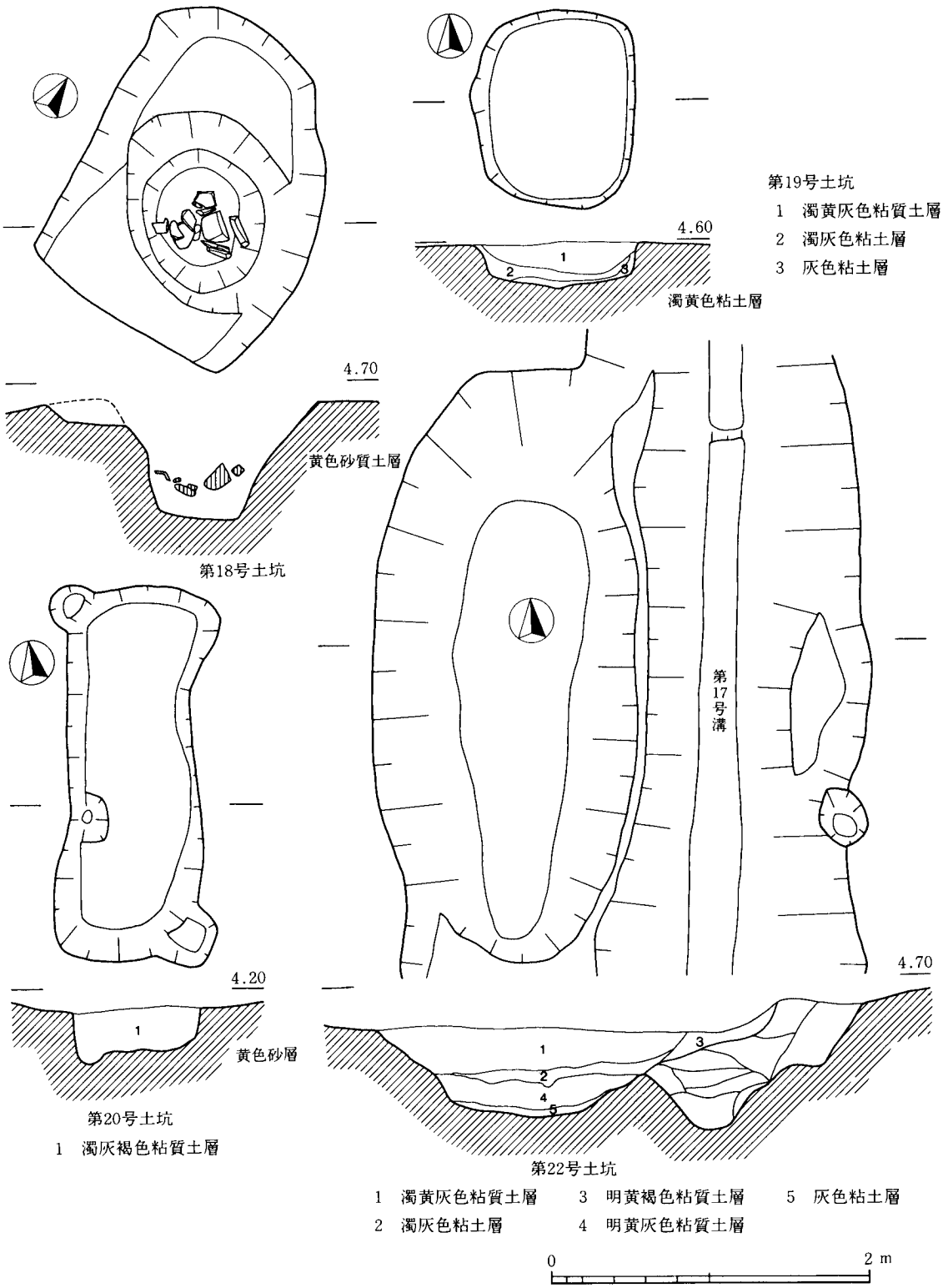
Ｉ－４区に位置し第17号溝と切り合う。平面形は略楕円形で所謂舟形の形態を呈する。規模は375×254㎝、深さ58㎝を測る。覆土は黄灰色粘土と灰色粘土の互層状態で、土層観察から本土坑は第17号溝の廃棄後に築かれたものであることが知られた。南側に位置する第25号土坑と立地や形態が似ている。

第23号土坑（第95図）

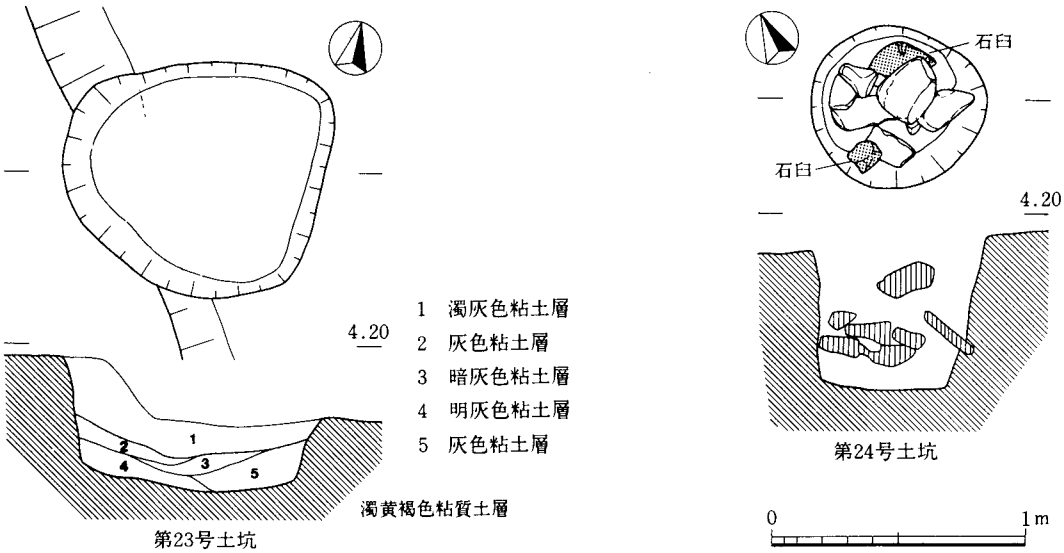
調査区北東のＬ－２区に位置し上面を近世の溝で切られている。平面形は略円形を呈する。規模は103×96㎝、深さ47㎝を測る。覆土は灰色粘土を主体とし３層の暗灰色粘土には炭化物と灰が多く混入していた。また、１と２層との間には炭化した木片とヒョウタン仲間の未熟種子が検出されている。時期は中世後半期と推定される。

第24号土坑（第95図）

調査区南側のＪ－７区に位置する小型の土坑である。平面形は円形を呈する。規模は69×64㎝、深さ61㎝を測る。覆土は青灰色粘土を主体とし内部から10個の礫が検出された。礫は長さ18～26㎝程の大きさのもので、粉挽き臼の上臼が３点（同一個体）含まれていた。各礫とも本遺構廃棄時に一括投入されたものと考えられ、石臼の廃棄状況が知られる遺構として興味深い。時期は不明であるが、戦国時代と推定される。



第94図 第2次調査土坑実測図(1)（S＝1／40）



第95図　第２次調査土坑実測図(2)（Ｓ＝1／60）

第25号土坑（第96図　図版－53）

Ｉ－５区に位置し第17号溝と切り合う。平面形は略楕円形を呈する。規模は286×175cm、深さ60cmを測る。覆土は褐色系の粘土と灰褐色系の粘土から成り中間層より湾曲したタモ枠が一点検出された。出土遺物は第17溝からの流入品と考えられるもので、土層観察と考え併せると本遺構の年代は、16世紀頃と推定される。なお、タモ枠は保管の不備から乾燥し形状を大きく損なったため図示することは出来なかった。

第26号土坑（第96図）

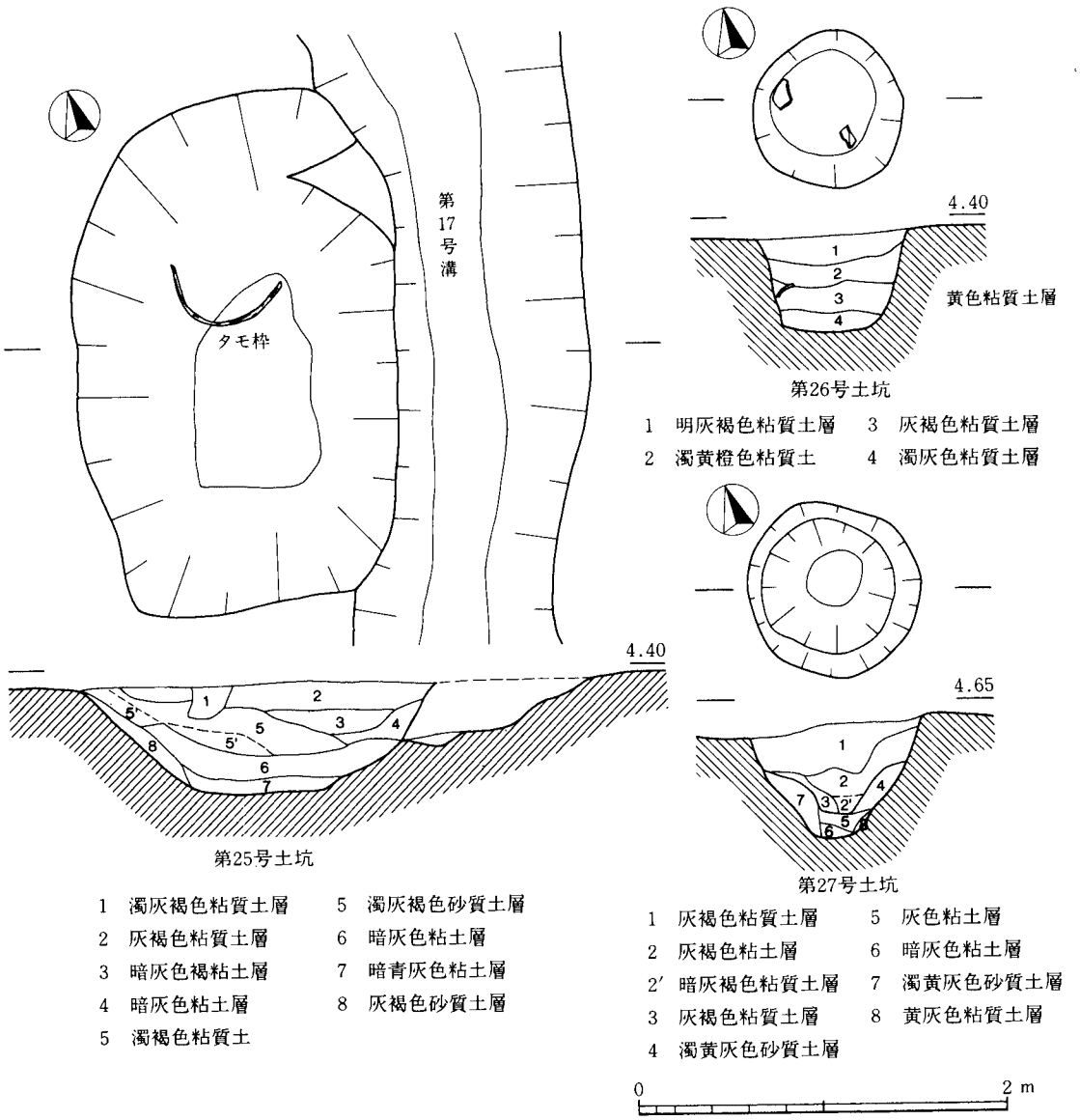
第２残丘東端のＫ－２区に位置する。平面形は略円形を呈し形態が第24号土坑に似ている。規模は86×82cm、深さ53cmを測る。覆土は灰掲色粘質土が間層を挟んで互層に堆積している。時期は出土土器から14世紀頃と推定される。

第27号土坑（第96図）

Ｊ－６区に位置し第13号掘立柱建物と重複する。平面形は円形、断面形は逆三角形を呈する。規模は上面では97×95cm、下面で30×30cm、深さ67cmを測る。覆土は上層が灰褐色粘土を主体とするが、下層は黄灰色粘土や灰色粘土が複雑に堆積している。内部施設の痕跡は認められずその性格は不明である。ただし、覆土の状況から推定するならば、重複する第13号掘立柱建物と同時併存の可能性が高く、時期は中世後半期と考えられる。

第28号土坑（第97図　図版－54）

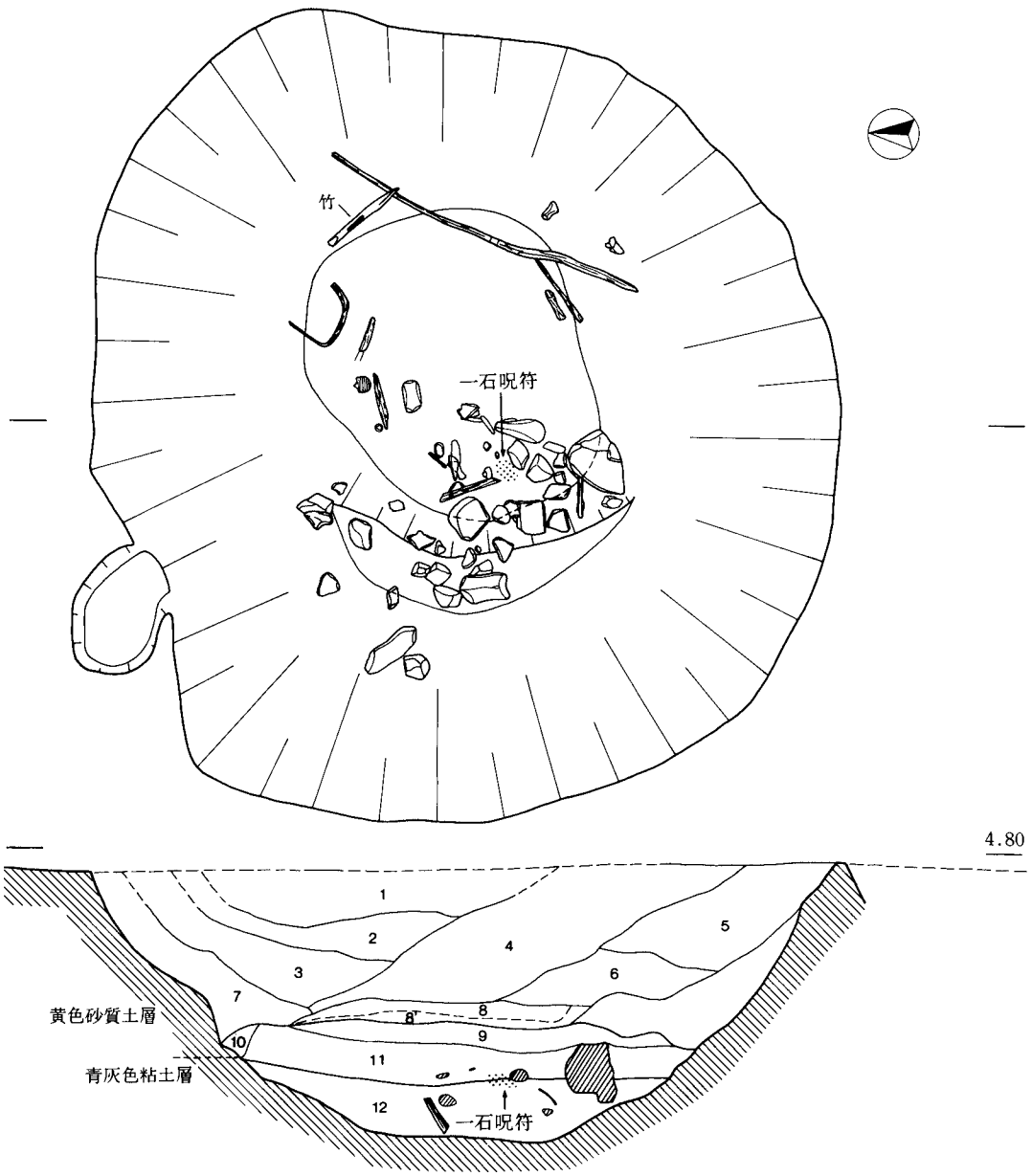
調査区中央の第３残丘上のＩ－３区に位置する大型の土坑である。調査時には井戸痕（第25号井戸）と整理したが、その後の検討により土坑として捉えて報告することとした。平面形は略円形、断面形は擂鉢形を呈する。規模は上面で453×418cm、下面で174×166cm、深さ157cmを測る。覆土は井戸と共に上層（１～８）、中間層（９～11）、下層（12）に大別される。上層は褐色系と灰色系の粘土を主体とするが、いずれも地山質の粘土層で埋めこまれたものであった。中間



第96図　第２次調査土坑実測図(3)（Ｓ＝1／40）

層は青灰色と灰色の粘土層で、礫・植物遺体・土器・木片等が検出された。下層の12はさらに細かく分層され、本遺構が開口し機能していた段階の自然堆積土と推定された。中間層から下層にかけて検出された礫は、10～35cmの角礫と円礫で西半部に集中する。一方、東半部からは棒状の木片や曲物の残片が下層上面から検出された。遺構法面は全体的に滑らかに傾斜するが、礫群下では小テラスが、北東法面では小さな段（階段か）がそれぞれ検出された。出土遺物は遺構規模に対し少量であるが、礫群中より出土した一石呪符は、特異な遺物として注目される。出土層位から本遺構の廃棄時に他の礫と共に投入されたものと考えられる。時期は出土土器から15世紀中頃と推定される。

なお、本土坑はその位置、規模、覆土の三点からその北側に広がっていた小規模な常畠を営む

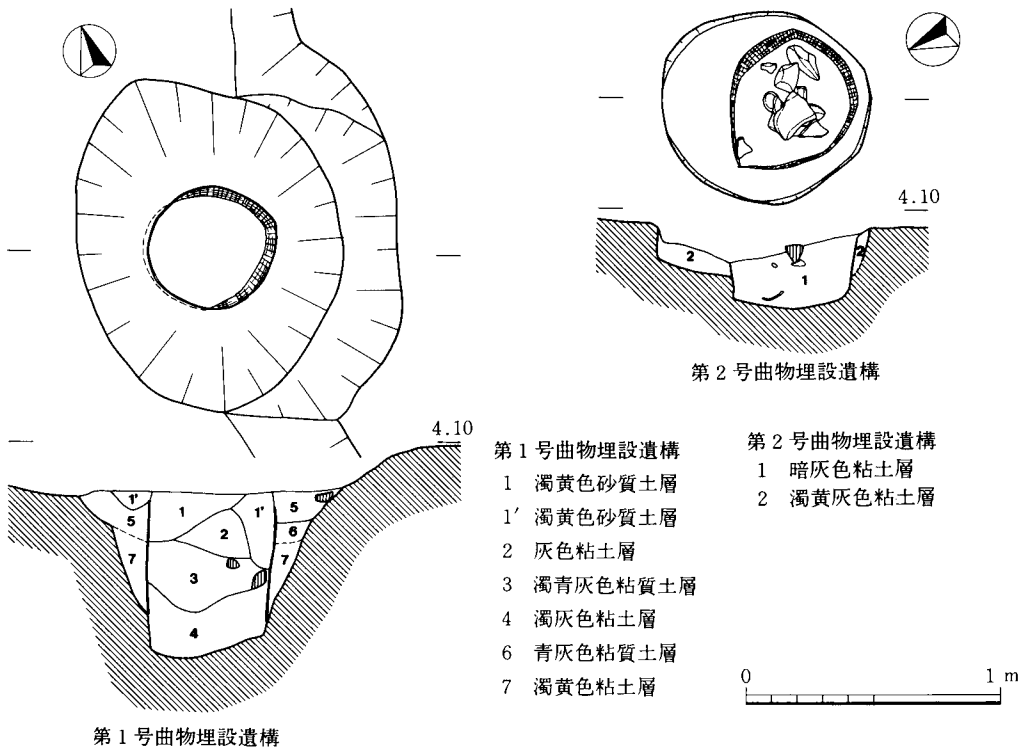


第28号土坑

1　茶褐色粘土層
2　黄茶褐色粘土層
3　明灰褐色粘土層
4　明黄褐色粘土層
5　濁黄灰色粘土層
6　黄灰色粘土層
7　灰褐色粘土層
8　明黄灰色粘土層
8′　濁黄橙色粘質土層
9　青灰色粘土層
10　濁黄灰色粘質土層
11　灰色粘土層
12　暗青灰色粘土層

0　2 m

第97図　第２次調査土坑実測図(4)（S＝1／40）



第98図　曲物埋設遺構実測図（S＝1／40）

畠作区域の土地利用に大きく関係した遺構と推定される。

6　曲物埋設遺構

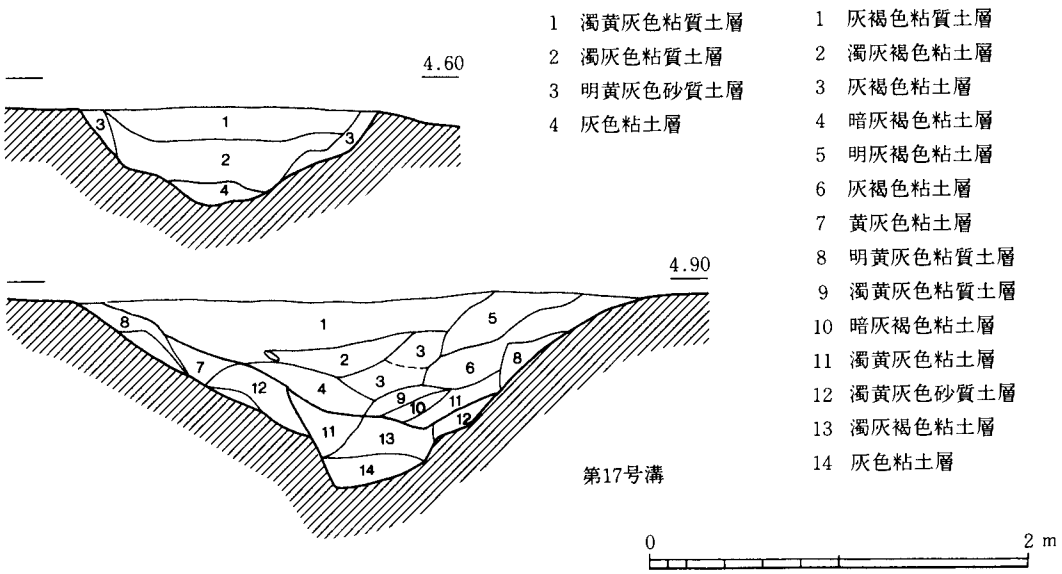
第2次調査区で確認された曲物埋設遺構は2基である。遺構形態は円筒形の小型の土坑内に曲物を設置したもので、井戸側に曲物を用いた井戸と構造が似ている。草戸千軒町遺跡では土坑底部が湧水層に達しておらず、いくつかの遺構に底部の粘土張りが認められる点から「曲物埋設遺構」を井戸とは区別して、水溜や貯蔵施設ではないかと報告している遺構と同類である。

第1号曲物埋設遺構（第98図　図版－52）

Ⅰ－7区の第17号溝の東岸に位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は136×104cm、深さ66cmを測る。内部に設置された曲物はやや歪むが、内径50cm、深さ52cmを測る。曲物は一段で内面のケビキは約2cm間隔で入る。遺存状態は悪く取り上げが出来なかった。覆土は内外とも青灰色粘土と灰色粘土を主体とするものである。時期は出土土器から14世紀前半と推測される。

第2号曲物埋設遺構（第98図　図版－52）

H－6区の第50号井戸西側に位置する。平面形は円形を呈する。規模は84×76cm、深さ33cmを測る。内部に設置された曲物は略三角形に歪み、内径50～59cm、深さ19cmを測る。曲物は一段で遺存状態は悪い。覆土は内部が暗灰色粘土、掘り方が濁黄灰色粘土が堆積していた。曲物内より礫と共に土師質土器や加賀焼などが出土した。いずれも本遺構の廃棄時に埋め込まれたものと考えられ、時期は13世紀後半と推定される。



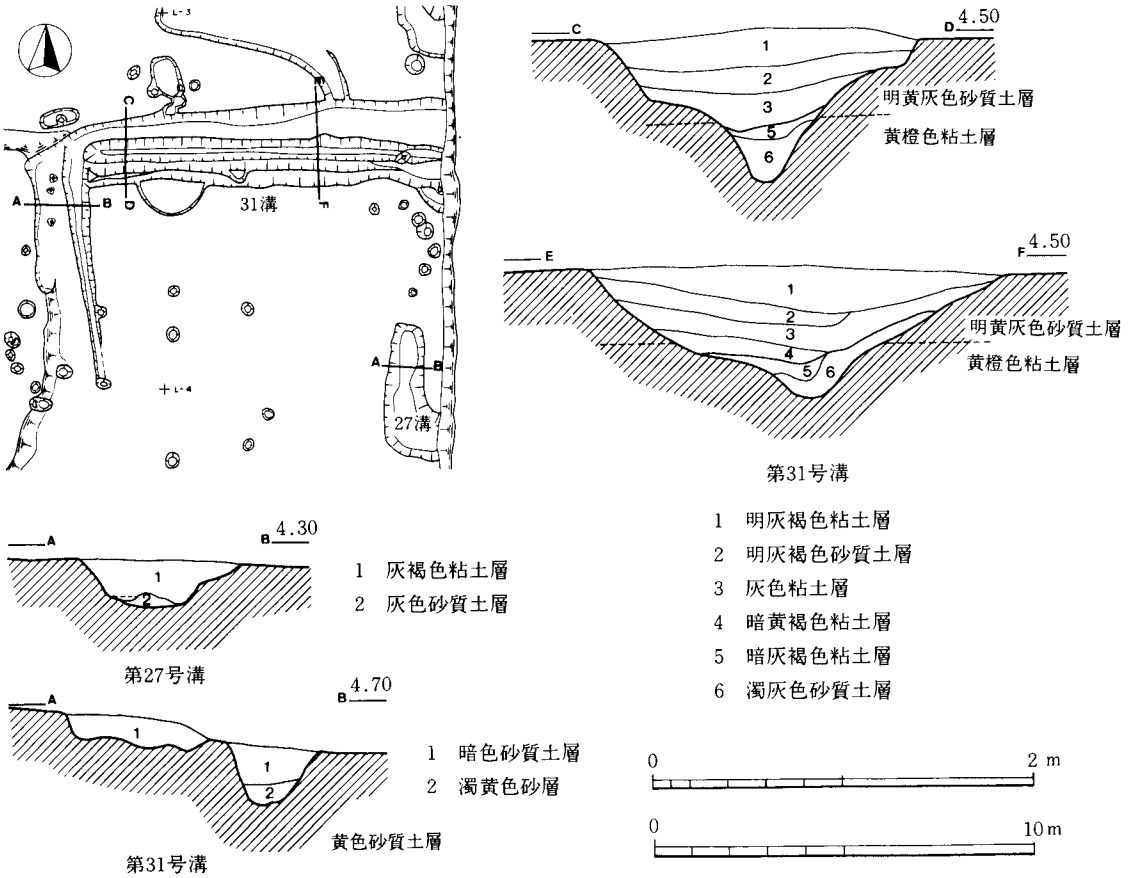
第99図　第２次調査溝実測図(1)（Ｓ＝1／40）

7　溝

第２次調査区で検出した溝と溝状遺構は、重複するものを含めて総数26条に達する。検出地点は、調査区のほぼ全域に広がる。溝はその規模と建物跡や井戸との関係から、家敷地などの居住区域の区割や防御を目的とした溝や堀、掘立柱建物や井戸など施設からの排水を目的とした溝、その他性格不明な溝の三者に分けて捉えることができる。以下、第17号溝を始めとして主要な溝の説明をしたい。

第17号溝は第２次調査区中央を南北に走る溝で、第１・２次調査区内で検出された溝の中では最も大型のものである。その規模は長さ74m、幅は標高が最も高い第３残丘で300cm、南端で480cmを測る。溝はＪ－２区の第21号井戸と重複する地点までは、幅200cm前後でほぼ一定しているが、第21号井戸以南は南下するごとに幅が広がる。深さは第３残丘で100cm、南端で64cmを測る。底のレベルは標高3.9～4.0mとほぼ一定している。覆土は灰褐色粘土と黄灰色粘土を主体とする。遺物は第３残丘部が最も多く、礫と共に各種の陶磁器や石造遺物などが出土した。溝の廃棄は出土土器から15世紀後半と推定される。土塁の痕跡は確認されていないが、その規模からして溝の西方に広がる家屋敷地の保全と防御を目的とした堀と考えられる。

第18～21・23～25号溝は、第１残丘から第３残丘上で検出された溝で、出土遺物から弥生時代末頃と推定される。規模は幅35～60cm、深さ15～35cmの小型の溝である。各溝の覆土は第１・２残丘の第18～20号溝が、橙褐色粘土を主体として、周囲には同色の覆土を持つピットが数多く検出されたのに対して、第３残丘の第21・23～25号溝は、黄橙褐色粘土や黄灰色粘土を主体として、周囲にも同色の覆土を持つピットは少ない。第23号溝東側の小土坑からは、同時期の土器が一括出土し、竪穴住居等の居住施設が営まれていたと推定された。なお、第24・25号溝は、元は同溝であったものが、後世の削平により二分されたものと考えられる。



第100図　第２次調査溝実測図(2)（S＝1／40、1／200）

第22号溝は第28号土坑の東側縁辺をかすめて南下する溝で、第９号竪穴と重複して第26号溝に接合する。第28号土坑と同時期に機能した可能性が高い。その脇に位置する第23号溝は、１条の溝の新旧関係の溝で、第２残丘の第20号溝の延長部に当たると考えられる。第24・25溝は、第９号竪穴の北辺を東西に走り、本来は一条の溝で、第９号竪穴に関係した排水溝とみられる。

第26号溝は、第８号竪穴の北東隅から、東に位置する第17号溝を結んだ小溝である。溝幅36㎝で板組による暗渠構造であった可能性が高い。第17号溝から第８号竪穴の北東隅の小土坑へ導水した施設と考えられる。第27号溝（第100図）は、調査区東側に位置すると推定される屋敷地内部に位置して、Ｌ字状の形態を呈する。第28号溝（図版－56参照）は、第45号井戸から南方向へ延びた遺構である。第45号井戸の近くで、幅１ｍ前後と広いが、南下するのに伴い、幅が縮小し深くなる。位置と方向から、第45号井戸とその脇の竪穴に関する排水溝と考えられる。また第29・30号溝は、第40号井戸から東方向に平行に走る。共に第40号井戸を中心とする井戸跡群との関係から、これら利水施設の排水溝と考えられる。また南北に位置する竪穴群の間を通過することから、屋敷地等の区割り溝であった可能性も指摘される。

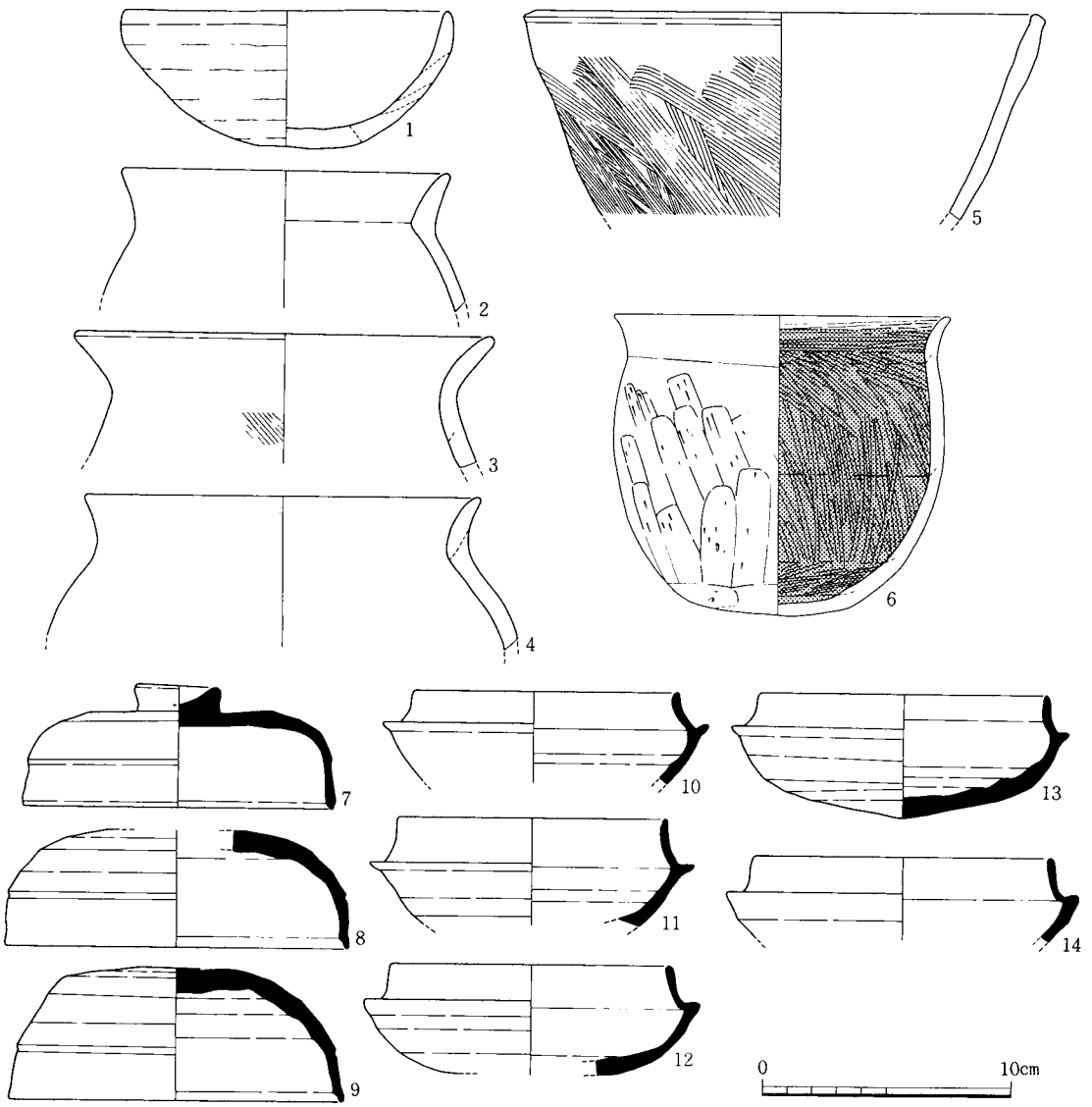
第31号溝（第100図、図版－55）は、調査区東側に位置すると推定される屋敷地の北辺を画する堀状の遺構である。幅218㎝、深さ72㎝を測る。

第3節　出土遺物

1　第1号竪穴住居出土遺物（第101図、図版－57）

この竪穴住居の東半分の床面と東側壁部から、土師器、内面黒色土器、須恵器が出土した。

1は口径13cmの土師器椀である。2～4は土師器の甕で、2・4は橙褐色を呈する。5は口径は20cmの土師器の鉢で、褐色を呈する。6は小型の内面黒色土器の甕である。口径13.4cm、器高21cmを測る。7～9は須恵器の杯蓋で、9は無鈕である。10～14は須恵器の杯身で、胎土をみると10・12・14は灰色で、11・13は灰白色を呈する。これらは6世紀初頭の土器群である。

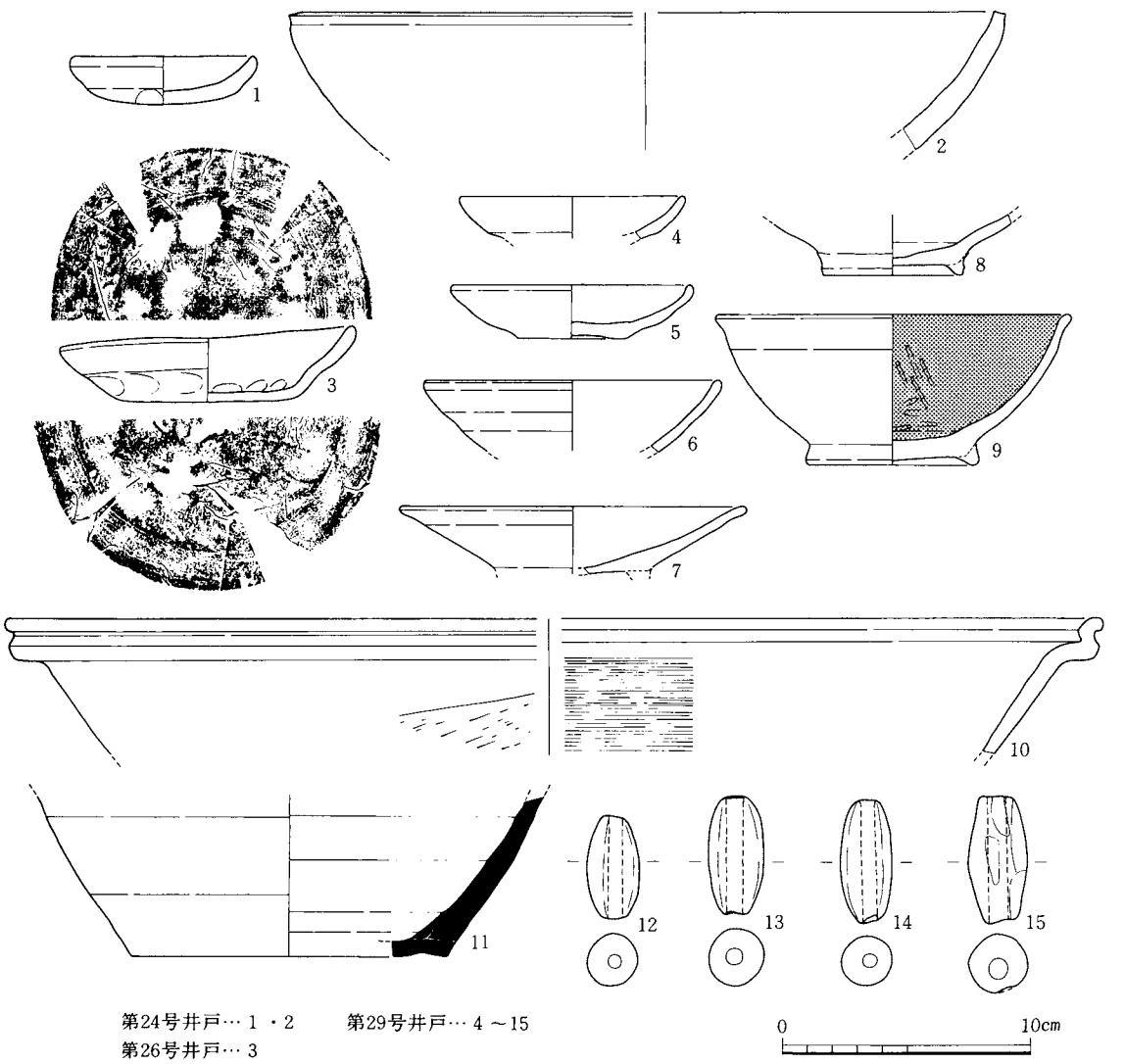


第101図　第2次調査第1号竪穴住居出土土器実測図（S＝1／3）

2　井戸出土遺物（第102～113図、図版－58～62）

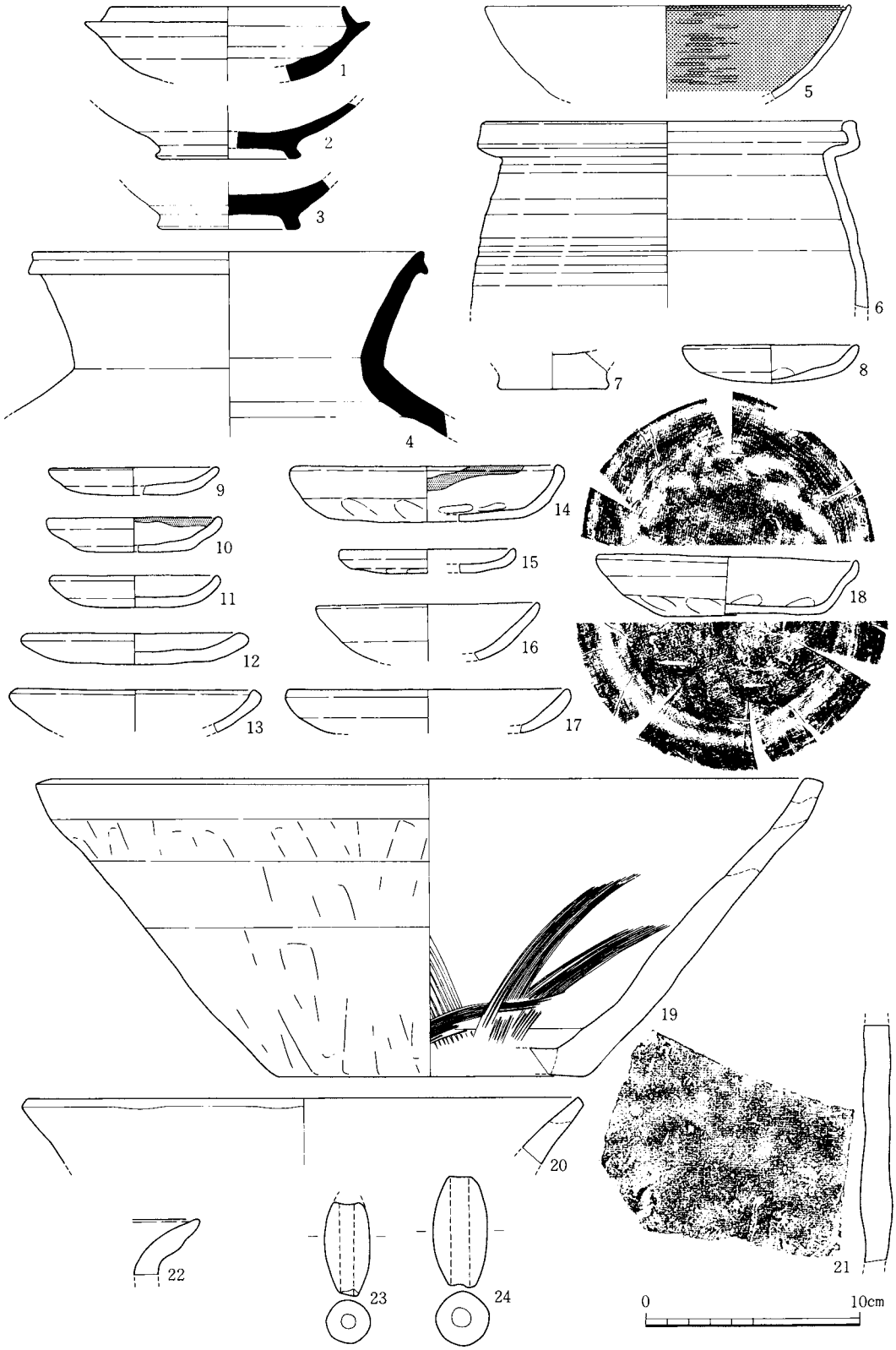
井戸の覆土から出土した遺物は、土器、木製品、石製品の３種類である。本項ではその中でも土器と木製品を扱い、石製品に関しては別項で報告する。また井戸覆土内から出土した古代の土器は、井戸を廃棄した時の埋立て土に混入していたものであるが、資料的に纏まりがある場合は併せて掲載した。

第102図の１・２は、第24号井戸の出土品で、１は土師質土器の小皿、２は珠洲焼鉢である。13世紀前半とみられる。３は第26号井戸の出土の土師質土器で、口径11.7cmを測る。４～15は第29号井戸の覆土から出土した平安時代の遺物で、４～８は土師器皿で、高台の有無と法糧から二群の製品に分かれる。９は内面黒色土器椀、10は土師器鍋、11は須恵器の瓶類、12～15は重さ17～24ｇの土錘である。これらは11世紀前半の製品群とみられる。



第24号井戸…１・２　　第29号井戸…４～15
第26号井戸…３

第102図　第２次調査井戸出土土器実測図１（第24・26・29号井戸）（Ｓ＝1／3）



第103図　第２次調査井戸出土土器実測図２（第27号井戸）（Ｓ＝1／3）

第103図は第27号井戸の出土品で、2・3は須恵器の椀である。5の内面黒色土器は、口径が16.9cmで近江産の可能性が高い。8～18の土師質土器は、胎土が橙色と灰白色の2群の製品に分かれる。19・20は加賀焼擂鉢、21・22は甕である。これらは13世紀中頃の製品とみられる。

第104図の1～3は第30号井戸の出土品で、1は口径7.2cmの土師質土器で灯明痕が残る。15世紀中頃とみられる。2は白磁椀、3は珠洲焼壷である。4～14は第31号井戸の出土品で、4は瀬戸灰釉の平椀、5は瓦質土器の火鉢（方形）である。6は珠洲焼擂鉢、7は加賀焼擂鉢、8は越前焼鉢である。9～13は加賀焼甕で、10の押印は那谷コテンノウダニ窯、12の押印は湯上ユノカミダニ窯のものとみられる。14は珠洲焼壷である。

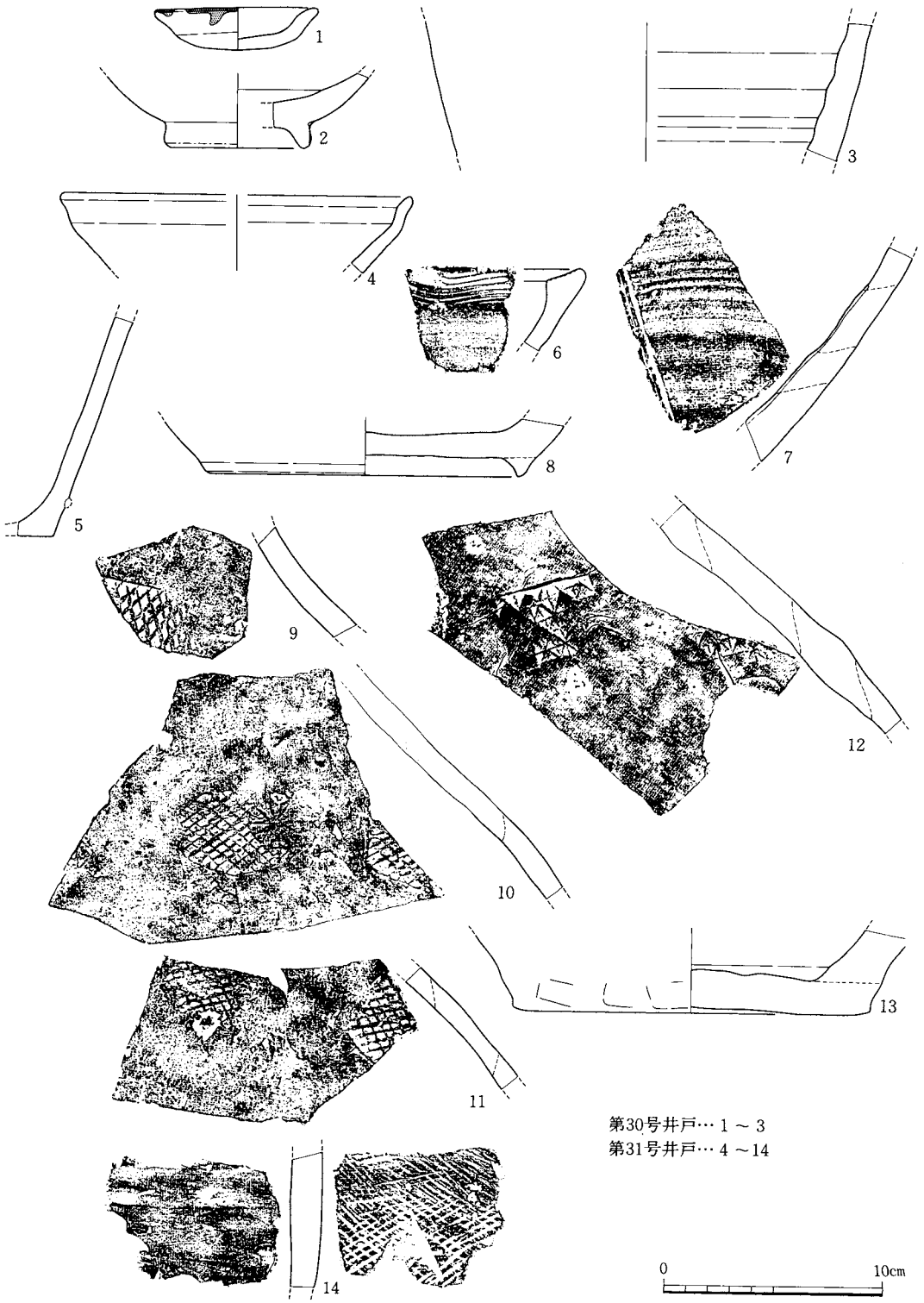
第105図の2～9は第34号井戸の出土品で、2～4は土師器小皿、5・6は土師器椀である。9は白磁椀（Ⅳ類）で11世紀後半とみられる。10～15は第38号井戸の出土品で、10は土師質土器小皿、11～13は珠洲焼擂鉢で、Ⅴ期の製品とみられる。14・15は越前焼甕・擂鉢である。

第106図1～6は第40号井戸の出土品で、2・3は珠洲焼擂鉢、4は珠洲焼甕、5は珠洲焼壷である。6は青磁の無文椀で、15世紀前半とみられる。7・8は第41号井戸の出土品で、7は珠洲焼擂鉢で、口径40.3cmを測る。8は青磁椀で、珠洲焼と共に15世紀前半の製品とみられる。

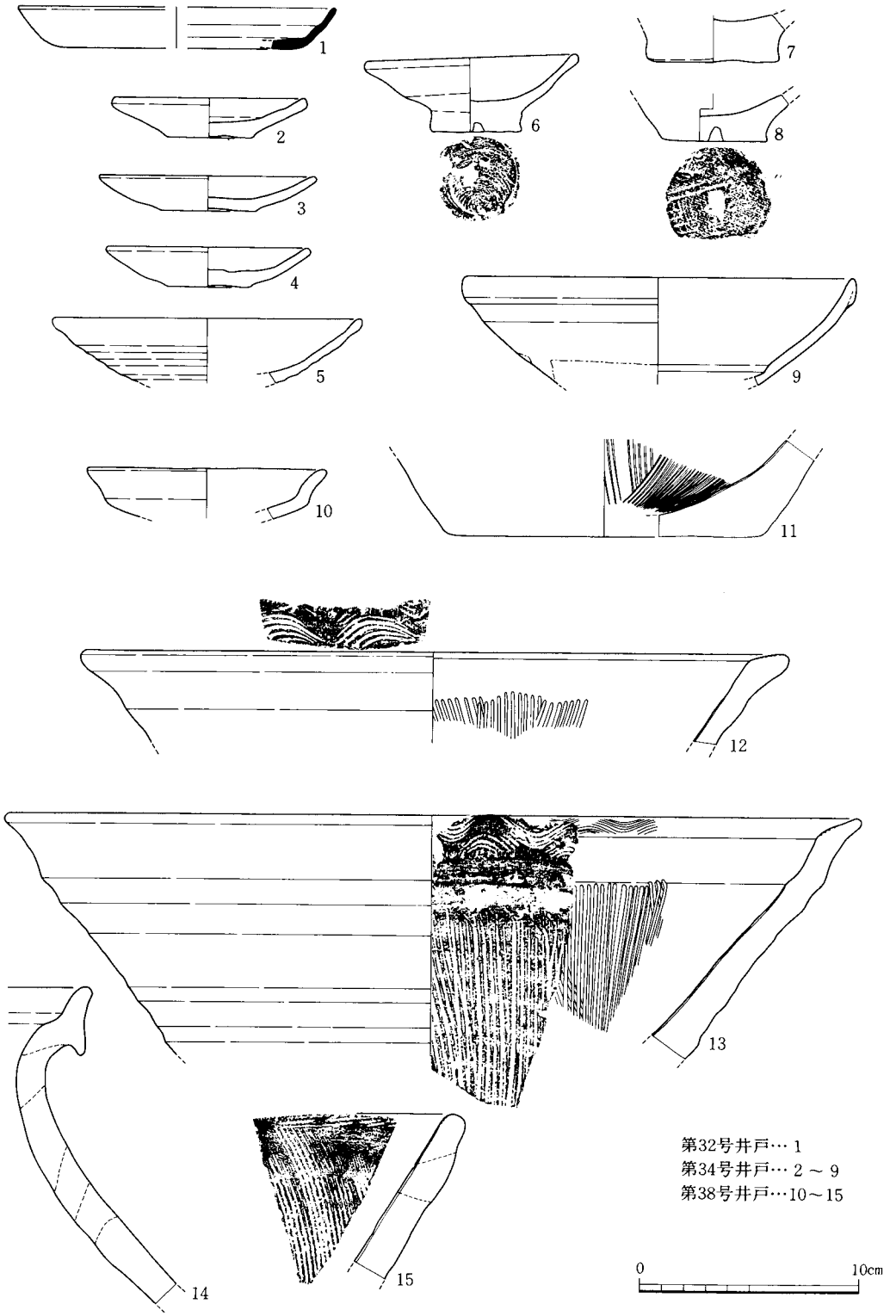
第107図の1～4は第42号井戸の出土品で、1は土師質土器小皿、2は珠洲焼壷、4は加賀焼甕である。5～14は第45号井戸の出土品で、5～10は土師器で、口径8.4～10.2cmの小皿と口径13.8cmの椀である。11は須恵器瓶、12は青磁の無文椀、13・14は珠洲焼擂鉢である。土師器は11世紀中頃、青磁と珠洲焼は15世紀前半とみられる。15～20は第46号井戸の出土品で、15～17は土師器の小皿と有高台椀、18は須恵器瓶、19は土師質土器、20は越前焼甕である。

第108図の1～8は第47号井戸の出土品で、1～4は土師質土器で、1・3の胎土は淡黄色、2・4が灰白色を呈する。また2は耳皿形態を呈する。5は15世紀前半の白磁皿で、高台内に花押状の墨書がみられる。6は加賀焼擂鉢で、刷毛状のおろし目が入る。7は越前焼擂鉢、8は越前焼甕である。9～21は第48号井戸の出土品で、9は須恵器瓶、10は平瓦である。11・12は口径8cm前後の土師質土器で、胎土は灰白色である。13の土師質土器は橙色の製品である。14は珠洲焼擂鉢、15は越前焼擂鉢、16・17は加賀焼擂鉢である。18は越前焼甕、19は加賀焼甕、20は瀬戸灰釉小皿、21は口禿の白磁椀である。14世紀中頃とみられる。

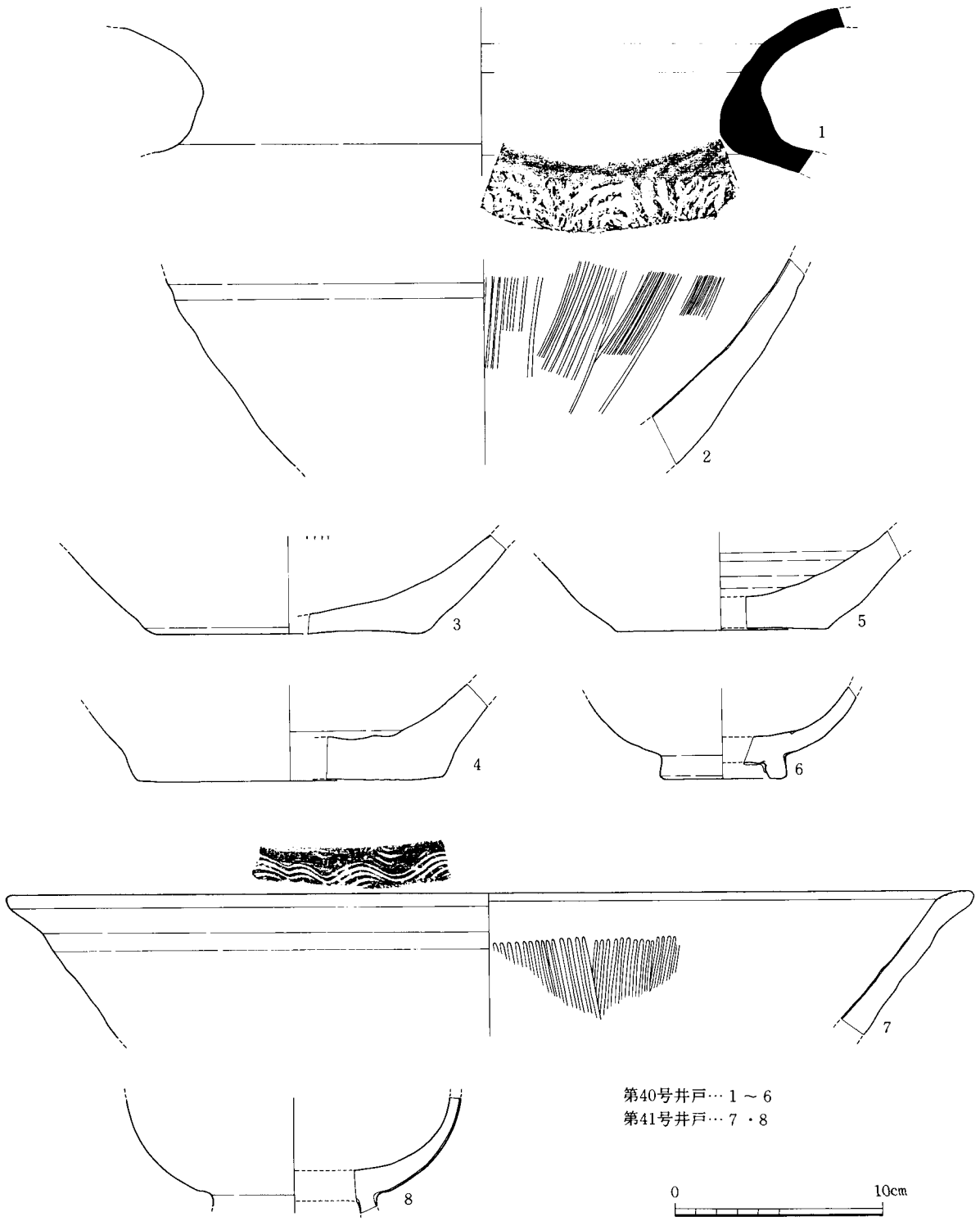
第109図の1～5は第49号井戸の出土品で、2・3は土師質土器で、2の小皿は淡黄色、3の皿は橙色を呈する。4は口禿の白磁皿で、土師質土器と共に14世紀前半とみられる。5は越州窯系青磁椀で、灰オリーブの色調を呈する。6～16は第50号井戸の出土品で、7～12は土師質土器で、胎土が橙色を呈する製品群である。13は土師器鍋で、胎土は淡褐色を呈してやや粗い。鉄鍋を模倣した在地製品とみられる。14は加賀焼擂鉢、15は珠洲焼擂鉢、16の劃花文椀は、龍泉系の青磁である。13世紀前半の製品群とみられる。17～20は第51号井戸の出土品で、17は須恵器甕、18は土師質土器小皿である。19は珠洲焼小壷、20は加賀焼片口鉢で、口径22cm、器高8.6cmを測り、胎土は粗く褐色を呈する。須恵器以外は13世紀前半とみられる。



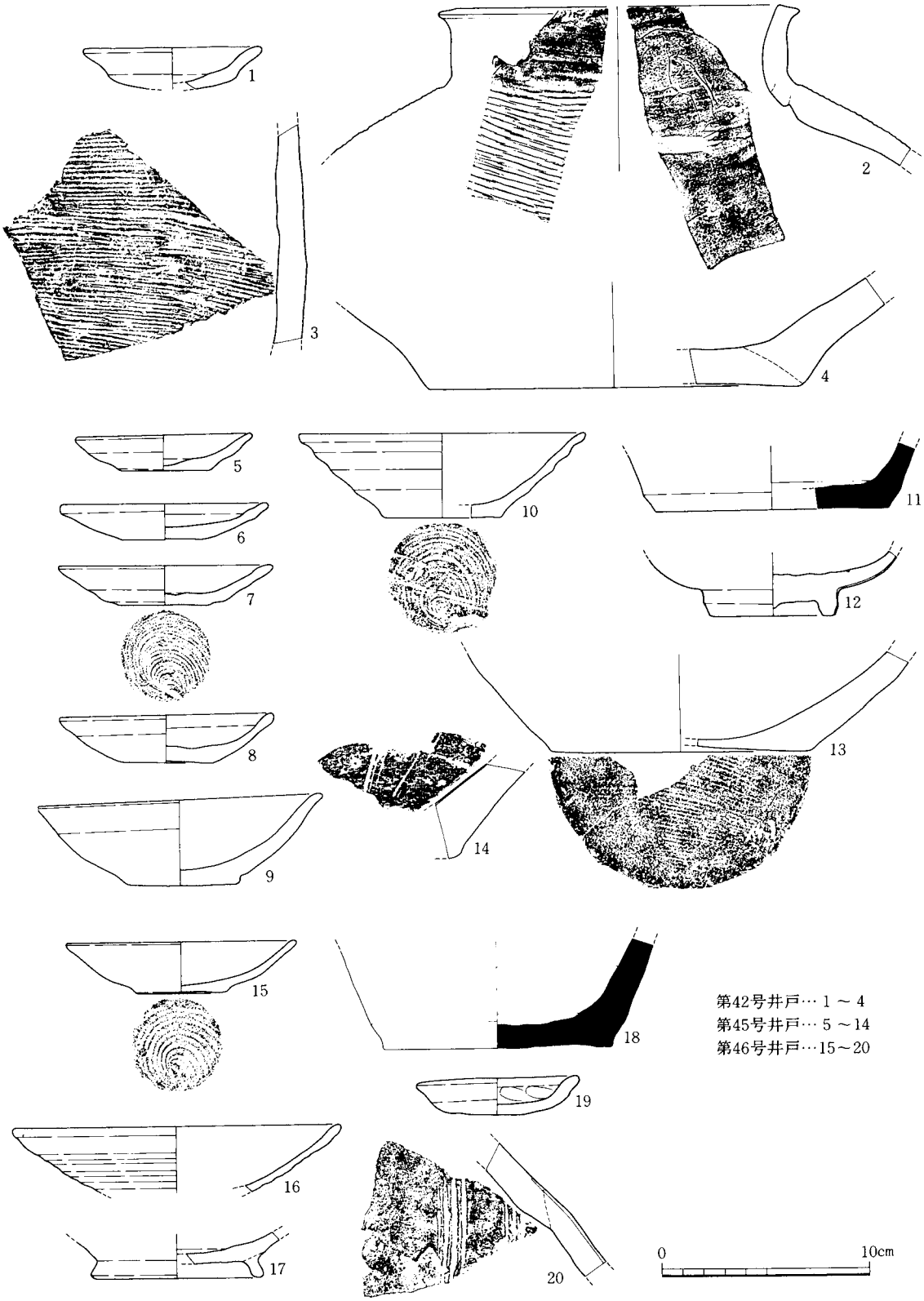
第104図　第２次調査井戸出土土器実測図３（第30・31号井戸）（Ｓ＝1／3）



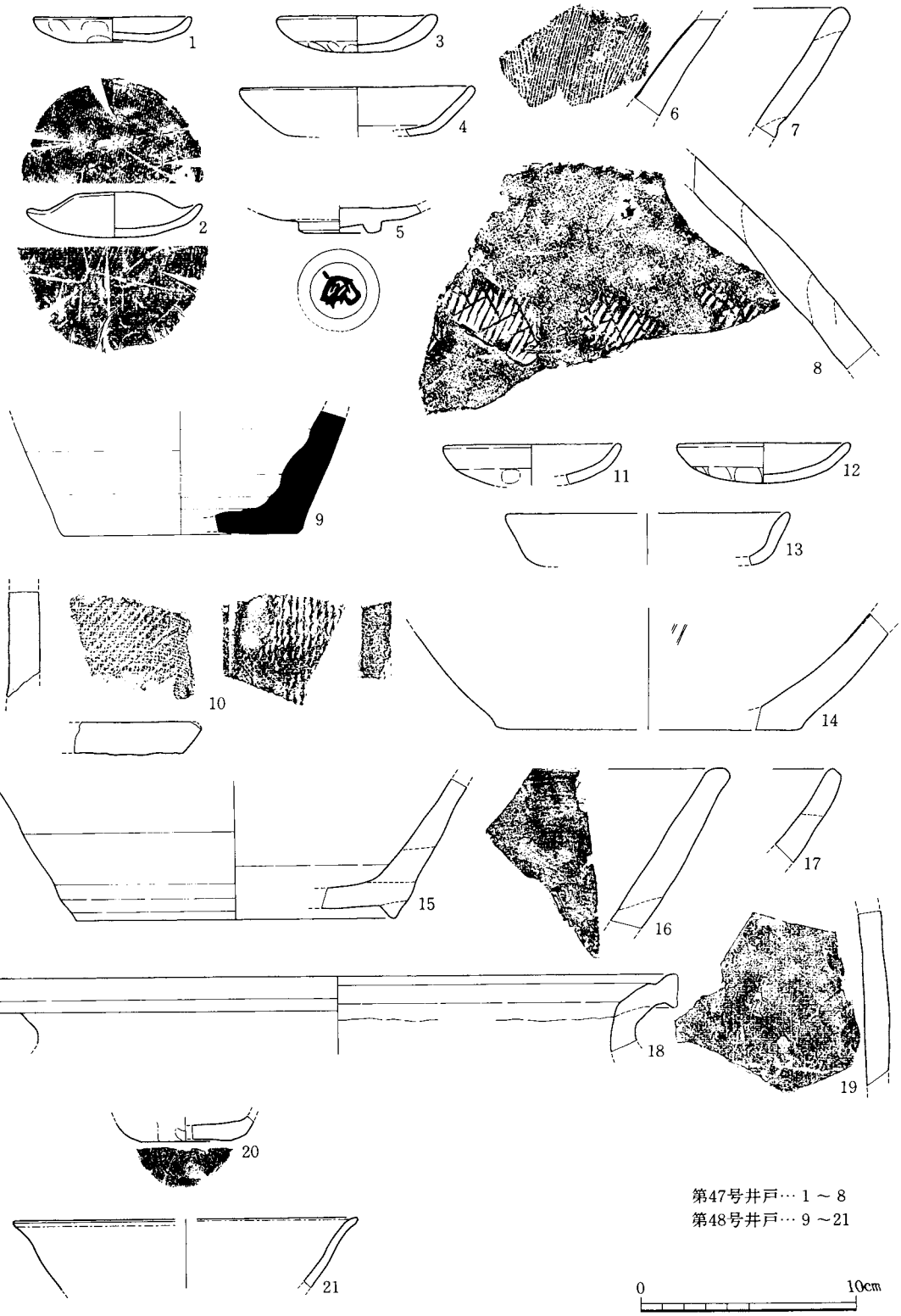
第105図　第２次調査井戸出土土器実測図４（第32・34・38号井戸）（Ｓ＝1／3）



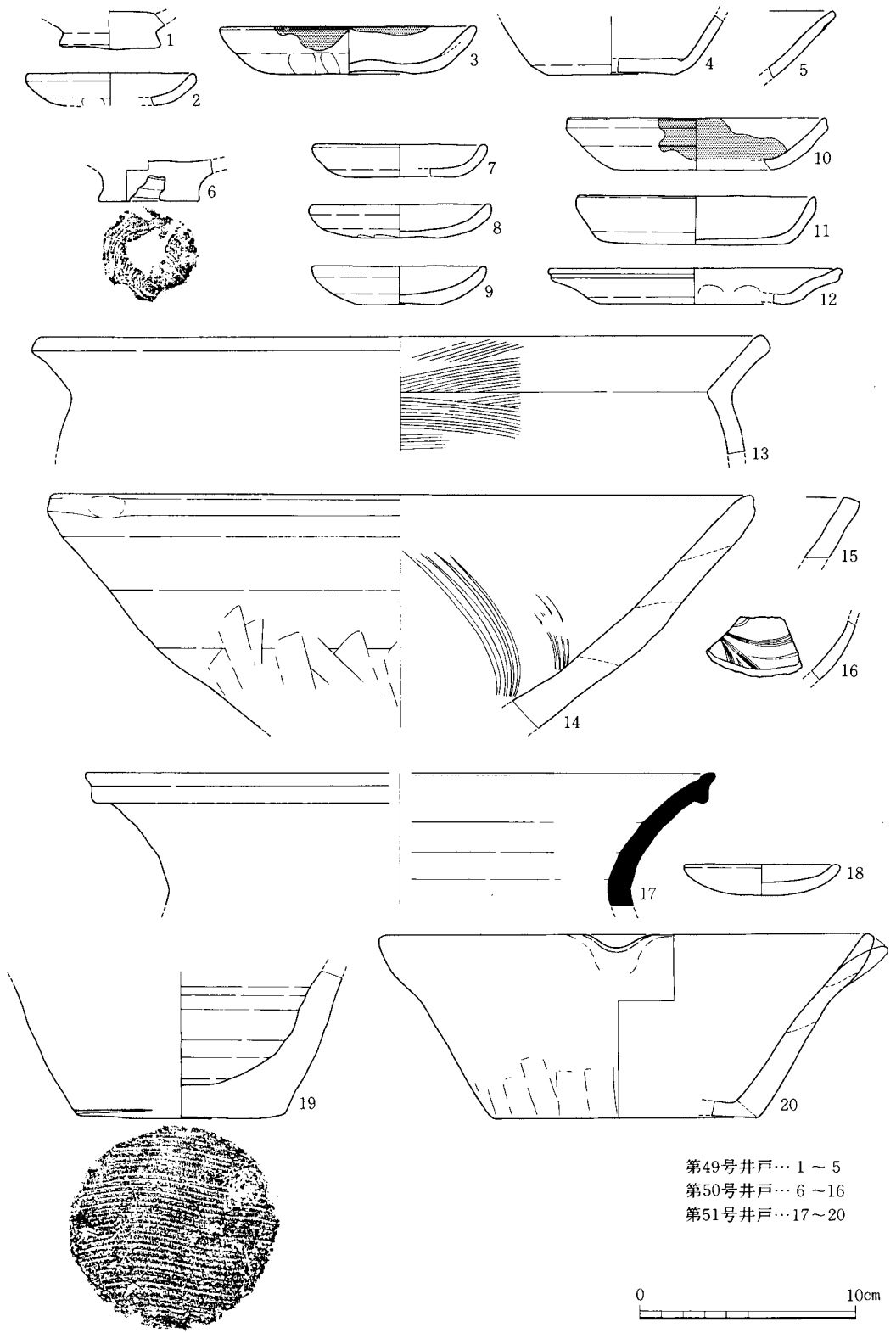
第106図　第２次調査井戸出土土器実測図５（第40・41号井戸）（Ｓ＝1／3）



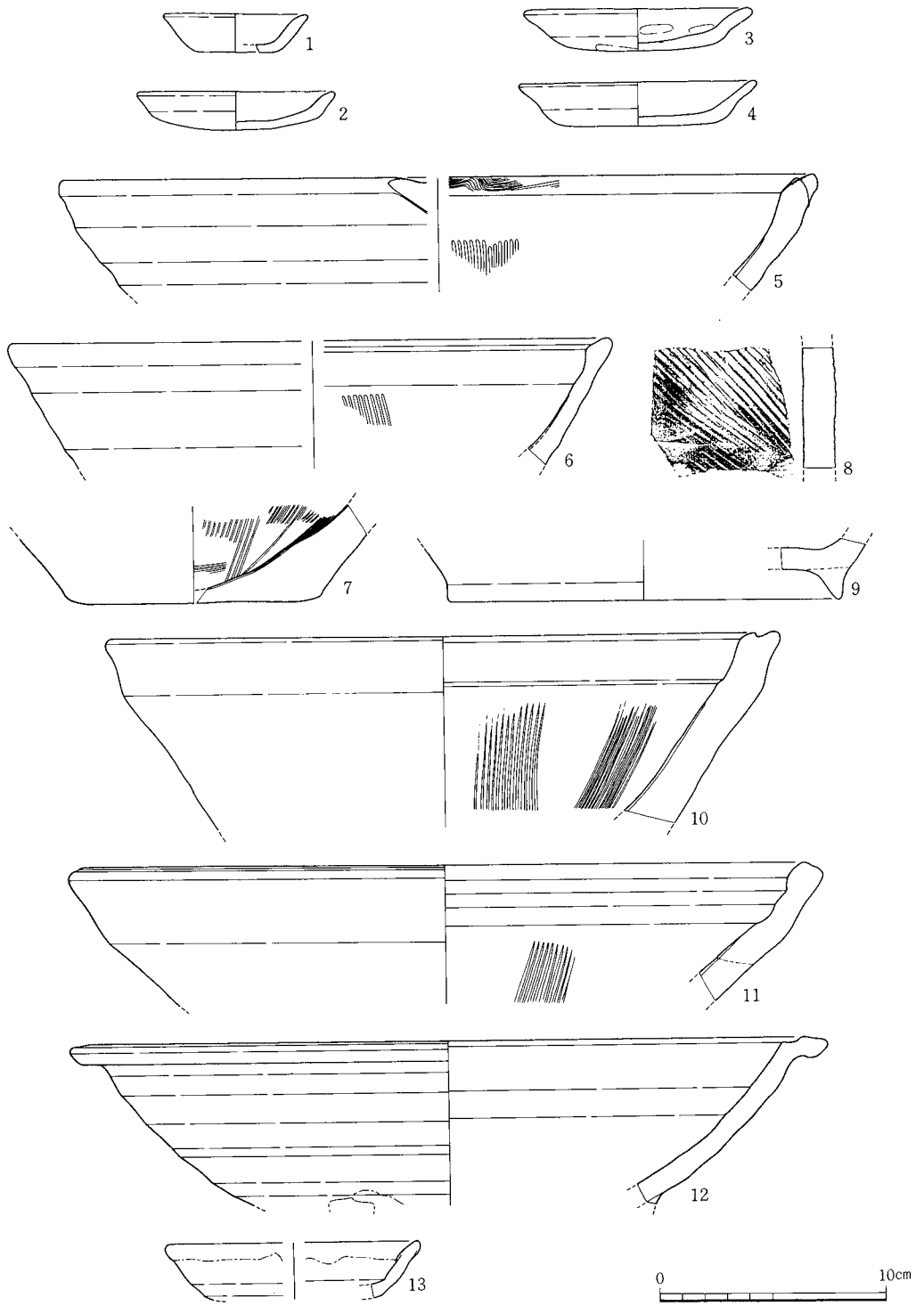
第107図　第２次調査井戸出土土器実測図６（第42・45・46号井戸）（Ｓ＝1／3）



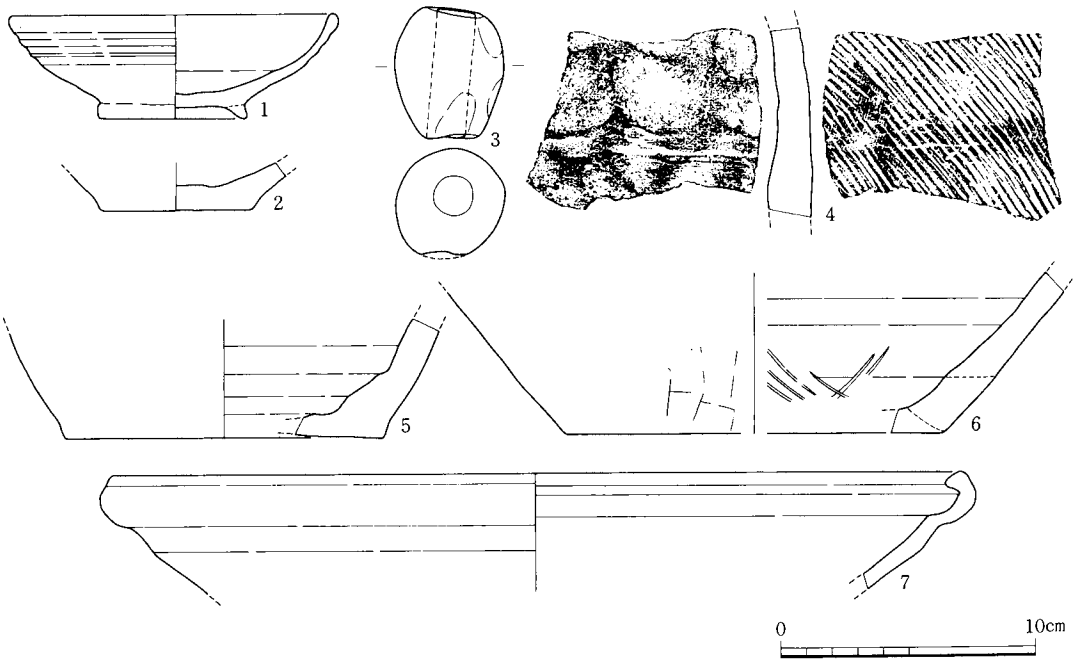
第108図　第２次調査井戸出土土器実測図７（第47・48号井戸）（Ｓ＝1／3）



第109図　第２次調査井戸出土土器実測図８（第49・50・51号井戸）（Ｓ＝1／3）



第110図　第２次調査井戸出土土器実測図９（第52号井戸）（Ｓ＝1／3）



第111図　第２次調査井戸出土土器実測図10（第54号井戸）（Ｓ＝1／3）

第110図は第52号井戸の出土品である。１～４は土師質土器で、胎土が橙色・淡黄色・灰白の３タイプの製品である。５～７は珠洲焼擂鉢で、Ⅴ期の製品である。８は珠洲焼甕、９は加賀焼擂鉢、10・11は越前焼擂鉢で、11のおろし目は幅３㎝で12条、11は幅2.8㎝で11条である。12は瀬戸灰釉盤で、口径31.6㎝を測る。13は瀬戸灰釉皿で、口径11㎝の製品である。これらの遺物群の下限は、15世紀中頃とみられる。

第111図は第54号井戸の出土品である。１の土師器椀は口径12.7㎝、器高4.1㎝を測る。２は土師器皿、３は土錘で75.7ｇを計る。４は珠洲焼甕、５は珠洲焼壺である。６は加賀焼擂鉢である。６は土師器の鍋で、口径34.6㎝を測る。

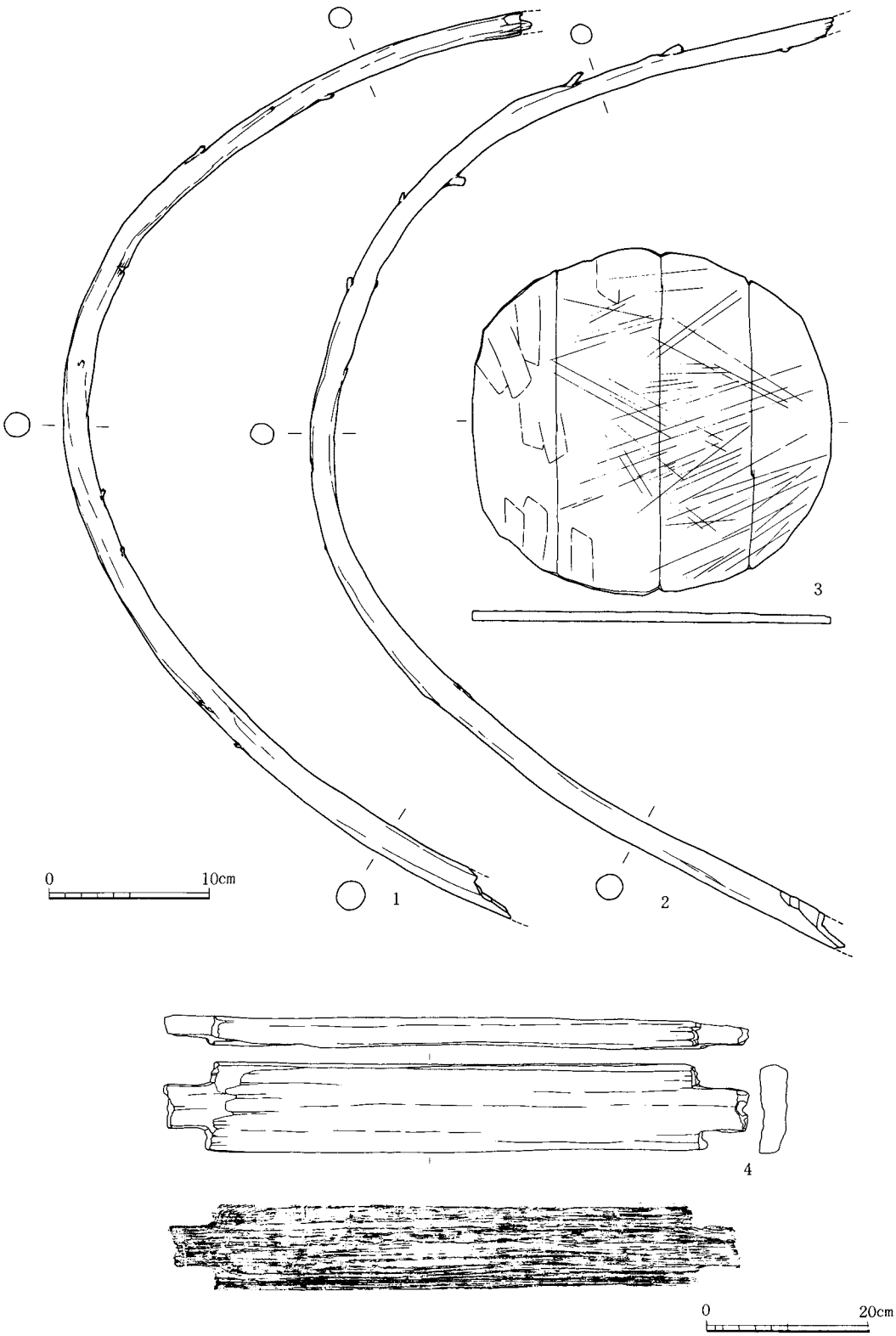
第112図は井戸出土の木製品である。調査した井戸の覆土は、滞水状況がみられたが、木製品の出土は少ない。これは井戸の廃棄等のおりに、木製品の混入が少なかったと理解している。

１・２は第40号井戸出土の木枠である。１は長さ85㎝、径1.8㎝で、２は長さ94㎝、径1.9㎝を測る。２点とも杉の枝材とみられ、葉の端部が残され整形は粗い。この木製品はタモ等木枠とみられることから、反りを矯正して図化したが、出土時（第86図参照）は楕円形態に曲げられ、両端は重ねられていた。出土状況を重視するならば、カンジキの木枠とみられる。

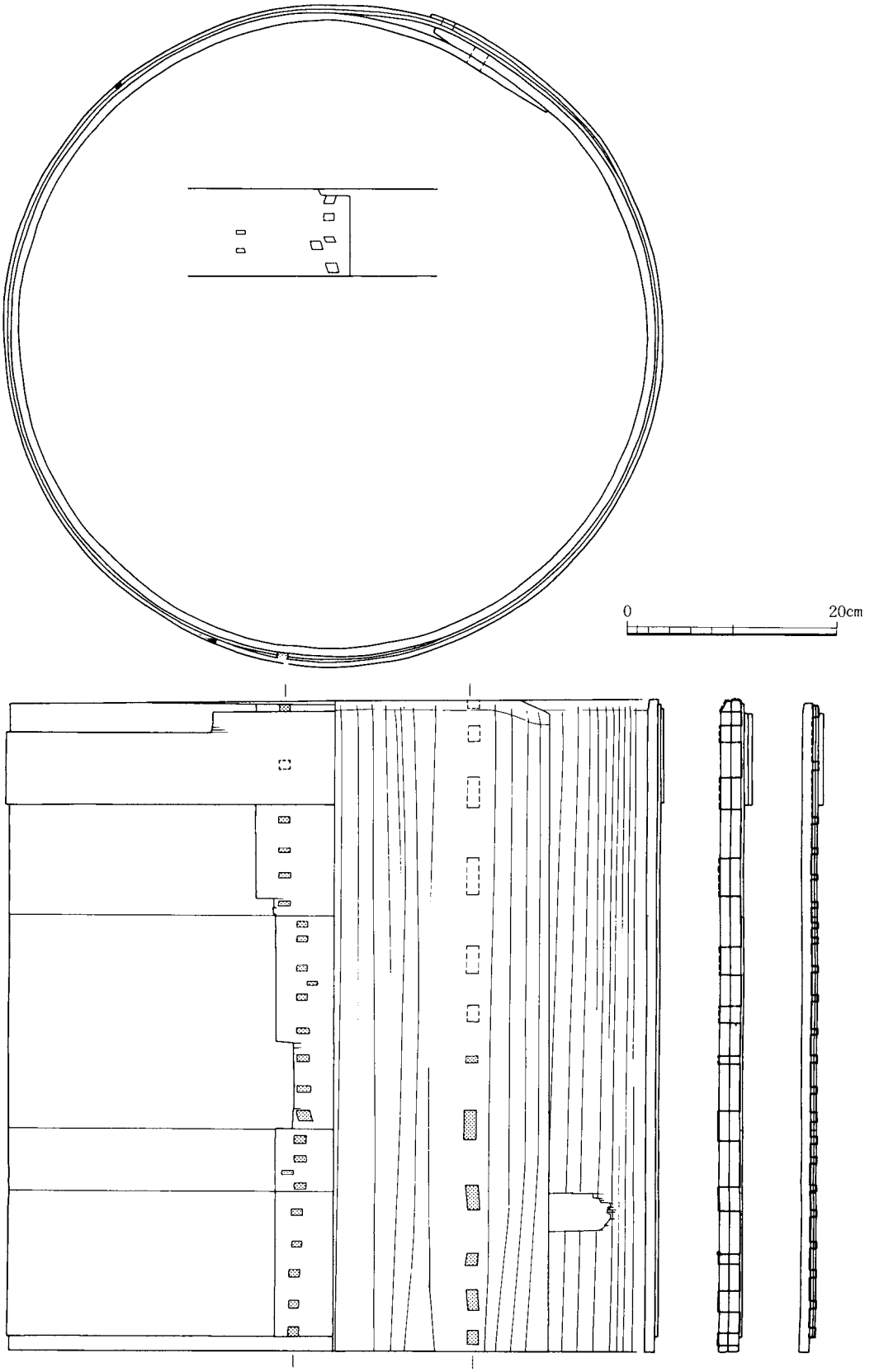
３は第24号井戸出土で、曲物の底板とみられる。径21.8㎝を測り、両面に刃痕がみられる。

４は第33号井戸出土の井戸枠である。

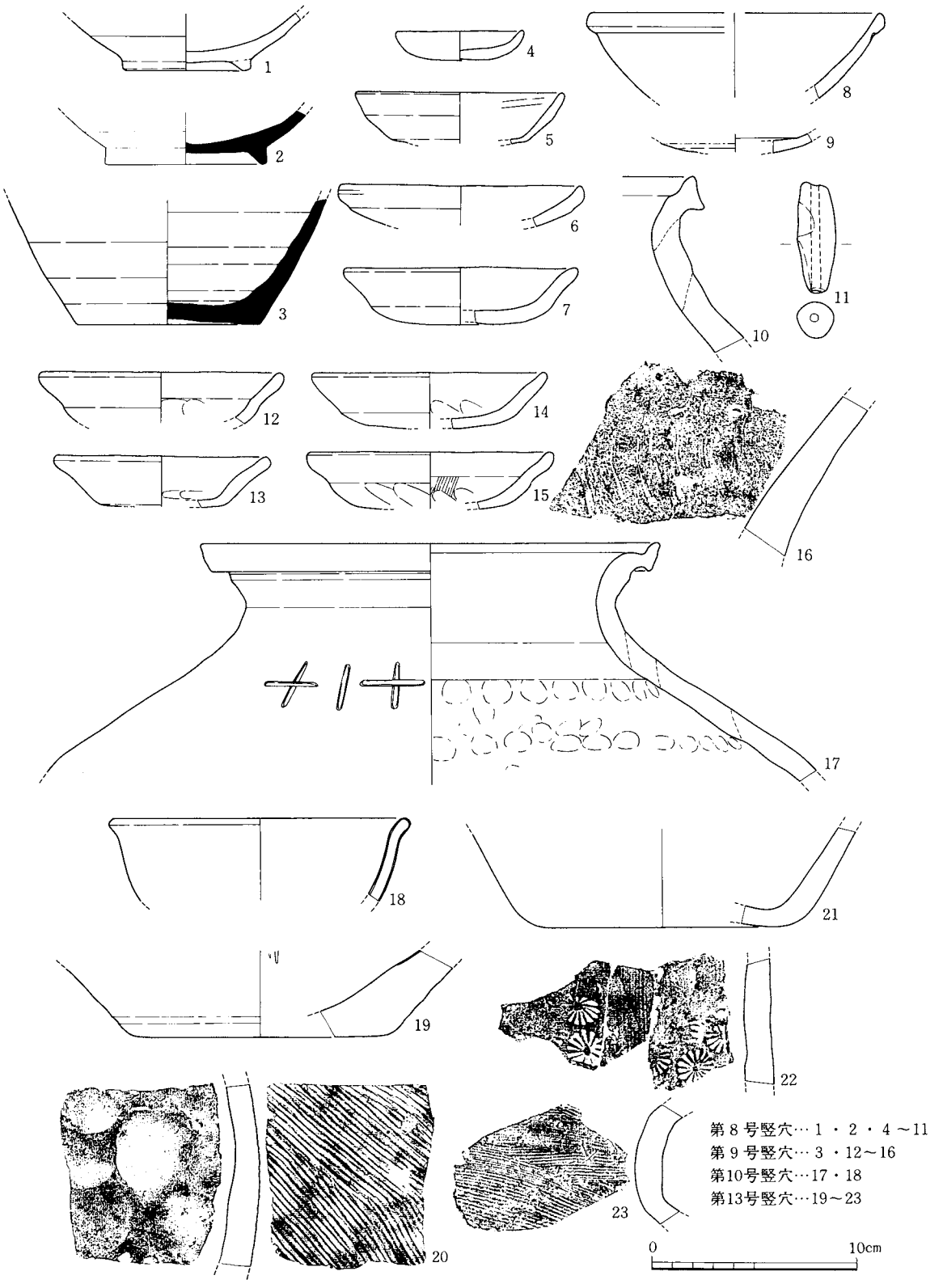
第113図の曲物は、第31号井戸のまなことして使用された大型品である。長径64㎝、短径62.5㎝、深さ63㎝を測る。タガは上一段で、底板の釘結合痕はみられない。第１次調査の第５号井戸の井戸側とほぼ同一規格の製品で、井戸側専用として製作された曲物製品であるとみられる。



第112図　第２次調査井戸出土木器実測図１（Ｓ＝1／4、1／3）



第113図　第２次調査井戸出土木器実測図２（Ｓ＝1／6）

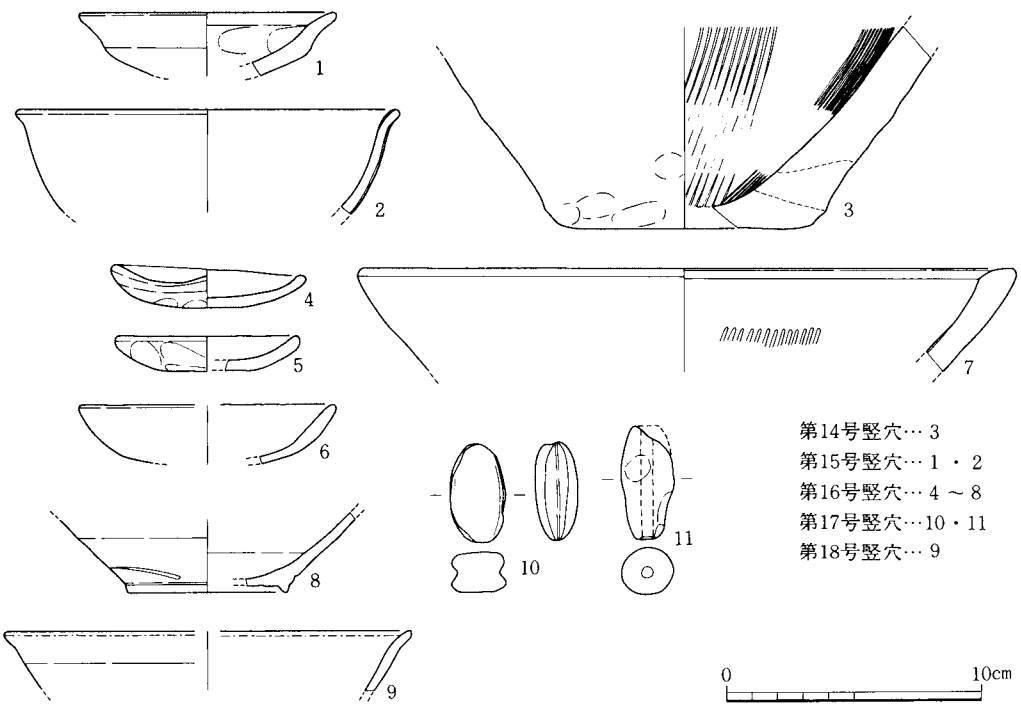


第114図　第２次調査竪穴出土土器実測図１（第８～10・13号竪穴）

3　竪穴出土遺物（第114図　図版－63）

第114図の１・２・４～11は、第８号竪穴の出土品である。１は土師器椀、２は須恵器椀である。４～７は土師質土器皿で、６の胎土は灰白色を呈し、それ以外は淡黄色の製品である。８は白磁碗（Ⅳ類）で、９は白磁皿（Ⅴ類）である。10は加賀焼甕で、11は重量が13.６ｇを計る土錘である。３・12～16は、第９号竪穴の出土品である。３は須恵器瓶類、12～15は土師質土器の皿である。口径は10～12㎝を測り、14以外は橙色タイプの製品である。16は加賀焼の甕である。14世紀初頭とみられる。17・18は第10号竪穴の出土品で、17の越前焼の壺は、肩部に「＋｜＋」の窯印が入る。18は青磁の無文椀で、15世紀前半の製品である。19～23は、第13号竪穴の出土品である。19は珠洲焼擂鉢、20は珠洲焼甕である。21は加賀焼の鉢で、内面に降灰釉が付着する。また22は加賀焼の甕で、菊花の押印が入り、胎土からも湯上ユノカミダニ窯の製品とみられる。23は陶器質の甕の頸部で、内面ヨコハケ、外面ヨコナデの調整痕を残している。今後の検討を要するが、加賀焼成立期の製品群に包括される可能性が高いとみられる。

第115図の１・２は、第15号竪穴の出土品である。１は土師質土器の皿で、２は青磁の無文椀である。15世紀前半の製品とみられる。３は第14号竪穴の出土の越前焼擂鉢である。４～８は第16号竪穴の出土品で、４～６は土師質土器の小皿で、胎土が灰白色を呈する製品である。７は珠洲焼の擂鉢で、８は山茶椀とみられる。９は第18号竪穴の口禿の白磁椀である。10・11は第17号竪穴の土錘で、重量は13.６ｇと約13ｇを計る。



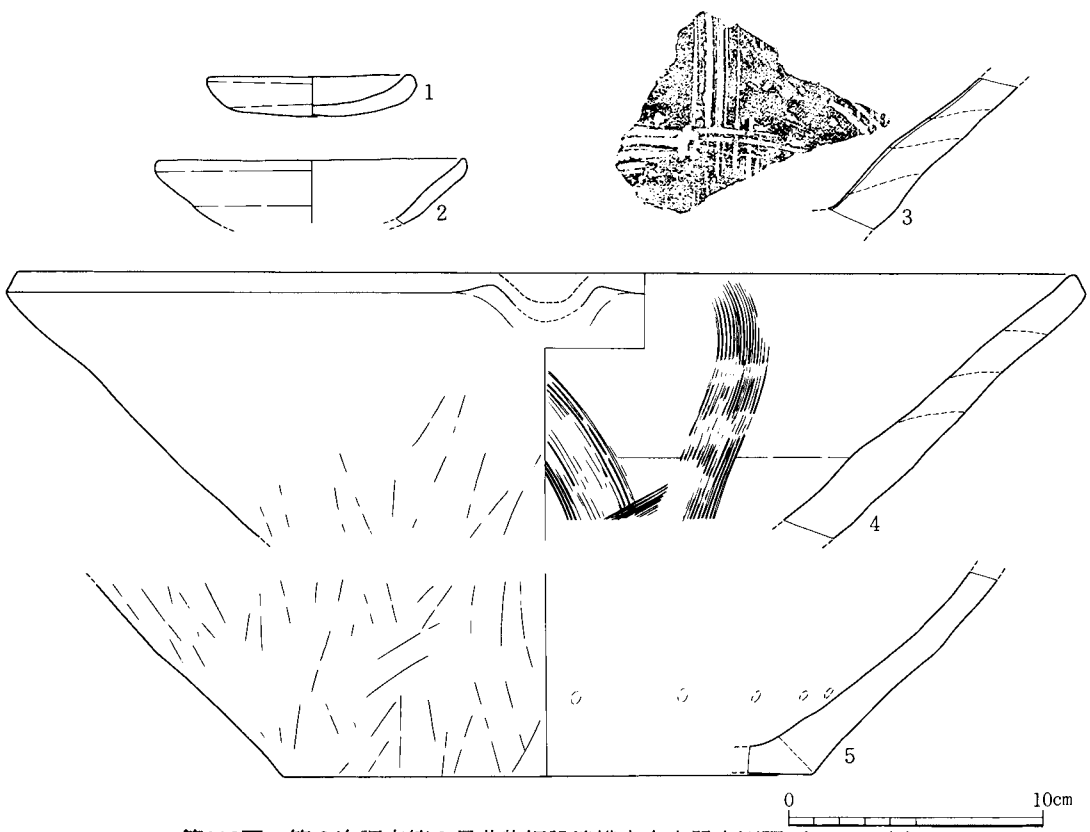
第115図　第２次調査竪穴出土土器実測２（第14～16・17・18号竪穴）（Ｓ＝1／3）

4　曲物埋設遺構出土遺物（第116図　図版－65）

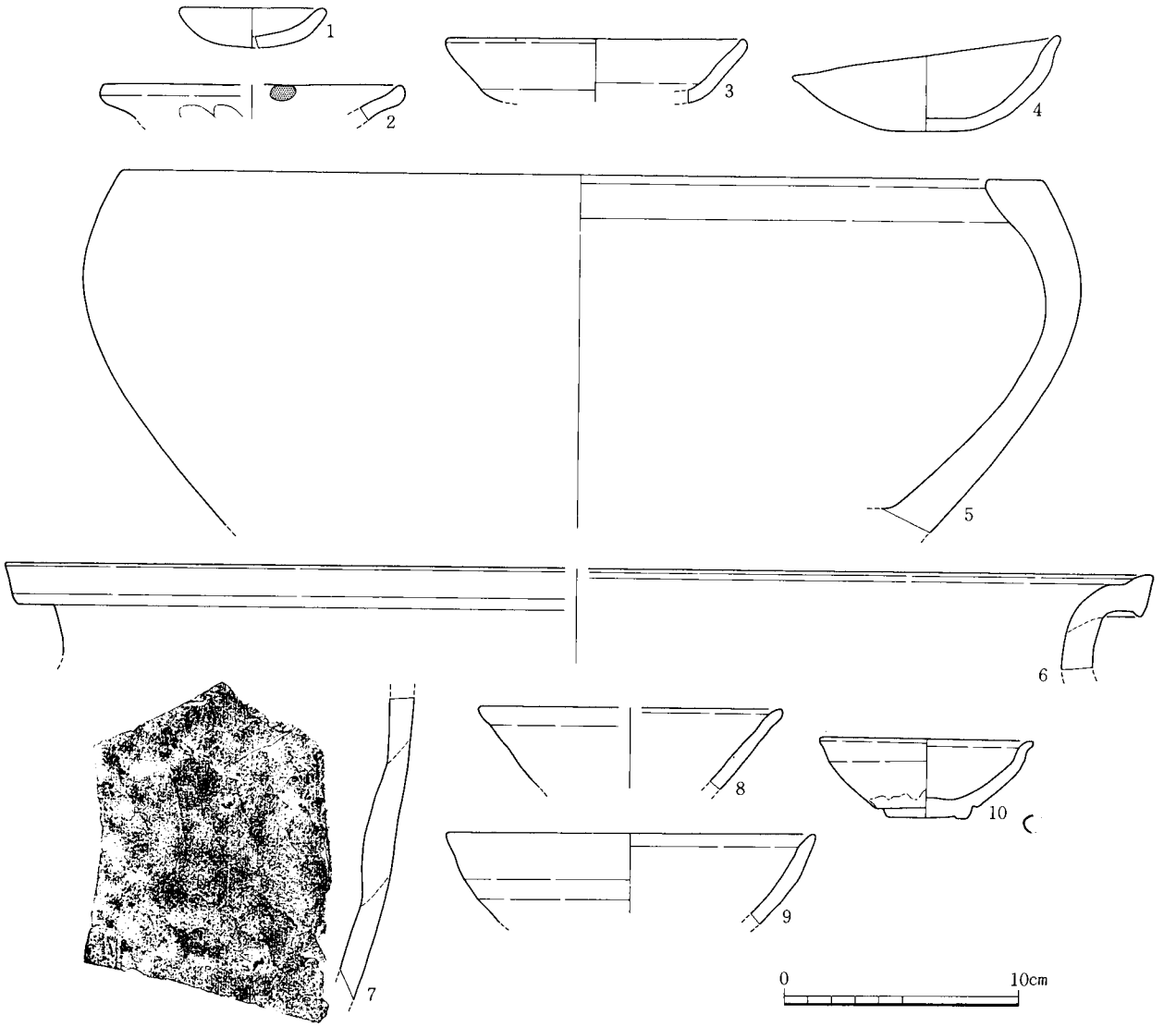
第116図は第２号曲物埋設遺構からの出土品である。１・２の土師質土器は、淡黄色の製品で、１は口径7.9cm、器高1.7cmを測る。３は加賀焼の擂鉢で、黄橙色を呈し、おろし目は幅2.7cmで７条を数える。４の加賀焼の擂鉢は、口径42cmを測り、外面下半のケズリは粗くて、おろし目は幅2.8cmに16条と多い。湯上ユノカミダニ窯群の胎土に近い製品である。５は加賀焼の甕で、胎土は褐色を呈する。

5　第28号土坑出土遺物（第117図）

第117図は当初井戸跡とした大型土坑からの出土品である。１～４は土師質土器で、１は口径5.9cm、器高1.7cmの小皿である。２・３は最下層の出土品で、３は灰白色を呈し口径12.6cmを測る。４は椀型を呈した淡黄色の製品で、埋立土の９層からの出土で、口径11.5cmを測る。５は土坑下層の11層から出土した瓦質土器の火鉢で、色調は暗灰色を呈する。口径39.2cm、深さ14.2cmを測り、通例、外面にみられる押印文様は無く、在地製品の可能性が高い。６は埋立土から出土した越前焼の甕である。７は加賀焼の甕で、胎土は灰色を呈する。湯上ユノカミダニ窯群に近い製品である。８は瀬戸の灰釉製品である。平椀の可能性が高い。９・10は一石呪符が出土した11・12層間の礫層からの出土品である。９は瀬戸の灰釉平椀で、口径15.8cmを測る。10は瀬戸の天目茶椀で、口径8.9cm、器高3.4cmの小型品である。15世紀前半を下限とする遺物である。



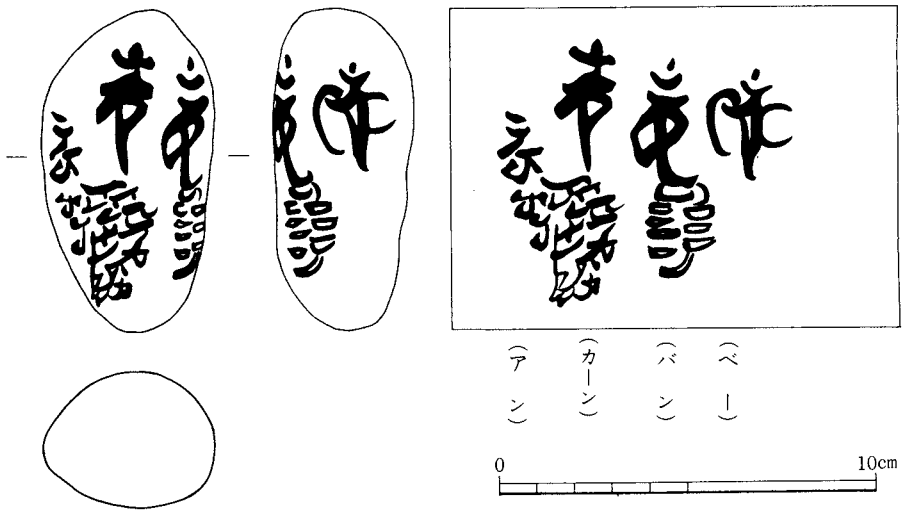
第116図　第２次調査第２号曲物埋設遺構出土土器実測図（S＝1／3）



第117図　第２次発掘調査第28号土坑出土土器実測図（Ｓ＝1／3）

第118図は、本土坑下層の礫層中（第97図参照）から出土した一石呪符である。この一石呪符は、安山岩質の自然礫に梵字と九字印を墨書したもので、形状は、長さ8.5cm、横幅4.5cmを測り、重量は149ｇを計る。梵字と九字印の配置は、礫の頂部近くにカーン（不動明王）を大きく書き、左下にアン（胎蔵界大日如来）、右下にバン（金剛界大日如来）とベー（毘沙門天）を連ね、下半部に二組の九字印を墨書している。出土層位と共伴遺物から、本遺構の埋立時に投入された埋納物と考えられる。時期は15世紀前半と推定される。

一石呪符の類例としては、富山県魚津市の早月上野遺跡の方形土坑から「カーン・マーン（不動明王）急々如律令」と墨書されたものが出土している。



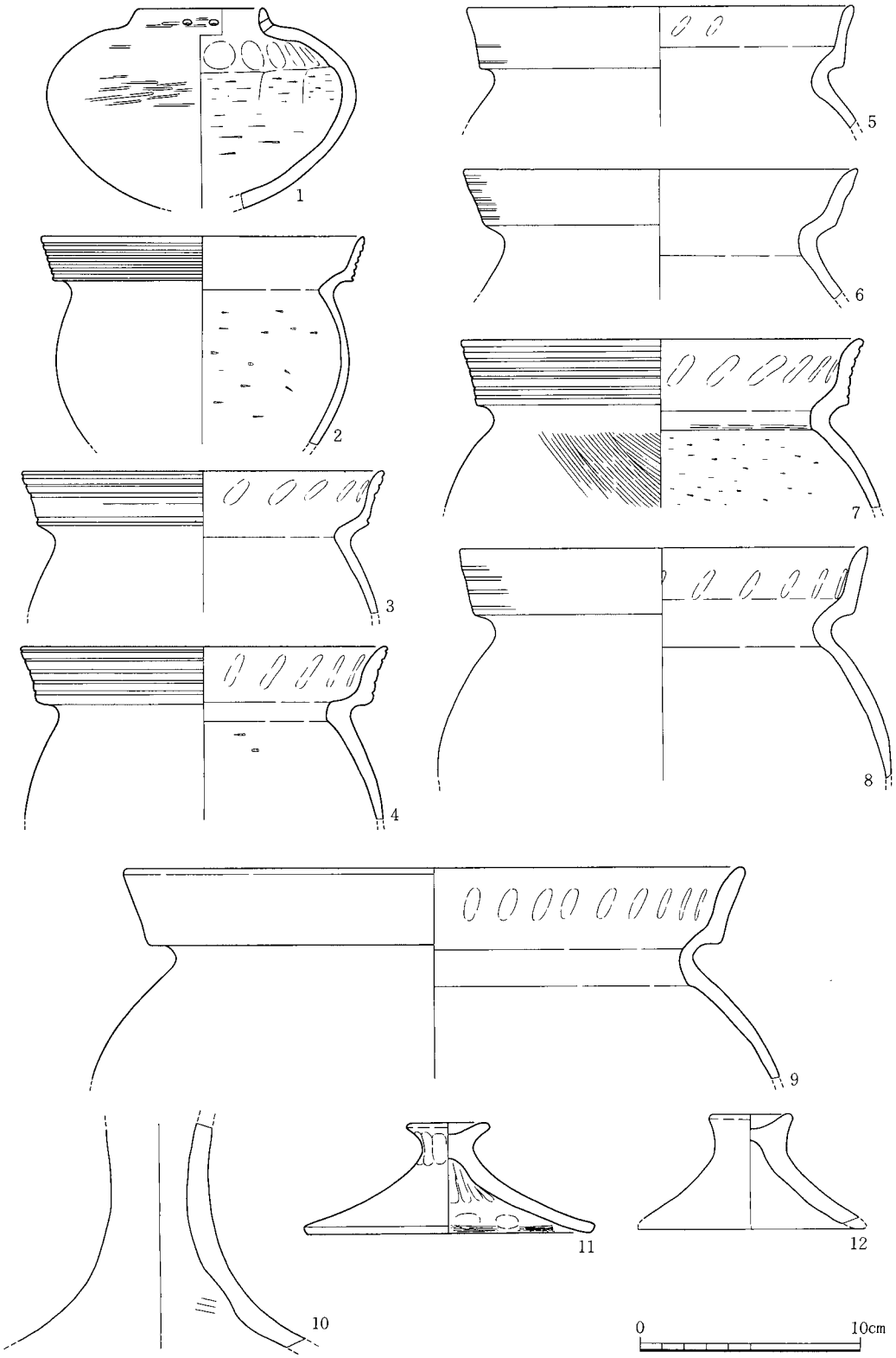
第118図　第２次調査第28号土坑出土一石呪符実測図（Ｓ＝1／2）

6　小規模遺構出土遺物（第119～121図　図版－64）

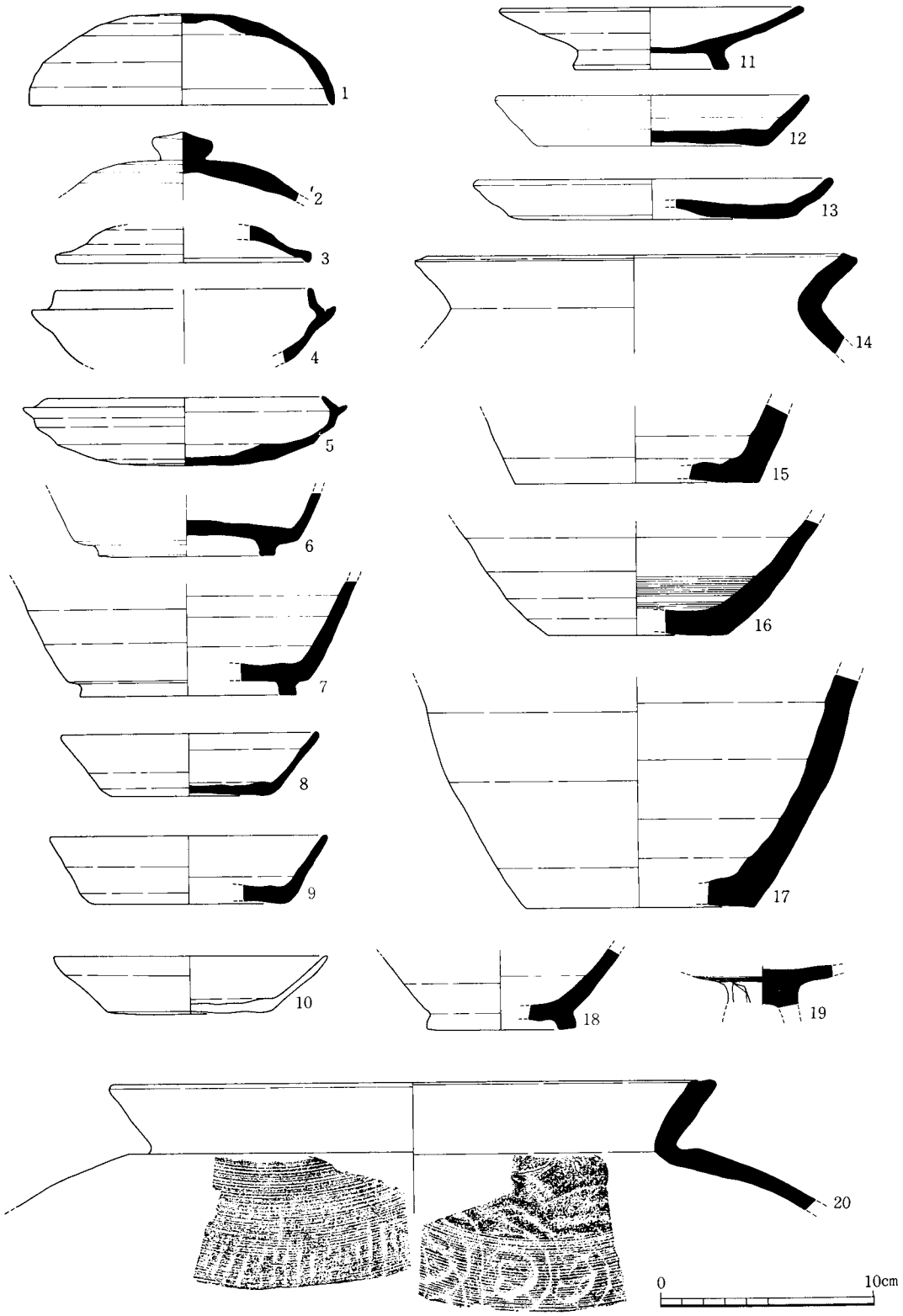
第119～121図は、土坑やピットなどの小規模な遺構から出土した遺物である。第119図は第22・23号とその周辺のピットから出土した弥生時代後期の土器群である。１の無頸壺は口径5.8㎝、胴部径14.2㎝を測り、口縁近くに内径0.4㎝の小孔が対に開けられている。２～９の甕は口径14.7㎝から28.2㎝を測る。胎土は微細な砂粒を多く含み浅黄橙色を呈する。10は高杯の脚部、11・12は蓋である。胎土の質感と色調は甕と同一である。

第120図は調査区北側の農道部分と第２残丘で出土した須恵器製品である。１は第２残丘出土の杯蓋で、５の杯身と同一地点から出土したことから共伴する可能性が高い。２・３は農道部分出土の杯蓋である。６・７は有高台杯で、胎土は灰白色を呈する。８・９は無高台杯で、胎土は戸津古窯産の特徴を示す。10は土師器質の有高台杯である。器面の様子から二次加熱による変質では無く、生焼けの須恵器とみられる。11は有高台皿で、灰白色を呈する。12・13は盤である。12の外底に墨書の痕跡がみられる。11～13も戸津古窯産とみらる。14は壺の口縁部、15～18は瓶類や壺類の底部である。形状から提瓶・短頸壺・長頸壺などが考えられる。19は高杯の底部である。20の壺は口径28.6㎝を測る。

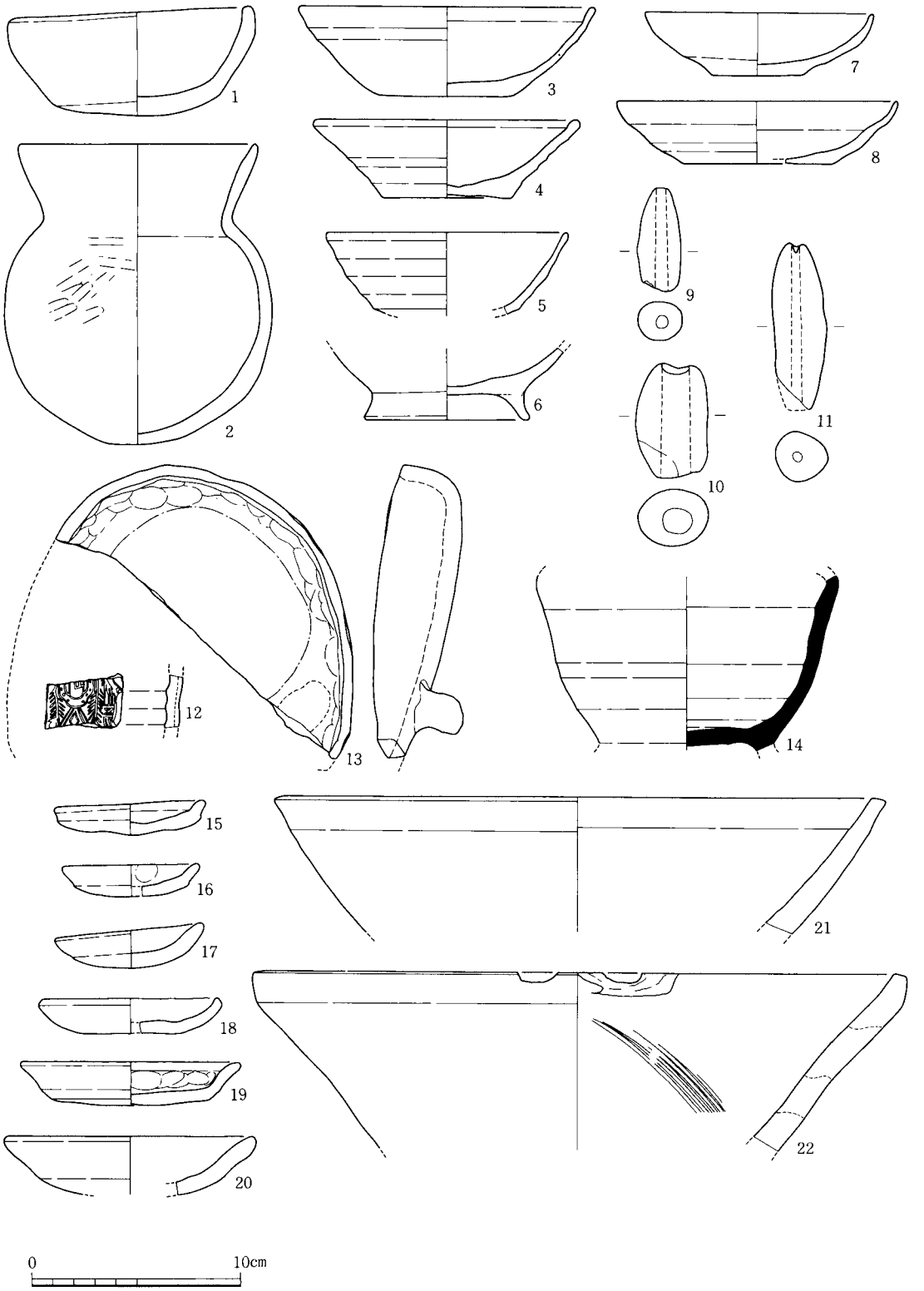
第121図は主に掘立柱建物や土坑からの出土品である。１・２は第２残丘出土の土師器で、椀と赤彩された小型壺である。３・４は第24溝近くのピットから出土した土師器の椀で、10世紀後半と推定される。近接する第９号掘立柱建物の年代資料の参考である。５～８は第３残丘の第１号竪穴住居横から第８号掘立柱建物の柱穴出土の土師器である。５・６は土師器の有高台椀である。胎土は砂粒が少なく浅黄橙色を呈する。７・８は第11号掘立柱建物の柱穴出土の土師器皿である。５～８は11世紀中頃の製品とみられる。９～11の土錘は、現況の重量が14ｇ・40ｇ・44ｇを計る。12は第８号掘立柱建物内のピットから出土した長沙窯製品である。水注の胴部に貼付けされた葡萄文様の上部片で、暗赤褐色の釉が掛けられている。13は第３残丘の南部のピットから出土（図版－56参照）した須恵器の風字硯である。陸の面は使用により平滑となりやや窪む。14



第119図　第２次調査小規模遺構出土遺物１（Ｓ＝1／3）



第120図　第２次調査小規模遺構出土遺物２（Ｓ＝1／3）



第121図　第２次調査小規模遺構出土遺物３（Ｓ＝1／3）

は第18号土坑出土の須恵器瓶類である。

第121図15～20は主に第３残丘のピットから出土した土師質土器である。胎土は灰白色から黄橙色と違う製品である。21は第22号土坑出土の珠洲焼の擂鉢で、口径27.7㎝を測る。22は第18号竪穴近から出土した加賀焼の擂鉢で、口縁に打撃痕がみられる。胎土は砂粒が目立ち、橙色を呈して、おろし目は幅1.5㎝の６条である。

7　溝出土遺物（第122～132図　図版－65～68）

第122図から第130図までは、第２次調査区の中央部を南北に走る第17号溝からの出土遺物である。溝は鎌倉時代末頃から室町時代にかけて、堀として機能した遺構と考えられるが、覆土上部から室町時代以前の遺物も豊富に出土している。

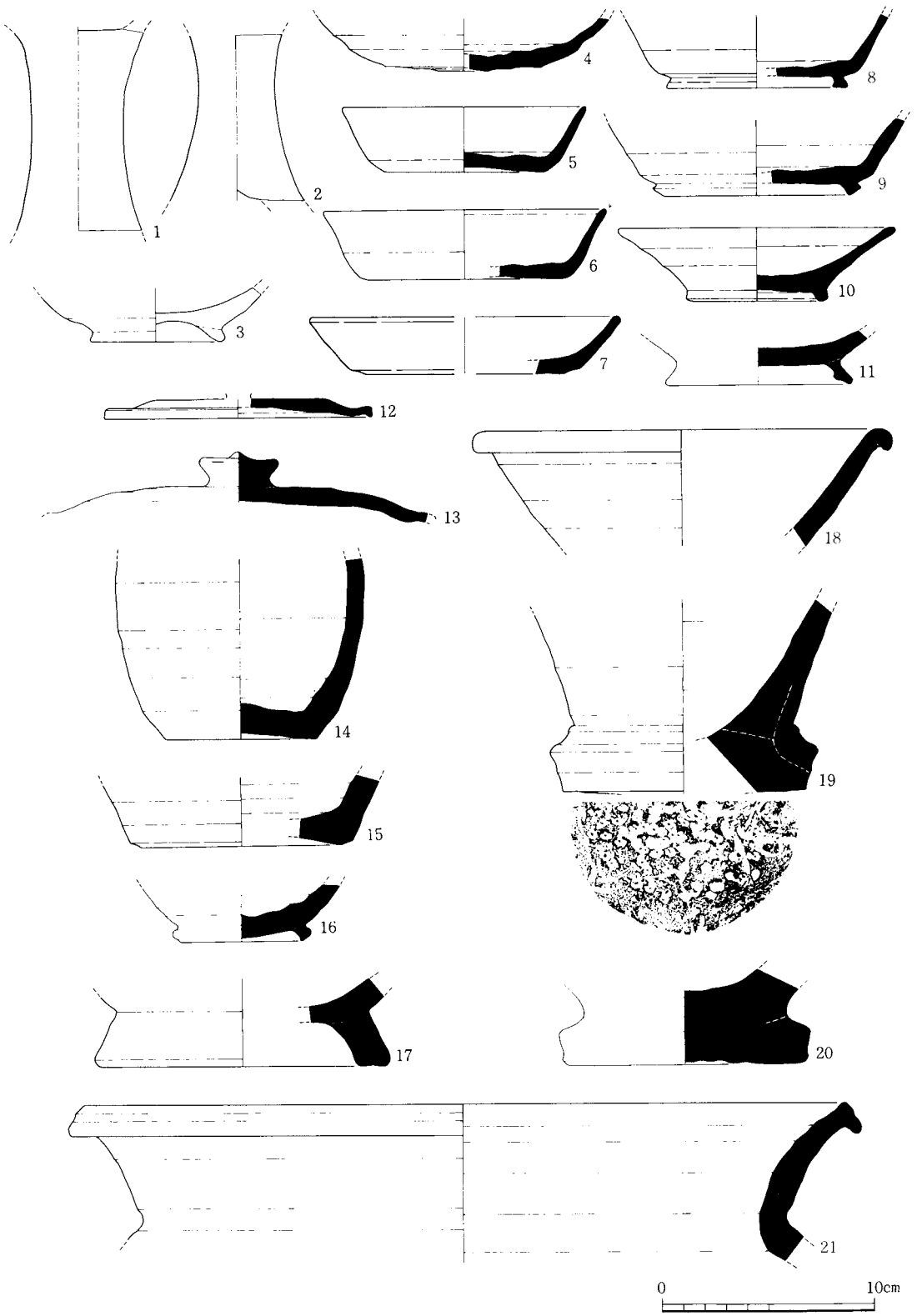
第122図の１・２は土師器の高杯である。３は内面黒色土器の有高台椀である。４～21は須恵器で、戸津古窯産の製品とみられるものが多い。４は杯身、５・６は無高台杯、７は盤、８・９は有高台杯、10・11は有高台皿である。12・13は鈕付の杯蓋である。14～16は小型の瓶や壺の底部である。17は広口壺の底部である。18は口径19㎝の鉢である。19・20は捏鉢で、共に底径11.5㎝を測る。21は口径36㎝の甕である。

第123図・124図は須恵器、灰釉、緑釉、土師質土器、珠洲焼の各製品である。第123図の22・23は須恵器の大甕、24～27は須恵器の甕、先の資料とは時期と調整が異なる。28は珠洲焼の壺である。29は灰釉の皿で、内面に直径８㎝の重ね焼痕が残る。30は緑釉の椀で、胎土は暗灰色を呈し、近江産とみられる。31～42は土師質土器である。31は柱状高台の小椀で、11世紀代の製品とみられる。33～38の小皿は、胎土の色調が浅黄色と灰白色の製品に分かれる。39～42は中皿法量の製品で、小皿と同様に浅黄色と灰白色の製品に分かれる。

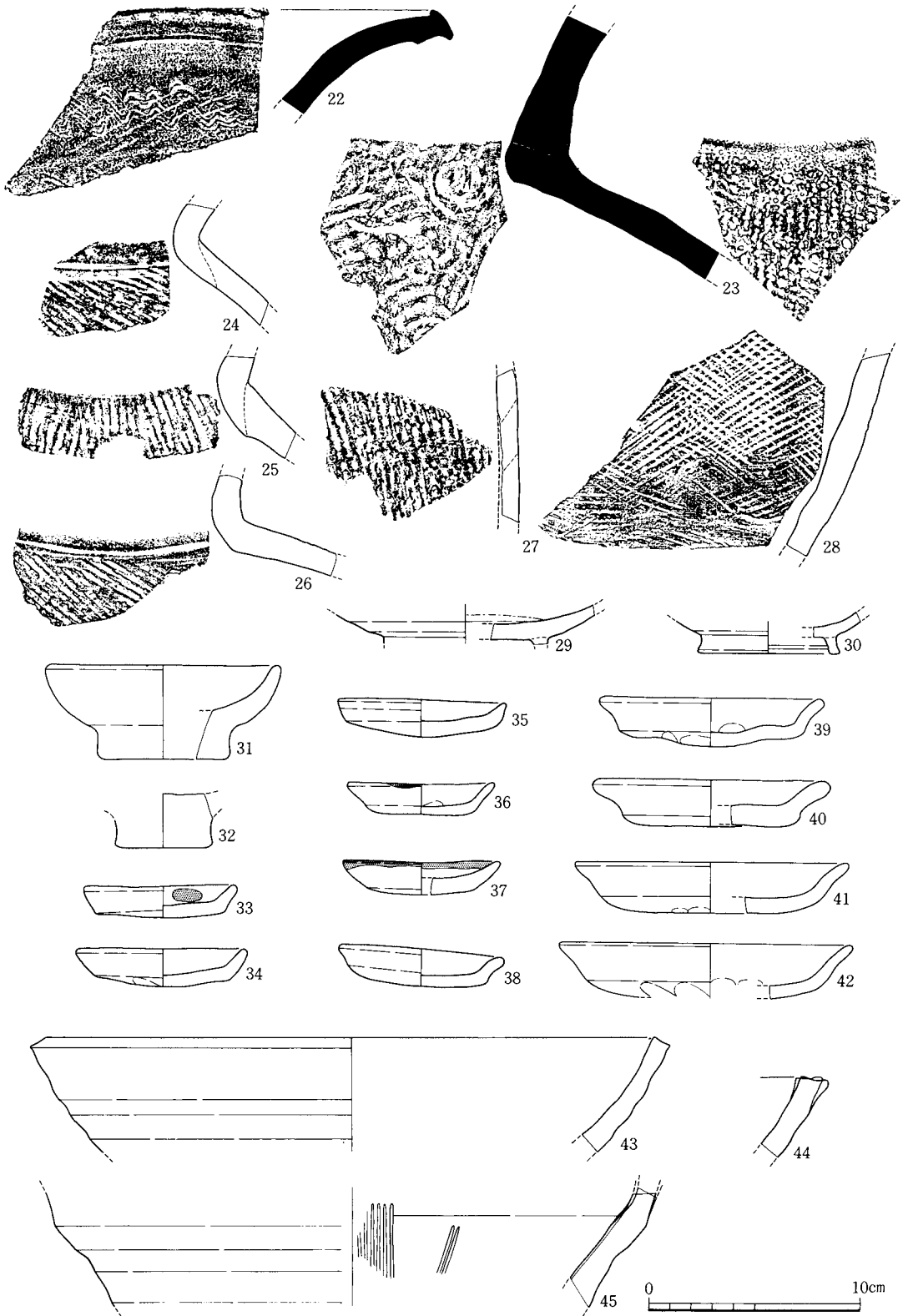
43～49・55は珠洲焼の擂鉢である。43・45は胎土が灰色を呈する。46は口径43.4㎝で、口縁部までも磨耗し、おろし目などは薄れている。47・48は灰色の製品、49は青灰色を呈し内底に打撃痕が認められる。50～53は珠洲焼の甕である。51は外面のタタキが３㎝幅で14本を数える。

第125図は加賀焼の擂鉢と壺である。54～61は加賀焼の擂鉢で、54は口径35㎝を測り、胎土は灰白色を呈する。56は底径14㎝で、おろし目は幅1.8㎝の10条である。59も胎土が灰白色を呈し、おろし目は幅2.3㎝の15条である。59は胎土が灰色を呈し、焼成が良好である。内面のヘラ書きの文字は、「厨」とみられる。62～64は加賀焼の壺である。64は口径９㎝、底径8.8㎝、器高23.8㎝を測る。外面の肩部に沈線と押印が入る。押印は湯上ユノカミダニ窯群のものである。

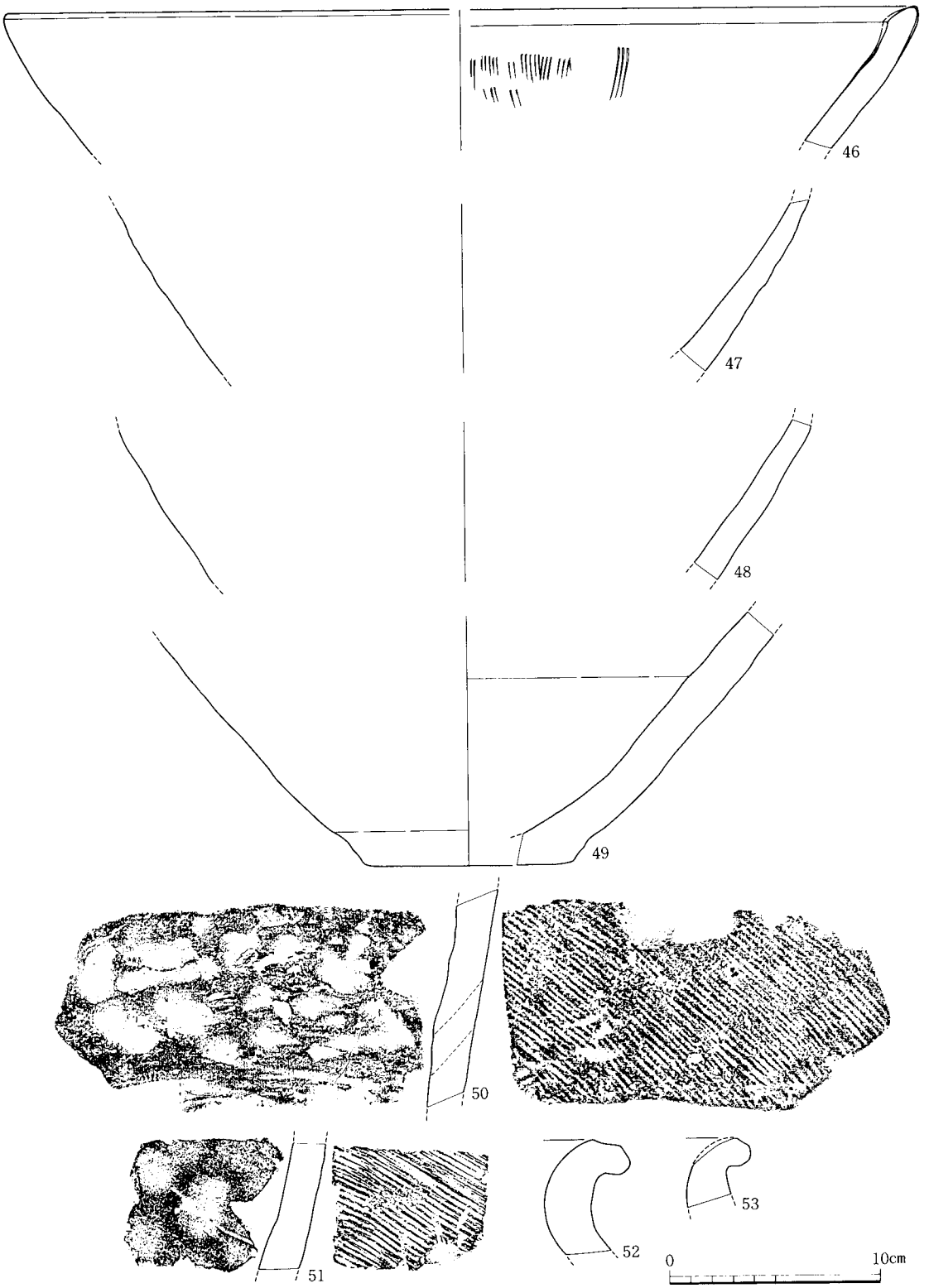
第126図は加賀焼の甕と越前焼の擂鉢である。65は暗赤褐色を呈する小型の甕で、口径26㎝を測る。加賀焼編年のⅡ期の製品とみられる。66・67は胎土が灰白色を呈する。68は小型の甕の体部片で、69の肩部片は褐色を呈し那谷コテンノウダニ窯群の製品とみられる。71は内外面ともハケ調整の陶質の甕である。72～78越前焼の擂鉢である。73は口縁端部に沈線が入り、内面のおろし目は幅3.2㎝の12条である。74は灰色の製品で、おろし目の幅は2.7㎝の13条、75は褐色を呈しておろし目の幅は2.8㎝の11条である。76・77は高台付擂鉢で、器面が赤褐色、胎土が灰色を呈する。なお74～77は加賀焼の可能性を残している。78はおろし目の幅3.6㎝の14条である。



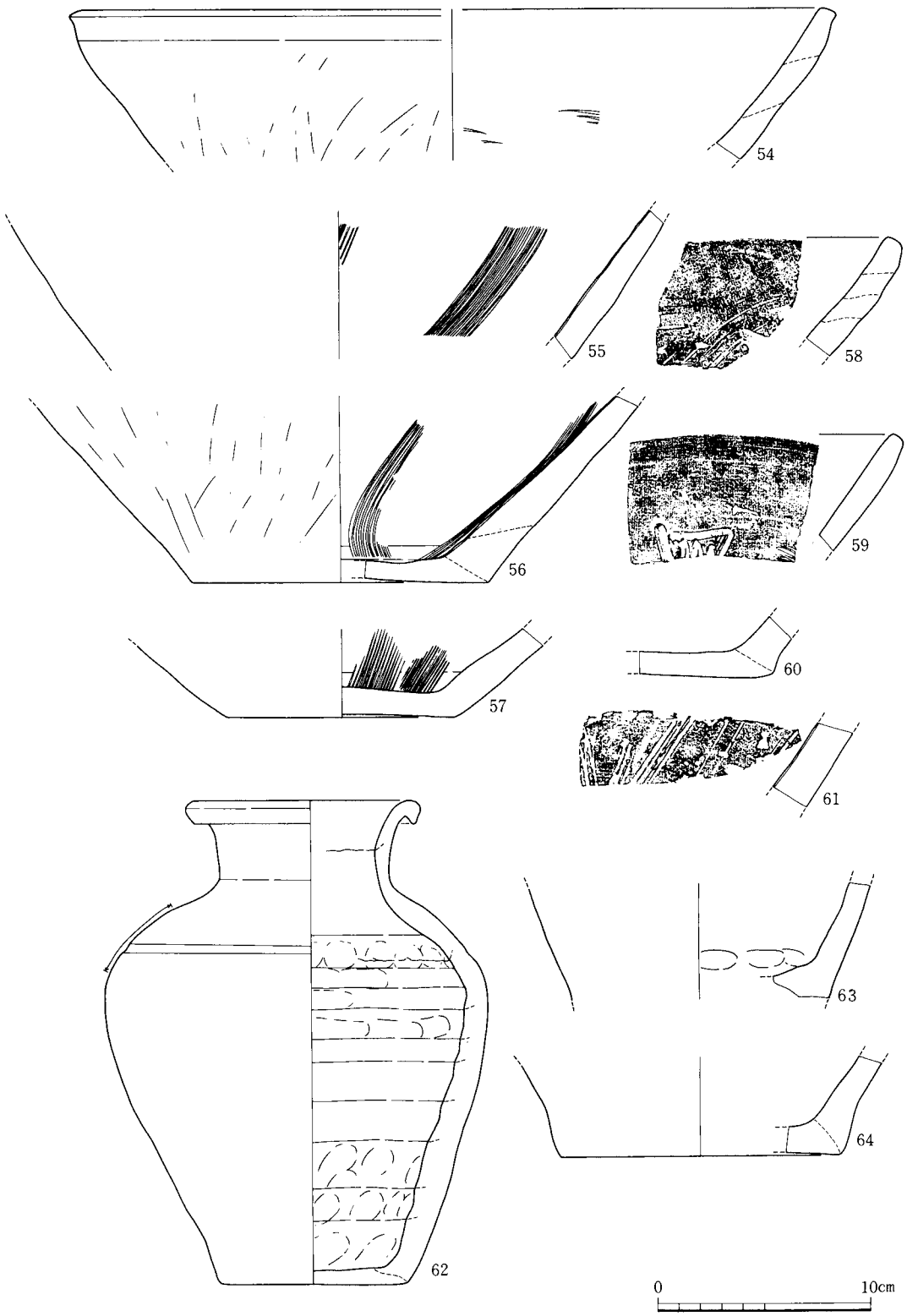
第122図　第２次調査第17号溝出土土器実測図１（Ｓ＝1／3）



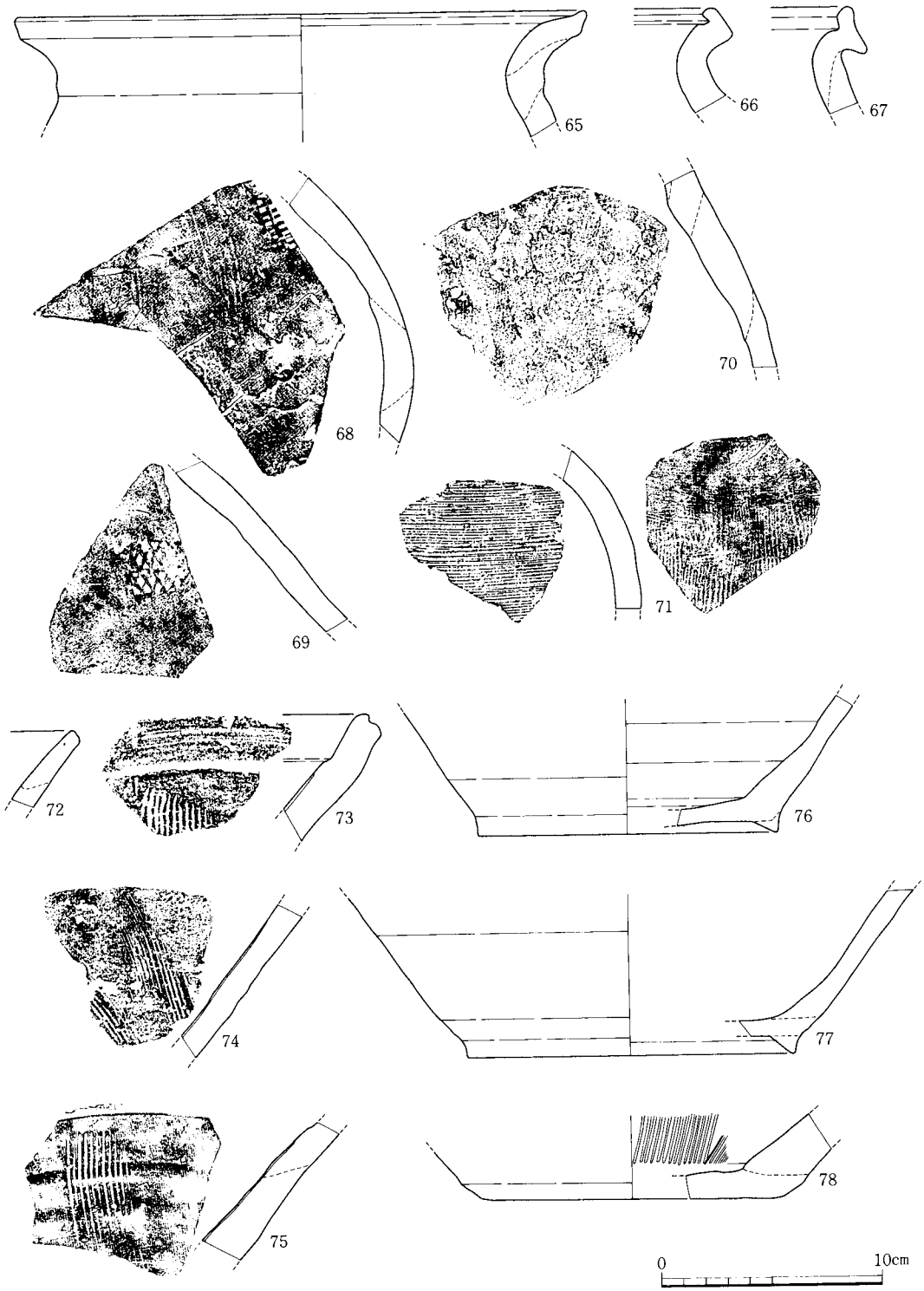
第123図　第２次調査第17号溝出土土器実測図２（Ｓ＝1／3）



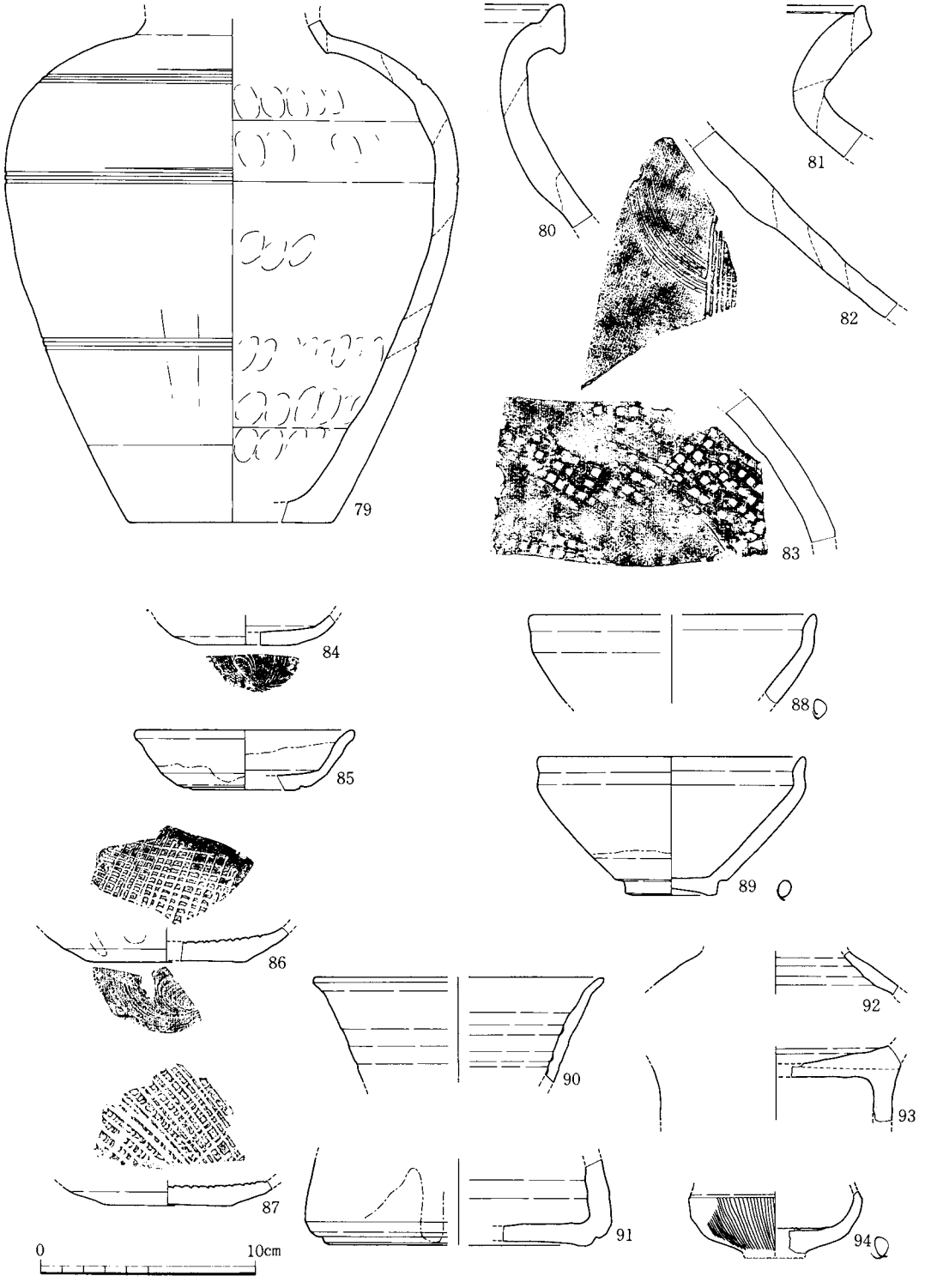
第124図　第２次調査第17号溝出土土器実測図３（Ｓ＝1／3）



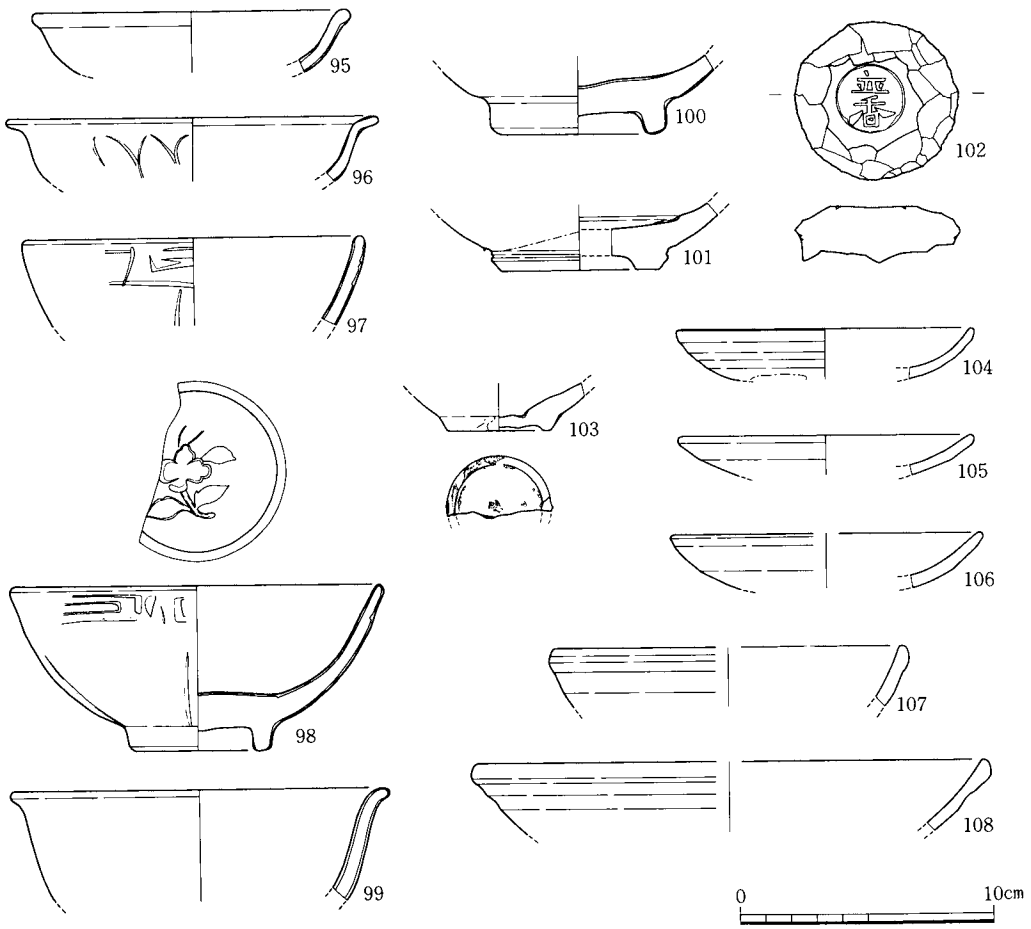
第125図　第２次調査第17号溝出土土器実測図４（Ｓ＝1／3）



第126図　第２次調査第17号溝出土土器実測図５（Ｓ＝1／3）



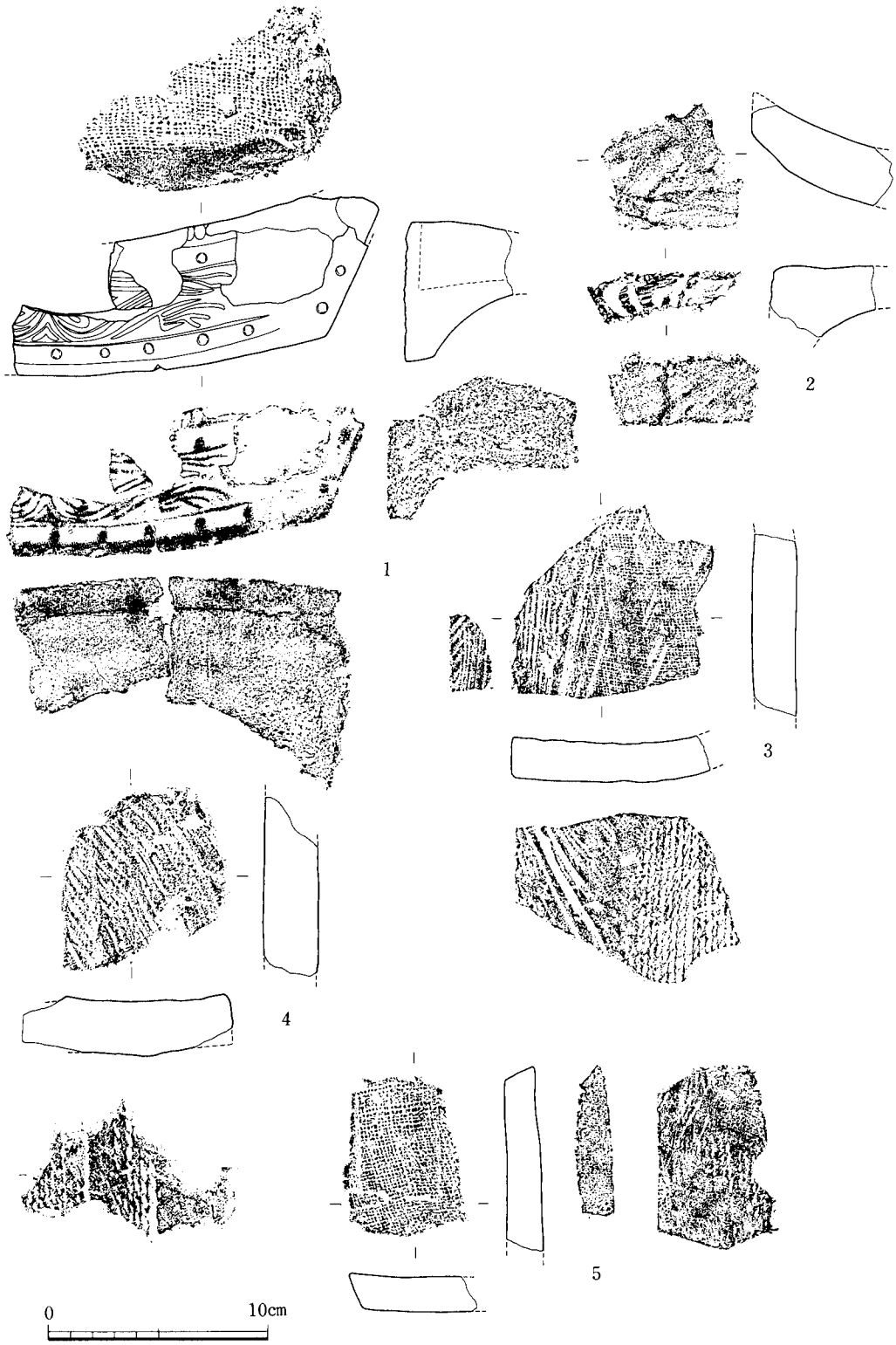
第127図　第２次調査第17号溝出土土器実測図６（Ｓ＝1／3）



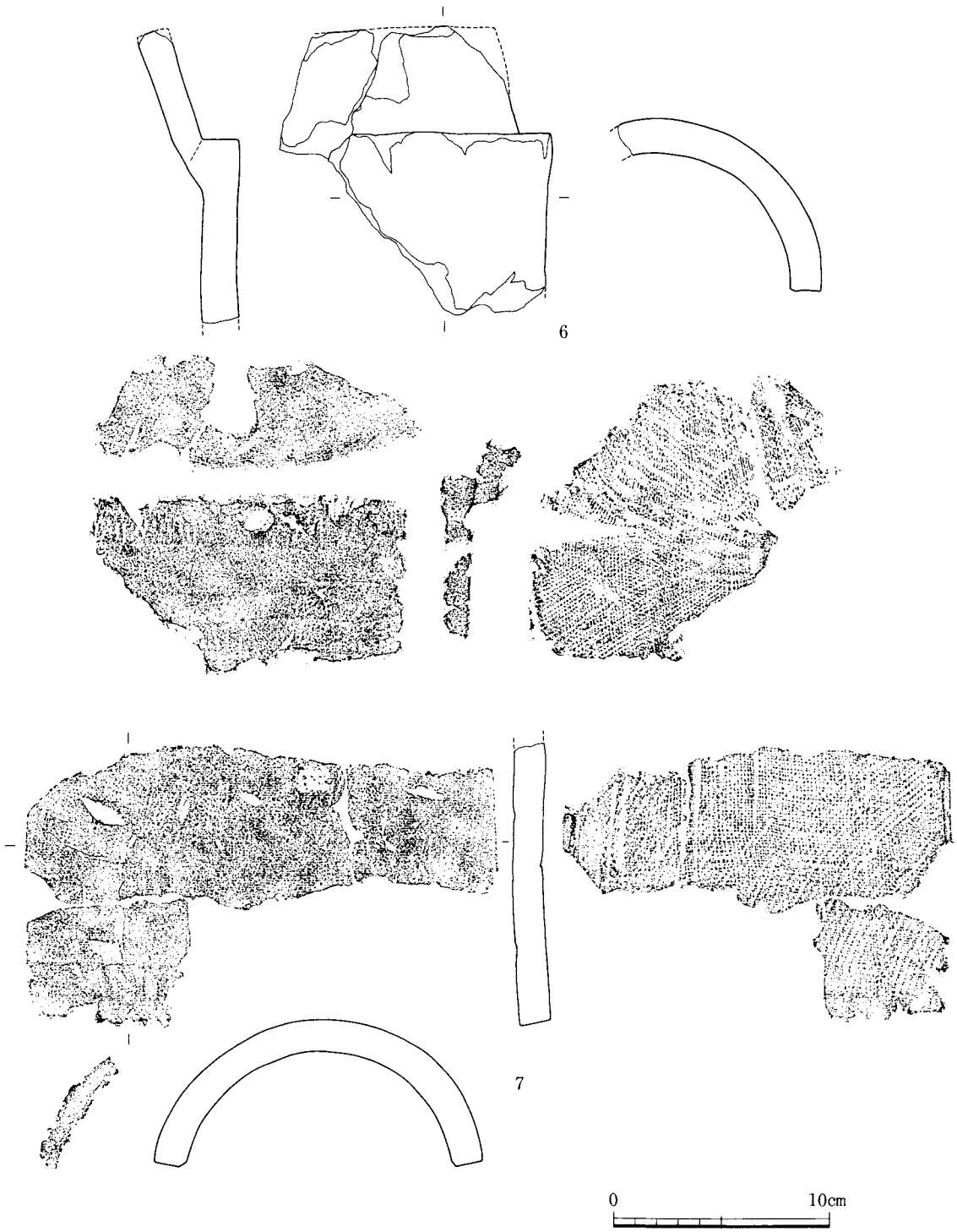
第128図　第２次調査第17号溝出土土器実測図７（Ｓ＝1／3）

第127図は越前焼の壺・甕と瀬戸製品である。79の壺は、体部の三ヶ所に２条の沈線帯を巡らした越前焼の小壺で、底径9.2㎝を測る。形態からしても瀬戸の瓶子写しと考えられる。80～83は越前焼の甕である。また80～82は器面が赤褐色、胎土が暗灰色を呈する。82のクシ書きと83の押印は加賀焼では見られない意匠である。84～94は瀬戸製品である。84は鉄釉、85は灰釉の縁釉小皿である。86・87は灰釉のおろし皿である。88・89は天目茶椀で、89は半折したものを漆接ぎで補修している。90は灰釉の花瓶、91は灰釉の筒型容器である。92・93は灰釉の瓶子である。94は鉄釉の擂座茶入で、内底に釉が溜まり、底部には補修も認められる。

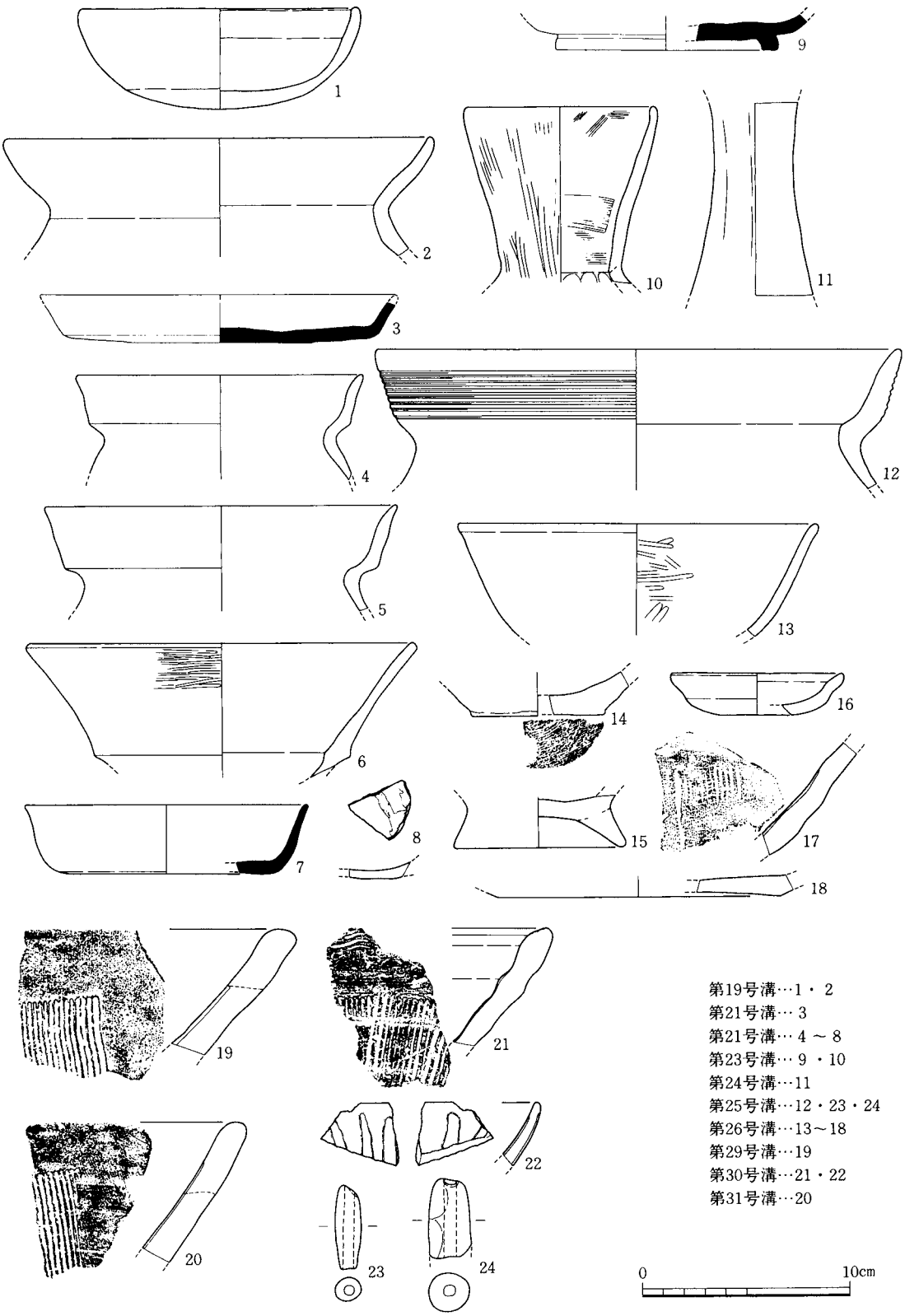
第128図は中国と朝鮮製の磁器製品である。95は青磁皿、96は青磁鉢である。97・98の青磁椀は、雷文帯と線書き連弁文の製品である。99・100の青磁椀は、口縁が外反して体部が無文である。101は古代の越州窯青磁の椀で、底径6.3㎝を測る。102は青磁椀の底部で、「並春」の押印がみられる。103は高麗青磁の椀で、底径4.1㎝を測り、外底に砂が付着する。104～106は高台付きの白磁皿である。107・108は白磁椀Ⅳ類の製品とみられる。



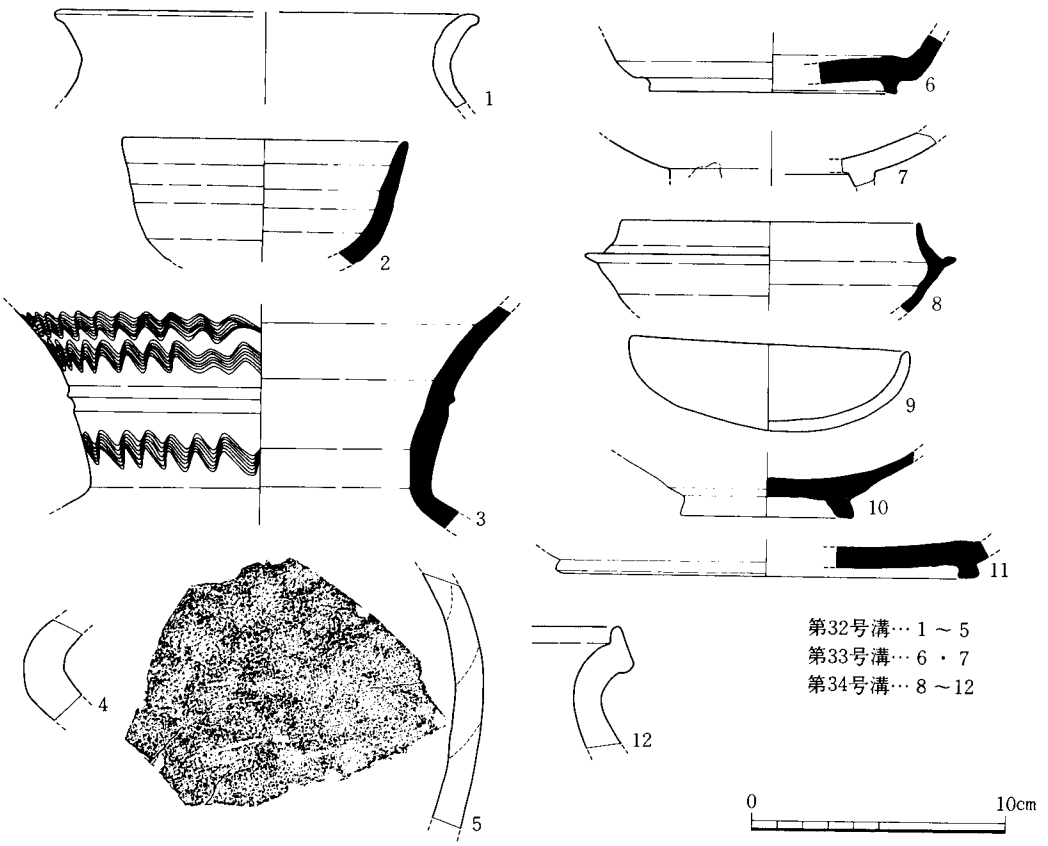
第129図　第２次調査第17号溝出土瓦実測図１（Ｓ＝1／3）



第130図　第２次調査第17号溝出土瓦実測図２（Ｓ＝1／3）



第131図　第２次調査溝出土土器実測図１（第19～31号溝）（S＝1／3）



第132図　第２次調査溝出土土器実測図２（第32～34号溝）

第129・130図は平安時代の瓦である。１・２は軒平瓦で、１は外区外縁は素文、外区内縁は珠文、内区は唐草文である。瓦頭の上面はケズリ調整である。２の内区には退化した唐草文がみられ、瓦頭は折り返しの造りである。３～５は平瓦で、３の凹面の縁のケズリは、糸切り状を呈する。４の凹面の調整も粗い糸切り状を呈する。５は狭端面と側縁はナデである。

第130図の６・７は丸瓦で、６の玉縁部は、凸面のタタキがナデで消されている。７の瓦も凸面が丁寧なナデ調整で、タタキが消されている。胎土の質感からも小松市戸津窯産とみられる。

第131図は第19～31号溝の出土遺物である。１・２は土師器の椀と甕である。３は須恵器盤である。４～６は弥生後期の甕・高杯で、７は須恵器の無高台杯である。８は中国製の盤で、緑・黄色の二彩文様がみられる。９は須恵器の有高台杯、10は長頸壺で、11は高杯である。12は弥生後期の甕、13は内面黒色土器の椀、14・15は土師器の椀である。16は土師質土器の小皿、17は珠洲焼の擂鉢、18は瀬戸灰釉の盤である。18・20は越前焼の擂鉢、21は珠洲焼の擂鉢である。22は青磁の小椀である。23・24は土錘で、23は　4.4ｇを計る。

第132図は第32～34号溝の出土遺物である。１は土師器の甕、２・３は須恵器の椀と壺である。４・５・12は加賀焼の甕である。６は須恵器の有高台杯、７は白磁椀Ⅳ類である。８は須恵器の杯身、９は土師器の椀である。10・11は須恵器の有高台皿と盤である。

8　包含層出土遺物（第133～138図　図版－69・70）

第133・134図は、弥生時代後期から平安時代の遺物である。1～3は弥生時代後期の甕である。5・6は同時代のスタンプ文製品である。8は匙形の土製品である。4は長胴甕で、7は土製竈とみられる。9～13は土錘で、10の重量は24.7ｇ、11は25ｇ、13は8.7ｇを計る。14は生焼けの須恵器の有高台杯とみられる。15～17は内面黒色土器の有高台椀である。18～19は土師器の有高台椀で、21は底部が糸切りの椀である。22は須恵器の杯蓋で、23～25は有高台杯である。26～30は有高台椀とみられる。31は有高台皿である。

第134図の須恵器製品で、32は長頸瓶、33と34は短頸壺とみられる。35は小型の短頸壺で、36は鉢である。37～40は甕の口縁部と胴部である。43は甕の胴部片を整形した陶片、44は須恵器質の土錘で、重量34.4ｇを計る。

第135・136図は、鎌倉時代後半から室町時代の土器と陶器である。45～51は土師質土器の小皿と中皿である。45・46は淡黄色の小皿で、口径6.4㎝を測る。47・48は口径9㎝前後の皿である。49～51は淡黄色と灰白色を呈し、口径11.2～12.2㎝を測る。14世紀後半と15世紀前半とみられる。52～59は珠洲焼製品である。52は小型の壺で、外面に輪積み痕を留めている。53～59は擂鉢で、珠洲焼編年Ⅴ期の製品とみられる。53の口縁波状文は9条、54は口径38.4㎝を測る。55は口径49㎝で、おろし目は幅2.1㎝の8条である。56のおろし目は幅1.8㎝の9条である。60～62は加賀焼の擂鉢である。60は胎土が灰白色を呈し、口径21.8㎝を測る。61も胎土が灰白色を呈し、おろし目は幅1.8㎝の6条と少ない。

第136図の63～65は、加賀焼の甕である。63の押印は斜格子に大輪菊花の意匠で、那谷コテンノウダニ窯群の押印とみられる。64は8区画の正格子内に菊花と斜線を配した押印で、湯上ユノカミダニ窯群のものである。65も64の同類型とである。66～75は越前焼の擂鉢・甕・壺である。66の擂鉢は赤褐色を呈し、口径35㎝を測る。67はおろし目の幅2.7㎝の12条、69はおろし目の幅3.1㎝の13条である。70の擂鉢底部は、赤褐色を呈し66と同一種とみられる。71～73は甕の口縁部である。71は褐色を呈し、口径約50㎝を測る。74・75は壺の底部と口縁部である。74は赤褐色を呈し、内面に指頭圧痕が残る。75は黒褐色を呈し、内面に降灰がみられる。76は瓦質土器の火鉢である。器面は灰色で、胎土は灰白色を呈する。

第137図は平安時代から江戸時代前期の国産の施釉陶器類である。77は緑釉の皿で、オリーブ灰色を呈する。78は緑釉の椀で、淡緑色を呈し近江産とみられる。79は瀬戸の灰釉小壺で、オリーブ灰色を呈する。80～83は瀬戸の灰釉皿である。80～82は縁釉小皿で、83は内外ハケ塗りで、オリーブ灰色を呈する。84・85は瀬戸の灰釉おろし皿である。86・87は瀬戸の灰釉平椀で、釉はオリーブ灰色を呈する。88～92は瀬戸の天目茶碗で、各口縁部の口径は88が14㎝、89は12.6㎝、90は13㎝を測る。91の外底は鉄化粧がみられる。92の高台は削出しが低くて、鉄化粧と4点の目痕がみられる。93は瀬戸の灰釉三足盤で、内面のハケ塗り釉は、二次加熱で失われている。94・95は瀬戸の灰釉瓶子で、釉はオリーブ灰色を呈する。96～98は唐津製品で、96の皿は内外面にオリーブ灰色を呈する。97も唐津の皿で、外底に墨書痕がみられる。98は唐津の小椀で、内面から外面下半に明オリーブ灰色の釉がかかる。外底に「＊」の墨書がみられる。99～101は磁器質

の窯道具類である。本遺跡の南約1kmの位置する再興九谷の若杉窯などからの混入品とみられる。

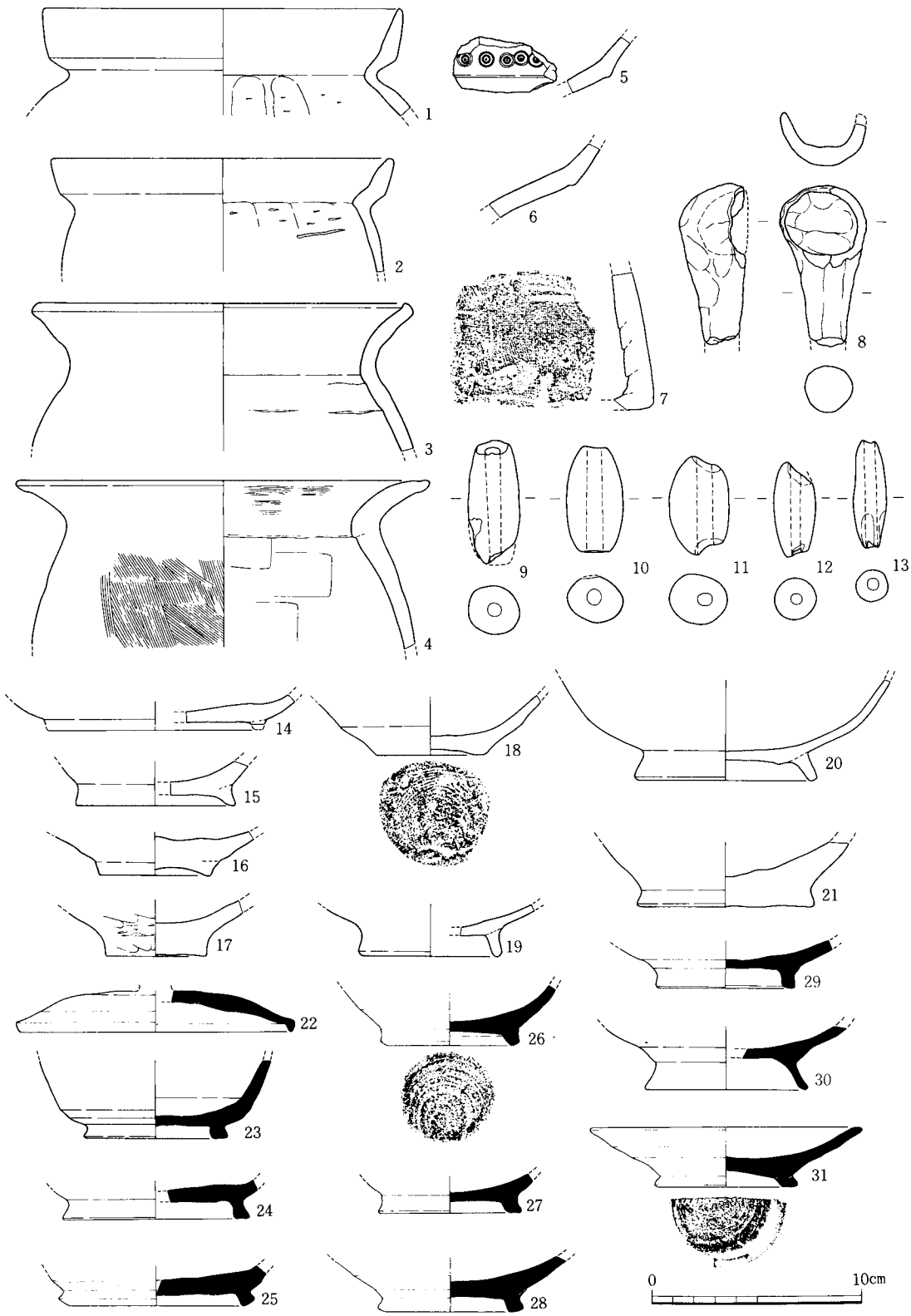
第138図は中国製磁器類で、青磁、白磁、染付などがある。102～104の青磁の椀は、口縁が外反し無文の製品である。釉は緑灰色からオリーブ灰色を呈し透明感に欠ける。105は線描き蓮弁の青磁の椀で、二次加熱により軟質化している。106の青磁の椀は、外面が雷文と唐草文、内面が唐草文釉の製品で、釉はオリーブ灰色を呈する。107は口縁が外反する青磁の椀である。

108は体部にヘラ描きの蓮弁文が入る椀である。109は青磁の小鉢で、釉は透明感に欠けたオリーブ灰色を呈する。110は青磁の皿である。青磁の椀は15世紀代の製品群である。111は白磁の椀で、口縁がやや波打ち、時期は不明である。112～117は白磁の椀の口縁と底部片で、椀Ⅳ類に分類され、12世紀初頭頃の遺物である。118は入子状の小型容器で、胎土は白色を呈し堅緻である。119の白磁の椀は、ピロースクタイプの製品で、釉は透明で灰白色を呈する。120は白磁の小皿で、高台は無釉である。121・122は白磁の小杯で、121は欠損後に円盤状に整形されている。122の小杯は、釉の透明感は強いが、胎土はやや軟質である。123の白磁の小皿は、高台の畳付に砂が付着している。124～126は染付の皿で、124と125の断面には補修痕が認められる。127は暗赤褐色を呈する褐釉が、内外に施釉された壺である。

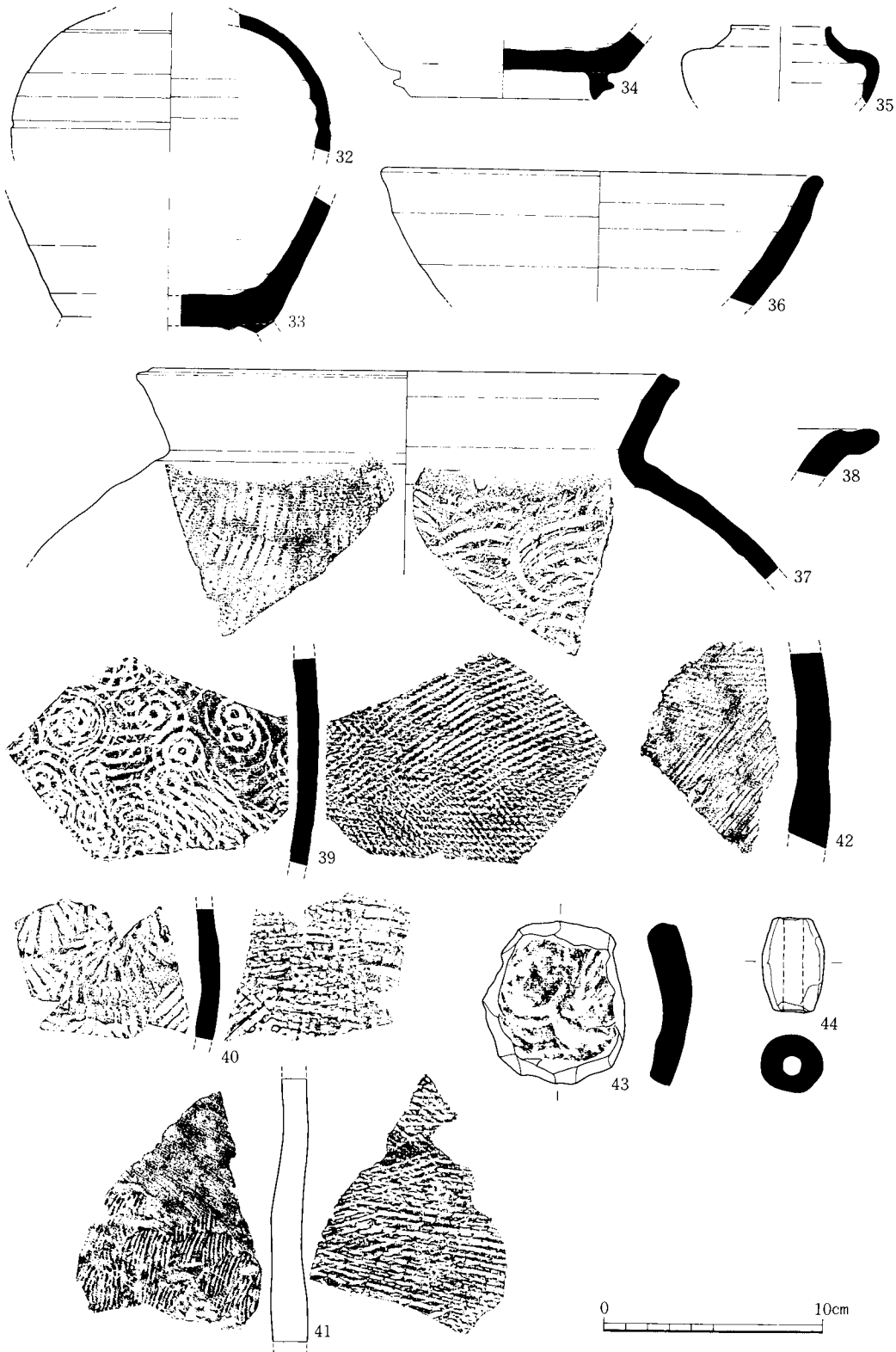
9　出土石製品（第139～142図　図版－71・72）

第2次調査区から出土した石製品の種類は、硯、砥石、行火、炉縁、茶臼、粉挽き臼、石鉢、五輪塔、宝篋印塔、宝塔などがある。本遺跡は集落遺跡であるが、粉挽き臼の出土点数が少ない。これは集落の営続時期に関係すると考えられる。

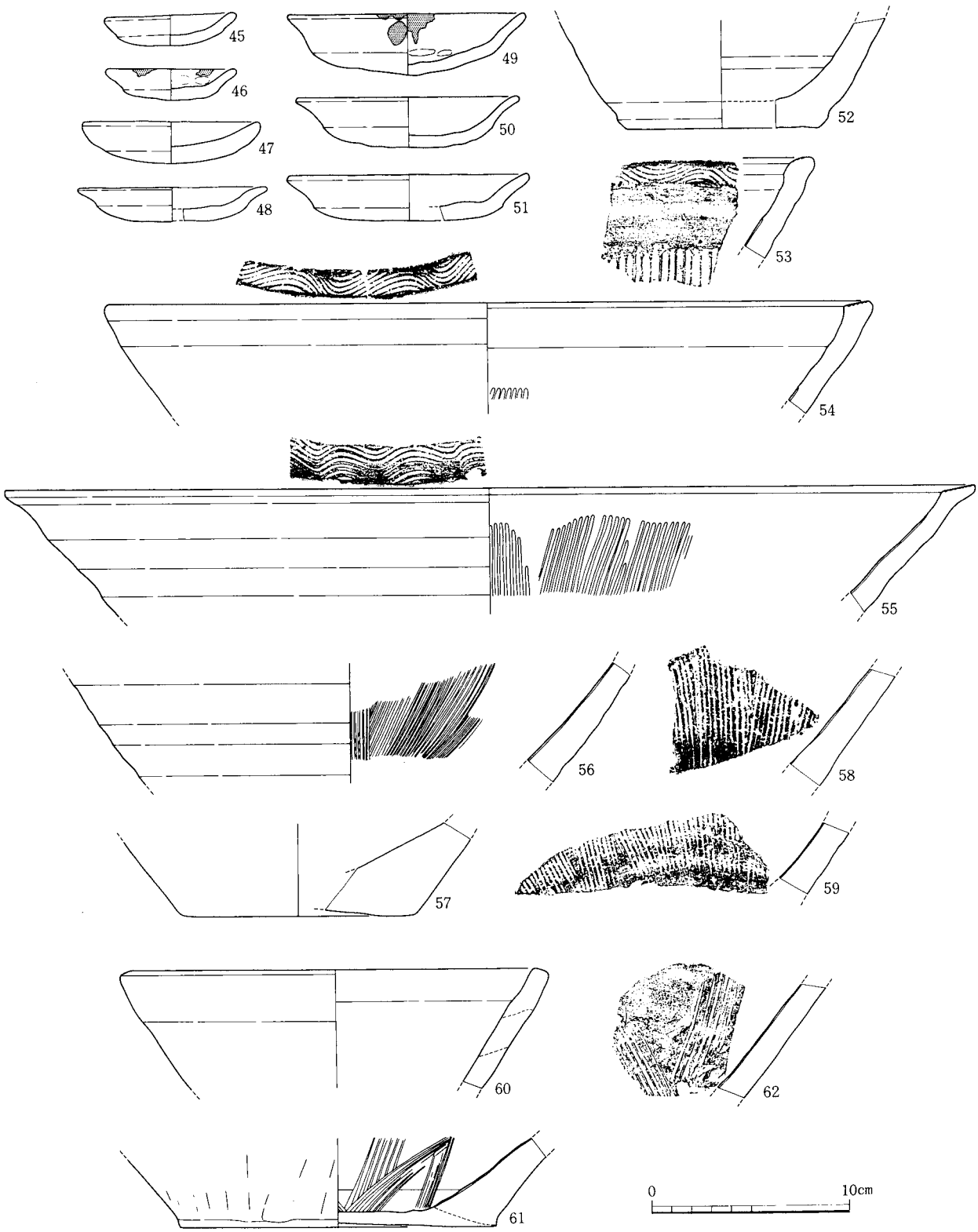
1は第17号溝出土の幅4.5cm（1.5寸相当）の硯で、滋賀県の高嶋硯とみられる。2～7は凝灰岩質の中砥石で、湾曲した研ぎ面から、鎌などの農具の研ぎに使用したとみられる。6・7の砥石は小口の部分に整形のノミ痕を残す。8は平面形がD字形を呈する行火の蓋である。返しの内部が深く彫り窪む。9は外面が平滑な蓋状の製品で、内面にススが付着している。10は最大径14.5cmを測る円盤状の製品で、中央に内径1cmの穿孔がある。現重量は950gを計り、重しと考えられる。11は第13号竪穴出土の茶臼の上臼で、臼面の径が20.5cmを測る。一対の引手木の孔は、方形枠をもつ。12・13は粉挽き臼である。12の臼は、引手木の孔が4箇所も設けられている。これは臼面の摩滅により順次開けられたと考えられる。茶臼と粉挽き臼の用材は、共に地元の火山礫凝灰岩である。14・15の石鉢は、内面の上半にススが付着し、底が摺り減る。14は口径32.6cm、器高12.9cmを測る。15は片口をもつ石鉢で、口径33.6cm、器高12.2cmを測る。石鉢の用材は石臼と質感が異なる火山礫凝灰岩である。16・17は五輪塔の空風輪で、20～22は五輪塔の火輪である。20の上部にある露盤装飾は、金沢市普正寺遺跡の墓地出土品にみられるが、今後検討を要する。18・19は宝篋印塔の相輪とみられるが、18に関しては、宝塔の可能性もある。24は五輪塔の水輪である。25は第40号井戸出土の五輪塔の地輪である。研削のノミ幅は1.9cmで、底が方形に抉られている。27は第31号井戸出土（第83図参照）の宝塔の塔身である。外面は平滑に仕上げられ、高さ40.2cm、径48cmを測る。上下に開けられた円柱状の彫り込みは、ノミの幅が1.2cmと2.2cmである。26も同種の石製品とみられる。この宝塔に関しては、その形態復元が課題である。五輪塔・宝篋印塔・宝塔などの石塔類の用材は、ほぼ同質の火山礫凝灰岩である。



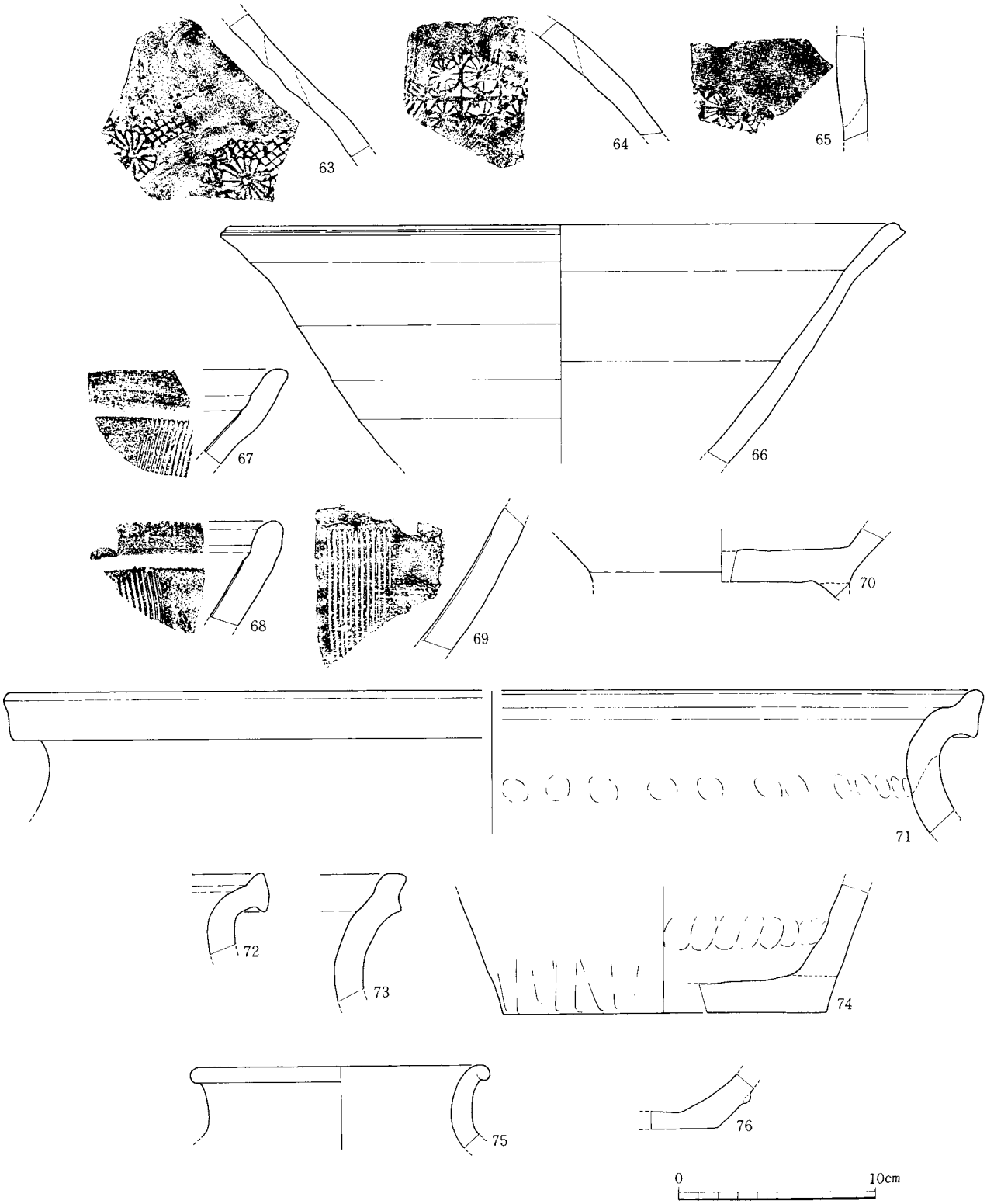
第133図　第２次調査包含層出土土器実測図１（Ｓ＝1／3）



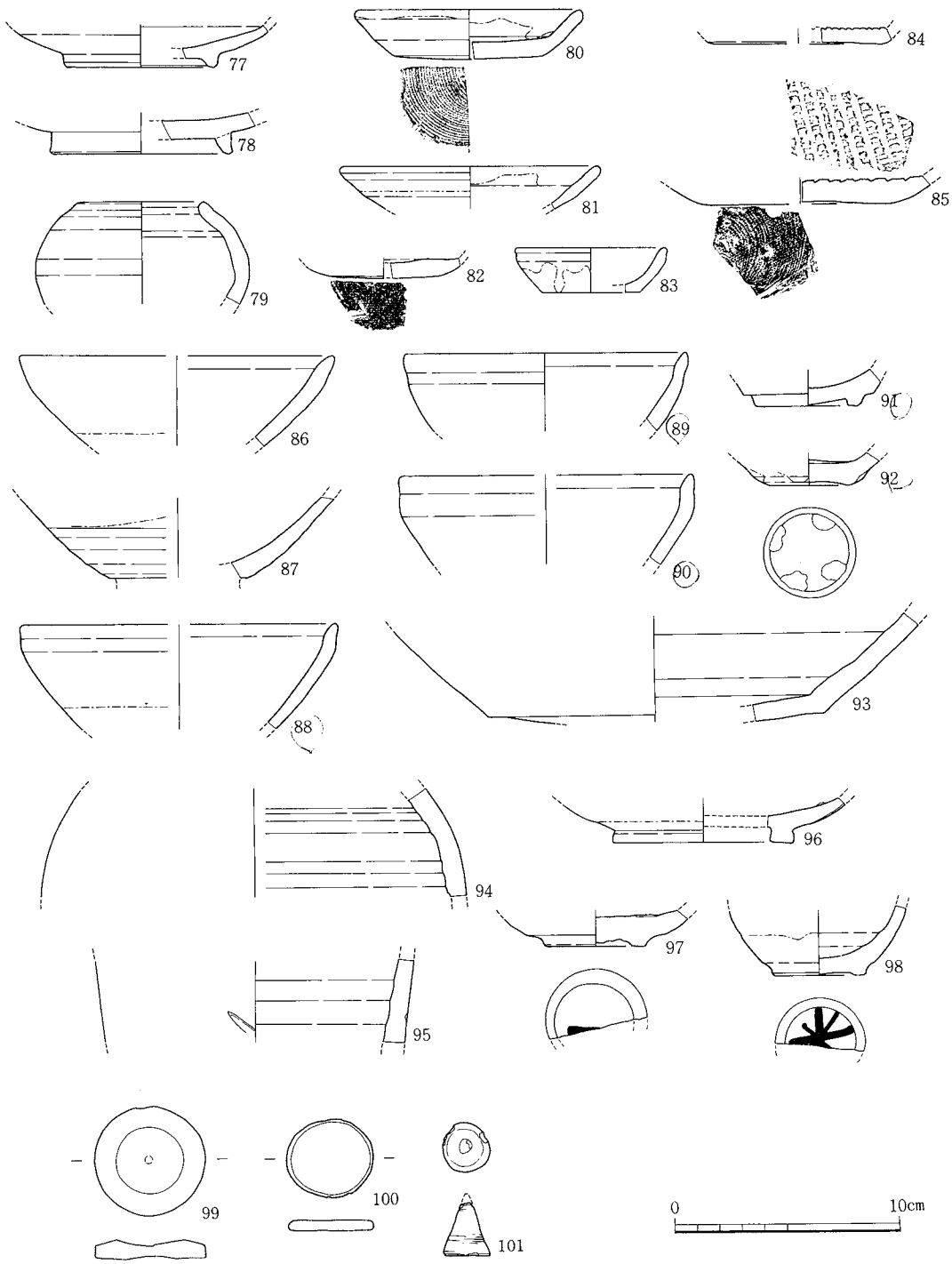
第134図　第２次調査包含層出土土器実測図２（Ｓ＝1／3）



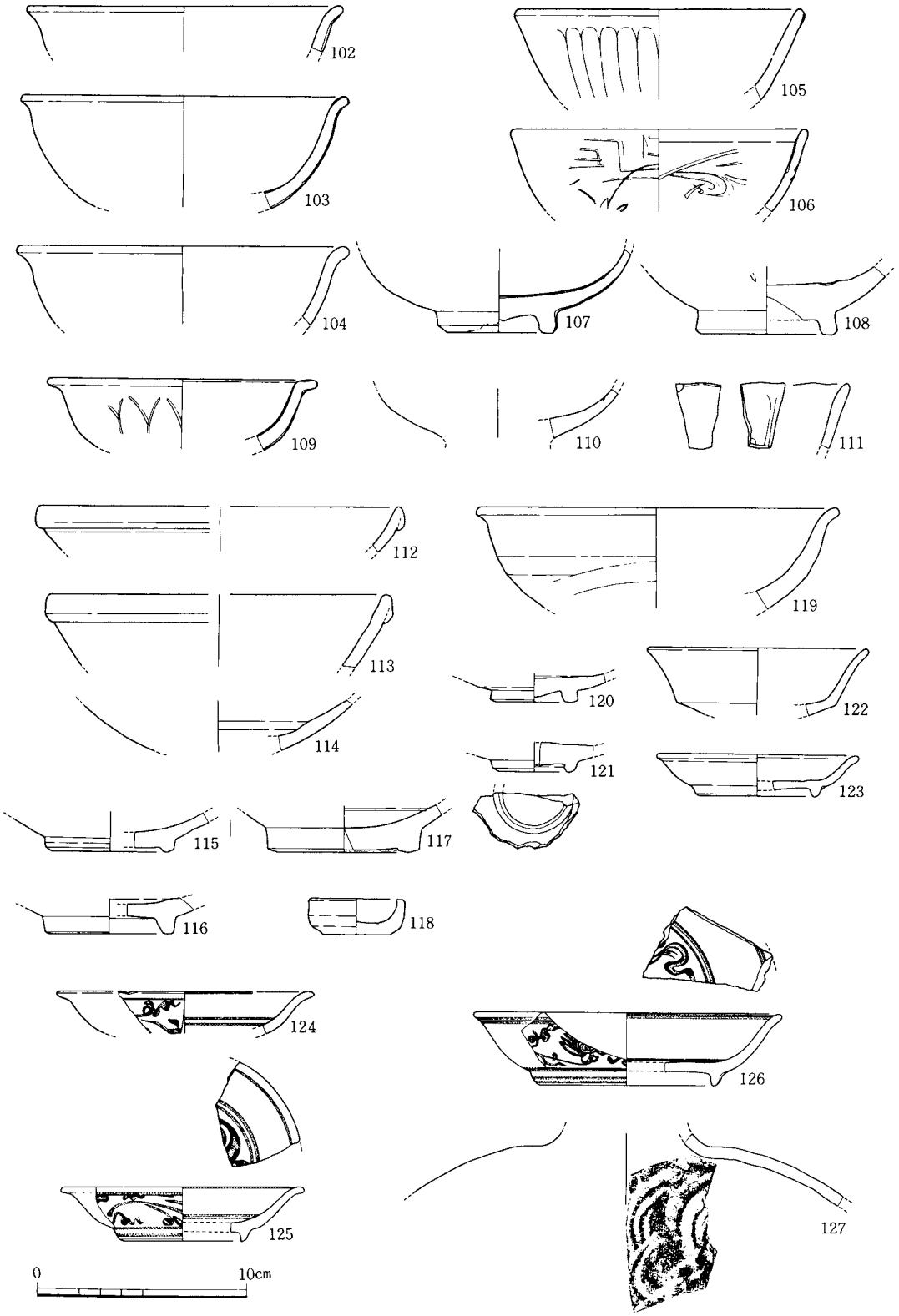
第135図　第２次調査包含層出土土器実測図３（Ｓ＝1／3）



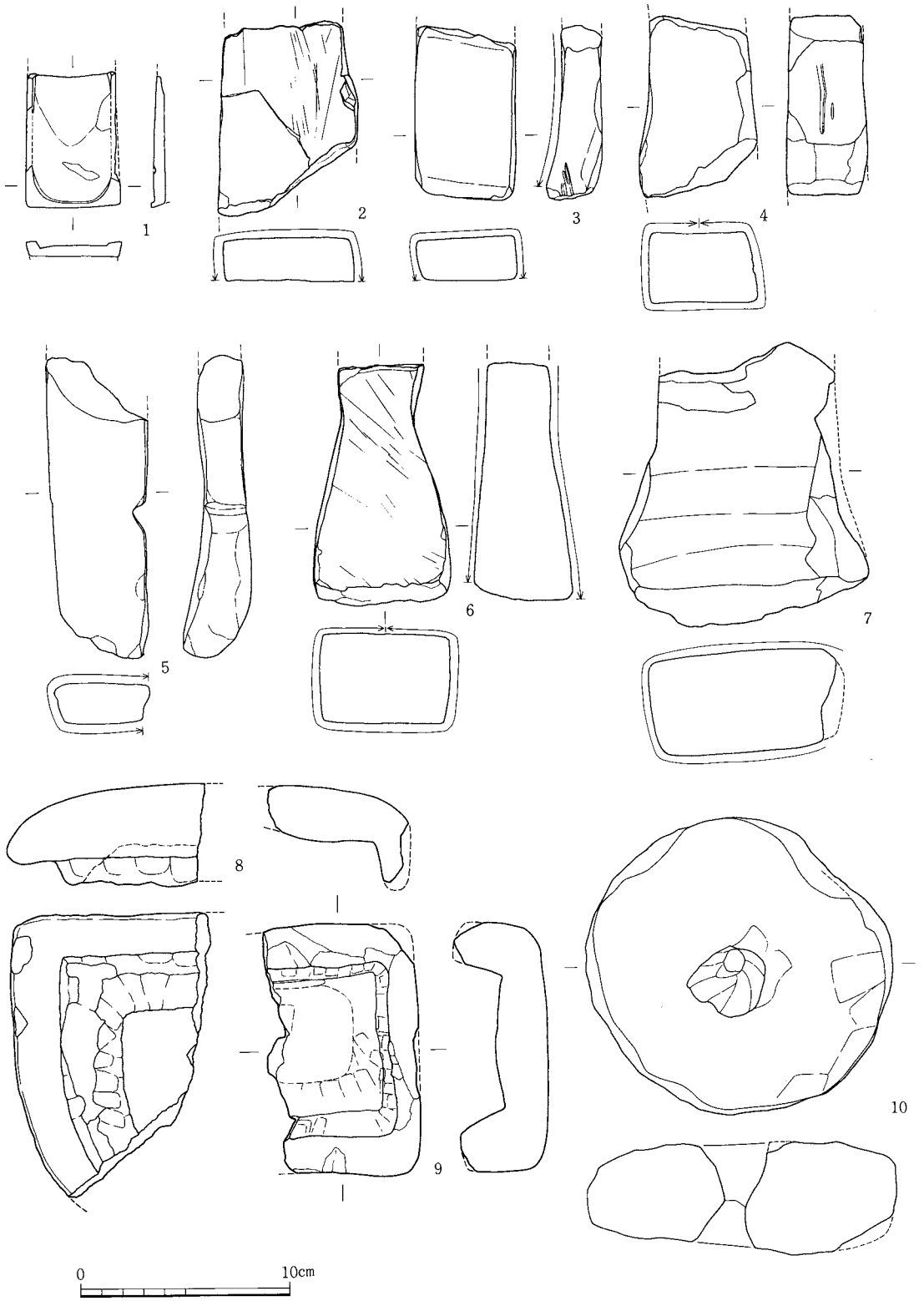
第136図　第２次調査包含層出土土器実測図４（Ｓ＝1／3）



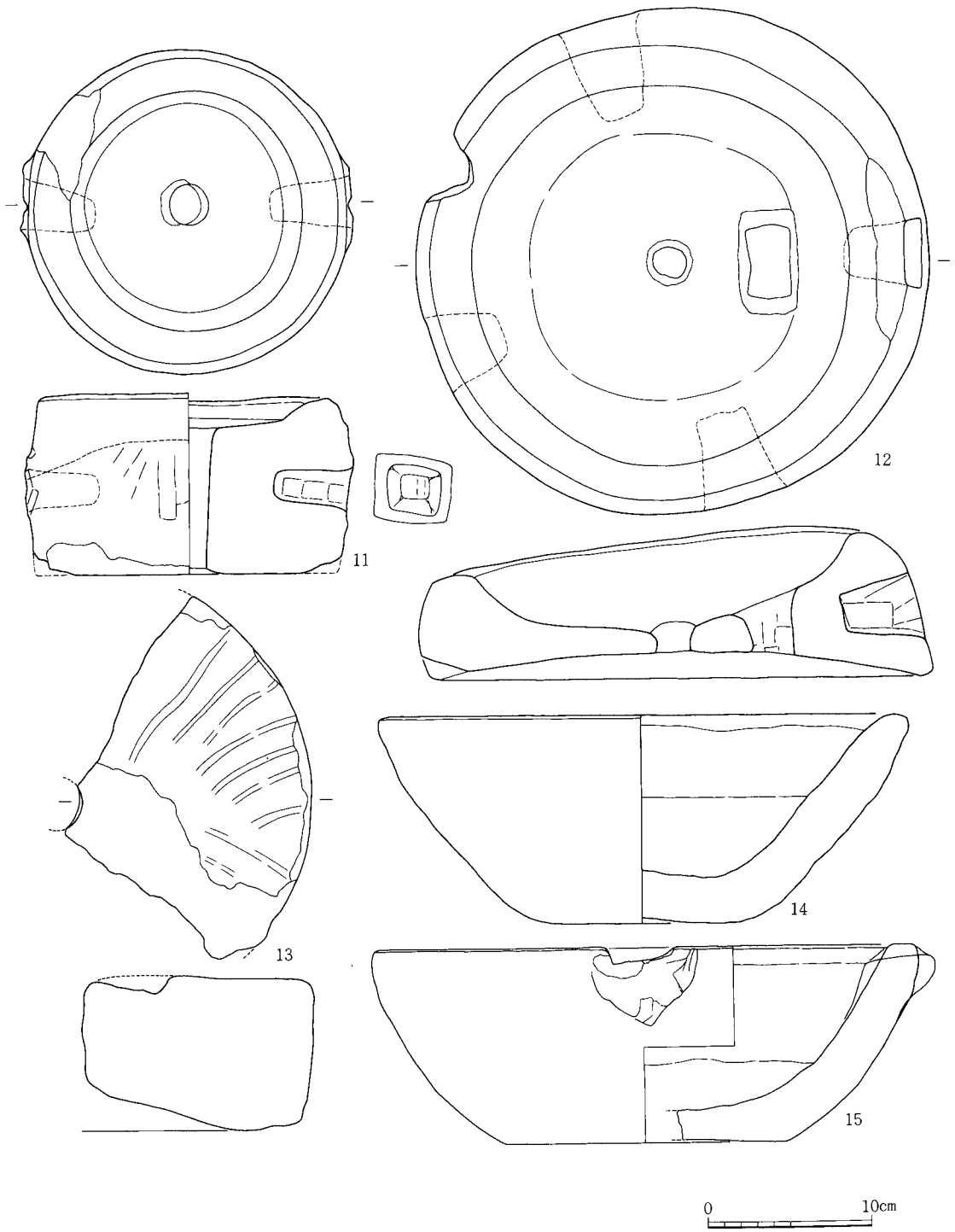
第137図　第２次調査包含層出土土器実測図５（Ｓ＝1／3）



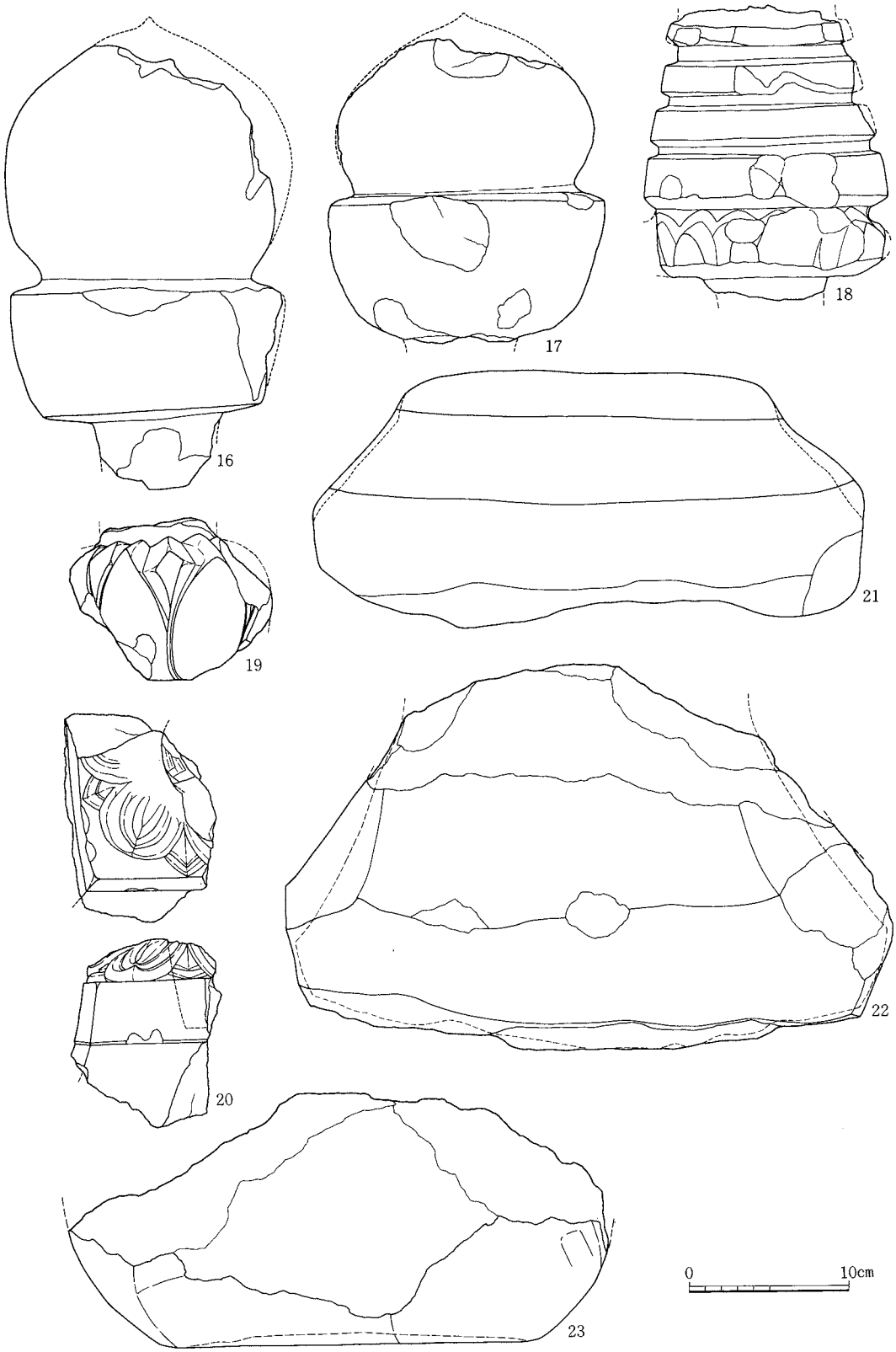
第138図　第２次調査包含層出土土器実測図６（Ｓ＝1／3）



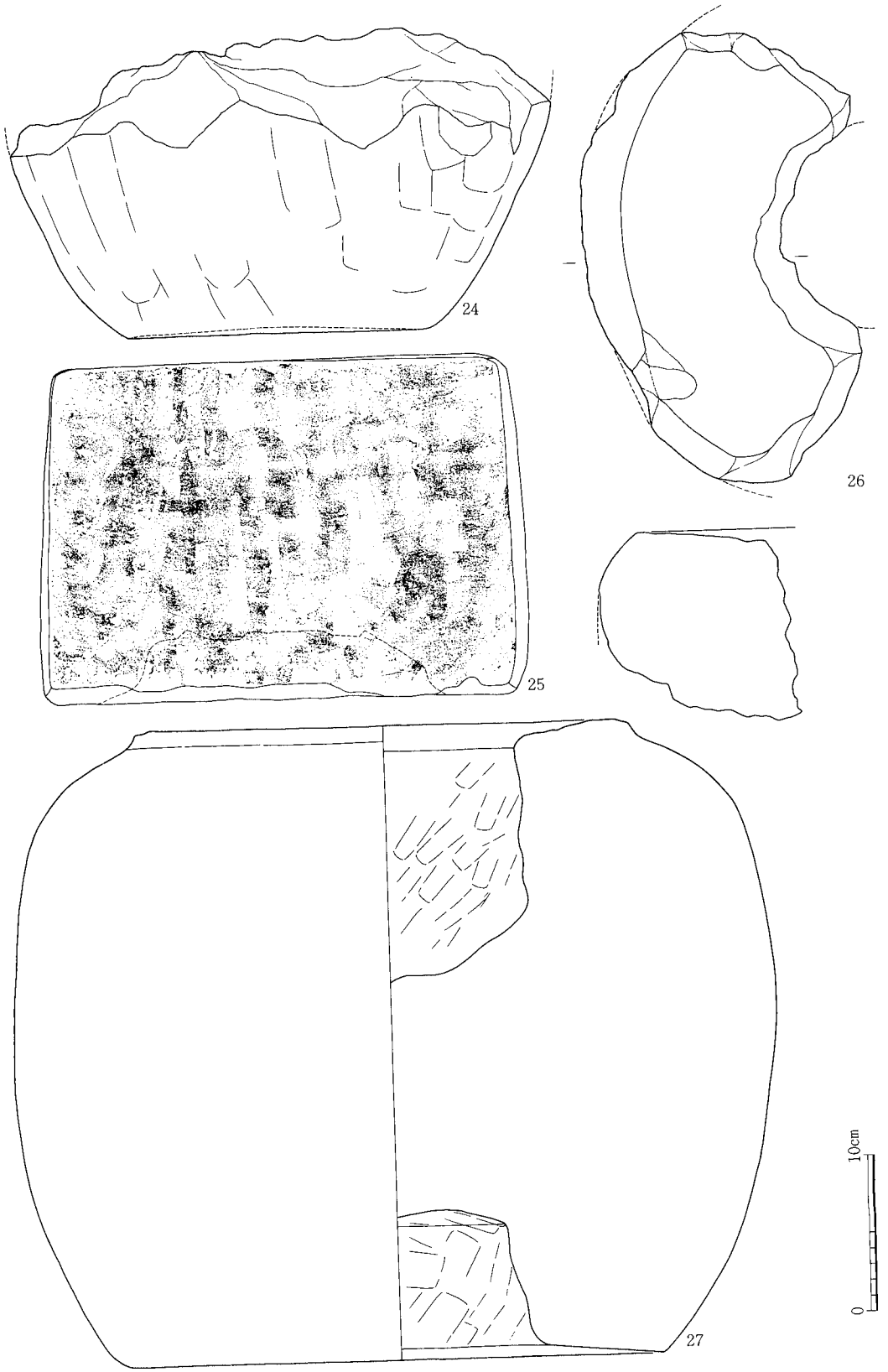
第139図　第２次調査出土石製品実測図１（Ｓ＝1／3）



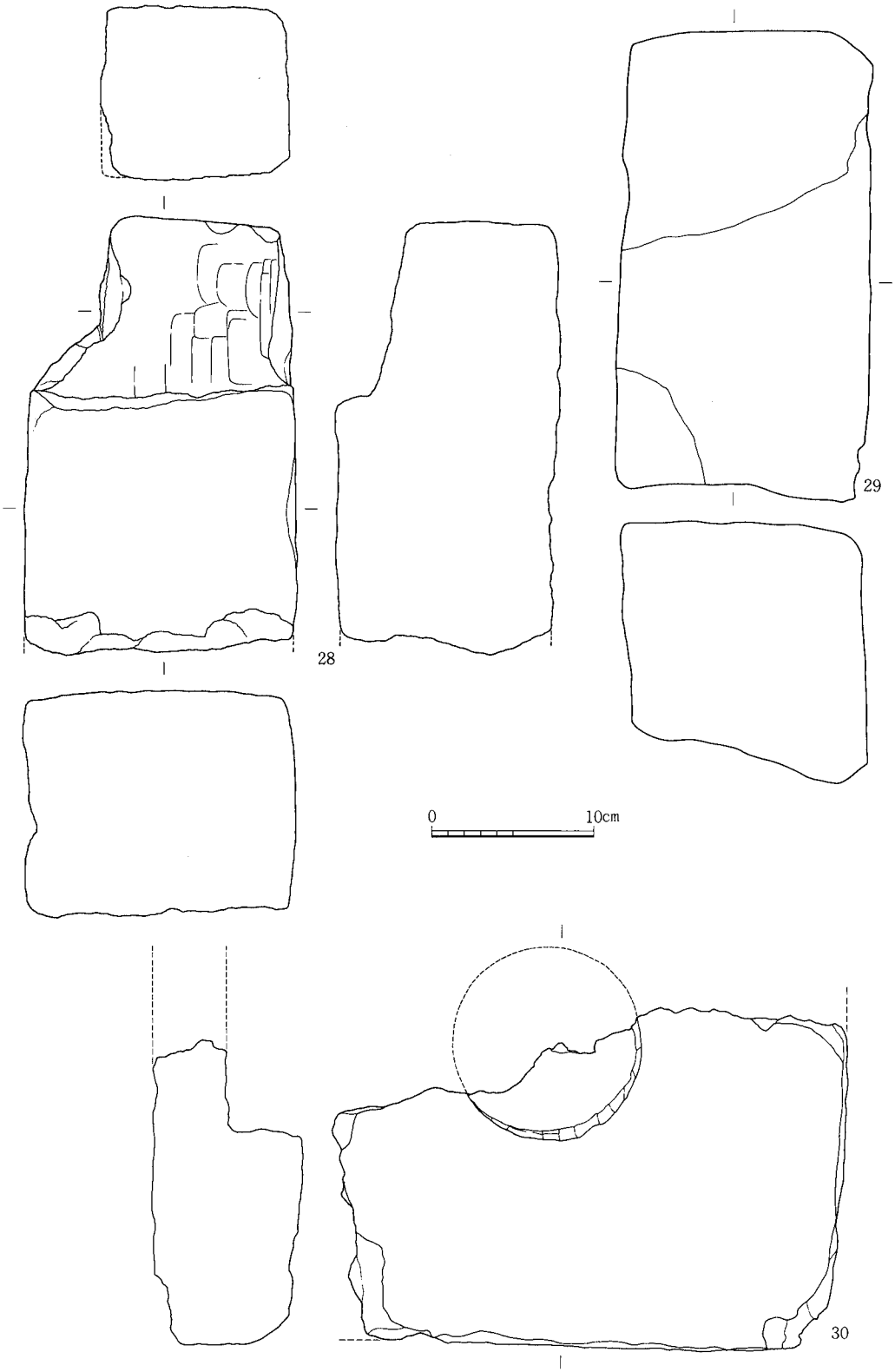
第140図　第２次調査出土石製品実測図２（Ｓ＝1／4）



第141図　第２次調査出土石製品実測図３（Ｓ＝1／4）



第142図　第２次調査出土石製品実測図４（Ｓ＝1／4）



第143図　第２次調査出土石製品実測図５（Ｓ＝1／4）

第5章　ま　と　め

第1節　第1次調査まとめ

県営公害防除特別土地改良事業に伴う佐々木アサバタケ遺跡の第1次調査は、遺跡の西側約3,000㎡を調査した。

遺跡は弥生時代後期から中世にかけて形成された集落遺跡で、その中心は12～15世紀代となっている。検出された主な遺構には、掘立柱建物6棟、井戸跡23基、竪穴状遺構5基、土坑16基、溝16条等のものが存在した。これらの遺構・遺物については、前節までに説明したが、井戸跡と竪穴状遺構の時期は明示していない。この時期の説明から入りたい。

井戸跡　第1号・8号井戸が平安時代の10～11世紀代。第2号・3号井戸が12世紀後半。第4号井戸が13世紀前半。第5号井戸が14世紀前半。第6号・10号井戸が15世紀代。第11号井戸が14世紀代。第12号井戸が13世紀代。第13号井戸が15世紀前半。第15号井戸が13世紀後半。第17号井戸が13世紀後半～14世紀前半。第18号井戸が14世紀代で第20号井戸より新しい時期。第19号井戸が14世紀代。第20号井戸が14世紀前半。第23号井戸が12世紀。他は出土遺物がなく時期は不明。

竪穴状遺構　第1号竪穴状遺構が14世紀後半。第2号竪穴状遺構が14世紀代。第4号竪穴状遺構が13世紀後半～14世紀前半。第5号竪穴状遺構が15世紀代。第6号竪穴状遺構が12世紀中頃となる。

井戸出土の土器群で注目されるのが、第5号井戸からの土器群である。井戸枠掘り方と覆土中のものに区分して掲載したが、まとめ執筆段落に掘り方出土の第23図2と覆土出土の第23図9が接合し、同一個体であることが判明した。しかし、土師質土器の小皿と中皿に、鎬蓮弁を持つ青磁碗、加賀焼を伴っており、加賀焼の大甕に古いものを含むが、大略この時期の良好な資料といえよう。また、土師質土器は、大きさや口唇部・口縁部のヨコナデ調製の仕方やその幅、さらに色調に違いが認められる。特に色調の違いから3タイプに区分されるが、これは3ブロック程度の製作地から製品が持ち込まれ、消費されているのを示しているのであろう。土器の色調が異なるのは、A－6・7区調査区外出土の12世紀中頃の土師器にも共通して認められる。

井戸の内部に井戸側が遺存していたのは、本遺跡と同時期で（13世紀前半）梯川下流に存在する白江梯川遺跡の例と比べると5基と少ない。それは第4号井戸の方形縦板組隅柱横桟どめ。第5号井戸（14世紀前半）の曲物有段形。第8号井戸の方形縦板横桟どめ。第15号井戸の曲物有段型。第22号井戸で曲物が一段のみ僅かに残るもののみである。曲物も第5号井戸では厚くしっかりとしたものであるが、第15号・22号井戸では薄い作りのものであった。井戸側の遺存していないものには、素掘りのタイプも含まれている可能性もあるが、廃棄時に取り上げたため残らないことも考えられる。また、第15号井戸あるいは第22号井戸は、検出レベルが他の井戸より高い。井戸といっても使い方が他の井戸とは異なるのではないかと推定される。覆土の堆積状況を見ると、ほとんど廃棄時以降に流れ込んで溜った自然堆積土が認められ、半ば埋った状態で人為的に

埋め戻しているのが特徴となっている。存在地点も第1号～3号井戸以外は南側の低地部分している。

竪穴状遺構もその分布を見ると、北西斜面下の低地に存在した第6号竪穴状遺構以外は南側の低地部分に存在している。中でも形態や作りに特徴の認められたのが、第1号竪穴状遺構である。それは長方形のプランを呈し、南北の壁面は板材で土留めし、内部の床面には豆砂利を敷きつめてあった。また、床面南西側には大型の砥石が1個据えられていた。主柱穴は床面中央部の北側にあり、底部に主柱の根がために偏平な礫が入っていた。この遺構は当時の竪穴式住居と言うよりも、作業小屋的な建物ではないかと推定される。これだけ形態の整った遺構は他には存在しなかったが、他も同様な性格の遺構であろう。ただ、調査区南西側に存在した第2号竪穴状遺構の場合は、完掘してはいないが、南側に行くにしたがい二手に分かれて延びると言う特徴がある。これなどは他の遺構と異なる性格を有するのであろう。

この井戸跡と竪穴状遺構の分布を見ると、第1号～4号井戸と第6号竪穴状遺構以外は、掘立柱建物の存在する調査区北側の微高地以南の低地部分に存在している。掘立柱建物と井戸跡が重複していたのは、第4号掘立柱建物と第18号・20号井戸のみと少ない。相対的ながら微高地上が掘立柱建物に代表される居住区域で、それ以南の低地部分が井戸跡や第1号竪穴状遺構に代表されるように、井戸や作業小屋的なものが存在する区域に区分されていたのではないかと推定される。

以上が第1次調査から得られたことがらと言える。他の遺構や包含層出土の遺物等のことについては触れられなかったが、このあたりで区切りをつけておきたい。なお、出土した土器類については、センターの垣内光次郎・藤田邦雄氏から教示を得ている。

参考文献

北野博司他　1986年　『佐々木ノテウラ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
田嶋明人他　1986年　『漆町遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
湯尻修平・米沢義光他　1987年　『小松市中海遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
米沢義光　1987年　『小松市古府遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
越坂一也・田嶋明人他　1987年　『永町ガマノマガリ遺跡』　石川県立埋蔵文化財センター
北野博司・藤田邦雄他　1988年　『辰口西部遺跡群Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター
中島俊一・湯尻修平他　1988年　『白江梯川遺跡Ⅰ』　石川県立埋蔵文化財センター

第２節　第２次調査のまとめ　－遺跡の動態と性格に関して－

１　遺跡の変遷と景観

本遺跡の名称は、遺跡が立地した畠地の小字名の「アサバタケ」に由来する。この「アサバタケ」は、梯川の中流左岸に位置する小松市佐々木町地内の北側に所在して、標高５ｍを測る島状の微高地である。周囲を取り囲む水田とは、約１ｍの高差をもつ高まりで、遺跡の立地と景観を探るうえで重要な要素である。また２次の発掘調査の結果、遺跡は弥生時代後期から江戸時代初期の集落遺跡で、多様な遺構を確認している。その主な遺構の種別と数は、竪穴住居２基、掘立柱建物13棟、竪穴状遺構14基、井戸50基、溝42条で、13～15世紀頃に構築された生活関連の遺構群が主体を占めることから、加賀地方の中世集落を代表する遺跡と認識される。

遺跡の調査成果から遺跡の変遷をみると、集落の設営は弥生時代後期からである。標高５ｍを測る微高地上に竪穴住居が建設され、小規模な排水溝が開削されている。周囲の遺構の状況からして、数基の竪穴住居が設置され、小規模なムラとして機能したと考えられる。またこのような状況は、古墳時代後期を経て、平安時代まで継続していた可能性が高い。

平安時代中頃になると、掘立柱建物の建設が確認され、須恵器や土師器などの飲食器の出土が増加する。出土品には平瓦や丸瓦と初期貿易陶磁器も含まれることから、加賀地方の古代集落の中でも特異な集落と識別される。これは本遺跡の対岸に位置したと推定される古代加賀国府との関連を無視できない。梯川中流の右岸に広がる古府台地は、古代の文献史料と鎮座する神社などから、古代加賀国府の推定地として知られている。その対岸に所在した「アサバタケ」の古代集落は、在庁官人などを勤めた人物の居宅であった可能性を考えている。飲料水の確保を目的とした井戸の掘削もこの時代からみられる。

調査で確認された遺構群の中でも、鎌倉時代から室町時代に構築された掘立柱建物や井戸は、生活に関連した遺構の主体である。具体的には、13世紀後半～15世紀中頃に設営された施設で、住人の住居と理解される掘立柱建物、飲料水確保の井戸、作業小屋的や竪穴状遺構と広場的な空間地などが確認される。これらは当時の宅地の内部を構成した遺構で、住人の経済的な規模と能力を反映した遺構と理解される。そのため全体図（第４図）にみられる遺構の性格と年代を整理すると、14・15世紀に「アサバタケ」の微高地で営まれた宅地は、南に面した区画が多く、３区画ないし４区画の宅地が存在したことが知られる。いずれも溝や遺構群の群在が目安となる。

２　中世の宅地構造

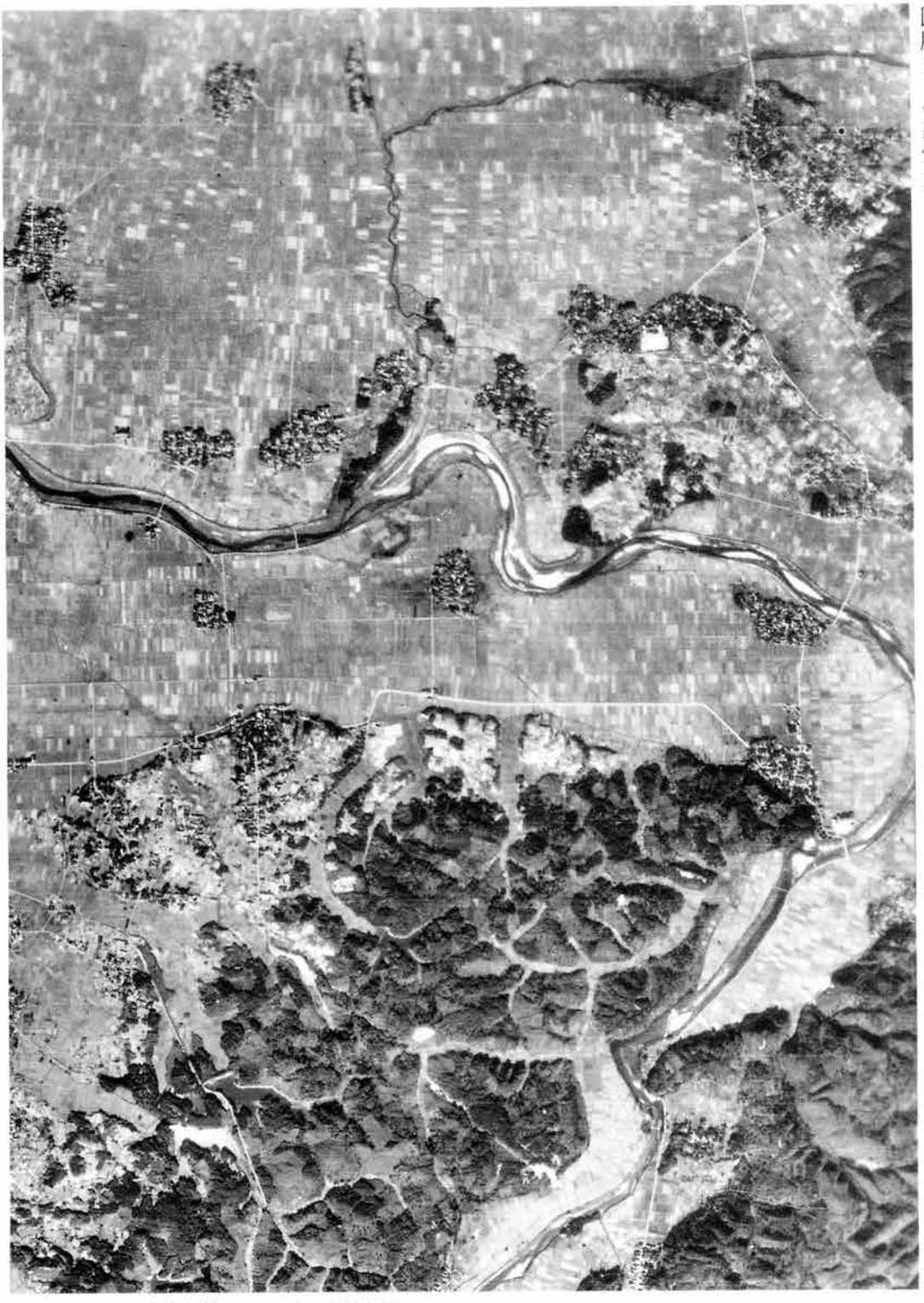
第２次調査区の中央を走る第17号溝は、13世紀頃に開削された堀状の溝で、この溝を境として集落は東西に二分される。西側の区画は、調査区の西側を南北方向に並走する用水と農道が、その先に広がるであろう水田との境と見るならば、東西約75ｍを測る大型の宅地区画となる。その中央には、14世紀代に設営された大型の井戸と掘立柱建物が位置して、周囲に広場的な空閑地も取られている。ただしこの宅地の区画は、14世紀後半以降に設営される竪穴状遺構の推移を見ると、その内部がさらに東西の二区画に細分されていた可能性が高い。

そして第17号溝より東側の宅地区画は、第31号溝が北側の境で、その南に二区画分の宅地が位置したと理解される。この二区画を遺構で捉えると、第12号掘立柱建物を中心として、その南に広がる区画と、第13号掘立柱建物を中心として、その東に広がる区画である。またこの二区画は、井戸と竪穴状遺構の設営場所が隣接し、その分布は宅地構造の対象形を意識させる纏まりがみられる。さらに広場的な空閑地が、狭小となる共通性がみられる。

今回の調査で確認された中世集落内の宅地区画は、梯川流域に分布する中世の集落遺跡でも確認されることから、中世の加賀地方で、広く展開した宅地構造であったと理解されるが、その実態を明にするために他の集落遺跡との検討が必要であると同時に、留意すべき点として屋敷畠の存在がある。

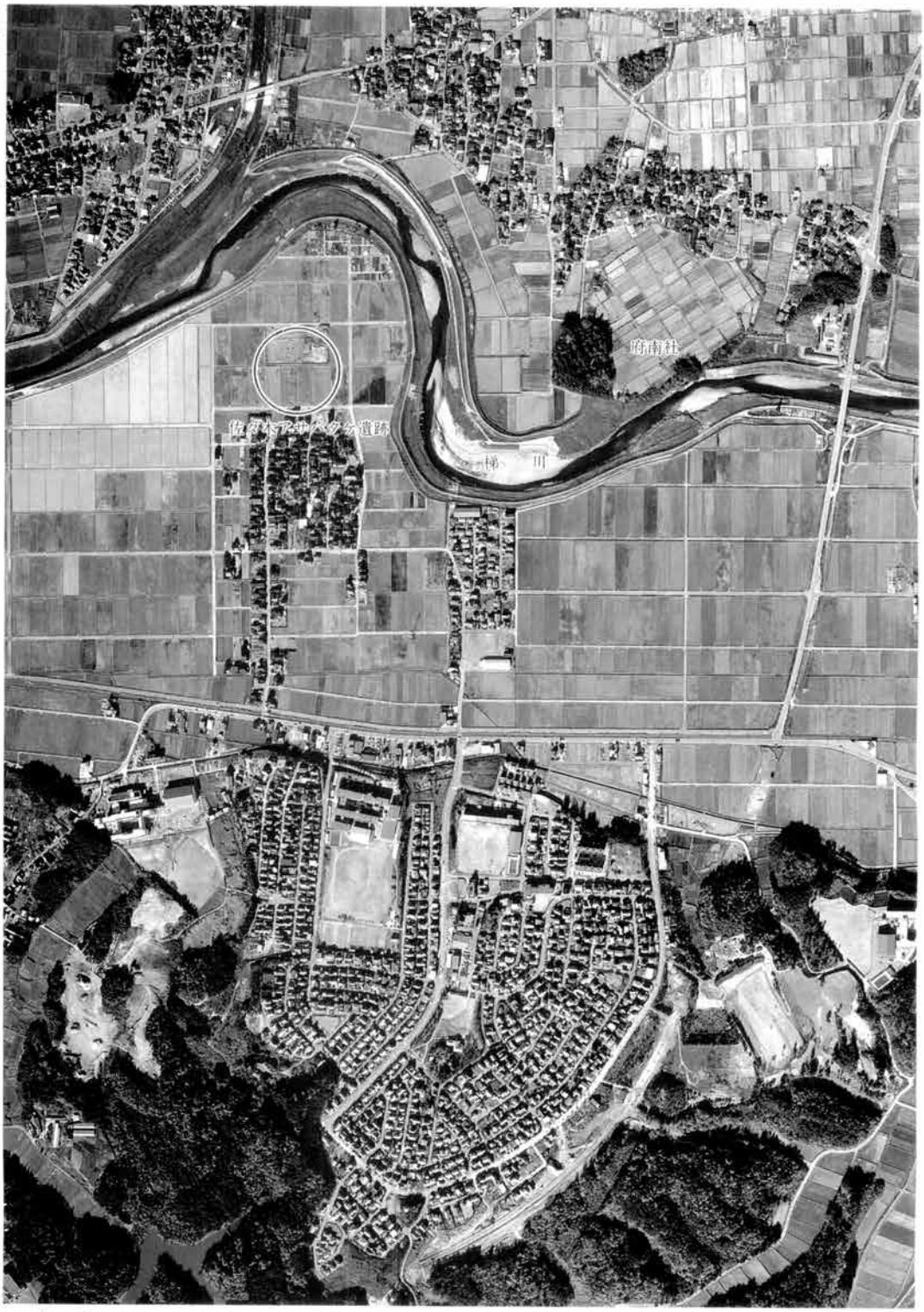
調査成果の質量から、本報告書に収録ができなかったものに、中世の井戸の覆土から水洗選別することで検出された植物種実の同定報告がある。詳細は次年度に別途報告の予定であるが、この植物種実の調査から、宅地区画の一角に屋敷畠が存在したことが有力視されている。この中世の屋敷畠の推定範囲は、調査区北側の農道部分から第２号竪穴住居の部分で、各宅地区画の北側にあたる。畠地の遺構である畝溝は未確認であるが、「アサバタケ」と呼称された微高地にあったと判断される畠地では、マクワウリ、カラシナ、アブラナ類、アサ、キュウリ属、エゴマ、シソ、ヒョウタンなどの副食野菜が栽培され、コムギ、アワ、キビ、ソバ、栽培ヒエなどの穀類は、少し離れた畠畑で栽培されていた景観が復元される。

中世の屋敷畠に関しては、絵巻物の多くの場面に描かれ、その情景が知られているが、その実像を考古学的な資料から確認することは、多くの作業と類推が必要である。



遺跡周辺の空中写真（1947年11月撮影）

図版2　空中写真

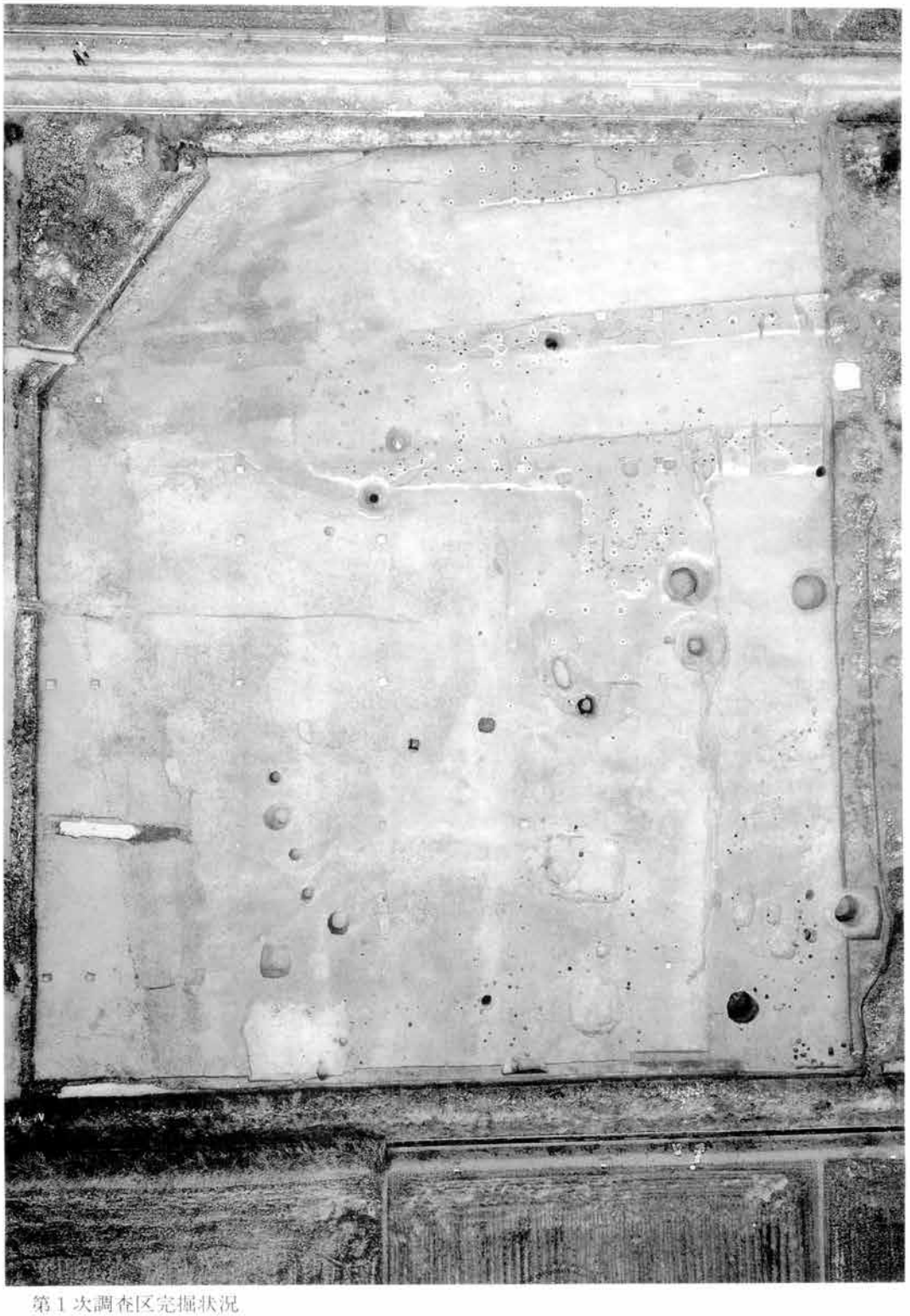


佐々木アサバタケ遺跡の位置（1984年10月撮影）　1/10,000

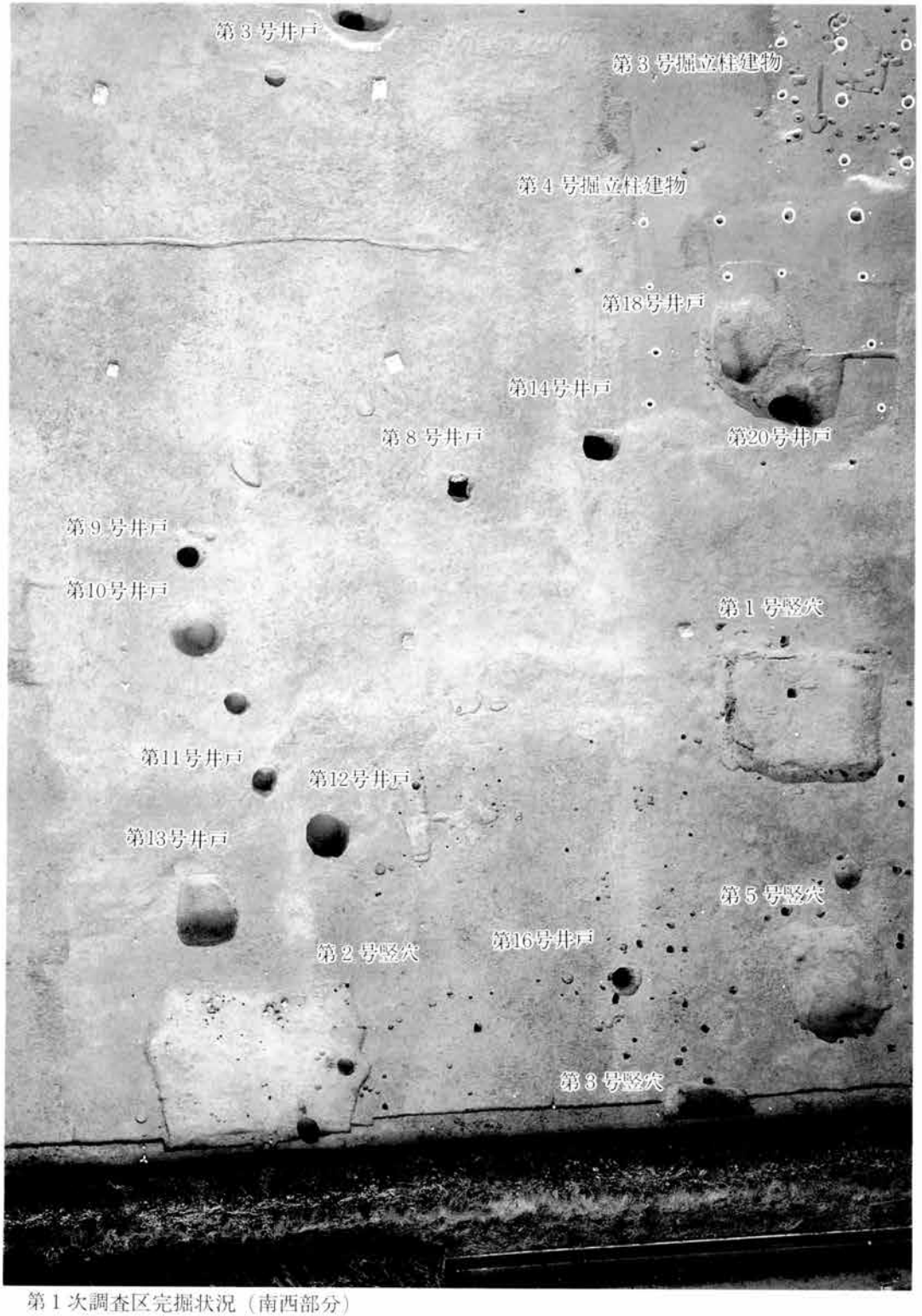
佐々木アサバタケ遺跡俯瞰（北西から）

佐々木アサバタケ遺跡俯瞰（東から）

図版4　空中写真

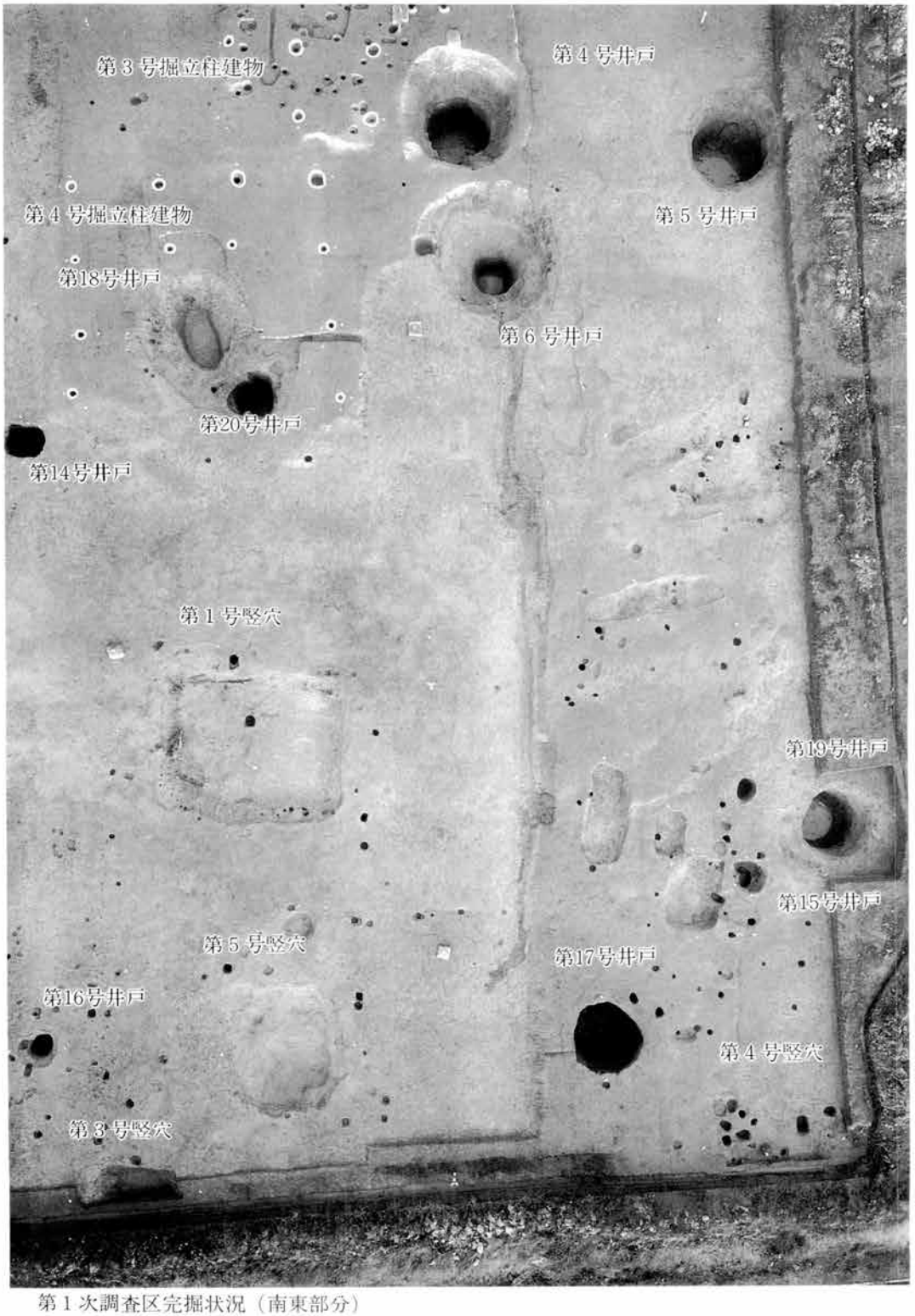


第1次調査区完掘状況



第1次調査区完掘状況（南西部分）

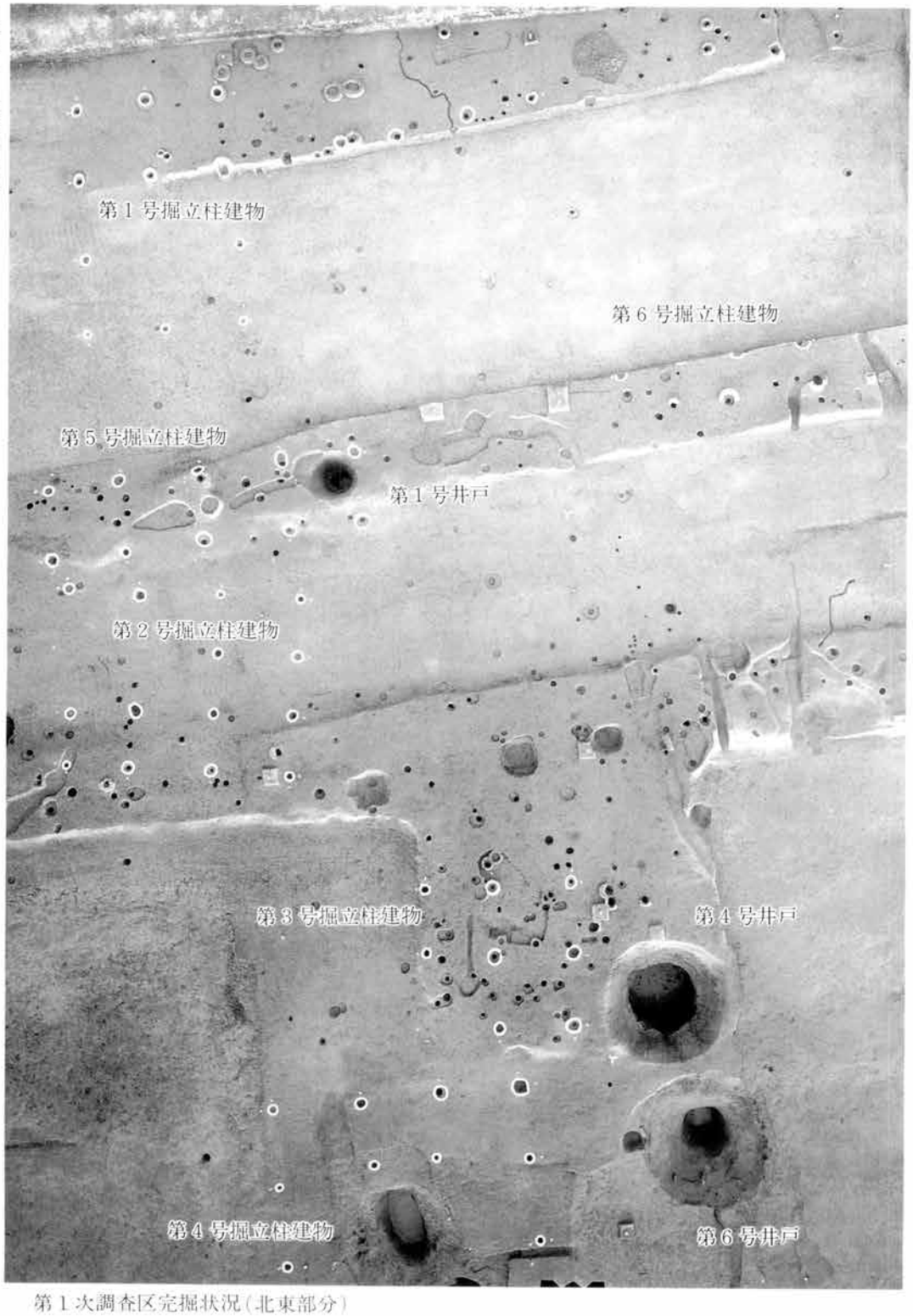
図版6　空中写真



第1次調査区完掘状況（南東部分）

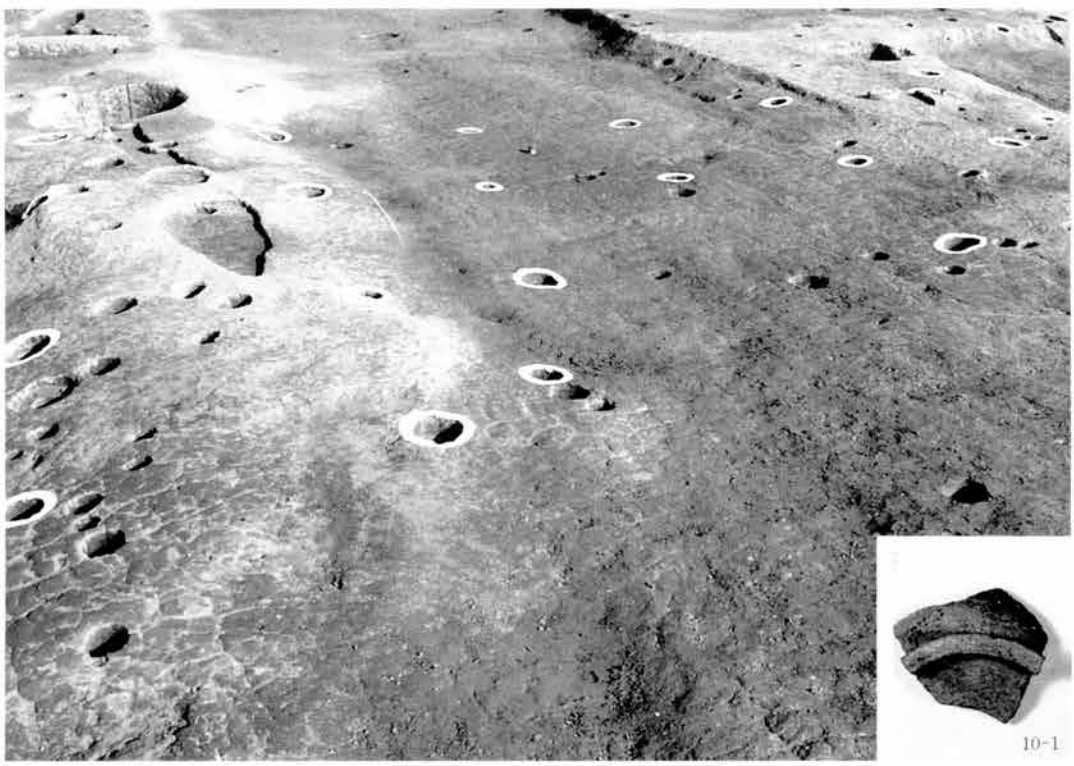
第1次調査区完掘状況（北西部分）

図版8　空中写真



第1次調査区完掘状況（北東部分）

第3号掘立柱建物完掘状況

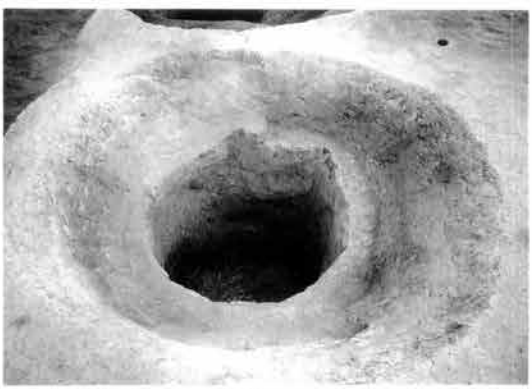


第2・5号掘立柱建物完掘状況（第5号掘立柱建物柱穴出土土器）

第1号井戸完掘状況

第2号井戸遺物出土状況

第3号井戸完掘状況



第4号井戸完掘状況

第5号井戸完掘状況

第7号井戸完掘状況

第4号井戸完掘状況

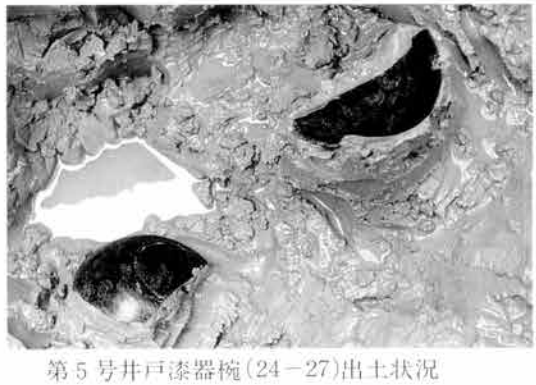
第4号井戸井戸枠

第4号井戸井戸枠(部分)

第5号井戸曲物井戸枠(上段)出土状況

第5号井戸曲物井戸枠(上段、部分)

第5号井戸漆器椀(24－28)出土状況

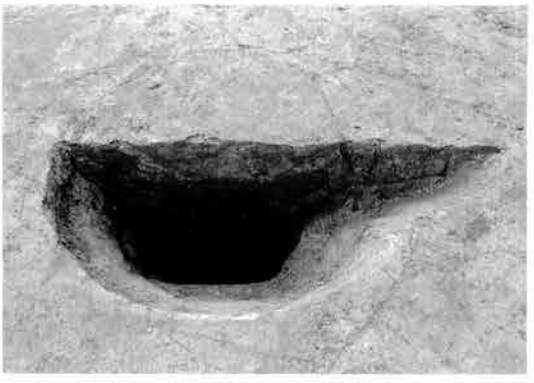


第5号井戸漆器椀(24－27)出土状況

第８号井戸瓦出土状況

第８号井戸完掘状況

第6号井戸完掘状況



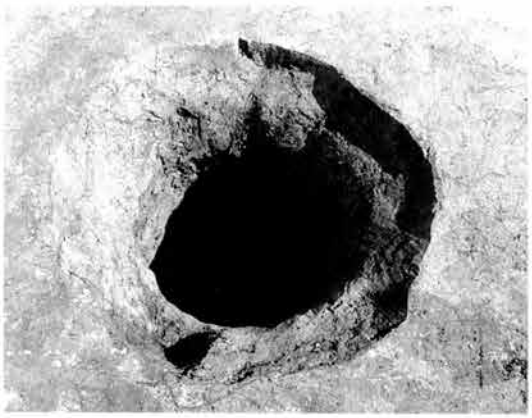
第9号井戸土層堆積状況

第10号井戸完掘状況

第15号井戸遺物出土状況

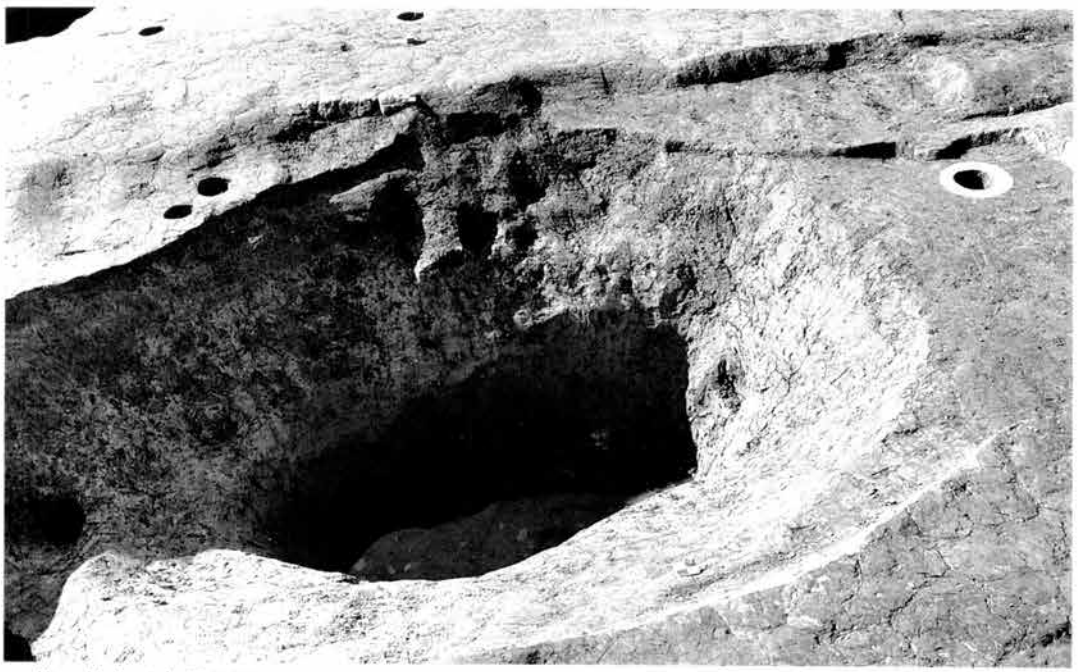
第17号井戸完掘状況

第17号井戸曲物出土状況



第16号井戸完掘状況

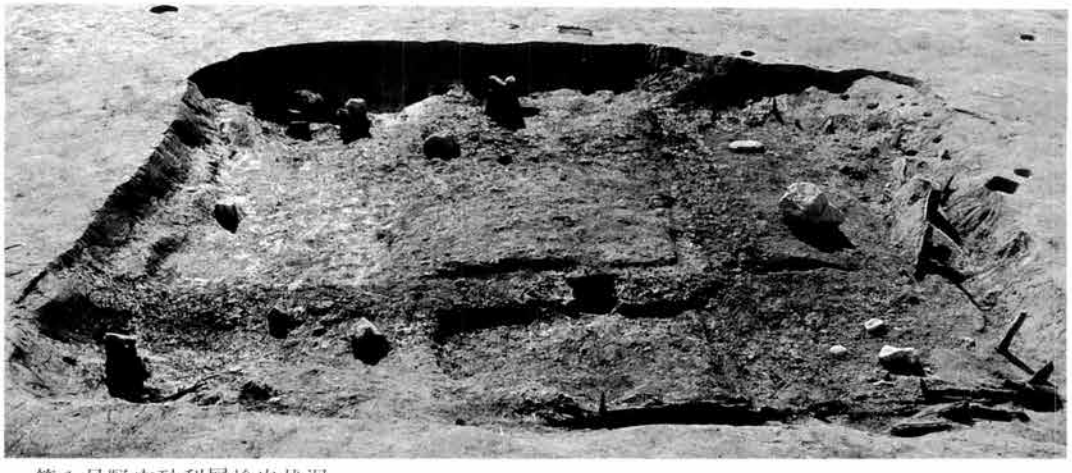
第19号井戸完掘状況



第18号井戸完掘状況

第20号井戸完掘状況

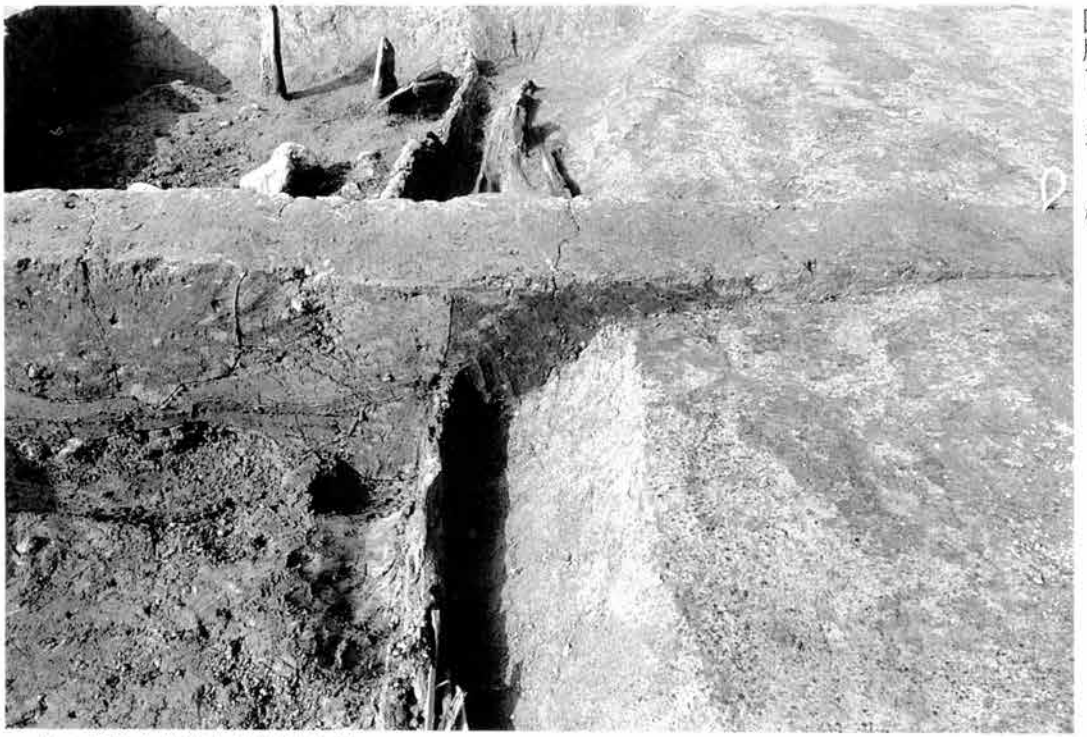
第21号井戸土層堆積状況



第1号竪穴砂利層検出状況

第1号竪穴完掘状況

第1号竪穴南壁土層堆積状況



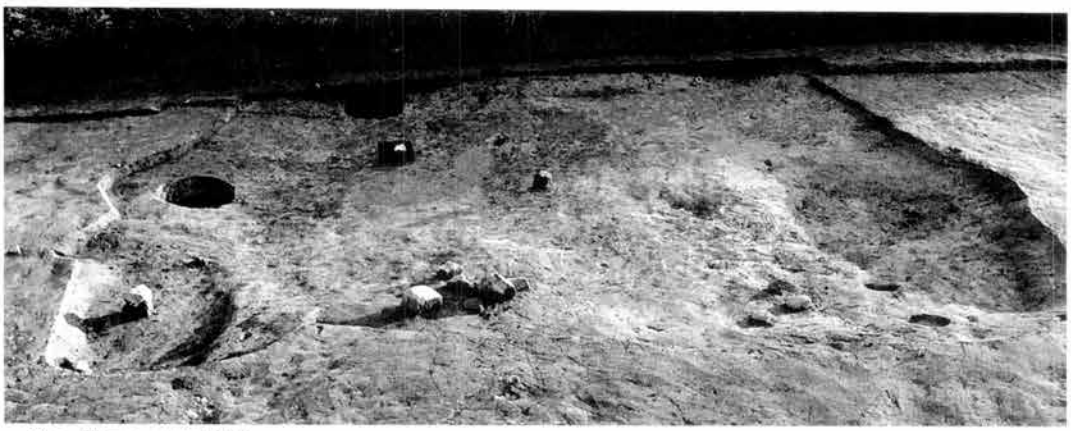
第1号竪穴北壁土層堆積状況

第1号竪穴砥石(40－15)出土状況

第1号竪穴木製錘具(41－19)出土状況

第1号竪穴漆器椀(41－17)出土状況

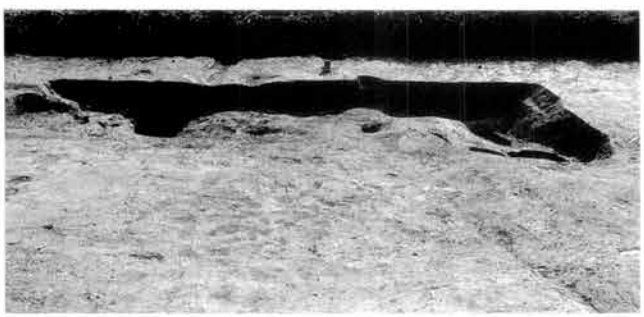
第1号竪穴漆器椀(41－18)出土状況



第2号竪穴完掘状況

第3号竪穴完掘状況

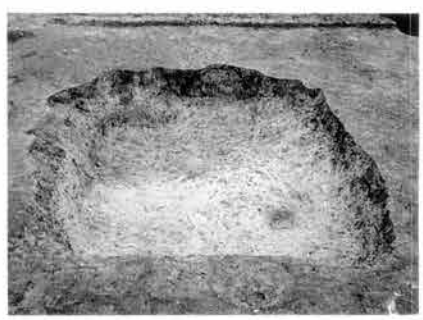
第2号竪穴青白磁梅瓶出土状況



第4号竪穴完掘状況

第2号竪穴青磁椀(41—1)出土状況

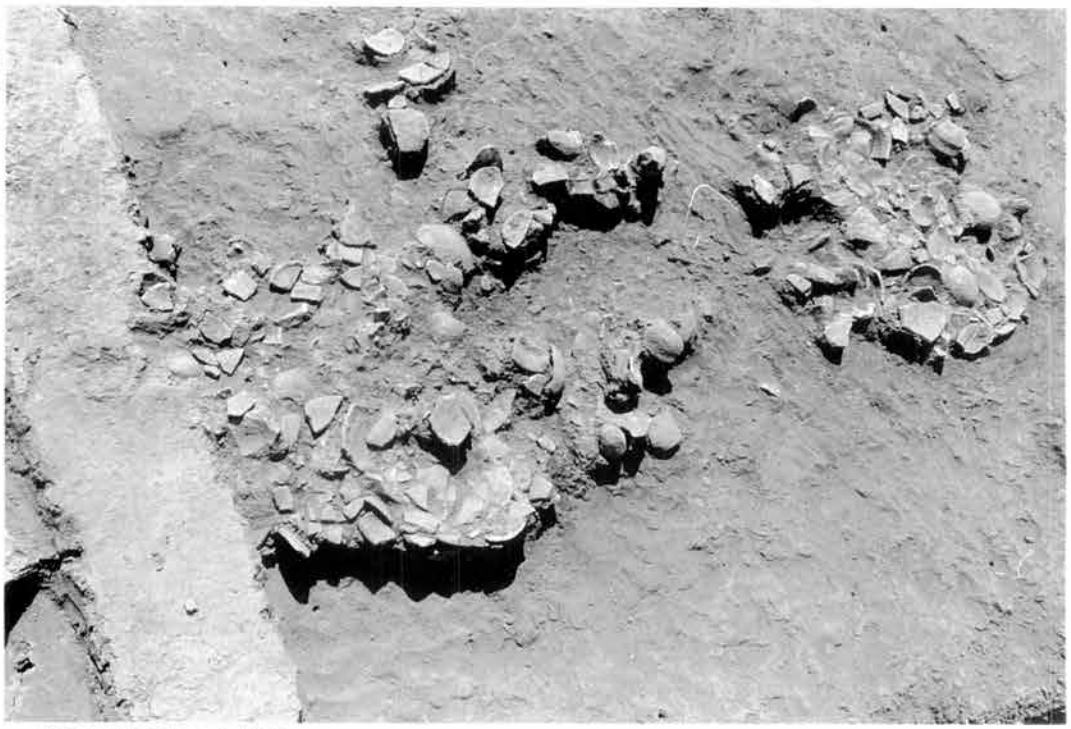
第6号竪穴完掘状況



第5号竪穴完掘状況

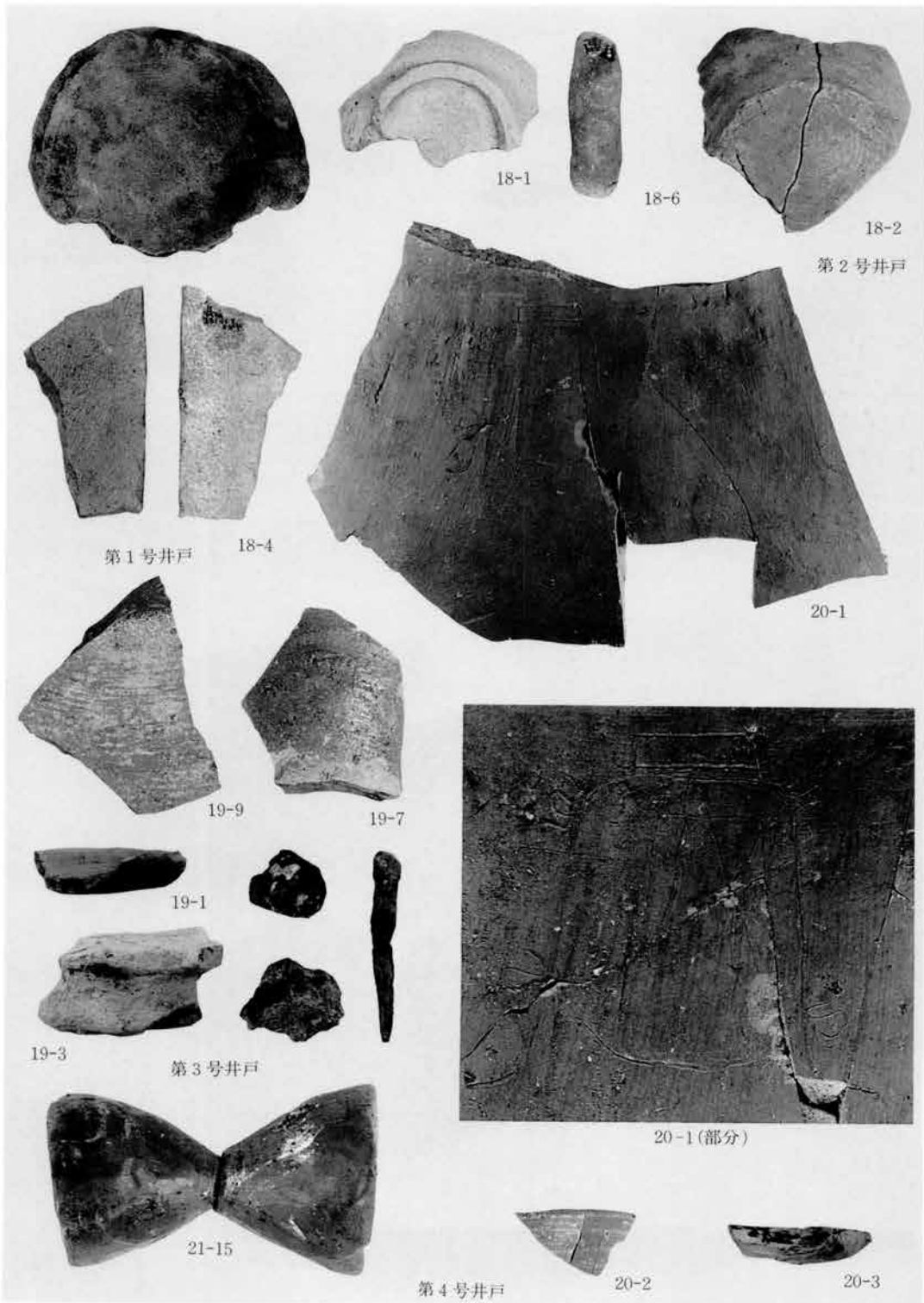
第1号土坑遺物出土状況

第5号土坑完掘状況



第1号溝遺物出土状況

第7号溝遺物出土状況

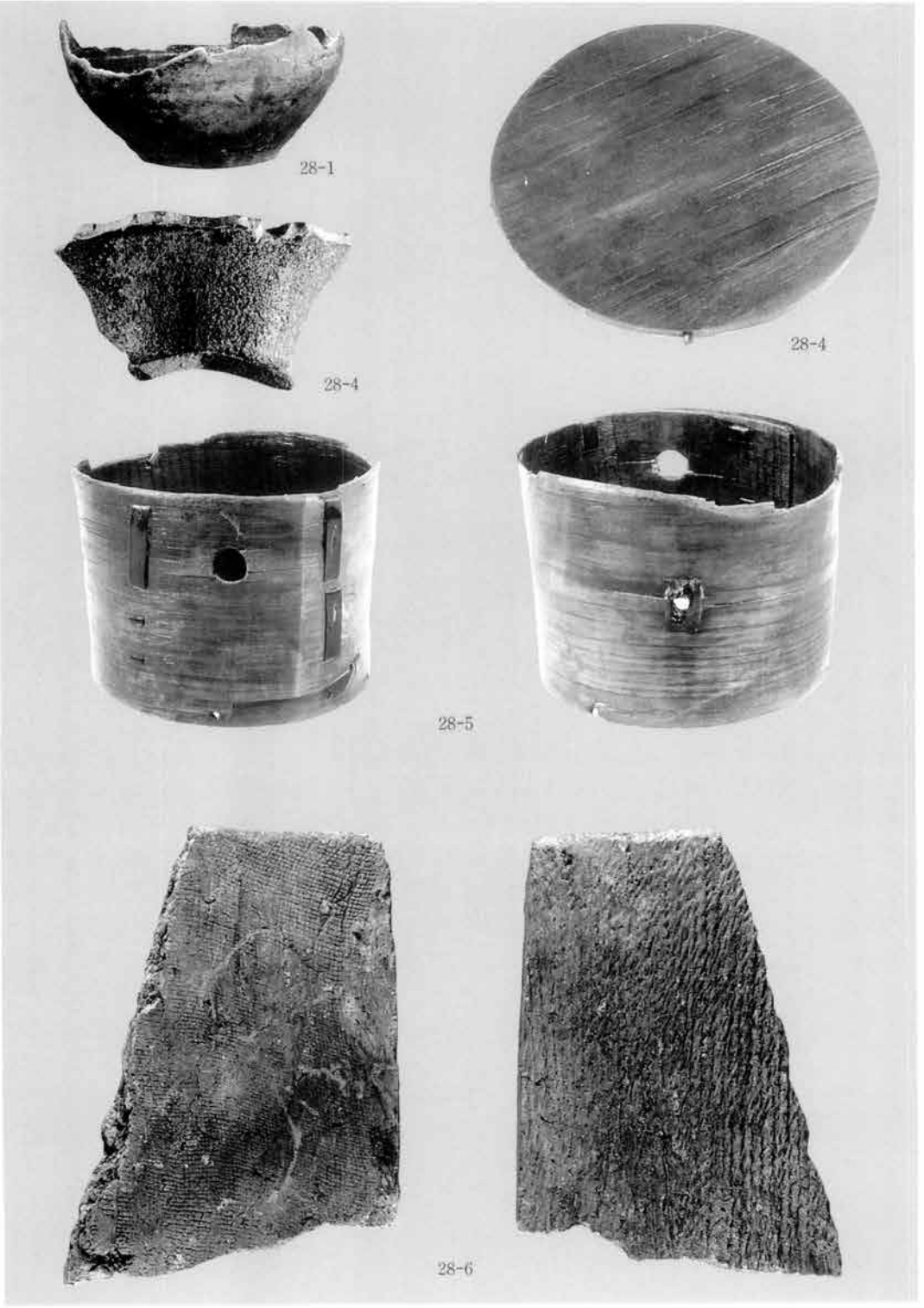

18-1
18-6
18-2
第2号井戸
第1号井戸
18-4
20-1
19-9
19-7
19-1
19-3
第3号井戸
20-1(部分)
21-15
第4号井戸
20-2
20-3

第1～4号井戸出土遺物

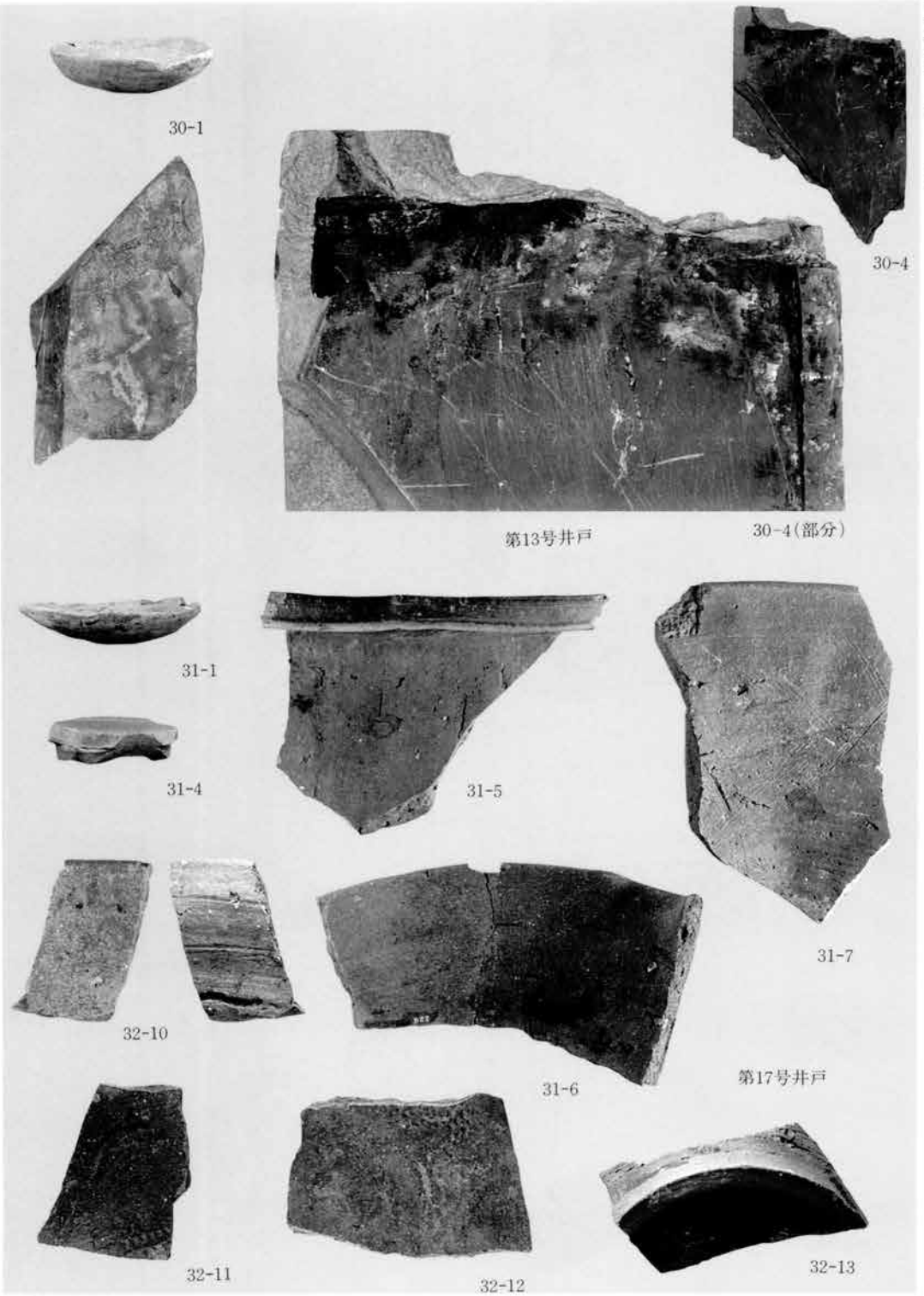
23-12
23-2
23-7
23-4
23-13
23-11
23-6
23-10
23-18
24-26
23-1
24-27
23-20
24-28
24-24
24-33

第5号井戸出土遺物

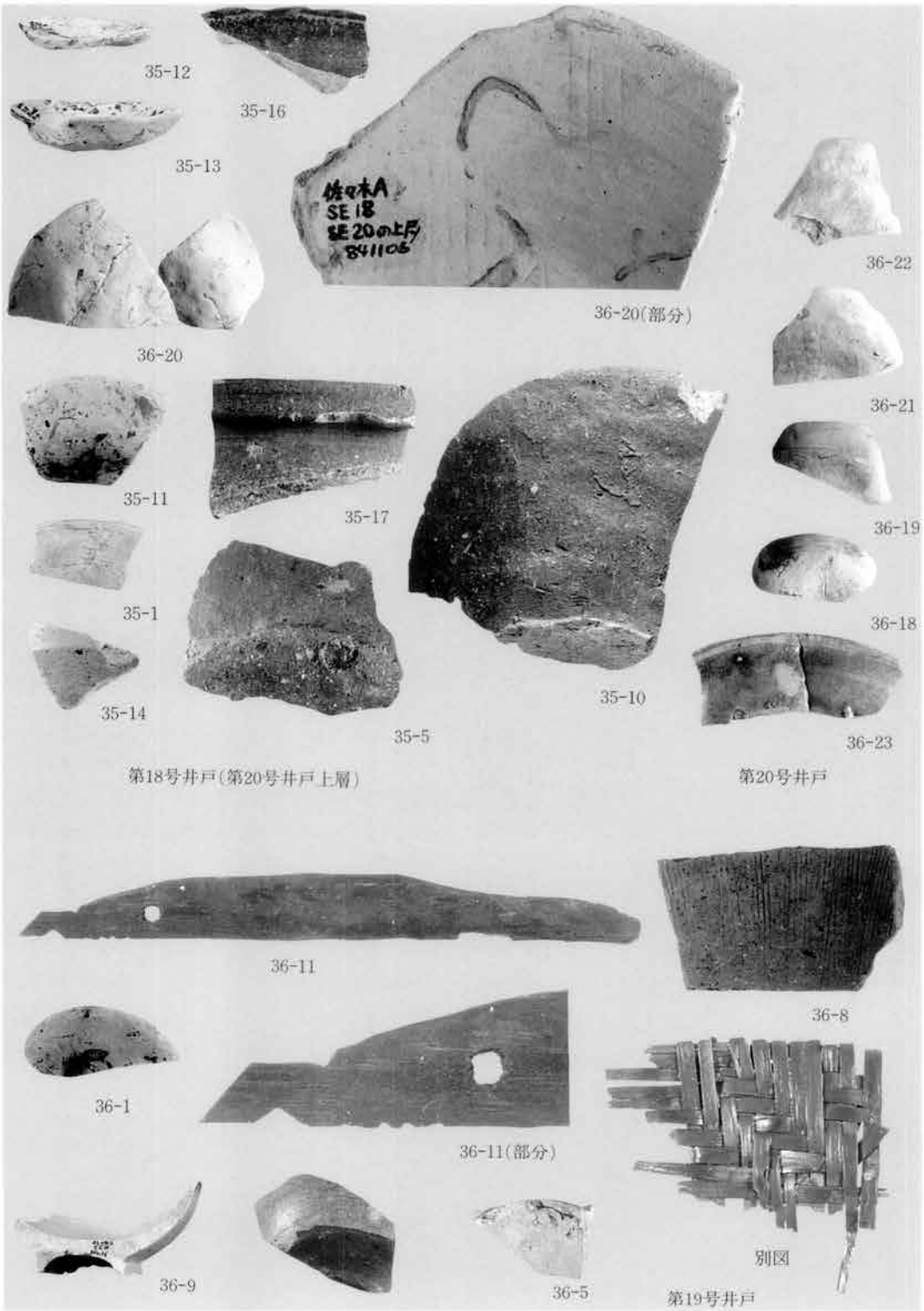
第6・10～12・15号井戸出土遺物



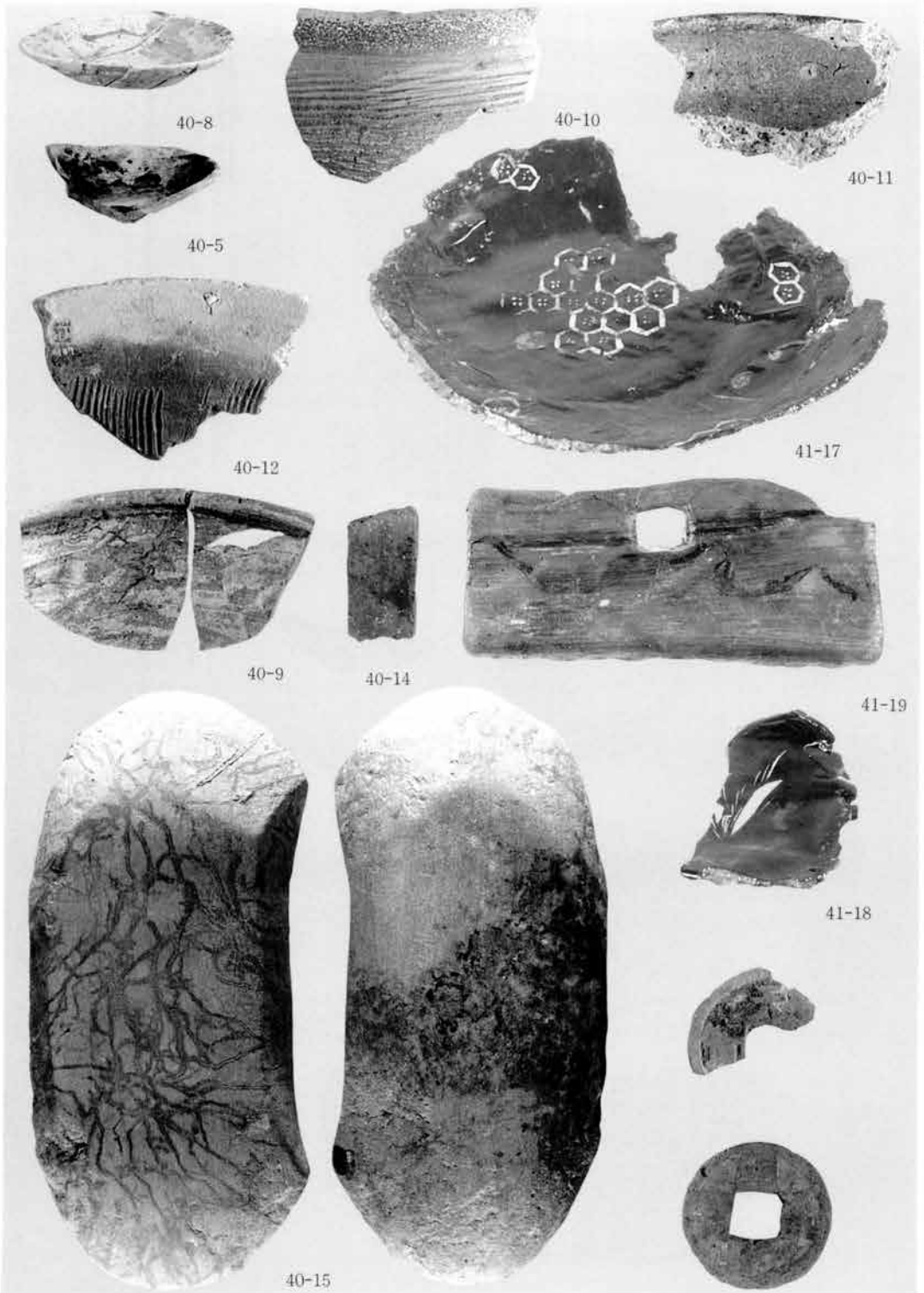
第8号井戸出土遺物



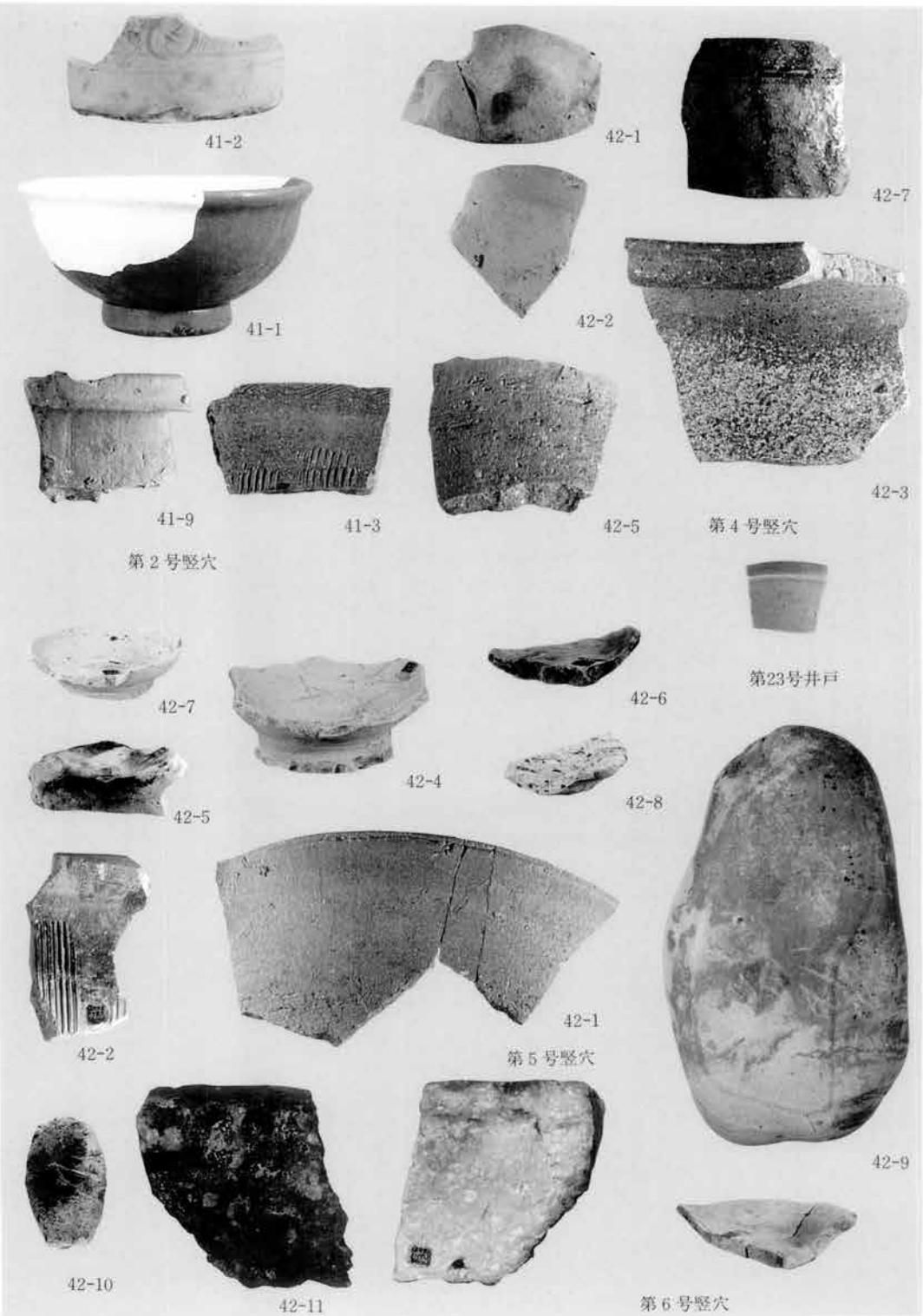
第13・17号井戸出土遺物



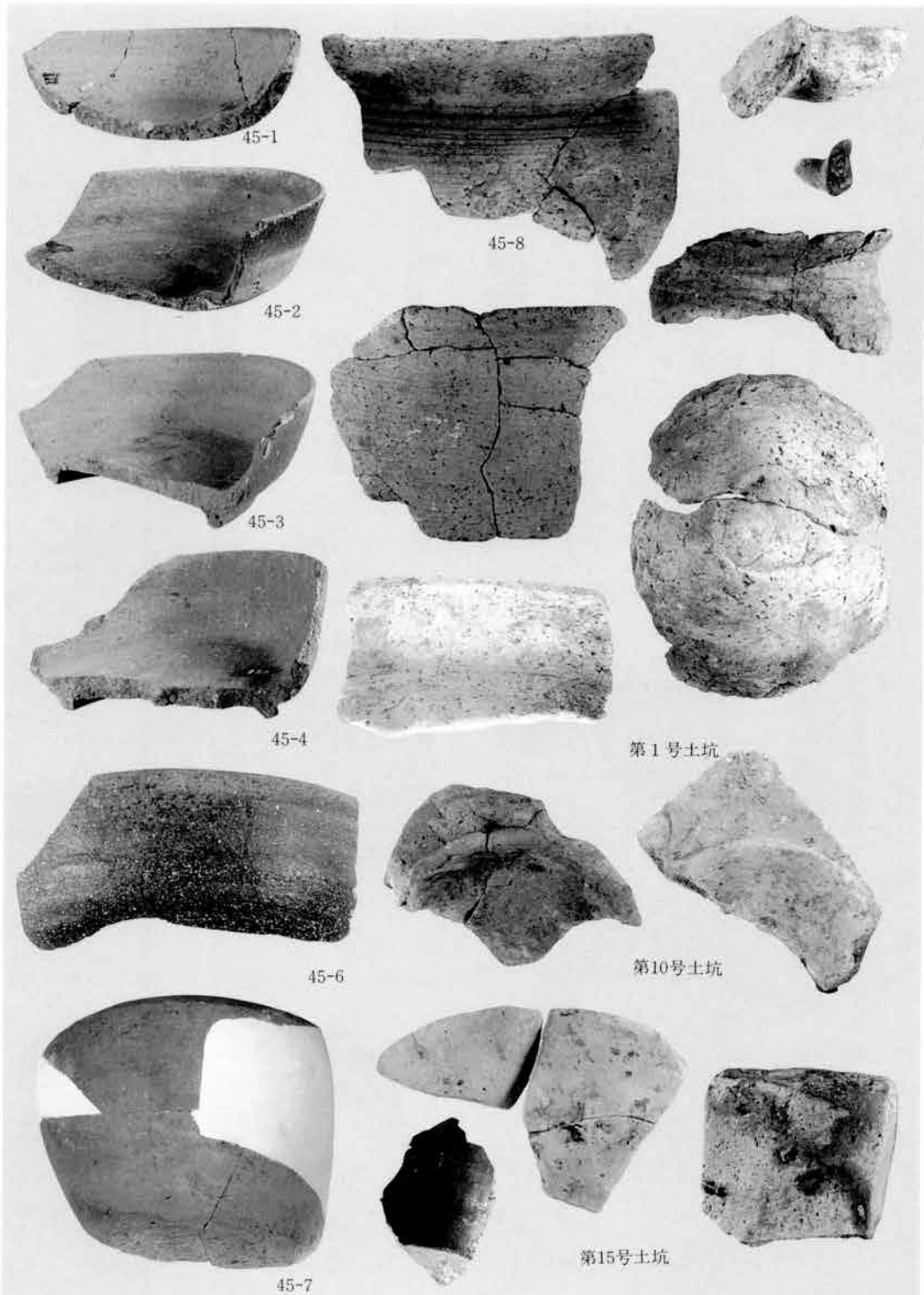
第18～20号井戸出土遺物



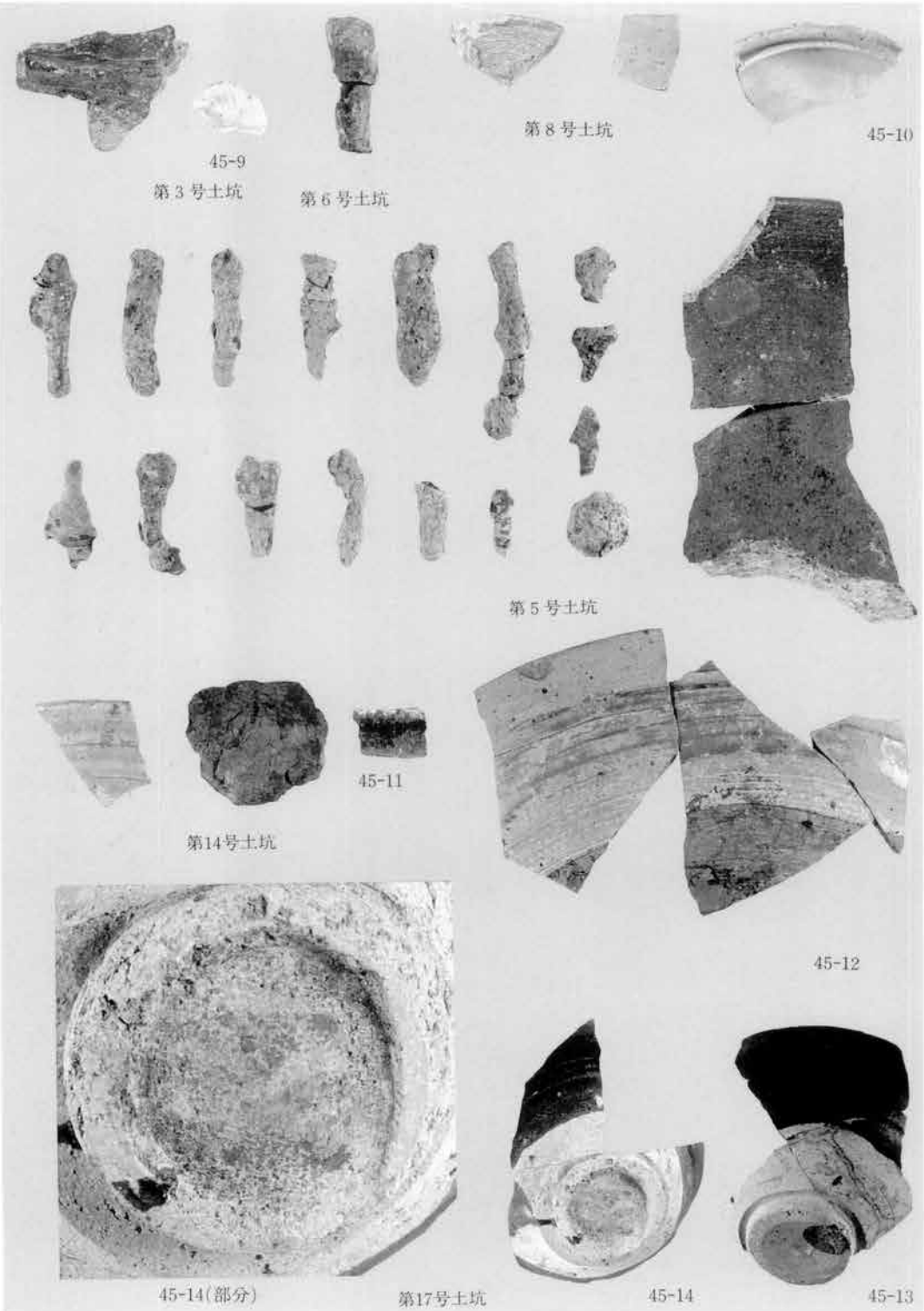
第1号竪穴出土遺物


41-2
42-1
42-7
41-1
42-2
42-3
41-9
41-3
42-5
第4号竪穴
第2号竪穴
第23号井戸
42-7
42-6
42-4
42-5
42-8
42-2
42-1
第5号竪穴
42-9
42-10
42-11
第6号竪穴

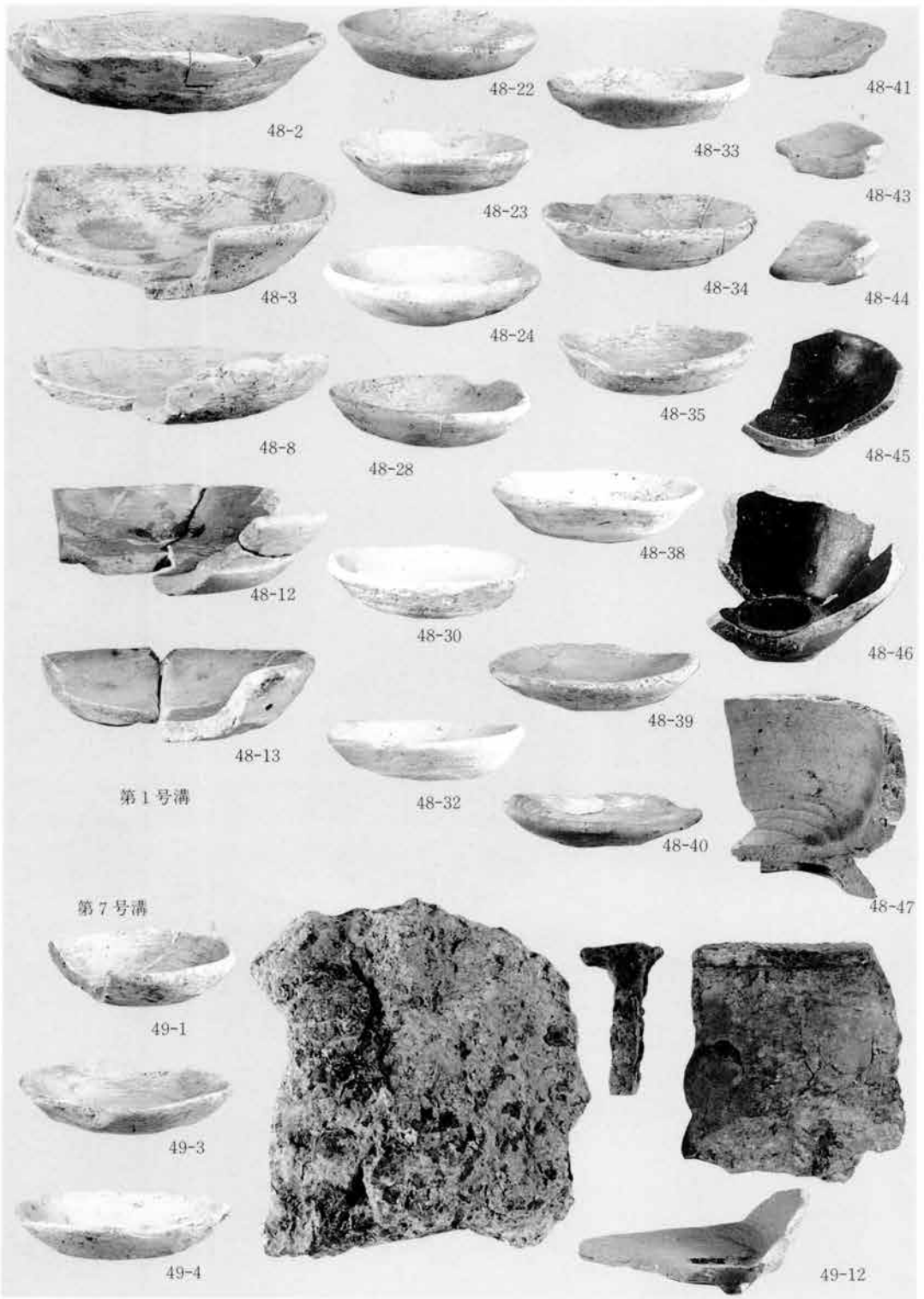
第2～6号竪穴出土遺物



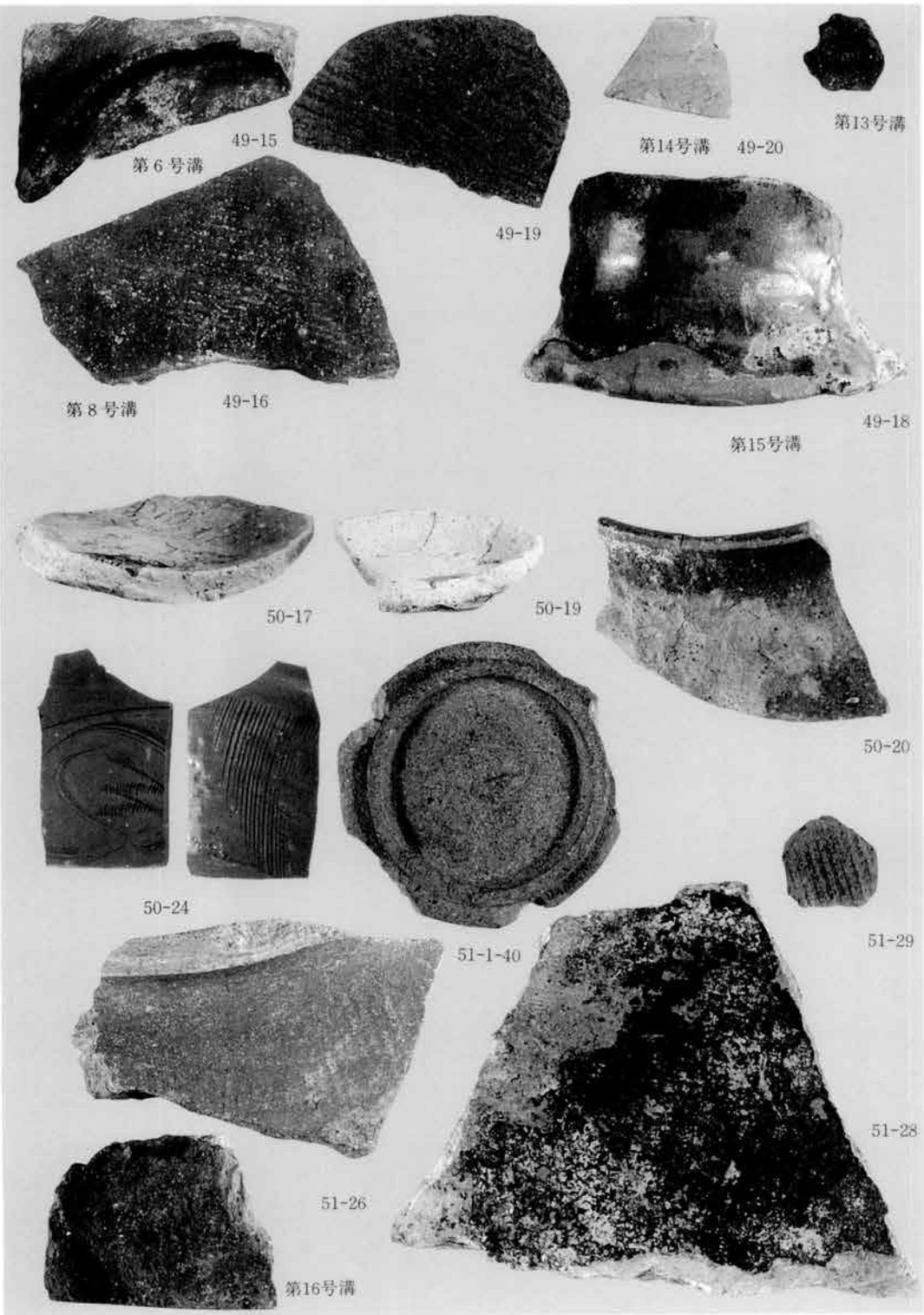
第1・10・15号土坑出土遺物



第3・5・6・8・14・17号土坑出土遺物

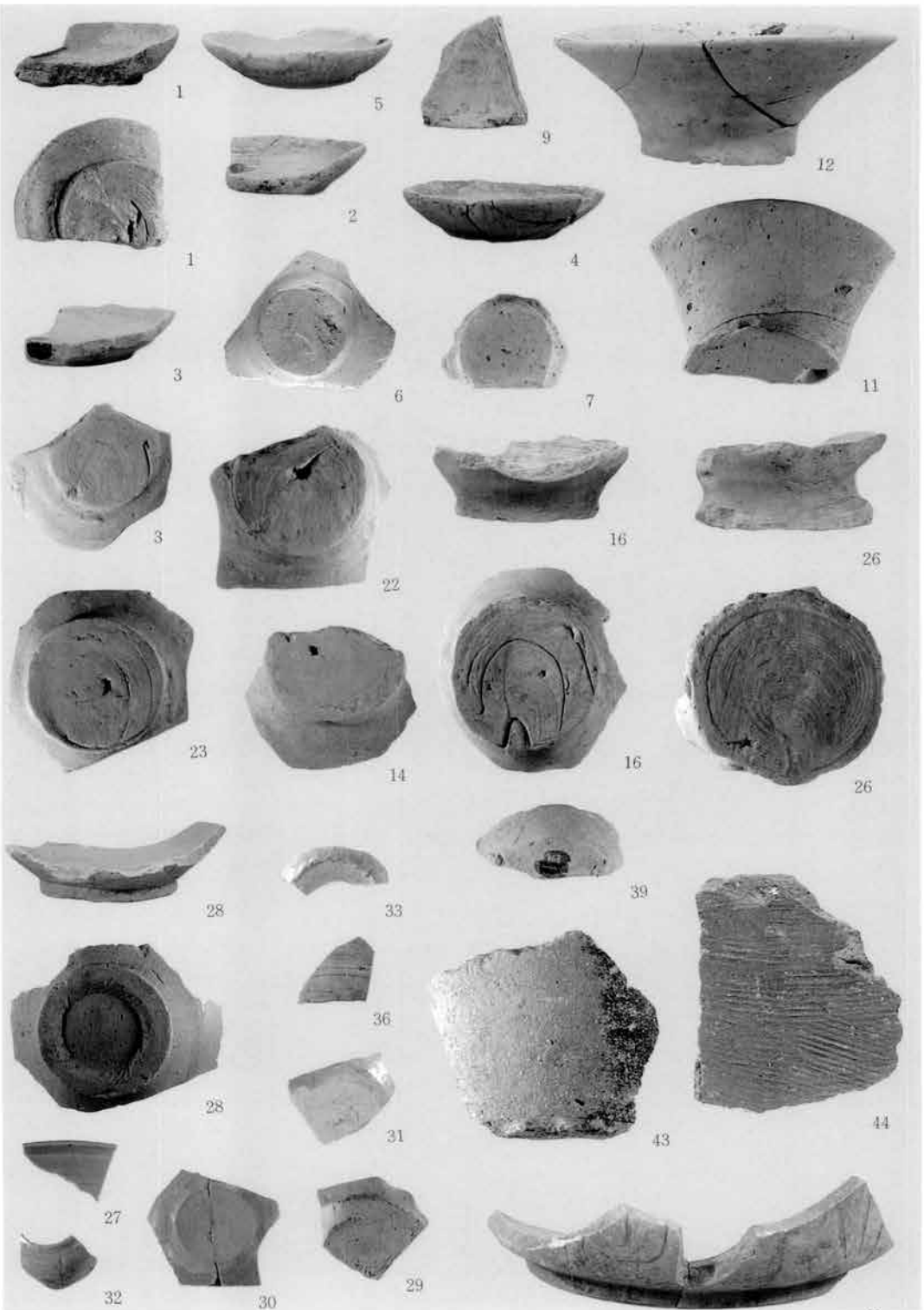

48-2
48-22
48-41
48-33
48-23
48-43
48-3
48-34
48-24
48-44
48-35
48-8
48-28
48-45
48-38
48-12
48-30
48-46
48-39
48-13
48-32
48-40
48-47
第1号溝
第7号溝
49-1
49-3
49-4
49-12

第1・7号溝出土遺物

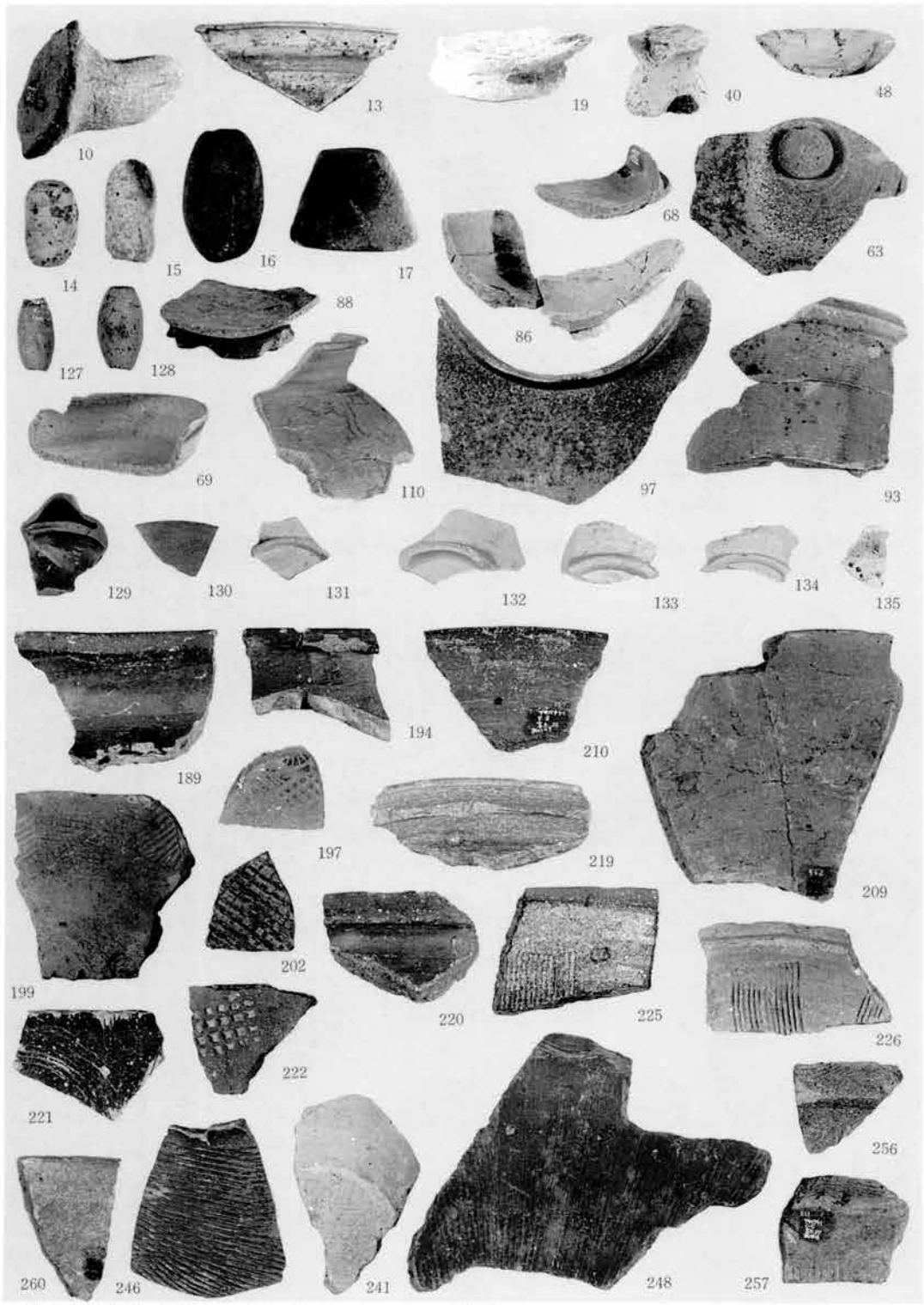


第6・8・13～16号溝出土遺物

第11号溝・SX-8・Pit 83・Pit 96出土遺物

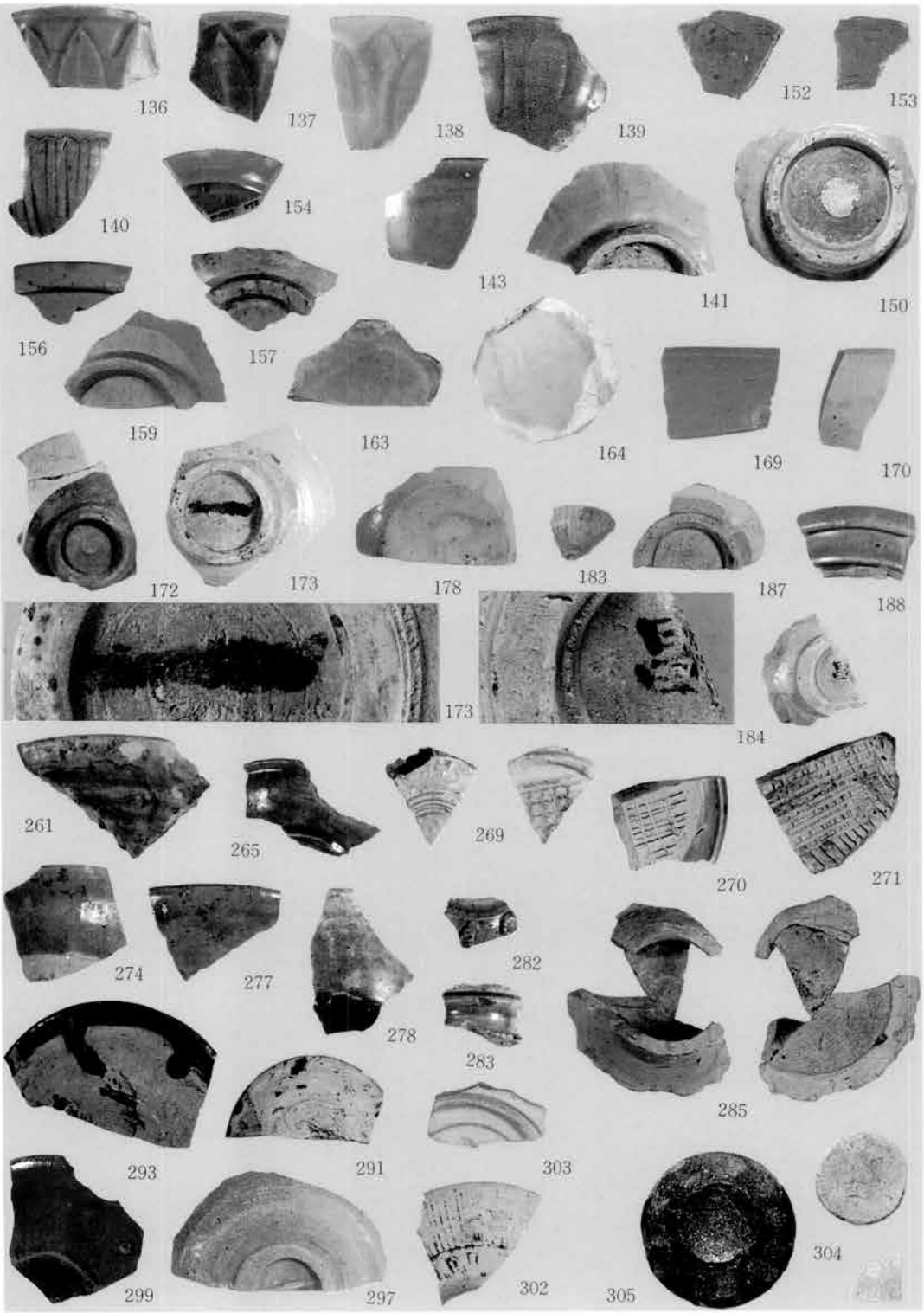


A－6・7区調査区外出土遺物（第55・56図）



第1次調査包含層出土遺物（第57～63・65～69図）

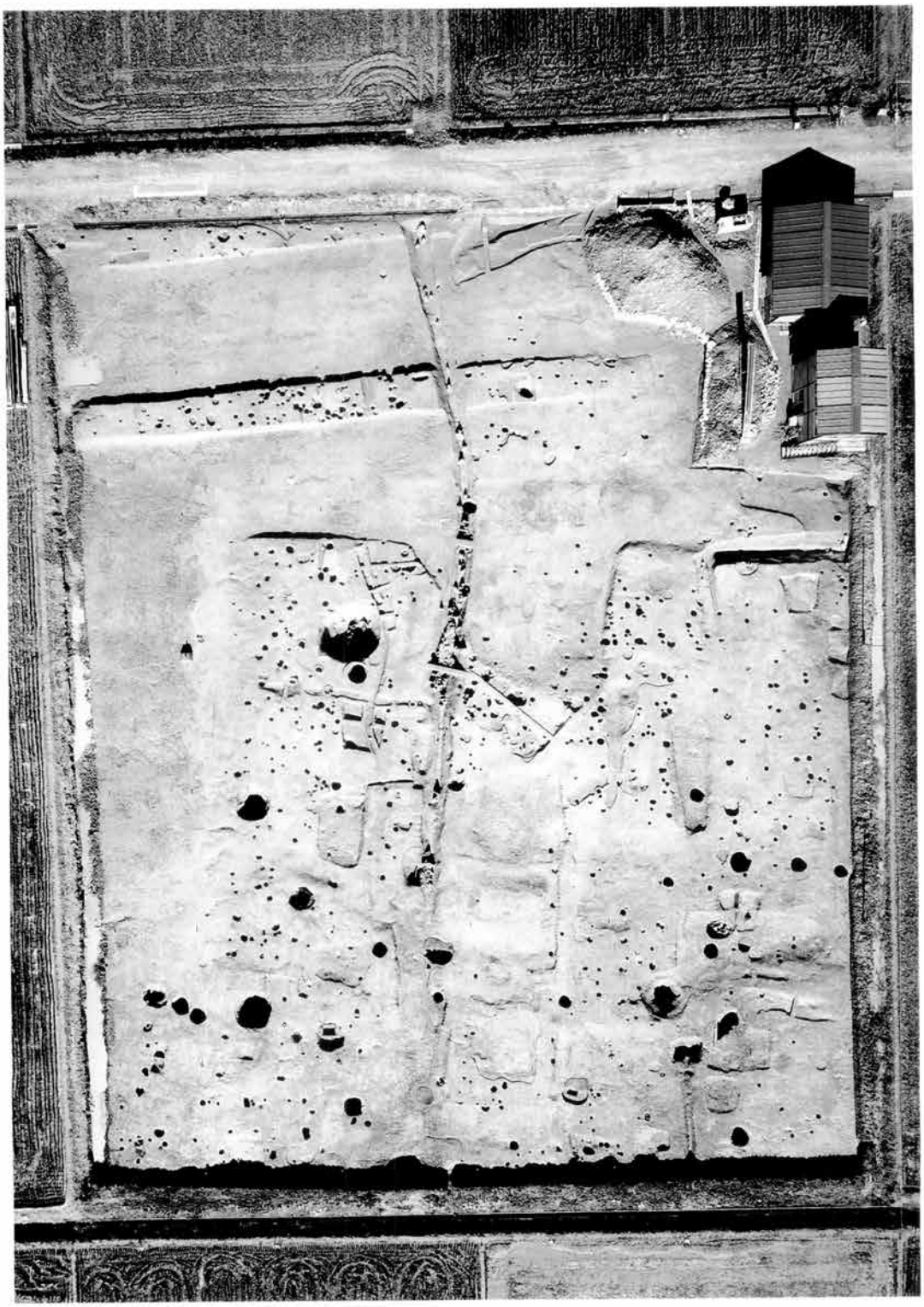
図版36 遺物



第1次調査包含層出土遺物（第63・64・70・71図）

第１次調査包含層・分布調査出土遺物（第32・73図）

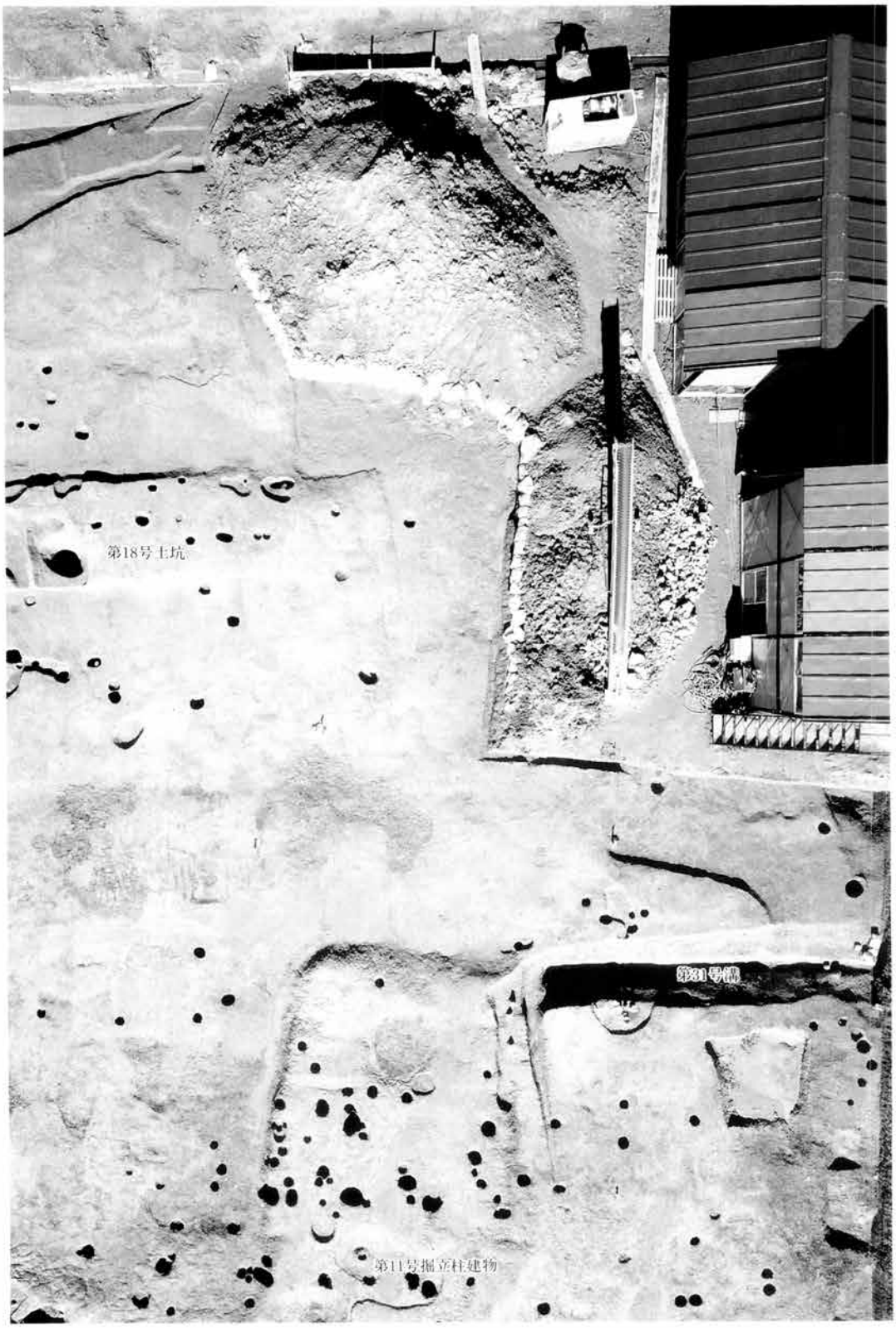
図版38　空中写真



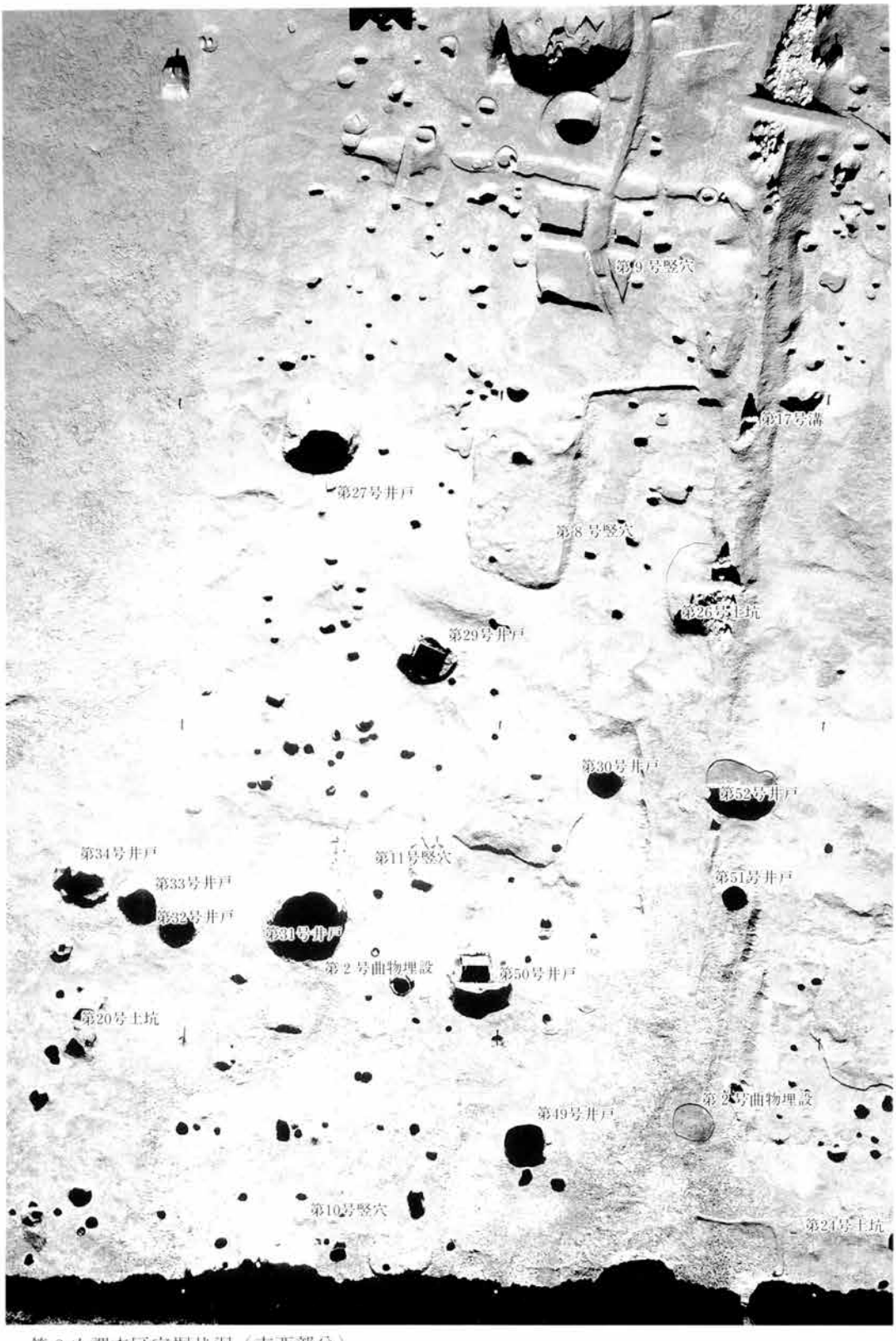
第2次調査区完掘状況

第2次調査区完掘状況（北西部分）

図版40　空中写真



第２次調査区完掘状況（北東部分）



第2次調査区完掘状況（南西部分）

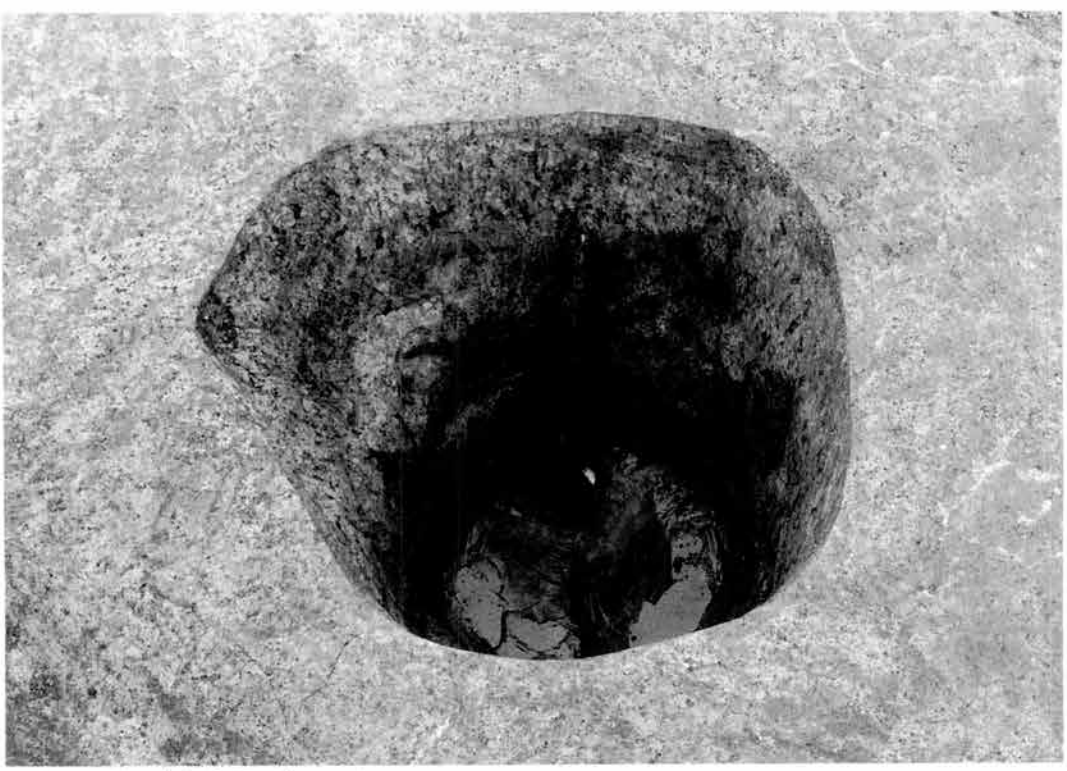
図版42 空中写真

第2次調査区完掘状況（南東部分）

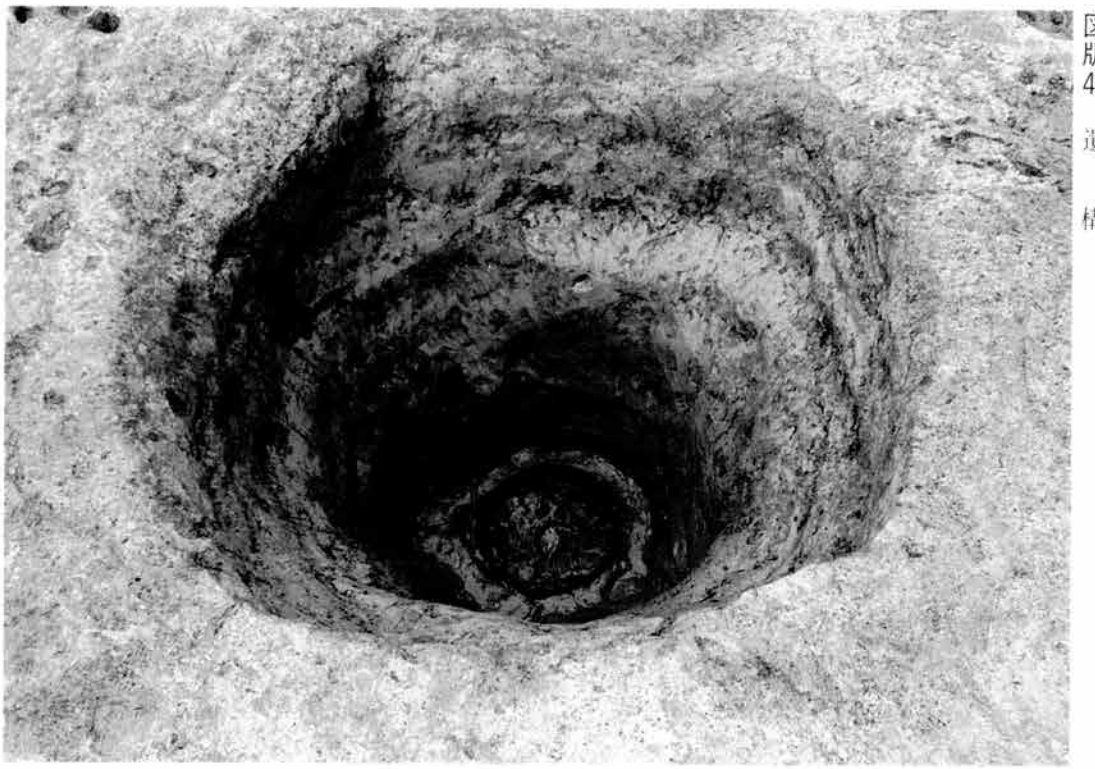
農道部分と第１残丘の完掘状況（東から）

第２残丘完掘状況（東から）

第７号掘立柱完掘状況（北から）

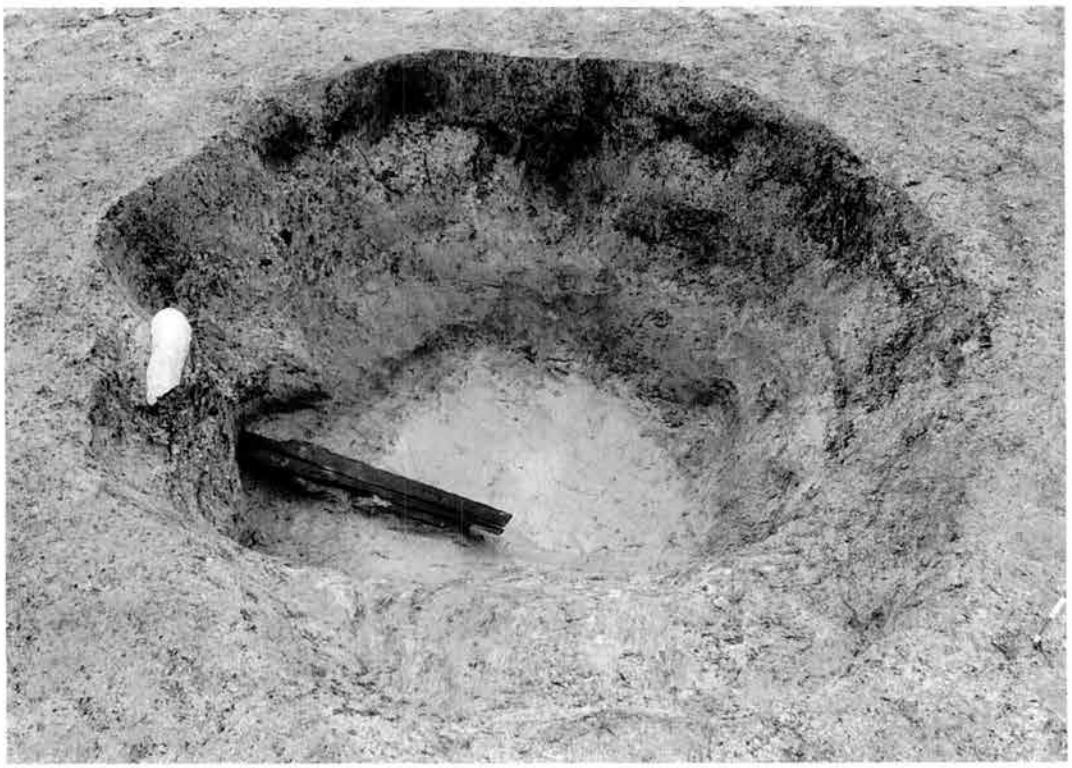


第30号井戸完掘状況（南から）

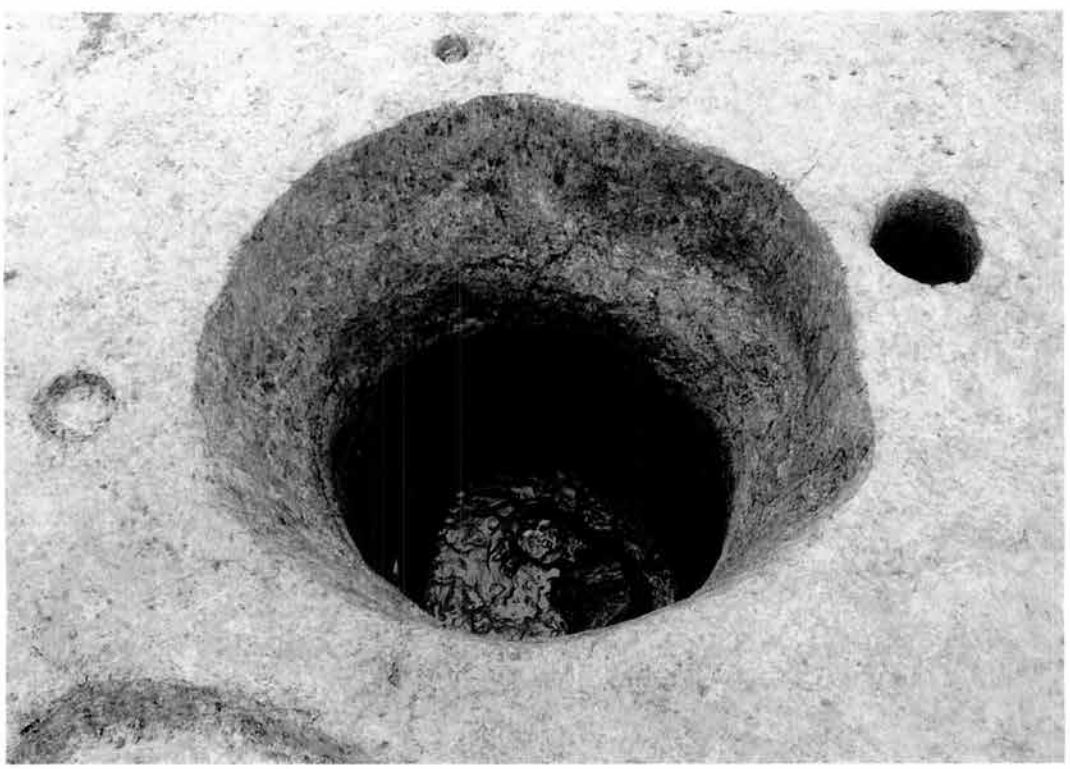


第31号井戸完掘状況（南から）

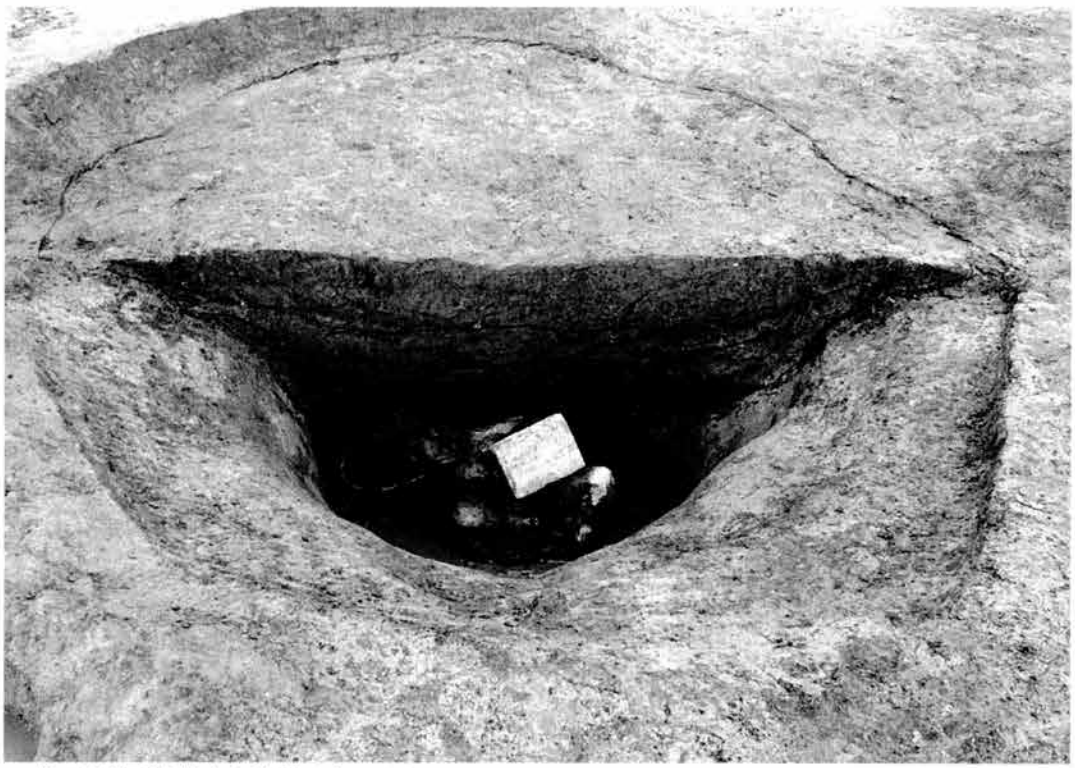
第33号井戸完掘状況（南から）



第34号井戸完掘状況（南から）



第38号井戸完掘状況（南から）

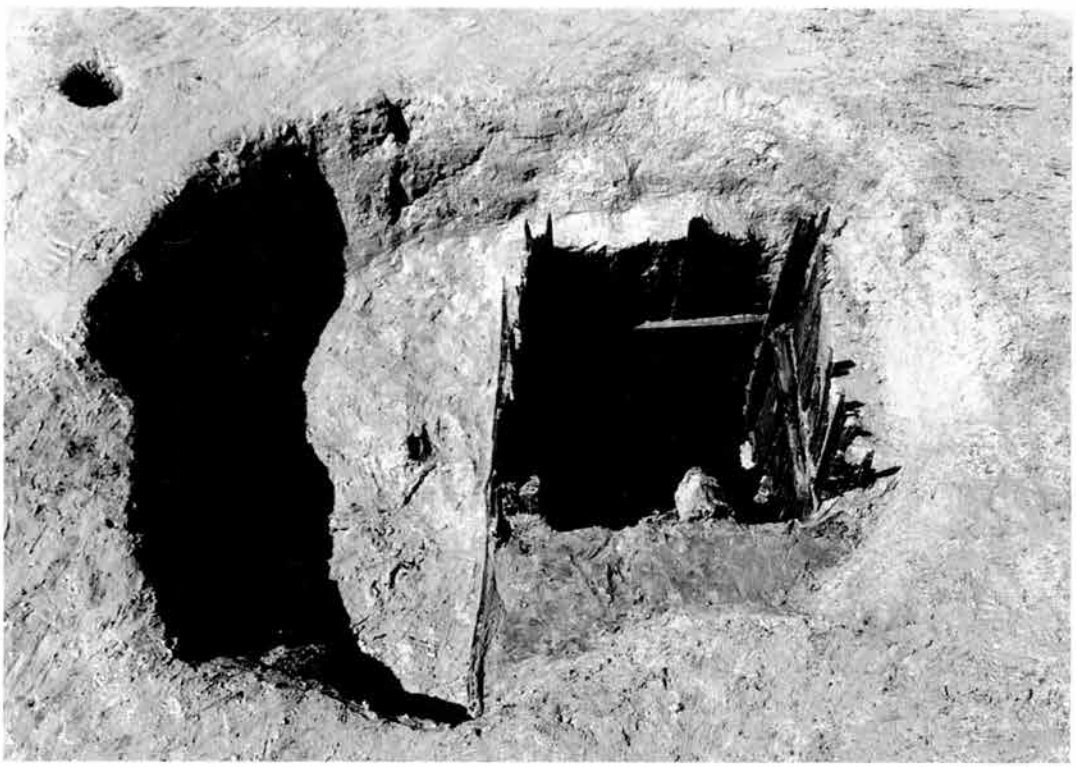


第40号井戸遺物出土状況（南から）

第42号井戸遺物出土状況（西から）

第48号井戸側状況（南から）

第54号井戸側状況（北から）



第50号井戸完掘状況（東から）

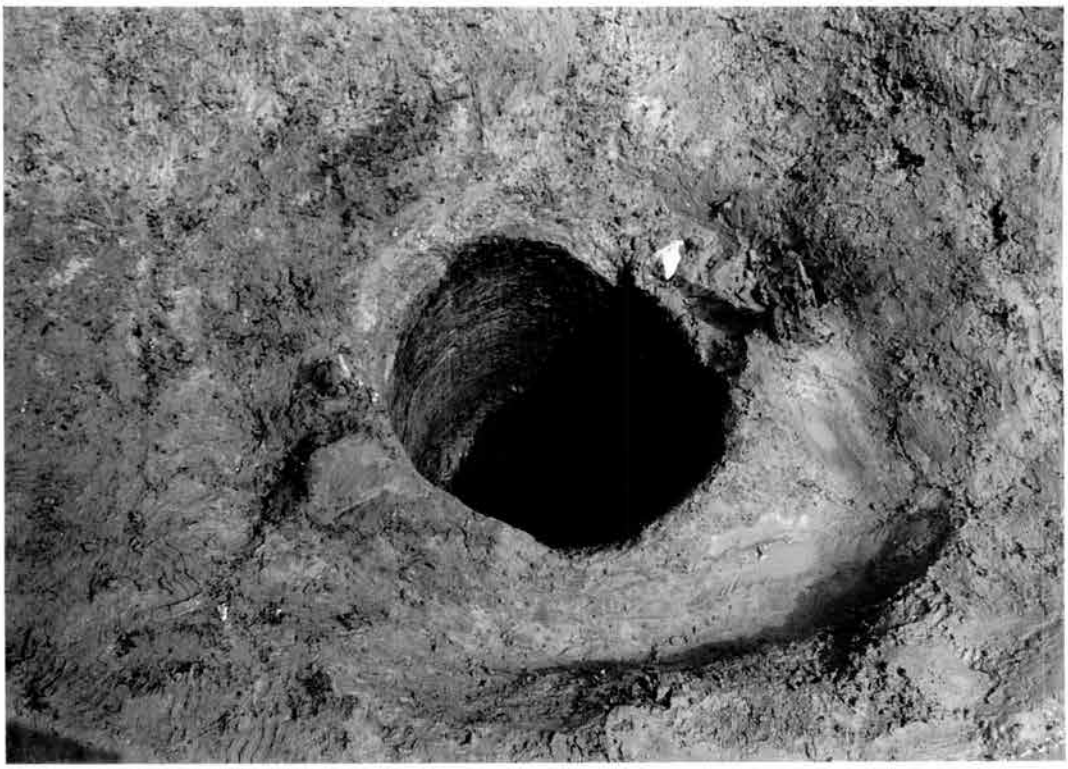
第50号井戸側部分（西から）

第9号竪穴完掘状況（南から）

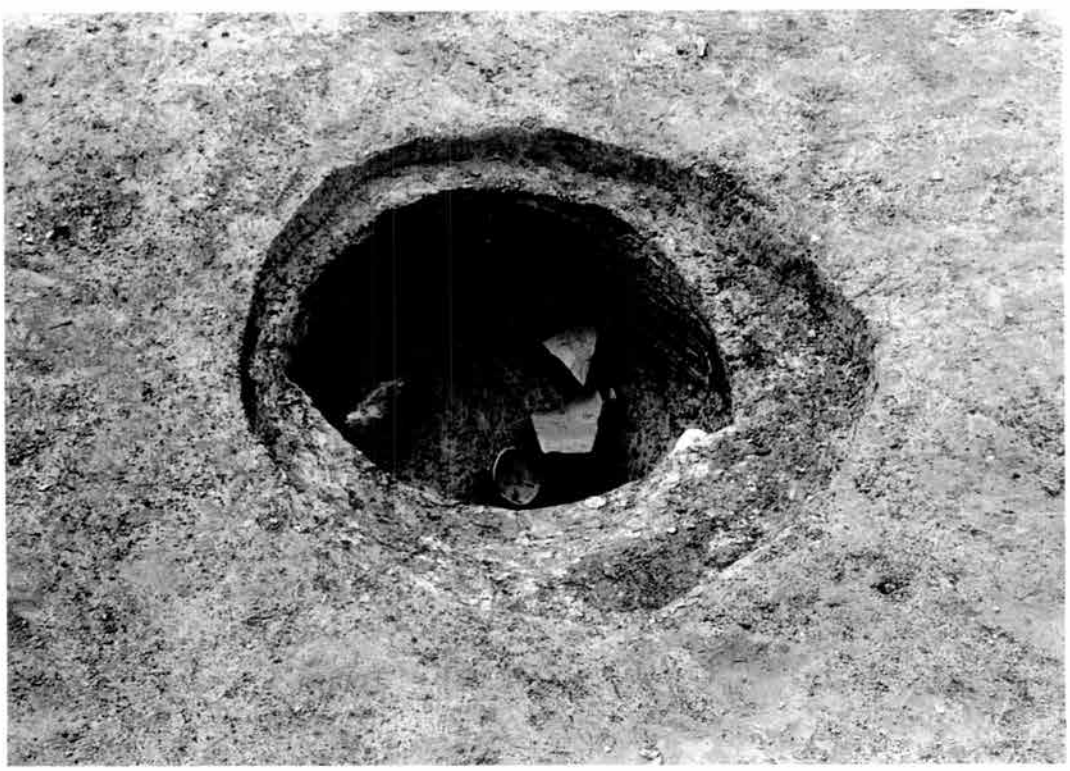
第10号竪穴完掘状況（西から）

第８号竪穴完掘状況（南から）

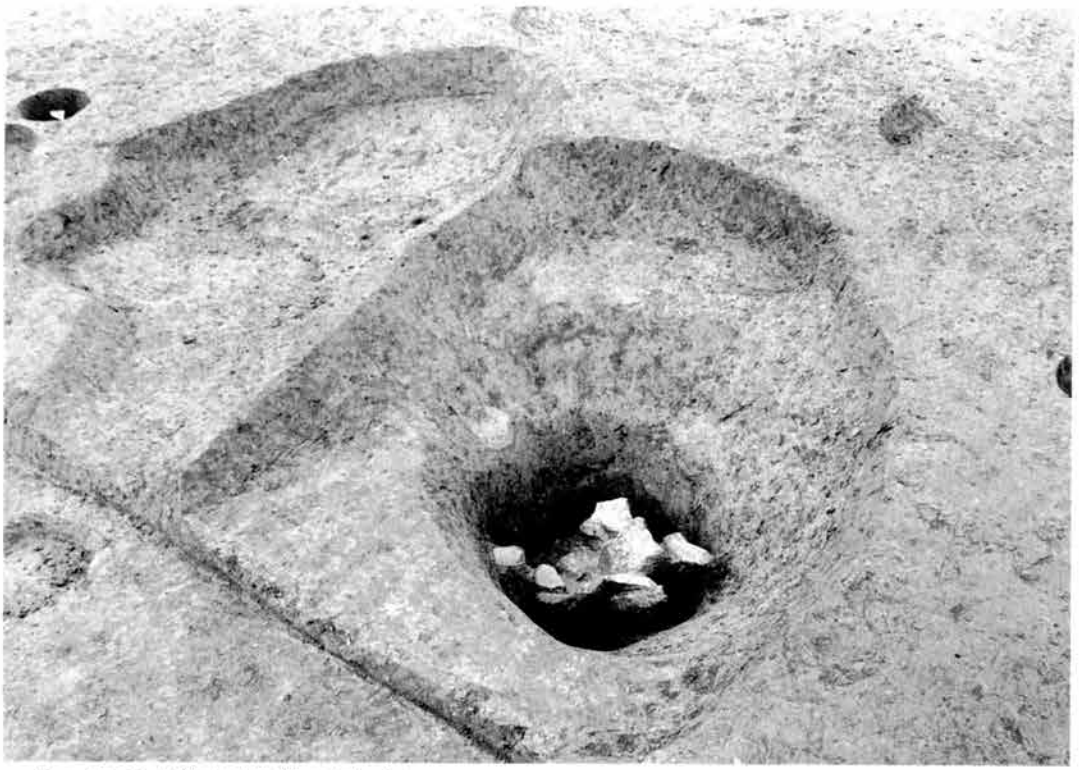
第26号溝完掘状況（東から）



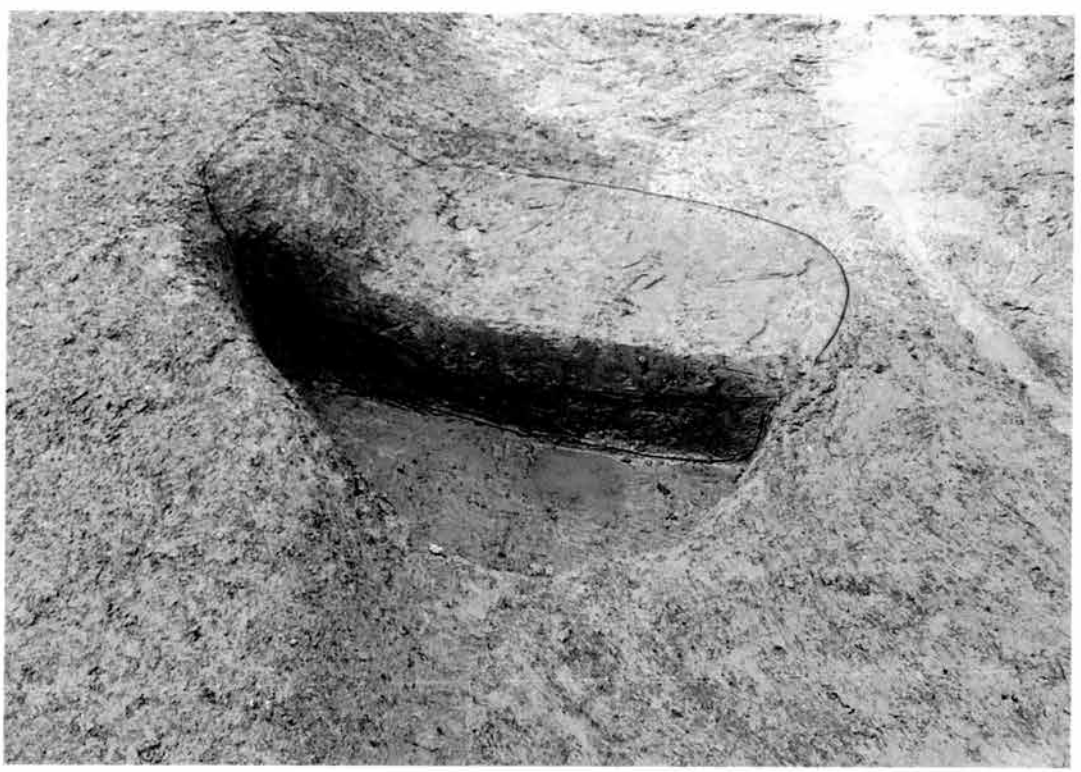
第１号曲物埋設遺構完掘状況（西から）



第２号曲物埋設遺構遺物出土状況（西から）



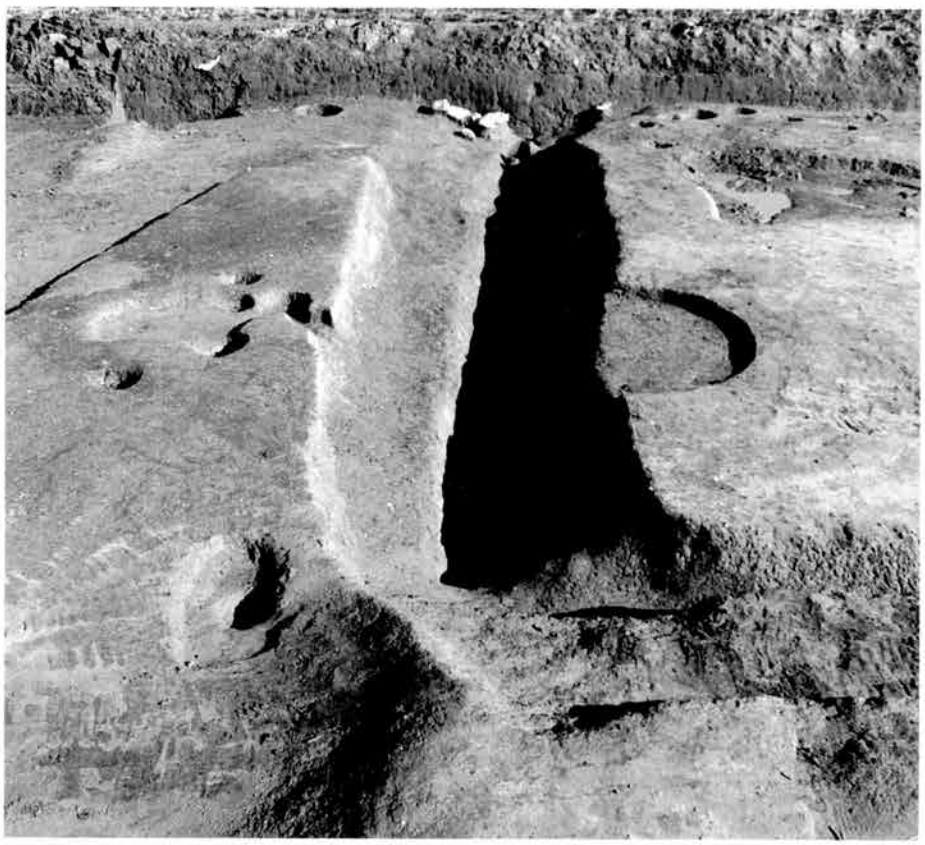
第18号土坑遺物出土状況（南から）



第25号土坑覆土堆積状況（南から）

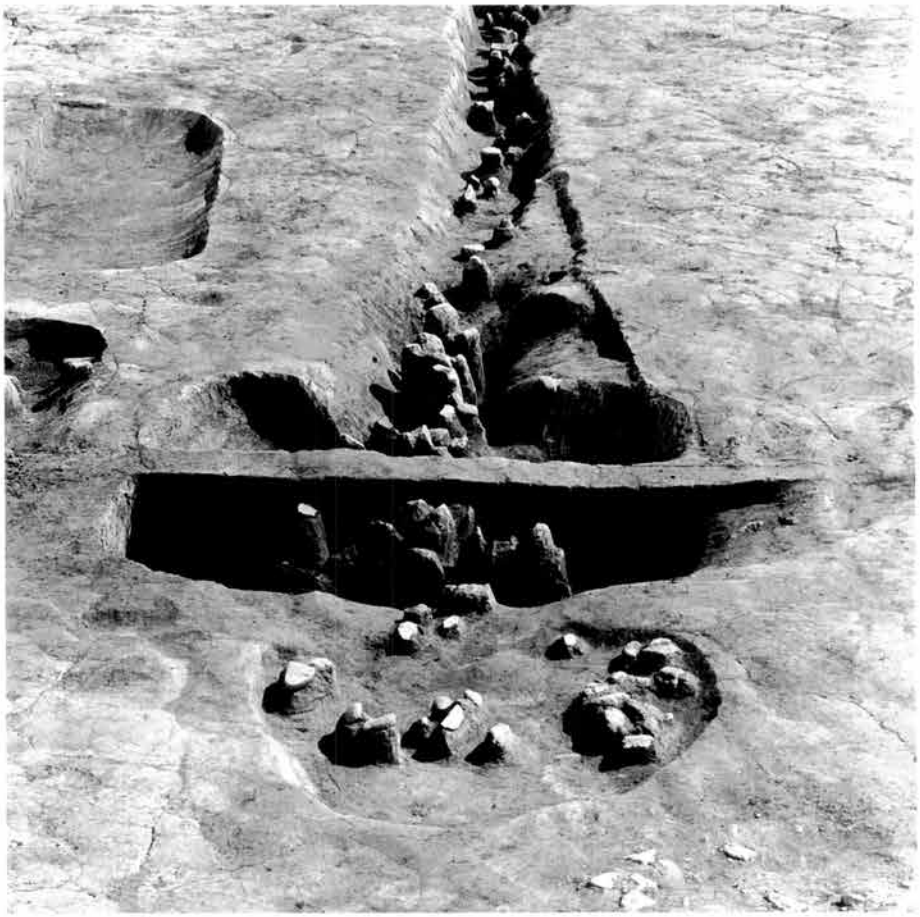
第28号土坑調査風景（西から）

第28号土坑遺物出土状況（西から）



第31号溝完掘状況（西から）

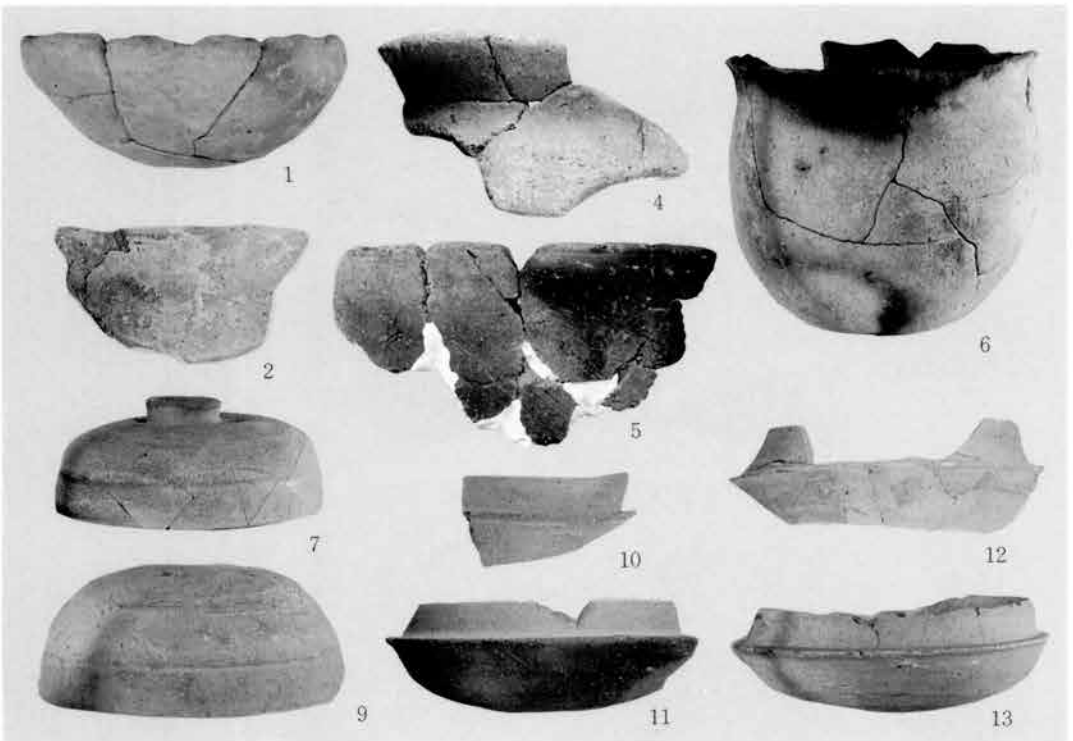
第17号溝覆土堆積状況（南から）

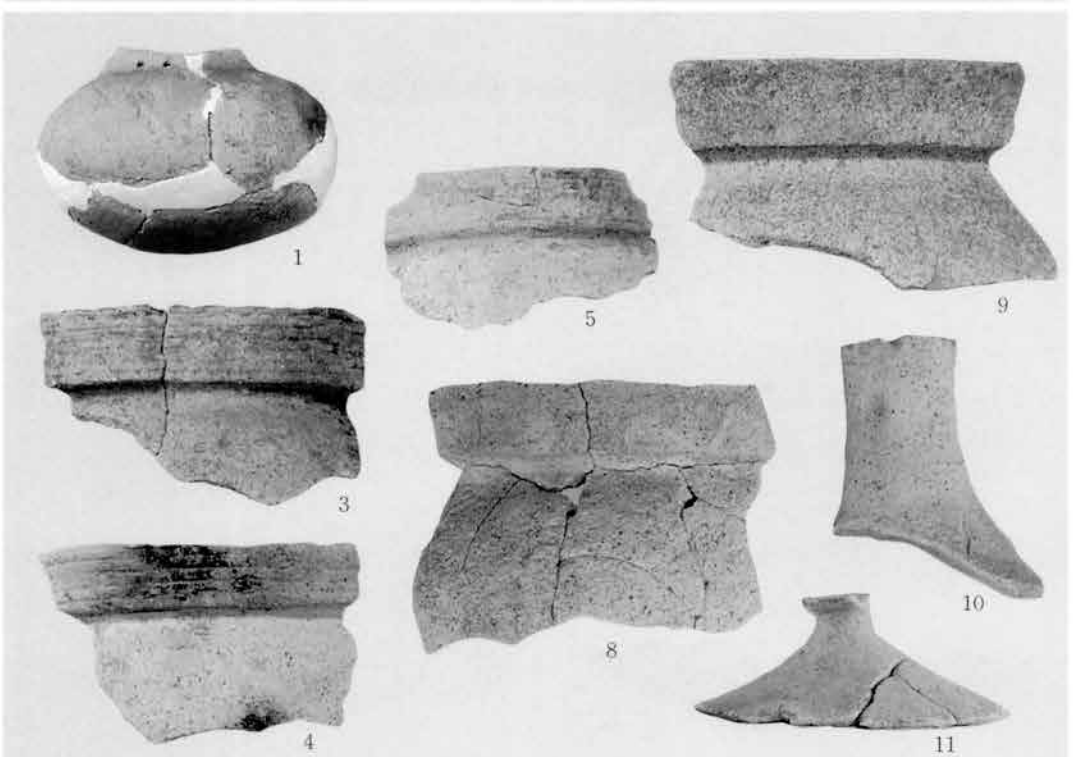


第28号溝遺物出土状況（北から）

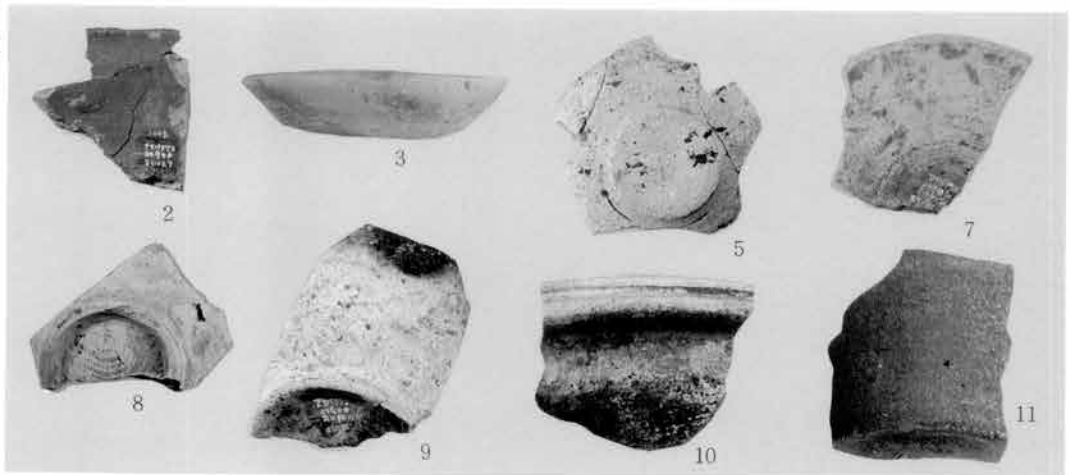
ピット内遺物出土状況（西から）

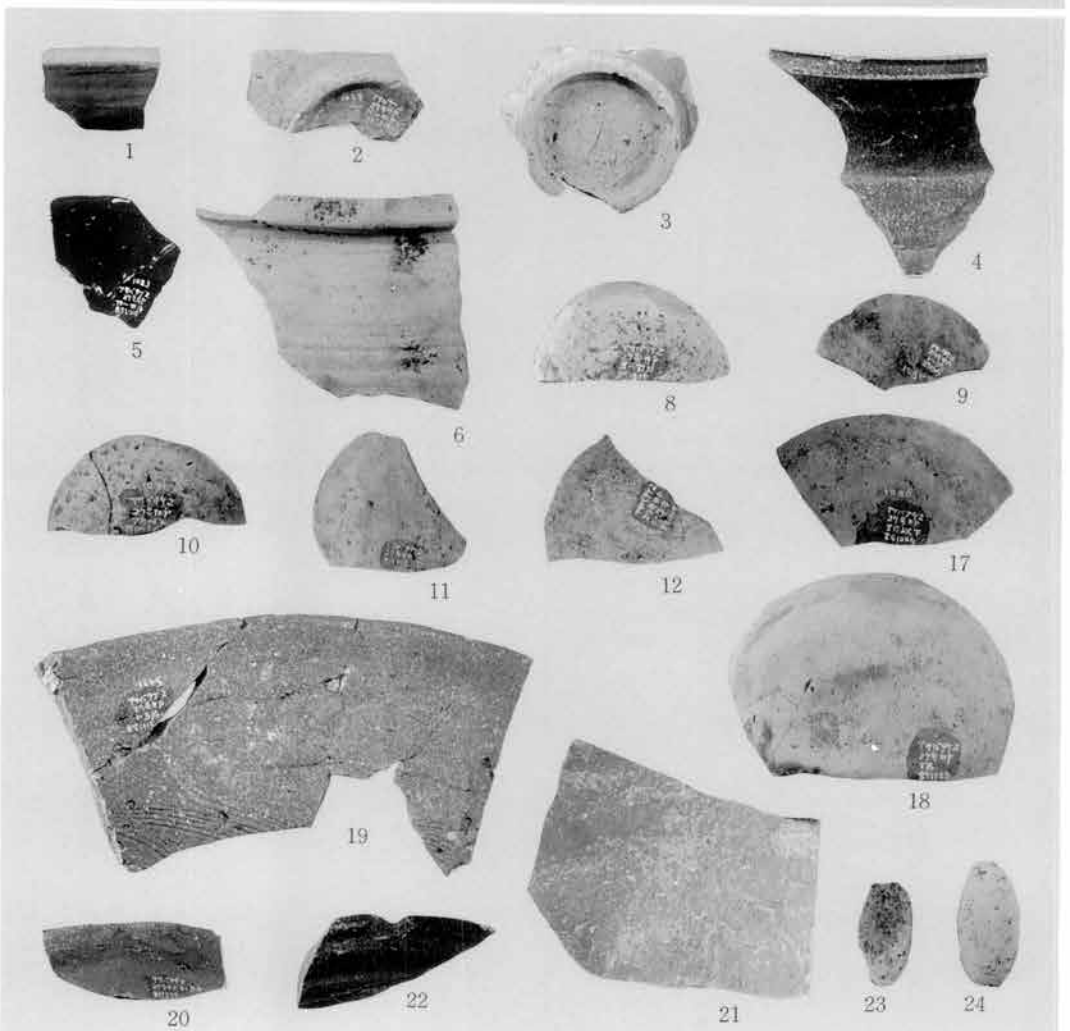
ピット内遺物出土状況（東から）



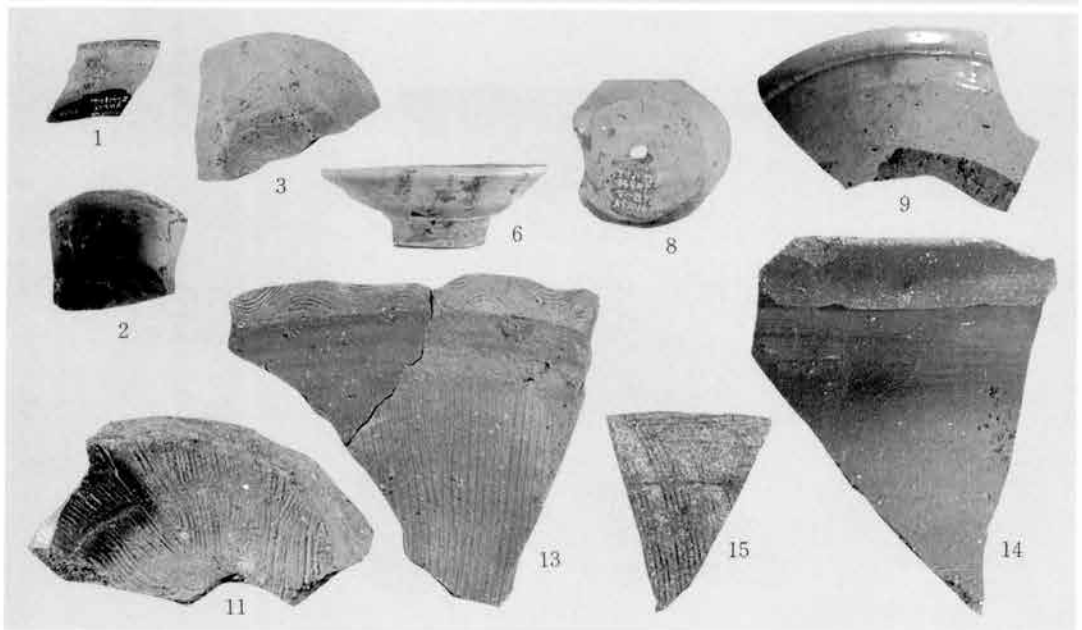


第1号竪穴住居跡出土土器、他（第101・119図）

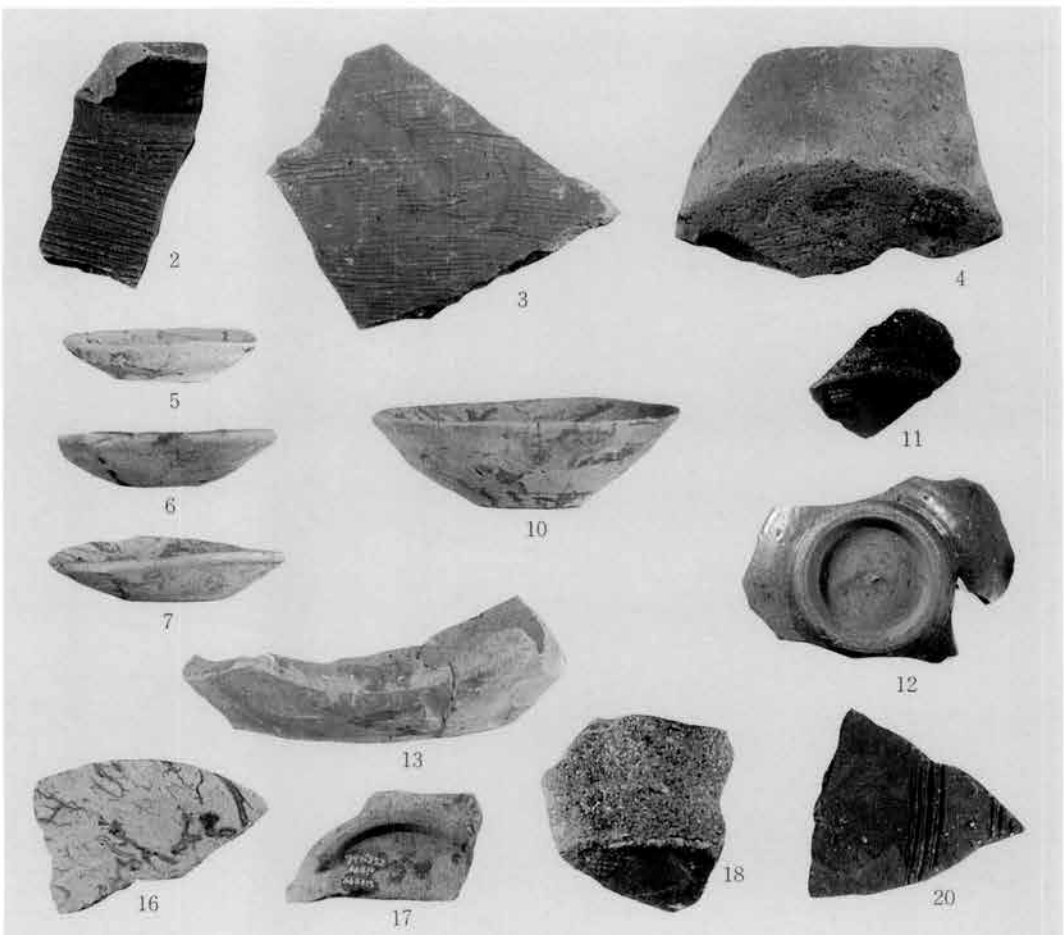




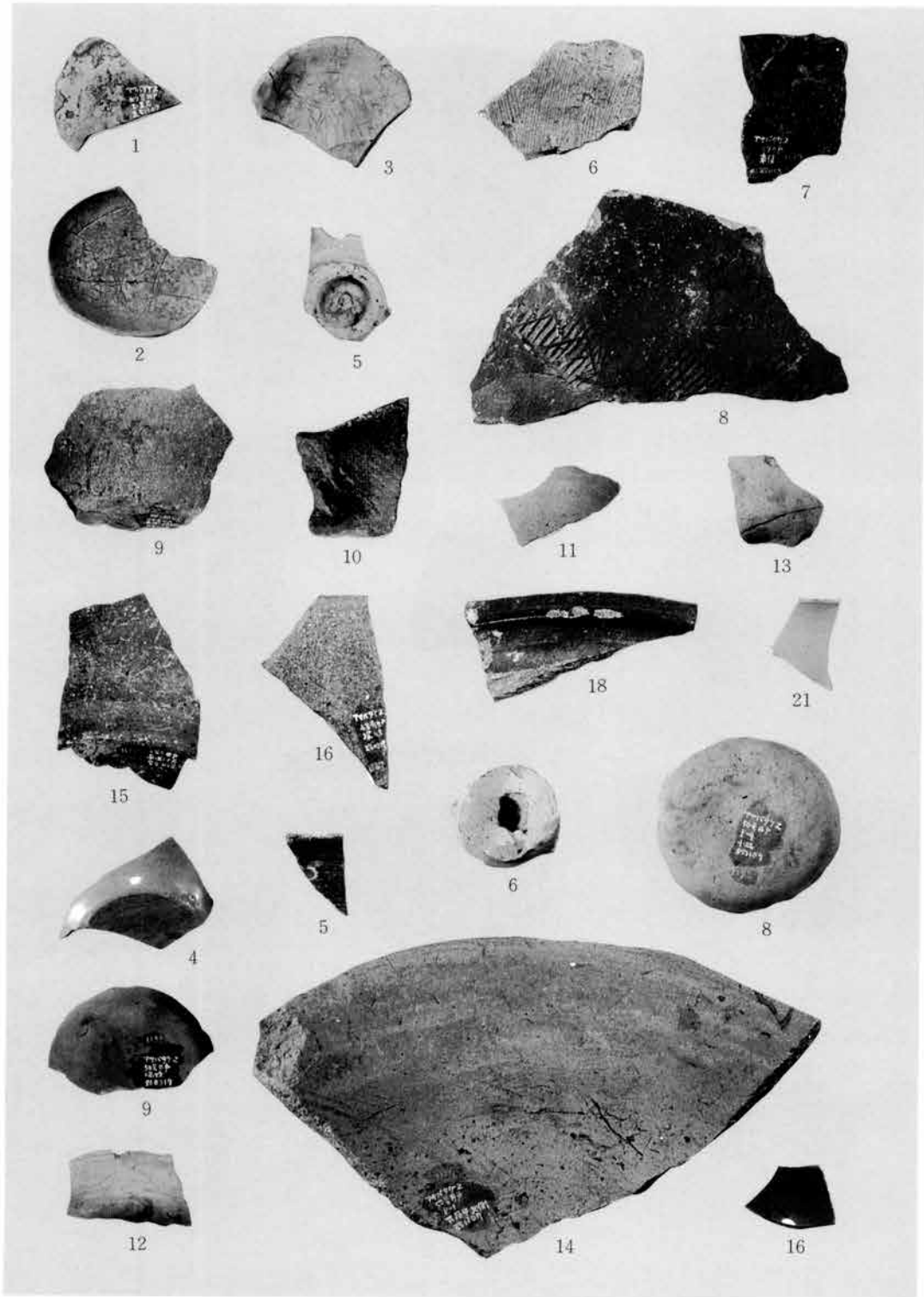
第24・26・27・29号井戸出土土器（上－第102図、下－第103図）



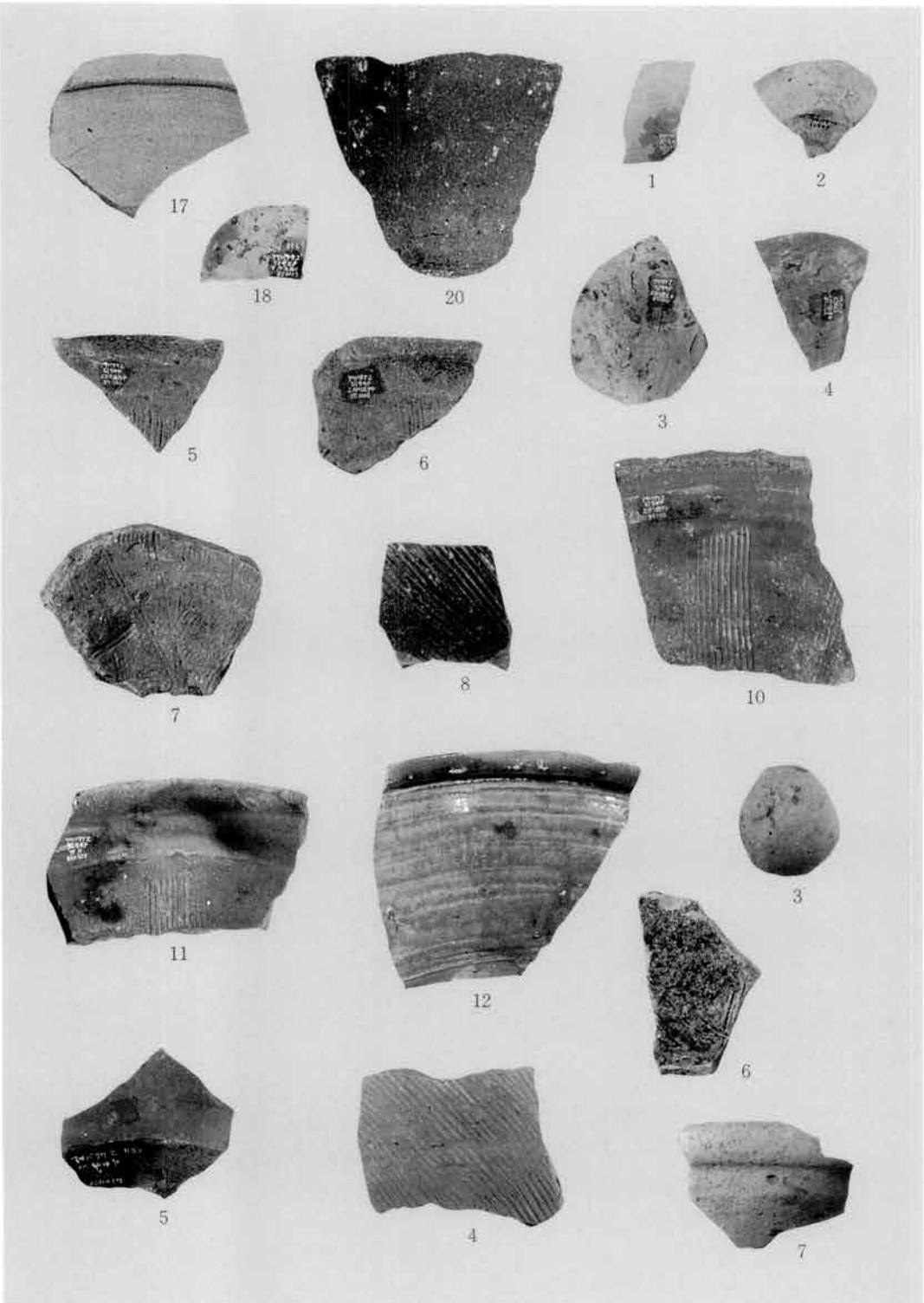
第30～38号井戸出土土器（上－第104図、下第105図）



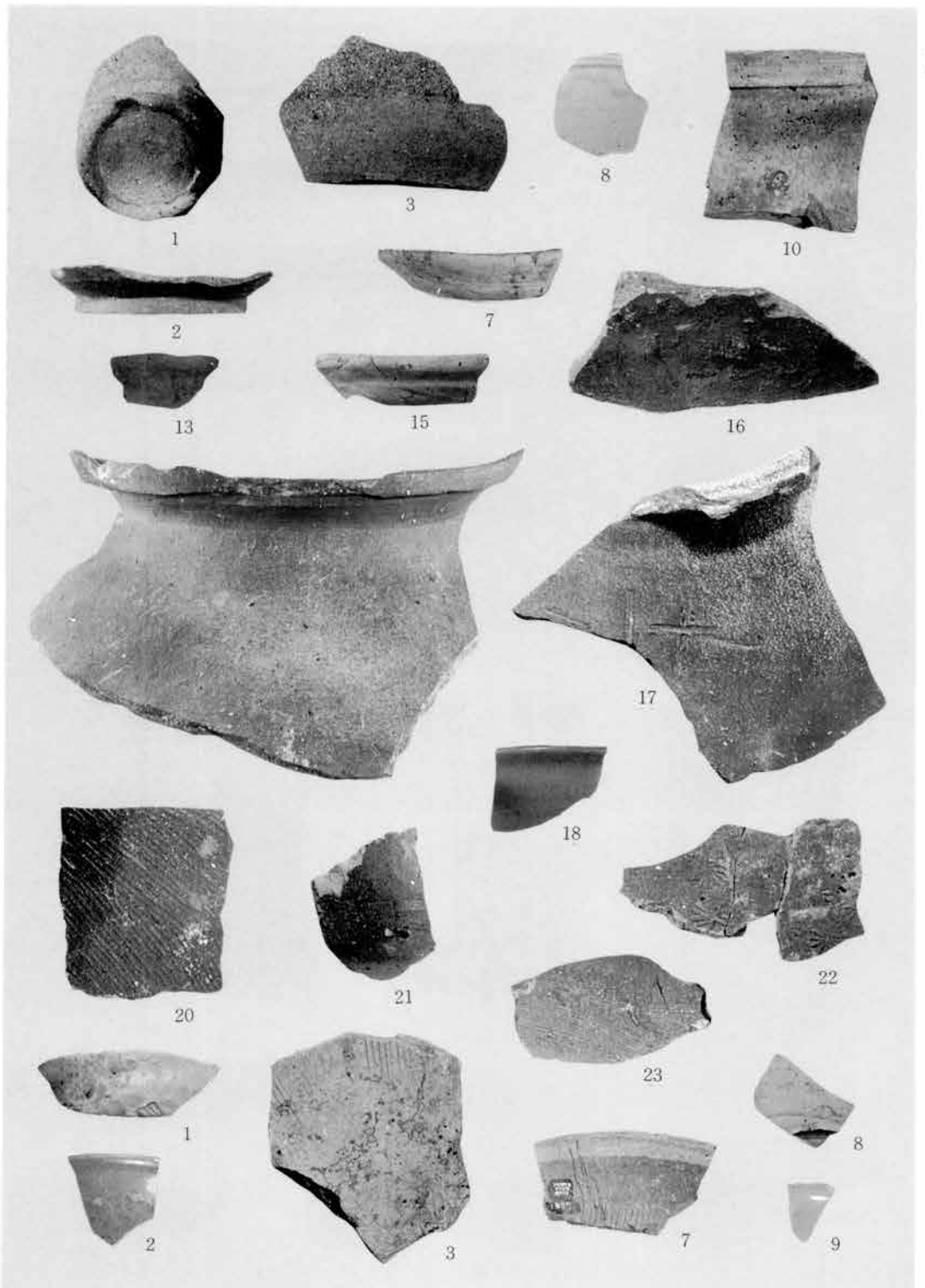
第40～42・45・46号井戸出土遺物（上－第106図、下－第107図）



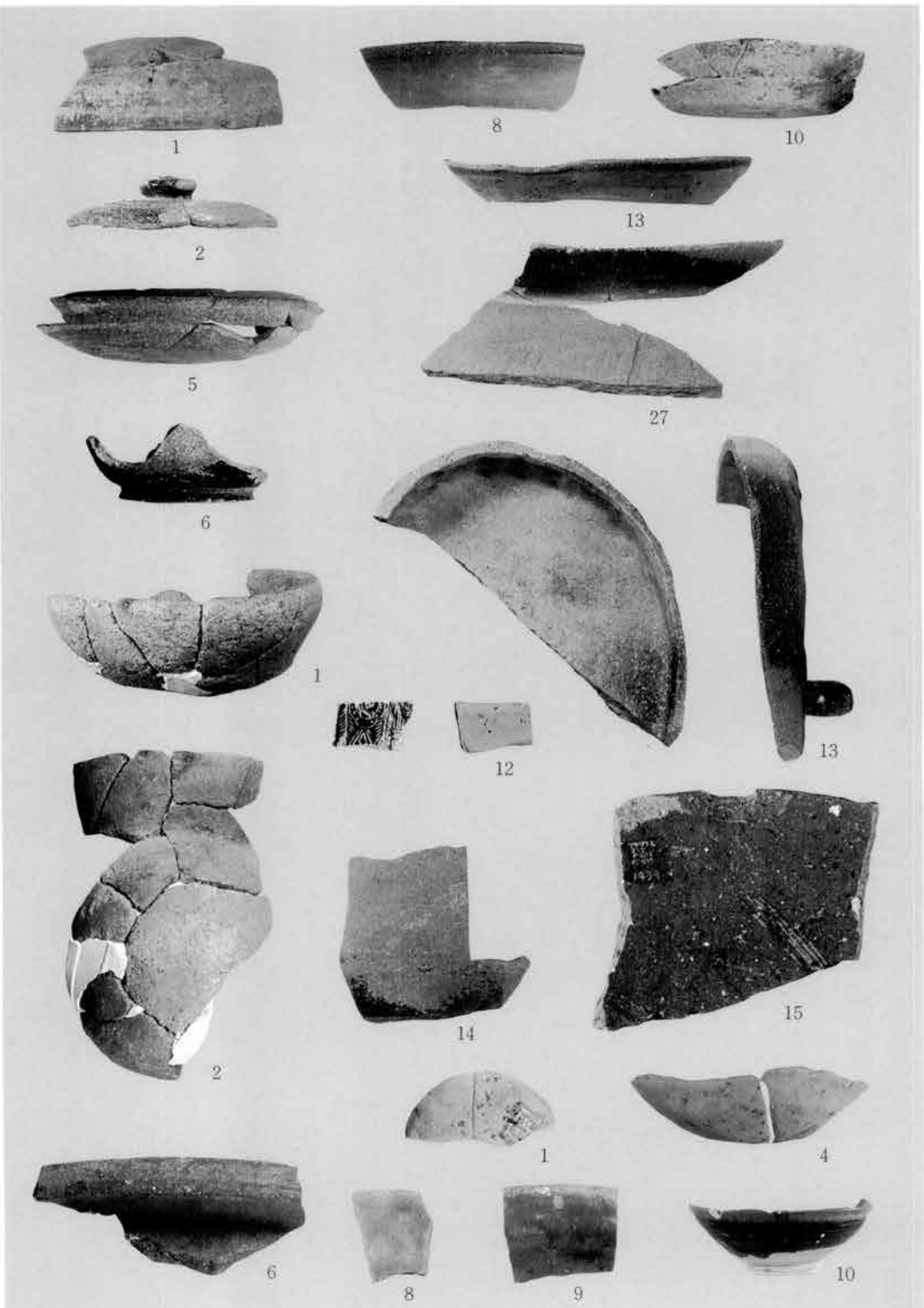
第47～50号井戸出土土器（第108・109図）



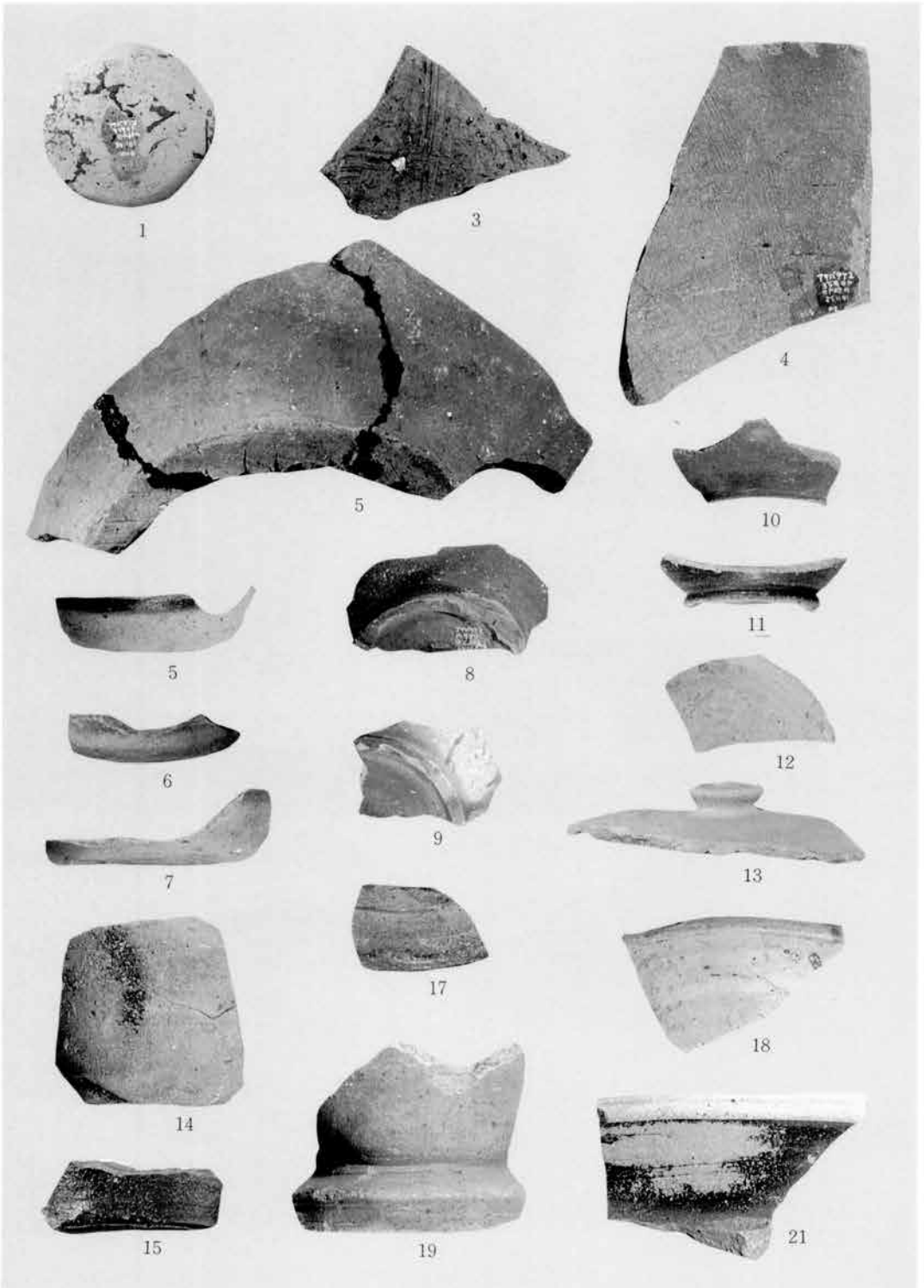
第51・52・54号井戸出土土器（第109・111図）



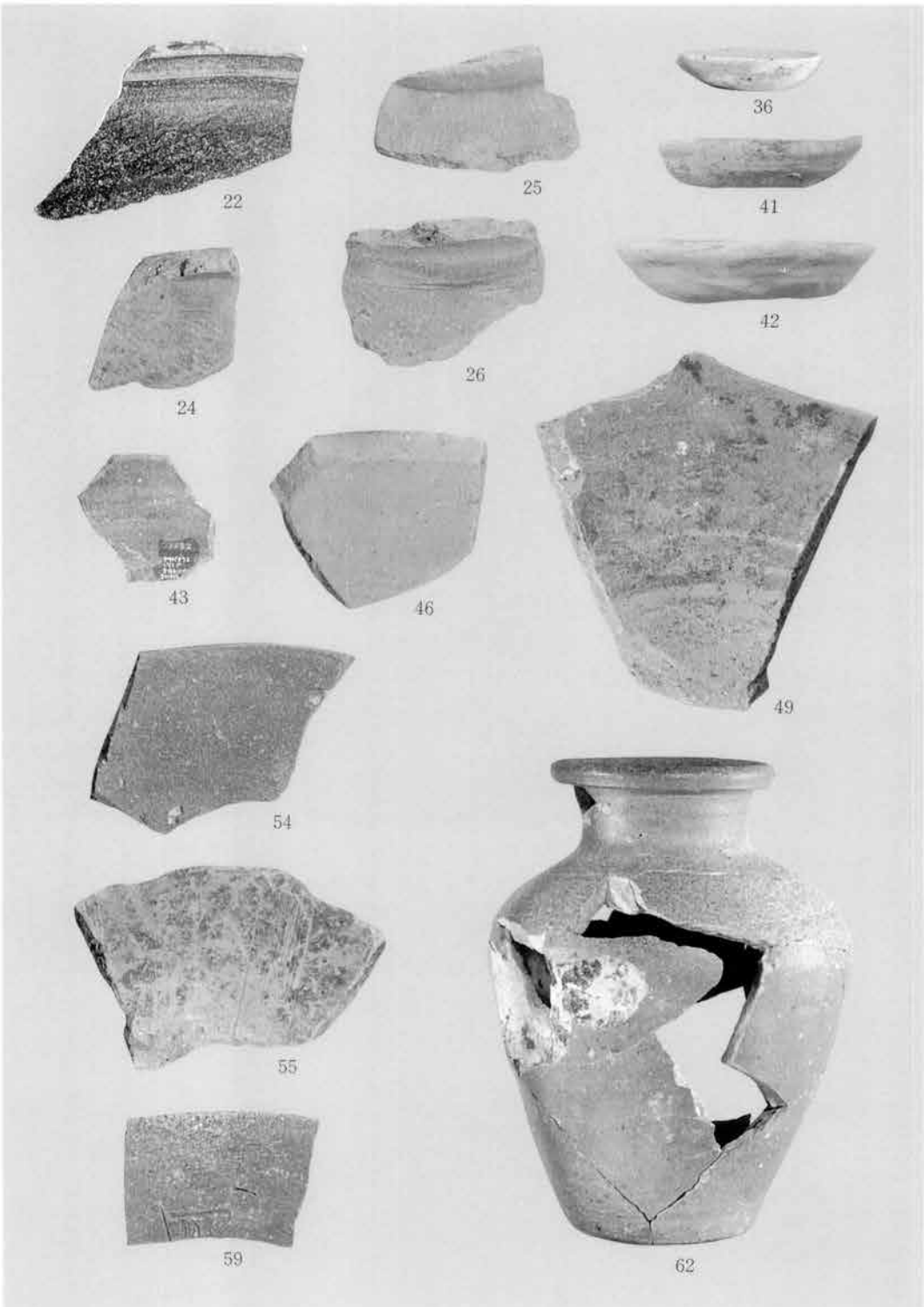
竪穴出土土器（第114・115図）



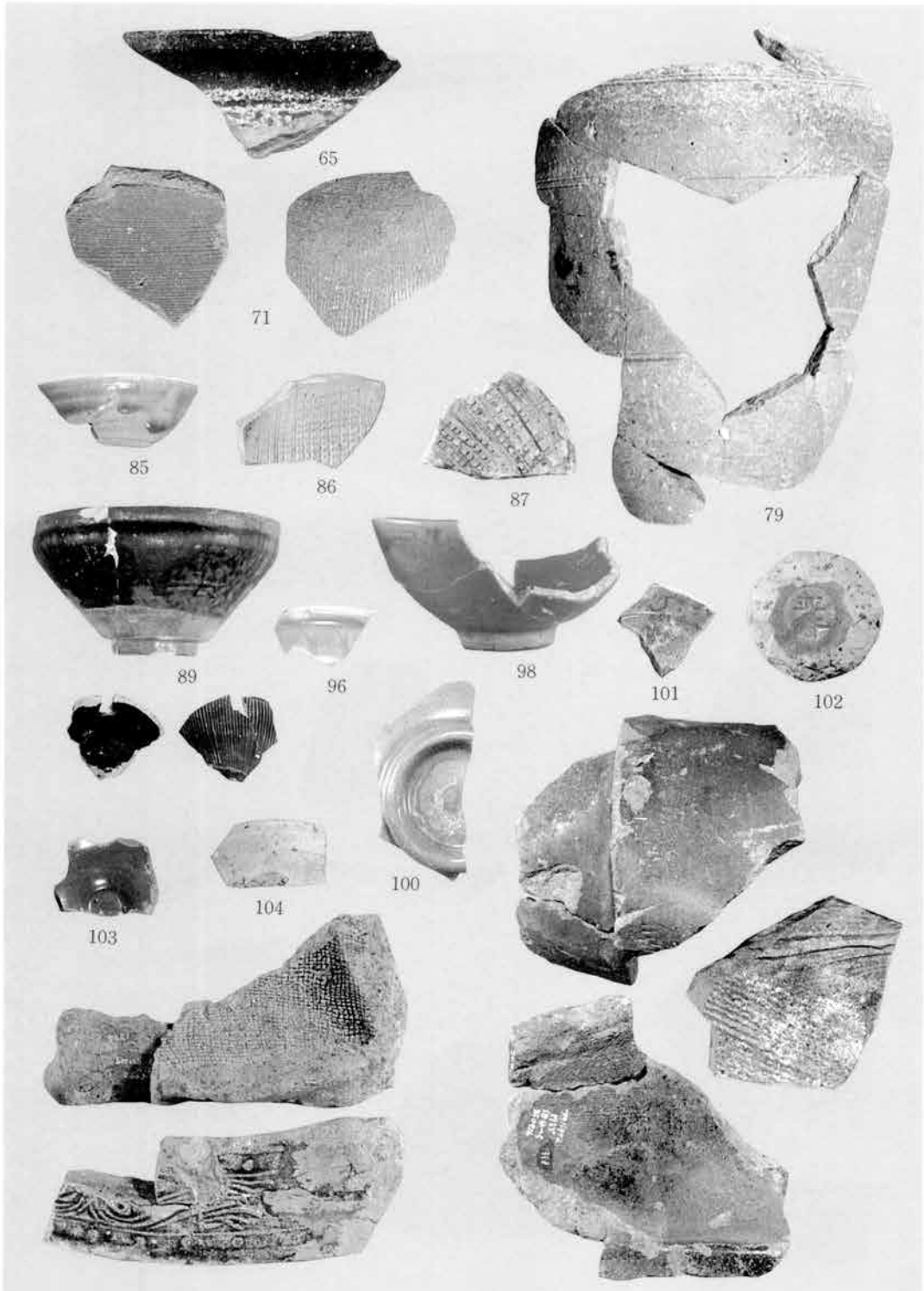
第1次調査小規模遺構出土土器（第120・121図）



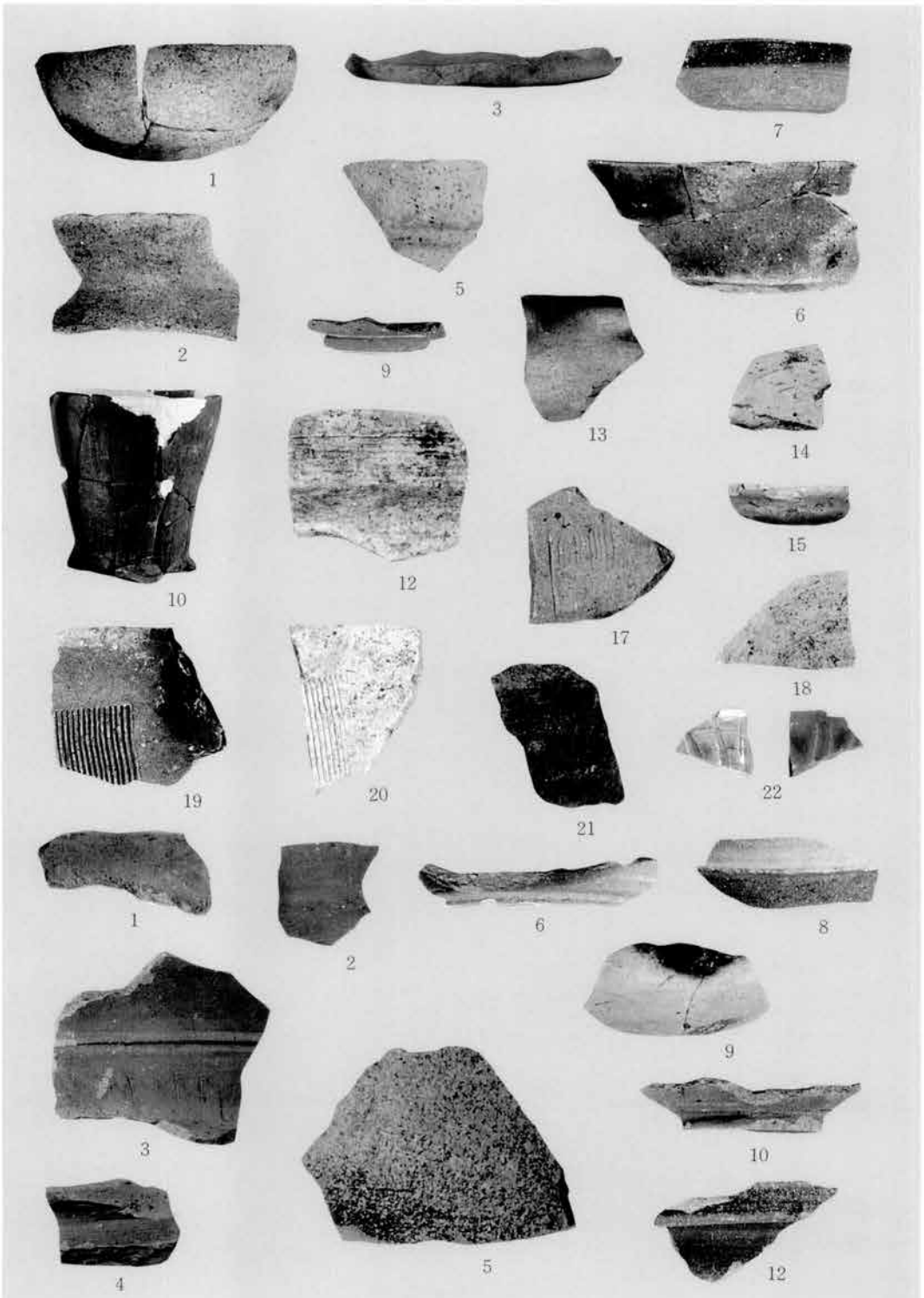
第２号曲物埋設遺構・第17号溝出土土器（第116・122図）



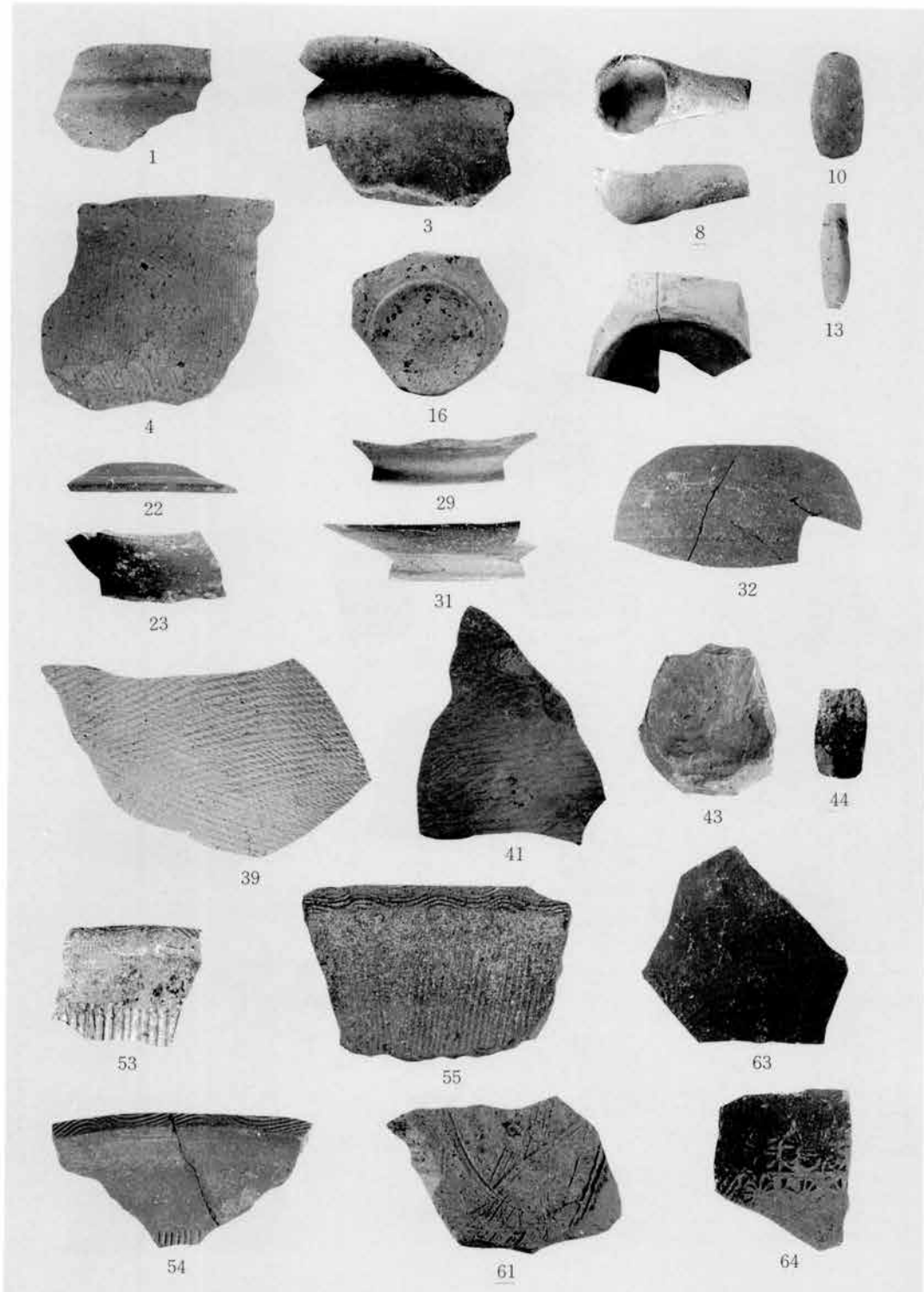
第17溝出土土器（第123～125図）



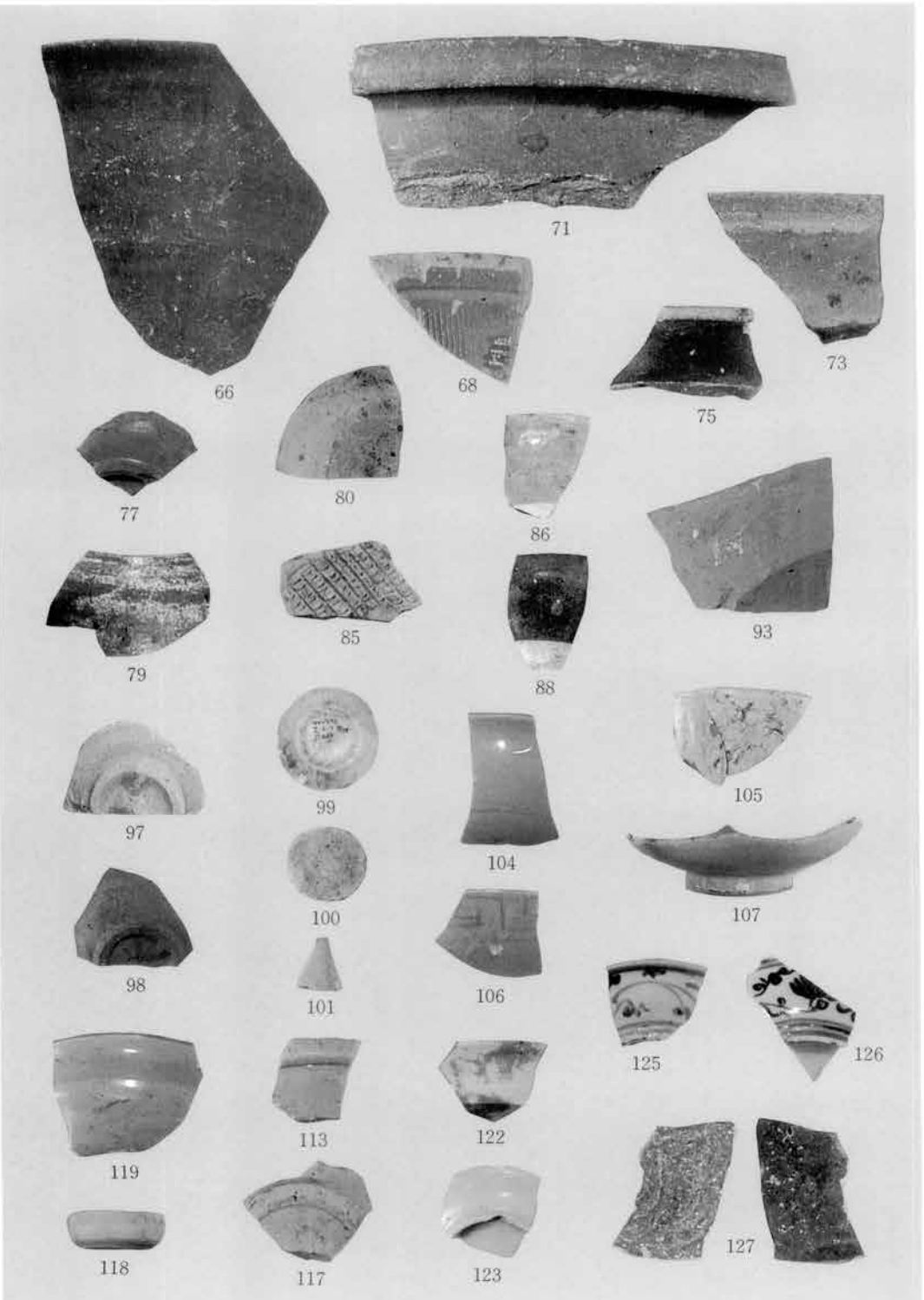
第17溝出土土器（第126～130図）



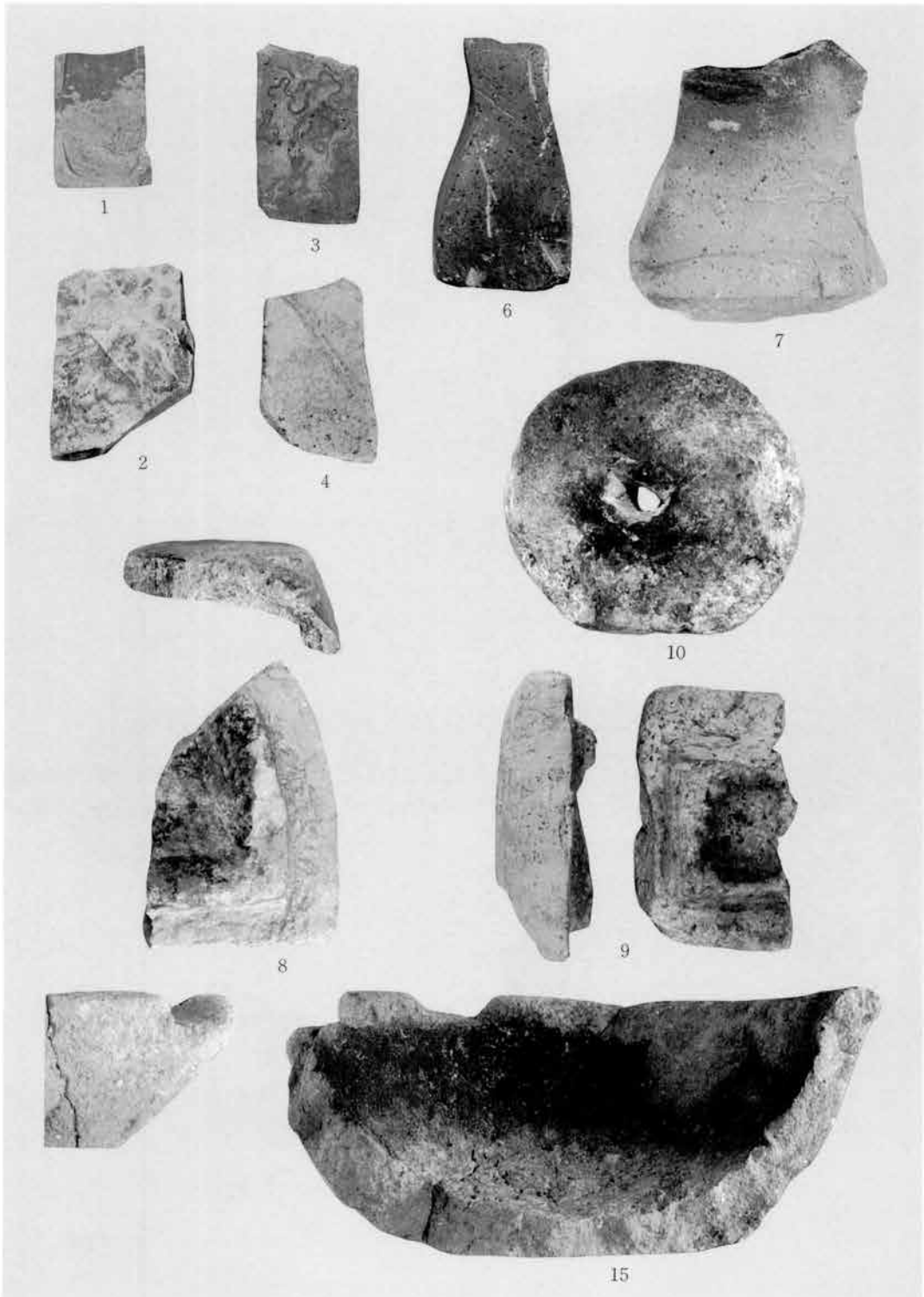
第２次調査溝出土土器（第131・132図）



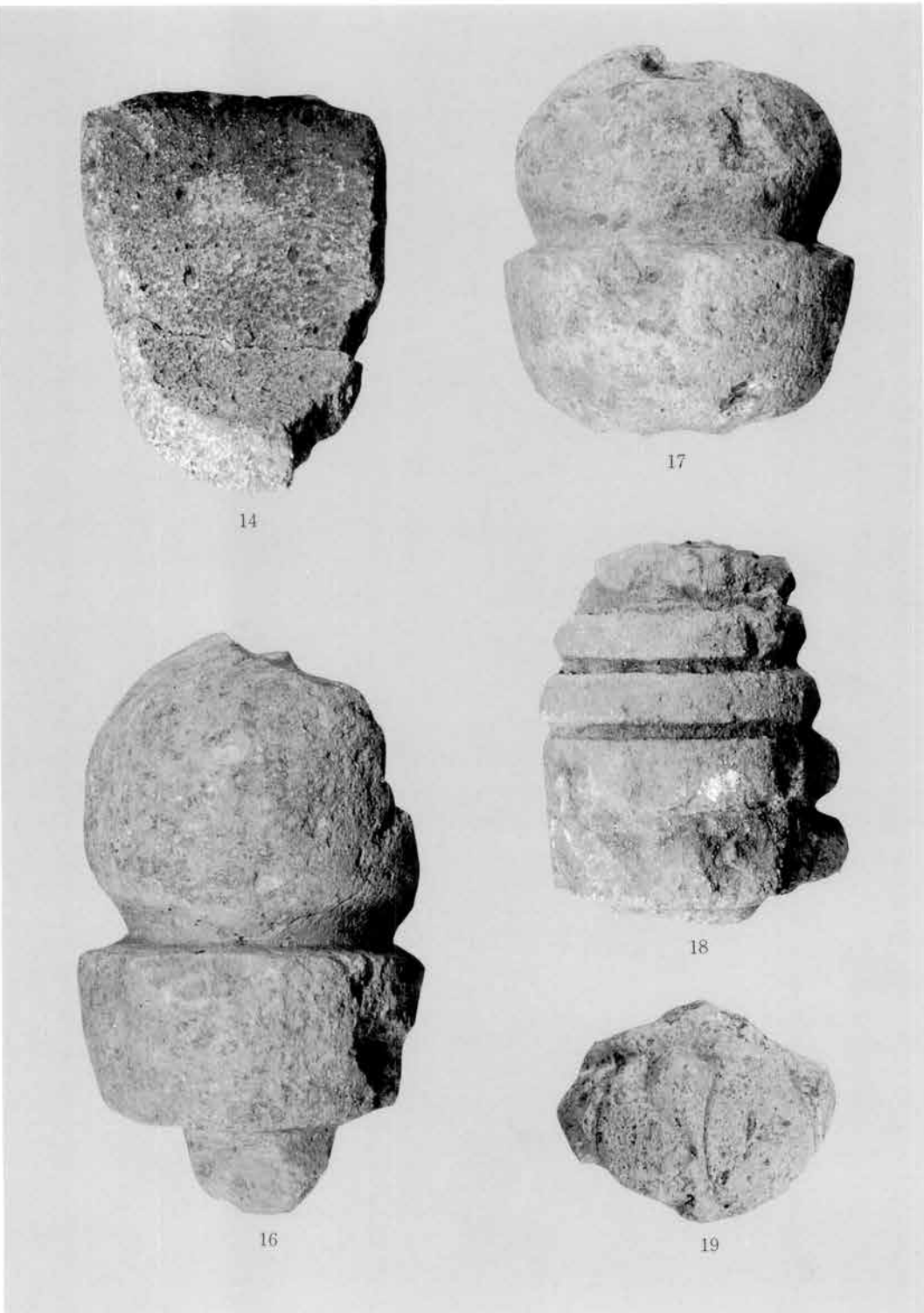
第2次調査包含層出土土器（133～136図）



第２次調査包含層出土土器（第136～138図）



第２次調査出土石製品（第139・140図）



第２次調査出土石製品（第140・141図）

佐々木アサバタケ遺跡 I

県営公害防除特別土地改良事業
に係る埋蔵文化財調査報告書

昭和63年３月18日　印刷
昭和63年３月30日　発行

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
石川県金沢市米泉町４丁目133番地
〒921　電話（0762）43－7692㈹

印　　刷　ヨシダ印刷株式会社
石川県金沢市御影町19番１号

©石川県立埋蔵文化財センター　1988